

ワールド  
イズ  
オブ  
ザ  
マイン  
アンド  
クォーツ  
3  
の  
物語  
～  
輝き

カイナ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ルミナシア。星晶によって発展したこの世界は限られた資源、星晶を巡って争いが行われていた。

疲弊する世界、しかしその時世界を守るため生まれる伝説の勇者、世界の最後の希望、輝ける者。デイセNDER。今、その歩みが始まるうとしていた。

この小説はマジエステックファンタジアンMP文庫でもマルチ投稿されております。

# 目次

プロローグ	1
第一話 初クエストと仲間達	21
第二話 入隊試験	39
第三話 日常と重要任務	65
第四話 暴風との戦い	90
第五話 生物変化現象調査	113
第六話 仲間登場！森林での激闘！	140
第七話 火山での騒動。赤い煙	169
第八話 坑道にて行動？新たな力と新たな謎	187
第九話 不思議な依頼、生物変化現象の謎	223
第十話 新たな仲間と呪いの輪	259
第十一話 光気丹術	298
第十二話 赤い光の謎と新たな仲間達	328
第十三話 VS 暁の従者、そして新たな敵	360
第十四話 霊峰アブソールへと	390
第十五話 風の青年と輝きの勇者	410
第十六話 王からの依頼	437
第十七話 神子、騎士隊長、そして異世界からの仲間入り	467

第十八話	砂漠での激闘	—	495
第十九話	遺構ヴェラトローパ	—	522
第二十話	風の青年と創造の勇者		
549			
第二十一話	封印次元を作るために		
580			
第二十二話	最凶の戦士との戦い		
603			
第二十三話	風の青年はプレイボーイ？		
629			
第二十四話	マクスウエルを助けて		
642			
第二十五話	V S 精霊王	—	660

第二十六話	帝国参戦？新たな仲間達		
680			
第二十七話	絆が紡ぐ新たな仲間		
709			
第二十八話	化石の思い出と新たな仲間		
733			
第二十九話	精霊に近いもの	—	760
第三十話	ニアタとの再会	—	776
第三十一話	風の青年と空の少女		
807			
第三十二話	輝きの勇者達のとある一日		
840			
第三十三話	砂漠での決闘、風の青年 V		

	S 創造の勇者	—	861
	第三十四話 チーム・テレジア	—	882
	第三十五話 見つけた希望、暗躍する絶望	—	929
	第三十六話 雪山に継がれた命	—	939
	第三十七話 裏切りの天使	—	956
973	第三十八話 心と絆とピーチパイ		
	第三十九話 VS 勇者の影	—	1004
	第四十話 輝ける光器と水の上をすべる花	—	1028
1052	第四十一話 砂漠に潜む命 (前編)		

1065 第四十二話 砂漠に潜む命 (後編)



## プロローグ

ルミナシアという世界、そこのとある山——ルバーブ連山と人に呼ばれている——を一人の少女——桃色の髪にもみじの髪飾りをつけてサイドポニーにしている——が歩いていた。

「ふう……さて、と。今回の仕事もこれで終わり！ 船に戻らなくちゃ」

少女は一人そう呟き、下山ルートを歩く。と彼女の頭上をすれ違うように光の球が二つ空を駆けていった。

「なんだろう？……」

光は山奥に向かっている。それを考えると少女はうんと頷いた。

「迎えまでまだ時間はあるし、行ってみよう」

そしてそう呟くと光が飛んでいった方に向けて走り出した。そして少女は光を追いかけてついに追いつく。

「何？……光？」

少女はそう呟く。目の前には光輝く球体が二つ浮いており、しかも全てその中に何かが入っている。するとその光はふわふわとゆっくり地面に降りてくる。そして光が弾

け飛ぶと、中から一人ずつ人が出てくる。

「ひ、光の中から、人が……」

少女は呆然としたように呟く。光から出てきたのは一人が薄緑色の髪をぎつくばらんな短髪にした、顔立ちの整っている青年。もう一人は金色の髪——正確に言えば先の方が僅かに青っぽくなっている——を長く伸ばして横部分は結ばれている所謂ツーサイドアップという髪型にし、何故か左目に眼帯をつけている少女。青年の方は軽装な服に、少女の方は軽装な鎧に身を包んでいる。

「い、一体どういう……」

少女はまた呆然としたように呟く。二人とも瞳は閉じられているがちゃんと息をしているため死んでいるのではなくただ眠っているだけだと分かる。

「うっ……」

すると青年——薄緑色の髪の青年だ——が目を開き、少女を見る。

「あんたは？」

「気がついてよかった。空から降りてきたんだもん、すつごく驚いたよ！」

「空？」

「ね、あれって何かの魔術なの？」

「魔術？ 何の事だ？」



「えっ?! 覚えて、ないの? あなた達、空から降りてきたんだよ。光に包まれて……」

少女の言葉に青年は考え込むが、やがて諦めたように息を吐くと首を横に振る。

「悪いが、覚えてない……ところで、あんたは誰なんだ?」

「あ、私、カノンノ。カノンノ・グラスバレー……ともかく、まだ気絶してるその人を連れて下山しよう。ここは魔物が多くて危険だから」

「魔物……」

青年の言葉に少女——カノンノはそう返し、それを聞いた青年は呟き声を出してカノンノより後ろを見る。

「つつーと、あれか?」

「?」

カノンノよりも後ろを指差しながらのその言葉にカノンノは振り返る。そこには水色のオタマジャクシみたいな魔物——オタオタや緑色の蜂っぽい魔物——キラビー、そしてクチバシが斧になっている鳥の魔物——アックスビークがいた。

「そうそうあんなの……」

それを見たカノンノは微笑みながら頷くが、次の瞬間その笑みが固まり、顔もどんどん青くなっていく。

「えええええーっ!?」

そして彼女の悲鳴がルバーブ連山に響き渡り、彼女は大慌てで立ち上がると剣を構える。

「う、嘘！ こんな時に！ オタオタやキラビーだけならともかくアックスビークまで!!」

するとカノンノが構えるのと共に今まで座っていた青年も立ち上がり、刀を構える。

「カイ」

「え？」

「俺の名前だ。カノンノ、そいつ任せろぞ」

青年——カイが言葉少なく名乗り、それにカノンノが呆けた声を出すとカイはそう言い残していつの間にか持っていた木刀を握ると、魔物の群れに真正面から突っ込む。

「え!? あの、ちょ、ちよっとー!?」

それを見たカノンノはカイと未だ気絶している少女を交互に見、困ったように声を上げた。

「らあっ!!」

まず左腰にやっていた木刀を居合いのように振り上げてオタオタを殴り上げ、振り上げていた刀を両手で握ると真剣で言うならば刃を返して振り下ろす第二撃。それが別

のオタオタを殴り倒したかと思うと最初にぶん殴ったオタオタが最後の力を振り絞ってカイに突進してくる。それを見ると彼はニヤリと笑みを浮かべて左手に闇の気を溜める。

「滅掌破あつ！」

放たれた一撃はオタオタを完璧に捉え、オタオタは吹っ飛ぶと崖下へと姿を消す。

「カ、カイッ！ 後ろ後ろー！」

「おっとおっ!!」

カノンノの某コントのような呼びかけにカイは瞬時に反応し、後ろから襲い掛かってくるアツクスピークの斧のように発達している嘴をジャンプでかわすとその頭目掛けて勢いよく木刀を振り下ろす。彼の目は生き生きと爛々とした輝きを放っており、口元には笑みが浮かんでいる。その表情を分かりやすく纏めると完全に好戦的なものだった。

「え、えつと、えつと……」

カノンノは援護しなきゃでも気絶してる人をほっとくわけにもいかないしという板挟みに陥る。

「魔神剣！」

「わっ!?!」

とその後ろから突如放たれる衝撃波。カノンノは思わずびくつとなつてその場を飛びのき、衝撃波は地を這うように走つてオタオタを呑み込む。

「……何かよく分からないが……援護する」

そう言うのはさつきまで気絶していた少女。立ち上がつてから改めて考えると自分より長身ですらつとした体型、しかしながら自分より胸が大きい。それを考えたカノンノはつい自分の小ささ……もとい慎ましやかな胸にべたりと手を当てた。少女はそれを持ちりと見て不思議そうに首を傾げた後右手に握っている木刀を下げ、左手に握っている茶色い物体を戦場に向ける。木製っぽい雰囲気は漂うが間違いなく銃だ。

「ふっ」

ダギユンダギユンダギユンという銃声が響き、放たれた銃弾が一体のオタオタを容赦なく貫いていく。と、それとは別のオタオタがごろごろ転がってきた。

「チャージバレット！」

しかし少女は素早く銃口をそちらに向けると銃弾で牽制しつつ懐に潜り込み、右手の剣を構える。

「魔神剣！」

直後至近距離から放たれた衝撃波がオタオタの小さな丸い身体を吹っ飛ばし、それをカイはちらりと見るとやりと笑みを見せ、目の前のキラビーを殴り潰すと地面を蹴

り飛び上がる。とアックスブークが一体それを追うように飛び上がった。

「ラッキー」

しかしカイは慌てることなくむしろ笑みを見せるとそのアックスブークの頭を踏んづけるとアックスブークを崖下に蹴り落としながらさらにジャンプ、縦に回転しながら木刀でオタオタを殴り落とした。これで敵は全滅。カイはまるで軽業師のようになるともう一回転してとんつと小さな音を立て地面に着地する。

「カ、カイ……君、強いんだね……」

カノンノは目をぱちくりさせぽかーんという擬音が似合う通りの表情でそう言い、次にあつと声を漏らして少女の方を見た。

「え、えつと、あなたも覚えてるかな？　光に包まれて空を飛んでただけど？……」

「空？……」

カノンノの問いに少女はやはり首を傾げるのみ。それにカノンノはまた困ったようにえつとと呟いた。

「えつと、あ、そうだ。あなたのお名前は？」

「我か？……我は……レイ」

「レイ、いい名前だね」

カノンノの言葉に少女——レイは少し考えるように黙った後静かに名を名乗り、カノ

ンノはえへへと笑ってそう言う。

「あつ、そろそろ船が到着する時間だ。急いで山を降りなきゃ!」

と、思い出したように彼女はそう言い、カイとレイを見る。

「少し急ぐことになるけど、いいかな? 船に乗ったら、あなた達の希望する場所へ送ってもらえるように伝えるから」

「希望する場所?」

「どういうことだ?」

「え? 二人とも、あの光の魔術でどこかに行こうとしてたんじゃないの? それで、間違っここで降りちやつたとか……」

カノンノの言葉にカイとレイが首を傾げるとカノンノもそう問いかける。と二人は顔を見合わせた。

「つーか、そもそも……」

「ああ……貴様、何者だ?」

「……………はい?」

カイとレイは顔を見合わせてそう言い合う。それにカノンノは沈黙の後呆けた声を出した。

「え? あの? ちょ、ちよつと待って……二人つて知り合いじゃないの?」

「知らん」

カノンノの問いかけにびったり異口同音で返す二人。

「それに送る場所と言われてもな……」

「こいつがどうかは知らんが、我は自分の名前以外は何も分からん」

「ええっ!? 自分の名前以外、何も分からないって……んーんん……それじゃあ、どうすればいいかな」

カイとレイはあっさりと言って、それにカノンノは困ったように声を漏らす少し考えるとうんと頷いた。

「とりあえず、船までおいでよ。それから一緒に考えるから。行こっ!」

カノンノはそう結論を出すと歩き出し、カイとレイもその後を追って歩いていく。

それから再びオタオタやキラビー、アックスビークが襲い掛かるがそのほぼ全てをカイとレイが捌き、カノンノも魔術で援護しながら三人は下山し、道を進んでいく。そして山の麓まで行くとカノンノは真っ直ぐ進む道を指差した。

「えっと、この先の道は、いつもはこの道を真っ直ぐ行くんだけど……」

カノンノは次に石の階段で出来ている道を指す。

「今回は、そのわき道を行くの。そこに船が迎えに来てくれるんだ」

「そうか」

カノンノの言葉にレイはそうとだけ返してわき道の石段を上がつていき、カイとカノンノもその後が続く。それから石段を登り切った先の道を行くと切り立った崖に到着、とカノンノは不思議そうな表情で空を見上げた。

「あれ？ まだ船が到着してない。私達の方が先だったかな？」

カノンノはそう呟くと二人の方を振り向く。

「ねえ、カイ、レイ。ひよつとしたら、あなた達は記憶喪失なのかもしれないね……何か原因があつて、そういう状態になっているんじゃないかなあ」

「……」

「あ、今は無理に思い出そうとしない方がいいよ。あなた達が良ければ、これからどうしていけばいいかを一緒に考えるよ」

カノンノがそう言うと共に三人を影が覆い、何かエンジン音のようなものが聞こえてくる。とカノンノがあつと云つて空を見上げた。

「船が来たよ！」

そう言うと共に崖に降りてくるのはカラフルな外見をした不思議な乗り物。カノンノはそれにおーいと言つて手を振り、カイとレイは黙つてそれを見ていた。そしてカノンノに連れられて二人は船に乗船する。

「お疲れ様、カノンノ」



最初に声をかけてきたのは船に入ってすぐのところ、テールの前にいる水色の髪をポニーテールのように結った女性。

「あなたが魔物を討伐してくれたおかげでペカン村の人達の移民は無事に済んだよ」

女性はそこまで言うとかノンノの後ろにいる二人に目を配る。

「ところで、そちらのお二人は？」

「二人とは、ルバーブ連山で出会って……ここまで連れてきたんです」

「それじゃあ、まずは自己紹介からね」

カノンノの報告に女性はにこりと人当たりのいい笑みを浮かべた。

「私はアンジュ・セレーナ。あなた達の話聞いてもいいかな？」

「話、と言われてもな……俺は何も覚えてない」

「我也だ。ここにいるカノンノさんに助けられた、覚えているのはそれだけだ」

「え、そんな。ここにいた魔物と戦ったのは二人なんだし、私は大したことはしてないよ

……」

女性——アンジュの言葉に二人はありのままそう返し、アンジュは困ったように顔を

伏せた。

「そう。記憶がないなら、どこへ行つていいかも分からないよね。記憶が戻るまで、ここに置くのは構いません。でも、話を聞く限り体力には自信があるようだし、働いてもら

「いましうか」

「はあ……」

「それじゃあ、今からあなたをギルド「アドリビトム」の一員として迎えるね」

「アドリビトム？」

アンジュの言葉にレイが声を漏らし、その次の彼女の言葉にはカイが首を傾げる。

「このギルドの名前の事かな？ 古代神官語で「自由」という意味よ。ギルドというのは、人々から寄せられる依頼をこなす、いわゆる何でも屋さんと思ってくればいいかな。でも、仕事の話よりも、まずは他のメンバーとの顔合わせが必要よ。みんなの所へ行って、挨拶してらっしゃい。それが終わったら、仕事について教えるから」

アンジュはそこまで説明するとカノンノに目をやった。

「カノンノ、みんなへの挨拶について行ってあげてくれる？」

「はい。じゃあまずは一階の皆に挨拶に行こう。下の階の人達は仕事で外出中だから」

カノンノはそう言うのと二人を引っ張るようにして歩き始めた。そして一つの部屋に向かい、そのドアが開く。

「ロックス、クレアさん。新しい人だよ」

「お嬢様、お帰りなさいませ」

「あら」

カノンノの元気な声に青い小さな体をした羽で空を飛んでいる生き物と金色の髪を長く伸ばした少女が挨拶する。そして少女はカイとレイを見てにこりと微笑む。

「新しいギルドの方ですね。私は、クレア・ベネット。初めまして」

「どうも、初めまして。ロックスプリングスと申します。ロックス、とお呼びください」

「……カイ」

「レイだ」

少女——クレアが挨拶した後に青い生き物——ロックスが挨拶する。それにカイとレイは短く名前を名乗った後ロックスをまじまじと見る。

「その、僕は、こちらで、ギルドの皆さんのお世話をさせていただいている者です……ええ、ええつと……あの、冗談みたいな姿ですけど……その、いじめないで下さい……ね？」

「ロックスさんは、家事やギルドの経理なども任されている、この船の、いわば「コンシエルジュ」なんですよ」

「この船で皆様が安心してくつろげるよう、日々ホスピタリティの向上に努めています。何か御用の時は申し付けてくださいね」

「ああ、よろしく頼む」

ロックスはまじまじと見られて困ったように笑いながらそう言い、次にクレアが説明するとロックスはいっと頷いて続け、カイはこくと頷く。

「それにしても、また船の中がいつそう賑やかになりますね」

「ええ。食事の時は特に！ 楽しくなると思いますよ」

「今日はカイ様とレイ様が新しく入った事ですし。腕にヨリをかけて、ご馳走にしましょうか」

「そうですね。それじゃあ、今日は忙しくなりますね」

「そうか。じゃあ俺達は出ていくよ」

クレアとロックスが楽しそうにそう言うのと邪魔になると思ったカイがそう言い、クレアはええと頷いた後にこりと微笑んだ。

「それでは、カイさん、レイさん。今後ともよろしく願います」

「お仕事、頑張ってくださいね。それから御用があれば、いつでもどうぞ」

「ああ」

「よろしく頼む」

クレアとロックスの見送りにカイとレイはそう返し、三人は部屋を出ていった。

「あ、そうだ。二人とも、医務室に行ってみよう」

「「医務室？」」

「うん。もしかしたら記憶喪失の原因が分かるかもしれないし」

カノンノの言葉に二人は頷き、三人は医務室にやってくる。

「アニー。ちよつと診てもらつていいかな？」

「あ、はい。どうしたんですか？……えつと、そのお二人は？」

カノンノの言葉に、医務室と呼ばれる部屋にいた少女——茶色い髪を短く切り、先端が上に向くようにカールした髪型をした、ピンク色の服のへそ出しファッションをしている——はカノンノの言葉に聞き返した後後ろの二人に気付く。

「ルバーブ連山で会つたんだ。実は記憶喪失で、何か怪我をしてるかもしれないからちよつと診てもらいたいんだ」

「分かりました。じゃあお二人とも、そこに座つてください」

カノンノの言葉に少女——アニーは頷いてそう促し、二人は彼女の言葉に従つてベッドに座り、アニーは二人を診察していく。

「……特に異常は見当たりません。頭を打つたとかそういった形跡もありませんし……でも気分が悪くなつたり頭痛や目まいなどの症状が見られたらすぐに来てくださいね」  
「分かつた。感謝する……えーと……」

アニーの診察結果と注意にレイはお礼を返した後少女の名を呼ぼうとするがどうやら覚えていないらしく、少女もくすつと微笑んだ。

「私はアニー・バース。ヘーゼル村の出身です。このギルドではここ医務室を任されています。医者としてはまだ不勉強なところがありますが、どうぞよろしく願ひします」

す」

「ああ、よろしく頼む」

アニーの言葉にカイもぺこりと頭を下げ、立ち上がり、三人は医務室を出ていった。

「ん？ ああ、カノンノ」

「わっ!!? ウイルさん!」

と、ちょうどそこにオレンジ色の服を着て、その服の上からでも分かるほどに筋骨隆々な男性が「医薬品」と書かれたラベルを貼った箱を持った状態で姿を現し、カノンノはその姿を見ると驚いたように声を上げる。と、ウイルと呼ばれた男性はカイとレイに目を向けると一旦箱を置いた。

「ホールでの話は聞こえていた。俺はウイル・レイナード。よろしく頼む。ここへ来る前も、故郷でギルドに所属していた。本業は博物学者をやっている」

ウイルはそこまで言うとうそいえば、と漏らした。

「そういえば、記憶喪失と聞いたが……君達は、ここへ来る前に世界樹が光るのを見たか？」

「……いえ」

「覚えていない」

「そうか……俺はちょうど、甲板から見えたのだが……今まで観測されることがない現

象だったからな。それについて、君達が何か知っていたりするのか聞いてみたかっただけだ」

「……何故俺達が？」

ウイルの問いかけに二人が否定の言葉を返すとウイルはそう言い、それにカイが聞き返すとウイルは少し間を置く。

「記憶喪失の君たちが知っているはずもないが、はるか昔から伝わる「予言」の話だ。現実的ではないし、ありえないと考えてはいるのだが、記憶がない、というのが気になつてな」

ウイルはそこまで言うのとペこりと頭を下げた。

「変な事を聞いてすまなかつた。君の記憶が早く戻ることを祈る。では、今後よろしく頼む」

ウイルはそう言うのと医務室に入っていく、カイ達はそこを後にする。そして他のメンバーとの挨拶回りも終えてから彼らはアンジュの元に戻っていった。

「アンジュさん、挨拶終わったよー！」

「あら、そう？　じゃあ、ここでの仕事を説明するね」

カノンノの言葉にアンジュはふふつと笑って返すとカイとレイに目を向ける。

「アドリビトムは、どの国にも属さない。依頼があればどこへでも向かう、自由のギル

ド」

「ああ、さつき古代神官語で自由とかなんとか……」

「そう。それで、そのギルドに人々から寄せられる依頼をクエスト、というんだけど。そのクエストは、ここで私が管理しているから、仕事が出来たい時は訪ねてね？」

アンジュの言葉にカイはさつきの説明を思い出してそう言い、それにアンジュは一つ頷いてここでの仕事であるクエストについて説明。と思い出したようにぼんと手を打った。

「そうそう、私がいるカウンター以外にも、メンバーの皆と話すと直接依頼をしてくることもあるから、その時は聞いてあげてね？」

アンジュはそこまで説明するとにこりと微笑む。

「それじゃあ、初めてだと分からないこともあるだろうし、まずは簡単な仕事を用意するから、とりあえず二人とも見習いから始めてもらおうかな？ カノンノ、二人の教育係をお願いできる？」

「はい、分かりました！」

「じゃあ……」

アンジュはそう言ってカノンノを二人の教育係に指名、それをカノンノが二つ返事で引き受けるとアンジュはカウンター内を探った。



「早速これが仕事ね。アドリビトムの正式なメンバーになるための入隊試験用クエスト」

アンジュはそう言つてカイに一枚の用紙を見せ、カイはそれをちらりと見る。

「コンフェイト大森林でプチプリの退治……」

「コンフェイト大森林とはどこだ？」

「あ、私が案内するから心配しないで」

カイの呟きにレイも用紙を覗き込みながら尋ね、カノンノが苦笑交じりにそう言う。とカイはこくんと頷いた。

「分かった。で、受ける時はどうすればいい？」

「じゃあ、ここに依頼受諾のサインをクエストメンバー分して」

「じゃあ私がお手本を見せるよ」

「あらあら、頼りになる先輩さんね」

カイの質問にアンジュはそう言つて用紙の下にある四本の線の上部分を指でなぞるように示し、カノンノが自信満々にそう言うと言つてアンジュがくすくすと笑う。それからカノンノ、カイ、レイの順番でサインをし、用紙をアンジュに渡してチェックしてもらおう。「うん、構いません。詳しい仕事の進め方はカノンノに教えてもらつてね」

アンジュはそこまで言うところ、と柔らかな笑みを見せる。

「それじゃあ、頑張ってきてね！」

「ああ」

アンジュの笑顔での言葉にカイはぶつきらぼうに返し、三人は船を出ていった。

## 第一話 初クエストと仲間達

コンフェイト大森林。ルバーブ連山に突如現れた謎の二人組、カイとレイはそこにいた少女カノンノに連れられて彼女が所属しているギルド——アドリビトムに入団、今はその正式入団のためのクエストを受けていた。

「ふっ、りやあつー！」

パツと見では普通の服と言っても構わない軽装の青年——カイはプチプリの二枚の葉を叩きつけるような攻撃をかわし、直後逆手に持っていた木刀を右薙ぎに一閃、プチプリを殴り飛ばし横にあった木に叩きつけると同時に彼の左手が動く。

「苦無閃！」

言葉と共に彼の左手から放たれる苦無、それが木に叩きつけられたプチプリに刺さり木に礎にする。プチプリの二枚の葉とそれを繋ぐ蔦がびくんびくんと苦しそうに動き、やがてぱた、としおれるように下がった。

「魔神剣！」

一方革製の鎧に身を包んだ少女——レイは右手に握った木刀を切っ先が地面を擦るように振り上げ、地面を這う衝撃波を生み出すとその一撃でプチプリを吹き飛ばす。し

かしまだプチプリを倒しきるには至っておらず、レイは宙を飛ぶプチプリを睨みながら左手をプチプリに向ける。その手には銃が握られていた。

「はっ！」

引き金を引き、パアンという銃声が鳴り響く。それと共に銃から放たれた弾丸がプチプリを貫き、地面に叩きつけられたプチプリはそのまま動かなくなった。

「こんなものか」

「これで十体だな」

レイは木刀を背負い直して銃を左腰のホルスターに収納しながら呟き、カイも木刀を腰に巻きつけた紐に通しながら倒した魔物の数を数える。

「……凄い。二人ってほんとに強いんだね……」

と、後ろの方で彼らの戦いを見ていたピンク髪の少女——カノンノがぼそりと呟いた。

「ねえ、二人つてもしかして記憶を失う前はどこかで傭兵とかしてたんじゃないのかな？」

「……さあな」

「あ、ごめんごめん。これで依頼は終了、帰ってアンジュさんに報告しよう」

「了解」

カノンノの眩きにレイは静かに返し、カノンノはごめんと謝ってからこれからの仕事の順序を説明。三人一緒にギルド本部である船へと帰っていった。

「ただいま、アンジュさん！」

「お帰り、カノンノ。依頼は終わった？」

「うん！」

カノンノは元気よくアンジュに挨拶し、アンジュも柔和に微笑みながら依頼が終わったのか確認、カノンノも頷くとプチプリを倒した証拠であるプチプリの葉などをいくつか提示していき、アンジュは確かにと頷いた。

「じゃあこれが報酬ね？ はい、カイとレイの分」

「……ありがとうございます」

「……どうも」

アンジュから渡されたお金をおすおすという様子で受け取り、それからアンジュは自分から見て右端にある部屋に視線をやった。

「そういえばカノンノ、三人が依頼に行っている間にショップの棚卸が終わったみたいだし、ちょっと二人を連れて行ったらどう？」

「あ、そうですね。二人の武器も買っておいた方がいいし……」

アンジュの言葉にカノンノは頷いてカイとレイが今持っている木刀（&レイは木製と思われる拳銃）を見る。アンジュもカイとレイに目を向けるとにこりと微笑んだ。

「じゃあ面白い物が終わったら次のクエストを受けてね？」

「了解」

「分かりました」

「じゃ、お買い物しよっか」

アンジュの言葉に二人が頷き、カノンノは二人を手を取るとさつきアンジュが視線を向けた部屋に連れて入っていく。

「いらっしやいだキュ〜!!」

と、青色の羽根つき帽子を被ったラツコのような生き物が話しかけてくる。

「棚卸が終わってから、初めてのお客さんだキュ〜！」

今度は赤いローブを着た背中になにか丸めた布らしいものを背負ったラツコのような生き物が話しかけてくる。

「見かけない顔だな、しかし。新人なんだな、しかし」

そして最後になんか猿っぽい生き物が話しかけてきた。それにカイとレイはつい警戒心を強めてしまう。

「ふふ。新しい仲間に合わせてみんな喜んでるみたいだね」

しかしカノンノは嬉しそうに微笑んでそう言い、二人に顔を向けた。

「二人ともびつくりしたかな？　ここがショップだよ。まずは買い物のお店のみんなに挨拶しなきゃ。みんな、二人は新入りで、男の子はカイ、女の子はレイだよ」

カノンノは説明の後、二人をショップの店員に顔合わせさせるため背中を押して前に押し出す。

「よろしくだキュ、カイ！　レイ！　武器屋担当のキュツポだキュ！　ここではアドリビトムのみんなの為の武器を取り扱ってるんだキュ！　これからもどんどん新商品を増やすキュ、ちよくちよく覗きに來てほしいキュ！」

「武器……なるほど、よろしく」

「ピツポは防具屋をやってるキュ！　選りすぐりの防具を仕入れて取り扱っているんだキュ！　これからも品数を増やしていくキュ！　試着も出来るから、ぜひ気軽に立ち寄ってほしいキュ！」

「防具か……ふむ、よろしく頼む」

赤いローブを着たラツコのような生き物——キュツポの挨拶にカイが、青い帽子をかぶったラツコのような生き物——ピツポの挨拶にレイが返す。

「やっぱり新入りだったんだな、しかし。ここはコーダの店、道具屋なんだぞ。何か買っていくといいんだな。買い物なんて簡単、しかし。財布開けて、中から金を出して、コーダに渡せば買えるぞ。さあ、さっそく何か買ってほしいぞ、しかし」

「キュツポの武器を買うキュ！」

「ピツポの防具も大事だキュ！」

「あはは……まあ、さつき貰ったお金で好きなものを買ってみなよ」

猿のような生き物——コーダのセールストークに便乗してキュツポとピツポも騒ぎだし、それを聞いたカノンノも苦笑しながら二人に買い物を促した。

「……じゃあキュツポ、そっちの剣を貸してくれないか？」

「あ、シミターだキュ？ 分かったキュ」

カイの言葉にキュツポは頷いて一本の湾曲した剣を渡し、カイはそれを握るとぶんぶんと何回か素振りする。

「……重いな。動きづらい」

「じゃあこっちのロングソードにするキュ。ちよつと威力は下がるけど、軽くて扱いやすいキュ。今なら1000ガルドだキュ」

「なるほど。じゃあそれを貰うよ」

「毎度ありだキュ。あ、そうだキュ。軽い武器が欲しいならこっちの短剣はどうだキュ



？ こっちのダガー、200ガルドだけどうだキユ？

「じゃあそれも」

「……」

カイはキュツポに勧められたロングソードの他にダガーも買うと二つとも鞘を貰ってロングソードは腰に、ダガーは腰の後ろにセットする。

「我はさつきカイが持っていた剣を貸してもらえるか？」

「キユ」

次にレイがさつきカイが素振りしたシミターを借り、彼女も何度か素振りするとうんと頷いた。

「我はこれぐらい重い方がしっくりくる。これを貰おう」

「毎度だキユ。200ガルドになるキユ、あ、それと一緒に銃もどうだキユ？ レイ、銃を持つてるキユ」

「ふむ……」

キュツポはそう言つて銃——所謂リボルバータイプのものだ——を渡し、レイは一度その銃をホルスターに収め、抜いて構え、すぐホルスターに戻すというのを繰り返すと

頷いた。

「使いやすそうだ。貰おう」

「毎度ありだキュ。100ガルドだキュ」

「……」

レイは拳銃も新調し、次に二人はピツポの防具屋へと移動する。まあ違う店に行くと  
いうよりは隣のテーブルに移動するという感じなのだが。

「じゃあ防具だけど……うくん、じゃあ二人ともネビュラシリーズでどうだキュ？ 星  
雲級と称えられる装備、今なら一式420ガルドだキュ！」

「じゃあ貰う」

「私もそれで構わない」

「……」

「あと、レイさんは剣士キュ？ 剣士だったら盾が必要だキュ！ このスモールシール

ド、100ガルドだキュ」

「分かった」

二人とも店員に勧められるままに装備を買っていき、それを見ていたカノンノの身体がふるふると震えだす。

「えつと次は道具だな」

「ふむ、道具は何を買うのか……」

「二人ともストップ!!!」

そしてついにカノンノがキレた。その怒りを感じ取ったのか二人はびくつと一回跳ねてカノンノの方を向く。彼女は凄まじいほどに座った目でおでこに怒りを示す血管マークをいくつつかくつつけ、背後からは燃えているようなオーラを放っていた。カノンノはそのままコーダの道具屋へと歩いていく。

「コーダ、アップルグミ六つにオレンジグミ四つ」

「960ガルドなんだな、しかし」

カノンノは唐突にグミを買うとそれを二つの小袋にアップルグミを三つ、オレンジグミを二つずつ分けて入れ、カイとレイに突き出す。そして二人が袋を受け取ると同時にカノンノは二人を睨み付けた。

「二人とも買い物下手過ぎ!!! 何キユツポとピツポの勧められるままに買ってるの?!?!」

カノンノは思いつき怒鳴り声をあげ、カイとレイは威圧される。

「それに、装備を新調したら古い装備は大体使わなくなるから売ってお金にしちやいな

「さー!!」

「は、はい……」

「まったくもう、今度ルーティさんに買い物の仕方をすっかり叩き込んでもらおうかなあ」

カノンノの威圧とお説教に二人は押しされ、二人とも装備を新しいものに着替える——レイは部屋の隅に用意された女性用一人分更衣室を使った——と今まで装備していた軽装の服と鎧を売ってお金に変える。

「あ、さつき買ったグミは私の奢りって事にしてあげるからね。じゃ、次のクエスト受けに行こっか」

「行つてらっしやいツキユ」

「また来るんだな、しかし」

カノンノはそう言って二人を連れてシヨップを出ていき、アンジュの元に戻る。

「あ、カノンノ。やつと来たのね」

「やつと?」

「あれ? さつき呼んだの聞こえなかった?」

「え?……あーえつと、ちよつと二人に説教してたので……なんででしょうか?」

アンジュのどこか呆れたような言葉にカノンノが首を傾げるとアンジュが不思議そ

うに尋ね、それにカノンノはあははと苦笑を漏らしながら返した後尋ねる。それにアンジユはふふつと笑った。

「今ね、仕事に出てたメンバーが帰ってきたの。挨拶に行つて来てくれるかな？」

「分かりました！ みんな下の階にいるんですよね？」

「ええ」

「じゃ、行こうか、カイ、レイ」

アンジユとカノンノは会話をした後、カノンノが二人を連れて一階下の部屋へと向かう。その場所——たくさんいろんな機械がある部屋へとやってくると二人は不思議そうにあたりを見回した。

「ここは機関室だよ」

「あれ？ カノンノさん……そちらのお二人は？」

カノンノが部屋の説明をすると突然そんな声が聞こえ、声の方を向くと褐色の肌をし、額に宝石のようなものをつけ大きな帽子をかぶった小柄な子供が声をかけてくる。

「あ、チャット。新入りの二人だよ」

「カイだ」

「レイ」

「そうですか、それは自己紹介しなければなりませんね。ボクはチャット。由緒正しき

大海賊アイフリードの子孫にしてこの船、バンエルティア号の船長です」

子供——チャットは新入りに対し自己紹介をし、次にえへんと胸を張る。

「アンジュさんはギルド、アドリビトムのリーダー。ボクはそのアドリビトムの拠点である船、バンエルティア号の船長です！ 拠点を提供しているボクの方が偉いんですよ！ ボクのひいおじいさん、アイフリードは貧しき者からは奪わず、むしろ施しのために海賊をやっていました。ボクは船とその遺志を受け継いで、ギルドのために船を提供しているのです。あなたもこのギルドに所属するという事はアイフリード……そして、ボク的意思に従って務めていかなくてもなりません！ それでは、このバンエルティア号の船員として相応しくあるために、早く一人前になつてくださいね」

チャットは自信満々にそう言い、それを聞いたレイが考える様子を見せた。

「チャット船長」

「あ、はい！ なんででしょうか!？」

船長と呼ばれた事が嬉しかったのか、レイの言葉にチャットは見て分かるほど嬉しそうに答える。

「船長の方がリーダーより偉く、さらこのギルドに所属するためには船長の意思に従わなければならない……それはアンジュさんも従っているんですか？」

「……え、えつと……やつぱりさつきのボクの方が偉いって話、アンジュさんには内緒に

してください……」

「？」

「ふふ。まあいいから、次の挨拶に行こう」

チャットは途端にしどろもどろになつてそう呟き、カイとレイが首を傾げるとカノンはその言つて再び二人を引つ張り、さつき降りてきた場所からすぐ近くのドアに入つていった。

「あら」

「あ、フィリア」

と、その時部屋から出てきた女性——緑色の髪を二つお下げにしており、メガネをかけた神官風の女性だ——が三人を見て声を漏らし、カノンもその女性——フィリアに声をかける。とフィリアはにこり、と柔和に微笑んだ。

「私から伺おうと思つていましたのに、ご丁寧にありがとうございます。私は、フィリア・フィリスと申します。よろしくお願いしますね、カイさん、レイさん」

「……よろしく」

「ああ」

アンジュから話を聞いていたのだろう、彼女は二人を見ながら挨拶をし、二人も軽く会釈で返す。

「私とアンジュさんは、教会に勤めていた時からの知り合いなのです。出身国は違いますけれど、私達は教会出身者なのです。それで、アンジュさんが多くの人々の力になれるギルドを立ち上げたと便りをくれて。私もぜひ協力したくてきたんです。では、今後ともよろしく願います」

フィリアは笑顔を絶やさずに挨拶し、二人も再び会釈する。

「ああ、あんた達が新人さんね？」

「あら、ルーティさんにスタンさん」

と、そこにまた別の二人組が現れ、フィリアはその二人に笑みを見せる。

「あたしはルーティ・カトレット。遺跡発掘専門のトレジャーハンターよ」

「俺はスタン・エルロン。よろしくな！ フィリアが世界中の人を手助けするギルドに入るって聞いて俺達もこのギルドに入ったんだ」

「ま、目的はそれだけじゃないんだけどね。孤児院を経営するための資金稼ぎをしなくちゃなんないの」

女性——ルーティと男性——スタンは自己紹介し、ルーティはさらに自身の目的を述べた後ににまりと微笑む。

「そういうわけで、儲かりそうな仕事の時は声をかけてちょうだい」

「……分かった。覚えとく」



「あら、話が分かるわね。んじゃよろしく」

ルーティの言葉にカイは少し黙った後頷き、それを聞いたルーティはにししと笑ってそう返した。

「えつと、ここの通路から行ける部屋に住んでる人はもういないし、次の部屋に行くよ。じゃあね、皆。また後で」

そしてカノンが促し、三人は出ていったドアから向かいにあるドアに入り、そこから伸びる通路にある奥の部屋に入った。

「こんにちは、エミル、マルタ」

「あ、カノン。それと君達が新しいメンバーだね？ 私はマルタ・ルアルディ。よろしくね」

カノンの挨拶に少女——茶色い髪を二つに分けて伸ばし、白い花の髪飾りをつけている——がにこつと微笑んで挨拶してから隣の金髪碧眼の少年をとんとんと小突いた。

「ほら、エミルも！」

「……あ……え。エ、エミル・キャスタニエ……です」

マルタの促しに少年——エミルはぼそぼそと、どうにか相手に聞こえる程度の声で挨拶をした。

「もう！ 男ならはつきりする！ そんな風に、いちいち他人の顔色うかがってたら相

手に気を遣わせちゃうでしょ！」

「う、うん……ごめん……」

マルタの大きな声にエミルはやはり小さな声で謝り、マルタは元気な笑みを二人に見せた。

「彼、あなたとの初対面でもよつと緊張してるみたい。でも、すぐに慣れるから」

「ああ、分かった。俺はカイ」

「レイ……よろしく頼む」

マルタの言葉に二人は頷いてそれぞれの名前を名乗る。

「よろしくね。私達はアンジュと故郷が同じで、ギルド発足を手伝ったの。そのままここで働いてるんだ。今日から君達も仲間だね！一緒に頑張ろう！」

その言葉に二人は頷き、それからマルタは二人をきよきよと眺めた。

「なんだ？」

「あ、ごめんごめん。ね、ね、二人つてもしかして恋人同士だったりする？」

突然眺められたことにかカイは眉をひそめるとマルタは軽く謝ってからそう切り出し、それに二人は首を傾げる。とカノンノが口を挟んだ。

「二人つて記憶喪失で、そういうの分かんないんだって」

「あ、そうなんだ……ふん……」

「……マ、マルタ？」

カノンノの言葉にマルタは何か思うような視線で二人を見る、それにエミルが恐る恐るマルタに話しかけるとマルタは途端に嬉しそうに微笑んでエミルに抱き付いた。

「大丈夫だよエミルー！ 私はエミルの事大好きだから！」

「マ、マルタ!? 別にそういうわけじゃ……」

「レイさんだよな？ エミルは渡さないから覚悟してね！」

「う、うむ？……」

マルタはエミルに抱き付きレイに牽制をかけた後、彼女からピンク色のオーラが発せられ始めたため三人はすぐに部屋を出ていった。そしてそのすぐ隣の部屋のドアをカノンノが開けた。

「クラトスさん、新入りの人の挨拶に来たよ」

「ああ、話は聞いている」

カノンノの紹介にクラトスと呼ばれた男性は二人に顔を向ける。

「私はクラトス・アウリオン。リーダーのアンジュより傭兵として雇われている……ん

？ お前は……」

「どうかしましたか？」

クラトスはカイに目を向けて一瞬眩き、カイが首を傾げるとクラトスは小さく首を横

に振った。

「いや……なんでもない。早く仕事を覚えるのだな」

「じゃ、これで戻ってきた人への挨拶は済んだことだし、アンジュさんのところに戻ろうか」

クラトスとの挨拶が終わるとカノンノはそう言い、三人は部屋を出ていくとホールへと歩いていく。

「そういえば、戻ってきた人、という事はまだ他にも人はいるんですか?」

「あ、うん。でも近い内に戻ってくるはずだからまたその時に挨拶しようね」

レイの問いかけにカノンノはそう返し、三人はホールへと戻る。

「三人とも、お帰りなさい。次のクエストを用意してるんだけど、さっそく受ける?」

「ああ」

「もちろんだ」

「よろしい。カノンノも教育係としてついて行ってね?」

「はいっ!」

アンジュの早速の問いかけにカイとレイは頷いて返し、アンジュは満足そうに頷くとカノンノにも同行を頼み、カノンノもはいと元氣よく頷く。そして三人でクエスト受領のサインを行い、三人はバンエルティア号を出ていった。

## 第二話 入隊試験

ブラウニー鉱山。カイ、レイはカノンノと共にここに銅の納品を行うためまず銅の採掘へとその少し奥までやってきていた。

「せいっ!」

「ふんっ!」

カイとレイは船を出る時に持たされたマットックで岩の割れ目を打ち、そこから出てくる銅の固まりを拾い集めていく。

「……こんなもんか?」

「ん〜……うん、そうだね。これくらいあれば充分足りると思うよ」

カイが袋に銅の固まりをいくつか入れてカノンノに見せ、カノンノからもオツケーを貰う。と、レイがちらりと帰り道を見た。

「ならば急ぐぞ。また魔物が集まってきた」

「わわ! 急ごう!」

「了解」

レイの言葉通り帰り道にこの辺を縄張りになっているバットやロックルが集まり始め

ており、カノンノが慌てて叫ぶとカイもこくと頷き、強行突破する気なのか刀を抜く。それをちらりと見てレイも剣と銃を抜き、カノンノは呆れたようにため息をつくと二人が採掘した銅を預かり、彼女も大剣を抜いた。

そして魔物の群れを強行突破した三人は鉾山を脱出、バンエルティア号へと戻るとホールへと入る。

「アンジュさん！ 持ってきたよ！」

「あ、お帰りなさい」

カノンノがそう言って依頼用のテーブルに銅を置き、アンジュは挨拶を返した後袋の中身を確認する。

「うん。確かに受け取りました。それじゃあ、これが報酬ね」

「どうも」

「ありがとうございます」

アンジュは納品物を確認すると報酬をカイとレイに渡し、二人もお礼を言うてから報酬を受け取る。

「まあ、正式なメンバーとなれば大体こんな感じでギルドの仕事をしてもらうことになるんだけど……」

「ならば、もう見習いとやらは卒業ということでしょうか？」

「そうねえ……もう一人で仕事をしてもらっても大丈夫だと思っけど……」

アンジュからの説明を受け、レイが聞き返すと彼女は口元に人差し指を当てながら何か考えている様子で呟く。

「うん。じゃあその前に、一人前のメンバーとなってもらうために最後の入隊試験をしましょうか。ああ、二人一緒に構わないわよ」

「それが終われば、正式なメンバーとして採用、ですか？」

「うん、そうだね。アンジュさん、入隊試験はどんなクエストですか？ 私がやったのと同じですか？」

アンジュの言葉にカイが聞き返し、カノンも彼女に問いかける。

「そう焦っては駄目よ、カノン」

と、それに対しアンジュはくすくすと笑う。

「それより、残りのメンバーが帰還したから二人と顔合わせしてもらわないと」

「はい。じゃあ二人とも、残りのメンバーへ挨拶しに回ろう。みんな、下の船倉にいるから」

「じゃあ、私はクエストを用意しておくね。行ってらっしゃい」

アンジュが見送り、三人はバンエルティア号の地下二回、機関室より下までやってくる。そして部屋の真ん中に来るとカノンがくると回転して振り返った。

「ここが船倉だよ。この階は皆の部屋として使っている。それじゃ、挨拶回りをしよつか！」

「おう」

「はい」

カノンノの言葉にカイとレイが頷く、その時だった。

「大体ルビアは！」

「なによカイウスつたらー！」

突然船倉の左奥、正確には船倉に入って左側の壁にあるドアの一番奥の部屋から喧騒が聞こえ、カノンノが「またかあ」と呟いてその部屋に入っていく。カイとレイもその後続いた。

「二人とも、どうしたの?」

「あ、カノンノ! 聞いてよカイウスつたらー!」

「なんだよルビア! カノンノを味方につけるなんて汚いぞ!」

「ふ、二人とも落ち着いてよ」

「どうしたんだ?」

部屋に入ったカノンノ達を出迎えたのは茶色い髪に前髪だけが白くなっている少年とピンク色の髪をした少女。その内の少女がカノンノに一番に話しかけ、少年がそれに



対して叫ぶとカノンノが落ち着くよう促す。と、カイがその後ろから覗き込み、それを見た少女が驚いたように目を丸くした。

「えっ!?! えっと、誰?」

「ああ、今日入団したカイとレイ。まだ見習いで、今挨拶回りに来てるんだ」

「そうなのか? 俺はカイウス・クオールズ。よろしくな」

「あたしは、ルビア・ナトウィック」

「カイ」

「レイだ」

目を丸くした少女にカノンノが説明すると少年——カイウスが快活に笑って名を名乗り、少女——ルビアも名前を名乗る。それにカイとレイも自分の名を名乗り返した。

「アタシはアンジュさんがいた教会で、神官の見習いしてたの。アンジュさんの後輩、つてところかな」

「アンジュさんが村の教会にいた頃、俺、よく出入りしててさ、ギルドを立ち上げるから一緒にやらないかって言われて、ここへ来たんだ」

ルビアの次にカイウスがそう言う、とルビアの眉が吊り上がった。

「あら、カイウスったら、アンジュさんに誘われたのはあたしよ? あなたは、俺も行くってついて来ただけじゃない」

「なんだよ、それ！ 大体、お前じゃアンジユさんの足を引つ張るだけだろっ！ お前がそうなった時に助けてやろうって思っつて、付き合つてやつてんじゃないか！」

ルビアの言葉にカイウスも売り言葉に買い言葉とばかりに叫び、二人は顔を突き合わせる。

「も〜」

それにカノンノは呆れたように声を漏らし、カイとレイは面食らつたように黙り込む。

「あ……」

と、ルビアが我に返つたように声を漏らして三人の方を向いた。

「ご、ごめんなさい……カイウスとは幼馴染で、いつもこんな調子なの。だから、気にしないでね」

ルビアがそう説明する横でカイウスも申し訳なさそうに顔を背けていた。

「それじゃあ、カイ、レイ。これからよろしくね」

「ああ」

「よろしく頼む」

二人が微笑みながら、ルビアがそう言うのと二人も頷いて返す。と、ルビアがちらりとカイウスを見た。

「ねえカイウス、今レイさんを見てなかった？」

「はあ？ 挨拶するんだから相手を見るのは当然だろ？」

「そうじゃなくって、何か見惚れてなかった？」

「……二人とも、行こっか」

ルビアとカイウスがまた口喧嘩しそうな雰囲気を感じ取ったのか、カノンノは二人を回れ右させる背中を押して部屋を出ていく。それから三人はどうせ近いからとその隣の部屋に入った。

「あーん？ あ、カノンノ。ん？ あんたら誰？」

と、赤い髪をショートカットにした少女がソファに座りながらいかにもめんどくさそうな様子でカノンノに声をかけた後、その後ろに立つカイとレイを見てめんどくさそうな声を出す。

「ちよ、ちよつとイリア。今度入ってきた、新しい仲間だよ。アンジュさん言ってたでしよ。」

「あー新人さん、そんな事言ってたっけね。そんじやま、自己紹介しないとねー」

銀髪の少年——何かエミルと同じような気配を感じるとカイはふと思った——が慌てたように少女に言う。少女は思い出したようにうんうんと頷いて、よっこいせ、と

言つて立ち上がる。

「あたしはイリア・アニーミ。好物は肉。よろしく」

「僕は、ルカ・ミルダ。イリアと、それからリーダーのアンジュとは同じ故郷なんだ」

「あたしはアンジュのギルド発足に賛同してついで来たの。ウチの故郷の村がまた貧しくつてさー！ 貧しい上に教育もない村だから、将来あたしが学校を作ろうと思つてね。ここで、稼がさせてもらつてんの」

少女——イリアに続いて少年——ルカも名を名乗り、次にイリアがそう自分がここに  
いる理由を将来の夢も交えて説明。次にどこか不服そうな表情を見せた。

「あたしのパパ、村長やつてんだけど村の領主国に綿の単一栽培を押し付けられたの。  
領主国はパパが言いなりになると分かると手のひら返したような態度になつて、村はさ  
れるがまま！ いろいろ知つてれば、村も守れただろうし。教育つて必要よね……」  
怒つた次には顔を上にあげてどこか悲しんでいるような様子を見せる。

「で、でも村長は、村のみんなを思つて決めたんでしょ？」

「わかつてる。村長なんだから、みんなのために決断したの。ただ、知らないことが多  
すぎて、痛い目を見たつてだけ」

そこにルカがそう言うといリアは悲しそうな表情でうつむき、そう呟いた後再びカイ  
達を見る。

「あたしはね、パパのためにも学校を作りたいの」

「親思いなんだな」

イリアの言葉にカイはふと微笑を浮かべながら呟く。

「その前に、イリアが勉強した方がいいんじゃない……」

そこにルカがぼそりと声を漏らすと、イリアはそれを目ざとく聞きつけたようにルカを睨み付けた。

「言うわね〜？ あんたのよーに、村の中でも商家の坊ちゃんや、家庭教師がついてりやあ、学も身につくわねえ」

「あ、でも、僕はその商家を継がされるのが嫌で家出してここに来たんだし……」

「わかってるってば。あんたはここで金貯めて、あんたがなりたい医者勉強して村のみんなが待ち望む医者になれば親も諦めてくれるわよ」

イリアの睨みながらの言葉にルカはぼそぼそと喋り、それにイリアはこくこくと頷きながら返す。

「二人とも、夢があるんだな」

「まあね〜。そういうわけでガンガン稼ぎたいから仕事で組みたい時は呼んでちょうだい。んじゃ、よろしく〜♪」

カイの言葉にイリアはにししと笑いながらそう言い、よろしくと締めた。それにカイ

とレイもよろしくと返し、三人は部屋を出ていく。それから三人はさらに隣の部屋へと入る、と黒髪を長く伸ばし、足を出した服装をしている少女がそれに気づいて目を向けるとにこりと微笑んだ。

「あつ、君達が新しく入った、カイとレイ？」

「ああ」

「話は聞いてたよ」

「初めまして！ 俺はシング。シング・メテオライト！」

少女の質問にカイが頷き、少女がそう言うとその横に立っていた明るそうな少年——シングがやはり快活な声で自己紹介をする。

「わたしはコハク・ハーツ。よろしくね」

「俺達の故郷は、いつもアドリビトムに助けてもらっててさ」

「お礼にわたし達も何か手伝えなかなって思っ、このギルドに加入させてもらったんだよ」

「この船に乗ったことで、初めて村を出たんだ。ホント、世界には知らない事ばかりで毎日が驚きだよ」

そういうシングは無邪気に目を輝かせており、コハクもうんと頷いた。

「きつと君達も、この仕事が気に入るはずだよ。それじゃあ、一緒に仕事をする時はよろ

しくね」

コハクの言葉に二人も会釈で返し、三人は部屋を出る。

「あつー！」

と、そんな元気な声が聞こえてきた。そう思うと緑色の髪をショートカットにした元気な雰囲気を見せる少女が、赤髪を短髪にしお腹を出した服装の青年を引つ張つて三人の元に駆け寄る。

「初めまして！ あなた達が新しい仲間になるのね？ わたしはファアラ。ファアラ・エルステッド。アンジュとは故郷が同じで、ギルドを立ち上げた時からのメンバーなの」  
「俺はリッド・ハーシエル。同じく、ギルド発足当時のメンバーだ。よろしくな」

少女——ファアラの次に青年——リッドが名を名乗り、カイとレイもよろしくと返すと、リッドがため息交じりに口を開いた。

「俺は元々故郷の村で猟師をやつてたんだ。でも、領主国が俺達の村に綿の栽培を強制させようと、畑を広げるために猟をする森まで焼いちゃったんだよ」

「わたしは農家出身なんだけど、綿の栽培を強制されたから、自分達の食糧すらまかなえなくなつちやつたの」

「綿じゃ腹一杯にはならねえからなあ」

リッドの次にファアラが残念そうな表情でそう言い、それにリッドが大きくため息をつ

きながら返す。と、ファアラが再び快活に微笑んだ。

「でも、このギルドで働けば、村に不足している物資を集めて届けることも出来るんだ」  
「ま、そういうことだな。じゃ、これからよろしくな」

ファアラに続いてリッドもそう言い、二人もよろしくと返す。それから三人はリッドとファアラが部屋に戻るまで歩きながら話し、そのついでに奥の部屋に挨拶に入った。

「ん？……誰だ？」

「新入りの人だよ」

「ああ、アンジュさんが言っていましたね」

部屋にいた、銀髪の青年はカイ達を見て怪訝な目を見せるがカノンノが紹介すると奥の方の椅子に座っていた金髪ロングの少女が頷き、にこつと微笑んだ。

「こんにちは、初めまして。わたしは、シャーリイ・フェンネスと言います。そして、こっちはわたしの兄の……」

「セネル・クーリツジだ。元はギルド専属のマリントルーパーをやっていた。ここへはつい最近、加入したばかりだ」

少女——シャーリイが青年に手を向けると青年——セネルも自己紹介をする。と、再びシャーリイが口を開いた。

「元々は故郷のギルドに所属していました。でも、私たちの国は戦争で焼け野原となつ



てしまつて……」

「それで、こつちのギルドへ移つたわけだ。故郷のギルドは解体してしまつたからな」  
「でも、バンエルティア号のおかげでいつでも故郷のみんなを助けに行けます」

二人は交代交代で喋り、シャーリーが思い出したように二人を見た。

「そういえば、研究室のウイルさんには会いましたか？」

「ああ」

「ウイルさんも、わたし達と同じ故郷、同じギルドにいたんです。それじゃあ、これからよろしくお願いします」

シャーリーの朗らかな笑顔での挨拶に二人も会釈で返し、三人は部屋を出るとカノンノが「ここが最後の部屋だよ」と言つて部屋のドアを開けた。

「新入りか。さつき、話を聞いた」

そこにいたのは水色っぽい銀髪を長く伸ばし、よく見ると後ろで三つ編みにしている青年。彼は物静かな口調でそう呟くような声を出した。

「俺は、ヴェイグ・リユングベル。アニーやクレアと同じ、ヘーゼル村の出身だ」

青年——ヴェイグはそこまで言うとい旦黙る。

「ここへは最近入つたばかりで、俺から教えられることは少ない。ギルドのみんなは、それぞれ故郷での事情があつてここへ来ている」

「ああ。アンジュさんに誘われて、夢があつて、手伝いをしたくて、故郷のギルドが解体して……いろいろな聞いた」

「そうか……よければ、力になってほしい。俺から言えるのはこれくらいだ」

「ああ。頑張るよ」

ヴェイグの言葉にカイがそう言い、それを聞いたヴェイグが真面目な顔でそう言うときも真面目な顔で返答した。

「それじゃあ、挨拶も済んだし、アンジュさんの所に戻ろう」

「ああ。じゃあヴェイグ、これからよろしく」

カノンノの言葉にカイが頷いてヴェイグにこれからよろしくと言い、それにヴェイグも無言の首肯で返した。

それから三人は部屋を出ていき、一階のホールへと戻っていく。

「はい、二人ともお疲れ様」

三人がやってきたのに気づいてアンジュがカイとレイの二人に話しかける。

「やっとアドリビトムメンバー全員との顔合わせが終わったね。さて、あなた達が、正式なアドリビトムの一因となるための入隊試験を用意しておいたよ」

その言葉にカイとレイが好戦的な笑みを見せる。

「カノンノも一緒だから、きつと難なくクリアできると思うけど……カノンノの手助け

いらないつて感じね……」

二人の笑みを見たアンジュは苦笑交じりにそう漏らし、三人がクエスト用紙に名前を記入すると真剣な表情を見せた。

「最後の入隊試験、まずはその説明をよく聞いてちょうだい。今回行ってもらうのはルバーブ連山。そこにいる、ガルダーダを倒してきてもらいます」

「これが終わったら二人も正式なアドリビトムの一員になれるから。頑張ろうね！」  
「ああ」

アンジュの説明の次にカノンノが元気づけるように言い、それに二人もこくと頷いた。

そして三人は船を出ていき、ルバーブ連山へと向かう。その麓へとやってくるとカノンノが口を開く。

「今回の目的は、ここでガルダーダを探して退治する事なんだけど……そうだなあ、ガルダーダに会うにはちよつと奥へ進まないといけないかな」

「分かった。んじゃ急ぐか」

カノンノの言葉にカイがそう言つて戦闘を歩き、レイも無言でその後を追うように歩きたしカノンノもさらにその後を追う。それから少し歩いて分かれ道が見えると、カイは特に考える様子もなく右側の方に歩いていく。

「あ、待って！ ガルーダがいるのはその方向じゃないよ！」

「……そうか」

カノンノの注意にカイはそう呟いて元来た道を戻り、左側の道に入って峠を歩き出す。峠を歩いて少しするとカイが腰の左側に差していた刀を抜き、レイも僅かに遅れて背負っていた剣を抜き腰の後ろに差していた銃を左手に握る。オタオタが三体にアックスビークが一体、前方に立ちふさがっていた。カイとレイは互いに武器を構えるとニヤリと不敵な笑みを浮かべ、カイが地面を蹴ってアックスビーク目掛けて突進、レイはオタオタ三体に銃を向けた。

「りゃあっ!!」

カイはアックスビーク目掛け突進しながらまず一回回転しつつジャンプ、勢いをつけて右手に逆手で握った刀を思いつきりアックスビーク目掛けて叩きつける。しかしアックスビークはそれを斧のように進化した嘴で受け止め、まるで鏝迫り合いのような状況になる。が、カイはにやりと笑うと左手を腰の後ろにやる。

「らあっ！」

追撃といわんばかりにアックスビークの右目に叩き付けられる左手。と、その目から血が流れ始め、アックスビークは痛そうに悲鳴を上げてのけ反り数歩後ろに下がる。カイの左手には一本の短剣が握られていた。これでアックスビークの目を突いたのだ。

その証拠に短剣は血に塗れており、それを振った拍子か何かで飛んだ血の僅かな飛沫がカイの口元につく。が、カイは気に留める様子もなくアックスビーク目掛けて踏み込みつつ右回りに回転、その間に右手の刀を順手に持ち替えるとアックスビークの目の前に地面目掛けて刀を差し入れる。

「地裂斬！」

地面を掬い上げるように刀を振るい、地面から衝撃波を放ちアックスビークを怯ませる。しかしカイはさらに踏み込み、刀を順手のまま右から左へと薙ぎ、さらに刃を返して左から右に薙ぐとそのままの勢いでくるんと回転。

「刹月華!!」

アックスビーク目掛けて右後ろ回し蹴りを叩き込む。それは偶然だろうかさつき短剣で抉った右目に直撃、アックスビークは痛みに悲鳴を上げて地面に転がりのたうち回る。カイはそれを見下ろしながら刀をアックスビークの心臓目掛けて思い切り突き刺し、トドメを刺す。そしてアックスビークが動かなくなったのを確認すると刀を引き抜き、左右に振って血を払うと腰の鞆に収めた。

一方カイがアックスビークに突進していった頃、こちらはレイ。彼女は左手に握った銃を三体のオタオタに向けたまま動いておらず、痺れを切らしたのかオタオタの方が転がって突進してくるのを見るとレイは勢いよく銃を右に振る。

「ヒートバレット！」

銃を右に振り、左に振り払うようにしながら銃を連射。オタオタに銃弾が突き刺さるのを見ながらレイは銃を左に振り払う勢いを利用してのように右手の剣を、切っ先を地面にこすらせながら振り上げる。

「魔神剣！」

叫びと共に剣から放たれる地を這う衝撃波。それは右のオタオタに直撃し、レイはそれを視界の隅で確認しながら銃を投げ捨て、背負っている盾に手を伸ばしながら真ん中のオタオタに突進。

「瞬迅剣！」

勢いよく剣を突き出してオタオタを吹っ飛ばし、ついでに左から攻撃してくるオタオタを左手に握った盾で防御、そのまま押し返すと身体をさつき魔神剣を当てたオタオタの方に向ける。

「散沙雨!!」

剣による連続突きがオタオタを幾度も貫き、最後の一突きでオタオタが沈む。それとちらりと見ただけでレイは振り向く。丁度最後のオタオタが飛びかかってきていた。

「虎牙——」

飛びかかって来たオタオタにカウンターの要領で剣を振り上げ、レイもジャンプす

る。

「——破斬!!」

そして勢いをつけて剣を振り下ろし、オタオタを一刀両断にした。オタオタ三体の全滅を確認し、レイは剣についた血を、剣を左右に振って払ってから背中 of 鞆に収め、盾も背負い直してからさつき投げ捨てた銃を拾おうと辺りを見回す。

「ほれ」

と、さつきアックスビークの方に突進し、アックスビークを倒し終えたカイが銃を彼女に差し出し、レイは黙って銃を受け取ると弾丸を再装填してから腰の後ろのガンベルトに差ししておく。

「…………ふ、二人って…………ほんとに強いね…………」

そしてカノンノは頬をヒクヒクと引きつかせながらそう呟き、次にカイの顔を見る。

「カイ、口に血がついてる」

「あん？ ああ、さつきのアックスビークを斬った時のか」

「待ってて、今拭くから」

「いらねえだろ」

カノンノの指摘にカイはそう呟き、カノンノはハンカチを取り出そうとするがカイはあつさりそう言うと言と舌を出してぺろりと口元の血を舐め取る。それはまるで獲物を前

にした肉食獣の舌なめずりのようにも見え、カノンノは驚いたように目を丸くする。と、その顔を見たカイとレイが不思議そうな表情を見せ、カノンノはすぐに愛想笑いでも誤魔化してから、再び三人は峠を歩いていく。その先にいる魔物はカイとレイが率先して、カノンノも魔術で援護して倒していき、ルバーブ峠の最奥へとやってくる。そこには薄紫色の体毛をした巨大な鳥の魔物が羽ばたいていた。

「カイ、レイ、ガルードだよ!!」

その姿を見たカノンノが叫ぶ。

「この魔物を退治したら、入隊試験は合格だよ。準備はいい?」

「ああ」

「うむ」

彼女の確認の言葉に二人は頷き、武器を構える。

「行くよっ!」

そしてカノンノの合図と共に二人は一気に地面を蹴り、ガルード目掛けて飛び出した。

「苦無閃!」

カイが素早く苦無を投げ、その苦無が突き刺さった痛みにガルードは唸り、ガルードは自分を狙う敵の存在に気づく。



「裂空斬!!」

しかしそこにレイが縦に回転しながらガルードを斬りつけ、ガルードはたまらないというように上空に逃げようと羽ばたく。

「落ちろ、ライトニング!」

だが逃がさないといわんばかりにカノンが叫び、ガルードを落雷が撃ち動きを止めさせる。

「閃走牙!」

そこにカイが刀を腰に構えて突進、ガルードに突き刺す。しかしその皮膚はなかなか硬く、僅かに突き刺さって血が出る程度の結果に終わった。と、ガルードが嘴を剥いてカイに突き刺そうと顔を振りかぶった。

「ちいつ!」

咄嗟に体重をかけていた右に飛ぶが左肩に嘴が当たり、防具のガードが無い部分に当たってしまったのか血が流れ始める。

「チャージバレット!」

しかしカイがどいた事を契機としたかレイは素早くガルードの懐に踏み込むと銃弾を一発至近距離から放つ。と、ガルードは思いつき回転して巨大な翼でレイを弾き飛ばした。そしてその後一気に羽ばたくと上空へと飛び出す。

「逃げちゃうー！」

「逃がすか！ レイ！」

「ああ！」

カノンノの声にカイはそう返して刀を投げ捨ててレイの方に走り、レイも心得たとうように頷くと背負っていた盾を取り、剣を一度地面に置いて両手で盾の端を握り、カイがその盾に足を乗せる。

「飛んで……」

レイは両手に力を込め、力強い目でガルーダを睨み付ける。

「けーっ!!!」

そして盾を一閃、それに合わせてカイもジャンプし、一気に上空のガルーダへと追いつくとその背中に掴まる。ガルーダもそれに気づいて振り落とそうとするがカイはそれに耐えて短剣を抜くとガルーダの背中に思いつき突き刺した。

「ギャーッ!!!」

ガルーダの悲鳴が響くがガルーダは痛みを我慢して再びカイを振り落とそうと上空を暴れ回る。しかしカイは深く突き刺した短剣に掴まって耐え、左手一本で短剣を握ると右手に精神を集中、それと共に右手に闇のマナが結集する。

「滅掌破っ!!!」

「ゴツ……」

背中に思いっきり闇のマナを込めた掌底を叩き込み、ガルーダはバランスを崩したか  
気を失ったかひゆるるると錐揉みしながら地面に落下。タイミングを合わせてカイ  
もそこを脱出する。

「後は頼んだぜ」

下の方で剣を構え、ガルーダを睨んでいる少女を見てそう呟きながら。

「はあああああ……」

少女——レイは力を込めて剣を右手で握り締め、ガルーダが地面に墜落するのと同  
時に剣を振り上げる。

「剛・魔神剣!!」

叫ぶと共に振り下ろされる剣。それは巨大な衝撃波を生み出し、ガルーダを呑み込  
んだ。そして衝撃波が消えた後、そこにいたガルーダはぴくりとも動かない事をカイとレ  
イは確認し、各々の武器をしまう。

「ん……」

そしてカノンも自分の目でガルーダの絶命を確認し、頷く。

「クエスト達成！ 入隊試験、合格したことを見届けました。おめでとう、カイ、レイ」  
カノンはそう言ってぱちぱちぱちと拍手する。

「さあ。戻ってこの事をアンジュさんに報告しないとね！」

そういうカノンノにカイとレイは頷く。と、彼女は次にため息を漏らした。

「それにしても、二人とも戦い方無茶苦茶だね。特にカイ、魔物に飛び乗るなんて……私の魔術かレイの銃弾で撃ち落とせばよかつたじゃない」

「結果は同じだ」

カノンノの言葉にカイはしれつとそう言い、カノンノはまた「もう」と声を漏らしてカイの出血している左肩を見る。

「じゃあとりあえず、治療術で治すから肩出して」

「ほつときや治るだろ？」

「駄目！ あーもー問題児だなあ！」

カイのきよとんとした言葉にカノンノはそう叫んでカイの左腕を左手で握って押さえつけ、無理矢理左肩に右手をかざす。

「癒しの力よ、ファーストエイド！」

呪文と共に手から暖かい光が溢れだし、カイの左肩の傷にその光が移ると傷跡が綺麗に消えていく。

「へえ……」

「よし。じゃあ下山しよっか」

カイが驚いたように傷口があつた場所を見ながら声を漏らし、カノンノは満足そうに頷くと下山道を歩き始める。カイとレイもその後が続いた。

そしてバンエルティア号のホールに戻ると、アンジユは嬉しそうなカノンノの顔を見てふふつと微笑んだ。

「無事、入隊試験をクリアしてきたようね。おめでとう。これで、あなた達も正式なアドリビトムの一員よ」

アンジユの言葉にカイとレイはこくんと頷く。

「これから二人は正式メンバーとして働くから、このギルドのメンバーと自由にパーティを組んでいいのよ。仲が良い人達と組んでもいいし、クエストに合わせて仲間達とパーティを組んでね？」

「はい」

その言葉に二人は頷き、「はい」と返す。

「それじゃあ、このパーティはここで一旦解散ね。アンジユさんが言ったけどあなた達はまだ一人前のギルドメンバーだから、好きな人とパーティを組んでいいんだからね。もちろん、誘ってくれたら私もいつでも組むからね！　じゃ、これからもお互い頑張ろう！」

「おう。よろしく頼む」

「よろしく」

カノンノはにこつと明るく笑いながらカイとレイにそう言い、二人もそれに頷いて返すとカノンノと握手する。アンジユもそれを見てふふつと微笑んだ。

### 第三話 日常と重要任務

ルバーブ連山。ここではレイが行商人ガメルからの依頼により商隊の安全のため魔物の討伐を行っていた。

「はあっ！」

気合一閃。そういうがごとくレイは女性にしては長身な背丈に見合う長い足でオタを蹴りあげると左手に握っていたりボルバー——スタンダードマグを空中でぐるぐる回転しているオタオタに向ける。

「エリアルレイザー！」

叫びと共に銃声が響き、オタオタは銃弾に貫かれる。しかし回転していたせいか上手く銃弾で貫けず、レイはチツと舌打ちを叩くと右手に持った、片手でも両手でも持つことが出来る、片手半剣という通称を持つ剣——バスタードソードを振り回し、オタオタが地面に落ちると同時に振り下ろす。

「剛・魔神剣!!」

そして地面に叩き付けた時に発生した衝撃波にオタオタは呑み込まれ、衝撃波が消えた後レイはトドメといわんばかりにオタオタをサッカーボールでも蹴るかのようになら

造作に蹴り、近くにあった岩に叩きつけた。

「ウツシツシツシ♪ 容赦ないわねーあんだ。気が合いそうだわ」

「そうか？」

「ええ。同じ銃使いだし、色々教えてあげるわよ。ほらルカー？ ぐずぐずしないで、もうこれで終わりなのー？」

イリアのいやらしく笑いながらの言葉にレイが首を傾げるとイリアはまだいやらしく笑いながらそう言った後ルカに呼びかけ、ルカ——自身の得物である大剣の他色々荷物を持たされている——は辺りを見回して倒した魔物をカウントする。

「え……えつと……あと五体くらいかな？」

「まだあ？ しょうがないわね。ルカ、肉出して肉」

「うう……」

ルカの言葉にイリアはめんどくさそうにそう呟き、腹が減ったのかルカに肉を要求。ルカは荷物の中から肉を取り出すと耐熱性のある皿の上に置く。

「ファイアボール！」

そして詠唱して炎の球を放ち、肉を焼くとイリアの元に持っていく。

「お、お待たせ……」

「サンキュー♪ やっぱ持つべき者は携帯コンロになるお友達ねー♪ 肉は焼きたてに



限るっ！」

おどおどとするルカにイリアはそう言つて肉にかぶりつき、レイはその光景をちらりと見た後休憩の間にと銃に弾丸の装填を行い、剣に付いている血を拭いた。

「はい、レイ。お弁当のおにぎりあげる」

「ああ、どうも……とところでカノンノさん、放つといていいんですか？」

カノンノから渡されたおにぎりを受け取りながらレイはルカを見てそう言い、それにカノンノはくすくすと笑う。

「あれがイリアなりの愛情表現だから。放つといて大丈夫だよ」

「そうなんですか？」

「うん。あ、これイリアには内緒ね？」

カノンノの言葉にレイは首を傾げ、カノンノは迷いなく頷いた後口に人差し指をあててしーつとやった。

「せい、やつ、たあつ！」

「ふっ！」

一方バンエルティア号の甲板。ここでは現在カイとクレスが模擬戦をしていた。ち

なみに怪我したらずぐ手当てできるようにと見物しているミントはおろおろと不安そうな様子を隠せておらず隣でフアラが安心させようとし、その横ではリッドが昼寝していた。クレスが鋭い剣捌きで剣を振り下ろし、直後手首を返して斬り上げ、カイが後ろに下がってそれをかわすとクレスはさらにもう一步踏み込んで剣を振り上げる。それを見たカイは素早く青銅製の剣——ブロンズソードを上に掲げた。

「甘いっ!」

「!?!」

それを見たクレスは素早く剣を脇に持つていき、右に薙ぎ払うように横に振る。フェイントだ。もつとも真剣で直撃させては危険なため寸止めにするつもりなのだが。

「なっ!?!」

しかしクレスの動きが驚愕で止まる。カイはクレスの動きに反応、ブロンズソードによる防御は間に合わなかったものの懐から短剣——マスケットナイフを抜くとクレスの剣を防御して見せたのだ。キンツツという金属音が響き合い、クレスは剣を下げ、カイもマスケットナイフを懐の鞘に戻す。そして二人は同時にハイキックの機動で回し蹴りを打ち合うが、それは互いの足にぶつかる。が、お互い構うことなく地に着けていた足で地面を蹴る。

「飛燕——」

「——連脚！」

宙を舞い、鋭く放たれる回転蹴り。踵で蹴りつけたそれが互いの頬に激突し二人はその衝撃で互いに吹き飛んだ。それにミントが息を飲み、フアラも「わゝ」と声を漏らす。

「……引き分け、だね」

「……ああ」

起き上がったクレスの笑いながらの言葉にカイも勢いをつけて起き上がり、頷く。それを聞いたミントは大慌てでクレスの方に走り、フアラもカイの方に走った。

「大丈夫、カイ？」

「ああ」

フアラの言葉にカイはそう返して立ち上がるがその時少しふらつく。蹴りを顔面に受けたため無理もないだろう。

「それにしても、クレスのフェイントによく反応できたね？ リッドだったら間違いなくくらってたよ？」

「見えたからな」

「み、見えたからって……それと反応できるのは別物だよ……」

「そうなのか？」

フアラの言葉にカイがこともなげに返すとフアラは啞然として眩き、それにカイは首

を傾げた。その時バンエルティア号がルバーブ連山へと到着し、待っていたらしいレイ、カノンノ、ルカ、イリアが船に乗り込んでくる。

「よお、お帰り」

「ただいま！」

「さてと。じゃあ中に戻ろうか」

カイの挨拶にカノンノがにぱつと笑いながら返し、クレスが立ち上がってそう言うと言いつつ、カイ、ファアラも頷き、丁度起きたリッドも伴って彼らは船内に入っていった。

「あ、カイ、レイ。丁度よかった。ね、あなた達って空からやってきたって、本当？」

ホールに入るやいなやルビアがそう二人に尋ねる。

「ああ、そうらしい」

「らしいって……じゃあ、ほんとの事は分からないんじゃない」

ルビアの質問にカイが答えるとルビアは困ったようにそう漏らし、それにカノンノが頬を膨らませる。

「でも、本当なんでもん。光に包まれて、空から降りてきたの」

「そんな事、簡単には信じられないわ」

「真実かどうかは別としても、素敵なお話だと思いますよ？」

カノンノの言葉にルビアがそう返すとミントは柔らかく微笑みながら返し、物思いにふけるように目を細める。

「世界樹が光を発した日に空から降りてきた、なんて……まるで、デイセNDERのようですね」

「「デイセNDER?」」

ミントの言葉にカイ、レイ、カノンノが首を傾げる。それにルビアが頷いた。

「そう。あたしやアンジュさんがいた教会には、『救世主』の言い伝えがあるの。世界に危機が訪れた時、世界樹が生み出す存在」

「遠い昔から、教会に伝わる『予言』です。世界樹から生まれたデイセNDERは記憶がなく、世界のことも知らず、不可能も恐れも知らない無垢な存在だと言います。そして、人々のために世界を学び、強くなり、ゆくゆくは世界を平和に導き……また世界樹へと還っていくそうです」

ルビアの言葉にミントが教えるように続け、カイとレイを見てにこりと微笑む。

「カイさんとレイさんの『記憶がない』という点は、まさにデイセNDERの様ですね」

「じゃあ、二人はデイセNDER?」

ミントの言葉にカノンノが驚いたように二人を見る。

「だが、二人がデイセNDERかどうかの真偽は分からない。あくまで予言で伝えられて

いるだけだからな」

そこにウイルが口を挟んだ。

「そもそも、その予言自体の真偽すら、誰にも分からない。昔の人の創作話という見方が一般的だろう」

「そう、ですか……」

ウイルの言葉にカノンノは残念そうに声を沈めた。と、ウイルはふつと笑う。

「いや、かくいう俺も世界樹が光つたのを見た時、真つ先に予言の話を思い出したからな」

そう言った後、彼は何かを思い出したようにため息をついた。

「しかし……世間ではディセンダーの出現を待つ宗教が次々に興っているようだな」

「このようなご時世ですし、救いを求める人々が多い証拠ですね。各地で争いが絶えませんがね……救いを求める人が増えても、おかしくはありません」

ウイルの言葉に続けてミントもどこか嘆くような様子を見せながら、そう漏らした。

「もつと詳しく聞かせてくれないか？」

「え？ えつと、今の世界の状況？」

「ああ」

「世界の国々では星晶ホステアを巡って国同士の争いが起きてるの」

カイの疑問の声にアンジユが答える。

ホスチア  
「星晶?」

「なんだ、それは?」

「え?……ひよつとして二人とも、この世界についてのことまで記憶を失ってしまったのかな……」

カイとレイの言葉にカノンノは驚いたように声を漏らした後悲しそうにそう呟く。

「えつと、星晶っていうのはね、世界中でいろんなものに使われる、現代のエネルギー資源だよ。マナは知ってる? 世界樹が生み出す、生命の源。マナは私達生命の源とも言える力なんだけど、捉えどころのない非物質のものだから、工業的なエネルギー源としては使えないの」

カノンノはすらすらと説明し、一息置く。

「でも、星晶は違うの。物質で、地下から採掘が出来て、エネルギーとして活用消費が出来るのよ。星晶も、マナと同じ性質を持つているの。世界樹が、長い年月をかけて、マナを結晶化させたものじゃないかって言われてる」

彼女はそこまで言う。「本当の所は、まだ分からないらしいけど」と苦笑する。

「で、さっきも言ったけど今はその星晶を巡って、国同士の争いが起きてる。星晶があるとされる小さな国や村は、力のある大国にそれらを搾取されるがまま……星晶には、土

地に恵みを与えるマナを出す力があるの」

「……先ほど、マナは生命の源と言っていたが……」

「そう。星晶が獲り尽されてしまったら、土地はみるみる荒れていく。作物なんか、育たなくなってしまうの……星晶が世界の主要エネルギーになってから、文明は急成長したというわ。でも、多くの国は星晶の採掘権を巡って他国との関係は悪化の道をたどるばかり」

カノンノの説明を聞いたレイが指摘するとカノンノはうつむいて悲しそうな表情でそう答える。

「それだけじゃないの。星晶を得て大量消費国となった国は、星晶のない他の国や村を植民地化したり、労働を強いたりするんだよ。富める国と貧しい国の差は、開く一方なの……」

カノンノは悲しそうな声でそう言った後顔を上げる。

「アドリビトムは、これらによつて貧富の差が拡大した、貧しい土地の出身者ばかりなの。アンジュさんは、みんなの故郷を危機的状況から救うために、アドリビトムを立ち上げたのよ」

カノンノは明るい声でそう言い、それにアンジュもふふつと微笑んだ。

「お帰りなさいませ、お嬢様。お腹が空いたでしょう？ 食堂へどうぞ。シナモンロー



ルが焼けていますよ」

「道理でいい匂いがすると思った！」

出迎えてきたロックスの言葉にカノンノが嬉しそうに笑い、ロックスもにこりと微笑んだ後カイ達に目を向ける。

「皆様もどうぞ」

「ね、二人も一緒に食べよう」

カノンノはそう言って二人を引つ張り、食堂へと向かう。

「おいカノンノ。先食ってるぜー」

昼寝して一緒に船に入ってきたはずのリッドが既にシナモンロールをがつつと食べており、隣のフアラがもう、と声を漏らしていた。その横ではマルタが満面の笑みで Emil に「はい、あくん」とやっており、Emil は顔を真っ赤にして慌てていた。

「さあ、お嬢様もお二人もどうぞ」

「スゴイいい匂い！ うん、美味しい！」

ロックスが促し、カノンノは我慢できずにシナモンロールにかぶりつく。

「お嬢様。ちゃんと食べる前に “いただきます” を言わないといけませんよ」

「あ……はい。ほら、カイとレイも両手を合わせて」

ロックスが注意するとカノンノは素直に頷き、両隣に座らせたカイとレイに促し二人

もカノンノにならつて両手を合わせる。

「いただきます」

「いただきます」

「はい。食べ物には感謝をしてから食べなくては、ですよ」

三人のいただきますを聞いたロックスは満足そうに微笑み、その後クレアを見る。

「クレア様、どうしましたか？ 食欲がないようですが……」

「ごめんなさい。故郷のヘーゼル村の事が気になって……」

「ああ……でもヴェイグ様が頑張ってくれているじゃないですか。アドリビトムのみんなも」

「そうですね……」

クレアを元気づけようとロックスがそう言うが、クレアは浮かない様子のまま食堂を出ていった。

「クレアは、故郷の何が気になっているんだ？」

「ヘーゼル村の方々が、無事に暮らしているかどうか、心配でならないですよ」

「ヘーゼル村は今、ウリズン帝国に占拠されていて……住民は星晶の採掘労働を強いられるの」

「ああ。星晶があるとされる小さな国や村は、力のある大国にそれらを搾取されるがま

ま、とさつき……」

カイの疑問の声にロックスが答え、カノンノが続けるとレイがさつき話していたことを思い出す。

「うん。クレアの故郷、ヘーゼル村もそうなの。ヘーゼル村の大人達は採掘だけを強いられるから、必要な物資や食料を自分達で生産する事が出来ないの。だからヴェイグさん、クレアやアニーはここで物資を集めて送っているのよ」

「なるほど……」

カノンノの言葉にカイはこくと頷いた。

「ロックス！ おやつが出来てるって！」

「あ、シング様にカイウス様。申し訳ありません、お呼びするのを忘れていました」

「別にいいって。さ、コハク、座ろう」

「うん」

と、そこにシングとコハク、カイウスにルビア、そしてアニーがやってきて席に座る。

「ロックスさん、飲み物のお代わりを貰いたい」

「ああ、レイ様。少々お待ちください……レイ様はミルクがお好きでしたね」

「分かっているのか？」

「コンシエルジュとして、皆様の好みを把握するのは当然です。はい、お待たせいたしましたま

した」

「ありがとう」

レイからのお代わり注文にロックスは頷いてミルクを出し、レイのコップに注いでいく。そして注ぎ終えてレイにコップを差し出すと彼女はお礼を言つてミルクを飲み始める。

「……」

「カイウス、何を見てるの？」

「はあっ!？」

と、ルビアがカイウスをジト目で見ながらそう言い、カイウスが驚いたように叫ぶ。

「さつき、レイさんの胸見てなかった？」

「はあ!？ 言いがかりだろそんなの!？」

「そんな事言うところが怪しい!？」

「ふ、二人とも落ち着いて……」

ルビアの言葉にカイウスが叫ぶとルビアも言い返し、コハクがシナモンロール——何か茶色い物体がついている——をお皿に置いて二人の仲裁を始める。

「そもそも! レイさんもレイさんよ! お腹なんか出して、そんな格好してたら危ないじゃないの!？」

ルビアはびしつとレイを指差して叫ぶ。レイは現在ピツポ曰く歩兵隊獵兵シリーズの防具を身につけており、その身体部分は腕は肘から先を籠手で、足は膝から先を足防具で覆っているものの逆に二の腕や膝から上は丸出し。胴部分も丸出しで、胸当てがついているぐらい。一言で言えば胸が強調され、露出の多い格好になっている。と、レイは訳が分からないという様子で首を傾げる。

「アニーさんも似たような服ではないか？」

「ぶっ!？」

突然話を振られ、アニーは飲んでいたジュースを嘔き出してごほつごほつと咳き込む。その顔は咳き込んで苦しいのとは明らかに別の意味で赤くなっていた。

「レッツレッツレイさんっ!?! ああ、別に私は、その!?!」

アニーは真つ赤な顔で慌てて何か弁解を行おうとしており、カイはそれをちらりと見て立ち上がった。ちなみにカイは現在は籠手と足防具はレイと同じものだがサバイバルに適したオーバーオールにゴーグルを使っている。曰く「鎧は動きづらい」そうだ。

「ご馳走様」

「あ、私もご馳走様、ロックス」

カイが立ち上がるのに少し遅れてカノンも立ち上がり、自分のお皿を片づけると食堂を出ていき、ホールへとやってくる。

「アドリビトムってギルドは、ここで間違いないかい？」

と、それとほぼ同時に船内に二人の女性——一人は赤い髪をツインテールにし、気が強そうな雰囲気を見せる女性。もう一人はピンク色の髪を寝癖みたいにぼさぼさにした、童顔の女性だ——が入ってきてツインテールの女性がそう尋ねてきた。

「はい。何か依頼でしょうか？」

「いや、あたしらは先日ルバーブ連山を村人全員が越えるのに協力してもらったペカン村の者さ。改めて礼を言わせてもらおうよ。みんなを助けてくれてありがとう」

「ああ、ペカン村の方なのね。みんな、新天地で落ち着けた？」

アンジユの笑顔での問いかけにツインテールの女性はそう返して頭を下げ、それを聞いたアンジユは嬉しそうな笑顔を浮かべて頷く。

「ルバーブ連山？」

「ああ、あなた達と出会った時に私がやってた仕事だよ。ペカン村の人が安全に山越えできるようにしてたの。その人達だよ」

そこに居合わせたカイの言葉にカノンノが説明した。

「新しい村の設立は、なんとかやってるわ」

と、次に童顔の女性が口を開く。

「元の土地は、ウリズン帝国に星晶を採り尽されて、作物も育たないし。新しい土地で

やっていくしかないもんね」

「んで、今日は報酬の件で話があつてき。その……」

童顔の女性に続いてツインテールの女性が言いにくそうに口をもごもごとさせる。

「単刀直入に言つちやえば、お金がないってことなのよね」

「村の人々が新しい生活を始めるために、色々資金が必要で……報酬の支払いをもう少し待ってもらえないかい？」

童顔の女性のやけにあつさりした言葉と対照的にツインテールの女性は申し訳なさそうにそう言う。と、童顔の女性が一步前に出た。

「で、提案なんだけど、あなた、この天才を雇わない？」

「え？」

「ここって設備も良さそうだし！ 私の研究もはかどりそう！ 私、役に立つと思うわよ♪ で、働いて返しちゃう☆ グッフ、どう？」

「待ちなよ。それはあたしも考えたけど、村のみんなをほっとくわけにも……」

童顔の女性がそう言うがツインテールの女性はその女性の肩を掴んで首を横に振る。とアンジユはふふつと微笑んだ。

「大丈夫よ。この船で、すぐに戻る事は出来るから。それに、世界中から物資を集められるし。ここみんなも、そうやってそれぞれの故郷を助けているから」

「そうなのかい？」

「ええ。あなた達が持つ経験や特技での活躍を期待します」

「じゃ、決まり〜！」

アンジュの言葉に童顔の女性が明るい声を上げ、ツインテールの女性を見る。

「言ってみるもんねえ。ねえ、ナナリー？」

「……ありがとう、リーダーさん」

ツインテールの女性はアンジュにお礼を言った後、カイ達の方を向いた。

「そういうわけで、これから世話になるよ。よろしく。あたしはナナリー・フレッチ。家事と弓の使いならお手の物さ」

「ハイハイ、ヨロシク〜。私は、ハロルド・ベルセリオス。大天才科学者よ♪」

「カイ」

「カノン・グラスバレーです」

ツインテールの女性——ナナリーと童顔の女性——ハロルドの自己紹介を受け、カイとカノンも名乗る。

「ちようど良かった！ 人手は、もつと必要だと思ってたの。それじゃあ、これから困った人々のためにしつかり働いてね」

「これからよろしくね、ナナリーさん。ハロルドさん」



「ああ」

「んじや、研究室覗いてくるわ。グフフ」

「じゃあ空いてる部屋を教えるね。ついてきて」

カノンノの笑顔でのあいさつにナナリーは頷き、ハロルドは早速研究室を覗きにく。そしてナナリーはアンジュから空いている部屋へと連れていかれる。

「また新しい方が入られたんですか。いつそう賑やかになりますね」

「あ、ロックス。どうしたの？」

と、そこにロックスが現れてそれぞれの行く場所に消えていったナナリーとハロルドを見ながらふふつと微笑む。それにカノンノが反応するとロックスは何枚かの紙の束をカノンノに見せた。

「お嬢様がクエストに行っている間に街でスケッチブックを買っておいたのを、渡しておこうかと思ひまして。そろそろ無くなる頃でしたよね？」

「ありがとうございます！ ロックス！ 大事にしまっておかなくちゃ！」

ロックスから渡されたスケッチブックを抱きしめてカノンノは走っていき、カイはそれを見送ってからロックスに目を向ける。

「カノンノは絵を描くのか？」

「はい。時間がある時はいつも、絵を描いています。もう、小さい頃からずっとなんです

……」

「小さい頃から？」

「ええ。お嬢様が赤ん坊の頃から一緒なんです」

ロックスの言葉尻にカイが聞き返すとロックスは昔を懐かしむように微笑みながら頷く。

「色々、事情があつて……お嬢様を引き取り、育てています。僕に親の役が務まつているか、それに、お嬢様をしつかり育てられているか、不安ですけど……でも、お嬢様を素敵なレディに育ててあげなくては……」

ロックスは不安げながらも力強さを垣間見せる笑みを見せながら、ごそごそとさつきスケッチブックを入れていた袋を動かす。と、その変な感触に気がついたのか袋の中を覗き込んだ。

「あつ、しまった!! 絵筆も渡すんだつた!」

「ロックスー! シナモンロールお代わりねえのかー!?!」

どうやら絵筆を渡し忘れたらしく、しかしそこにリッドからお代わりの催促。ロックスはあわわと絵筆と食堂への道を何回か見回した後カイにすまなそうな目を見せる。

「カイ様、すみません。お嬢様に絵筆を渡してきてくれませんか? いつも、お嬢様は操舵室にいますから」

「分かった」

「それじゃあ、お願いしますね。リッド様、すぐに参りますので！」

ロックスはそう言つて食堂へと文字通り飛んでいき、カイは操舵室へと向かった。操舵室ではカノンノがスケッチブックを持ちながら外の景色を眺めている。

「カノンノ」

「ん？……あ、カイ。どうしたの？」

「ロックスから」

カノンノはカイの顔を見て首を傾げ、カイはそう言つて絵筆を渡す。

「新しい絵筆だ！　ありがとう！」

そう言つてカノンノは笑顔を見せ、カイは頬をかきながら微笑み返した。

「絵を描くのは好きなのか？」

「ロックスから聞いたの？　好きだけど……独学だから上手じゃないよ？」

カノンノは照れくさそうにスケッチブックに顔を隠しながらそう言い、スケッチブックを広げる。そこには色々、よく分からない光景が描かれていた。

「こんな光景、見たことある？」

「ない」

「そっかあ……記憶の手がかりになるかと思つただけど……」

カノンノの問いかけにカイは即答し、カノンノは残念そうにそう呟く。

「どこなんだ？」

「私もね、この風景を実際に見たことないんだ」

「？」

突然の告白にカイは首を傾げる。

「スケッチブックの白い紙を見てるとね、たまに見えてくるんだ。色んな風景が。その見えた風景を筆でなぞって、出来たのがこれらの絵なの……どうしてだかは分からない。でも、見えるんだ。他の人にも見せたけど、誰もこの風景を知らない。」

カノンノはそこまで呟くと少しうつむく。

「それに、作り話でしよって笑われちゃうの」

「本当のことなのか？」

「えっ!？」

カノンノの少し笑いながらの言葉にカイは平然と聞き返し、カノンノは驚いたように顔を上げた後、はつとなると恥ずかしそうにうつむく。

「ご、ごめんね。信じられたことあんまりなくて……その……」

カノンノは掠れるような声で呟き、恥ずかしそうに上目遣いでカイを見る。

「あり、がとう」

「どういたしまして」

彼女のお礼の言葉にカイもそう返しておく。

「この船でさ、色んなところを旅して、これらの風景に出会えたら……もし出会えたら、どうして私に知らない風景が見えるのか、その理由が分かるかもしれない……それにね、＼知らないきやいけない＼ って思いもあるんだ……見えた風景は、綺麗なものだけじゃないの。怖い、この世の終わりみたいな風景も見えたから……」

「……」

カノンノはそう眩き、もう一度カイに微笑んだ。

「本当に、信じてくれてありがとね。カイ」

「ああ……じゃ、俺は戻る。もっかいクレスか、今度は他の奴に模擬戦頼んでみる」

「ふふ、頑張つてね」

そう言つてホールに行こうとするカイにカノンノは微笑みながらそう返した。そしてホールへと降りるとクレアがヴェイグと共にミントを連れ、アンジュに何かをお願いしているのを見つける。

「どうしたんだ、クレアさん」

「あ、カイさん。ヘーゼル村に物資を届けてもらおうと思ひまして……」

「俺と一緒に、ヘーゼル村に行つてくれる人をこれから探すところだ。今はミントが同

行してくれることになってるが……」

「本当はクレスさんにも同行してもらいたかったんですが、さっきのカイさんとの模擬戦でのダメージが思った以上に大きいらしくて……」

カイが声をかけ、クレアが説明するとヴェイグもそう言い、ミントもさっきの模擬戦を思い出す。

「じゃあ俺が行くよ」

「そうか……ありがとう」

「ん？ どうしたの？」

同行の申し出にヴェイグはお礼を言い、するとそこにおやつを食べ終えたらしいシングが声をかけた。

「クレアさんのいつもの依頼よ」

「ああ、ヘーゼル村の？ 誰が行くの？」

アンジュからそれを聞いただけで分かったらしく、シングが問うとヴェイグはミントとカイを見た。

「今は俺とミント、あとカイが同行するようになってる」

「じゃあ俺も行くよ。腹ごなしになるしき！」

「ふふ、あつという間に決まったね」

ヴェイグから同行メンバーを聞いたシングは手を上げて同行に立候補し、アンジュはふふつと笑ってそう言う。

「じゃあ、もう一度説明するね。今回行ってもらうのはコンフェイト大森林。そこで、ヘーゼル村の人と接触し、必要な物資を届けることが仕事よ。ヘーゼル村の人は、ヴェイグ君が知ってるから」

「ああ……」

「それじゃあ、よろしくね」

アンジュが説明し、ヴェイグに顔を向けると彼は頷き、アンジュは微笑みながらよろしくねと言う。

「よし！ ガンドコ行こう！」

そしてシングが右腕を天井に突き上げやる気満々という様子でそう叫んだ。

## 第四話 暴風との戦い

「ウリズン帝国のやつら、どれだけ星晶ホスチアを奪い取るつもりなんだ！」

コンフェイト大森林を進んでいく中でシングが声を荒げる。今彼らはヴェイグとクレア、アニーの故郷であるヘーゼル村へと物資を届けに行っており、そのヘーゼル村はウリズン帝国の植民地にされ星晶を奪われているのだ。

「そういえば、シングさんの故郷もでしたね……」

「ああ。あいつら、突然村に押しかけてきたんだ。村を封鎖した上に、星晶を採り尽くすまで男の人はみんな働かされて……残された女の人や子供だけじゃ狩りが出来ないから、食べ物も足りなくなっただんだ」

シングの怒りの声を聞いたミントの悲しげな声にシングは悔しそうにそう呟く。

「星晶を失った土地は痩せ衰えて、森からは動物がいなくなっただよ……俺の村で有名だった果物もさっぱり採れなくなっちゃったし……」

「ヘーゼル村も、同じ運命をたどる……ということか」

シングの悔しそうな言葉にヴェイグは静かな声で呟く。

「えっ!？」



それにシングは慌ててヴェイグの方を向いて首を横に振った。

「べ、別にそういう意味で言ったんじゃない……」

「分かってる」

しかしシングの言葉にヴェイグは冷静に返し、「仲間が先で待っている」と言つて先へと進んでいく。シング達もその後を急いで追いかけて、シングはにつと微笑んだ。

「よし、ガンドコ行こう！」

「ガンドコ、ですか？」

その言葉にミントは首を傾げ、シングはああと頷いてガッツポーズを取る。

「うん！　『ガンガン、どこまでも』で『ガンドコ』さー」

シングの元気な声にミントはふふつと優しげに微笑んだ。

「ヴェイグ」

「どうした？」

その声を後ろで聞きながら、カイがぼつりとヴェイグに問いかける。

「ハーゼル村ってどんなところなんだ？」

「……資源豊かで、小さいがあなたたかな村だ。近くの清流から水を引いているため、家庭料理は、どこのものも旨い。素材の味が締まり、引き立つ」

「へえ、美味しそうだなあ」

カイとヴェイグの話にシングが割り込んだ。

「ねえ、何か名物料理みたいなものってあるの？」

「名物？……そうだな……」

シングの問いかけにヴェイグは腕を組んでうつむき、考える。

「クレアさんから聞いたことがあります。ヴェイグさんはヘーゼル村のピーチパイに目がないそうですね」

「ピ……ピーチパイは別に名物料理じゃない……近所で馴染みのおばさんが親切で持ってきてくれるだけだ」

と、そこにミントがそう言うのとヴェイグは珍しく頬を赤く染めながら照れくさそうに呟いた。

「ヴェイグのために、わざわざピーチパイを作ってくれる人がいるのか？」

「すごいやー！」

ヴェイグの言葉にカイが呟くとシングはすごいやと言って目を輝かせる。

「マダムキラーなんだね、ヴェイグ！」

「違うー！」

その言葉をヴェイグは若干怒鳴るような勢いで否定、ミントも苦笑を漏らし、カイは首を傾げる。

「まだむきらーってなんだ？」

「き、気にしなくて構わないかと……」

その純粋な疑問に、ミントは頬を引きつかせながら言葉を濁した。

「絶氷刃！」

少し進み、魔物が出現するエリアに差し掛かると一斉に襲い掛かってくる魔物達。その一体、プチプリにヴェイグは大剣を振りかぶり、大剣に己の持つ特殊能力——フォルスを力を含めて振り下ろす。その時剣に込められたフォルスの力が解放され、プチプリを一瞬で氷に閉じ込めた。

「曼珠沙華！」

一方カイは苦無に炎のmanaを含めて投げ、その三本の苦無がマンドロテンに突き刺さると同時に発火、マンドロテンに炎に包み込んだ。

「海連刃！」

そしてシングがチュンチュン目掛けて鋭い斬り上げを叩き込み、その身体を両断する。これで襲ってきた敵は全滅だ。

「皆さん、お怪我はありませんか？」

にこつ、と優しく微笑んでミントが尋ね、シングはにと笑った。

「俺は平気だよ……ところでさ」

彼はそう言い、ヴェイグを見る。

「ねえ、ヴェイグ。聞いていいかな？」

「なんだ？」

「ヘーゼル村を支配している帝国の使者は、どんな奴なの？」

「どうしてそんな事聞くんだ？」

シングの問いかけにカイが聞き返し、シングは胸糞悪そうな表情を見せた。

「ちよつとさ……俺の故郷に来たのは、ものすつごい悪い奴でさ。村一番の力自慢がかかっていつても汗一つかかずにあっさり倒してしまいうくらい強い騎士だったんだ……紫色の髪、変な喋り方をする奴だったけど」

「！」

その言葉にヴェイグは反応する。

「まさか、〃サレ〃か!？」

「じゃあ、ヘーゼル村には今、俺の村と同じ奴が来てるってこと!？」

「……そんなに強いのか？」

ヴェイグの言葉にシングも驚いたように聞き返すとカイが声を出す。

「サレという騎士の悪行は有名です……彼は、嵐を起こす力を持っていて、命令に従わない村をいくつも破壊しているとか……」

「俺の村も、初めは星晶を採られないように抵抗したけど、土地も村の人も犠牲になるから大人しく従うしかなかったんだ……」

ミントの悲しげな声にシングは悔しそうに拳を握りしめて呟き、地団駄を踏む。

「くそっ！ 俺にもつと力があればっ！！ 村のみんなも、星晶も守る事が出来たのに！」  
悔しそうな声が響き、ヴェイグもミントも何も言えなかった。しかし、シングはやがて落ち着いたように笑う。

「ごめん……行こう」

「……大丈夫か？」

「ああ。俺が皆を守るように強くなればいいんだ！」

「はい！ 行きましょう。ヘーゼル村の方達が待っています！」

シングの言葉にミントが強く頷き、彼らはまた歩き出した。

「はあつ、はあつ、はあつ……」

コンフェイト大森林の奥地。桃色の髪を短く整えた少女は何かから逃げるようにこ

こを息を切らしながら走っていた。しかしその道の先にそびえたつのは崖のように高い段差。まるで壁のようにそびえ立っており登って越える事も難しく、少女は慌てたように左右を見回す。

「残念、この道はハズレなんだよ。ハ・ズ・レ」

と、少女の後ろからそんな相手を舐めまわすような声が聞こえ、少女は振り向くと自分の身を守るように両腕を前に回す。

「小うるさいお供の目の届かないところに引つ張り出すのは苦勞したよ」

そして少女の前に青い軍服に身を包んだ、紫色の髪 of 男性が悠々と進み出た。

「さあ、僕と来てくれるかな？ ガルパンゾ国王女、エステリーゼ様。キミさえ来てくれれば、ガルパンゾ国が保有する多大な星晶も帝国のものだ」

男性はそこまで言うのと嫌らしくにやあと微笑んだ。

「わかるよね？ 近々、キミの国とは戦争になる。でも、キミが人質になって、ガルパンゾ国の星晶を渡してもらえれば、多くの人は血を流さずに済む、ガルパンゾ国の命は今、キミの手の中にある。どう？」

その瞬間、男性の笑みが最上級に歪んだ。

「命って重いのかな？」

その笑みにエステルは怯えるように数歩下がる、と彼女は目を見開いた。男性目掛け

て一つ、何かが凄まじいスピードで飛んできている。  
「！」

と、男性は直前でそれに気づき、腰に提げていたレイピアを引き抜いて振り向きながら振るい、その何かを弾き飛ばす。キーンツという金属音が響いた。

「サレ!!!」

「やあ、ヴェイグ。お久しぶり」

背中から大剣を引き抜き男性に向けながら怒号を上げるヴェイグ。それに男性——サレはくくつと笑った。

「キミの事はよく覚えているよ。僕に歯向かい、村を捨てて逃げたドブネズミくん」  
「くつ……」

「逃げなければ、僕の玩具になれていたのになあ……残念だ。でも、再会できて嬉しいよ。ここで君をズタズタに弄んでやれるんだもの」

サレはそこまで言うと言いとレイピアの切っ先をヴェイグに向ける。その瞳には冷酷な中に何か怒りのようなものが宿っていた。

「僕に剣を向け、傷をつけた者なんてキミが初めてだからね!!」

そう叫んだ瞬間、彼の周囲に風のマナが集中した。

「散れ！」

カイが叫び、同時にヴェイグが右に、シングが左に、カイとミントが後ろに下がる。

「ウインドエツジ！」

直後、四人の中央を風の刃が斬り刻んだ。

「へえ、勘がいいね」

「はあああああつ！」

サレはくすくすと笑い、斬りかかってきたヴェイグの剣をいなし、レイピアの切っ先を彼に向ける。

「今度は逃がさないよ」

そう言いながら放たれる連続突き。それをヴェイグはどうか剣で受けようとするが数発受け損ない、斬られた頬から鮮血が吹き出す。

「空裂閃！」

ヴェイグの援護と言わんばかりにシングは叫び、剣を突き出す。その切っ先から刃の形をした光線が放たれ、サレはほうと微笑んでそれをかわす。その合間にも彼の口からは呪文が詠唱されていた。

「ウインドエツジ」

「ぐうつ!?!」

光線の反動で一瞬動けなくなっていたシングを襲う風の刃。いくつか盾で防いでい



たがやはり防ぎきれず、それを示すように身体から血が流れていた。

「大丈夫か？」

「あ、は、はい……」

ヴェイグとシングが気を引いている隙にカイとミントがサレに襲われそうになっていた少女に駆け寄り、カイが声をかけると少女はこくと頷く。

「よし。ミントさん、この人の護衛をしながら俺達の援護を」

「はい！」

カイの指示にミントは頷き、それからカイは少女に微笑みかける。

「もう大丈夫だ。この人から離れないでくれ」

「あ、は、はいっ！」

カイの微笑での言葉に少女はこくと頷き、カイはそれを見て一つ頷いた後ブロンズソードを抜いてヴェイグとシングの援護に向かった。

「連塵裂氷撃!!」

連続突きから冷気の斬撃に繋げる奥義——連塵裂氷撃。その冷気にサレが僅かに怯んだ瞬間シングがヴェイグの前に出た。

「獅子戦吼!!」

「ぐううっ!？」

獅子の鬨気を叩きつけ、サレを思いつきり吹き飛ばし、地面に叩きつける。

「どうだ、サレ！　これはお前に滅茶苦茶にされた村の皆の分だ！」

「ふ、ふふふふふ……」

シングは剣をサレに向けながら叫び、それを聞いたサレはふふふと笑い出す。それにヴェイグとシングは訳が分からぬ様子で警戒を強め、サレはゆらりと立ち上がった。

「なかなかやるじゃないか。痛かったよ……」

サレはふふふと不気味に笑いながら呟き、二人は油断せずに剣を構える。

「これは僕からの——」

「あ……」

「!？」

サレが呟いた瞬間、シングの右肩から血が噴き出、ヴェイグは驚いた表情でシングを見る。

「——お礼さ」

「っ……」

「シング!!!」

笑みを歪ませながらサレは呟く。彼は指一本動かさずに、さらに二人に詠唱を気取られることなくやって見せ、シングに攻撃を仕掛けたのだ。そしてヴェイグがシングの方

に意識を向けた隙を狙ってサレは再びレイピアを手にヴェイグ達へと襲い掛かろうと地面を蹴る。

「曼珠沙華！」

その直前、カイがサレの前の地面に炎のmanaを込めた苦無を投げ、サレの足を止める。

「閃走牙！」

そしてさらに刀を腰に構えて突進、サレもレイピアで刀を受け止め、鏢迫り合いへと持ち込んだ。

「ミント！ 早く回復魔術を！」

「あ、は、はいっ！」

ヴェイグが叫び、目の前で仲間が重傷を負わされたミントは我に返ると詠唱を開始、ヴェイグはすぐに大剣を構え直してサレに突っ込んだ。それを足音で聞き取ったカイは後ろに宙返りをしながら左手に苦無を握る。

「曼珠沙華！」

「うっ!?!」

「瞬連塵！」

空中で発火しサレに襲い掛かる苦無。それにサレは僅かに怯みつつヴェイグの大剣とは思えない速さの三連突きを弾く。その三つめの突きを弾きながらサレはヴェイグ

の横に回った。

「もらった!」

にやあ、と笑ってレイピアを下げ、その切っ先の狙いを定める。

「デイープミスト!」

「くっ!?!」

しかしレイピアを突き出そうとした直前彼の視界を霧が覆い、サレは苦し紛れにレイピアを突き出すが手応えはなく、サレはチツと舌打ちを叩くとこのうっとうしい霧を吹き飛ばそうと風属性魔術の詠唱を始める。

「ぐあっ!?!」

その時彼の身体を走る痛み、それと共にサレの華奢に見える身体が空中に吹き飛んだ。

「っ!?!」

サレの目に、さつき思い切り傷つけたはずの少年——シングの姿が写る。その目には自分に対する怯えなど微塵も写っていないかった。

「飛燕翔旋!!」

シングは空中を舞うように回転しながら連続斬りを見舞い、最後に思い切り斬りつけてサレを地面に叩き落とす。

「絶空裂氷撃!!」

「ぐああああっ!!」

と、そこにヴェイグが自らのフォルスの力を込めた大剣を斬り上げながら力を解放、無数の氷柱がサレを襲い足を氷漬けにする。

「う、動けないっ!!」

「今だ、カイ!」

「いっけー!!」

動きが封じられたサレが驚愕の声を上げ、ヴェイグが叫ぶとシングも声を上げる。それを聞いたカイがサレ目掛けて突進、それを見たミントも素早く詠唱を完了させた。

「刃に更なる力を、シャー・プネス!」

ミントの補助魔術がカイに力を与え、カイはサレ目掛けて突進突きの後左右に刀を薙ぐ。

「斬魔——」

「ぐふっ!!」

さらに右足での後ろ回し蹴りに繋げ、その間に左手に闇のmanaを集中させる。

「——滅殺剣!!!」

「ぐああああああっ!!!」

そして回転の勢いをも利用した掌底をぶつけると同時に闇のマナを解放、その爆発が氷を砕いてサレを吹き飛ばし、サレの身体は近くにあつた木の幹に激突。サレはがふつと息を吐いて膝をついた。

「う、ウソだろう？……僕が、本気で……こんな奴に……」

サレは膝をつき、苦しげに息を吐きながら声を漏らす。

「これまで僕は、ずっと人の心をバカにして生きてきた……軽く遊んでやればいいと思っていた。でも、キミ達との戦いで心の大切さつてヤツを学ばされたよ。ああ、今まで大きな間違いを犯していた」

サレはそう言うとおくくと笑う。

「よく、わかったよ。心の力は強くて、大きい。そして……実に不愉快なものだと！」  
そこまで言って彼は立ち上がり、歪んだ笑みをヴェイグ達に向けた。

「だから……次は本気で叩き潰す。キミ達の……ヒトの心をね！」

「逃がすか!!」

サレがそう叫ぶとシングは逃がさないと地面を蹴るがサレが指を鳴らすと共に嵐が彼の身体を隠すように吹き荒れ、その嵐が止んだ時彼の姿は消え去っていた。

「……もう、大丈夫ですよ」

「ありがとうございます……」

しかしどうあれサレは去った。そう思ったミントはサレに襲われそうになっていた少女に安心するように声をかけ、少女はミントにお礼を言った後カイ達の方を向いた。

「あ、あの。助けていただいてありがとうございます。私、エステリーゼ・シデス・ヒュラッセインと言います。エステルって呼んでください」

「ああ」

少女——エステルは柔らかく微笑みながらそう言い、カイも短く頷く。

「ん？」

と、後ろの方から足音が聞こえ、シングが振り返る。

「エステル！ 怪我はない？」

「大丈夫です。この方達に助けていただきました」

慌てて駆け寄ってきた茶髪でどこか猫っぽい少女の焦った声にエステルはそう言い、それに全身黒ずくめの、黒髪ロングヘアの青年が頷いた。

「そうか。あの変な口調の奴はどうした？」

「駐在しているヘーゼル村へ戻ったのだろう……」

青年の言葉にヴェイグは眩き、苦虫を噛み潰したような表情を見せる。

「この一件で、サレの監視が厳しくなって、俺の仲間も外には出られない状態になっているかもしれない」

「そっか……じゃあどうしよっか？」

「なら今日は引き返そう」

「ねえ君、エステルって言ったっけ？」

「は、はい！」

ヴェイグの言葉にシングが腕組みをするとカイが引き返そうという案を出し、シングがエステルを呼ぶ。

「俺達はアドリビトムっていうギルドの者なだけどさ。俺達の船で話を聞かせてもらっていいかな？　なんで君がサレに狙われてたのか、とか」

「……ユーリ、リタ。どうします？」

「アドリビトム？……」

シングの言葉にエステルが尋ねると黒髪の青年が、その名前に聞き覚えがあるというように考え始め、やがれ合点がいったように頷いた。

「ああ、あの妙な船を拠点にしてるギルドか。ま、お言葉に甘えようぜ。この森で迷つてから、まともに食えてないもんな」

「じゃあ、一度戻るぞ」

ユーリの言葉にヴェイグはそう返し、彼らは一度森を出てバンエルティア号へと戻っていった。そして船に戻り、アンジユに事情を説明する。



「ヘーゼル村に物資を届けられなくて残念だったね。でも、今回はサレがいたんだもん。仕方ないよ。物資を届けるのはまたの機会にしましょう」

「エステルさん達は食堂の隣の部屋へ案内しました」

「じゃあ、挨拶しないとね。ガルパンゾ国の御姫様だったら、あんな森にいたのも事情がありそうだし」

「ガルパンゾ国？」

ミントの説明にアンジュがそう言うときカイは首を傾げる。

「この世界の大国の一つで、近々ウリズン帝国と戦争が起きるって噂があったんだけど……そんな中王女様が国の外にいるのも不思議ね……興味があるの？」

「……なんとなく」

「ふふ、ならあなたもいらっしやい。一緒に話を聞きましょう」

アンジュの説明にカイがそう曖昧に返すと彼女はふふつと笑ってそう言い、カイを連れだつてミントがエステル達を案内した部屋に向かうとその部屋の扉を三回ノックする。

「入っていいかしら？」

「あ、はい。どうぞ！」

まず最初にノックをして礼儀正しく入っていいかを聞き、それに部屋の中からエステ

ルの声が返ってくる。

「人の部屋に入る時は、こうやってまず入っていいかを聞くのがマナーよ？」

「へえ……」

お母さんが子供に社会のルールを教えるようなアンジユの言葉にカイはへえと返し、アンジユは部屋に入る。

「初めまして。このギルド、アドリビトムのリーダーをしているアンジユ・セレーナです」

「も、申し遅れました。私は、ガルパンゾ国の王女エステルリーゼ。エステルって呼んでください」

「リタ・モルディオよ」

「ユーリ・ローウエルだ。ガルパンゾ国のギルドの者で、今はこのお姫様に旅の護衛として雇われている」

アンジユのペコりと頭を下げての礼儀正しい挨拶に椅子に座っていたエステルも慌てて立ち上がると名前を名乗り、茶髪の少女——リタと黒髪の青年——ユーリも名前を名乗る。それからエステルはカイを見た。

「ええと、先程ミントさんから伺いましたが……あなたの名は、カイでしたね？ 助けていただいで、ありがとうございます」

「えっと……どういたしまして？」

「また後程ヴェイグさんとシングさんにも改めてお礼に伺いますので、よろしくお伝えください」

エステルは改めて自分を助けてくれた一人であるカイにお礼を言い、カイが首を傾げながら返すとエステルはふんわりとした礼儀正しい様子でそう続ける。それにアンジュはふふつと微笑んだ後口を開いた。

「さて、もしよかつたら話を聞いてもいいかしら？……まず、何故あなたのような大国の王女がギルドを雇って旅なんてしているの？」

「コンフェイト大森林には、ガルパンゾ国の星晶採掘地があるんです。現在、ウリズン帝国とその土地をめぐる緊張状態なんです……その採掘地で今、変な現象が起こっているという話を聞いたんです」

「変な現象？」

アンジュの問いかけにエステルは素直にそう答え、その変な現象という用語にアンジュが食いつく。

「採掘がおこなわれた土地の生物が、変化してるって話よ」

それにリタが説明を始めた。

「どんな変化が起こってるかってのは、明確に分かってるわけじゃないけど、採掘者の間

でそんな話が上がつてて、それを聞いた学者が「土地にある星晶を取り過ぎたせいではないか」って仮説を立てて、騒ぎ始めたのよ」

そこまで言い、彼女は肩をすくめる。

「でも、それに対して国の評議会は何も調査をせず、ついには世間を騒がせた罪で学者まで逮捕、つてわけ」

「その話を知って、私、本当のことが知りたくて……国が動かないのなら、まず自分で調査をしようと国を出たんです」

「そこまでは良かったんだが、森で迷うわ、あのサレって奴にエステルがさらわれるわだな」

「サレの所属するウリズン帝国とあなたのガルパンゾ国は、今星晶を巡って緊張状態にあるものね……」

リタの言葉にエステルがそう言うのとユーリは椅子に座って天井を仰ぎ見ながら続け、アンジュもうんうんと頷く。

「コンフェイト大森林の辺りは、様々な国が星晶採掘に関わっていますし……早く、問題の採掘地へ急がないと」

「焦っては駄目。まず、あなた達には休養が必要よ」

エステルの言葉にアンジュはそう言い、それにエステルは「でも……」といたげな

視線を向ける。

「大丈夫だ」

突然カイが口を挟んだ。

「アンジュさんの言う通りになってくれれば、あんたがその採掘地に行く時に俺も同行する。だからゆつくり休んでくれ」

「……はい。なら、そうさせていただきます」

カイの言葉にエステルはようやく微笑んで頷き、部屋を出た後アンジュはふふっと笑った。

「ギルドのメンバーらしくなったわね？」

「何が？」

「依頼人を安心させる。こういう仕事をするにあたって必要な要素よ？」

「俺は思った事を言っただけなんだけど……」

「それならなお良し。さ、あなたもゆつくり休みなさい」

アンジュは嬉しそうに微笑みながらそう言い、カイに休むよう促す。それにカイはこくと頷いて船倉の自室——なおカノンノとレイが同室（カノンノは相部屋の人が出来て嬉しそうだったしカイとレイもお互い「別に構わない」の一言で相部屋が決定した）である——に戻っていく。そしてぶしゅ、という音と共に部屋のドアが開いた。

「「……………」」

その時空気が固まる。カノンノとレイはカイ達とは別の仕事帰りのシャワーでも浴びた後なのだろうか、髪や身体に少し水気が残っている状態で、ベッドの上に汚れた服を脱ぎ捨てて着替えており、カノンノはブラジャーとパンツのみ、さあ今から服を着ようという下着姿で、レイは私服として準備されたのだろうズボンこそはいているものの上はまだブラジャーをつけておらず豊満な胸は申し訳程度にタオルで隠されているくらいだった。カノンノの顔がどんどん赤く染まっていき、カイは真顔で動きを止め、レイは顔が赤くなっていくカノンノを不思議そうに見る。

「で……………出てってーっ!!」

ついに羞恥の限界になったカノンノが涙目に真っ赤な顔で怒鳴り、カイは反射的に部屋から出ていくと扉を閉める。

「なるほど。入ると言わずに入るとこうなるのか……………」

そしてさっきアンジュから教わった事を守らなかつた事による悪い結果をカイはきつちりと理解した。

## 第五話 生物変化現象調査

コンフエイト大森林。普段は静かなこの土地に現在は銃声や爆音が響いていた。

「ピーッ！」

この森に生息する小鳥型の魔物——チュンチュンが悲鳴を上げてバタバタと羽を飛ばたかせ、空へと逃げ出す。

「烈火閃！」

そんな凜とした声と共にヒュンツと風の切る音が聞こえ、そう思うとチュンチュンの身体が何かに貫かれさらにその貫いた何か——矢が爆発。チュンチュンの亡骸は力なく地面に落ち、爆発に、そのチュンチュンの横を飛んでいた別のチュンチュンが怯えたように動きを止める。

「蒼破アッ！」

そこを逃さずチュンチュンを襲う風の衝撃波。それがチュンチュンに激突、しかしその風の衝撃波を放った剣士は口元から牙を覗かせ、まるで獲物を見つけた肉食獣のような笑みを浮かべてチュンチュンに突進。さつき風の衝撃波を放つために左腕一本で振り上げた刀を両手で握り締めてチュンチュン目掛けて跳躍、返す刃の振り下ろしでチュ

ンチュンを一刀両断に斬り裂いた。そして勢いそのままに地面に華麗に着地し、左手でヒュンツと剣を振るい刃についたチュンチュンの血を払う。

「へえ。あんたなかなかやるじゃないか。お姫様に雇われてたつてのは伊達じゃなさそうだね」

「テメエこそ。俺の知り合いのおっさんに見習わせてえ腕前だぜ」

剣士——ユーリはいきなり自分を褒めてきた弓士——ナナリーに対し刀を肩に担ぎながら返し、ナナリーもふつと笑つて後ろを向く。

「んで、あつちの援護は行かなくていいのかい？」

「ま、問題ねえだろ……それより、チュンチュンの血を嗅ぎつけておいでなすつたぜ」

ナナリーの言葉にユーリは肩をすくめてそう言った後、再びさっきの獣の笑みを浮かべてそう返し、ナナリーも彼が見ている方を見ると背中の中の矢筒に右手を伸ばした。

「ウルフかい。こいつらはもうちよつと奥の方に生息してるんじゃないかっけ？」

「獲物を探しに偶然ここら辺まで来てた途中に血の匂いを嗅ぎつけて……つてとこじゃねえか？」

ナナリーの弓に矢をつがえながらの言葉にユーリは刀を二体のウルフに向けながら簡単な仮説を言つて地面を蹴り、彼が飛び出すと同時にナナリーの手から矢が放たれた。



ナナリーの言っていた、援護が必要じゃないかと言われていた二人。それはカイとレイだ。二人はマンドロテンやプチプリにすっかり囲まれてしまっていた。しかしそんな状況でもカイはむしろ楽しそうにブロンズソードを弄び、レイもふんと鼻を鳴らしてバスタードソードを構える。

「曼珠沙華!!」

「ブレイズバレット!!」

そしてカイが炎を纏った苦無を投げ、レイが左手に握ったスタンダードマグを左右に払いながら銃弾を乱射したのを合図にマンドロテンも毒を持つ棘を放ち、プチプリも飛びかかる。

「地裂斬!」

「閃空裂破!!」

しかしカイは大地を掬うように刀を振るって地の衝撃波を放ち、毒の棘や飛びかかって来たプチプリを弾き飛ばし、レイは飛び上がりながらの回転斬りの剣圧で毒の棘を弾き飛ばし飛びかかって来たプチプリを剣圧に巻き込んで巻き上げた後その一体を突き倒す。

そして直後カイは地面を勢いよく蹴って走り出し、その突進の勢いをプラスした斬撃でプチプリやマンドロテンを斬り倒しながら縦横無尽に魔物の群れの中を駆け巡り、レ

イはステップ移動以外はほとんどその場に足をとめながら魔物の攻撃を銃を収めて左手で構えた盾で防ぎながら剣を振るい相手を斬り倒していく。

「魔神空牙衝!!!」

「斬魔滅殺剣!!!」

そしてレイが地を這う衝撃波から相手を勢いよく貫く突きに繋げる奥義を、カイが刀を突き刺すような突進から刀の左右に薙ぎ払いさらに後ろ回し蹴りに繋げトドメに闇の力を込めた左掌底を叩きこむ奥義をそれぞれ別のマンドロテンに叩き込み、魔物の群れは全滅する。

「よし。ま、こんなもんだろ」

ユーリが辺りを見回し、充分に魔物が討伐できたことを確認してそう呟く。

「それじゃ、帰ろうかねえ」

ユーリの言葉にナナリーも弓を肩で担ぐようなポーズを取って返し、四人は森を出て行ってバンエルティア号へと戻っていった。

「アンドウ、トロワッ!」

「おっと、甘いね!」

「ひゃっ!?!」

その甲板ではエステルがクレスと剣の手合わせをしていた。が、エステルの剣はクレスの盾に防がれ、クレスがエステルの目の前に剣を寸止めするとエステルはひゃつと声を上げて後ろに倒れしりもちをつく。

「うう……ありがとうございます」

「どういたしました。でもエステルさん、結構筋はいいよ。前衛をずつとつていうのは今は難しいけど、後方支援しながら自分や後衛の仲間を守るくらいは出来る、それは保証するよ。あとは修行して鍛えていけばもつと強くなれるさ」

「あ、ありがとうございます！」

エステルは悔しそうに小さく唸ってクレスに手合わせのお礼を言うが、クレスが爽やかに微笑みながらそう彼女の剣を評価するとエステルは嬉しそうにぱあつと顔を輝かせた。

「よ、クレス。姫様のお守り頼んで悪かったな」

「あ、カイ、ユーリ、レイさんにナナリーさん。お帰りなさい」

「ユーリ！ お帰りなさい！」

ユーリの言葉にクレスとエステルがお帰りを言い、エステルはカイの方に歩いていく。

「あの、カイさん。アンジュさんに、コンフェイト大森林まで採掘地跡の調査に向かう依

頼を出したんですが……カイさんも一緒に行ってもらえませんか？」

「ああ、約束だったな」

「はい、お願いします。一緒にフィリアさんが調査に行ってくれることになってますので、あとはユーリにも……」

「ああ。悪いけど俺はパスだ……今エステルと一緒に外をうろついたら厄介な事になるかもしれないねえ」

「あ……分かりました」

エステルはカイとユーリにクエストの同行をお願いし、それにカイは頷くがユーリは首を横に振る。今彼はエステリーゼ王女誘拐犯の汚名を着せられており、エステルもそれは理解しているのか浮かない顔で頷いた。

「ねえ、エステルー！ コンフェイト大森林の調査の同行者をつのつてるってほんとー！？」

「あ、フアラさん。はい！」

「だったらリッドを連れていきなよ！ これでも猟師なんだから、森の中については詳しいよー！」

「………つたく。分かったよ」

笑顔でそう言うフアラの右手はリッドを掴んでおり、リッドも悪態をつくが今のフア

ラに逆らっても無駄だと理解しているのか割と素直に彼女らへの同行を決める。これでメンバーは全員決定、彼らはコンフェイト大森林へと向かう。

「ここも随分、動物が減ったなあ。狩りにはちょうどいい森だったのに」

森を少し歩いていると先頭を歩き、辺りを見回していたリッドが浮かない表情で呟く。

「そういえば、魔物は多いけれど、動物はあまり見かけませんでした」

「<sup>ホスチア</sup>星晶が採掘され始めてから、ですね。星晶は、生命の源であるマナを発します。だから、採掘される前は、この土地も生命に溢れていたんですが……」

「星晶がなくなつたせいでマナも無くなつてきた、ということか」

リッドの言葉にエステルがそう続け、フィリアが呟くとカイが結論を導く。

「すみません……」

「エステルが謝る事ねえよ。星晶採掘を命じたのはエステルじゃないんだろ？」

「はい。王女ですが、私に止める権限はなくて……」

それを聞いたエステルはしゅんとした様子を見せ、リッドが元気づけるが彼女はまだしゅんとしている。

「だから国を出たんじやないのか？」

「はい」

と、カイが疑問を持ったようにそう尋ね、エステルはこくんと頷く。

「まず、自分の目で生物が変化するという現象を確かめたくて、もしそれが本当なら、それをどうにかしたくて……」

「これから、できる事をやればいいんです。私達アドリビトムは、そうやって働いているのですから」

「そうだ。エステルはもう、立派なアドリビトムの一員なんだからな！」

「はい！」

エステルの言葉にフィリアが元気づけるように言い、リッドもそれを肯定するとエステルは「はい」と元気よく頷いた。それからまた森の中を歩いているとエステルが一つの方向を見て「あつ」と声を出した。

「ん？ この草がどうかしたのか？」

「あ、駄目ですっ！」

カイがその視線の先にある紫色のつる草に手を伸ばすとエステルが慌てて叫ぶ。

「そのつる草とそこの白い花は毒草なんです！」

「へえ、よく知ってるなあ。お姫様つてのは、そういうのも普通に勉強してるもんなのか

「？」

エステルの叫び声にカイはぴたりと手を止め、それを聞いたリッドがへえと感嘆の声を漏らす。

「いえ……そういうわけじゃ……ただ、私は本を読むのが好きなので……」

その言葉にエステルは照れたようにうつむき、恥ずかしそうに首を横に振って説明する。

「では、少し持って帰りましょう」

と、フィリアがたおやかな指でカイが採ろうとしていた紫色のつる草と白い花を採る。

「ちよつと待てよ。毒草だぞ？」

「ですが、毒性自体はそう高いものではありません」

リッドの言葉にフィリアは冷静に返す。

「それに注視すべきはその紫のつる草の汁……」

しかしその次に彼女の声の調子が変わった。

「高い揮発性を有し、おまけに葉の部分は化学反応を促進させる触媒になります。これがあれば、あの研究も……ウフフ……」

その言葉に何か危険性を感じたのかりッドが引く。

「フィリアも植物に詳しいんですね」

「そんな事……それに、私の場合は職業柄致し方なく……ですわ」

しかしエステルは平然とフィリアに問いかけ、それにフィリアはウフフと笑いながら返す。

「へえ……：：：：神官っていうのはそんなに大変な仕事なのか……」

「いや、職業とは関係ないだろ……絶対」

その言葉に以前彼女が教会に勤め神官をしていたと聞いていたカイが頷くとリッドが呆れ気味にツツコミを入れた。それからフィリアが紫のつる草の採取を終えてから、また彼らは先に進んでいく。と、リッドが何かに気づいて走り寄り、地面に膝をついた。

「どうしたんですか、リッド？」

「ん？ いや、ここに足跡があつてな……こりやウルフの足跡だ」

「危険な魔物なのですか？」

「いや、ここに来る前にユーリとナナリーが倒してたぞ」

リッドがウルフの足跡を見つけるとフィリアが尋ね、それにカイがさっきのクエストでの戦いを思い出して返す。

「ああ。危険つてわけじゃなくてさ、コイツの肉は、さつと火を通して塩コショウで味付けすると結構美味いんだぜ♪」



「ウルフって、食べられるんです？」

「ああ、食べるぜ？　っていうか、毒性のあるものじやなきや大概のものはなんでも食える。その辺は、腕の見せ所って奴だな」

リッドのにししと笑いながらの言葉にエステルが首を傾げて尋ねると彼は頷き、そう続ける。

「元々ある食材を、より美味しく食せるよう工夫する……お料理の原点ですね」

「エステルも食ってみるか？　案外、価値観変わるかもしれないぜ？」

「お料理の原点を知る、です？……そうですね」

その言葉を聞き、エステルは少し考える。

「ぜひ、お願いします！」

「じゃあ、今度ウルフを倒したらリッドまで届けよう」

エステルの言葉にカイがそう返した。と、そこでふとリッドが思いついたようにエステルに話しかける。

「なあ、星晶の採掘が原因で起こってる生物の変化ってどういうものなんだ？」

「え？　いえ……まだ、詳しくは分かりません」

ウルフという生物繋がりで気になったのだろう。しかしその問いにエステルはそうとしか返せなかった。

「現場で作業をしていた人達による話では、まったく別の生物になってしまおうほどの変化らしいんです」

「ガルパンゾ国は、この土地以外でも世界各地で星晶を採掘していましたよね。そこでも同じような話があったのでしようか？」

「はい。他にも三か所の土地で起こったと聞いています」

「三か所も!？」

エステルは報告にフィリアは驚いたように叫び、カイがふと口を開く。

「それは星晶の採掘地に限った問題なのか？」

「はい。決まって、採掘が終盤に近づいた頃から採掘し終えた期間に起こるようです」

「星晶との関連性は分かりませんが……ひよつとしたら、生態系に影響を及ぼす有害な物質を掘り当ててしまったという可能性もあります」

カイの疑問にエステルが答え、フィリアは冷静に仮説を立てる。

「何にしても、この現象が本当なら人体にも影響が及ぶかもしれません」

「ああ。人間に危険なものならちゃんと調べておかねえと、作業してるやつらに注意すらできないもんな」

フィリアの出した結論にリッドも頷き、彼らは森林奥地へと足を進めていった。

そして彼らは森の奥、以前サレと戦った場所へとやってくる。

「す、すごい、大きいです……」

エステルがその声を漏らす。彼らの視線の先には巨大なオタオタが元気に飛び跳ねていた。それにリッドははあとため息をつく。

「ああ、デカオタだ。こいつ、なかなかどいてくれねえんだよな」

リッドはそこまで言うともう一度息を吐き、剣を抜く。

「しようがねえ。こつちから行って、追っ払うしかないか」

その言葉を聞いたカイが刀を抜き、エステルが杖を構え、フィリアが大剣を構える。それと同時にデカオタがリッド達目掛けて突進してきた。

「魔神剣・双牙!!」

剣を二回振るい、一発ずつ地を這う衝撃波を放つリッド。それにデカオタが怯んだところにかイがデカオタの懐に潜り込み、デカオタの巨体を蹴り上げた。

「飛燕連脚!」

蹴り上げて一撃、さらに空中に飛び上がりながらの後ろ回し蹴りで二撃、続けてもう片方の足での回し蹴りで三撃、そして最後に二撃目の蹴りを放った足で蹴り落とし、デカオタを地面に叩きつける。しかしデカオタはその柔らかい体で叩きつけられた衝撃を緩和、逆にその反動を使ってカイに体当たりを仕掛けてきた。

「堅牢なる守りを、バリアー!」

「ぐっー！」

だがすんでのところ、エステルが発動した魔術により、カイを包んだ障壁がタツクルの威力を軽減。吹っ飛ばされたカイは空中で回転し、ぶつかりそうだった木に足をぶつけ、横向きで止まる。

「サンキュー！」

「はいっー！」

短くお礼を言っただけ、カイは木を蹴って跳躍。左手に三本の苦無を構え、それに炎のマナを集中する。

「曼珠沙華ー！」

叫ぶと共に投擲、その苦無は炎を宿して、デカオタへと突き刺さった。

「炎よー！ フレアトルネード!!！」

そこにフィリアの詠唱が完了し、彼女が大剣を掲げて叫ぶと、デカオタを炎の竜巻が包み込んだ。

「魔神千烈破!!!」

さらにリッドが連続突きから地を這う衝撃波へと繋げる奥義で、デカオタを弾き飛ばす。

「はあああああああつ!!！」

先程曼珠沙華を放ったカイはその直後刀を掲げてデカオタへと斬りかかる。その時、彼の刀に炎が宿った。

「思いついた……」

眩き、カイは炎を宿した刀を兜割りのように縦一閃、さらに着地と同時に横に回転した。

「鬼炎斬!!」

炎を宿した刀で横一閃、それを受けたデカオタは炎に怯み、やがて森の奥へと逃げ去っていった。それを見届けてからカイは刀を血や火を払うように一閃し、鞘に収める。

「……で、どうやって進むんだ?」

それからカイはきよろきよろと辺りを見回す。辺りに人間が通れるような道はなく、草むらをかき分けていくのだろうかとかイは草むらの方に歩きながら刀を抜こうとする。

「あ、大丈夫ですよ」

と、エステルが声をかけてカイを止め、草むらの一つへと歩いていく。

「サレの追跡から逃れるために、ユーリが道を隠していたんです。ですが、ここで迷った上にユーリ達とはぐれてしまつて……サレに捕まりそうになつた時はどうしようかと

思いました」

エステルはそう言つて草を魔術で払いのける。と、リッドが「ひゃ〜」と声を出した。

「上手い事作つてあつたな。俺には分かんなかったぜ」

「さあ、行きましよう」

「ああ」

リッドの眩きに対してエステルはそう言い、それにカイが頷くと一行は再び歩き始める。

「それにしても……あんな大きなオタオタ、初めて見ました」

と、歩きながらふとエステルが改めて驚いたようにデカオタについてのコメントを述べる。

「この一帯は特別発育がいい様ですね。ギルドにも、これまでに何度か掃討依頼が来ていたようですが……」

「なあ……こんな話を知ってるか？」

エステルのコメントにフィリアが眩くと、突然リッドが口を開く。

「あるところに、そそっかしい女の子がいました」

リッドはまるで昔話でもするかのように話し始める。

「ある日、女の子は森で見つけたオタオタが弱っているのをかわいそうに思つて毎日食

事を運んであげました。以来、森に生息するオタオタは栄養状態がとても良くなってみるみる大きくなっていきましたとき」

「も、もしかして……今のオタオタはその時の……」

リツドの昔話を聞き、エステルはうつむき気味で声を漏らす。

「その……そそっかしい女の子と言うのは髪が短くて、格闘技が得意な活発な女の子……ですか？」

「ご想像にお任せします……」

フィリアの遠回しな言葉にリツドはがくつとうなだれてそう返した。

「ん？ ファアラがさっきのデカオタを育てたのか？」

「「!!」」

と、カイがきよとんとした表情で問い返し、それに三人がギョツとした目でカイを見る。

「……どうしたんだ？」

「あの、カイさん……その事はどうかご内密に……」

「というよりも、そういう事は名前を言っではいけないんですよ？」

「そうなのか？」

ギョツとした目で見られたカイが再びきよとんとした様子で問いかけるとエステル

とフィリアが慌ててそう言い、それにカイはやはりきよとんとした表情で首を傾げた。

それから彼らは先に進んでいき、そこに生息する魔物——生息形態が変わり、ライニネールやグリーンローパーが多くなっている——を斬り倒していくと、ライニネールを斬った後リッドが剣を肩に担いでエステルを見た。

「なあ、やつばわかんねえんだけど。そんな危ねえもんを、なんでエステルの国は放つておくんだ？」

「そうですね。では、少しお話をしましょうか」

その言葉にエステルの代わりにフィリアが返答する。

「大きな国には、人が集まりますよね。大勢の人は生きるために産業を行っていますが、産業そのものを続けていくには、原動力となる資源が必要になります。大国の資源といえば、今やほとんど星晶ですからね。採掘を止めて星晶が不足すれば、産業は滞り、多くの人が仕事を失います。そうすれば、衣食住に困る人が増えてしまいます」

「食べ物なんて狩ってくればいいんじゃないのか？ 今の俺達みたいに魔物倒して」

「ああ。狩りをすればいいし、畑も作ればいいし」

フィリアの言葉にカイとリッドが双方首を傾げる。と、エステルが口を開いた。

「私の国は、産業施設や国民の住宅のために森は切り拓かれて、あまりありません。畑を開墾する土地もないでしょう。食料は、時給ではなく他国からの輸入に頼っています」



「どうでしょう、リッドさん、カイさん。他国から食料を輸入するための産業です。ガルパンゾ国は星晶の採掘を止めることは出来るでしょうか？」

「そうか。大国にも止めるに止められない事情つてのがあるんだな」

「はい。ですが、このまま目を瞑っておくわけにもいきません」

「もちろんです。さあ、では先を急ぎましょうか」

エステルの説明の後にフィリアが問いかけ、リッドが納得したように頷くとエステルがそう返し、フィリアもそれに頷くと先を急ごうと促す。

それから彼らは採掘地跡へとやっつけてくる。

「ここが、その採掘地跡つてやつみたいだな」

先頭を歩いてきたカイが最初に口を開くとその横に立っていたリッドが辺りを見回して眉をひそめる。

「なあ、なんか……やばいんじゃないやねえか？ 見てみるよ、周りの植物を。こんなもの見たことねえぞ」

リッドの言葉にフィリアも頷き、近くの植物を観察する。

「一部、無機物化しています……もはや植物と呼んでいいのか分かりません」

「これらは一体？……」

フィリアとエステルが観察を始め、リッドが頭をかく。とカイが左手に苦無を隠し持

ちながら背後に目を向けた。

「……誰だ？」

「勘がいいな……お前達、アドリビトムか？」

カイの言葉に返す男性の声。その声を聞いたフィリアとエステル、リッドも声の方を向く。そこに立っていたのは黒豹の獣人と違っていいだらう男性と、濃い緑色の髪を長く伸ばした快活そうな青年。その姿を見たリッドが頬を緩ませた。

「たしか、前にヘーゼル村に物資を届けに行った時に会った……」

「ユージーン・ガラルドだ。アドリビトムにはヴェイグ達の事も含め、いつも世話になっている」

「俺はテイトレイ・クロウ。ヴェイグがまたサレとやり合ったらしいな。まったく、あいつもしょうがねえ奴だな」

リッドの言葉に獣人——ユージーンが名乗り、世話になっていると言いながら頭を下げるとその次に青年——テイトレイが名乗った後、どこで聞いたのだろうかヴェイグがサレと戦った話をし、しょうがねえなと肩をすくめる。

「今日はここに何の用だ？」

「星晶採掘地跡で見られる奇妙な現象というのが、本当に起こっているのか。それを確かめに来ました」

「君は？」

ユージーンの問いかけにエステルが返し、ユージンが訝しげな目で返す。

「私はエステリーゼ。ガルパンゾ国の王女です」

「王女お!? なんてそんな奴がここにいるんだよ!？」

エステルの言葉にテイトレイが目を丸くして素つ頓狂な声を出す。分かりやすいびつくりの様子だ。と、ユージンが口を開く。

「奇妙な現象とは、この生物変化のことか？ 見ての有様だ。この採掘地から星晶が出尽くした頃からこうなった。元々ここは薬草などが豊富に採れたのだが、今では何とも言えない妙な植物や、虫が増えている」

「星晶の採掘が原因だったのか？」

ユージーンの言葉の次にテイトレイが問いかける。それにフィリアは首を小さく横に振った。

「星晶との関連性は、まだわかりません。ですが、生物の変化というのは実際に起こっているようですね」

「ああ。俺達もこのヤバイ現象をヴェイグに伝えようって、村を出たところだったんだ。アドリビトムに接触できて丁度よかつたぜ」

フィリアの言葉にテイトレイが前半真剣な表情で、後半助かつたというような安堵の

笑みを見せながら返す。

「だが村にはあのサレがいたんじゃないのか？」

「盗るモン取ったら引き上げてったぜ！ おかげで俺達の村の星晶はスツカラカンド

！」

カイの言葉にテイトレイが怒りのような表情を見せながら返す。

「まあまあ、ここで長話しても仕方ねえだろ」

「そうですね。とにかくお二人に船まで来ていただきましょう、詳しくお話を聞かせていただきたいですし」

「じゃあ、戻ろう」

リッドが怒っているテイトレイをいさめ、フィリアがそう言うときカイはその場を離れるように歩き出し、彼らは船に戻っていった。そして船に戻り、エステルがアンジュに事情を説明、リッドとフィリアがユージーンとテイトレイをヴェイグが使っている部屋へと案内。エステルも話が終わってからその場を去っていき、アンジュはカイの方を向いてにこりと微笑んだ。

「まずはお疲れ様」

「……はい」

「生物変化現象の事実を確認できただけで、まだ分からない事の方が多いいけど……その

現象について、ユージーンさん達に詳しい話を聞く必要があるわね。カイも一緒に行く？」

アンジュの言葉にカイはほぼ反射的に頷いていた。それにアンジュは満足そうに微笑み、ユージーン達の待つ部屋へと向かう。そこには既にエステルが同じく話を聞こうと待っていた。

「星晶が採掘されて、あの森周辺の村々にマナの恵みはなくなった」

「あそこらは、マナを生み出す世界樹の根も張ってねえし、星晶がわずかに出すマナだけがヘーゼル村に恵みを与えていたからな」

まずユージーンとティトレイが現状を説明する。

「ああいった生物の変化は、星晶採掘が終盤に差し掛かった頃から始まった。まず、土地が痩せ、畑からは作物が取れなくなっていた」

「あのような場所は他にもあるんですか？」

「ああ。村近辺の星晶はゴツソリ盗っていかれたからな。あ、それから森の生物にも奇妙な変化が現れてよ」

「奇妙な変化？ 具体的には？」

ユージーンの言葉にエステルが聞き返し、それにティトレイが返した後思い出したように続けるとアンジュがそれに反応する。

「ほとんどの作物は食えないものになっちまって、狩る動物も同じだ。なんて言やあいさ……」

テイトレイはそこまで言つて頭をかき、やがて一つの言葉を思いついたように頷く。

「肉がねえんだよ、生き物つて感じじやねえ。仕留めた先から溶けていくものもあつた。ちやんとした獲物が取れた時は奇跡さ」

「生き物という感じじやない、仕留めた先から溶けていく……」

テイトレイの言葉をカイがうつむいてぼそぼそと反芻し、思いついたように顔を上げる。

「マナがないからそういうことになった、という事は考えられないのか？ 生命の源であるマナが少ないかあそんなことになったとか」

「元々星晶もなく、マナを生み出す世界樹の根もない土地というのはあります。でも、そのような土地で、マナが少ないから生き物に変化が起きたという現象は起こっていません」

「マナが少ない以外に、原因があるかもしれないね」

カイの仮説をエステルが否定、アンジュもふむと考える様子を見せて呟いた。それにユージーも頷く。

「原因が判明しないことにはな……あの現象も拡大しつつある」

「くそっ!……村の皆は、どうやって生活していきやあいんだよ!」

ユージーンの言葉の次にテイトレイが苛立った様子で声を荒げた。

「サレはいなくなっただけ、もう村に物資もねえ、採取もままならねえ。もつと遠くに行つて、探してくるしかねえのか……」

「? 遠くに行つて、探す?……ならここに入つたらどうだ?」

テイトレイの言葉にカイがそう提案のような、というよりも思いついたことをそのまま言うように言葉を放った。と、アンジュがくすつと微笑んだ。

「カイの言うとおりね。ここで働いて、ヴェイグ君達と一緒にヘーゼル村に物資を届けたらどう? こつちとしてもそんな話を聞いたら、ますます人手が必要になりそうだもの」

「そうか。その手があつたな」

アンジュの提案にユージーンがにと笑みを浮かべ、テイトレイも笑つて頷く。

「なるほどな! お前頭いいじゃねえか!」

テイトレイはそう叫んでカイの前に立つ。

「改めて、俺はテイトレイ。お前は?」

「……カイ」

「カイか。んじゃ、よろしく頼むぜ!」

テイトレイは元気に笑って彼に右手を突き出し、カイも右手を出す。テイトレイががしつと握手をしてくる。

「ユージーンだ。昔は軍に所属し、鍛えていた。何か力が必要なことになったらいつでも呼んでくれ」

その次にユージーンも改めて自己紹介する。と、カイがユージーンの顔をじつと見た。

「な、なんだ？」

「……？」

「……あ、もしかしてカイ、お前ガジユマを見たことないんじやねえのか？」

ユージーンが少ししたじろぐとテイトレイが気づいたように言い、それにユージーンは合点がいったように腕組みをして頷いた。

「ああ、なるほどな」

「……すまん？」

「いや、気にしなくていい」

ユージーンという言葉にカイが疑問形で謝ると彼は笑いながらそう返す。

「んじや、そうと決まれば俺あヴェイグに挨拶してくつから！」

テイトレイはそう言うや否や部屋を飛び出していき、ユージーンは肩をすくめる。



「まあ、何か迷惑をかけるかもしれないが。よろしく頼む」

「ええ。私達は歓迎します」

ユージーンのプロテクトのような言葉にアンジュはにこっと微笑んでそう返した。

## 第六話 仲間登場!森林での激闘!

「だだだだっ、だーっ!」

左拳のラツシユで相手の動きを止め、本命の右拳を叩き込む特技——連牙弾。フアラのそれをカイは左右に揺れるように動いて左拳をかわし、本命の右拳を左手の平で受け止めると闇のマナを纏った右掌をフアラの腹に押し当てる。

「滅掌破っ!」

掌底と同時に掌に集中した闇のマナの爆発で相手を吹き飛ばす技——滅掌破。しかしフアラはそれをサイドステップでかわし、思いつきり右腕を振り回して掴まれている右拳を外させるとカイの背中に掌底破を叩き込んだ。

「双撞掌底破!!!」

「ぐああっ!」

一発目の掌底破の直後そこに重なるようにもう一発掌底破を放つ奥義——双撞掌底破。それを受けたカイは勢いよく吹っ飛び、バンエルティア号の甲板に叩きつけられた。

「よし、それまで!」

と、審判をしていたクレスが戦闘をストップさせる。今は体術の模擬戦を行っており、カイも刀を置いて拳と蹴りのみでファラに對抗していた。

「くっ……やっぱ体術だけじゃファラには敵わないか……」

「ふっふーん。当然でしょ？」

「でもカイってすごいよ！ 教えたことはすぐ呑み込んじゃうし」

カイの起き上がり、打った背中をさすりながらの言葉にファラは得意気に胸を張り、次に観戦していたシングが目をキラキラさせながら続ける。と、クレスがうんうんと頷いた。

「確かにそうだね。僕は忍者の剣術は専門外だけど、剣士として見るならカイは才能があるように思える。どうか、本格的に剣士として修行してみない？」

「うん！ それなら俺が教えられることも増えるし！」

「あ、ずるいよクレスにシング！ それなら格闘家だって私やセネルが教えられること多いよ！」

「え、俺もか？」

クレスとシングがカイを剣士として鍛えようと勧誘するとファラが叫び、こっちもカイを勧誘しようとする。ちなみにいきなり話を振られたセネルは目を丸くして少しきよとんとした様子を見せていた。

「……今のままでいい」

と、カイはそう言つて静かに刀を拾い、軽く剣術の要領で振るつた後、今度は刀を置いて体術の型を見せる。

「どつちかに集中したら、どつちかがおろそかになる」

「二兎追う者は一兎も得ず、というぞ?」

「どういう意味?」

「えーつと……簡単に言うと、二つの事を同時にやろうとしたらどつちも出来なくなつちやうよつてこと。今回で言うと剣士と格闘家両方の修行を一緒にやろうとしたらどつちも中途半端になるつて意味だね」

カイの言葉にセネルが呆れた様子で言うとシングが問いかけ、クレスが説明する。

「出来るか出来ないかじゃない、しなきゃいけない……なんか知らないが、そんな気がする」

しかしセネルの忠告にカイは何か強いものを感じさせる表情でそう呟き、それを聞いたクレスがふつと微笑んだ。

「そこまでの覚悟があるなら僕はもう勧誘しないよ。でも、君が剣士として修行したいていうなら僕はいつでも歓迎するからね」

「うん。私も、私がカイに教えられることは全部教えるよ。それで格闘家に興味を持つ

たらいつでも言つてね！」

「ありがとう」

クレスの爽やかな笑みとファアラの元気な笑みでの言葉を聞いたカイも笑みを浮かべて返す。

「あの、クレスさん……」

「ん？ どうしたんだい、ミント？」

と、ミントが甲板に出てきてクレスを呼び、クレスも首を傾げてミントの方に駆け寄り、彼女と話していく。

「……そっか。確かにもうそろそろついてもおかしくない頃だね……」

「はい。一体どうしたのか……」

「心配だね。うん、分かったよ」

二人は話し合い、うんと頷きあうとミントがカイ達を見た。

「あの、ちよつとよろしいでしょうか？」

「どうしたの？」

ミントの言葉にファアラが首を傾げ、次にクレスが口を開いた。

「実は、僕達の仲間がここに向かっているんだけど、到着予定日が過ぎても連絡がないんだ。それで、最後に連絡のあったコンフェイト大森林まで一緒に探しに行つてもらえな

いかな?」

「何かの事件や事故に巻き込まれてなければいいんですが……心配で……」

クレスの説明の次にミントが心配そうに呟く。とシングとファアラが頷いた。

「それは心配だね。分かった、俺と一緒に行くよ!」

「私も!」

「ありがとう! じゃあアンジュさんに外出許可をもらって……」

シングとファアラが立候補し、クレスは嬉しそうに頷いてアンジュに外出許可をもらって来ようと急いで船の中に入ろうとする。

「うわっ!」

「きゃっ!」

と、丁度船から出てこようとした少女とぶつかり、二人はしりもちをつく。

「いてて、ごめん。慌ててた!」

「コ、コハクさん! 大丈夫ですか!」

クレスはお尻をさすりながら慌てて相手に謝り、ミントも慌ててクレスにぶつかった少女——コハクに大丈夫かと尋ねる。

「あ、いえ。私こそ慌ててたので」

「どうしたの、コハク?」

苦笑しながらそう言うコハクにシングが首を傾げる、とコハクが目を吊り上げた。

「どうしたのじゃないでしょ！ 今日にはシング、私と一緒に食堂の手伝い当番だったの忘れてない!？」

「あっ!？」

コハクの目を吊り上げながらの言葉を聞いたシングが分かりやすいほどに忘れていたとばかりの声を上げ、コハクが「もう」と呟くとシングは慌てて三人に両手を合わせた。

「ご、ごめんコハク！ すっかり忘れてた！ クレスとミントもごめん!？」

「え？ クレスさんとミントさん、シングと何か約束が？」

「あ、うん。実はかくかくしかじかで……」

シングの言葉にコハクが首を傾げるとクレスがコハクに説明、それに今度はコハクが目を丸くした。

「た、大変じゃないですか！ だったら手伝いは私一人でやるからシングはクレスさん達と……」

「いやいいよ！ 別に何かあったって決まったわけじゃないし!？」

「はい。他の人に同行をお願いすればいいだけなので……」

コハクが慌てた様子で叫ぶとクレスが両手を前に出してそう言い、ミントもこくこく

と頷く。

「あ、そうですか……でも、何かあつたら呼んでくださいね!」

「はい、ありがとうございます」

「じゃあ行こう、コハク……気を付けてね」

「うん、ありがとう」

そしてシングとコハクはそれぞれクレスとミントにそう言い残し、船の中に戻っていった。

「クレス、俺と一緒に行こうか?」

「カイ……うん、ありがとう。じゃあアンジュさんから外出許可取ってくるから、準備してて」

カイが同行を希望し、クレスは嬉しそうに頷くと改めて船の中に入っていく。

それからカイ達も武器の他グミやボトルなどのアイテムを準備してから、バンエルティア号がコンフエイト大森林へと到着。彼らはそこに足を踏み入れた。

「連絡のあつた場所は……ですな」

「魔物の気配がするな……油断せずに行こう」

ミントの言葉にクレスは森の中から魔物の気配を感じ取り、気を引き締めるように目を研ぎ澄ませて眩くように静かに言う。それにカイとフアラも頷いた。



「影走斬!!」

森の中を進んでいく中で魔物を見つけた瞬間カイは素早くその魔物目掛けて目にも止まらぬ速さで突進、すれ違いざまに持っていた刀で一閃を決め、その魔物——プチプリーを一刀両断にする。

「掌底破!」

少し遅れて前線に入ったファアラがマンドロテン目掛けて気を込めた掌底を打ち込み、さらに足に力を込める。

「臥龍空破!!」

下から突き上げるアツパー、それがマンドロテンを空中へと打ち上げ、地面に落下したマンドロテンは動かなくなる。

「……いきますよ、アシッドレイン!」

後衛で詠唱していたミントが目を開き、杖を掲げると辺りに敵の防御力を減らす特殊な雨が降り始め、それを受けたチュンチュン二体は本能的にこの術を使う相手が危険と判断したのかミントに突進、しかしその前に一人の剣士が立ちはだかる。

「……から先は通さない!!」

剣士——クレスはそう叫んで、右手に握っている剣を光らせる。

「真空破斬!!」

叫び、剣を目にも止まらない速さで一閃。その一撃を受けた二体のチュンチュンは一刀両断され、地面に落っこちた。

「よし、この調子で行こう!」

クレスがそう言って歩みを進め、ミントもその後を追おうとする。と彼女の視線が少し下に下がった。

「クレスさん、待ってください。何か落とされましたよ」

「え? ああ、本当だ。ありがとう、ミント」

「? 何それ?」

ミントが拾い、クレスに手渡した彼の落とし物。それはクレスをデフォルメしたような姿をした人形で、それを見たフアラが首を傾げる。

「ああ、これかい? 友人の妹さんが僕にとって、わざわざ作ってくれた人形なんだ。お守りみたいなものだよ」

「そのお人形……懐かしいですね。確かあの時、クレスさんにしかプレゼントを用意していないのかって機嫌を悪くされてしまって。あの後が、大変でしたね」

「そうそう。困ったアミイちゃんが、結局代わりにアップルグミをあげたんだ。ああ見

えて、結構やきもち焼きなどところがあるんだよな。僕にも妹がいたら、同じことを思ったのかなあ」

「ふふ、クレスさんたら」

「……」

クレスとミントは懐かしそうに話しており、カイとフアラは困ったように沈黙する。

「あ……ごめん。僕達にしかわからない話をしてしまった」

「今お話ししていたお兄さんというのが、これから私達が迎えに行く友人の事なんです」

クレスが申し訳なさそうに謝るとミントが説明、クレスは爽やかな笑みを見せる。

「妹思いのいい奴なんだよ。それに、弓の名手なんだ。きつと、アドリビトムの戦力として活躍してくれると思う」

「私もそう思います……クレスさん、今度は向こうの方も探してみましよう」

「うん、そうだね。行ってみよう」

クレスがそう言い、四人はさらに森の奥地に向けて歩いていった。

それから彼らは森の奥へと進んでいき、そこに生息するウルフやグリーンローパー、ライニネールなどを倒しながらクレスの仲間を探していく。

「いない……もしかして入れ違いになったのか?」

「もう少し探して、痕跡が見つからなかったら一度戻ろう」

「うん! 大丈夫、きつとその人は無事だよ! イケるイケる!」

「そうですね……ありがとう! ございます」

クレスの呟きにカイが木の上から辺りを見回しながらそう言い、フアラがぐつと拳を握りながら元気づけるようにそう言うとミントも嬉しそうに微笑んで頷いた。

「つ! 全員走れつ!!」

「えつきやつ!」

突然上空から響くカイの声、それにミントが驚いたように見上げると突然クレスがミントを抱きかかえて前に飛び込む。その直後、ミント達の背後からバンツという何かが叩きつけられるような音が聞こえた。

「くつ!」

前方に飛び込んでかわした後すぐ立ち上がって振り返り、拳を構えるフアラに、抱きかかえていたミントを離して後ろにやり、彼女を守るように前に出て剣と盾を構えるクレス。二人が睨む前には樹木そのままの姿をし、頭には桜のようなピンク色の花を満開にしている魔物が存在していた。

「ブ、ブラッサムです……」

「つ、強そうだね……」

「うん。正直今の僕達で敵う相手かどうか……」

どこかで調べたのだろうかミントの言葉にフアラとクレスが手に汗を滲ませながら呟く。どうにかして逃げる算段を立てなければまずい……。

「鬼炎斬っ!!」

「っってちよつとーっ!??!」

と、二人が思っていたその瞬間カイが炎を纏った十字斬りでブラッサムに先制攻撃。クレスとフアラも思わず異口同音のツツコミを入れていた。そしてブラッサムに弾かれ、自分達の横に着地したカイを見て二人はわたわたとなる。

「ちよ、ちよつとカイ! 何挑発してるの!?!」

「そうだよ! ここは逃げる方法を……」

「逃げるって……どうやってだ?」

フアラとクレスの言葉にカイは首を傾げながら尋ね、ブラッサムを見る。

「道はあの魔物に塞がれてる。獣道を通ってたら俺達はともかくミントは間違いなく逃げ切れないし、下手したらエステル達みたいに道に迷う可能性もある」

「……」

カイの冷静な分析に二人は驚いたように目を丸くし、カイは刀をブラッサムに向け

る。

「あの魔物を倒すとはいかなくても、しばらく動けなくする必要はある」

「……確かにそうだね」

「うん」

彼の言葉にクレスとファラは頷き、それぞれの武器を構え直す。それを見たミントも杖を構え、詠唱を始めた。

「……いきます、ディープリミスト!」

ミントが叫び、集中していたマナを解放すると濃霧がブラッサムを包み込み、霧の発生を合図に三人が地面を蹴る。

「相手の実力は未知数だ! 最初から全力でいくよ!」

「オツケー!」

「了解!」

クレスの言葉にファラとカイは頷き、クレスは思いつきりジャンプして剣を構え、カイは刀を腰にやって突き出すように構え、ファラは両手に気を込める。

「鳳凰天駆!!!」

「双撞掌底破!!!」

「斬魔滅殺剣!!!」

クレスは炎を纏いまるで獲物を狙い定めた鳳凰のごとく急降下しながら突っ込み、フアラは片手で掌底を打った後もう片方の掌底破も連続して叩き込み、カイは突進突きから左右薙ぎ払いさらに後ろ回し蹴りまで繋げた後左手に集中していた闇のmanaを掌底を当てると共に解放、爆発させた。各々の使える奥義の連続攻撃にブラッサムの巨体が吹き飛び、倒れ込む。

「どうだ!？」

クレスは剣を構えながら叫ぶ。が、ブラッサムは何事もなかったかのように立ち上がった。

「う……あいつの身体、結構堅かったからなあ……」

「ミント! さっきの雨を降らせてくれ!」

「はい!」

フアラが手をぶらぶらさせながら呟き、カイが指示を出すとミントも頷いて詠唱を開始する。

「アシッドレイン!」

「曼珠沙華!」

敵の防御力を減らす不思議な雨がブラッサムに降り注ぐと同時にカイが炎を纏う苦無を投げてブラッサムを牽制、そこにクレスとフアラが再び突っ込んだ。

「飛燕連脚!!」

息を合わせた連続蹴りが脆くなったブラッサムの樹皮を削ぎ、そのままクレスは剣を振り上げて剣に雷を纏わせ、フアラも片足を振り上げる。

「鷹爪雷斬!!」

「鷹爪蹴撃!!」

剣を振り下ろすと同時に放たれる落雷と空中から襲い来る急降下蹴りが同時にブラッサムを襲う。しかし二人はまだ攻撃を止めず踏み込んだ。

「魔神双破斬!!!」

「双撞掌底破!!!」

クレスが地を這う衝撃波を放つのに繋げてジャンプして斬り上げと刃を返しての斬り下げを二セットくらわせ、フアラが先ほどの二連発掌底破を叩き込む。

「ギシヤアアアアアアアアアアッ!!!」

「うわあああああああつ!!」

しかしブラッサムは腕のように伸びている枝を振り回して反撃し、それを受けた二人は吹っ飛ばされてしまう。そしてブラッサムはトドメを刺そうとばかりに尖っている枝を振りかぶる。

「フィリアボムッ!」



と、そこにビンが飛びブラッサムにぶつかって割れるとその中身が爆発。ブラッサムを怯ませた。

「カイ!?!」

「二人とも早く回復しろ!」

「い、今のつて……」

「フィリアから借りてた!」

クレスとファアラが驚いたように咄く横でカイは刀を手にブラッサムの前に立つ。それを見たクレスとファアラは彼の邪魔にならない程度に下がり、自らの内部に気を集中する。

「集気法!」

「治癒功!」

自らの身体に気を練り込み、傷を癒し体力を回復する。

「早く臥せよ、不殺の鉄槌……ピコハン!」

その後ろでミントが魔術でピコハンを作り出してブラッサムに落とす、孤軍奮闘しているカイを援護する。しかし彼女は目の前で死闘を繰り広げている仲間の援護に精一杯だったため後ろから来る気配に気づいていなかった。

「ミント! 後ろっ!」

「えっ!？」

偶然ミントの方を向いていたフアラが血相を変えて叫び、そこでミントは後ろからグルルルという喉を鳴らしているような音に気づき、振り返る。

「ガウツ!」

「きやあつ!!」

いつの間にか背後にウルフが忍び寄っており、ミントは咄嗟に目を瞑って杖を横に薙ぐ。

「ギャウツ!？」

偶然それがウルフの横つ面を叩き、ウルフを怯ませるがミントはその衝撃で倒れてしまふ。そしてウルフも立ち直すとミントを睨んだ。

「ミントツ!!」

クレスが叫んで彼女の方に走り出す。しかし、ウルフがミントの身体に牙を突き立てる方が明らかに早いと確信できるほどその距離は離れていた。

「ミント! 伏せろ!!」

そこに響く新たな声、それを聞いたクレスが驚いたように足を止め、ミントは頭を抱えてしやがみこむ。

「紅蓮!?!」

その凜とした声と共に何か風を切って飛び、それが炎を纏ってウルフの眉間を寸分たがわず貫く。獲物に牙を突き立てる直前で脳を貫かれたウルフがぐらりと揺れ、どさつと倒れ込んだ。

「ミント！ 大丈夫か!？」

「あ、は、はい……」

「これは……」

数歩遅れて駆け寄り、ミントの安否を問うクレスにミントはこくこくと頷き、クレスはウルフの眉間に刺さっている炎を纏っていた何か——矢を見る。

「ミント！ 大丈夫か!？」

そこに駆け寄ってくる水色の髪を長く伸ばして後ろで一本にまとめた、目つきの悪い青年。その顔を見たクレスが安心したように微笑んだ。

「チェスター！ 無事だったんだな！」

「無事？ つて、もしかしてお前ら、探しに来てくれたのか？」

「そうですよ。到着予定日を過ぎても、連絡がありませんでしたから……心配で」

クレスの言葉に青年——チェスターは少し首を傾げた後気づいたように問いかけ、それにミントが頷くとチェスターは「ああ」と頷いてブラッサムを見る。

「ちよつとあいつに追われちゃってな。悔しいが、今の俺の腕じゃ倒せそうにねえか」

「うん、僕達もそう思う。だから逃げようかと思ってたんだけど余程隙を作らないと逃げきれそうにないんだ」

「はい……獣道を通っていては道に迷う可能性もありますので……」

チエスターの言葉にクレスとミントはそう言い、それにチエスターはふつと笑った。

「だったら安心しろ。俺が先導して森から抜け出す!」

「だ、大丈夫なのか!?!」

チエスターの出した案にクレスが心配そうに叫ぶと彼は不敵な笑みを浮かべて見せる。

「別に俺は迷ってたわけじゃなくって、あいつに追われてただけだ。森の中の道は覚えてる!」

「分かった。チエスターを信じよう……」

チエスターの言葉にクレスは頷き、現在ブラッサムを足止めしているカイとファアラの方を見る。

「二人とも聞こえた!? 僕は彼とミントを護衛しながら先にこの場を脱出する!」

「了解! ファアラも先に離脱しろ!」

「えっ!?! で、でも一対一じゃ……」

「倒さなくていいんだろ!?! それなら一人の方がやりやすい!」

クレスの言葉にカいは頷いた後フアラにも離脱を指示し、それにフアラが心配そうに叫ぶとカいはそれを遮る勢いで叫び、それにフアラは渋々頷くとクレス達の方に走り、彼らはチェスターの先導で森の中を走っていった。それを足音で確認しつつ、カいは右手に刀を、左手にナイフを構えてブラッサムとつかず離れずの距離を取り始めた。

「ふっー！」

ブラッサムが伸ばして突き出してきた腕のような枝をカいは素早く横に動いてかわす、がブラッサムはさらに別の枝を伸ばして足元を薙ぎ払うように振るい、カいは咄嗟に刀を地面に突き立てるとそれを杖にしてジャンプ、ついでに刃を枝のように向けており枝を斬ろうかともくろんでいた。

「へっ？」

しかし枝が刀に当たった瞬間バキツという嫌な音がし、カいはバランスを崩して地面に倒れ込む。そして右手に握っていた、刃が途中で折れている刀を見た。

「刀が、折れたっ!?!」

どうやらブラッサムの枝はブロンズソードを超える強度を持つていたらしい。一番よく使用していた武器が突然折れたことに彼は動揺を隠せず、その隙を突いたブラッサムが伸ばした枝でカいの身体を鞭のように叩き打ち上げた。

「がはっー！」

いきなり上空に打ち上げられ、苦しげに息を吐くカイ。そこを狙い、ブロッサムは再び先端がとがった腕のような枝をカイ目掛けて突き出し、ドスツという何かを貫いた音が響く。そしてブロッサムはゆっくりときつき獲物を貫いた枝を縮め、獲物を自分の目の前へと持っていく。

「……う」

しかし首を傾げるような動作をブロッサムは見せた。その枝が貫いているのは何か木の幹のようなものだ。

「危ない……ギリギリ変わり身の術が間に合った」

ブロッサムが混乱している間にカイは近くの木の上に入り、安堵の息を吐いて辺りを見回す。

「ま、これくらい時間を稼いでおけば充分だろ……逃げるか」

カイは一人そう言うのと木の枝の上を飛び移りながらその場を離れていった。

それからカイは木の枝の上を飛び移り、近くに手頃な枝がなければ地面に降りて、出る限り魔物との戦闘を避けて森の入り口まで戻ってきた。

「カイ! 無事だったんだね!」

「ああ」

クレスが安心したように微笑むとカイも頷く、とチエスターが話しかけてきた。

「お前、カイって言うんだってな？　俺はチエスター・バークライト。迎えに来てくれた上圀になってくれてありがとな、礼を言わせてもらおうぜ」

「……気にしなくていい」

チエスターの言葉にカイは少し黙った後静かにそう返し、チエスターは苦笑するとクレスの方を見た。

「ところでよ、クレス。俺の気のせいかもしれないけど、あいつら、最近凶暴になってないか？」

「ああ……確かにそうだね。あんな大型の魔物、滅多に見かけることはないのに……」

「そうですね……アドリビトムにも魔物による被害の報告や掃討の依頼が増えているようです。チエスターさんにお怪我がないよう、何よりでした」

チエスターの言葉にクレスが腕組みをして眩き、ミントも心配そうに頷いた。と、その言葉にクレスが再び頷く。

「そうだね。本当に無事でよかったよ。でも魔物に足止めされているなら、初めからそう言ってくればもっと早く迎えに来たのに。なあ、カイ？」

「ああ」

「おいおい、俺の腕を疑うのか？ そりやないぜ……まあ……心配かけたのは、悪かったけどよ」

クレスの言葉にカイが頷くとチェスターは苦笑、しかし申し訳なきように頭をかい

た。  
「クレスー！ 皆ー！ 船がきたよー！ あ、カイ。戻って来てたんだ。無事でよかった」

「ああ」

森の外から戻ってきたファアラはカイを見て安心したように微笑む。

「なんか頑張ってるみたいだな……ま、船の奴らには後で挨拶するとして。カイ、ファアラ。クレス達に付き合ってくれてありがとな。それで、これからよろしく頼むぜ！」

「ああ」

「うん、よろしくー！」

チェスターのよろしくという言葉にカイは静かに頷き、ファアラは元気よく微笑んでよろしくと返した。そして彼らはバンエルティア号に戻るとホールへ入る。

「ファアラー！ 久しぶりなー！」

「わっ!!? メ、メルデイ!?!」

と、いきなり何者かがファアラに抱きついた。



「よう。お帰り、フアラ」

「元気そうだな」

「キール！ 戻って来てたんだ！ 二人ともお帰り！」

リッドと一緒に、青い髪をポニーテールにしてローブを身にまとっている青年が挨拶し、フアラがその姿を見て嬉しそうに声を出してカイを見る。

「カイ、チェスター。紹介するね。私の友達の……」

「メルデイだよ！」

「キール・ツアイベルだ。元々、僕とメルデイもこのギルド発足時からのメンバーだ」

「カイ」

「チェスター・バークライトだ」

フアラの言葉を遮って彼女に抱き付いている紫色のふわふわした髪をツインテールにし、額にガラス玉みたいなものをくっつけている少女——メルデイが自己紹介し、ポニーテールの青年——キールも名乗るとカイとチェスターも名乗る。と、メルデイが浮かない顔を見せた。

「おつきい国が大学で、お勉強してたな。でも、もうすぐ戦争始まるよ……」

「星晶の採掘権を巡っての戦争だ。おかげで大学は休校、こうなっちゃったら、休校どころか大学まで潰れるんじゃないかと思うが……ともかく、これから僕とメルデイもこ

ここに戻って働くことにした。そうするしか、身を寄せる場所もないしな」

メルデイの言葉にキールもそう言い、肩をすくめる。と、アンジュがホールに戻ってきた。

「お帰りなさい。キール君、メルデイ。手紙で頼んでおいた情報収集は？」

「ああ、色々聞いて来たよ、少し休ませてくれないか？ 話は部屋でさせてくれ」

「ええ。あなた達の部屋はそのまま残ってるわ。ギルドへの再登録は話を聞いた後でいつか！ カイも、部屋へいらっしやい」

アンジュの早速の言葉にキールはそう言い、アンジュは頷くとカイに手招きする。

「行つてきなよ。僕達の依頼はここで終了つて事でいいからさ」

「今回は本当にありがとうございました。もしも何か困ったことがあったら言つてください。いつでも力になります」

「ああ。ありがとう」

クレスとミントが促し、カイは一言お礼を言つてからアンジュ達と共にキール達の部屋——リッド達と同室だ——に向かい、彼らの荷物を軽く荷解き、それが終わるとキールが「はあ」と大きく息を吐いた。

「やつと荷解きが済んだ。本が多くて、大変だったよ」

「カイ、キール君とメルデイはね、『持続可能な社会』を研究しに大学へ行つていたの」

「持続可能な社会?」

アンジュの説明にカイが首を傾げる。と、キールは途端にきりつとした、生き生きとした表情を見せた。

「僕達の世代が、将来の世代のために、環境をありのまま利用して、充足した社会を作るっていうものさ。よって、星晶の採掘も行わない」

「人間が自然を壊さず、調和して人々が生活するための衣食住が充分に行き渡る社会。その理念で運営する村、〃オルタ・ビレッジ〃を作るのがアドリビトムの目的なの。みんなでお金を溜めて、オルタ・ビレッジを各地に作って、大国に消費された村の人達を移住させるのよ」

「オルタ・ビレッジ……素敵な村だ」

アンジュの言うアドリビトムの目的、オルタ・ビレッジ。それをゆっくりと反芻し、カイは心の底からそう思っているように頷いた。それにメルデイも嬉しそうに微笑んでくるくと回る。

「はいな! みんな幸せ、みんな仲間、みんな友達がなれる村!!」

「しかし、大学が休校になった今は、ここで研究を続けていくしかないな」

「そうそう。あの現象については?」

明るくそう言うメルデイに対して静かにそう呟くキール。と、アンジュが思い出した

ように尋ね、それにキールは「ああ」と声を漏らした。

「星晶の採掘跡地で起こる、生物変化現象か。僕が街で聞いたのは……生物に変化が見られた場所には、赤い煙のようなものが現れていたらしい。その後、生物への変化が見られたと言うが」

「赤い煙?」

「はいな。その赤い煙も、ほんの数日現れただけな。今は消えてしまってるそうだよ」  
キールとメルデイの報告、赤い煙。それにアンジュはふむと唸った。

「気になる話ね、その赤い煙って」

「街では失職者もいるらしく、遠征採掘の登録所に並んでいる人を見かけたよ。そこで聞いた話では、オルタータ火山が数日前に採掘を終えたらしい。行ってみてはどうだ?」

「そうね。では、依頼の登録をしておきましょう」

さらにキールは情報を提供。それにアンジュが頷くとカイが彼女を見た。

「俺が行こうか?」

「あら、働き者ね」

その言葉にアンジュはふふつと頷く。と、リッドが首を傾げた。

「おいちよつと待てよ。カイ、お前剣はどうしたんだ?」

「あ、ない！」

リッドの指摘を聞いて初めてフアラもカイが刀を提げていない事に気づき、カイはぼりぼりと頭をかいた。

「魔物と戦ってたら折れた。まあ、新しい刀買えばなんとかなるはずだ」

「ダメだよ！ 剣とか武器は同じ品でもそれぞれ微妙に差異とか癖があるから、そんなぶつつけ本番じゃ危ないよ！」

「確かにそうね。オルタータ火山は今までより厳しい環境だし……カイも疲れてるだろうから、今回は休んでいなさい」

「……了解」

カイの言葉にフアラが腰に手を当てて注意するとアンジュも同意してカイに今回は休憩を命じ、カイは渋々頷いた。

それからアンジュはホールへと戻り、キールから聞いたオルタータ火山への調査依頼を纏める。

「とりあえずルビアとウイルさんが調査をしてくれることになったけど、やっぱり前衛も必要よね……」

「アンジュさん」

「ん？」

アンジュがぶつぶつと呟いていると突然女性が彼女に声をかけ、アンジュも顔を上げて相手を見ると微笑む。

「あら、レイさん。何かご用?」

「オルタータ火山への調査依頼ですが、私も同行したい」

「あら、いいの?」

「はい……なんとなく、行かねばならぬ気がして……」

レイは何か真剣な目をして呟き、それにアンジュは首を傾げる。

「へえ?……了解、登録しておくわね。後一名、探しておいてくれない?」

「了解した」

彼女の残り一名同行者を募っておくようにという指示にレイは頷き、その場を歩き去る。アンジュはそれを見送った後、依頼書のメンバー表に「レイ」の名前を書き足した。

## 第七話 火山での騒動。赤い煙

「ああ……暑い……」

「大丈夫？ ルビア？」

「調査のためとはいえ、こんなに暑いところだなんて……」

「うむ、少し暑いな……」

オルタータ火山。ここを歩きながらだるそうにルビアが呟くとカノンノが足を止めて心配そうにルビアに尋ね、それにルビアが少しぐでつとした様子で呟くとレイがそれに賛同する。とルビアはむつとした顔を見せた。

「レイさんはまだいいじゃないですか半袖だしおへそか出てるし！」

「あはは……」

ルビアの言い分にレイは「ふむ……」と呟く。たしかに彼女は現在歩兵猟隊シリーズという、腕は肘から先を籠手で、足は膝から先を足防具で覆っているものの逆に二の腕や膝から上は丸出し。胴部分も丸出しで、胸当てがついているぐらい。一言で言えば胸が強調され、露出の多い格好になっている。それに対しルビアの服はもこもことした感じであり、いかにも熱がこもりそうだ。そのルビアのぶんぶんといったげな文句にカノ

ンノは苦笑を漏らす。

「それにしても、キールが聞いたという情報が気になるな。赤い煙か……」

と、そのガールズトークの後ろでこの仕事に同行、メイン調査を担当するウィルが呟く。

「採掘の際に、有害なガスが噴き出したのか……」

「ここは火山だし、空気の悪そうな所だし……」

ウィルの言葉にぐったりしているルビアが呟くが、ウィルは小さく首を横に振る。

「しかし、他の土地でもあったとなると、火山性ガスなどの類ではない。生物に変化を及ぼす物質など、俺も聞いたことがないしな……星晶との因果関係もまだ……」

「ああもう！」

ウィルが冷静に分析しているとルビアが爆発したように声を上げた。

「じつとしていた方が暑苦しいわ！ 早く先に進みましょう!!」

「そうだな。とつとと調査を終わらせるとしよう」

ルビアの言葉にレイが頷き、彼女が先頭を歩き始めるとカノンノは術士二人につくようにしながらその後続いた。

「しかし、触れるだけで生物に変化を及ぼす物質、か……そんなものが本当に存在しているなら、大変なことになるな」



「そうね……どうして、そんな恐ろしいものがいきなり出てきたのかしら……」

「理由はともかく、だ。重要なのは、生物を変質させるといふその現象であり、事実」

最後尾を歩くウイルが真剣な目つきを見せながら呟き、それにルビアも頷くとウイルは考え込むように目を閉じた。

「俺の想像をはるかに超える貴重な生体サンプルが採取できるかもしれん。この地上に存在しない、別の何かに変化するだ……」

そう呟いた瞬間、彼はカッと目を見開いた。その勢いは目から光を放っているような錯覚さえ見せる。

「それが本当に事実なら、サンプルをいくら採取しても足りないくらいだ！」

叫び、彼は近くにいたルビアの肩に両手を置く。

「ルビア！ その時はぜひ、君も採取に協力してくれ!!」

「えっ……でも……」

「よし！ その物質とやらに、早く対面しに行こう!!」

ウイルの突然の申し出にルビアが委縮するとウイルはそう言ってレイを追い抜いて先に歩き出す。

「……な、なんだ？」

「あ、あはは……ウイルさんの病気みたいなものだから、あまり気にしないで？」

レイがきよとんとしているとカノンノが苦笑交じりに答える。

「学者つて、みんなこういうものなのかしら……はあ……」

その後ろではルビアが呆れたようにため息をついていた。それから彼女らはすたすたとウイルの後を追うように歩いていく。

「……カノンノさん」

「なにかな……」

レイの言葉にカノンノは目を細めながら呟くように聞き返す。

「あそこで赤いオタオタにフルボッコにされているのは、ウイルさんのように見えるのだが……」

「うん、ウイルさんだね……」

レイの言葉にカノンノとルビアは頭を抱える。彼女らの目の前ではウイルが赤いオタオタ——オタレドに囲まれウイルはハンマーを振り回してどうにか応戦しているが

彼は筋骨隆々な見た目でも後衛型。多数相手には分が悪かった。

「ルビア、私とレイでウイルさんを助けるから援護お願い」

「うん……」

カノンノが大剣オータムリリイを構えながらそう言うのとルビアも領いて杖を構え、レイも自身の剣バスタードソードを右手に握って地面を蹴り、左手で銃を抜く。

「はあああああつー！」

ウイルがいる方に突っ込みながら、彼に銃弾が当たらない位置にいるオタレドに射撃し、攻撃および威嚇を行う。

「瞬迅剣ー！」

そしてウイルに飛びかかっていたレドオタに鋭い突きをくらわせる。

「大丈夫ですか、ウイルさん？」

「あ、ああ……すまん、助かった」

「もうウイルさん！ 後衛なんですから一人で先行しないでくださいー！」

「む……返す言葉もない」

ウイルはレイに対してお礼を言い、カノンノの正論での注意にうつむき気味になって返す。それからレイは銃を上空に向けて引き金を引き、バンバンという銃声が響き渡る。

「さあかかってこい!!」

相手の意識を自分に向けるための挑発。それを受けたのかオタレドや赤いチュンチュン——ボーボーがレイとカノンノに向かっていき、レイは銃を腰のホルスターに収めると背負っていた盾を左手に構える。

「いくわよ、アイシクル!」

ルビアが詠唱と共に氷のマナを凝縮、それを解放するとオタレドが突如地面から生えた氷の棘に貫かれる。

「空蓮華!」

そこにカノンノが剣を支えにして蹴りを入れ、続けて大剣を振り下ろしてトドメを刺す。

「お仕置きだ……ライトニング!」

「剛・魔神剣!!」

ウィルはボーボー目掛けて落雷を落とし、動きを止めたところでレイが剣を地面に叩き付け巨大な衝撃波を放って動きを止めたボーボーを自分が狙っていたオタレドごと打ち倒しさらにオタレドは左手に握った盾でぶん殴って追撃する。そして盾をその場に放り捨てると素早く再び銃を抜いた。

「ヒートバレット!」

そして左から右に振り抜くようにしながら銃弾を連射、魔物達を威嚇し足止めする。

「氷結よ、我が命に答え、敵をなぎ払え！」

「飛散せよ流転の泉！」

その時、ウイルとルビアが魔術の詠唱を終えた。

「フリーズランサー!!」

「スプレッド!!」

ウイルとルビアの周囲に水のマナが集中。ウイルの周囲から氷の槍が弾丸のごとく放たれ、さらに火山に住む魔物達は未経験だろう水流が押し寄せ、魔物達を押し流し氷の槍が貫いていった。

「みんな、良くやった」

魔物の全滅を確認し、ウイルがハンマーの柄を地面に置くように構えてそう言うトルビアが彼にジト目を向け、その意味を悟ったのかウイルはごほんと咳払いをする。

「その……すまなかつた。少し熱くなつてしまつた……」

「まったくもう。ウイルさんがこの中で一番大人なんだから」

「か、返す言葉もない……」

ルビアの説教にウイルはしゅんと小さくなる。とその時火山の奥の方から妙な、ズゴゴゴゴ、という音が聞こえルビアが音の方を見た。

「何かしら、今の音……」

「ここは近年、安定した状態と言われているが、見たところそうでもないらしいな」  
ルビアの呟きにウイルもすぐ真剣な表情に変わり、呟く。

「こここの火山活動が、活発になっていてるって事？」

「ああ。星晶の採掘は、自然にも影響を与えてしまう」

「星晶も、土地に恵みを与えるマナそのものでもあるからなのね」

ウイルの呟きにカノンノが尋ね、ウイルがそれを肯定するとルビアが続け、それにウイルは再び頷いた。

「この火山でも、採掘は行われた。マナの恵みがなくなり、不安定な状態になっているの  
だろう」

「星晶がエネルギーとして使用されるようになるまで、人々は世界樹が生み出すマナだけで生きていたのに……昔の人は、マナを生み出してくれる世界樹に感謝をささげていたのに、今の人や文明は星晶をむさぼるばかり。感謝する事すら忘れているわ」

「星晶を採掘し尽くしてしまうと、もう人々は今のような豊かな暮らしは出来なくなる  
な」

ウイルの説明を聞いたルビアはどこか悲しそうな様子で言うとうイルは腕を組んで呟き、「だが」と続けた。

「もつと恐ろしいのは世界樹が生み出している非物質のmanaをエネルギー利用する技術が出来た時だ。そうなれば、人々はこの世界の生命を支えるmanaまでも奪い尽くすだろう。一時の繁栄と引き換えに世界樹は枯れ、世界は滅亡してしまう」

「星晶に頼らない世界になればいいな……早く、オルタ・ビレッジが実現すればいいのに……」

ウイルが口にする最悪の未来を聞いたルビアが眩き、カノンノもうんと頷く。

「……」

と、レイが無言のまま火山の先に歩きだしカノンノがそれに気づくと三人も彼女の後について行った。

「レイ！ 待つてよー！」

カノンノが大慌てで叫ぶ。歩き出したレイはまるで何かに導かれているかのように、入り組んだ火山の道である岩の上を迷うことなく歩いているのだ。魔物も襲い掛かっ

てくるがそのほとんどを剣と銃で威嚇し、追い払っていた。まあその代わりウィルとルビアという術士二人を守りながら戦っているカノンノの負担が大きくなっており、三人はレイを見失わないようにするのが精一杯という有様になっていた。

そして火山の最奥地だろう、採掘場のような場所にやってくるとレイはぴたりと足を止めた。そこにカノンノ達も追いつくが、そこにいるものを見るとルビアがぎよつとした目を見せる。

「む、虫?!」

ルビアのいう通り採掘場には虫がおり、カノンノも若干引いている。が、レイは気にする様子を見せずにその虫を拾い上げた。

「黒くて、羽があつて……背中がてかてかしている……」

虫を観察し、ぼそりと呟く。

「そ、それは!!」

と、レイが拾い上げた虫を後ろから覗き込んだウィルが声を上げた。

「ここにしか生息しない貴重な生物、〃コクヨウ玉虫〃だ!!」

「こんな環境で虫が?……動かないわ。死んでる?」

ウィルの説明口調にルビアが尋ねるとウィルは辺りを見回し、何か植物を見つけるとそっちの方に歩いていく。レイもコクヨウ玉虫を元いた場所にゆつくり下ろすとウイ



ルの方を見た。彼は腰を下ろして何か植物を観察しているようだ。

「コクヨウ玉虫は、この苔を食するのだが……こいつも枯れているな……不安定な地熱のせいで枯れたのだろう。やはり、星晶の採掘が原因かもしれないな」

ウイルはそう呟いて立ち上がり、残念そうな目で苔とコクヨウ玉虫を見る。

「コクヨウ玉虫に、この苔……どちらも貴重な種だというのに……」

彼がそう呟いた瞬間いきなりひび割れた地面から何か、赤い煙のようなものが浮き出るように現れた。

「これって、赤い煙!？」

ルビアが一步下がって叫び、レイはルビアとカノンノを庇うかのように数歩前に出る。と、赤い煙はまるでまとわりつくようにコクヨウ玉虫と苔に向かっていく。そして吸い込まれるように煙は消えていった。

「この煙の動きは……なんだ、今のは……あの赤い煙、まるで意思があるように動いていた……」

ウイルはそう呟き、考えるように顎に手を当てる。

「これは、単なる有毒なガスなどではなさそうだ」

そう呟いたウイルはその直後、自分の視界の端で何かが動いているのに気づき、その動いたもの——コクヨウ玉虫の方に歩いていくと屈みこんでその虫——さつき赤い煙

にまわりつかれていたものだ——を見た。

「む？……まだ生きているようだな。ならば、こいつを持って帰るか」

「ええ〜！ 気持ちわる〜い!!」

ウイルの言葉にルビアがブーイングを出す。が、ウイルはコクヨウ玉虫を懐から取り出したハンカチでくるむように持ち上げた後、フィールドワークで使うのだろう小さなカゴに入れる。

「だが、今の赤い煙が生物変化の要因かもしれない。調べれば何か分かるだろう」

「それじゃあ、早く戻りましょう！ こんな場所、もうこりこりだわ！」

ウイルがそう言うのとルビアはそう言っただ道を戻ろうとし、ウイルも「むう」と唸ってその後を追い、カノンノも歩き始める。が、その場所を出る前に振り向く。採掘場の中央で、レイはぼうつと立ち尽くしていた。

「レイ、どうしたの？」

「……………ん？ ああ……………」

カノンノの呼びかけにレイはようやく気付いたように頷き、カノンノと一緒に採掘場を去っていった。

「今回、赤い煙が本当に現れたのは、収穫だったね」

「あの場で生物変化は確認できなかったが、現れたあの赤い煙……奇妙な事に、生きている虫にしかまとわりつかなかった。持ち帰った虫を調べてみたが、取り立てて変化はない。ほんのわずかだが餌も手に入れられた。しばらく飼育してみようと思う」

アドリビトムの拠点であるバンエルティア号でウイルスが報告、それにアンジューは「はい」と頷いた。

「ですが、管理はしっかりとお願いしますね？」

「もちろんだ」

アンジューの念を押すような言葉にウイルスはにやり、と笑みを浮かべながら頷いた。

その頃甲板。カイはここで新しく買ったアイアンサーベルを手になじませるため模擬戦を行っていた。今回の相手はルカである。ちなみにカイは武器と一緒に防具も新調し、サバイバル活動に適したオーバーオールであるサバイバルオーバーオールに同じ

くサバイバル活動に適したゴーグルのサバイバルゴーグルを額にかけ、籠手には小さな金属板をあしらった水色が基調となっている布のガントレットであるトランクガントレットと足には同じくトランクレギンスを装着していた。

「弧月閃っ！」

ルカは剣を振り上げて三日月の軌道をえがくかのごとく相手に斬撃を見舞うがカイはそれをバク宙でかわしながら懐から苦無を取り出し左手に握った。

「曼珠沙華！」

「わわっ!? し、真空破斬っ!!」

放たれる炎を纏った苦無。それを見たルカは焦りながらも地面に足がつくと同時に大剣を振り回すように回転、力を解放して思いっきり振るい苦無を薙ぎ払った。だが、カイも地面に着地すると同時に地面を蹴る。

「影走斬！」

「うあっ!!」

一気に加速し、素早くルカへの間合いを詰めて刀を一閃。ルカは痛そうな悲鳴を上げた。

「そこまでっ！」

そこでクレスが右手を上げて模擬戦終了を宣言。カイはふうと息を吐いて刀を鞘に

収めた。

「どうかな、カイ？ 大分馴染んできた？」

「ああ。もうなんとかなりそうだ」

「そっか、よかった……」

クレスの言葉にカイが頷いてそう言うのとルカは安心したように頷いてすうすはあすと呼吸する。

「呼吸を意識して……」

特殊な呼吸法で大気中の気を体内に取り込み、体力を回復する特技、集気法。クレスとカイが会話している間にルカはその練習を行っていた。

「ん？」

「誰か来たか？」

と、クレスとカイが人の気配に気づき、直後船にうさくさいおっさんと、長身で露出が多くグラマラスな体型をした綺麗な女性が船に乗り込んできた。

「よう、少年。アドリビトムってギルドはここでよかったかな？」

「……」

おっさんの言葉にカイは僅かに身構える。なんか左手に苦無をこっそり握り臨戦態勢まで取っていた。

「あらー。おっさん、そんなに怪しい？ おっさんの魅力に胸がどきどき？」

「あら、この人があなたの魅力を分かってくれる人だったらいのだけれど」

「……ジュデイスちゃん……」

と、何をどう思ったのかおっさんはふざけたように笑いながらそう言い、それに綺麗な女性がそう言うとおっさんはがくんと肩を落として呟く。それをちらりと見てから次はジュデイスと呼ばれた女性がカイに話しかけた。

「私達、ここで働きたいの。リーダーはどちら？」

「……呼んできます」

女性の言葉にカイは静かにそう呟き、船内に入っていく。それからほんの少し間をおいて船内からカイとアンジュが姿を現した。

「このギルドのリーダーかしら？」

「はい、私がこのギルド、アドリビトムのリーダー。アンジュです。何かご用でしょうか？」

女性の問いかけにアンジュはそう言い、笑顔を浮かべて用を伺う。と女性は自らの胸にふわりと優雅な動作で手を当てた。

「私はジュデイス。そして彼が……」

「俺はレイヴン。ここにユーリのおんちゃんいるつしよ？ 俺達、あいつが元いたギル

ドの仲間なのよ」

女性——ジュデイスは自分の胸に手を当てて名を名乗った後うさんくさいおっさんの方に手を向け、それにおっさん——レイヴンが名乗り、続けて説明する。それから再びジュデイスが口を開いた。

「エステルの依頼を受けた後で彼、指名手配になったでしょう？」

「そーそー。そのせいで俺達のいたギルドまでガサ入れが入っちゃって、エステル嬢ちゃん誘拐の手引きをしたと疑いがかけられてるのよ」

ジュデイスの言葉に続けてレイヴンが困ったように肩をすくめるが続けて「ま、手引きをしたのはウソじゃないんだけどね」と言つて飄々と笑う。

「そんで、ガルパンゾをしばらく出た方がいいんじゃないかねって」

「ユーリがここで仕事をしてるって噂を聞いたから来てみたの。どうかしら？　ここで働かせてもらえない？」

「オツケーよ。それじゃあ、加入の手続きをするね」

レイヴンとジュデイスをアンジュは快く受け入れ、それを聞いたレイヴンは安心したように空を見上げて大きく息を吐く。

「ふいー。やっと逃亡生活とおさらばなのね。んじゃ、これからよろしくな、少年！」

「……ああ」

レイヴンの言葉にカイはまだうさんくさくて怪しいとも思っているのか、少し怪訝な目を向けながら静かに頷いた。



## 第八話 坑道にて行動？ 新たな力と新たな謎

コンフエイト大森林、チュンチュンの大群がバサバサバサという音を響かせてその森の上空を飛び回っていた。それはまるで強大な外敵から逃げるかのように焦っているように見える。

「はあっ!!」

直後チュンチュンの真下の森から飛び出る青い稲妻、いや、女性はその長身以上の長さを持つ槍を軽々と振り回してチュンチュンに向かっていく。

「ピイッー!」

悲鳴のような泣き声を上げるチュンチュン、しかし直後その小さな身体に槍による斬撃が加えられさらにその女性の長い脚の回し蹴りが入ったと思うともう片方の足で蹴り落とす奥義、飛燕崩蹴月が直撃。攻撃を受けたチュンチュンは錐揉みしながら力なく落下していった。

「!」  
「ピイイッ!!」  
「!」

と、仲間が倒されたのに怒ったのか逃げていたチュンチュンの内数匹が女性に牙を、  
というか嘴を向ける。

「震天!!!」

しかしそこに矢が森から放たれたと思うと女性に当たらない位置に彼女を守るよう降り注ぎ、チュンチュン達はそれに威嚇される。

「貪欲なる暗界、ここに下り、邪を打ち砕かん……」

さらに森の中からそのような言葉が聞こえ、森の中に闇のManaが立ち込める。

「ネガティブゲイト!!」

そして闇のManaが解放されると同時に、チュンチュンのいた空間が闇に歪められチュンチュン達を引き裂く。

「!!!!!!」

連続攻撃にチュンチュン達がパニックに陥り、女性はふふつと妖艶に微笑むと重力に従って一旦森の中へと帰還、手近な木の枝の上へと降りると近くの木の枝の上に現れた青年を見てふふつと微笑む。

「準備は万全?」

「ああ。チェスターとリタを狙いそうな魔物は大方倒しておいた。心配はいらない」

「そう、頼もしいわね」

女性の言葉に青年は静かに報告し、女性は再びふふつと微笑む。

「揺らめく焔、猛追……」

木の下の方ではゴーグルを額につけた茶髪で左右非対称な服装アシシメトリイをしている少女——リタが詠唱を行っており、彼らよりは低い位置にあるものの広く丈夫そうな枝の上では水色の長く伸ばした髪を後ろで一本に結んだ、軽装に弓を携えた青年——チェスターが弓に矢を番え上空に向けている。

「カイ、合図は二人の攻撃よ?」

「分かつてる。ジュデイスこそ遅れるなよ」

女性——ジュデイスの念押しに青年——カイは右手に刀を、左手に短剣を両方逆手に握りながら返す。

「フアイアボール!」

「疾風!!」

リタが叫ぶと同時に彼女の周囲から火の玉が、チェスターが叫び弓から矢が放たれたのと同時にカイとジュデイスも上空にいる、今は火の玉と矢に牽制されているチュンチュン目掛けて飛び出した。

「飛燕連脚!」

空中で回転し、チュンチュン目掛けての連続蹴り。それは不安定な空中で小さなチュンチュン相手にも関わず全ての蹴りを当ててみせた。さらにその回転を利用し、別のチュンチュンを刀で斬ったり短剣による牽制までしている。

「ほらほら、くらいなさいっ!!」

一方ジユデイスも目を爛々と輝かせながら槍を振るいチュンチュン達を叩き落とす。しかし元々彼女は露出過多と言えそうなほど軽装であり特に胸元が開いた服装をしている。さらにダイナミックに空中を動き回っているためその豊満な胸がかなり揺れていた。ちなみになんか森の方から「おっつ」という歓声が聞こえてきている。

そして攻撃が終了し、カイとジユデイスは地上へと着地。カイは短剣を腰の後ろに着けた鞆に、刀を左腰に提げている鞆へと納め、ジユデイスは槍をひゅんひゅんと振り回してポーズを決めた後、辺りに落ちていているチュンチュンの死骸に向けてちゅつと投げキッスをして見せた。

「強くてごめんなさい」

投げキッスと共に勝利の台詞を決める。と、カイは木の上からチェスターが降りてきたのに気づいて首を傾げた。

「チェスター、なんでジユデイスを拜んでるんだ?」

その言葉通りチェスターは顔を赤くしてジユデイスに向けて手を合わせている。

「な、なに言ってるんだよ!?! 男子として健全な反応だろうか!?!」

「?」

カイの言葉を聞いたチェスターがカッと目を見開いて熱弁する。しかしカイはきよ

とんとした、というか「こいつ何言ってるんだ？」と顔に書かれているような表情で、彼の返答の意図を理解できていない様子を見せていた。

「怒りを穂先に変え、前途を阻む障害を貫け……」

と、いきなりリタが詠唱を開始する。その額には怒りマークがくつついており、目元には影が出来ていてそこからは表情がうかがえない。しかしチェスターはぎくつとばかりにのけ反った。

「い、嫌な予感……」

のけ反った彼が眩いた瞬間リタの目元が明らかに、彼女は怒りに燃えた目でチェスターを睨みつけた。

「吹っ飛ばせ変態っ!!! ロックブレイク!!!」

「ぎゃーっ!!!」

リタが叫ぶと同時にチェスターの真下の地面が割れ、大地の槍——と描写しておいてなんだが先端は平らになっており、石柱と言う方が正しいだろうか——が勢いよく突き出てチェスターを吹っ飛ばす。その高度はさつきカイとジユデイスがチュンチュンと空中戦を繰り広げた時の高さにも勝るとも劣らなかつた。

「おー飛んだ……これをジャンプに応用すればクレス達も空中戦に……」

「あら、面白い考えね……まあ、まずは着地を考えなければならぬと思うけれど」

カイは吹っ飛ばされたチエスターを見ながらこの手段を戦闘に應用できないかと考え始め、その発想を聞いたジユデイスはクスクスと笑った後ひゅーっという擬音が聞こえてきそうなほど見事に空中から落下してきているチエスターを一瞥した。

「はい。チュンチュンの羽、間違いなく受け取りました。お疲れ様、これでこの仕事は終わりね。はい、これ報酬ね」

「はい。じゃあ三人とも、今日はここで解散で。今回はありがとう」

「おう。また何かあったら呼んでくれ」

「ま、暇なら付き合っただけよ」

「それじゃあね」

アンジュはカイから受け取った羽——今回のクエストで納品を依頼されたものだけ——を確認し、報酬をクエストを受けた四人に渡す。それを受け取ったカイも一つ頷いた後振り向いて解散とお礼を告げ、身体中ボロボロになっているチエスターはにっこり微笑んでそう言う。「いてて」と呟きながら部屋へと戻り、リタは興味なさげにひらひらと手を振ってそう言う。「研究室へと向かう。そしてジユデイスも妖艶に微笑んで手を振り、部屋へと戻っていった。」

「あ、カイさん。お帰りなさい」

「お帰りなさい。怪我などはしませんでしたか？」

と、医務室がある方の通路からエステルとアニーが現れ、カイを見つけると挨拶してきたのでカイも軽く右手を挙げて応える。

「ああ、心配ない」

「そうですか」

「あの、ところでカイさんが受けていたクエストってたしか、恋占いっていうものですね？」

「……ああ、そうだったか？」

怪我をした様子はないカイにアニーが安心したように微笑むとエステルが目キラキラと輝かせながら問いかけ、カイは首を傾げてクエスト内容を思い出す。そう言われてみれば確かにディアナという細工商人が恋占いで見た、持っていたら良いアイテムであるチュンチュンの羽を納品するようお願いしていたように思える。

「恋ですか……いいですね」

と、アニーとエステルは両手を合わせて優しく握りながらほわほわとした様子を見せ始める。

「そうなのか？」

「そうですね! 恋って言うのはとても素敵なんです! 男性と女性がお互いに恋い焦がれ、一途に思い合う……!」

「私とアニーは恋愛小説仲間なんです。あの、カイさんもどうですか?」

「……よく分からん」

アニーとエステルの言葉にカイは首を傾げる。

「アンジュさん、お客様だよ!」

「すみません……アドリビトムというギルドはこちらでしょうか?……」

と、いきなり扉が開いて気分が悪そうな男性がカノンノと一緒にホールに入りながらそう尋ねてきた。

「はい」

「私は、モラード村から来ました。ジョアンと言います。ここへ、依頼をしに来たんですけど……」

「どういった依頼でしょうか?」

男性——ジョアンの言葉にアンジュは微笑みながら応対する。

「ゴホツ!……ブラウニー坑道の奥地へ行きたくて、護衛を……ゴホツゴホツ……お願いしたいんです……」

「あ、あの、お薬を持って来ましようか?……」



「よければ簡単に診察などいたしますが……」

ジョアンは咳き込みながら依頼内容を伝えており、その顔色の悪さを見たカノンノとアニーが心配そうにジョアンに問いかける。が、ジョアンは力なく首を横に振った。

「いいえ、私の病気は薬では治りません。医者ですら、さじを投げたんですから……」

「そんな状態で魔物がいる坑道に行くって……死にたいのか？」

「カ、カイ!! ぐ、ごめんなさいジョアンさん!」

ジョアンの言葉を聞いたカイがドストレートに言葉を叩き込み、カノンノが焦ったようにカイを怒鳴った後ジョアンに頭を下げる。が、ジョアンは力なく笑った。

「いえ、そう言われてもおかしくはないと分かっています……ですが、この病気を治す方法が……」

ジョアンはそう言い、苦しげに深呼吸をして一拍置く。

「そのブラウニー坑道の奥には、病気を治してくれる存在が、がいるそうなので……」  
「病気を治す?……」

ジョアンの言葉にアンジュが怪訝そうな声を漏らす。

「護衛を……ゴホッ……引き受けていただけますか?……」

「はい……依頼とあれば……」

ジョアンの願いを込めるような目での言葉にアンジュは少し齒切れの悪い様子で返

し、ジョアンは受けていただけの時に連絡を下さいと言い残し、連絡先のメモを残すとやはり咳き込みながら船を出ていった。

「病気を治す……そんな存在、聞いたことがないけど……」

ジョアンが出ていったのを確認してからアンジュがむうと唸りながら呟く。

「アンジュさん」

「ん? 何?」

考え事をしているアンジュにカイが話しかけ、アンジュは顔を上げるとカイの方を向く。

「その依頼、俺が受けます」

彼はいつものように一番に依頼を受けると発言。それに続いてカノンノが手を挙げ  
る。

「じゃあ私も一緒に行きます!」

「はい。決まりね……じゃああと二人、エステルとアニー、お願いできるかな?」

「あ、はい、私は大丈夫で——」

カノンノの言葉を聞いたアンジュは頷いて依頼書のメンバー表にカイとカノンノの名前を書いてから丁度そこにいたエステルとアニーにも同行をお願いし、アニーがそれに頷こうとした時だった。

「アニーさん！ 傷だらけになって帰ってきたチェスターが急に倒れたんだ！ 手当てをお願いできるかな!？」

突然クレスがチェスターに肩を貸しながら現れ、その状態を見たアニーが目を見開いた。

「ひ、酷い怪我?! 一体どうしたんですか!？」

「ああ、さっきのクエストでチェスター、なんかジュデイスを拝んで健全な男の反応がどうのこうの言ってたらリタにロックブレイクで吹っ飛ばされてた」

『……』

アニーの叫びにカイがチェスターの怪我の理由を説明、その場にいたカイとクレス、ミントを除く全員が冷たい目でチェスターを見てクレスとミントが重いため息を漏らす。が、この船の医者としての責任感からかアニーがゴホンと咳ばらいをした。

「では急いで医務室へ！ ごめんなさいアンジュさん、今依頼を受けるのは無理になりました!」

「え、ええ……」

アニーの言葉にアンジュも流石に苦笑を漏らし、アニーはチェスターを運ぶクレスと共に医務室へと走る。と、エステルが申し訳なさそうに手を挙げる。

「あの、私も今日はちよつと……キールさんやウィルさん達と例の赤い煙と生物変化現

象についてお話をする予定が……」

「そう……それは仕方がないわね」

「はい。少しでも今分かっていいる事を聞いておきたいので……」

「……分かったわ。じゃあカイとカノンノは決定、残る二人は私の方で探しておくから今は解散して」

「はい」

エステルも大事な用が入っているらしく、アンジュは領いた後残り二人は自分が探すから今は解散とカイとカノンノに伝え、二人も領いて返した。

それから場所はブラウニー坑道へと移る。

「ジオアンさん、大丈夫ですか？ 歩くのもつらそうなのに、そんな無理をしてまで行くなんで……」

今回のクエストの同行者の一人である少女——マルタが、辛そうに歩いているジオアンに心配そうな目を向けて話しかける。

「はあ……はあ……これが……私にとつての……最後のチャンスなんだ。生き延びるための……」

「生き延びるための……」

ジョアンの言葉にもう一人の同行者——ファアラが声を漏らす。

「私は、もう……長くないんだ。医者も見放した病気でね……」

そう言った瞬間ジョアンはゲホゴホと咳き込んだ。

「だけど、この奥にいるという病気を治してくれる存在に会えれば……」

「病気を治してくれる存在なんて、本当にいるのかなあ……」

「それは行ってみないと分からないよ」

ジョアンの言葉にマルタが疑わしげな声を出すとファアラがそう返す。

「安心してくれ」

と、いきなりカイが口を開いた。

「ジョアンさんは俺達が責任を持って守る。アンジュさんにそう言われたからな」

カイは真剣な目でそう言い、刀を抜くと肩に担いだ。

「カノンノ達だつて俺が守ってみせる」

まるでさっきの言葉を言いかえるように言うカイに、ジョアンは苦しそうながらも微笑ましそうに微笑んだ。

「不思議ですね。彼の言葉はどこか安心できる気がする……」

「うん。カイって素直で真面目だから」

「ちよつと融通きかないところあるけどね。素直すぎるっていうか律儀すぎるっていうか」

ジョアンの言葉にカノンノが微笑みながら言うとその横でマルタが目を瞑りやれやれというように肩をひよいつと上げてそう言う。それにフアラがあははと笑った。

「たしかにそうかもね。でもカイは出来ない事は隠さず出来ないって言うから、ジョアンさんを守るのはやってみせると思うよ」

「うん、そうだね。カイは強いもん。もちろん私達だつて負けてないから、ジョアンさんも安心してくださいね」

「は、はい……よろしくお願いします」

「うん、イケるイケる!」

フアラの言葉にカノンノも賛同、ジョアンがぺこりと頭を下げてくださいするとフアラは元気よくそう言い、彼らは歩き出した。

「あくあ、エミルう……」

「マルタつて、本当にエミルの事が好きなんだね」

と、最後尾を歩いているマルタがいきなり声を漏らし、それを聞いたフアラがふふつ

と笑ってそう言うのとマルタは驚いたように「えっ」と声を漏らした後照れたように頬を桃色に染める。

「……………う、うん……………」

「ほんとは、エミルと一緒に来たかった？」

「そんな……………ダメだよ、こんな薄暗い場所でエミルと二人つきりなんて!」

マルタの言葉にフアラが微笑みながら問いかけると彼女はいきなり慌てたように首を横に振る。が、その次に彼女は「でも……………」と続けた。

「……………あゝくん、どうしよう。私、エミルとだったら……………」

「えつと……………ジョアンさんの事忘れてない？」

「……………」

赤く染めた頬に両手を当て、ハートマークを乱舞しながらいやんいやんと顔や腰を振るマルタにフアラは苦笑いしながら問いかける。その隣ではジョアンも苦笑いを漏らしていた。

「二人とも、敵だよ!」

「!!」

そこに響くカノンノの声で二人の意識が素早く切り替わる。カイ達の前で数匹の

バットが羽ばたいていた。

「俺とカノンノが前衛を戦う! マルタはジョアンさんを守りながら術で援護、フアラはジョアンさんの護衛に集中してくれ!」

「了解!!」

バット目掛けて牽制の苦無を投げながらカイが指示を出し、女子三人は頷いてカノンノは大剣オータムリリイを手にバットへと斬りかかり、マルタは詠唱を開始。フアラはジョアンの近くに立つと近くに伏兵の魔物が潜んでいないか注意を払い始めた。

「土竜閃!」

刀を地面に突き刺し刀を介して大地のmanaを送り込み、目の前に岩の槍を具現させる技——土竜閃、それがバットの動きを止め、

「来たれ爆炎、焼き尽くせ——」

そこに詠唱していたカノンノの周りに集った炎のmanaが解放される。

「——バーンストライク!!」

バット目掛けて降り注ぐ爆炎、それが土竜閃の岩槍ごとバットを打ち砕いた。

「地裂……いや——」

そこにカイが追い打ちに大地を抉り地の力を得た衝撃波で攻撃を仕掛ける技——地裂斬を放とうとするが、その刀に炎が宿ったのに気づくと笑みを見せる。



「——魔王炎撃波!!!」

叫び、刀を振るうと同時に灼熱の炎がバットを呑み込み、消し炭に変える。

「わー! カイ、凄いつ!」

いきなりの剣技にマルタが目を輝かせ、ぱちぱちと拍手する。と、その横から息を飲む声が聞こえた。

「マルタ、危ないっ!!」

「えっ!?!」

ファラの声が響き、その直後彼女も気づく。自らの近くからバットの羽音が聞こえてきている事に。

「きゃっ!」

「掌底破っ!」

咄嗟にマルタが頭を抱えて伏せたところにファラが突進、バットを気を込めた掌底の一撃で吹き飛ばし、坑道の岸壁へと叩きつける。しかしジョアンの護衛を担当していたファラがマルタの方へと移動、それはつまり現在ジョアンが無防備になった事を示していた。

「うわあああああっ!!」

ロツクルがゆっくりとジョアンに近づいていき、彼の悲鳴が坑道に響く。

「ぐうっ!!」

直後聞こえるくぐもった悲鳴。しかしそれはジョアンのもものではなかった。

「カイ!?!」

カノンノがオータムリリイを振り回しながら叫ぶ。カイは忍者として鍛えた瞬発力を駆使し、一瞬で前衛からジョアンがいた戦闘範囲外のエリアまで疾走。しかし同時にロツクルに反撃するまでは間に合わず、ロツクルの長い頭部を叩きつけるような攻撃を右肩に受けてしまったのだ。しかしカイはロツクルを睨みつけると左手を腰の後ろにやり、そこに挿していたナイフを引き抜きつつロツクルに斬りつけた。

「幻魔裂衝!!」

左手のナイフで左右に斬り払い、続けて地面を叩くと共に衝撃波を前方に放って追い打ちをかけ地面から噴き出す形で現れた衝撃波がロツクルを宙に浮かばせる。そこにマルタが追いつき、武器であるスピナーを回転させつつ自分もくると回転する。

「天翔舞!」

舞い踊るがごとく放たれた斬撃がロツクルを両断し、地に倒れ伏させる。

「……カイ、ジョアンさん、大丈夫!?!」

「あ、は、はい。私はなんとか……」

「俺も平気だ」

ロツクルが動かなくなったのを確認してからマルタが慌ててカイとジョアンに尋ね、それにジョアンが頷き、カイも右腕を動かしながら返そうとするがその動きは若干ぎこちなく、彼に歩き寄ったカノンノが左手でカイの右腕を掴んで押さえ、右手をかざす。「癒しの力よ、ファーストエイド！」

「ジョアンさんも念のため……治癒功！」

唱えると共にカノンノの右手から光が発されその光がカイの傷を癒していき、ファアラも念のためとジョアンに治癒功をかける。と、マルタがそれを申し訳なさそうな様子で見えて頭を下げた。

「……ごめんなさいジョアンさん！ その、バツトくらいならカイとカノンノだけで大丈夫かならつて、ちよつと油断してた……」

「ああ、いえ……結果的に大丈夫だったので……」

「でも……」

マルタの謝罪をジョアンは弱々しくだが笑って許し、しかしマルタはまだ申し訳なさそうな様子を見せていた。

「大丈夫だよ。失敗なんて誰にだってあるって！」

と、そこにファアラが元気に笑って口を開いた。それにカノンノも微笑んでうんと頷く。

「そうだね。この失敗を胸に、次頑張ればいいよ!」

「フアラ、カノンノ……うん、分かった。もう油断しない!」

フアラとカノンノの元気づける言葉にマルタは感動したように呟いた後やつと元気な微笑みを見せて頷いた。

「話が終わったところで、急ごうぜ」

そこにカイがマイペースに歩き始め、カノンノが慌ててその後を追うとジョアンも苦しげな様子を見せながら歩き始め、フアラとマルタがジョアンさんの背後を守るように少し間をあけて歩き出す。

「フアラってすごいよね」

と、いきなりマルタが口を開いた。

「いつもなんでも、前向きに考えて行動してて……」

「ええ? どうしたのいきなり? そうかなあ」

マルタの言葉にフアラはびっくりしたように返し、その言葉にマルタが頷いた。

「そうだよ。私だったら、絶対〃そんなの無理!〃って言ってる事もフアラはとにかくやってみようって絶対あきらめないの。そういうのほんとにすごいなって思う」

マルタの尊敬している声にフアラは照れくさそうに頬をかいた。

「そりや、私だつて難しいなあつて思う事はあるよ？　だけど、最初からダメだなくつて思つてたら出来る事も出来なくなつちゃうかもしれないじゃない。それに、やつてみたら案外イケちゃうことだつてあると思うし」

「イケるイケる！　つてやつだね」

「そ。なんとかなるなる」

フアラの言葉にマルタが彼女の口癖を真似るとフアラは元気に微笑んでそう言い、それにマルタはえへへと笑う。

「なんとかなる、か……えへへつ。なんだかほんとにそんな気持ちになつてきたかも！」

「うん。ずっと失敗を引きずつてないで、次こそ頑張ろう！」

「うん！」

そして女子二人はお互いを元気づけるように頷きあつた。

それから彼らは坑道を進んでいく。と、さらに奥へと続く道が見つかったが、そこは鍵がかけられた扉に閉ざされていた。

「ジヨアンさん。この先、行き止まりになつてますよ……」

「はあ、はあ……こつちで、構わない……」

マルタの言葉にジョアンがそう言う、とカイが刀を抜いた。

「力づくで破るのか?」

「「おやめなさい!!」」

真顔でそう言うカイに女子三人がツツコミを入れて彼の前に立ちはだかる。

「「この鍵を……持っていますので……」」

女子三人がカイを足止めしている間にジョアンがそう言い、鍵を開けると扉を開く。

「ゴホゴホツ……目的地は、もうすぐだ……」

ジョアンはそう言って歩き出す。と、ふとマルタが疑問を思いついたようにジョアンの横に立った。

「あの、ジョアンさん。その病気を治す存在って、どうやって知ったんですか?」

言われてみれば当然の疑問だ。そもそも何故病気を治す存在なるものがここにいる事を知っているのか。

「ゴフツ……故郷のモラード村に、私と同じ病気に……ゴホツ……なったミゲルという男がいてね……」

マルタの疑問に対しジョアンが説明を始めた。

「彼はいい医者に見てもらおうと、この坑道を通って……ゴホツゴホツ……大きな街を

目指していたんだ。けれども、道中で発作が始まり、どうにも身動きが取れなくなって、死を覚悟……ゴホツゴホツ……したらしい」

ジョアンは苦しそうに咳き込みながらも説明を続ける。

「そして、ここで死ぬのかと目をつぶり、もつと生きたいと思っていたらゴホツ、ゴホツ……どこからともなく……赤い煙が現れたそうだ」

「赤い煙!？」

ジョアンの言葉の一部にカノンが反応する。

「赤い煙は周囲を包み、ミゲルはそれがあの世からの迎えだと思ったそうだ」

しかし気づいてか気づかずか、ジョアンは話し続ける。

「それから彼は『死にたくない、もつと生きたい』とゴホツ……そう、強く願った。すると、次に気がついた時は赤い煙はなく、すっかり病気は治っていたらしい」

「それが病気を治す存在なんだね」

ジョアンの説明を聞いたフアラがそう言い、「実際に体験した人がいたんだ。不思議な話……」と不思議そうに続ける。

「なんだろう、精霊みたいなものかな？」

「私にも分からないよ。けれども、私ももつと長生きしたい。その存在に会いたいんだ。本当に、藁にも縋る思いなんだよ……」

マルタが眩き、ジョアンは必死で願うようにそう眩くと大きく咳き込んだ。

「……………急ぐう」

「うん……………赤い煙、か……………あの時と同じもの、なのかな?……………」

カイが眩いて歩きだし、カノンも一つ頷いた後以前の火山での調査を思い出しながら眩いた。

「ねえ、ファアラ……………死を覚悟したことって、ある?」

「私? 私は……………」

殿を歩くマルタが再びファアラに話しかけ、ファアラはその質問に少し口ごもる。

「もし、自分が今ここで死んじゃうんだって思ったら……………その時誰を、何を思うものなのかな……………大事な人の事とか……………やり残したこととか?」

「……………どういふ状況で死を覚悟するのかにもよると思うよ」

マルタの言葉にファアラは心なしか浮かない顔で眩く。

「例えば、すごく……………取り返しのつかない失敗をして、色んな人に、たくさん迷惑をかけて。それで自分の命が危なくなったら……………やり残したこととか……………行きたいとか……………そういうのを思うのは……………難しいよ」



「うう、そうだね……それはそうかも……」

フアラは何か辛い過去を思い返すような様子で話し、その言葉を受けたマルタが困ったように唸ると、フアラはいきなりぱっと明るい表情を見せた。

「……なんてね。ちよつとシリアスになっちゃった。さ。先を急ごー！」

「……フアラ？」

まるで無理して明るく振る舞っているかのよう。その様子を見たマルタは少し怪訝そうな声を彼女に向けた。

それから彼らは目的地である坑道の奥地——二層目の最深ポイント——へとやってくる。

「目的地はここみたいだけど、魔物がいるよ！」

フアラが拳を構えながら叫ぶ。岩のような身体をした、というか文字通り岩で体が形成されている巨人のような魔物——ストーンゴレムだ。

「ちよつと大変そうな相手だけど、戦うしかないね！」

マルタもスピナーを構え、戦闘体勢を取る。

「はあ……はあ……お、お願いします！ アドリビトムの皆さん……」

「ああ。ジョアンさんは下がっていきたくれ……幸い、近くに魔物の気配はなさそうだ」

ジョアンの懇願の言葉にカイは頷き、辺りの気配を探って近くに魔物がいない事を確認するとジョアンに下がっているように指示をし、腰の刀を抜く。

ストーンゴレムが太い岩の拳をガンガンと叩きつけあつてこちらを威嚇し、ズウンと重量感あふれる足音を響かせてカイ達目掛けて歩き出した。

「土竜閃!」

刀を地に突き刺し、岩の槍をストーンゴレム目掛けて突き出させるがその岩はストーンゴレムにぶつかると同時に強度が足りなかったのか砕け散る。しかしカイはそれは予想済みだといわんばかりに不敵に笑った。

「獅子戦吼!!」

砕けた岩の影からカノンノとファアラが姿を現し、ファアラは合わせた両手の突き、カノンノは膝蹴りと共に獅子の鬨気を放つ。土竜閃はめくりましたというわけだ。だが、その獅子の鬨気を受けてなおストーンゴレムは怯まず、太い腕を思いつき振り回して、人間で言うならばラリアットののような形の攻撃でファアラを吹き飛ばした。

「くっ!」

「癒しの力よ、ファーストエイド!」

どうにか空中で回転し、受け身を取る。そこにマルタが治療術でファアラの傷を癒し

た。

「すうっ……てやああああああっ!!」

カノンノは息を吸って身体に力を込め、叫びながらオータムリイを振り下ろす。その刃で傷はつけられずとも大剣の重量をそのまま叩きつける鈍器のような攻撃だ。

「苦無閃！ 影走斬!!」

さらにカイも苦無を投げて相手の注意を引き、さらに素早く相手に肉薄してすれ違いざまに刀で渾身の一撃を叩き込みつつストーンゴレムの背後に回る。

「いくよ、カイ！ 虎牙連——」

一声かけてカノンノがストーンゴレムを斬り上げ、続けて空中で水平斬りに繋げる。と、カノンノと同時にジャンプしたカイが刀を上段に構えた。

「——斬！」

「飯綱落とし！」

そしてカノンノの斬り下げとカイの空中からの回転斬り下ろしが同時に前後からストーンゴレムを襲った。

「二人ともどいてっ！」

さらにそこにフアラとマルタがスカートとツインテールをなびかせて彼らの上空、ストーンゴレムの頭上へと飛ぶ。

「鷹爪脚!」

「燕舞斬!」

放たれるのは獲物を狙う鷹のごとく鋭い蹴りと燕が舞うかのような斬撃。その攻撃の後フアラはストーンゴレムの頭部からジャンプして離れ、マルタも素早く前転でその場を離れる。

「曼珠沙華!」

直後カイの炎に燃える苦無がストーンゴレムに当たる。が、苦無は刺さるまでもなく弾かれちよつと火の粉が当たったかな程度。先ほどの連続攻撃にもストーンゴレムはさほど堪えていない様子を見せていた。

「硬いな……」

「うん、大剣の刃も通らないし……」

「殴ったり蹴ったりした手とか足が少し痛くなってきたな……」

「あー、スピナーの刃がこぼれてる……帰ったら手入れしなきゃ……」

一旦距離を取って集合した後カイが呟き、カノンが頷くとフアラが両手や片足をぶらぶらさせて呟き、マルタは自分の武器を見て落胆した様子を見せる。

「だが、諦めるわけにはいかない」

と、カイは刀をヒュンと振るってストーンゴレムに向けた。

「カノンノ、マルタ。援護頼む」

カイはそう言うや否や刀を手に再びストーンゴレムに突っ込んでいく。

「え!？」

「ちよつ!？」

「ま、待つてよカイ!？」

その光景を見たカノンノとマルタが絶句、ファアラが大慌てでその後を追いかけた。

「鬼炎斬!」

刀に炎のマナを纏わせ、ストーンゴレムを十字に斬る。しかしその刃は通らず炎が通った僅かな焦げ跡が出来たのみ、ストーンゴレムはその焦げ跡など気にする事もなく両腕を振り上げた。

「来たれ爆炎、焼き尽くせ! バーンストライク!!」

カノンノが叫ぶと同時にストーンゴレム目掛けて爆炎が落ち攻撃を阻む。その一瞬の隙を突いてカイは素早くバックステップを踏みその場を離れた。

「もうカイ、無茶しないでよ……」

と、その後ろからファアラが合流、呆れたように呟くとカイは少しばかり申し訳なさそうな顔を見せた。と、ファアラは元氣よく微笑む。

「さあいくよ! 全員で全力全開の攻撃!」

「……乗った」

ファラの宣言にカイは彼女に向けて不敵に笑う。と、その背後からストーンゴレムがカイ目掛けて岩の腕で横に薙ぎ払った。

「甘」

しかしカイはそちらを見ることなくとんぼ返りをして回避、そのままくると回転する。

「煌めきよ、意を示せ……フォトン！」

「飯綱落とし！」

その下のストーンゴレム目掛けてマルタが術を放ち、光の爆発がストーンゴレムを襲うと同時にカイの回転斬り下ろしが炸裂、

「来たれ爆炎、焼き尽くせ！ パーンストライク!!」

「獅子戦吼!!」

さらに追撃にカノンノが爆炎を叩き落とし、ファラの獅子の闘気がストーンゴレムに直撃する。

「……思いついた」

「続けていくよ！」

と、カイが刀をヒュンヒュンと回転させながら不敵に笑い、ファラも真剣な目を見せ

ながら叫ぶ。そしてカイを光のManaが包み込んだ。

「旋風光破!!!」

光の力を纏い宙を飛んで縦に回転し、ストーンゴレムを切り刻む。その光の力のためか刃は軽々と通り、ストーンゴレムの身体に深い刀傷を作る。

「獅吼——」

そこに続けてファアラが獅子の鬨気を打って相手の足を止めながらジャンプ、

「——爆炎陣!!!」

着地しながらその勢いも利用して地面に拳を叩きつけると同時、地面から大爆発が起き、ついにストーンゴレムを木端微塵に粉碎した。

「……ジョアンさん、もうここは安全ですよ」

ストーンゴレムを倒し、辺りに魔物の気配のない事を確認したファアラがジョアンに呼びかける。それにジョアンも苦しげな声で「ありがとうございます……」と息切れしながらお礼を言った。

「やはり、一人で来るのは無理だったみたいですね……良かった……ゴホゴホッ!」

「でも、病気を治す存在なんて、どこにいるの?」

「……」

ジョアンの安心したような言葉の後、マルタが不安げな表情で坑道を見回すとジョア

ンは咳き込みながらも数歩前に入る。

「ミゲルの病気を治してくれた方、どこにいるんですか? 私もお願いに参りました」

ジョアンは大きく、苦しそうに咳き込みながら坑道の中に呼びかける。

「どうか……私の病気を……治してください!!」

そう叫んだ時だった。突然、坑道の中に赤い煙が立ち込めていく。そしてその煙はジョアンへとまるで生きているかのようにまとわりついていった。

「火山の時と同じ……」

目を見開いたカノンノが声を漏らし、赤い煙は消えていく。

「……………」

そこに立っていたジョアンは先ほどまで見せていた苦しそうな咳やとても悪かった顔色が全くなくなっていった。

「息が……苦しくない?……」

ジョアンが驚いた様子で呟く。

「治ったんだ、私の病気が!! 奇跡だ! あんなに私を苦しめていたセキも、身体の節々の痛みもない。本当に治ったんだ!!」

ジョアンは心の底から嬉しそうに、感激の声を上げる。

「カイ……あの煙、間違いない。この前オルタータ火山でレイ達と一緒に調査しに行つ



た時に出てきた煙と同じだよ……」

カノンノは不安げにカイの服の袖を掴みながら、やはり不安げな様子でジョアンを見る。

「あの、ジョアンさん……本当に大丈夫なんですか？」

「いやあ？　大丈夫だよ」

カノンノの問いかけにジョアンは歓喜の表情を浮かべて返す。

「ああ、とてもすがすがしい気分だ。健康とは、こんなにも素晴らしいものだったのか！

さあ、ここを出よう。早く帰って、みんなのためにバリバリ働くぞ！」

ジョアンはそう言って元来た道を歩き始め、ファラとマルタは大慌てでその後を追う。

「……本当に大丈夫なのかな……なんだか、こっちがすつきりしない気分……」

カノンノはまだ不安を拭いきれていない様子で呟いており、カイはそれを見た後、彼女の頭にぼんと手を置いた。

「……帰ろうか」

「……うん」

ただ一言そう呟くカイ。それにカノンノが頷いたのを確認してからカイは歩き始め、カノンノもその後を追うように歩き出した。

「それじゃあ、私はこれで!! リーダーの方にもよろしくお伝えください!!」

「あ、はい……もし何かあったらまたアドリビトムをよろしくお願います……」

坑道を出るとジョアンはこのままモラード村に帰るつもりらしく、爽やかに笑い元気よく手を振って別れの挨拶をし、それにカノンノが応対する。そしてカノンノが船に乗り、ホールへ入るとそこにはカイとファラ、マルタという今回のクエストに挑んだ仲間  
の他、アンジュとウィルが待っていた。

「ジョアンさんはこのまま帰りました。あ、これ依頼の成功報酬です」

「ありがとう、カノンノ」

カノンノの言葉にアンジュは頷き、報酬を受け取る。

「結果的に病気は治ってみたいだけど。ジョアンさん、本当に大丈夫かな」

「赤い煙が生物変化の原因……かもしれないんでしょ?」

ファラとマルタが不安げな様子でウィルの方を向きながら呟くように尋ねる。それにウィルは静かに首を横に振った。

「まだ、確定ではない。キールが街で聞いた話、俺達がオルタータ火山で見た赤い煙……はつきり分かっているのは、赤い煙と生物変化という現象が“実在した”という事まで

だ。この二つの現象の因果関係は、まだ確認していないからな」

ウイルはそこまで呟くと少し黙って何かを考えるように腕を組み、「だが」と続ける。「赤い煙……やはり、単なるガスなどの物質とは考えにくい。あれは、超常的な何かかもしれない。自然界のものにも、科学的に作り出したものにも、あんな特性を持った物質はないからな」

「そうね……分からない事はまだ多いなあ。赤い煙が危険なのかどうかすらわからないし、もうこれに関する依頼は受けられないかな……」

ウイルの言葉にアンジュも頷き、そう呟く。それにカイが反応した。

「何かあったのか?」

「護衛の依頼が殺到しているのよ。例の『病気を治す存在』の元へ連れて行って欲しいって。随分、噂が広まってるみたい。仕事が増えるのは嬉しいけれど、あんな得体のしれないものに引き合わせて依頼者とトラブルになったら大変でしょ」

「ああ、むしろ今後は接触させないようにしなければならぬな」

カイの言葉にアンジュがそう言い、はあとため息をついて続けるとウイルが彼女に同意する。

「そうね。これから危ない仕事が増えそうだし……もつと人を増やさないと駄目かも。アテがあるから、手紙を出してみましよう」

アンジュはそこまで言うところにこつ、と相手を安心させるような微笑みを見せる。

「それじゃ、今回はお疲れ様。またお願いね、カイ」

「はい」

アンジュの笑顔での言葉にカイも頷き、彼女から、さつきカノンノがジョアンから受け取った成功報酬を受け取り、今回のパーティーも解散してから彼らは自分の部屋へと戻っていた。

## 第九話 不思議な依頼、生物変化現象の謎

「いいか、カイ。こう、片足を後ろにぐいってやって身体を支えて、それで後ろに構えてぐぐつと氣と力を溜めた両腕を思いっきり突き出して、どんつとぶつ放す！　これが轟裂破だ！」

「ぐいって支えて、ぐぐつと溜めて……どんつ」

バンエルティア号甲板。カイはいつものように仲間から戦い方の指南を受けており、今回の講師であるテイトレイが自分の技、轟裂破を教えており、テイトレイの技を見よう見まねで真似るカイを見るとテイトレイは腕組みをしてうんうんと頷いた。

「そうだ！　その感じだ！　筋がいいぞ、カイ!!」

「いや、よくその説明で分かるね、カイ……」

テイトレイの熱血講師のような台詞に対し甲板で素振りをしているクレスが苦笑を漏らす。

「うおーい。ちよつと悪インだけどよオ。アドリビトムつてのはここで構わねえのか？」

そこに突然聞こえてきたガラの悪い声。クレスとテイトレイが声の方を向くとカイ

も少し遅れて構えを解き、声の方を向く。そこにはカイによく似た色素の薄い緑色の髪をぎつくばらんに短く切り、ベレー帽を被つたいかにもガラの悪そうな青年が立っていた。

「ああ、そうだけど。依頼か？」

「いや、ここにアンジュっていんだろ？ そいつに頼まれて来たんだけどよ」

「ふくん。分かった、んじや入れよ。カイ、一旦休憩にしようぜ。甘いもん作ってきてやるから」

ガラの悪そうな青年の言葉にティトレイはふんふんと頷くと入れよと言い、カイに一度休憩を入れるよう言うとかいとティトレイはガラの悪そうな青年と共に船内へと入る。

「よう、来たぜアンジュ」

「いらつしやい、スパード君。旅先まで手紙が届いて、よかったあ」

青年——スパードの姿を見たアンジュが安心したように微笑む。どうやら知り合いだと言うのは嘘ではないらしく、スパードはアンジュの字で書かれている手紙をひらひらとさせるように見せた。

「なーんか、ギルド始めたって書いてあつてビックリしたぜ。ルカとイリアもいるんだろ？」

「ええ、二人とも待つてるよ。すぐ部屋に案内するね」

アンジュはそこまで言うかとスパードの後ろを見て、少し首を捻る。

「……リカルドさんは一緒じゃないの?」

「ちよつくら雇われて戦場へ入ったぜ。一仕事終わったら、連絡してくるんじゃないの?」

アンジュが首を傾げながら問いかけるとスパードはさらつとそう言う。

「うおつと、スパードじゃん。何しに来たワケ? リカルドと旅してたんじゃないの?」

と、そこにイリアが現れ、スパードを見ると驚いたように声を上げる。それにスパードはアンジュを一瞥した。

「何しにつて、アンジュが手伝いに来いっつたから来たんだよ。旅も出来るし、面白そうだしな」

「んじや、ルカちやまとあたしの部屋まで案内してやるか」

「おお、ルカちやまな」

そこまで言った時、スパードの口の端が吊り上がる。

「久しぶりにイジつてやるか。グへへ……」

「久しぶりだからつて、あんまりやり過ぎないでよ」

「あー、シメのいじりは譲れつてか?」

「よくわかつてんじやん。ギヒヒヒヒ……」

二人はそう言い合うとその場を後にし、カイが目を細めているとアンジュはくすくすと穏やかに笑った。

「カイ、彼らにとつてはいつもの事だから、気にしないで。基本、行き過ぎない程度までは私もスルーしてるし」

そこまで言ってから、彼女は「そうそう」と続ける。

「あなたにも彼を紹介するから部屋にいらっしやい」

「……了解」

断る理由もないためカイはアンジュについてルカ達の部屋へと向かう。

「あーん、誰だアコイツ?」

カイが部屋に入った瞬間、スパイダは彼に向けてガンを飛ばす。しかしカイは無反応、と言ってもスパイダの凄味にビビっているわけではなく、ただ単にどう反応を返せばいいのか分からずに立っているような感じだった。

「ちよつ、スパイダつたらもう! このギルドの仲間だよ」

「おー、そうか。つてか、ビビらすつもりはさらさらなかったんだけどな」

しかしそれをスパイダに怯えていると勘違いしたのかルカが慌ててスパイダを止め、



それにスパードはにししと笑う。と、ルカがため息を漏らした。ちなみにイリアは、さつきホールの方に行つた時にスパードを見てうっかり頭から飛んでいたらしいが研究室に少し用事があるらしく、この部屋にはいない。

「君は、誰に対してもそうだけど中には恐がる人もいるし……」

「ルカとかな、ヒヤハハハ！ 初めて会つた時のお前、そうだったよな」

ルカの言葉にスパードはそう言つて「ヒヤハハ」と笑う。

「この子はカイ、記憶喪失でこのギルドに来て、世話してるの」

「ほお……俺はスパード。スパード・ベルフォルマ。こいつらのダチだ、よろしくな」

「よろしく」

アンジュから紹介を受け、スパードも自身の名を名乗つてルカ達のダチだと説明。よろしくなと締めるとカイもよろしくと返す。

「ところで、スパード君。手紙にも書いておいたけど、情報は仕入れてきてくれた？」

「あー、赤い煙つてヤツかあ？ アレ、割と知れ渡つているみたいだな」

アンジュは彼に情報収集も頼んでいたらしく、スパードは彼女に頼まれた赤い煙が既に知れ渡つていると言ひ、そこで難しそうな顔を見せた。

「気になんのは、見る者によつて、その煙の姿が違ふらしいって事だ」

「姿？ 煙とかモヤとか、そんな不定形なものでしょ？」

「少なくとも俺はそう見えたし、カノンも恐らくそうだと思う」

スパードの言葉にルカが首を傾げると赤い煙を目撃したカイが続ける。それに対してスパードはバリバリと頭をかいた。

「ソイツの存在が分かった頃は煙だったらしいな。けど今は、花や虫、魚、色んな姿で現れるらしいぜ」

「……まるで、進化しているみたいだね」

スパードからの説明を受け、ルカが呟くとスパードは「それだけじゃねエ」と続ける。

「変わってんのは街の人もだ。〃病気を治す〃から、いつの間にか〃願いを叶える〃って話になってんだぜ」

「願いを叶える?……それはもはや……それは、病気を治すなんてものではない……もつと〃とんでもない〃ものよ」

その説明を受けたアンジュは真剣な表情を見せ、シリアスな空気に部屋が包まれる。

「願いを叶える、か……じゃあ、もつとたくさんの人がその存在に会いたがるんだろうね」

そんな中ルカの呟いた言葉が、やけに大きく響いた。

「願いを叶える……病気を治すという噂にただ単に尾ひれがついただけ？ いや、でも……」

スパイダからの報告を聞いたアンジュはホールに戻りながらぶつぶつと呟く。カイはその後ろをすたすたと、まるで鳥の雛が親鳥の後について歩くように歩いていた。

「あ、アンジュさん。カイ」

「あら、カノンノ」

と、丁度操舵室から降りてきたらしいカノンノが二人に合流し、彼女の声を聞いたアンジュはふふつと微笑んだ後ホールに用意された机に座った後、また考え始める。

「……どうしたの？」

「さつき入ってきたスパイダって奴から赤い煙について話を聞いて、考え始めた」

「ふーん……じゃあ邪魔しちゃ悪いね。ね、二人でお話しよっか」

カノンノはカイにお話しようと言い、にこつと微笑む。

「どうかな、何か思い出せた記憶ってある？」

「……いや」

カノンノの言葉にカイは少し考えた後静かに首を横に振り、それにカノンノは残念そうにうつむいた。

「そっか……まだ、何も思い出せないんだね」

「カノンノはまた絵を描いていたのか？」

「うん。またスケッチブックを買わなきゃ。もうなくなってきちゃったから。最近はね、前よりも風景が見えるようになって。一杯絵に描き溜めて、どんどん紙がなくなっちゃう」

カノンノが悲しそうな目を見せているとカイは話題を変え、それにカノンノはうんと頷き、スケッチブックに目を落とす。

「でも、やっぱり一番に思うのは……私の知らない風景がどうして見えるのかってこと。根拠はないけど、やっぱりこれらの風景はどこかにあるような気がするんだ……」

カノンノは楽しみそうな様子で微笑む。

「ぎゃあああああああつ!!!」

と、その時悲鳴が聞こえ、カイとカノンノ、アンジュは驚いたように研究室の方に目を向ける。

「今の、イリアの悲鳴じゃない？ 研究室の方からね……カイ、ちよつと研究室へ行って、見てきてくれる？」

「分かりました」

アンジュの言葉にカイは頷き、訳が分からず硬直しているカノンノを置いて研究室へと向かう。と、悲鳴を聞きつけたのかレイが下の階から姿を現し、二人は一緒に研究室へ

に入る。

「よし、やつと捕まえたぞ……」

と、その時ウィルが丁度ケースの中に何かを押し込んでいた。どうやらコクヨウ玉虫が逃げ出しただけらしい、とイリアが珍しく怯えが混じり、心なしか涙の見える目でカイとレイを見る。

「カイ！ レイ！ 見てよこの虫!! こんなんなっちゃってんのよ、気色悪う!!」

そう叫ぶイリアが指差す先にあるのはコクヨウ玉虫、しかしその容貌はたしかに奇妙なものへと変わっていた。

「羽も鉋物のように固いわね。そして、呼吸するための気門がない。目も、口も無くなってる……生物として、あるべきものが欠けているわ」

「これは、あの赤い煙が原因なのか？」

「な、なんかいきなりぶしゅーって虫から赤い煙が出てきて、暴れ出したらこうなったのよ！ ねえ、どうなの!？」

冷静に分析するハロルドの次にカイが尋ねると、イリアが半ば叫ぶようにハロルドに尋ねる。それにハロルドはうんと頷いた。

「その可能性は濃厚ね。もう一例くらい、確認できればいいんだけど」

ハロルドはうんと頷いた後、ふむ、と呟いた。

「……」

そんな中、レイはただ一人コクヨウ玉虫を、どこか懐かしいものでも見ているかのような目で眺めていた。

「場所は……カダイフ砂漠がいいかのウ。あそこにあるオアシスにでも捨ててきてくれんかなア。それじゃ、頼んだでよう。仕事を受けてくれる者が決まったら、魔物を引き渡すんでなア」

「はい。分かりました……」

話が終わり、カイとレイ、イリアが研究室から出てくると、どうやら依頼人が来ていたらしくだがもう話も終わったのかその依頼人である老人は船を出ていく。

「どうしたんですか、アンジュさん？」

「ああ、カイ。仕事の依頼なんだけど……なんか変なのよ」

「変？」

どうかしたのかと尋ねてきたカイにアンジュは怪訝な表情でそう言い、カイが首を傾

げる。

「依頼人はモラード村、この前依頼してきたジョアンさんが出身の村の村長のトマスさん」

アンジュは依頼人のデータをカイに説明し、ジョアンさんは病気が治った途端行商に出かけたらしいとついでに説明する。

「それで、肝心の依頼なんだけど……村に入ってきた魔物を捕まえたから、カダイフ砂漠に捨ててきてくれて」

「魔物を捨てるう?! 討伐じゃなくって?!」

アンジュの言葉にイリアが素っ頓狂な声を上げる。

「私もおかしいとは思うんだけど……依頼だからね……」

アンジュは考えるような様子を見せて呟く。と、カイが前に出た。

「分かりました。じゃあ、俺が依頼を受けます」

一番に依頼を受けると言いだすカイ。と、イリアがにつと笑った。

「んじゃ、あたしも受けるわ。さつきちよつと嫌な事あったから憂さ晴らしにね」

「ならば、我也行くとしよう。どうせ暇だ」

そう言ってぐひひと笑うイリアの次にレイが頷く。

「ふう、素振り終了……少しクエストでも受けるとするかな……」

と、そこに爽やかに汗を拭いながらクレスが船内に入り、ホールを見る。

「えっと……何かあったの？ あ、そういういえばさつきお爺さんが船に入ってきてたけど、依頼でもあったのかい？」

「……丁度良かったわね」

その言葉にアンジュはふふつと微笑んだ。

「あんたらア、この仕事を引き受けてくれる者だね……」

「はい。モラード村の村長のトマスさんですね？」

カダイフ砂漠の入り口、そこで老人——今回の依頼主であるトマスが巨大なケージを隣にしながら話しかけるとクレスが相手の確認を行う。

「依頼は、この砂漠にそのケージの中に捕まえている魔物を捨てる……で構わないんですね？」

「そうだなア……この土地がいいだろうなア……ここなら、人に会う事も無かろうなア。オアシスもあるしなア……」

「……なぜ、わざわざ捕まえた魔物を捨てるんですか？」

「殺すまでは……出来なくてなア……」



「はあ……」

クレスとトマスが話していると、イリアはケージの方を見てニヤリと笑う。

「どれどれ。どんな奴が入ってるの？」

そう呟いてケージの扉に手をかける。

「開けてはならアーン!!」

その瞬間トマスが血相を変えて叫び、イリアはびくつとなつて動きを止める。

「薬で眠らせてあるんだ！ 開ければ……光で目覚めてしまうぞー!」

「ゲツ!? さ、先に言えつての!」

トマスの血相を変えた叫びにイリアも叫んでケージから離れる。

「すみません。確か、ケージの中を見ない……そういう契約でしたね」

クレスは、この依頼を受けて船を出る直前にアンジュから言われた契約内容を確認す

る。それにトマスは無言で頷いた。

「それじゃあ、頼んだよ。着いたら扉の鍵を外して、そのまま立ち去ってくれ。そうすれば後は勝手に出ていくだろうよウ、くれぐれも、中は見ないようになア」

トマスはそう言うと砂漠を後にする。

「あーめんどくささつ……受けといてなんだけど、魔物なんてここで始末してもよさそうじゃん……」

イリアはケージをジト目で見た後、にやつと笑う。

「あたしが何発か撃ち込むから、それで仕事終わりにしない？」

「だ、駄目だよイリア。依頼を受けた以上、指示には従わないと……」

「へいへい。んじや、行くとしますか」

イリアが銃を取り出してそう呟くとクレスは慌てた様子でそれを止め、イリアはちえつと言いたげな表情で銃をしまおうとそう呟く。その時カイがふと砂漠の入り口近くにある岩に目をやった。

「……で、いつまで隠れてるんだ？」

「!?」

その言葉を聞いたクレスとイリアがそつちを向く。

「えへへ、ばれちゃってたの？」

「カノンノ!?!」

と、苦笑いしながらカノンノが岩陰から姿を現した。

「ちよつと、なんであんなここにいんのよ!?!」

「あ、えつとなんていうか……気になっちゃって……」

イリアの慌てたような声にカノンノは目を泳がせて人差し指同士をつんつんさせながらそう言い、クレスはまったく呆れたようにため息をつく。

「なら、カノンも一緒に来るか？」

「いいの!？」

と、カイがそう言いカノンノが目を輝かせる。それにイリアはにししと笑った。

「別にいいわよ。でも正規メンバーじゃないから報酬はなしね？」

「それと、帰つたらちゃんとアンジュさんに謝るんだよ？」

イリアの言葉に続いてクレスが注意し、カノンノはうんと頷く。

「んじゃ、改めて行きますか……ってちよいレイツ!？」

そう呟いて気だるげな目でケージを見たイリアが突然ぎよつとした声を出す。レイがケージを撫でるように手を当てていた。

「へ、下手に触るんじゃないわよ！ 危ないでしょ!？」

「……」

イリアの慌てたような声に、レイは無言でケージから離れる。

「じゃあ、基本僕とカイが交代でケージを運ぼう……カノンノ、ケージの護衛をお願いできるか!？」

「うん、分かった」

「絶対、絶対壊しちゃ駄目だからね！ 仕事が増える!？」

クレスの指示にカノンノは頷き、イリアが必死で釘を刺しておく。

それから少し砂漠を進んだところで、アリジゴクのような砂の渦の中から巨大なワーム系の魔物——サンドワームが姿を現す。

「うっわ、最悪！ 砂漠でこいつだけには会いたくなかったのに……」

「ケージを守るためにも、倒しておいた方が良さそうだ」

イリアがうげつと言いたげな顔で呟き、クレスはそう言つて剣を抜く。

「ケージをアイツに放り投げて、それで仕事も終わりでいいじゃん、もう！」

「行くぞ、皆!!」

「聞いとんのかい!!」

真面目に依頼を遂行しようとするクレスに対しイリアはケージを囿にして仕事も終わりでいいじゃんと返すがクレスの叫びにツツコミを入れ、カイとレイが刀や剣、銃を構えるのを見て、諦めたように銃を構える。その時サンドワームも咆哮した。

「ツインバレット!!」

まずイリアはその場に腰を落とし、レイは走りながら二人は銃を連射し、カイとクレスはアリジゴクに落ちないように注意しながらサンドワームの側面へと回り込む。

「鳳凰天駆!!」

宙を飛んで炎を纏い鳳凰のごとく急降下突進する奥義——鳳凰天駆がサンドワーム

に突き刺さり、その逆面からカイが刀を回転させて大地のmanaを普段以上に刀に集中する。

「土竜乱閃!!」

刀を地面に突き刺すと同時にサンドワームの周囲から岩の槍が何本も突き出てサンドワームを攻撃する。砂漠という豊富な大地のmanaがある地だからこそ出来る土竜閃の発展技だ。鳳凰天駆による体当たりをした後のクレスもその岩の上に乗ってアリジゴクに落ちないよう脱出。サンドワームは怯んだ後一旦体勢を立て直そうと地面に潜ろうとする。

「逃がすかっての!」

しかし、銃弾を放った後イリアは素早く詠唱を行っており、彼女の周囲に水のmanaが集中する。

「水に飲まれなさいっ! スプレッド!!」

サンドワームを押し上げるように砂漠に放たれる水流。そこにレイが飛び上がり、空気を蹴るかのように宙を蹴る。その時、毛先が青くグラデーションがかかっている金色の髪がなびき、輝く。

「飛天翔駆!!」

宙を蹴りサンドワームをすれ違い気味に斬り裂く。クレスの鳳凰天駆の炎がない

バージョンとでもいう技がサンドワームを斬り倒し、レイはそのままアリジゴクの方こう岸まで跳んだ後に素早く振り返って銃を構える。その銃には光のManaが集まっていた。

「シャイニングレイザー!!」

サンドワームを貫く光弾。その一撃にサンドワームが苦痛に吼え、さらにカイがサンドワーム目掛けて身体を捻り、足に炎のManaを纏わせ足に炎を宿させる。

「鬼炎連脚!!」

炎を宿らせた飛燕連脚。それを見たクレスもふつと微笑んで宙を舞い、身体を捻る。

「……こういう感じかな!」

サンドワーム目掛けて放たれる炎を宿らせた飛燕連脚。カイの技を見様見真似、一発で再現してみせた。

「……カイ、どいて!」

しかしクレスはさらに叫び、カイはトドメの蹴りを放った後もう一発軽く蹴りを入れ、その反動でクレスの正面から外れる。そしてクレスは炎を宿した剣を掲げた。

「鳳凰天翔脚!!」

炎を宿した飛燕連脚から続けての鳳凰天駆。

「砂漠に炎じゃ暑いでしょ? 冷やして差し上げますわよ?」

と、イリアが銃を交差させにししと笑ってサンドワームを見る。

「これでトドメ!! アクアレイザー!!!」

イリアから放たれる水流の弾丸がサンドワームを貫き、サンドワームは断末魔の悲鳴を上げた後動かなくなったまま、アリジゴクへと沈んでいった。

「ま、こんなもんね」

「よし。これで、ケージを安全に運べるぞ」

イリアが台詞を決めた後、クレスが安心したように微笑んでそう言う。と、イリアは「う〜お〜」と声を漏らした。

「……もう一仕事終わった気分になってた……しよっぱなから、ハードな仕事だわ〜」

「あはは。ほら頑張ろっ」

落ち込むイリアにカノノンは苦笑しながら彼女を応援、イリアはため息をついて歩きだし、カイがケージを押し始めた。

「あ〜、暑い……汗で身体はベタベタするし、口は砂でジャリジャリだし……」

「仕方がないよ。ここは砂漠なんだから」

「っていうか、よくその格好で平気よねえ!? 見てるこつちが暑くなるわあ」

暑いと文句を言いだしたイリアにクレスがしようがないよと言うと、イリアはそうツツコミを入れる。まあクレスの服装な鎧姿、確実に熱がこもる事だろう。それにクレスは「平気じゃないけど……」と呟いた後遠い目を見せる。

「……前に、今よりもつと熱い目に遭った事があるからね。少し慣れたかな」  
「今より暑い？ 何ソレ、どういう地獄？」

クレスの言葉にイリアが死にそうな声を上げる。とクレスはうんつと強く頷いた。

「心頭滅却すれば火もまた涼し！ って、その時の連れが砂漠の真ん中でイフリートを召喚——」

「ああああい！ もういいわその話!! 聞いてるだけで暑すぎて死ぬ。死んじゃうっ」

考えるだけで暑くなりそうな話をイリアは文字通り必死の声を上げて遮る。

「うん……確かに、焼け死ぬかと思っただよ」

それにクレスもあの時は辛かった……と言いたそうな目を覗かせた。

「あく……もう無理っ！ 暑すぎるっ!! クレス、どうにかして。ほんつと今すぐ！ どうにか！ 死んじゃう!!」

「分かった分かった。仕方ないなあ」

と、ついにイリアは暑すぎると叫び始め、クレスがそれを押さえるように分かった分



かったと叫び、仕方ないなあと続ける。

「へっ？ 何かいい案でもあるの!？」

単なる無茶振りに対する案があるらしく言っていたイリア本人が驚きの声を上げると、クレスはこほんと咳払いを見せた。

「……イリアは、そのままそうしてイリアいい」

その時、ピシっ、と空気が凍った音が聞こえたような気がし、さらに砂漠にも関わらず寒い風が吹く。

「……………寒ッ!? やだ、何今の寒、寒ッッ!!」

ダジャレを聞いたイリアは我慢できないように走り出す。

「ちよっ………確かによく言われるからやってみたけど、そんなに?……」

そしてクレスは流石にシヨックを受けたように沈んだ。

「クレス、魔物だ!」

「!」

カイの声でクレスは我に返り、魔物を見る。四足歩行のコブラ、とでもいえばいいだろうピンクの鱗をした魔物——バジリスクとサボテンのような姿をした魔物——カクトウスだ。

「魔神剣!!」

クレスとレイが地面を這う衝撃波をバジリスクとカクトウスにそれぞれ放ち、そこにカイが地面を蹴ってバジリスクに突進。

「斬魔滅殺剣!!!」

突進しながら刀で突き、さらに刀を左右に薙いで後ろ回し蹴りも打ち込み、トドメに闇のマナを集中した掌底を放ってバジリスクを吹き飛ばす。

「セツシブバレット!!!」

イリアの二丁拳銃から放たれる圧倒的な連射がカクトウスを蜂の巣にした。

そして、カイがケージを押しして砂漠を進んでいく時だった。

「……………アアア……………」

「ちよつとつ!! 今、何か聞こえなかった!? 呻き声みたいなの……………」

突然聞こえてきた妙な音にイリアが反応し、声を上げると辺りの警戒をしていたクレスが首を傾げる。

「風のうなりじゃないのか?」

「ウ……………ウ……………ウウウ……………」

「ホラ!! ケージよ、ケージの中だつて!!」

クレスがそう言った瞬間また唸り声が聞こえ、イリアはケージを指差して叫んだ後、腰の拳銃に手を伸ばす。

「つか〜!! やっぱ、ここで何発かブチ込んだ方が安全だつて!!」

「落ち着くんだ、イリア!! 魔物が眠り薬が切れ始めているのかもしれない。変に刺激しないようにしないと。とにかく、今は急ごう。オアシスまで、もう少しだ」

「ああ。カノンノ、押すのを手伝ってくれ」

「う、うん!」

慌てているイリアをクレスが落ち着かせ、急ごうと言うとカイはカノンノにケージを運ぶのを手伝ってくれと言ひ、カノンノも頷くとケージを押ししていく。見た目こそ細身だが自分の身の丈ほどもある大剣を振り回す力の持ち主、カノンノが手伝うことでケージのスピードも目に見えて上がった。

そして、砂漠の魔物の追跡を振り切り——主にクレスがなるべく魔物がいないルートを選び、どうしてもいる魔物はレイやイリアが銃で威嚇、出来る限り戦闘を少なくした結果だ——ついに彼らはオアシスへと到着する。

「着いた……」

「ふう……やつとオアシスね」

ふうと汗を拭うカノンと、精神的に疲れたと息を吐くイリア。彼女が「さっさと済ませて帰りましょう」と言うときレスはいはいと苦笑した。

「えつと、手順は……まず鍵を外して……そのまま開けずに、ここを去ればいいんだつね」

そう言つてレスはケージの鍵がかかった扉に近づこうとする。と、その時ケージに魔物——バジリスクによく似ているが紋様が描かれたような身体をし、凶暴性が増しているかのような外見だ——サンドファンクが四体群がった。

「しまった。魔物に!!」

それを見たレスが剣を構える。

「ゲエツ!! まさかあんだ、アレを追つ払う気!?!」

その姿にイリアが声を上げる。

「向こう、こつちに目もくれてないじゃない! もうこのまま逃げりゃいいでしょ!?!」

「それでは依頼を完遂したことにはならない!!」

「ああ。依頼は確実に済ませる……」

彼女の言葉にレスは真剣な目でそう叫び、教育の賜物かカイも刀を構えた。

「な、なんつーどマジメ人間ども……絶対結婚したくないタイプ……」

依頼完遂に命を懸ける男どもにイリアは頬を引きつかせた。

「ひいひい!!　なんだ、なんなんだよ!!　何が起こってるんだあああ!」

「た、助けて、助けてくれエエエ!!!」

その時、ケージの中から悲鳴が聞こえてきた。

「あ、あの中は魔物なんかじゃない!!　ヒトが入ってるんだ!!」

「なぬ!」

「まずはあの魔物を倒す!」

はっとしたクレスの叫びにイリアが声を上げ、カイが叫ぶとイリアもようやく銃を抜いた。

「つたく、しよーがないわね!!」

そして、彼女は目を爛々と輝かせて口元に笑みを浮かべる。

「んじゃ、エンリョなくハデにいかせてもらおうよ!!」

そう叫んで空中目掛けバンバンと弾丸を放つ。それを聞いたサンドフアング四体はようやくカイ達に気づき、頑丈なケージが邪魔する獲物よりこちらの方が楽だと思ったのかカイ達に威嚇を始めた。

「カノンノ、援護頼む!」

「オツケー!」

カイがそう言い、カノンノがオツケーと頷いて詠唱を開始するとカイは地面を蹴ってサンドフアングへと突進。カノンノは自分の周りに光のmanaを集中させる。

「仇なす者に、聖なる刻印を刻め！ フラッシュユティア!!」

サンドフアングの群れの中心に刻まれる光の刻印、さらにその刻印から放たれる光の波動がサンドフアングを襲った。

「閃走牙！」

下から打ち上げるように放たれる波動に耐えきれず浮かび上がったサンドフアングの腹目掛けて刀を突き刺す。

「ガアツ!!」

痛みに吼え、だが反撃とばかりにカイの左肩にサンドフアングが噛みつく。

「ぐうっ!!」

こつちも痛みに唸り、だが右腕を回してサンドフアングの尻尾を掴んで持ち上げるとそのまま走り出す。

「おりゃあっ!!」

そしてオアシスの泉へと身を投げ、サンドフアングはいきなりの水に驚いたように口を開け、カイは左腕が固まったように動かないのを感じ取ると右手に闇のmanaを集中、闇のmanaを込めた掌底を相手に当てる技——滅掌破が水中でサンドフアングへと直撃、

しかし相手が死んだかの確認もせず、カイは右手で水をかき、水上へと上がる。  
「ぶはっ！ げほっげほっ!!」

幸いにして溺れる程の深さはなく、カイは水上に上がって二、三度咳き込んだ後オアシスから上がる。が、彼の左腕は血の気がなく、まるで石のように固まっていた。バジリス族の牙にある石化毒によるものだ。

「わ！ 卑しき闇よ、退け！ リカバー!!」

カイの左腕が石化しているのに気づいたカノンノは、このまま石化毒が全身に回ると全身が石化してしまうと慌てて彼に治癒魔術をかけて石化毒を中和、左腕に血の気が戻り健康的な小麦色の肌へと変わった。

「ありがとう」

「うん！」

カイのお礼にカノンノは満面の笑顔で頷き、カイはさっきの戦いの間で落とした刀を拾いに走る。その後ろの泉では気絶したのか死んだのか、サンドファンクが力なくぶかぶかと浮かんでいた。

「くっっ！」

クレスは剣で相手の牙を防いで押し返し、レイは彼の背中を守るように盾を構え、二体のバジリスクの牙や体重をかけてのしかかりを防ぐ。しかし防戦一方という状況

だ。

「お二人さん、凍らないよう気をつけてっ!!」

と、上の方からそんな声が聞こえてくる。イリアがケージを踏み台にして二人の上空へとジャンプしたのだ。

「フリーズバレット!!」

空中で回転し、そのまま弾丸を発射。氷のマナが込められたその弾丸が地面に着弾したその瞬間、氷のマナが解放されてサンドファンクを氷柱で威嚇。微量の氷のマナから作られたそれは高温の砂漠の気候も相まってすぐに消えていく。

「ありがとう!」

クレスがイリアにお礼を叫び、鋭く剣を一閃し、真空波で相手を斬る特技——真空破斬でサンドファンクを斬り、レイも魔神剣を地面に叩き付け、近距離にさらに広範囲かつ強力な衝撃波を放つ秘技——剛・魔神剣でサンドファンクを薙ぎ払う。さらにクレスは剣を構え直し、レイは剣を手放すと盾を右手に持ち替え、左手を腰の後ろにやってそこから銃を引き抜く。

「秋沙雨!!」

「ブレイズバレット!!」

クレスは連続突きで、レイは左右に薙ぎ払うように銃弾を連射し、サンドファンクを



蜂の巣にする。

これで四体のサンドファンクは全て片付き、クレスはケージを見る。

「ケージを開けよう」

「契約は？」

クレスの言葉にイリアがそう返すと、カイがケージの方に近づきながら刀を抜いた。

「俺達が受けた依頼は『魔物』をカダイフ砂漠に捨ててきてくれ。だ」

「ああ。僕達が受けたのは、『ヒト』を捨てる仕事じゃない」

「よって契約は——」

カイの言葉にクレスが頷き、カイは刀を振り上げる。

「——無効だ」

咄くと同時、刀が鍵を斬り裂き、破壊する。鍵が砂の上に落ちる、どさりという音と共にケージの扉が開く。その中から、二人のヒトがずりずりと、身体を引きずるようにして姿を現した。

「そ、そんな……どうして……」

その姿を見たカノンノが絶句する。二人の身体からは、まるで鉱石が生えているかのような状態で、しかも皮膚なども硬化化をしている。まともな人間の姿ではなかった。しかし、カノンノが絶句したのはそこではない。

「あ、あなたは以前依頼に来たジョアンさん……ですか？……」

「は、はい……」

二人の内一人の姿を見たカノンノが信じられないとばかりの様子で尋ねると男性――ジョアンは力のない声で呟くように肯定する。

「何故、そんな姿に……」

「そ、それが……私達にも分からないのです……」

クレスの問いかけにジョアンが弱々しく返す。

「あの、赤い煙に触れてから、病は治って村で過ごしていたんですが……なぜかは分かりませんが、村の中にいることが酷く居心地悪く感じるようになって……村……だけじゃなく、この世に生きていること自体に……自分で、自分の存在が分からなくなって……自分が、今まで知っている自分でない気がして……そうして、次に意識がハッキリした時には檻の中でした」

「撃つちやわなくてよかった……」

何発か銃弾撃ち込んで早く仕事を終わらせようと主張していたイリアが、中にいるのが人だったと知って危なかったとばかりにぼそりと呟く。

「私は、この異形の姿になって暴れていたらしいのです。彼、ミゲルもです。私よりも前に赤い煙に触れ、病気が治った後同じように肉体が変化し始めたんです」

「もう、村には置いておけないと……でも、確かに……俺の身体はもうヒトとは違うようだ……ヒトの中じゃ、生きていけないんだらうよ……ああ、これから俺はどうすりやいい。ここに残って死ぬのを待つしかねえのか……」

ジオアンが説明を終えるとそれを引き継ぐようにもう一人の男性——ミゲルが呟く。

「……」

「カイ?」

と、カイが無言で彼らの前に立つ。カノンノが首を傾げて声をかけようとした時、彼の両手が突然輝かしい光を放ち始めた。そして彼が両手を二人の方に向けた後、両手を広げると二人の姿がカイの両手から放たれている光と同じ輝きの光に包み込まれ、カノンノ達は眩しい光に思わず目を閉じる。

「……」

そして光が消え、彼らはゆっくりと目を開く。

「ゲエツ?!?!」

イリアが声を上げた。さっきまで鉱石が生えていたり硬質化していたジオアンとミゲルの姿が元のヒトの姿に戻っていたのだ。

「……元の姿に!!」

「元……戻った……」

ジョアンとミゲルは驚いたように呟き、そう思うとジョアンはカイを見てその目から涙を零した。

「ああ、あなたには助けられてばかりです!!」

「あ、ありがとうございます! ありがとうございます!!」

ジョアンとミゲルは泣きながらカイにお礼を言う。

「カイ……君がやったのか?」

「……」

「黙ってたら分かんないでしょ!」

クレスの言葉にカイは無言を貫き、イリアが腰に両手を当てて叫ぶ。が、直後呆れたように額に手を当てた。

「つてかさ、アンタの力かどうかも怪しいもんだし……」

イリアがそう呟いていると、泣いてお礼を言っていたミゲルがはつとした顔を見せた。

「でも、このまま村には帰れねえぞ。帰っても、みんなにまたあの姿になると思われちゃう」

「それじゃあ、僕達の船へ来てください。ここに留まるのは危険ですから」

「そうね。誰かいい知恵出してくれるだろうし。船に戻りましょ」

「そうだね。そうしよう」

突きつけられた現実に対しクレスとイリアがそう言い、カノンも賛成する。そして彼らはオアシスを後にする。

「……」

最後尾を歩くレイは、無言のまま、ただただ黙って彼らの後をついて行った。

「お疲れ様、カイ。肉体的にも精神的にも、なかなかハードな仕事だったね。さてと……ハロルドさん」

アンジュがカイに対して労を労い——クレスとイリアはジョアンとミゲルを医務室に連れていき、カノンノは黙って依頼について行ったことについてアンジュから説教を頼まれたウイルからのお説教タイム。レイは船に戻った瞬間無言のまま甲板に座り込んでしまった——ホールに来てもらったハロルドを見る。

「赤い煙を浴びたコクヨウ玉虫、そしてジョアンさん達に起きた変化。この二つから、赤い煙が『生物変化の原因』であると確定した、と言つてもいいのかしら？」

「そうね。ただ、人を治癒したり生物変化を起こしたりする過程については分からないけど」

「……アンジュさん、あの二人はこれからどうなるんですか？」

アンジュの問いかけにハロルドがそう言うのと、カイがジョアンとミゲルを心配するよ  
うに尋ねる。

「あの二人の今後についてね。それは任せておいて」

それにアンジュはふふつと笑った。

「まあ、医務室へ行つて、彼らと話をしてみないとね。一緒にいらつしやい」

そう言つて彼女は医務室へと歩きだし、カイもその後を追う。

「あつ、今お二人を診終わつたところです」

医務室に入ると、彼らを診察していたアニーがアンジュにそう言う。

「二人とも、異常はない？」

「はい、普通の人間と特に変わった点はありません」

アニーから診断結果に異状はないと聞き、アンジュは「よかつた」と言つて微笑む。

「ジョアンさん、ミゲルさん、確かに今は故郷へ帰るのは難しいかもしれませんが、です  
が、私が所属していた教会なら受け入れてくれます。あなた方さえよろしければ、そこ  
で働いてはいただけませんか？」

「いいんですか？」

「そりや、願つてもない事で」

アンジュの言葉にジョアンとミゲルが地獄に仏だとばかりに顔を輝かせる。

「嬉しい！ ちょうど男性の働き手が欲しいと言われていたから。それじゃ、教会への紹介状を書いて、その街までお送りいたしますね」

「ああ、なんでもするよ。ありがとう。本当に、ありがとう！」

アンジュの言葉にジョアンは嬉しそうに言い、何度もアンジュに頭を下げる。

そして二人はアンジュから教会への紹介状をもらい、その街まで送られると何度も頭を下げた後、船を後にした。

「ジョアンさん達には、教会で働きながらオルタ・ビレッジの建築を進めてもらいましたよ。さあ、こつちの方も忙しくなりそうですね」

「それにしても、悲しい事件でしたね」

アンジュの元気な声に対し、ミントは声を落とす。

「魔物化したとはいえ、同じ村の民を捨てるなんて……」

「他に方法がなかったのでしょうか」

ミントの言葉にフィリアも浮かない声で呟く。

「村人全員に被害が出る可能性があるならば、村長さんもああするしかなかったのかも

「しません」

「そう……ですね……殺さず、オアシスに追放するのは、せめてもの処置だったのでしよう……でも、悲しい話です。人が人を捨てるなんて……」

「そう。だから、もう二度と赤い煙が人に接触しないようにしないとね。生物を変化させる原理は分からないけれど、原因はあの赤い煙だという事が分かったんだし」

彼女らがそう言った後、アンジュが赤い煙が生物変化現象の原因だという結論を話す。その後、ミントが口を開いた。

「赤い煙の出現は、短期間なのですよね。次はどこに現れるのでしょうか？」

「しかも、最近星晶採掘地跡以外でも現れるという『噂』もあります。あくまで、噂の様ですが……」

「また、護衛の依頼が来るはずだし、その情報から、次にどこに行けばいいかが分かるかも。今は、それを待ちましょう」

アンジュ、ミント、フィリアはそう話し合い、その場は解散という事になった。



## 第十話 新たな仲間と呪いの輪

「と、いうわけですね。この小説は、決して結ばれないとされる身分と種族間を乗り越えての主人公とヒロインの純愛が見どころなんです！」

「そうなんですか？ 例えほどの辺がでしようか？」

「はい。特に主人公とヒロインが駆け落ちした後、追手に追いつかれそうになった時に主人公がヒロインに言う、『絶対にあなたを守る』という台詞が、この時の状況を的確に表す描写も相まって感動するんです！」

「うんうんそうよね！ やっぱり女の子は男の子に守ってもらって夢だよね！」

食堂。ここではアニーが目をキラキラさせながら恋愛小説の講評をしており、ミントとマルタがそれに聞き入っていた。

「……そんなもんなのか？」

朝のクレスと一緒の素振りを終えた後、ロックスに甘いものをリクエストして出てきたクリームと蜂蜜たっぷりホットケーキを食べているカイが首を傾げるとミントがはいと頷いた。

「恥ずかしながら、私もクエストでの戦いの時、クレスさんに守っていただけると心から

安心できると言いますか……」

「やつぱり男はたくましくつて、女の子を守れないと！ あ、でももちろんエミルみたいに優しいさも忘れないでエミルみたいに時々弱いところも見せてくれた方が母性本能がくすぐられるっていうか」

ミントに続けてマルタがそう言い、だが彼女は頬に手を当てて腰をくねくねさせながら最後には「きやくエミル」と嬉しそうに歓声を上げる。

「一途に自らを愛してもらおう、それもまた女性の憧れの一つなのだとは思いますよ？」

「ふん」

ミントの言葉にカイはそう呟いてホットケーキを食べ進め、その様子を見たマルタがジト目でカイを見る。

「カイ、結局あんたどうでもいいとか思ってるかい？」

「よく分からん。とりあえず仲間を守るんだろ？」

マルタの指摘にカイはあつさりそう返し、アニーとミントは大きいため息をついた。

そしておやつを食べ終えた後カイは食器を洗い場に置いて洗い物をロックスに任せると食堂を出ていき、ホールへと出てくる。と、そこで彼はアンジュが何か考え事をしている様子なのに気づいた。

「……」

「アンジュさん、どうかしめましたか？」

「……あら、カイ。おやつは終わったの？ それと、食堂で何か話してた？」

「アニーやミントさんから女の子は男の子から守られるのが夢だとか。よく分かりません」

カイはアンジュからの質問に素直に答え、それを聞いたアンジュはくすくすと笑う。

「あら、そう。情操教育が必要かもね……ところで、丁度あなたのことを考えてたの。ねえ、ちよつと個人的にお願いがあるんだけど」

「はい？」

アンジュからのお願いというのを聞いたカイは首を傾げる。

「私の知り合いの、リカルド・ソルダードトつていう傭兵を探しにカダイフ砂漠まで行つてほしいの。彼の仕事が片付いてから、正式に来船する契約だったんだけど、一向に連絡がなくて。大丈夫だとは思うけれど、様子を見てきてもらえないかな？」

「ああ、それぐらいでいいなら」

「行つてくれるのね？ ありがとう。とつても助かるな」

アンジュからの説明を受け、要するにこの前のチェスターの時のような人探しの依頼だと考えたカイはあつさり頷き、それを聞いたアンジュは嬉しそうに笑う。

「なんだア、何の闇取引の話だ？」

と、スパードが口を挟んできた。

「やみとりひき？」

スパードの言葉をオウム返しするカイ。と、スパードは彼の肩に手を回して口を近づけた。

「カイ、気をつけろよ。アンジュはこう見えて結構腹黒いんだぜ？」

「はらぐろ？」

「心外だな。そんな事ないと思うけど……それに、今の話はきちんとした依頼。リカルドさんを迎えに行ってもらおうかと思って」

スパードの言葉にカイがまた首を傾げるとアンジュは心外そうに口元を尖らせ、スパードにも依頼内容を説明する。それを聞いたスパードは「ああ」と頷いた。

「そういうやあのおっさん、到着遅れてるみたいだな。迷子ってキャラでもねエのによ」

「だから、正式な依頼としてお願いをしたの。大丈夫だとは思うけど、万が一のことがあるといけないでしょ？」

「なるほどな。そーいう事か……」

アンジュの説明を受け、スパードは納得したようにふんふんと頷くとカイの方を見にくつくつと笑った。

「カイ、準備は抜かり無くしていけよ？ 職業柄つつーか、初対面の相手に容赦ねエから

な、あのおっさん」

「あ、そうね。とりあえず私から手紙を書いておくわね……」

アンジュはそう言うのと適当な用紙にペンですらすらと手紙を書き始め、カイはその間に砂漠に行く準備として水を貰いに食堂へと向かう。

「はい。リカルドさんに会ったらこれを見せなさい」

「はい。じゃ、行ってきます」

「行ってらっしゃい」

準備が終わった後、手紙を託されてカイは挨拶と共に船を出ていき、アンジュも手を振って見送る。

「なんか親子みたいじゃね？」

「あら失礼ね。せめて姉弟って言うてくれる？」

「パシリって言わねエだけ気イ使ったつもりだったんだけどなア」

まるでおつかいに出ていく息子とおつかいを頼む母親みたいな光景にスパードが意地悪く笑ってそう言うのと、アンジュは口を尖らせて返し、それを聞いたスパードはクツクツと笑いながら言った。

それからカダイフ砂漠へと到着したカイは水を飲みながら砂漠を歩いていく。

「そのガキ、止まれ」

突然そんな声が聞こえ、カイは足を止める。と、いきなり額に傷のある、長身で黒髪を長く伸ばし後ろで一本にまとめている男性がライフルを構えながら近づいてきた。

「おい、こんなところで何をしている?」

「……」

男性の言葉にカイは黙ったまま。と、その時いきなり魔物のものと思われる咆哮が聞こえてきた。

「……近いな」

男性はそう呟いて構えを解きライフルを肩に担ぐ。

「ガキ。死にたくなければ、今すぐにここを去れ。さもなければ、命の保証は出来ん……いいな。二度は言わん」

男性はそう言うのと歩き去っていく。しかしカイもこの砂漠に用事がある以上帰るわけにはいかず、男性が去っていくまで適当な岩陰に隠れて日光や魔物をやり過ぎし、少し時間を置いてから再び砂漠を歩き始めた。

それからカイは岩陰に隠れたり魔物の隙をついて身軽に移動したりと一人での行動なのを最大限に利用して魔物をやり過ぎし、

「地裂斬!」

「ギャアアアアッ!!」

どうしても逃げられない場合のみ、なるべく一対一で戦えるよう工夫して魔物を撃破していく。そのまま砂漠を歩いていき、ついに彼は以前ジョアン達を助けたオアシスへと辿り着いた。

「……少々手間取ったか」

そこには先ほど出会った男性がイノシシのような魔物の死骸を前にそう呟いている光景があり、カイが彼に歩き寄ると男性もその気配に気づいたのか振り返り、カイの姿を見ると露骨に顔をしかめた。

「……まだいたのか。帰れと言ったはずだ。ここはガキの遊び場ではない」

「帰るわけにはいかない。アンジュさんから依頼がある」

「何？ 今、アンジュと言ったか？」

男性の言葉にカイが言い返すと、彼の台詞の一部に男性は反応する。

「おい、詳しく話を聞かせろ」

「……依頼に関して無関係の人間には話すなどアンジュさんから教えられた」

「……あいつ、教育が行き届いてるな……」

律儀かつ真面目なカイの言葉に男性は頭を抱える。

「つたく……俺はアンジュの知人で、リカルド・ソルダードだ」

「リカルド？」

と、このままでは話が進まないかと悟ったのか名乗った男性——リカルドの言葉に今度はカイが反応し、懐から手紙を取り出す。

「これをリカルドという男性に渡せと。スパードが容赦ないからって」

「ふん……見せてみる」

スパードからの評価にリカルドは鼻を鳴らしてカイから手紙を受け取り、それを読んでいく。そして手紙を読み終えた後、リカルドはそれをくしゃつと握り潰してポケットにねじ込んだ。

「事情は把握した。俺も仕事の報告が終わり次第、予定通りギルドへ向かう。セレーナにはそう伝えてくれ」

「……」

「今度はそう時間はかからん。俺と契約を結んでいるのはセレーナだけなのだ。契約は遵守する……それが俺の主義でな」

リカルドはそう言っただけでその場を去っていき、カイもとりあえずリカルドに会って様子を見るという目的は達したため、砂漠を後にした。

そしてバンエルティア号に戻り、アンジュと少し話していると突然甲板に続く扉が開く。

「来たぞ、セレーナ」



「ああ、リカルドさん」

来客——リカルドの姿にアンジュが微笑み、リカルドはカイを見てふんと鼻を鳴らす。

「また会ったな。しかし、よもやこんなガキがギルドで依頼を請け負っているとは……」  
「技量も人柄も確かですから。ギルドのリーダーとしては、仕事を任せない理由がありません。これでもウチの期待の新人で未来のエース候補ですからね」

アンジュが得意気な様子でカイを紹介、

「ふむ……まあ、確かに教育が行き届いているな。関係者だと証明しなければ口を割りそうになかった。傭兵として大事な依頼人の守秘義務を守っていたというわけだ」

「えっへん」

リカルドの評価にアンジュは胸を張る。

「だが、融通が利かなすぎる。これではいずれ依頼人とトラブルを起こすぞ」

「そ、それは、まだ一人で依頼をさせたことなくって……大体现地に行く時は仲間が一緒だから……」

「交渉は人任せか。それでは一人前とは言えんな」

しかし続いでのリカルドの厳しい批評にアンジュはがくつと肩を落とすし、その批評の対象であったカイは首を傾げる。

「あ……ほんとだ、リカルドさんだ！」

すると、いきなりルカの声が聞こえ、ルカにイリア、スパードがそこに現れる。

「随分遅い到着じゃない？ もしかして、大御所ぶってるつもり？」

「いや、単に道に迷ってただけって線も残ってるぜエ？」

「二人とも、ちよつと……失礼だよ……」

イリアとスパードの毒舌にルカが慌てて止めようとする。その光景を見てリカルドはまた顔をしかめた。

「……相変わらず騒がしい奴らだ。セレーナ、ひとまず俺は部屋で休ませてもらう。仕事の話はそれからだ」

「分かりました」

「ああ。言うまでもないことだとは思うが、ガキ共とは別の部屋で頼む」

リカルドの言葉にスパードが不愉快そうな表情を見せた。

「つかう！ 相変わらず不愛想な上にムカつく野郎だな！」

「まあ、それでこそのおっさんって気もするけどね〜」

「アニーミ。その不愉快な呼称は慎めと言っていたはずだ」

スパードが続けてのイリアの言葉にリカルドがそう指摘、と、イリアは嫌味そうな笑みを見せた。

「あくら、そうだったかしらあ？　どうもおっさんのお小言は右から左みたいで、ごめんなさいね〜♪」

「……」

「はいはい。じゃれ合うのもそこまで。とにかく、頼もしい仲間が増えたんだから。みんな、協力して、仲良くね。カイも今日はありがとう」

イリアの言葉にリカルドが舌打ちを叩きそうな顔を見せるとアンジュがそれを止め、カイにお礼を言った。それからアンジュがリカルドを連れて部屋に案内しに行くと、それと入れ違いにまた扉が開く。

「やつほー。あたし、アーチェ。アーチェ・クライン。よろしくね」

「……カイ。よろしく」

「はいはい、よろしく。あんたもギルドのメンバーなんですよ？　あたし、今日からここで働くからさ」

ピンク色の髪を長く伸ばし、ポニーテールに結って何故か箒を持っている少女――アーチェの唐突な挨拶にカイは驚きながらとりあえず返し、それにアーチェがそう言っている、ミントがホールへとやってきてアーチェを見て頬を綻ばせる。

「アーチェさん、お待ちしていました」

「あ、ミント。ミントが欲しがってたのって、これでしょ？　ソーサリーリング」

アーチェはそう言つてミントに不思議な形状をした指輪を手渡す。

「はい。これの力を借りれば、未踏の地へ行けるかもしれませんが。これからアドリビトムにとつて、必要なものになると思つていたもので」

「でも、今はまっさらな状態でなーんの力もないのよね。だから、このリングにまず、息吹をふきこんでやんないといけないの」

「では、ひとまずこれはアンジュさんに預けましょう。どなたかが、このリングに息吹を与えてくれるように依頼を出しておきますね」

不思議な指輪——ソーサラーリングは今はまだなんの力もないとアーチェが説明し、息吹を吹き込む必要があると言つたとミントがアンジュに預けて、誰かが息吹を吹き込んでくれるよう依頼をしておくと言つた。それにアーチェはうんと頷いた後カイを見た。

「んじゃ、カイ。仕事で組みたい時は呼んでね！ あたし、専門は魔術だから役に立つわよ」

「ああ」

アーチェはそう言い残してミントの案内で部屋に向かい、カイも自分の部屋に戻つていった。

その頃バンエルティア号の展望室。操舵室から続くこの船の隠れた最上階だが特に何かある訳でもなく、精々雨天時等甲板が使えない時に少し身体を動かしたいという卜レーニング馬鹿を除けば滅多に人が来ない場所。レイはそこで一人考え込んでいた。

(この前の砂漠でのクエスト……)

考えていたのは以前カイ、クレス、イリア、そして飛び入りのカノンと一緒に受けた砂漠での魔物を捨ててきてくれという依頼。実はその捨ててきてほしい魔物と言われていたのが何故か身体が鉱石のように固まり、異形と化しかけていた過去このギルドの依頼人ジョアンと、彼と同じ病にかかり病を治す存在なるものに病を治してもらったというミゲル。

(……)

異形となりかけていた二人を見たレイは、いや、それが入っていたケージを見た時その中にいた二人の気配を感じた時、いや、さらにその依頼を受ける前、オルタータ火山で赤い煙を浴びたのをその目で見たコクヨウ玉虫がまるで鉱石のような異形の存在に成り果てた時……彼女の胸に妙な感情が浮かんでいた。

(なんだ、この感覚は……心休まるような……)

レイはそう考えた後、はあとため息をついて展望台から降りる。

「ああ、レイさん」

「チャット船長。何をしているのですか？」

と、操舵室にはチャットがいた。その姿にレイが尋ね、船長と言われたことに気分をよくしたのかチャットはふふんと鼻を鳴らした。

「ちよつとここの掃除をしていたんです。船長ですから船を大事にするのは当たり前ですからね！」

「なるほど。では、邪魔にならぬよう我はこれで」

「ああいいえ。もう終わったところですから」

えっへんと胸を張ってそう言い、レイが邪魔にならないよう立ち去ろうとする。チャットはもう掃除は終わったからと掃除道具を片づける。それから二人は一緒に一階のホールへと降りてくる。

「あ、レイにチャット。丁度良かった」

ホールへと降りたところでアンジュが二人に声をかけ、ミントが二人の方に駆け寄る。

「申し訳ありませんが、今お時間よろしいでしょうか？」

「えつと、なんででしょうか？」

「少し依頼を受けていたきて……」

「構わない。船長も一緒に受けていただけますか？」

「も、もちろんです！ なにせ船長ですからね！」

ミントの言葉にチャットが首を傾げるとミントはそう言い、それを聞いたレイは「別に構わない」と話も聞かずにそれを了承し、チャットも再び船長と呼ばれて気を良くしたのか胸を張りながら答え、二人がアンジュの前に立つとアンジュはよかったと微笑んだ。

「よかった。今回の依頼、どうしてもチャットが必要になるのよ」

「すまん、アンジュ。ハロルドもリタも研究が忙しいと言っているのだが……」

と、科学室からユージーンが出てきた。

「あ、ユージーンさん。大丈夫ですよ、今レイさんとチャットさんが同行してくださいと」

「そうなのか？ すまない。助かる」

「え、？」

ミントの報告にユージーンが二人に向けて深々と頭を下げると、チャットの表情が固まる。

「ねえねえ、なんかさつきオルタータ火山の、まだ誰も行っていない場所に行くって話を聞いたんだけどさ？ 私もついてって構わない？ お宝の匂いにするわ♪」

さらにどこから聞きつけたのかルーティがにまにま笑いながらやってきた。

「今回はミントからの依頼で、オルタータ火山に行ってもらうね。で、何をするかと言うと……」

依頼のメンバーが揃い、アンジュが依頼の説明を初めてさつきアーチェがミントに渡していた不思議な形状の指輪——ソーサラーリングを出す。

「アーチェが持つてきてくれた『ソーサラーリング』に、自然界の息吹を注入してきてほしいの」

「自然界の息吹とは、自然のエネルギーと捉えていただいて結構です。そのエネルギーを注入する場所を、『リングスポット』と言い、そこで初めてソーサラーリングに効力が宿ります」

アンジュの説明にミントが補足する。

「まあ、何が出来るかと言えば、宿らせたエネルギーをリングで撃てるようになるのかな。ま、あちこちで役に立つものだし、損になる事はないから。それじゃ、ソーサラーリングを預けるから後はお願いね」

「はい」

アンジュがそう言ってレイにソーサラーリングを渡し、レイはその指輪を懐に入れる。

「え？ あ、あの、ちょっと待つててください。同行者つてミントさんは？……」



「申し訳ありません、アーチェさんの荷物整理を手伝わなければならなくなって……その……」

チャットの慌てた声にミントは心なしか頬を赤く染めながらごによごによとした声で説明する。

「まあ、問題はないだろう。行くぞ」

「はい」

「はいはい行くわよ」

「や、あのー！」

ユージーンの号令にレイが頷き、ルーティがチャットの手を引いてメンバーは出発した。

そしてオルタータ火山に場所が移り、そこを歩くレイは二度目で暑さにも慣れたのかすたすたと前衛を歩き、ユージーンもその隣を歩きながら辺りを警戒していた。ちなみにルーティはそこら辺に高く売れそうなものがないか探し回っていたりしている。

「アンジュさん、ボクが、毛がフサフサなのを苦手だと知っていながら……」

「どうした、チャット。忘れ物か？」

「うわっ!？」

二人の後ろを少し遅れながらチャットがぶつぶつ呟いているとユージーンが彼女の方に寄りながら尋ね、それにチャットは声を上げてぎざっと下がる。

「……あ、あまり近寄らないでください!!」

「む……すまん」

チャットの叫び声に押されたユージーンは彼女に向けて謝罪し、チャットはむくれた様子を見せる。

「そ、それよりボクを子供扱いしないで下さいよ！ いつでも準備万端ですー!」

「そうか、それは悪かったな。しかし、今回はお前のその小さい身体が必要になる。俺とレイ、そしてルーティは今お前にしか出来ない仕事をする間の護衛というわけだ」

「了承した」

「任せなさいって」

「な、なにをさせる気なんですか?」

ユージーンからの依頼詳細説明にレイとルーティが頷き、チャットが「何をさせる気だ」と叫ぶがユージーンは「行けば分かる」とだけ言って歩き出した。

それから彼女らがやってきたのは以前ここに来た時の目的地であった星晶採掘地跡である洞窟の入り口。しかしユージーンはそこで足を止めて右手側に目を向けた。そ

ここには鉄で出来ていると思われる頑丈そうな扉が立ち塞がっていた。

「ここは通れないでしょう？ 進めないじゃないですか！」

「この扉は、向こう側からなら開く」

チャットという言葉にユージーンが説明すると、チャットは口を尖らせて「そう言っても、どうやって向こう側へ行くんですか？」と反論。と、ユージーンはふつと笑って、「それがお前の仕事になる」と答えて壁に空いている穴を見る。

「壁に穴があるだろう？ あの穴は、向こう側へ続いている」

「ええ!! バンエルティア号の船長であるボクに何かあつたらどうするんですか！」

ユージーンという言葉にチャットが叫ぶ。

「もしものために俺達がいる。安心しろ」

が、ユージーンは真面目な顔でそう答えた。

「……それとも出来ないと言うならば、他の者に代わってもらおうか？」

「で、出来ますよ!! ボクが行きます!!」

挑発……のつもりはなかっただろうがユージーンという言葉にむきになったのかチャットはそう叫んで穴を覗き込む。

「う……（…奥にフサフサのネズミとかいたら……どうしよう……）」

しかしそう考えてしまい、彼女の動きが止まる。

「どうした。何かいるのか？」

「うわああああ、こつちもフサフサ!! こつちに来ないでください!! 行きます、行きますってば!!」

心配したらしいユージーンが歩き寄ろうとするとチャットは悲鳴を上げて穴に潜り込む。それから数分程度経過すると扉が開き、その中からチャットが現れた。

「……………どうぞ……………開きましたよ」

「よくやった、チャット」

自分の仕事をやり遂げたチャットをユージーンが褒め、次に彼は彼女がいつも被っている帽子を見る。

「しかし、その帽子でよく穴を通れたな」

「……………そうですね……………我ながら不思議です」

その言葉に彼女はそうとだけ返し、再び彼女らは先に進んでいく。

「裂風瞬迅殺!!」

それからレイ達は火山に住む魔物達と戦い——ついでにチャットが通ってきたらしい出口の穴を発見した——ながら火山の先に進んでいき、ユージーンの槍による二連続斬りと追撃の真空波がオタレドを斬り倒す。

「わああああああっ!!!」

チャットはしりもちをつきながら靴からボールやピコハンを投げて攻撃を仕掛けるが、レドゲコはそれをかわしながらチャットに突進、一気にチャット目掛けて飛び上りのしかかろうとする。

「ふんっ!」

「レイさん!」

しかしチャットの前にレイが立ちはだかつて右手に持った盾でレドゲコを防ぎ、そのまま押し返すと左手に握った銃の銃口をレドゲコに向け、弾丸を連射して魔物を貫き息の根を止める。

「ローバーアイテム!」

そしてルーティが魔物から素材となる無事な部分を鮮やかな手さばきで奪い取った。

「無事ですか、船長?」

「あ、はい……」

レイの確認にチャットは呆然としながらこくこくと頷く。そして彼らはさらに先に進み、上層ポイントへと進んでいく。と、ユージーンはその道の先にいる、岩のような身体に炎を背中からは羽のように、頭から背中にかけても炎を噴き出している巨大な魔物を見た。

「む……あれはファイアブロンクか……」

ユージーンは呟き、レイとチャットを見る。

「レイとルーティはともかく、チャットは大丈夫か？」

「馬鹿にしないでください。毛がない相手なら、怖くありません！」

「……そいつは頼もしい言葉だ。では、行くぞ！」

ユージーンの言葉にチャットが叫び、ユージーンがそう言つて槍を構えるとレイも剣を抜いて盾を構え、チャットも鞆に手を入れて三人はファイアブロンク目掛けて突進、外敵に気づいたファイアブロンクも威嚇するように咆哮し、巨大な腕を地面に叩きつけた。

「裂空斬！」

「天雷槍！」

「氷結せよ、アイシクル！」

その腕に押し潰されないようにレイが空中を縦に回転する回転斬りで斬撃を与え、ユージーンが槍を振り上げて雷鳴を起こし雷撃で攻撃、ルーティが先端の尖った氷柱を生み出してファイアブロンクを傷つける。

「ピコハン！」

さらにチャットがカバンから取り出した大量のピコピコハンマーをファイアブロンクに投げつけた。

「グオオオオオオツ!!」

咆哮を轟かせて巨大な腕を振りかぶり、振り下ろしてくるファイアブロンクに、地面に降り立ったレイは盾を構えようとするがすぐさま盾を投げ捨ててその場から逃げ、その直後巨大な腕がさつきまでレイの立っていた場所に突き刺さりその場にあつた盾が地面にプレスされる。

「防御していたら潰されていたな……」

「ああ。体格差があり過ぎる」

レイは盾を投げ捨てた左手に銃を持ち替えながら咄き、その言葉をユージーンが肯定する。その直後、レイ、ユージーン、ルーティが再び走り出した。

「ツインバレット!!」

少しスピードを緩めて走りながら銃弾を連射してファイアブロンクの意識を向け、その間に身軽なルーティがいち早くファイアブロンクの懐に突っ込む。

「スナイプロア!!」

突進の勢いをつけて剣——アトワイトを突き刺し、刃を返して後ろにジャンプする勢いを利用し斬り裂く。

「裂風迅槍衝!!」

そこにユージーンが槍を回転させて疾風を纏わせ、回転突きでファイアブロンクの身体

を抉る。

「グオオオオオオオツ!!!」

ファイアブロンクは懐の二人を無視し、銃弾を当ててきたレイに狙いを定め拳を振り上げ、一気にレイ目掛けて右ストレートを放つ。がレイはその拳目掛けて突進、さらにその拳の軌道を見切っていたのかスライディングで拳の下を潜り抜けるようにかわして銃口をファイアブロンクの顔に向ける。

「スライディングバレット!!!」

スライディングしながら銃弾を連射し、ファイアブロンクを怯ませる。しかしその直後ファイアブロンクは巨体を持ち上げ、彼らを潰さんと試みた。

「まずい! 間に合うか……」

相手の目的に気づいたユージーンとルーティはすぐに逃げようとするが相手の巨体から逃げきれるかと言われると怪しいところ。二人はまだその影の中だ。

「吹き荒れる、貫け、嵐の矢よ!!!」

と、そこにそんな男性の声が聞こえてくる。

「ストリームアロー!!!」

そして凜とした男性の叫びと共に辺りに風が舞い、嵐の矢がファイアブロンクを貫く。その痛みにファイアブロンクは呻くと共にバランスを崩し、仰向けに倒れる。その巨体が



ずうずうずうんと地響きを立てた。

「今の術は……一体誰が」

「ま、まさか!？」

ユージーンが驚いたように呟くとルーティがさっきの声及び術に心当たりがあるのかまさかと叫ぶ。

「なにやら奥の方が騒がしいから来てみたが。懐かしい顔に出会ったものだな」

さつき彼女らが来た方から、銀髪をなびかせて褐色の肌をした男性が歩いてきた。

「ウッドロウ！ 何やってんのよあんた!!」

その姿を見たルーティが嬉しそうに叫ぶ。と、ウッドロウと呼ばれた男性は「何、気にする事はない」と返す。

「各国を巡る旅の途中というところだ。ところで、手助けが必要かな？」

「ただで働いてくれるってんなら大歓迎よ!」

「分かった。私で良ければ手を貸そう……構わないかな、リーダーさん」

「……」

ウッドロウの提案にルーティが二つ返事で返し、ウッドロウがレイに尋ねると彼女は静かに頷く。そしてファイアブロンクが体勢を立て直すと共にレイとユージーンは走り出し、同時にルーティが詠唱を開始、ウッドロウは背負っていた弓を構えて矢を番え、

チャットは鞆の中に手をやる。

「白きに染められし、凍結なる世界。安らかな幕引きを与えん！ ブリザード!!」

「豪烈！」

「ポイハン！」

火山に巻き起こる吹雪と吹雪に乗ってファイアブロンクに襲い掛かる、気合が込められた矢と毒が染み込み緑色に変色したピコピコハンマー。体験したことのないそれにファイアブロンクは驚きからか硬直し、吹雪と共に気合のこもった矢や毒のピコピコハンマーを受けて苦しそうに唸る。そこにレイは下におろされていた腕をつたってファイアブロンクの巨体を駆けあがりながら左手の銃をファイアブロンクの足元に向ける。

「アクアバレット!!」

バンバンバンと銃声が鳴り響き、水のマナが込められた銃弾がファイアブロンクの足元に着弾。それと同時に水流が発生し、ファイアブロンクの足元を掬い上げる。そしてレイはそのままファイアブロンクの腕を踏み台に大ジャンプし、身体に捻りを加えて銃口をファイアブロンクへと向ける。

「ガトリングバレット!!」

空中を回転しながら銃弾を連射し、ファイアブロンクの身体を銃弾が貫く。さらにその頭上にユージーンが上がり、槍をひゅんひゅんと回転させる。その槍に巻き込まれてい

くのはさっきの技や術で辺りに一時的に拡散した水のマナ。

「水塵渦龍槍!!!」

ファイアブロンクの頭部に槍を突き刺すと同時、ファイアブロンクの頭部を蹂躪する荒れ狂う水流。その一撃が急所に入ったのか、ファイアブロンクは気絶、

「今だ!!」

さらにユージーンから追撃指示が入り、レイは剣を抜き、ルーティとウツドロウもその後に続く。

「スラツシュレイン!!!」

「空破絶掌撃!!!」

ルーティがジャンプして鋭い針のような水流をファイアブロンクに見舞い、ウツドロウが鋭く突きを放つと彼の姿が消え、そう思うとファイアブロンクの背後から二発目の突きを叩き込む。

「思いついた……」

レイはふつと笑いながらファイアブロンクから離れた地点でジャンプ、まるで先ほどガトリングバレットを見舞った時のように剣先を真っ直ぐに構えると同じように回転。

「飛転翔突!!!」

勢いよく回転しながら飛天翔駆の要領で宙を蹴り、突進。まるでドリルのような回転

突撃がファイアブロンクを貫かんと迫り、ルーティはその光景を見て苦笑し、その場を離れながら詠唱する。

「刃にさらなる力を、シャープネス！」

ルーティが術を発動すると同時にレイを赤い光が包み込む。そしてレイの空中回転突撃がファイアブロンクを貫き、その一撃を受けたファイアブロンクは断末魔の悲鳴を上げた後動かなくなつた。

「終わったみたいね」

「よし。目指すはこの先だ、急ぐぞ」

ルーティがファイアブロンクの死骸を確認し、ユージーンが急ぐぞと号令をかけて彼らは再び歩き出した。ちなみにちゃっかりウツドロウも同行している。

そして、彼女らは火山の最奥地へと辿り着く。そこには不思議な小さな柱のような台が光を放っていた。

「ここがリングスポットだ。レイ、ソーサラーリングをあの台にかざしてみろ」

ユージーンに促されてレイはソーサラーリングを取り出し、言われた通り台にかざす。と、いきなり台の柱部分から光が発され、それにソーサラーリングが共鳴したかのように光り始める。そしてその台からの光はやがて消えるが、ソーサラーリングには輝きが残つたままだった。

「これで、ソーサリーリングに自然界の息吹が宿った」

そう言った瞬間、いきなりこの場所の入り口だった部分の扉が閉まってしまふ。

「扉が閉まってしまいましたよ!」

「大体の仕掛けは分かっている」

焦るチャットに対しユージーンは冷静に答え、後ろの崖を見る。その崖の向こうにはこれ見よがしなスイッチが設置されていた。

「後ろにソーサリーリング用のスイッチがある。レイ、あれを撃つてみる」

ユージーンの言葉に従い、レイは崖つぶちに歩いていくとソーサリーリングをかざし、念じる。と、ソーサリーリングから火花が飛び、一直線に飛んだ黄色い火花がスイッチに当たるとさつき閉まった扉がゴゴゴと音を立てて再び開いた。

「やはりな。そういう仕掛けか」

「よかった。このまま閉じ込められるのかと思いましたがよ」

「このように、ソーサリーリングを使うことでしか行けない場所がある。では仕事は終わりだ。戻るとしよう」

自らの予想が当たり、少し得意気な表情を見せるユージーンに対しチャットはほつと安堵の息を吐き、ユージーンはソーサリーリングについてさらに説明。それから彼女は船へと戻っていった。

「お疲れ様！ ソーサラーリングはまだ効力を上げる事が出来るから、新しいリングスポットを探しましょう。リングは……とりあえず預かりましょう。必要になったらそれに応じて貸し出すことにするから」

「はい」

バンエルティア号に戻って依頼成功の報告をした後、アンジュに求められてレイはソーサラーリングを渡す。

「えーっと、ところで……」

それからアンジュはようやく、ちやつかり船まで一緒に戻ってきたウッドロウに目を向ける。

「あなたはどなた？」

「あーえっと、あたしらの知り合いで……」

アンジュのかくんと首を傾げながらの問いかけにルーティが困ったように紹介しようとする。と、ウッドロウは穏やかに微笑んだ。

「私はウッドロウ・ケルヴィン。話はルーティ君から聞かせてもらったが、このギルドのメンバーではスタン君、フィリア君とも旧知の仲だ」

「ウツドロウ……ケルヴェイン……ええええええええっ?!?!?」

ウツドロウの名前を聞いたアンジユが驚いたように叫び、ルーティも「まあそうなるわよね」と苦笑する。

「うわー、すごく丁度いいといふかなんといふか……」

「どういふことですか?」

アンジユが眩き、チャットが首を傾げるとアンジユは一枚の依頼用紙をウツドロウに見せた。

「これは……我が国からの依頼だ……ふむ、ウツドロウ・ケルヴェインの護衛依頼。私の護衛依頼か」

「うっわー。護衛どころかあたしらが助けられちゃったんだけど……」

ウツドロウの言葉にルーティが冷や汗をかく。

「なるほど……これは、一時の猶予を与えられたと受け取って構わないのかもしれないな」

眩いた後、困ったように「ふむ」と眩く。

「しかし、どうしたものか……私は一応、身分を隠し、各地を遊説している身でね。公式に、ギルドの今回の申し出を受ける事は出来ないのだよ。それでは、身分を隠している意味がなくなってしまうからね……」

そうやって彼は少し考えた後、彼は一つ頷いてアンジュを見た。

「さっそくで申し訳ないが、折り入って頼みたいことがあるのだが……」

「はい？」

「私をこのギルドに入れてもらえないだろうか？」

「はい!？」

唐突な申し出にアンジュは呆けた声を出すしかなかった。その後ろではチャットとユージーンが目を点にし、ルーティが呆れたようにため息をついている。

「表面上はどうあれ、腕に覚えのある者達と寝食を共にするのだ。国の者達も少しは安心出来よう。なにより、ギルドには民からの生の声が多く寄せられるはず。私自身も、大いに学ばせてもらう事が出来そうだ。悪い案ではないと思うのだが」

「まあ、ウッドロウの実力はあたしやスタン、フィリアが保証するわよ」

「ああ。俺も保障しよう、実際助けられたからな」

「は、はい!」

ウッドロウの提案にルーティとユージーン、チャットが彼の実力を保証するという声を出し、アンジュはうーんと考える様子を見せる。

「何も難しく考えなくても構わない。このギルドは国籍を問わず、多くの人間が集っていると聞く。私も王族としてではなくウッドロウ個人としてこのギルドに入れてもら



「いたいのだ」

「エステルさんと同じ、ということか？」

「エステル？」

ウッドロウの言葉にレイがそう言い、ウッドロウは少し驚いたようにその名前を反芻する。と、アンジュはこくと頷いた。

「分かりました。そういう事でしたら、私達は心からあなたを歓迎します。その代わり、皆と同じように仕事もきっちりこなしていただきますが」

「構わない。元より、それがこちらの望みでもある」

交渉が成立し、ウッドロウはレイの方を見た。

「レイ君、と言ったね？　そういうわけだ。しばらくこちらで世話になる。何かあれば遠慮なく呼びつけてくれ」

「ああ」

ウッドロウの言葉にレイは一言言って頷き、ウッドロウも首肯すると今度はルーティの方を見る。

「ではルーティ君。すまないが皆に挨拶をしたい。部屋に案内してもらえないかな？」

「ええ、任せといて。スタン達の驚く顔が目には浮かぶわ」

ルーティはきししと笑いながらウッドロウを伴い部屋に戻っていき、ユージーンと

チャットも解散する。

「たっだいまー！」

「たっだいまなー！」

と、そこに買出しに行つてきていたフアラとメルデイが帰つてきた。

「あ、お帰り」

「帰つてきたか」

アンジュがお帰りと言うとホールで読書をしていたキールが本を閉じて呟く。と、その後彼はメルデイが何か妙な紙を持つているのに気づき目を細めた。ちなみにフアラは荷物を持つて食堂に行つてゐる。

「メルデイ、なんだこの紙は？」

「それな、街に買出し行つた時もらつた。キールにあげる」

キールが言つた紙をメルデイはキールに手渡し、キールはその紙を見る。

「なになに…… 〃終末近し〃 だつて？ 〃今こそ救世主デイセンダーが降臨する時〃、

〃デイセンダーをこの世に迎え、腐敗した世界を共に撃ち砕き、輝ける未来を再建しよ

う〃、 〃世界再建の要…… 暁の従者〃……」

キールはチラシを読み終えた後、それを片手の甲でぴしぴしと叩く。

「最近世間を騒がせている、デイセンダーの出現を待つ新興宗教のチラシだな。大体デイセンダーなんて、いるわけがないんだ。お前もこんなのに引つかかるんじゃないぞ」

「バイバ！　なあキール、ほんとにデイセンダーいるがいいな！　世界を救うんだよう」  
キールの言葉を聞いたメルディは嬉しそうにくるくる回りながらそう言う。

「で、結局こういふ奴らは何も出来ずに延々とありもしないデイセンダーを待ち続けて、何も掴めない人生で終わるんだ」

「待つだけがダメだな。でも、この『暁の従者』信じるが人、増えてるよ。みんな、自分持つが力、知らないか？」

その言葉にキールがそう言うのと、メルディは悲しそうな目でそう返す。それにキールはひよいと肩をすくめた。

「さあな。ただ、本気で何かをしたことがなく、我が身の不幸を嘆くばかりの奴がこういうのに入信してしまうんだ」

「メルディ、自分何か出来るが分かって、すぐそれやろうと思うよ。みんな違うか？」

その言葉にメルディは再び悲しそうにそう言う。と、レイがそのチラシを覗き込んだ。  
だ。

「レイ。お前もこんな得体のしれないものに引つかかるなよ？　お前と言いカイと言

い、お前達は変なところ無防備なんだ……だからその、なんだ……離れてくれないか？」キールは最初こそ毅然とした様子で注意をするが、やがて恥ずかしそうにそう呟き、彼女の目的らしいチラシを押し付けて彼女から距離を取る。そしてレイはチラシを流し読みした後、ぐしやつと握りつぶした。

「バイバ！ レイ、どうかしたか!？」

「……なんとなく、むかついた」

「当然だ。僕達が努力しているのにありもしないものを延々と待ち何もしないなんて愚の骨頂だ」

レイの行動にメルデイが驚き、レイの言葉にキールはうんうんと頷いた。

場所は食堂に移り、フアラは買い出しした食料をクレアに渡すと食堂内にいるコハクに話しかけた。

「赤い煙は、最近じゃ色々な形に見える、って言ってたよね？ もしかして、実体を持つとうとしてる……のかな？」

「精霊なら、正体を知っていたりするかな」

「精霊って、本当にいるのか？」

ファアラの言葉にコハクが口元に指を当ててそう呟くと、食堂で食事をしていたカイがそう聞く。

「どうかな……昔はいたって聞いたことあるけど、どこまで本当か分からないよね」

カイの質問にコハクが困ったように呟く。その時食堂の扉が開き、

「精霊と交流を持つ、『ミブナの里』という場所がある……行く意思があるのなら、案内する。依頼として届けておこう」

開いた扉の向こうからクラトスがそう言うと、彼は踵を返して食堂に入る事なく去っていった。と、ロックスが神妙な表情を見せた。

「ミブナの里……聞いたことがあります。あそこは妙な昔話があるんです。本が……確か、『異類化生記』だったかな……あの地方に伝わる昔話を集めた本があるんです。人がお化けになったり、動物になったりする昔話です。他にも、悪い事をしてカエルにされた男の話とか……」

「ロックスも元々ヒトだったりしてね！」

「えーえええ!!!」

ロックスの言葉を遮ってファアラがそう言うと、彼は心から驚いたというように悲鳴のような大声を上げる。

「……えっと。なんででしょうか、ヤブカラボーに……」

「ふふ、冗談だよ！　ただ、ロックスってすごくヒトみたいだから。私達より頭がいいし、色んな事出来るし。なんだかヒトとの違いを感じないもの」

そして頬を引きつかせながら尋ねるとフアラは冗談だよと言って笑い、そう続ける。

「そ、そうですか。それは……どうも……ヒトとの違いを感じないって言うのは、そうですね、うれしいものですね……お嬢様のご両親の代わりをして生きてきました……僕みたいなのが親代わりなんて、恥ずかしいと思つてはいないだろうか……つて。それは……つと……気になっていましたし」

「恥ずかしいなんて思うものか」

ロックスは最初嬉しそうに、その後落ち込んだように呟くとカイは力強くそう言う。

それにロックスは嬉しそうに微笑んだ。

「あ、ありがとうございます。そう言ってもらえると、救われます。本当に……いつもいつも、好奇の目で見られました。僕が親代わりをしていることに……お嬢様もその事だからかわれて、恥ずかしい思いをしたでしょうに」

「ううん。ロックスは私達の家族だよ」

「はい……ありがとうございます！」

嬉しそうにお礼を言いながらもまだ暗いロックスにコハクがそう言う、ロックスはやつと元気が戻ったように頷き、元気にお礼を言う。

「そういえば、ロックスってなんて種族なの？」

「う、えーつと……なななな何でしょうね。ひよつとしたら僕、新種かも……タハハハハ……」

しかしさらに続けてのコハクの問いにロックスははぐらかすように笑うのであった。

## 第十一話 光気丹術

ブラウニー坑道。カイはクラトスに誘われハロルド、カノンと共に精霊がいる地——ミブナの里に行くためここを訪れていた。

「ねえ、クラトス。その『ミブナの里』って、ここを通らないと行けないわけ？」

「ミブナの里は、忍びの者が住む里だ。一般の者には見つかりづらい場所にある。この坑道が、そこへ繋がる唯一の道だ」

「なるほど、忍びねえ。隠密行動しないといけないなら外部に知られてはまずいわね」

ハロルドの質問にクラトスは淡々と説明、ハロルドがふんふんと頷いてそう言うところ、クラトスは「それもある」と返し、「だが」と続ける。

「ウリズン帝国がミブナの星晶を狙っているという話もあるのでな」

「ああ……ヴェイグの故郷の星晶を採り尽くしたサレって奴がいる国……」

「だから、外部の者には並々ならぬ警戒を抱いているはずだ」

「でも、何であんたは道を知ってるの？」

クラトスの説明の後、ハロルドは一般の者は知らない里を何故クラトスが知っているかと尋ねる。



「ミブナの里の近くに、唯一忍びと交流のある村がある。私はそこから来た」  
「ふくん、そりやまた珍しいわね」

その言葉にハロルドは両手を頭の後ろで組みながらそう返した。そしてクラトスが「行くぞ」と号令をかけ、彼らは坑道を進んでいく。

「クラトスは、その忍びの里つてどこに行つた事があるのよね？　ねえねえ、どんなトコだったの？」

「その質問には答えられん。忍びの里とは文字通り、世間と一線を引き忍びながら生きる者の地。本来であれば、その存在すら他言無用にすべき隠れ里なのだ」

坑道を歩きながら自らの知識欲を満足させるべくハロルドがクラトスに尋ねる。が、クラトスは取り合うことなく淡々と返した。

「でも、私達は今その里へ向かつてるわけでしょ？　遅かれ早かれ知ることになるなら、別に今だって……」

「遅かれ早かれ知ることになるのだ。焦る事はなからう」  
ハロルドをあつさりとおしらい、彼は先に進んでいく。

「……何よそれ。そんな我慢が出来るなら初めから聞いたりなんかしてないわよ。ま、いいわ……絶対、諦めないから」

その光景を見ながら、ハロルドは気味悪く微笑んでいた。

「空蓮華！」

「刹月華！」

カノンノの三連蹴りからの大剣振り下ろしとカイの刀左右薙ぎ払いからの後ろ回し蹴りがロツクルを粉碎する。

「よし」

「カノンノ！」

「きゃっ」

カノンノが嬉しそうに微笑むが、その背後からお化けのような姿をした魔物——ラップオンが襲い掛かり、カイが咄嗟にカノンノを引張ってラップオンの攻撃から守る。が、咄嗟だったためカイもバランスを崩してカノンノと一緒に地面に倒れ、その隙を狙わんとラップオンが襲い掛かろうとする。

「魔神剣！」

その瞬間ラップオンを襲う衝撃波。その一撃にラップオンは怯み、

「空破衝!!」

続けての鋭い突きの一撃がラップオンにトドメを刺した。そしてクラトスは剣を腰の鞘にしまいながらカイと共に倒れているカノンノを見下ろす。

「油断と慢心は隙を生む。気をつける事だ」

「は、はい！」

クラトスからの厳しい言葉にカノンノは頷く。

「でさ、もう離れた方がいいんじゃないの？」

「?……!?!」

その次にハロルドが言い、カノンノは首を傾げてから今自分が置かれている状況を確認する。現在自分は誰かに抱きかかえられており、下の方は地面とは思えない感触……。そして目を下ろした瞬間、カノンノは顔を真っ赤にした。現在自分はカイに後ろから抱きかかえられ彼を下に地面に倒れていた。

「(っ)(っ)(っ)(っ)めんカイ!!!」

「……いや、別に」

ばつと飛び退いてぺこぺこ頭を下げるカノンノに対しカイは平然とそう返す。一切意識していないようなその姿にカノンノは僅かに頬を膨らませ、しかし今はそれどころでもないためまあいいかと結論を出す。

それから彼らは坑道を進み、アンジュから貸し出されたソーサラーリングを使い、三層採掘区というところまでやってくる。そこまで来ると襲ってくる魔物もグールという人間の死体のようなゾンビのようなものにならなくなっていく。

「道、ないじゃない。こつちであつてんの?」

ハロルドがそう言う。クラトスの先導でやってきた道の先は何か不思議な文様が刻まれている壁で塞がれている。と、クラトスはその壁の横にある岩壁を注意深く観察し、やがて何かを見つけると剣を抜き、その観察していた部分に突き刺す。その時、ゴゴと音がして壁が下がり、道が作り上げられた。

「ふうん。忍びが作った隠し通路つてワケね」

「……行くぞ」

ハロルドが眩き、クラトスがそう言つて歩き出す。

「それにしても、忍びの作った隠し通路にお目にかかる機会があるなんて光栄ね」

突然ハロルドがそう言い、彼女は興奮したように頬を紅潮させた。

「一瞬の油断……トラップを起動させた瞬間シュツ、ビュツ、バババツと次々発動する  
罨、罨、罨! その隙間をかくぐり、ちぎつては投げちぎつては投げ……」

「……何の話をしている」

「ん? 昔見た忍者劇」

いきなりの話にクラトスが尋ねると彼女はあつさりと言つて、クラトスは呆れたよ

うに嘆息した。

「そんな作り話を信じているのか」

「あら。確かにフィクションでしようけど、全部が全部虚構の産物とは限らないでしょ。信じる事から広がる創造や浮き彫りになる真実だつてあるんじゃないかしら。考古学なんかは、恐らくその典型例ね。憶測や推測をまず信じる事から彼らの研究は始まるんだもの」

クラトスの呆れたような言葉にハロルドはすらすらと反論し、それを聞いたクラトスはフツと笑う。

「……お前は本当に弁が立つな」

「そういう性分なのよ、昔っからね。今のは、褒め言葉として受け取っておくわ♪」

彼の言葉を聞いたハロルドは嬉しそうに微笑みながらそう返したのであった。

「ハロルドさん、ほんとに無邪気だね」

「ああ……カノンノ！」

「わっ!?!」

その姿を見ながらカノンノがそう呟き、歩いているとカイが突然カノンノを呼び止め、彼女を引っ張る。

「な、なに?! 魔物!?!」

「足元を見ろ」

「足元？ ただの石でしょ？……わっ!？」

驚いているカノンノに冷静にカイが言い、それにカノンノは首を傾げながら足元を見下ろす。と、わっと声を上げた。パツと見はただの石だがそれは石ではなく一枚の岩を磨き上げたのだろう、上部が無数の鋭い棘のようになっていた。もし知らずに踏んづけていたら足に負傷を負う事は想像するにたやすい。

「あ、危なかった……」

「このようなトラップが、この坑道にまだあるかもしれん」

カノンノが安堵の息を吐くとクラトスが前に出て説明を始める。

「私が知らぬ間に新たな仕掛けが施されている可能性もある。くれぐれも勝手な行動は……」

クラトスの警告をカイとカノンノは真剣に聞く。

「おおく！ 何かしらこれ。ふんふん……硬質な植物の外皮を削り出して槍状にしたのね！ ということは、近くにこれを使ったカラクリとやらが……」

しかしハロルドはそんな警告どこ吹く風とばかりにここの仕掛けを探っていた。

「ハロルド。聞いているのか」

「あら、聞いてるわよ。勝手な行動はつつしめって言っんでしょ？」

クラトスの言葉にハロルドはそう言い、にまっと微笑む。

「坑道なだけに」

「……」

「あらやだ、本気にしちゃった？ 冗談よ冗談」

いきなりのダジャレにクラトスは黙り込み、ハロルドは冗談よ冗談と言いながらによほほほと笑い始めた。

そしてクラトスの先導で罫を回避、たまにかいくぐりながら彼らは奥地へと進んでいく。

「何を読んでいる？ それはなんだ？」

「ああ、さっきの秘密通路近くに落ちてた紙。暇になってきたから読んでたのよ。ほら、新興宗教の勧誘チラシよ。こんな人のいないところにまで布教だなんて、ご苦労な事よね」

ハロルドが何かを読んでいるのに気づいたクラトスがそう言うのとハロルドはチラシをひらひらさせながら返す。

「暁の従者……デイセクターの出現を待つ集団か」

「世界の危機が訪れた時に現れるデイセクター、ね。まあ、危機の感じ方って人それぞれだだろうけど、今が危機の最たる時なワケかしら？」

「さあな、世界の住人はヒトだけではない。ヒト以外のものが危機を感じているならば、そうかもしれないが……」

ハロルドとクラトスがそう話し合う。

「わーっ!! 待てっ!! こらーっ!!」

その時、そんな焦り切ったような声が聞こえてきた。

「なあに、今の声?」

「あの声は……」

その声にハロルドが眩くと聞き覚えがあるのかクラトスが眩き、直後彼は何かを感じ取ったように眉間に皺を寄せた。

「何か、異様な気配が流れてくる。先を急ぐぞ!」

クラトスがそう叫んで走り出し、彼らは急ぎ、しかし罨に引つかからないよう慎重に先を進んでいった。

「先ほどの気配はこいつか」

クラトスが目の前に佇む二体の珍妙な魔物——ゴレムのように石から出来ているがなんか猫っぽい顔つきに手の先には肉球のような模様。そして土台のようなものに



乗つけられている——を見る。

「ねえ、こいつと戦うの?」

「恐らく、門番のつもりだろう。こいつを倒さねば、ミブナの里へは行けそうにないだろうからな」

「やつぱり〜! これが忍びの技術なのね♪ 面白そうだから相手しちゃうわよー!」

クラトスの剣を抜きながらの言葉にハロルドも嬉しそうに歓声を上げて杖を構え、カイも刀を、カノンも大剣を構える。それと共に珍妙な魔物もどすんどすと動き出した。

「影走斬!!」

地面を蹴って素早く相手の懐に潜り込み、すれ違いざまに刀で渾身の一撃を叩き込む一撃離脱型の秘技——影走斬で珍妙な魔物を斬るカイ。しかしそれは石でも叩いたかのような音を鳴らしただけに終わり、珍妙な魔物は振り返ると石の腕を振り回してカイに叩きつけた。

「遅い」

しかしカイは素早くサイドステップを踏んでその叩きつけられた腕をかわし、振り返る様に左手で苦無を投擲、珍妙な魔物の意識をこちらに向けたままにする。

「唸れ大地よ、我が呼びかけに応え鋭き槍となれ! グレイブ!!」

珍妙な魔物を背後からカノンノの魔術が襲い、カイは振り返る回転の勢いを生かしたまま飛び上がり、勢いよく珍妙な魔物に後ろ回し蹴りを叩き込んだ。それで珍妙な魔物の上半身が吹っ飛ぶ。

「よし」

カイは着地した後、土台がなくなつては動けないだろう珍妙な魔物にトドメを刺さんと刀を構える。

「ぐうっ!」

しかしその直後真横から突進をくらい、完全に不意打ちをくらつたカイは吹っ飛ばされて地面をすべる。

「これは……」

何かが突進してきた先にはさつき上半身が吹っ飛ばされた珍妙な魔物の土台——シーサーチェスト——がびよんびよんと飛び跳ねている姿があつた。

「ま、まさかこの魔物、二体一組なの!」

ぶんぶん腕を振り回して襲つてくる珍妙な魔物の上半身——ストーンシーサー——の攻撃を防ぎながらカノンノが焦つたように声を上げた。

「あつちは苦戦しているようだな……」

ストーンシーサーの攻撃を盾で受け止めながらクラトスはカイ達ルーキー二人の方を見て眩く。既にシーサーチェストはハロルドの強力な魔術との連携により無へと還っていた。

「ハロルド。しばらくこいつの足止めを頼む」

「ほいほい、任せといてー」

クラトスの言葉にハロルドは頷いて詠唱を始める。

「歪められし扉、今開かれん！ ネガティブゲイト!!」

空間が闇の力によって歪められ闇の球体がストーンシーサーを襲う直前、クラトスはその闇の球体が出現する場所から脱出。ストーンシーサーが闇の球体に呑み込まれるのを視界の端に見ながらストーンシーサーの方に走っていく。

「くっ！」

ストーンシーサーの重い左右のジャブについてカノンノの防御が崩れ、ストーンシーサーはぶんぶんと力を込めるように腕を振り回す。

「雷神剣!!」

しかしそこにクラトスが乱入し、ストーンシーサー目掛けて雷を纏った突きを叩き込む。

「こいつは私に任せて、お前はカイの援護に向かえ」

「は、はいー!」

クラトスのアドバイスにカノンノは頷いてカイの方を見る。彼もなかなか善戦はしているのだがシーサーチェストは岩で出来ているとは思えないほどに身軽に飛び回っておりしかも岩の硬さは持ったまま。同じスピード型のカイも苦戦を強いられていた。

「来たれ爆炎、焼き尽くせ! バーンストライク!!」

炎のManaが結集し、炎の球をシーサーチェスト目掛けて叩き落とす。その爆風がシーサーチェストの動きを止め、カイはふつと微笑むと刀に辺りに散った炎のManaを集中させる。

「魔王炎撃破!!」

刀を振るい炎の衝撃波を放つ。その一撃がシーサーチェストを呑み込み、焼き尽くした。

「やったっ!」

「喜んでいる場合ではないぞ。ハロルドが足止めしている一体が残っている」

カノンノが嬉しそうにガッツポーズを取るのに対しクラトスがそう言う。既に彼はカノンノから引き受けたストーンシーサーを斬り倒しており、カイとカノンノは再び気を引き締めて現在ハロルドが足止めしているストーンシーサーの方向けて走っていた。

「鬼炎斬！」

「虎牙破斬！」

カイが炎を纏った刀での十字斬りをくらわし、カノンノが斬り上げから斬り下げへの連続攻撃をくらわせる。

「世話をかけたな、ハロルド」

「構わないけど……また非効率なことするわねー。あんたが戦った方が早いでしょ？」  
「それでは経験にならないからな。さあ、私達も援護するぞ」

ハロルドの言葉にクラトスはそう言つて詠唱を開始、ハロルドもはいはいと返して詠唱を開始する。

「深き地に眠れる灼熱の魔手よ、真紅の暇を待たずして全てを焼き尽くせ！ イラプ ション!!」

「光の洗礼を受けし聖なる剣よ、穢れしものに裁きを与えよ！ プリズムフラッシュャ!!」  
「わわわっ！」

「曼珠沙華！」

カイとカノンノが戦っているストーンシーサーの直下から溶岩が吹き出し、直上から光の剣が降り注ぐ。カノンノはその魔術に巻き込まれないように数歩下がりが、カイは後ろに跳びながら炎を纏った苦無を投げつける。が、ハロルドの方からさらにマナが高

まっているのを感じ取ったクラトスは咄嗟に二人の方を向いた。

「二人とも、逃げる!!!」

「さらに——」

クラトスが叫ぶと同時にハロルドがマナを解放。

「——シャイニングスピア!!!」

ストーンシーサーを聖なる槍が貫き、カイとカノンノは巻き込まれないように素早くその場を離れた。そしてストーンシーサーは他のものと同じく跡形もなく消える。

「倒したら、跡形もなく消えちゃった。という事は呪術的な存在ね。これは興味深いわ、グフフツッ!」

「そいつは人工精霊だ」

「人工精霊く?」

ハロルドが上機嫌に笑い、クラトスが説明する。

「誰だ?」

と、カイは後ろの方からくる気配に気づき、左手に苦無を隠し持ちながら後ろを振り向く。

「へえ。勘がいい奴がいるじゃないか」

その直後、紫色の服に身を包み、ピンク色の帯をした女性がそこに姿を現した。

「しいな。お前だったのか……」

「つて、クラトスもいたのかい！ 久しぶりだねえ。あいつを始末してくれて助かったよ」

知り合いらしいクラトスの声に女性——しいなは驚いたように声を上げた後苦笑する。

「あんた達が倒したのは、あたしが『光気丹術』で作ったものなんだ」

「ふんふん、光気丹術っていうのね！ ワクワクしちゃう」

しいなの説明にハロルドが目を輝かせる。

「扱いきれなくて暴走しちゃってさ……もしあれが外に出たら大変だったよ。ありがとう」

お礼を言った後、しいなはクラトスを見る。

「ところで、何の用だったんだい？」

「精霊と話がしたい。会わせてはくれないか？」

クラトスの単刀直入な要求にしいなは「ミブナの里の精霊にかい？」と言った後頭をかく。

「今はいないよ。ミブナの里周辺の星晶が採取され始めてから、いなくなっただ」

「ウリズン帝国か……」

しいなの言葉にクラトスがそう呟く。

「それ以外の国もだね……奴ら、星晶ばかりじゃなく、土地にあるものをなんでも取って  
いこうとする。ミブナの里が奴らに見つかれるのも時間の問題だよ。だから、奴らが入っ  
てこれない様になって、人工精霊を作ろうとしたんだ。でも、難しくてダメだったね。あ  
たしなりの解釈だったんだけど、結局あの程度さ」

「んー、とりあえず、精霊への接触はムリって事ね」

しいなの話をまとめ、ハロルドが結論を出す。

「どうする？ 引き返す？」

「そうだな」

ハロルドの言葉にクラトスは頷いて歩き出そうとする。

「待ちなよー！」

と、しいながクラトス呼び止めた。

「あんたが精霊を頼るって事は、余程の事なんだね。ミブナの里に精霊はいないけど、他  
の地域にいる精霊についてだったら、何か分かるかもしれないよ」

「あら、いいわねー！」

「里に文献があるんだ。後であんた達のギルドに届けに行くよ」

「分かった。では、それを待つとしよう」



「ああ。待つてておくれよ」

しいなからの情報提供を約束し、カイ達は坑道を後にした。

「精霊に会えなかったのは残念だけど、まだ望みが絶たれたわけじゃないでしょ？　しいなさんの来船を待ちましょ」

カイから報告を受け、アンジユはふふつと微笑みながらそう言う。

「それにしても、人工精霊や光気丹術の存在を知る事が出来たのは私にとって大収穫だわ」

「そう、その光気丹術！　あたしが研究しているものと同じかもしれないのよ」

ハロルドがふふんと鼻を鳴らすとリタが少しテンションを上げて叫ぶ。

「あらそう。んで、何を研究してたんだっけ？」

「ソウルアルケミーよ！　魔術の曙とでも言える太古の技術！」

「あら、あんたそれ研究してんの？　でも、資料あんまないっしょ？　私もいずれは研究したいと思つてたのよねえ♪　うーん、でも光気丹術とソウルアルケミーの関連性はまだ分かんないわね。詳しく聞くためにも、しいなが来るのを待ちましょ」

「それじゃ、今回もお疲れ様。また仕事を受けに来てね」

リタの研究内容——ソウルアルケミーとしいなが使ったという術——光気丹術の関連性はまだ分からないとハロルドは言い、アンジュがそう言ってその場は解散となった。

それから数日ほど日は進み。カイはアンジュが食堂に食事を取りに行くほんの数分でいいからもし客が来た時のためにとカウンター番を頼まれ、しかし嫌な顔一つせず引き受けてカウンターに座っていた。と、いきなり船の外へと続くドアが開く。

「ええっと……」

船の中に入って辺りを見回しているのは先日坑道で出会った女性。

「……しいなって言ったっけ？」

「え？ ああ、あんたこないだクラトスといた……」

「カイ」

「へえ、カイか。いい名だね。よろしく。そういえば、ちゃんと挨拶してなかったね」

女性——しいなが声をかけるとカイは名前を名乗り、しいなもよろしくと返した後気づいたようにちゃんと挨拶してなかったねと続けた。

「あたしはしいな。藤林しいなだよ。今日は、精霊についての文献を持ってきたんだ……けど、あんたが受付してるのかい？」

「リーダーが戻ってくるまで少々お待ちください」

しいなは自己紹介の後用件を言うが、カイはアンジュに教えられた通り——まだ交渉や接客とかは早いと判断されたためのマニユアルだ——に返し、しいなは参ったように頭をかく。

「あら、いらつしやい。ようこそ、アドリビトムへ」

「えーつと……カイ、この人がギルドのリーダーさん？」

「ああ」

そこに食事を終えて戻ってきたアンジュがようこそと言い、しいながカイに確認を取るとカイも頷く。

「あーつとリーダーさん。頼みがあるんだけど……あたしをここに置いて欲しいんだけど」

「働いてくれるのなら、構わないけど。でも、なぜ？」

「光気丹術を使った事がばれちまって、ほとぼりが冷めるまで里に居られなくなつただよ。あの人工精霊は、侵入者専用の門番にしようとしたものなんだ、でも、うちの里では禁呪に値するものだったからね。里の人達にはばれてないんだけど、棟梁だけがあたしが使つたって事を見抜いててき……それで、一時的に里を出ることをすすめられたんだよ」

しいなのお願いにアンジュが首を傾げて問いかけると彼女はそう事情を説明する。

「それに、やつぱりここで働いてみたいんだ。連れもいるんだけど、いいかい？」

「ええ。にぎやかになるから歓迎よ。それじゃあ、部屋を用意しないとね。ねえ、カイ。

一緒に部屋へきてちょうだい。部屋の準備の手伝い、お願いね」

「はい……でもカウンターは？」

「行く途中で会った暇そうな人に頼むから」

アンジュの言葉にカイは無言になり、しかしまあいいかというようにカウンターを立った。

それからカイとアンジュ、そしてしいなの連れで部屋の準備を行う。

「これでいいかな。部屋は、ここを使ってちょうだいね」

「ありがとう。そうそう、連れの紹介もしないとね」

アンジュがそう言うらしいなはありがとうと言ひ、連れの紹介をしないと云うと一番に鶯色の髪をオールバックにし、真っ赤な服を着た青年が口を開いた。

「俺はロイド、ロイド・アーヴィング。よろしくな」

「私はコレット。コレット・ブルーネルです。これからお世話になります」

少年——ロイドに続いて金色の髪を長く伸ばした少女——コレットが自己紹介をす

る。

「藤林です。故郷を出るのは初めてです。ここで、外の世界について勉強させてください」

最後に忍者服を着た小さな女の子——さすが名前を名乗り、礼儀正しく頭を下げた。

「あたしとすずは姓が一緒だけど、繋がりはないんだ。これは『あざな』で、あたしらの本名はまた違うんだよ」

「本名は、本人や両親、名付け親、頭領の他、結婚相手のみしか知る事はありません。ご了承ください」

同じ藤林姓だが繋がりはなく、自らの習慣についてしいなとすずが説明するとアンジュはへええと息を吐き、「変わった習慣ね」と感心したように言う。

「精霊の居場所は、文献から特定しておくれ。暗号になつていて、あたしでは正確に分からないんだ」

「ありがとう。文献の解説はみんなで行うわ。それじゃ、部屋は自由に使つてね。ごゆっくり」

アンジュがそう言つて部屋を出ていこうとした瞬間、その部屋のドアが開いた。

「リタ」

「……ミブナの里のしいなつて、誰？」

カイが入ってきた少女、リタに声をかける。そのリタはカイに目もくれずにしいなは誰かと問いかける。

「……あたしだけど？」

「光氣丹術について聞きたいんだけど」

「悪いね。あれは外部の者には教えられないんだ」

リタの要求をしいなは真剣な声で拒絶する。と、リタは首を横に振った。

「興味本位で言ってるんじゃないわ。今、ヒトや植物、ううん、それだけじゃない。あらゆるモノを変異させてしまう現象が各地で起こってるの」

「なんだって？」

リタの言葉にしいなはぴくり、と眉を動かす。

「その仕組みはわかってないけど、ひよっとしたらあんたの里に伝わるそれが、解決の糸口になるかもしれないのよ」

「カイ。本当の話かい」

「ああ」

リタから話を聞いたしいなはカイに問いかけ、カイは真面目な顔で頷く。それにしいなも頷きを返した。

「分かった。あんたを信じるよ」

そう言い、しいなは巻物を取り出す。

「これが『光気丹術経』。人工精霊の作り方やなにやら載ってるけど、あんたに分かるかい？ あたしには、さっぱりだよ」

「分からないなら分かるまで、調べ尽くすまでよ。他に、あの怪現象を解明する手立てがないんだもの」

しいなの肩をすくめながらの言葉に、リタはにやりと笑ってそう返した。

それから数時間ほど時間が過ぎ、リタはホールで光気丹術経を開きながらホールにいるカイ、アンジュ、ハロルド、そしてティトレイとメルデイに目を向ける。

「光気丹術経、ざっと目を通してみたけど。やっぱり、これはソウルアルケミーの技術の一端よ」

「こないだが聞いた、魔術の曙な技術だな！」

「でも、それは一体どういうものなの？」

「根底にある理論として、まず全ての物質は『ドクメント』を持つてる、って事よ」

「ドクメント？」

「見せた方が早いんじゃない？」

リタの言葉にメルデイが言い、アンジュが首を傾げるとリタが説明をしようとする

が、まずその根底の理論からピンと来ていない様子。それにハロルドが助け舟を出すとリタも領いてメルデイに協力をお願いし、メルデイも快く領く。

「見てて」

そう言い、リタがメルデイに手をかざすと、メルデイの周囲に光の輪つかのようなのが現れ、まるで脈動しているかのように動く。

「バイバ！　メルデイの周りに輪つかができたよう」

「これがドクメント。メルデイの情報、あるいは設計書みたいなものと思つて。物質はまず、このドクメントというエネルギー体ありきな。自分の設計書を持つて、みんな生まれてくる。これは生命の営みでもあるの。そして、さらに細かく見ると……」

そう言うと共にさらに巨大な輪つかが現れる。

「これは潜在能力とか、病気になりうる要素とか、設計書のさらに細かいところね。ドクメントと物質体は、互いにフィードバックしあつてるの。治療術つてのは、実はここに干渉して傷や疲労を治したりするの。みんな知らずに使つてるけど」

「所謂『呪い』つて奴も、実はこのドクメントに干渉して相手にダメージを刷り込むわけ」

リタの言葉に続いてハロルドも注釈を入れる。

「このソウルアルケミーはドクメントをいじつたり、作り出したりする技術。ミブナの



里に伝わる人工精霊も、これの応用よ」

「ドクメントの中の、ヒトをヒトたらしめている設計をいじる事が出来るんだもの。ヒトの存在や形を変えてしまう事も出来るかもしれないわね」

「なるほど。生物変化は、この仕組みで起こっているのかもしれないのね」

「じゃあ、ドクメントを閉じるわね」

アンジュが納得するとリタがそう言い、メルデイの周りから輪っかが消える。とメルデイはくらくらとしたようにふらついた。

「メルデイ、何か、クラクラするよ」

「ごめん。無理をさせてしまったわね。本来、不可視のものを、今は無理矢理可視状態にしてるから、被験者には負担がかかってしまうのよ」

「細かいドクメントの展開も危険ね。本当は細かいところまで解析させてもらいたいけど」

「人工精霊は、どうやって出来ているの？」

「人工精霊は、人工的にドクメントを作り出すところから始まるわ。ドクメントは、精妙な非物質エネルギー。術者の念、自然界の気なんかを掛け合わせてドクメントを作るの。んで、その人工ドクメントエネルギーの振動数を、濃密な状態へ落とすと実体化するってワケ。あ、ほら。聖者が何も無いところから、食べ物や衣類を出して人々に与え

たつて話とかあるでしょ？ あれは、この技術の為と言われてるわ。マナ、自然界の気、術者の意識を持って非物質状態でドクメントを構成して、そのドクメントの振動数を落としてやると物質になっていくのよ」

「それは……神の力？……」

「まあ、術者の精神力や技量によつてまちまちよ。そこまでの力を持つような精神力の持ち主は滅多にいないと思うわ。この技術は、そうそう簡単に使えるもんじやないわね」

リタやハロルドのすらすらとした説明にアンジュが驚いたように呟く。ちなみにカイは口を挟んではいけないと考えたのか単にちんぶんかんぶんなのか全く話に入っていなかった。テイトレイに至つては白目を剥いて頭から湯気を出している錯覚すら見せている。

と、科学室の扉が開いてその中からキールが姿を現した。彼は疲れ切つた様子で大きく息を吐いている。

「キール君、精霊の居場所の特定はまだかなあ？」

「まだかかりそうだ。ミブナの里の文献は、この上なくひねくれた暗号で書かれているからな」

アンジュの言葉にキールが首を横に振る。部屋を出てきたのも疲れ切つての気分転

換というところらしい。

「容易に秘密を知られては困りますので、身内にも分からないように記しているはず  
す」

「しかしこれじゃあ、書いた本人も解読法を忘れるんじゃないのか？」

と、丁度外から戻ってきたさすがそう言い、それにキールが疲れ切った声を出して  
るとすずはアンジュに一枚の紙を渡す。

「アンジュさん。『例の存在に会いたい』と護衛の依頼が届きました」

その言葉を聞いた瞬間、この場にいる全員の目が変わった。そしてアンジュは一枚の  
紙——依頼用紙に目を通す。

「赤い煙……願いを叶えるという存在ね……依頼内容によれば、場所はルバーブ連山ね。  
依頼者には悪いけど、私達はその存在を追いましょう！」

「了解しました」

「ルバーブ連山……あそこに、いるというわけね……これでもまた噂が広まれば、向かう  
人々が増えてしまう……これ以上、接触はさせないようにしないと……」

アンジュの言葉にすずが頷き、彼女が小さな声で呟く。

「アンジュさん、俺が行きます」

「俺も行くぜ！」

「メルデイも行くよう！」

カイが言うのと立て続けにテイトレイとメルデイが同行を希望。

「なら、私も——」

「待ってくれ」

最後にさすが同行を申し出ようとした瞬間、その声が遮られた。

「最後の一人、我に行かせてもらいたい」

「レイ！」

「すまないが……どうしても行かねばならぬ……そんな気がするんだ」

レイの左目からは何か決意が秘められており、すずはこくと頷くと同行を辞退するように一歩下がり、レイは彼女に会釈を返す。これで今回のクエストに向かうメンバーは決定だ。

「じゃあ、改めて説明を始めるね。あの『願いを叶える』と噂される存在が、ルバーブ連山にいらしいの。以前見た時は『赤い煙』だったけれど、スパード君から聞いた通り、今は他の姿をしている可能性があるかもしれない。出来る限りその存在に接触して、調査をしてちょうだい、方法、手段は問わないから」

「おう!!」

アンジュの説明にテイトレイが自らの拳と手の平をばしつとぶつけ合いながら頷く。

「もし道中、その存在を求めると民間人に会ったら、接触させないように追い返すのよ」  
「了解」

その言葉にカイが頷く。

「それじゃあ、お願いね！」

そしてアンジュの真剣な声での言葉に四人は頷いた。

## 第十二話 赤い光の謎と新たな仲間達

ルバーブ連山。カイ達は願いを叶える存在と噂されている赤い煙の調査の為、ここを訪れていた。

「ここに居るのか……」

カイがぼそりと呟きながら歩いていく。と、レイが「む」と呟いて足を止め、メルデイもあつと声を出す。彼らの前には一般人らしい男女二人組が立っている。

「あそこが人、山登るか？ やめる言わないとダメだな！」

「おーい、その二人！ そんな軽装じゃ、この山登れないぜ！」

メルデイの言葉に頷いてテイトレイが目の前にいる軽装の一般人らしい二人組に呼びかけ、歩き寄る。

「登れないつつたつて、こっちや登らなきゃならないんだよ」

チャラそうな男性がやはりチャライ口調でそう言う。

「願いを叶えてくれるつてのが山の上にいるんだろーよ？」

「アタシら、そいつに会いに行くんだよね。で、この山つて危ないの？」

「魔物がたくさんいる」

チャラそうな男性に続き、我儘そうな顔つきをしてきつい化粧をした感じの女性がそう言い、この山が危ないのかと聞くとカイがそう答える。

「つていうかき、おたくら武器とか持つて、なんなの？」

「俺達は、アドリビトムつてギルドのもんだ」

「ギルドつて何でも屋でしょ？ ちよつとウチらの護衛頼まれてもいいんじゃない？」

チャラそうな男性の質問にテイトレイが答えると我儘そうな顔つきの女性がそう言う。

「オレら、この山にいる願いを叶える奴に大金持ちにしてもらうんだよ。だから、報酬はその後払うからさー」

「断る」

チャラそうな男性の頼みをカイが一刀両断で切り捨てる。と、男性はチエツと言った。

「じゃあ、いいや。元々二人だけで行くつもりだったし」

「んとな、それはな……んと……な」

「……あー。ああー!!」

四人に背を向け山の方に行こうとする二人をメルデイが止めようとしかしなんて言おうかと迷っていると、突然テイトレイが声を上げる。

「残念だったなあっ!! 今あの、街……街にいるらしいぜっ!! ほら、早く行かねえとまたどっか行つちまうぜ!!」

あからさまに出まかせ。しかし女性は「なあんだ」とつまんなそうに呟いた。

「だったら、こんなトコいないで帰ろ帰ろっ!」

「つまんねえのっ!」

そう言つて二人組はすたすたと街の方向けて歩き去つていく。

「命知らずな上に、俗っぽい奴らだぜ。人の欲つて、際限ねえからな」

二人組がいなくなつてからティトレイが呟く。

「あんな連中が私利私欲のために一斉に願いを叶えまくつたら、世の中滅茶苦茶になつちまう」

「さ、メルデイ達も行こー、行こー!」

ティトレイが毒づき、メルデイが明るい声でそう言うときカイもああと頷いて歩き出し、メルデイもスキップしながらその後続き、ティトレイも二人について行こうとするがふと足を止めて振り返る。

「おいレイ、どうしたんだ? 行こうぜ?」

「……ああ」

ティトレイの呼びかけに、レイはさつき俗っぽい二人組が去つていった方を睨みつけ



るような目で見た後頷き、歩き出してテイトレイを追い抜き、それからテイトレイも改めて歩き出した。

それから彼らは登山口へと向かう。と、テイトレイが何かに気づいて走り出し、登山口のある一つの方向で止まる。普段門で閉ざされている登山口、しかしその門が開かれていた。

「こっちは通れなかったはずなのに……」

「きつと誰かが通ったよ」

「……」 願いを叶える存在を探しに来た奴かもしれない」

「そうだな。こっからちいっと急ぐか！」

テイトレイの呟きにメルディがそう言うとかイが続け、その言葉にテイトレイは頷くと「少し急ごう」と声をかける。

「剛・魔神剣!!」

レイが剣を地面に叩き付け、発生した衝撃波が二本の木の枝を棍棒のように振り回す。二足歩行のウサギみたいな魔物——コパンを吹き飛ばし、

「飯綱落とし！」

空中に吹き飛んだコパンをカイが空中を舞うような縦回転斬り落として斬り倒す。

「轟裂連牙弾!!」

その近くでテイトレイが、一本の巨大な木の枝を肩に担いだ二足歩行のウサギみたいな魔物——デカパン目掛けて至近距離から気功弾をぶつけ、デカパンを一撃で仕留める。彼の額に皺が寄っていることにレイが気づいた。

「テイトレイ……怒っているのか?」

「大して努力もせずに、夢を叶えようってヤロウを見るとムカムカするんだよ。正直、登山口にいた奴も一発殴らせろって思ったくらいだ」

レイの問いかけにテイトレイが吐き捨てるように答える。

「ああいうヤロウは、なんでもしてもらって当然って思ってたやがる。だから、他人の大事なものを平気で踏みにして、奪い取れるんだよ。大国の偉い奴らなんか、そうだろう。小さい国を食い潰していくだけだ」

「サンダーブレード!!」

テイトレイの言葉の直後その声と共に天空から雷の剣が落ち、辺りに雷撃を放つ。その雷撃がコパンとデカパンの間くらいの大きさのウサギみたいな魔物——チューパンを倒した。

「でもな、テイトレイ。エステルが、違うよ。みんなが全部、そうじゃない」

そしてその術を放った少女——メルデイが言う。

「……ああ、わかつてるさ」

その言葉に、テイトレイは少し悲しげで申し訳なさそうな目を見せながらそう返した。

「霧が深くなってきたな……」

それから彼らは魔物を倒しながら山道を進んでいき、中腹くらいに差し掛かった辺りで霧が深くなってくるとカイが呟く。

「おい、ありやなんだ？」

「光ってるよー！」

テイトレイとメルデイが声を出し、彼らは足を止める。白い霧が立ち込める中、赤く光る何か変な物体がその道の先に佇むように存在していた。

「こいつが、赤い煙だった奴か？ 願いを叶える存在なのか？」

少し歩き寄り、テイトレイはその赤い物体を見ながら呟く。と、レイが銃を抜いて一歩前に出た。

「お、おいレイ!?!」

「……あなたは、何者なんだ？」

銃を突きつけながら赤い物体へと問いかけるレイ。と、その赤い物体は全身をゆらゆらと揺らしながらゆつくりとした足取りでレイに近づき、それにカイもレイの隣に立つように一歩前に出る。

「お、おい……カイ……レイも、大丈夫なのか？ 気をつけるよ……」

心配そうにテイトレイが声をかけ、カイとレイはその赤い物体と睨み合う。

「っ!? ぐうっ……」

「レイ!? くそ、こいつ何かしやがったのか!？」

と、突然レイが頭を押さえてがくりと膝をつき、テイトレイは悲鳴を上げた後赤い物体に拳を向ける。

「いたぞ!! デイセンサー様だ!!」

「!?」

しかしその直後、彼らが登ってきた山道からそんな声が聞こえてきた。

「願いを叶え、全ての者を導き給うお方。デイセンサー様! やはり、降臨されていたか!」

「デイセンサー? ……何言ってるやがる、そんなワケあるか!! こいつ今レイを苦しめてやがんだぞ!!」

「あの人、街でチラシ配ってた。『暁の従者』だな」

山道を駆け上ってきた二人の男性、その内の一人の言葉にテイトレイが憤慨し怒鳴り声を上げる。その隣でメルデイがそう言うのと、テイトレイが彼女の方に目を向ける。

「あのデイセンダーの出現を待ち望んでるって、アレか？」

そう言い、「こりや、ややこしい連中に出くわしたもんだな」と額を手で押さえる。

「我々の救世主をお運びするぞ！」

暁の従者のもう一人の男性がそう言い、赤い物体に近づこうとする。

「おっと、待てよ！」

が、その前にテイトレイが立ちはだかった。

「コイツがデイセンダーだって確証はあるのか？　うかつに接触しない方がいいぜ」

「なんだ、お前達は。邪魔をするな!!」

「その方こそが、貧しき者を救いに導き、私欲に肥え膨れ、墮落した大国の者共を成敗する為に降臨したデイセンダー様だ!!」

テイトレイの言葉に男性二人が声を荒げる。

「コイツは人だけじゃなく、生物全てに害を成す危険な存在かもしれないねえんだぞ！　小

難しい説法してねえで、とつとと帰りやがれ!!」

「デイセンダー様を侮辱するか!!」

テイトレイと暁の従者二人組が怒号を上げて睨み合う。メルデイは男性二人の謎の

威圧感に怯えてテイトレイの背中に隠れ、レイは未だ赤い物体の前にひざまずくように座って頭を抱え唸り、カイは赤い物体から目を離していなかった。

「お前達、デイセクター様を私欲のために独占する気だな。ならば、これでもくらえ!!」  
男性の一人がそう叫んで球を地面に叩きつける。と、同時に霧深い山の中に突如閃光が走った。

「バイバ!! 見えないよう!」

「ぐうつ!!? なんだこりやあ!!?」

メルデイとテイトレイが悲鳴を上げ、やがて閃光が消える。

「……あの赤い奴がいない」

「なにっ!?!」

カイが息を飲みそう言うのとテイトレイはさつきまで赤い物体がいた方を見る。しかしそこには赤い物体もそれが発していた赤い光もなくなっていた。ただ、その代わりにレイが倒れている。

「つて、おい、あいつらどこへ行きやがった!?!」

「イナイよー。連れてかれたな!」

さらに彼は中腹を見回す。さっきの暁の従者二人組の姿がなくなっておりメルデイが叫ぶ。

「急いで戻って報告……じゃねえ、レイも運ばねえと！」

テイトレイはそう言ってレイをおぶり、カイ達に「急ぐぞ！」と呼びかけると急いで元来た道を走り出す。

「アレが人の手に渡ったんだ。えらい事になるぜ……」

その道中、テイトレイは悔しそうに歯を噛みしめながらそう呟いた。

「まさか、あの存在が人の手に渡ってしまうなんて。しかも、暁の従者に……」  
「申し訳ありません」

アンジュが呟き、カイが頭を下げる。

「いや、カイだけの責任じゃねえ。俺も同罪だ……」

「そうよ。気を落とさないで」

頭を下げるカイにテイトレイとアンジュが声をかける。

「それで、願いを叶える存在なんだけど……」

「赤い煙が違った。ヒトが姿してたな。けれど、なぜ姿が持ってたかわかんなかったよー」

「うす気味悪いやつだったぜ。何を考えてるか、まるで読めねえ感じだな」

メルディとテイトレイが報告をし、さらにテイトレイは「そうだな」と呟いて考えるように顎に手を当てる。

「なんとなくなんだけどよ、あの存在、どうも自分が何者か分かっていないようだったぜ」

「デイセクター？ いいえ、まさかそんなはずは……」

テイトレイの言葉にアンジュはデイセクターを連想するが、すぐにそんなはずはないと考えを打ち消す。

「もし、あのまま信仰の対象にされて、多くの人々に接触してしまったら大変なことになるってしま……」

「ジョアンさん達がみたいにたくさんさんのヒトが魔物になるか？」

「大いに考えられることね」

アンジュの言葉にメルディがジョアンのことを思い出すと、アンジュは「大いに考えられることだ」と返す。

「『暁の従者』か……これから、その団体は変な真似しねえように見張つてねえとな」  
テイトレイがそう言うのと、医務室に続くドアからアニーが出てくる。

「あ、アニー！ レイの様子はどうかだ!？」

「あ、はい……診断の結果は異常ありませんが、まだ目は覚めません。命に別状はないみ



たいですが……」

「そうか……」

アニーに気づいたティトレイの言葉にアニーがそう結果を話すと、ティトレイは安心したように微笑む。

「レイは、あの赤い物体を見てから気を失ったの?」

「あ、ああ。急に苦しみだして、暁の従者の連中が多分閃光弾か何かでも使ったんだと思うが俺達の目をくらませて、赤い物体と共に姿を消した。その時には気絶してたんだ」  
「そう……」

アンジュの問いかけにティトレイはそう答え、アンジュは「一体なんで……」と呟く。が、そのすぐ後に「そうだ」と思い出したように声を出す。

「リタの研究に進展があつたみたい。今から話を聞くために、研究室に行きましょう」

「はい」

アンジュの言葉にカイは頷き、彼らはそのまま研究室へと向かう。

「待ってたわよ。それじゃあ、早速説明を始めるわね。コクヨウ玉虫のドクメントを調べただけど、やっぱりこの虫本来のドクメントが侵食されてるみたいなの。全く違う生物にドクメントが書き換えられてる。ううん……生物という仕組みじゃないわね。あたし達の世界には、存在しえないドクメントなのよ」

「そういえば、前に助けた二人のドキュメントも確かめてきたんだけど、ちゃんとヒトのドキュメントに戻ってたわ」

リタはコクヨウ玉虫が入っているケージを見ながらそう言い、ハロルドが補足を入れるように続けて口を開く。

「あの、赤い煙……だった存在は……あたし達の世界にはない。異質なドキュメント”なのかもしれない。でも、どこからどうやって現れたかはわからないし、目的が何かも分からないわ」

「目的がねえのが、一番タチ悪いんだよ……」

「“赤い煙”が他の生物に接触する事で、その生物のドキュメントが変化……そして“赤い煙”自身の変容……」

リタの言葉にティトレイが眉を吊り上げながら言うと、いきなりしいなが眩き始める。

「例えば、だけどき」

そして自分の中で何かの考えに至ったのか突然皆に話しかける。

「今までの出来事から“願いを叶えて欲しい”という強い想いに“赤い煙”は反応しているらしいじゃないか。その“赤い煙”って奴は意思を持って……相手の“想い”に接触する時に、相手の“ドキュメント”を覗き込むことで学習、進化してる……とした

らどうだい？」

「人はそうかもしれないねえ。でも、虫や植物の変化も起きてるじゃねえか。そいつらにも意思や、願いがあつてののか？」

しいなの言葉にテイトレイが反論する。

「ああ、あるよ。『生存欲』さ」

しかししいなはきつぱりとそう返した。

「生物が瀕死に陥った時、もしくはは絶体絶命の危機が迫った時の意識は絶大だからね」

「うーん。分かるような、分かんねえような？」

「そうだねえ。じゃ、もっと具体的な例を見せようか」

しいなの説明にテイトレイが頭を悩ませているとしいなはふつと笑つてそう言う。それから研究室の一個のサポテンが用意され、リタがそのサポテンのドクメントを展開する。

「さて、見ててごらん」

そう言うと共にしいなは懐からお札を出し、どういう仕組みかその札の先に火がつく。

「さて、このサポテンはもう要らないし、燃やしちまおうかねえ？」

そう言つて火のついた札をサポテンに近づけるとその瞬間ドクメントはまるで波の

ようにあらぶり、それを確認したいなは札から火を消して懐に戻し、サボテンを申し訳なきような目で見る。

「ごめん、試させてもらったよ。さ、みんな、これで分かったかい？ 『光気丹術』、つ

まりソウルアルケミーで言えば、生物の生存欲つてものは、ドクメントにそれだけ影響を及ぼすつて事さ。今まで赤い煙が現れた場所には、星晶がなかったんだろ？ 星晶が

なくなり、土地からマナが枯渴したために、植物や虫達に取つて危機的な状況となった。赤い煙は植物や虫、動物の生存欲を察知して接触、ドクメントに干渉……やがて、その対象となりヒトとなり学習、やがて『赤い煙』自体が進化……つてとこかねえ」

「なるほどね。『赤い煙』が意識体、と仮定するならば、意識もドクメントの一つ。進化つても考えられないわね」

「でも、仮定だからねえ。そもそも、そいつが現れた理由がわかんないね……」

「『赤い煙』……いや、『願いを叶える存在』がいて、生物に影響を及ぼしているのはわかつたよ。でもよ、なんでそいつは相手の願いを叶える？ なんで相手の姿形を変えちまうんだ？ 目的がわかんねえよ」

しいなの仮定にハロルドが興味深そうに頷くとしいなは「仮定だから」、「そもそもそれが現れた理由が分からない」と返し、テイトレイも頭をかいてそう呟いた。

それから彼らは研究室を出ていき、テイトレイとメルデイはレイの様子を見に医務室

へと向かい、カイもそれに続くこうかとしたその時、甲板に続く扉が開いた。

「申し訳ありません。アドリビトムというギルドはここでしょうか？」

「ああ」

「ふう……ようやく着いたか……」

茶髪に白服の青年の質問にカイが頷くと彼はそうとだけ呟く。

「何かご用でしょうか？」

「ああ、すみません。ここに探している人がいるのですが……」

「あら、カイ。そちらはお客様かしら？」

以前教えられたマニユアル通り丁寧な口調を使って用件を伺うと青年は用件を言うとする。と、そこにアンジュがやってきた。

「あなたがこのギルドのリーダーでしょうか？」

「ええ。私はアンジュと言います。あなたは？」

「私は、ガルパンゾ国騎士団に所属する、アスベル・ラントです。横にいるのが……さあ、ソフィ」

「私の名前……ソフィ。アスベルが……そう呼ぶから」

青年——アスベルはアンジュに名乗った後、自分の横に立つ紫色の髪をツイントールにした少女に促し、少女——ソフィも自分の名前を名乗る。

「……すみません。ソフィにはその、事情がありまして……」

「いいえ、お気になさらず。それで、御用件はなんでしようか?」

アスベルの申し訳なきような言葉をアンジュは柔和に微笑んでお気になさらずと返し、丁寧な態度で要件を承る。

「はい。ここにガルパンゾ国王女、エステリーゼ様が滞在されているはず……すぐにお会いしたいのです」

「……なぜ、そう思うのかしら?」

アスベルの言葉にアンジュがそう尋ねる。と、アスベルは真剣な空気を放ち始めた。

「……王女誘拐の罪で指名手配になっている、ユーリ・ローウエルはご存知ですね? 彼と同じギルドだったという仲間が二人、このアドリビトムに逃亡してきたはずです。私達は彼らを追って来ました……エステリーゼ様はここにいますはずです」

「(エステルを連れ戻しに来たのね……) ……騎士団の権力があれば、武力行使だって出来たでしょうに……紳士的な対応、感謝いたします。さあ、中へどうぞ。カイ、彼らを案内して」

アンジュは相手の要求内容から、本来ならば武力行使も出来たはずなのに、まず話し合いを求めてきた事に感謝の意を示して彼らを招き入れ、カイに案内を頼む。

「いいんですか?」

「ええ」

「……分かりました」

仲間を誘拐犯だの逃亡者だの言われて少しばかり頭にきたのかカイはアスベルを若干睨みながらエステル部屋の部屋に案内。部屋のドアをノックし、中にいるエステルから「どうぞ」と入室を促されてから部屋に入る。

「どうしたんですか、カイさん？」

「……エステルに、客」

「エステルに客？ まさか……」

エステルが柔和に微笑みながら用事を尋ねるとカイは言葉少なくそう言い、その言葉を聞いたユーリはまさかと呟く。

「エステリーゼ様」

その直後、部屋にアスベルが足を踏み入れた。

「あなたはたしか、アスベル？」

「覚えていてくださり光栄です」

アスベルの姿を見たエステルが少し迷いながら彼の名前を出すと、アスベルは真面目な視線を彼女に向けながらそう返し、エステルは少しうつむき気味になる。

「……私は……戻りません。そう、フレンに伝えて下さい。私は、自分の国が起こしたこ

とによる異変を解決するまで、ガルパンゾへは戻らないと決めたんです」

「起こした、こと?……」

「星晶の採掘が原因で、生物が変化するっていう珍現象だよ。今このギルドではその調査をやってたんだ」

エステルという言葉にアスベルが呟くとユーリがそう説明し、アスベルは僅かな沈黙の後、カイに目をやる。

「カイ、と呼ばれていたね? それは本当なのか?」

「ああ。俺達もついさつきその調査をしてきた」

「疑うってんなら研究室でも見てこいよ」

アスベルの質問にカイはそう言い、ユーリがそうも言うのとアスベルはエステルの方を向き直す。

「ですが、エステリーゼ様が仰った生物が変化する現象の調査は、これから評議会に提起すれば……」

「それでは、いつまでも変わりません」

アスベルの言葉をエステルは毅然とした態度と声で遮り、彼女は顔を上げてアスベルの目を見る。

「アスベル。私は国を守るためにも、ここにいなければと思っています」



「……異変については分かりました。私も国、そして守るべき民のために尽くしたい思いは同じです……」

エステルという言葉にアスベルは頷いた後、困ったように顔に手を当てる。

「ですが、フレン様はあなたを連れてくるまでガルパンゾへは戻るなど……」

「だったら、ここにいていいんじゃないやありません?」

アスベルのその困ったような言葉にエステルはあつさりそう言う。

「ここに? このギルドにですか?」

「はい。ここなら、色んな人を守る事が出来ます」

「おいおい、いいのかよ。こつちや誘拐犯になつてんだ。お前がここに残れば、このアスベルつて奴にまで罪が及ぶぞ」

「フレンならわかってくれます。いえ、わかってくれてるはずですよ」

アスベルが驚いたように絶句し、エステルがそう言うときユーリはツツコミを入れる。が、エステルは柔和に微笑んでそう言い、その姿を見たアスベルは考えるように視線を下に向ける。

「……分かりました」

そして顔を上げ、頷く。

「ここに残って、王女のために尽力いたします」

「ありがとうございます。さっそくアンジュに伝えないと、ですね。そして、同じギルドのメンバーとして、これからもよろしくお願いしますね」

「同じ、メンバー……ですか？」

エステルの言葉にアスベルは驚いたように呟く。それにエステルはこくと頷いた。

「はい、だからここでは堅苦しい言葉はなしです。いいです？……これは、私からのお願いです」

「えつと、その……努力します」

エステルの言葉に気圧されたアスベルはこくと頷いてそう呟くように言った。

それから数日の時が経過する。

「ねえねえカイカイ、お宝探し付き合つてよく！」

黄色い服に身を包んだ茶髪の少女がカイにすり寄る。彼女の名前はノーマ・ビアツティ、数日前セネル宛への手紙が届き、要約すれば「アドリビトムに入りたいから迎えに来い」というその依頼をセネルとカイで受け、ブラウニー鉱山から連れてきた新たな仲間だ。

「何かそれと分かるものがあるのか？」

「ううん、別に。でもこうさ、冒険って言うか」

「依頼として提出してくれ」

「……いいわよ、セネセネ誘うもん。なんか見つけてもカイカイには分けたげないから」  
セネル直伝のあしらい方でノーマをあしらい、彼女はぶくぶくと頬を膨らませるとそう言つて部屋に戻っていく。

「国に属さない中立のギルド、アドリビトムはこちらでしょうか？」

と、ノーマと入れ違いになるように甲板への扉が開いたかと思うとそんな、冷静そうな男性の声が聞こえてきた。

「はい。私がリーダーのアンジュです。何か依頼でしょうか？」

それにカウンターに座っているアンジュが頷き、何か依頼でしょうかと尋ねる。

「依頼というか、そうですね……しばらく、かくまって欲しいのですが」

「かくまう、ですか？」

アンジュと話す長身にメガネの男性の言葉にアンジュは首を傾げる。

「ええ。ここはどの国にも属さない自由のギルドと聞いているのでね。高貴な身分の方を隠すには、丁度いいと思ひまして」

「高貴？」

男性の言葉にカイが首を傾げ、男性はそちらをちらりと見た後自分の胸辺りに手を当

てた。

「申し遅れました。私はライマ国国軍大佐、ジェイド・カーティスです」

男性——ジェイドは自分の名を名乗った後、優雅な動作で自らの隣に凜とした姿勢で立つ茶髪で高貴な雰囲気を漂わせる少女を指す。

「そして、こちらがライマ国王女のナタリア姫です」

それに少女——ナタリアがふっと笑う。

「ジェイド。あなたは私の家庭教師でしょう？　いつもの通り、ナタリアで構いませんわ」

「おや、そうですか。では、遠慮なく」

ナタリアの言葉にジェイドは微笑みながらそう返し、それを見て満足そうに頷いてからナタリアはアンジュとカイを見た。

「ナタリア・ルツ・キムラスカ・ランバルディアです。よろしくお願いしますわ」

ナタリアが名を名乗った後、ジェイドは残る一人の冷静そうな目を見せた少女を指す。

「そして彼女は、私の部下のティア。ナタリアの護衛です」

「私はティア。ティア・グランツ」

ジェイドの紹介に少女——ティアが名を名乗る。それにアンジュは「はい、よろしく」

と返した。

「ともかく、込み入った事情がありそうね。それじゃ、ジエイドさん。部屋へお通ししますね。お話はそこで伺いますね」

アンジュはそう言った後カイを見る。

「カイ。あなたも部屋の用意を手伝いに来てちょうだい。お願いね」

「はい」

その言葉にカイはこくと頷いた。

それからしばらく部屋の掃除をし、それが一段落してジエイド達が荷物を置いてからアンジュが切り出す。

「部屋は気に入ってくれたかしら？」

「ええ、素敵ですわ」

「ふふ、良かった。もちろん、お部屋代もしつかり頂きますけど♪」

「まあ……………」

アンジュの言葉にナタリアが嬉しそうに言い、それを聞いたアンジュがちやつかり切り出すとナタリアは「まあ」と声を上げて沈黙し、ジエイドは参ったように額に手を当てた。

「困りましたねえ。今、我々は持ち合わせがないもので」

「このギルドでは、王族だろうと容赦しません」

ジェイドの言葉にアンジュはニヤリ、と笑みを見せてそう言った。

「エステルやウツドロウもそうだ」

「そうそう。王族だろうとここではみくんな平等です」

カイの本人に自覚はないだろうが援護射撃にアンジュはニヤリとした笑みを深くしながら続ける。

「居付くなら家賃を払うか、ここでギルドのメンバーとして働くか、好きな方を選んでね  
♪」

「私は構いませんわ。いつライマ国に戻れるか、分からないのでしよう？」

アンジュの言葉にナタリアがすぐさまギルドのメンバーとして働く旨を承諾するよ  
うにそう言った。それにジェイドもこくと頷く。

「暴動が収まるまでは仕方がありません。では、ここで働くという事で」

「決まりね♪」

ジェイドの言質を取った瞬間アンジュは嬉しそうな笑みを浮かべた。

「それじゃあ、次の話をしましょう」

しかしその次の瞬間には、再びアンジュは真剣な顔を見せていた。

「あなた達の国では、何があったの？」

「我がライマ国で、暴動が起こりましたね。『暁の従者』という宗教組織の導引によるものです」

「暁の従者……」

アンジュの問いかけにジェイドが真剣な表情でそう言い、その組織名にカイが反応する。

「この前あなた達が出会った、デイセンダーを奉るといふ新興宗教ね」

反応したカイにアンジュもそう言った。

「『暁の従者』の信者達は皆、人を超えた異様な力を持っていました。国民は信者に煽られてしまい、城を攻め落とそうと……」

「まあ、そんなわけで王族には安全の為、国を離れた方が良いと思ひましてねえ」

ナタリアの証言の後ジェイドがそう言い、

「そういえば、デイセンダーが降臨したと言っていましたね」

思い出したように続ける。

「その『デイセンダー』と呼ばれる者を連れていたの？」

「そこまでは、確認していません」

アンジュの言葉にジェイドは首を横に振る。

「私達王族が至らなればかりに……国は星晶の利権には恵まれず、国民には、苦しい思いをさせてしまっていましたわ」

「そこで『暁の従者』が現れ、ディセンダーを担ぎ出して、救いとやらを持ち出したことで、国民の不満が爆発してしまつたようですねえ」

ナタリアが浮かない表情で呟き、ジェイドはそう言つて「困つたものです」とぼやくように言う。

「『暁の従者』は大国に搾取されるがままだつた人達により興つたと聞いたな……でも、小さな宗教団体が、大きな力を手に入れ一つの国を没落寸前に追い込むなんて、考えられない事態よ……信者が、人を超えた異様な力を持つていたつて、そこが気になるんだけど……」

アンジュは分析の後、「私達も、『暁の従者』を追っているから」と続ける。それにジェイドがアンジュを見た。

「そうですか。こちらでは、彼らの拠点情報を掴んでいますよ」

ジェイドはそう言い、「アルマナック遺跡」という場所を口にした。

「そう……貴重な情報をありがとう。じゃあ、仕事については後で説明するから、今はゆつくりしててください」

「お気遣いどうも」



アンジュはそう言つて部屋を出ていき、カイもアンジュが出ていった後に部屋を出ようとする。

「あ、お待ちになつて」

「？」

と、いきなりナタリアが呼び止め、カイは足を止めると振り返る。

「先ほどあなた、ウッドロウと言つていましたが……このギルドにウッドロウがいらつしやるの？」

「ああ」

ナタリアの問いかけにカイは素直に頷く。それにナタリアは「そうですの……」と嬉しそうに頷いた。

「申し訳ありませんが、ウッドロウに会わせていただけませんか？」

「構わない。ついて来てくれ」

ナタリアのお願いをカイはあつさり聞き入れ、ナタリアを連れて——というか勝手に部屋を出ていつてウッドロウの部屋まで歩いていき、ナタリアが慌ててその後を追つたという方が近いが——ウッドロウの部屋へと向かう。そしてウッドロウがいる部屋に辿り着いて三度ノックを行い、部屋の中から丁度ウッドロウの「入ってくれ」という声が聞こえてくる。

「あ、こんにちは。カイさん」

「エステル、いたのか……ウツドロウ、お客さんだ」

「客？ チェルシーでも来たかな？」

ウツドロウと話をしていたらしいエステルの挨拶にカイは眩き、その後の彼の言葉にウツドロウが眩くと、ナタリアは悪戯つぽく微笑みながら部屋に入る。

「私ですわ、ウツドロウ」

「ナタリア君。久しぶりだな」

その姿を見たウツドロウは柔和に微笑んで返した。

「まさか、この様な場所であなたにお会いできるとは……思ってもいませんでしたわ」

「私もだよ……ああ、エステル君。彼女はライマ国の王女、ナタリア姫だ。ナタリア君、彼女はガルパンゾ国王女、エステリーゼ姫だ」

ナタリアの言葉にウツドロウは頷いた後エステルとナタリアに相互を紹介、二人はお互い向かい合うように立った。

「私はエステリーゼと言います。よろしくお願いますね」

「ナタリアです。こちらこそよろしくお願いますわ。ところで、あなたはガルパンゾ国の王女とお聞きしましたけれど……何故ここに？」

エステルの挨拶にナタリアも返した後、何故あなたはここにいるのかと尋ねる。それ

にエステルは「はい」と頷いて微笑んだ。

「城の中にいるだけでは、国民や、世界の為に成すべき事も出来ませんでしたから。私にできる事をしようと、ここで働かせてもらってます」

「世界の為に……ですか……」

その言葉にナタリアは考えるように沈黙、

「素敵ですわ!」

そして嬉しそうにそう言った。

「私も国民の為に何かできないかと思っていましたの。王女という身でありながら、国民の為に尽くしたくとも、なかなか自由に行動させてもらえなくて。ここでなら、国民のみならず様々な人を助けていけるのですわね」

「はい」

「私、ギルドという仕事は初めてですので、至らないところもあるかと思えます。どうぞよろしく願いますわね」

「(こちらこそ、よろしく願います)」

ナタリアとエステルは微笑み合い、挨拶をし合った。

「どうやら、新たな友好関係を結ぶのに一役買ったようだね、カイ君」

「……そうなのか?」

「ああ。君は近い未来、ガルパンゾ国とライマ国が友好関係を結びきっかけを作った偉人となるかもしれないな」

そして嬉しそうに笑い合っている二人を見たウッドロウはカイに向け冗談っぽくそう言ったのであった。

それからナタリアはウッドロウとエステルに任せてカイは甲板に誰か居ないだろうかと考えホールに行く。

「あ、カイ」

「やあ、ナタリアがご迷惑をおかけしました」

と、そこに二人の女性の声と一人の男性の声が重なる。

「アンジュ、カノンノ……」

「カイ、お願いがあるんだけど……」

アンジュが真剣な表情でカイにお願いがあると言い、カイも何かを感じ取ったのかカウインター席へと歩いていく。

「緊急かつ重要な仕事よ。アルマナック遺跡にある『暁の従者』の拠点へ行くの……きつと、あの赤い煙、光の存在もいるはず」

「絶対に『暁の従者』から引き離さないよ！」

「この仕事には私とアンジュ、そして、たしかカノンノと言いましたかね？ この子が同

行いたします」

アンジュ、カノンノ、ジェイドの順番で話す。

「あなたはアドリビトムのエース候補だとアンジュ、カノンノから聞いています。是非ともその力、見せていただけられないでしょうか？」

「分かった」

ジェイドの言葉の真意を考えるまでもなく、カイはその依頼を受ける事を了解した。

## 第十三話 V S 暁の従者、そして新たな敵

バンエルティア号の依頼カウンター。そこではカイ、カノンノ、ジェイド、そしてアンジュが「暁の従者」の拠点であるアルマナック遺跡に乗り込むための依頼を受けていた。

「依頼の確認をするわね？」

アンジュが真剣な表情で口を開き、次にジェイドがくいつとメガネを直しながら口を開いた。

「今回はアルマナック遺跡にある『暁の従者』の拠点へと行きます」

「『暁の従者』は、この前カイ達がルバーブ連山で見たつて言う光る存在を、救世主『デイセンダー』として、ルバーブ連山から連れ出した宗教団体だよ」

「彼らは、ナタリアの国であるライマ国ばかりでなく、様々な所で暴動を起こしているらしいの。彼らの拠点に、きつとあの光る存在もいるでしょう。早く、彼らから切り離さなければ大変な事になってしまう」

「今回はアンジュさんとジェイドさんと私が同行するねー」

ジェイドの言葉に続いてカノンノが説明、次にアンジュがそう言うのと再びカノンノが

今回のメンバーを言う。

「準備が出来たらすぐに発ちましょう」

「……分かった。じゃあ少しグミとか買い足してくる」

「私も行くー!」

ジェイドの締めの後カイはカノンと共に買い物に行き、買い物や武器の確認などを終えると四人一緒に船を出ていこうとする。

「カイ!!」

「テイトレイ」

と、そこに聞こえてきた青年の声。それにカイが振り返って声の主の名を呼んだ。

「『暁の従者』の奴らのところに行くんだろ? 俺は一緒に行けねえけど、俺の分まであいつらをぶん殴ってくれ!!」

声をかけてきた青年——テイトレイはカイに駆け寄ってそう言うのと右拳を突き出し、カイはそれを見てしばらく硬直した後右拳を突き出す。それにテイトレイは満足そうに頷いてカイの右拳を己の拳で押し返した。

「よし、行つていいー!」

「ああ」

テイトレイの言葉にカイは「ああ」と頷いて返し、彼らは船を出ていき、アルマナツ

ク遺跡近くまで辿り着くと船を下りてアルマナツク遺跡まで歩き、そこに入っていく。

「ホントさ。デイセNDER様が手から金を山のように出したんだ！」

「しかし、デイセNDER様は、救世主という自覚がおりではない。自分が何者かも分からないとは……」

アルマナツク遺跡の入り口付近の広場で暁の従者の信者らしい二人組がそう話している。

「ほら、予言でも言うだろう。デイセNDERは、世界樹から生まれたばかりで記憶というものがない。恐怖すら知らないとな」

熱く語っている信者——仮に信者Aとしよう——に對しもう一人の信者——こちらは信者Bとしようか——が困ったような声質で話すと、信者Aはそう言い、少し言葉を区切る。

「少し前に、俺達の間で裏切り者が出たって話があっただろう？ 先日、その裏切り者に罰をお与え下さいって願った奴がいたんだよ。そうするとデイセNDER様は、表情一つ変えずに……ああ、むごい。口に出すのものはばかられる程のものだった。恐怖という感情があれば……確かにあんなことは出来ないだろう」



「俺もデイセンドー様に願いを叶えてもらいたいものだ」

「無理さ。司祭クラスの許可なくしては会えないだろうし」

二人の信者はそう言うのと遺跡の奥の方に歩いていく。

「……行つたみたいですね」

と、それを見届けてからジエイド達が遺跡に侵入した。

「やつぱり、この奥が彼らの拠点なのね。ここは、太古にあつたデイセンドー信仰の場所だつたそうだから、彼らも拠点としてここを選んだんでしようね」

「デイセンドー様、ですか。そのいかがわしい存在もここに隠しているんでしょうかねえ……」

アンジュはこの遺跡に伝わる伝説からこの場所を拠点に選んだのだろうと予測を述べ、ジエイドは暁の従者が信仰するデイセンドーなる存在もここに隠しているのだろうかと言った後、いやはやと首を横に振る。

「いやはや、信仰そのものを否定する気はありませんが……こうして現状を目の当たりにすると、なかなかどうして、色々考えさせられますね」

「元々、信仰の概念が生まれたのは絶対的に信じられる対象を作る事で人々が未来に希望を持つことが出来たから。それをこんな形で痛感させられることになるなんてね

……」

ジェイドの呟きにアンジュも神に仕える者としてかどこか浮かない顔で呟き、「ディ  
セNDER様、か……」とも呟く。

「盲目的な信仰は、時として人から正常な判断力を奪います。言うまでもない事ですが、  
今回の件では、あくまで信者達に悪意がないと言うのが質が悪い」

「彼らは純粹に救いを求めているだけなのでしょね。でも……」

「ええ。例え異端として残酷な手口で他者を排除しようと、簡単に己を正当化してしま  
える。それは既に、信仰という免罪符が通用する域を超えています。暁の従者……恐ら  
く、話の通じる相手ではないでしょう」

「出来れば戦いたくないけれど……万が一の場合も覚悟していかないといけないでしょ  
うね」

ジェイドとアンジュはそう結論を出し、アンジュは今回の同行者であるカイとカノン  
ノを見る。

「カイ、カノンノ、慎重に進みましょう」

「はい」

その言葉に二人も頷いて返した。

「牙連刃！」

それから遺跡を進んでいく中で球根から二本葉つばが生えたような形をした魔物——ムスシプラと石像型の魔物——ペDESTALが現れ、アンジュはその内二体いるムスシプラの一体に向けナイフを連続して振るい攻撃を仕掛ける。

「滅掌破！」

カイは闇のマナを込めた掌底をペDESTALに叩き込む。と、その魔物の石像部分——ガーゴイルが吹き飛ばされ土台部分——ペDESTALにカノンノが斬りかかった。

「こっちは任せて！」

「了解」

ペDESTALをカノンノに任せ、カイはペDESTALを飛び越えてガーゴイルへと斬りかかり、その握っている刀に炎が纏われる。

「鬼炎斬！」

炎を纏った刀の十字斬りがガーゴイルを斬り、カイはそのまま着地と同時に回転、その足に炎が纏われる。

「鬼炎連脚！！」

回転の勢いで飛び上がり、炎を纏った両足での連続蹴りがガーゴイルに直撃。だが、さらにカイは再び刀に炎を纏わせ、その連続蹴りが終わり地面に着地した瞬間刀を腰に

構えガーゴイルの方に切っ先を向けて突進した。

「斬魔——」

突進突きの後炎を纏った刀で十字に斬り、さらに回転して勢いをつける。

「——龍炎剣!!」

掛け声と共に再び炎を纏った足で連続回転蹴りを叩き込み、それを受けたガーゴイルはついに倒れ伏しカイは刀を鞘に収めるとガーゴイルに背を向ける。

「……ふむ、確かにやりますね」

その様子を見たジェイドがカイの事をやりますねと評価する。それにアンジュは得意気にふふんと鼻を鳴らした。

「もちろん。うちの未来のエース候補ですからねー」

えっへんと胸を張ってそう言うアンジュ。それにジェイドもふつと笑う。

「しかし——」

彼がそう呟いた瞬間、ガーゴイルが起き上がり、カイは驚いたように振り返ると鞘に収めている刀に手をやる。

「カイ!」

「——ロックブレイク!!」

ガーゴイルがカイに攻撃を仕掛ける直前、床から突き出た岩の槍がガーゴイルにトド

メを刺した。

「相手を倒したか確実に見極める、という点ではまだまだのようですね」

不敵に笑ってジェイドはそう言い、「まあ相手は無生物ですけどねえ」と続ける。

それからカイとカノンノが前衛を歩いている途中、ジェイドがふとアンジュの方を見る。

「それにしても、意外でした。今回の任務、あなたが名乗りを上げるとは。民の信仰を守り、教え諭す神官としてやはり見過ぐせないものがありましたか？」

「そうね。それもあるけど……」

ジェイドの質問にアンジュはそう呟いた後、伸びをして見せた。

「たまには外に出て、私も身体を動かさないと」

「それは素晴らしい」

アンジュの言葉をジェイドは笑顔で素晴らしいと評価する。

「我らがリーダーは大変な運動音痴と聞きましたが……」

「！」

「自ら苦難に乗り出しますか。いやあ流石です。敬服しました」

しかしその次の彼の言葉にアンジュはドキツとなり、彼が笑顔で続けるとアンジュは彼に慌てたように顔を向けた。

「ちよ、ちよっと。その話、どこから……ううん、誰から聞いたの!」

「運動とは、健康維持の観点からも非常に重要な要素ですからねえ。筋力の低下による生命活動の低下はもちろん、皮下脂肪を蓄える事による基礎運動能力への障害も……」

「ま、待つて! それ以上言わないでっ!」

ジェイドの言葉をアンジュは慌てたように叫ぶ。それにジェイドはにやにやと笑いながら不思議そうに首を傾げた。

「何を慌てているんです? ギルドでは有名な話なのでしょう?」

「そんなわけないでしょっ!……(…ジェイド・カーティス大佐……噂以上の辣腕だわ。どこでそんな情報を……っ)」

ジェイドのわざとらしい言葉にアンジュは叫び、彼を睨みながらそんな事を考える。

「そう怖い顔をしなくても。何かまずい事を言いましたか?」

そう言い、彼は再びわざとらしく笑う。

「何分、心当たりがないもので……」

その言葉にアンジュは再びジェイドを睨んだ。二人がそんな話をしてしていると突然カイとカノンノが歩みを止め、それに気づいたアンジュとジェイドも足を止める。

「はああああ……ッ!」

その先には二人の男性が立っており、その内の一人——前髪を七三分けにしている——

―が両手を上に掲げ石柱の大きな破片を不可思議な力で持ち上げていた。  
「見ろ、この力！ ラザリス様がくれたんだ」

そう叫んでからその男性は石柱の破片を地面に下ろす。

「素晴らしい！」

それにもう一人の男性――こっちはスキンヘッズだ――が素晴らしいと歓声を上げた。

「ああ。この力をもって我々のデイセクター・ラザリス様と共に全ての民を平等な世界へと導くんだ」

「いやあく。なかなかいいものを見せていただきましたよ」

七三分けの男性がそう言うと、ジエイドがそう言いながらカイ達はそこに姿を現す。

「んっ、なんだお前達は？ 我々の同志になりに来たのか？」

「いいえ、そうではないの」

スキンヘッズの男性の言葉にアンジュがそう返す。それに七三分けの男性が「何の目的で来たんだ」と質問する。

「あなた方がデイセクターと呼んでいるものを引き渡してもらいます」

「あれは、デイセクターなんかじゃないの。もつと得体の知れない何か……危険なものかもしれないの」

ジエイドの言葉に続いてカノンノがそう言う。

「危険な存在だと？ バカな事を……」

しかし七三分けの男性はその言葉を鼻で笑った。

「今は誕生されたばかりで、予言通り名前以外何も記憶はない。だが、今この奥でこの世の事を学んでおられるのだ！」

スキンヘツズの男性がそう言つて拳を構える。

「それが終わるまで、誰もこの先へは通すわけには行かないのだ！」

「この腐敗した世の中を正す為に降臨されたデイセNDER様だ！」

さらに七三分けの男性も構えを取る。

「じきに、自ら立ち上がられ、この世界を理想郷へと造り変えられる。邪魔はさせないぞ！」

二人の様子を見たジエイドがやれやれと首を横に振る。

「ずいぶん熱の入れ様ですね。話になりません」

「カイ、こうなったら仕方ないわ」

ジエイドはそう言つて槍を構え、アンジュも短剣を構えながらカイに呼びかけると彼も黙つて領き刀を抜く。その横でカノンノも大剣を抜いた。

「我らに勝てると思うな！ デイセNDER様より授かった力、とくと見よ!!」



そう叫んでスキンヘツズの男性が一気に人間とは思えない速さで飛びかかり、カイ目掛けて拳を突き出してくる。

「!」

カイはそれを地面を蹴りとんぼ返りでかわすが、その拳の一撃が岩でできている遺跡の床を粉々に打ち砕いた。

「そんな!」

生身の人間の、それも素手での一撃にアンジュは息を飲む。

「曼珠沙華!!」

とんぼ返りをしてかわしながら炎のmanaを込めた苦無を投げつける、が、スキンヘツズの男性が拳を横に薙ぎ払うように振るうと同時に衝撃波が地面を走りその力が苦無を吹き飛ばした。

「出でよ、敵を蹴散らす激しき水塊、セイントバブル!!」

「ぐううっ!」

しかしそこにジェイドが詠唱を終え、スキンヘツズの男性のすぐ頭上から巨大な水泡が落ちてきたかと思うとそれが幾度となく弾けていきスキンヘツズの男性にダメージを与えていく。そこに、地面に着地したカイが忍者のスピードで肉薄。右手に闇のmanaを溜めようとするが闇のmanaの代わりに水のmanaが右掌に集中する。

「砕けろ……」

眩くと同時にカイの右掌から氷が具現していく。

「絶破烈氷撃!!!」

「ぐあああああつ!!!」

氷の力を得た掌底と氷が砕け散った勢いでスキンヘッツの男性が思いっきり吹き飛ばされた。

「澄み渡る明光よ、罪深きものに壮麗たる裁きを降らせよ！ レイ!!!」

「ぐあああああつ!!!」

一方アンジユは七三分けの男性に向けて光系魔術を詠唱、男性に光の裁きが降り注ぐ。

「たあああああつ!!!」

そこにカノンノが大剣オータムリイを上段に構えながら男性に飛びかかり、大剣を振り下ろす。

「なんのおっ!!!」

「っ!?!」

しかし男性は怯みながらも拳を振るい、大剣にぶつける。

「ぐうっ??  
!!!!」

カノンノは驚きに目を見開く。男性は素手にも関わらず大剣の刃と自らの拳を拮抗させている、その拳に傷一つついておらず、驚きにカノンノは動きを止めてしまふ。

「しまっ!?!」

動きが止まった一瞬の隙で男性の拳が大剣を押しつけ、大剣が後ろに押されたカノンノはバランスを崩してたたらを踏む。その瞬間七三分けの男性は詠唱を開始した。

「水天の境を見失いし、業深きものよ、汝が罰を示さん!」

叫び、根源たるマナが結集、

「トラクタービーム!!」

「きゃああっ!?!」

カノンノの足元に魔法陣が組まれると凄まじい斥力が上空に向けて発生、カノンノの身体が空中へと投げ飛ばされた。

「がはうっ!?!」

そして重力に従いカノンノの身体は落下、いきなり空中へ投げ飛ばされバランスを崩したカノンノは背中から強かに地面に叩きつけられた。

「もらったあっ!?!」

そこに男性は拳を振りかぶってカノンノへと襲い掛かり、衝撃と痛みに動けないカノ

ンノは身を縮めてぎゅっと目を閉じる。

「があっ!!」

しかし、その直後男性の悲鳴が聞こえてきた。それにカノンノは驚いたように目を開ける。その眼前で、風が走っていた。

「カイ!!?」

カイだ。彼は刀を鞘から抜き放ちつつ一閃、男性の拳を押し返しながら刀を振り抜くとそのまま刀を両手で握り刃を返す。至近距離、刀をかわすことも出来ない距離で防御も間に合いそうにない。そんな七三分けの男性の姿と、躊躇いなく、人の命を奪う恐怖すら覗かせずに刀を振り下ろさんとするカイにカノンノは目を見開く。

「カイツッ! ダメツ!!」

考える前にカノンノは叫ぶ。その声にカイもびくつと身体を震わせ、刀を振り下ろさんとしていた動きが止まる。

「う、うおおおおおつ!!」

「っ!!」

と、その隙は見逃さんと男性が右の拳を振り上げてカイの手から刀を殴り飛ばし、さらに左拳も振り上げる。

「あ……」

自分が咄嗟に叫んだせいで今度はカイまで危なくなっている。それにカノンノは顔を青くする。

「なっ!?!」

が、次の瞬間カイは上空へと弾かれていた両腕を素早く後ろに回すよう回転、その勢いでさらに自分の前の方で両腕を振り上げると、相手が振り下ろしてきた拳の腕を上空へと弾き飛ばしながら、身体を支えるために片足をぐいつと後ろにやる。さらに回転の勢いそのまま両腕を後ろにやっつて手に気と力をぐぐつと込める。ぐいつと支え、ぐぐつと溜めて、

「轟裂破!!!」

「がはっ!?!?!」

どんつ、と相手に両掌底を叩きつけながら気と力を解放する。ティトレイ直伝の技——剛裂破が男性に決まり男性は吹っ飛ばされると遺跡の壁に叩きつけられる。

「ぐ……」

七三分けの男性は起き上がろうとするが、その目の前に槍が突きつけられると驚いたように動きを止める。

「いけませんねえ。もつともおろつと命を大事にしては?」

槍を構えている男性——ジェイドは勝ち誇った笑みを浮かべながら七三分けの男性

にそう呼びかける。スキンヘッツの男性は既にアンジュが目を光らせており、変な動きをすればすぐさま魔術で攻撃できるよう準備を整えていた。

「くっ……だが、我らは屈しない！」

七三分けの男性の男性は槍を突きつけられながらも強い調子で叫ぶ。

「一部の者ばかりが益を得る腐った世の仕組み。必ずやデイセNDER様が打ち砕く」

「搾取の無い、平等で平和な世界を望んでいる者達の声の為に……デイセNDER様を、お前達に渡すわけには行かない!!」

その強い調子での声に続いてスキンヘッツの男性がそう言うと、再び七三分けの男性が叫ぶ。

「デイセNDER様……」

と、突然カイが眩く。

「……お前達は、そいつで頼る前に自分で何かしたのか？」

「なにい!？」

カイの言葉にスキンヘッツの男性が叫ぶ。とジェイドもやれやれと首を横に振った。

「世を変えるにも、デイセNDER様頼りですか。それでは、何も変わりませんよ」

「黙れ!!」

ジェイドの言葉に七三分けの男性が叫ぶ。と、その時二人の男性の身体から赤い煙が

立ち込め、ジェイドは驚いたように槍を下げて数歩下がり、アンジュも目を見開く。

「あの時の赤い煙！」

「なんだ……これは」

カノンノが目を見開いて叫び、七三分けの男性が呟く。

「身体が……身体がああああああつ!!」

スキンヘツズの男性が悲鳴を上げ、二人の身体を完全に赤い煙が覆い隠す。そして赤い煙はやがて薄くなり、消え去った。

「ヒイツ!」

「な、なんだつ、この姿はつ!!」

信者二人が悲鳴を上げ、アンジュ達も目を見開きカノンノが絶句する。信者二人は身体が完全に硬質化、かろうじて人間型だがヒトとは思えない姿に変貌していたのだ。

「ジオアンさんとミゲルさんと同じ……ううん……それ以上に酷い……」

「まさか……生物変化現象!?!」

絶句したカノンノが震えた声で呟き、アンジュが、目の前で起きた光景を分析し叫ぶ。

「あああ……なぜ。なぜだ、なぜ……こんな姿に。ラザリス様……」

「ラザリス様……助けてください……」

元スキンヘツズの男性と元七三分けの男性が震えた声で呟く。

「ラザリス？」

その言葉にカノンノが首を傾げた。

「デイセNDER、ラザリス様ああ!!」

そして二人は悲鳴を上げ、遺跡の奥へと走っていった。

「私達や多くの人と同じように、彼らも平等な世界の理想を持っているのに……なのに、

世界はバラバラで、人々の思いは……かみ合わない」

「仮にデイセNDERが存在したとして、この世界を見たら、どう思うんでしょうねえ

……」

「……」

アンジュが寂しげな表情で呟き、ジェイドもふうと息を吐きながら呟く。それにカイは無言で佇んでいた。そしてアンジュは難しい顔を見せる。

「生物変化現象……報告では聞いていたけれど……まさか、あんな事が本当に起きるなんて」

「全くです。それが本質的に、どんな力であつたにしろ、あんなものをみすみす放置しておくわけにはいきません」

アンジュの言葉にジェイドは同意し、その力を持つものをみすみす放置しておくわけにはいかないと続ける。



「彼らはわかっていないのね。自分達が信望している存在の本質を……せめて私達だけでも、冷静に、真実を見極めないと……取り返しのつかないことになる前に……」

アンジュはそう呟き、カイとカノンノを見る。

「彼らを追いかけましょう」

「はい」

そう言つて三人は歩いていく。それを後ろで見ながら、ジェイドは顔を伏せた。

「己の望む『救い』を与えない神、デイセクター……ですか。現実を目の当たりにした時、信者である彼らはどうするのでしょうか。神を捨てるか、あるいは……」

そう呟きながら、ジェイドも前を歩く三人を追うように歩みを進めていった。

「いた！」

アンジュが叫ぶ。遺跡の最奥地、生物変化現象を起こした二人の信者はもう立ち上がる力もないのかカダイフ砂漠に捨てられそうになっていた、同じく生物変化現象を起こしていたジョアンとミゲルのように身体をずりずりと、最奥地にある豪華なテントへと身体を引きずっていた。

「ラザリス様……デイセクター様……助けてください……こんな、こんな姿……」

「助けて……だつて?」

信者——一度見失ってしまったためもうどつちがどつちなのか見分けがつかない——の弱々しい声に、テントの中からそんな女の子の声が聞こえてきた。

「望んだから、欲しがったから、力をあげたのに……今の君達はとても強いよ? なぜならボクがそうしてあげたから……」

その言葉の後、テントの中から一人の小柄な女の子——銀色の髪を短く切りしかし毛先は赤く染まつており、頭の上や両腕等身体の各所が刺々しい綺麗な鉱石でまるで飾られているかのように石化、左目には赤い星のような飾りものをしているのが印象的だ——が姿を現した。

「君達さ、強くなりたいたいだつたら、こうならなければならなかつたんだよ」

少女は冷淡な声でそう囁くように信者へと言う。

「大丈夫。今はまだ半分ヒトだろうけど、じきに完全に变化するよ。そうすれば、今より強い体になるはずさ」

「そんな!——これでは魔物です……元の姿に……」

少女の言葉に信者の一人が悲鳴を上げて懇願する。

「本当に欲しがってばかりだね……」

その懇願に少女は静かに、吐き捨てるように呟いた。

「でも、もう君達に付き合う必要もない」

少女はそう言って自分の身体を見下ろす。

「この醜いヒトの姿は耐えがたいものだけど、まあいい。やつと自ら行動する身体が手に入れられたんだからね……」

「あの子が、あの赤い煙だったもの？……」

少女の言葉が終わるとカノンノが驚いた様子で呟く。

「……誰？」

その呟きに、少女はようやくやくカイ達の存在に気づいたかのように問いかけた。

「……お前は一体、何者だ？」

「ラザリス……ボクは、ラザリス……」

彼女の問いかけにカイが聞き返し、その問いかけに少女——ラザリスは呟くように自らの名前を名乗った。

「あなたが、人々の願いを叶えてきたの？ 願いを叶えるのはなぜ？」

「……どうしてかな？ 実のところボクにも分からない」

今度はアンジュが質問する。それにラザリスはどうしてかなと呟いてから少し黙った。

「けども、君らから少しずつ世界を知るのに都合が良かったからだと思う」

「あなたが願いを叶えた生物から、学習した。こういう事ですか？」

彼女が続けた自分がやった事の理由の推測に対し、ジェイドが尋ね返す。それにラザリスは「そうなるかな」と呟いた。

「“願いを叶えて”と、向こうからボクに接触してきたからね。この世界に出たばかりの時は、ボクにも接触する能力がなかった。でも、やがてあらゆる生物がボクの方へ手を伸ばしたんだ。願いを叶えるという意味のコネクトを通じて、ボクはこの世界の生命力と情報を少しずつ手に入れた」

「なるほど……しいなの仮説が当たっていたようですね」

ラザリスの言葉にジェイドはしいなの仮説が当たっていたようだと言った。

「おかげで実体も思考も手に入れた。思う存分、ボクの好きなように力を振るう事が出来る」

「あなたはさつき、世界の生命力と情報を手に入れたと言ったけれど……あなたはヒトじゃない……何者なの？……」

ラザリスがさらに言葉を紡いだ後、アンジュがさらに彼女に問いかける。

「ボクは、この世界ルミナシアのように、誕生するはずだった“世界”だ」

「誕生するはずだった“世界”？」

その言葉にアンジュは眉をひそめて呟く。

「ああ……ああ……」

と、いきなりラザリスがまるで怒っているかのように声を震わせ始めた。

「この世界にはうんざりだ！　ボクならもつといい世界になるはずだった!!　こんな、腐りきった世界をもたらすヒトがいる世界なんて、ボクなら造らなかつた!!」

「!」

「カイ?」

彼女が激昂し声を荒げると同時、カイが刀を抜き逆手に構えながら地面を蹴りラザリスへと突進、身体を捻り力と遠心力を込めてラザリスを斬りつけようとする。が、その直前ラザリスの左目を覆う星飾りが赤く光りラザリスが右腕を振るうと同時、凄まじい衝撃波が発生して接近していたカイが右手に握っている刀をへし折るだけでなくカイの身体、さらには遠く離れていたカノン、アンジュ、ジェイドまでも遺跡の通路まで吹き飛ばした。

「があっ!!」

地面に叩きつけられカイは息を吐く。彼より遠くにカノン達三人は吹き飛ばされ、ておりそのダメージで立ち上がれそうにない。そんな状態の中、こつこつとハイヒールで地面を叩きながらラザリスはカイの元へと歩き寄り、彼を見下ろした。

「君も何故こんな者達を守ろうとするんだ。分からないよ」

そう眩いた後、ラザリスの身体が透けていきやがて彼女は消え去る。カイは痛む身体をおして起き上がった後、異形の姿へと変貌を遂げていた二人の信者の元へと歩き自分の両手を見る。と、彼の両手が突然輝かしい光を放ち始めた。そして彼が両手を二人の方に向けた後、両手を広げると二人の姿がカイの両手から放たれている光と同じ輝きの光に包み込まれ、カノンノ達は眩しい光に思わず目を閉じる。

「……」

そして光が消え、彼女はゆっくりと目を開く。

「これは……」

男の声が聞こえてきた。信者の一人の声だ。

「元の姿に!!」

スキンヘッツズの男性が自分の身体を見て声を上げ、七三分けの男性も驚いたように自分の身体をまじまじと見る。

「あなた、その力は……」

「砂漠でジョアンさん達を助けた時と同じだ……」

アンジュとカノンノが驚いたように眩き、カイは彼女らの方を見る。

「分からない……だけど、こうしなければならぬ気がした……」

「あなたにも、その力が何か分からないの？」

「あなたは記憶喪失だそうです。記憶を失う前に、使っていた力かもしれませんね」  
カイの言葉にアンジュが呟くとジエイドは「カイが記憶を失う前に使っていた力かもしれない」と推測を述べる。

「ラザリス様は……あれは、デイセンドーではなかったのか……」

七三分けの男性が呆然とした表情で呟く。

「彼らもやつと、目を覚ましたようですね？ 我々も一旦戻りましょうか」

ジエイドは信者達を見てそう呟き、一旦戻ろうと言うと信者達を置いてその場を後にした。

「とうとうあの存在、ラザリスが意思を持ち、一人歩きし始めてしまった。ああ、どうすれば……」

「……すみません。あの時、俺が斬っていれば……」

アンジュが途方に暮れたように呟き、カイは先ほどもう少し速く己の刃がラザリスに届いていればと自分に力がなかったことを謝る。

「そんな事ないって。あなたはよくやってくれたよ……」

その言葉にアンジュは弱々しく笑って首を横に振り、その後「さ」と呟く。

「気を取り直さなくっちゃ。『暁の従者』の信者達に、話を聞いたの。彼らが説明してくれた、今までの経緯をあなたにも話すね」

アンジュはいつもの調子を取り戻し、先ほど暁の従者から話を聞いたと言い、カイに彼らが説明してくれた事を話し始める。

「まず、彼らは願いを叶える存在の噂を聞き、ラザリスを自分達の信ずるところのデイセNDERだと思った。そして、『暁の従者』の教義に従い、デイセNDERを迎えた。そのデイセNDER、ラザリスは自分の名前以外、何も知らなかった。自我もあまりない状態だった。だけど、ヒトの願いを叶えると、自我、そして思考が生まれていった……」

「……以上が分かった事、か？」

アンジュの言葉をそんな少女の声が遮る。それにアンジュははっとなって声の方を向いた。そこには、金色の髪を長く伸ばししかし毛先が青く染まっている、右目を眼帯で覆った長身の少女——レイが立っていた。

「レイ！ もう起きて大丈夫なの？」

「ああ……迷惑をかけた」

アンジュの言葉にレイは静かにそう呟く。

「……彼女は？」

と、まだレイを見ていなかったジェイドが目を細め首を傾げる。



「この子はレイ、この前の依頼でラザリス……その時は赤い何かだったらしいんだけど、その搜索任務に行つた時に倒れて今まで眠っていたの」

「なるほど……」

アンジュがレイを紹介しジェイドがなるほどと呟いてレイに一礼、アンジュはレイが目覚めたことに安心したように微笑み、そこで思い出したように「それでね」と言った。「彼ら、最後にこう言ったの……願いを叶える事で、何か学習をしているようだったって……」

「ラザリスが言っていた、〝誕生するはずだった世界〟という言葉……気になりますね」  
「誕生するはずだった世界、かぁ。世界は、世界樹から生まれたって言われてる。それも、大昔から……」

ジェイドの言葉にアンジュはこの世界の誕生について言われている事を思い出し、はあとため息をつく。

「けれど、本当の所は誰も知りほしくないのよね」

「認知されているのは、世界樹の生み出すマナの恩恵で生物は生きている事。よって、世界樹が世界創造の礎であることもなんとなく容認されていますが……しかし、〝本来生まれるはずだった世界〟とは一体何を表しているというのか……」

ジェイドもすらすらと自らの知識を述べ、そこからラザリスの言っていたことは何を

意味しているのかも眩く。

「世界の始まりについては、やはり精霊に聞くべきよね」

「精霊？」

アンジュの言葉にカイが首を傾げる。

「教会でも、精霊はヒトよりも古い存在と伝えているもの。きつと、何か知っているはず」

「アンジュ、その件だが」

と、アンジュがそう言うのとキールが口を挟んだ。

「精霊のいる場所が特定できた。あとは、この船を安全に着陸させる場所を探すだけだ」

「ありがとう、キール君。それじゃあ、もうすぐ精霊に会えるのね」

キールが精霊のいる場所が特定できたというのとアンジュはありがとうとお礼を言う。

「それじゃ、今日のところはこの辺にしましょうか。カイ、カノン、お疲れ様。また何かあったらよろしくね？」

「はい」

アンジュはカイとカノンの労を労い、二人はこくと頷く。

「アンジュさん、申し訳ないが我はもう少し休ませていただきたい」

「ああ、いいのいいの。さつきまで倒れててその原因も不明なんだし、全快するまで休ん

でて。この仕事は体調管理だつて大事なんだから  
「はい」

レイはアンジュからもう少し休憩を取るという許可を取ると自分の部屋へと戻つていく。

「カイ、ロックスのとこ行って何か作つてもらおう！」

カノンノはカイを引つ張つて食堂へと走つていった。

そしてレイは船倉にある自室——正確にはカイとカノンノとの相部屋——へと戻る。その顔はぼーつとしており、何故か足取りもふらついている。

「ラ、ザ、リ、ス……」

彼女はそう呟くのを限界にベッドに倒れ込んだ。

## 第十四話 霊峰アブソールへと

「ヒトは、どれだけのものを欲しがらんのだ……」

「ん？……」

突然聞こえてきた呟き声。それに、その者は目を開いた。

「……」

霧が深い、山の中だろうか。いや、切り立った崖がすぐ足元に見える。そこに自分は立っていた。

「ヒトは、どれだけのものを欲しがらんのだ。動物や植物や虫達は、ただ生きたいとしか願わなかったのに……」

「な、なんだ!?!」

突然自分の口が動いたような感覚が走る。だが、その口から出てくるのは自分の声ではない。しかも、さつきから自分が発しようとしている声はただの一言もその口から出てこない。

「ヒトが一番、世界を食いつぶしてる。この世界は、このままヒトの手によつて死んでいく。僕が生みたくても、生めなかつた世界……僕が世界を造つたら、きっとこうではな

かっただろう。ううん、こんな世界にはしなかった……」

「……」

なんだろうか、とても悲しい。そんな気分になってくる。そんな感覚を覚えながら、彼女の意識は遠くなっていった。

「はっ！」

少女は目を覚まして起き上がり、ゆっくりと辺りを見回す。

「ん、う……ロックス、もう食べられないよお……」

「すう、すう……」

今いるのは霧深い崖の上……ではない。今自分が所属しているギルドという団体、そこで自分が暮らしている部屋だ。隣のベッドではルームメイトでありギルドの先輩——カノン・グラスバレーが、部屋の反対側では共にギルドに入った、自分と同じ記憶喪失と言われている青年——カイが寝息を立てている。

「……今のは……なんだ？……」

さつき見ていた夢。何故かよく分からないが悲しくなってくる、だが、同時に……

「懐かしい？……」

左目から涙を零しながらぼうつとそんな声を漏らし、少女——レイはただベッドの上に座り込んでいた。

「みんなー！ 朝ごはんだよー!!」

「とつとと食べないとなくなるわよー!!」

クレスとルーティー——本日の朝食手伝い当番だ——が一階から地下まで回って朝ご飯が出来たと呼びかけ、それにスタンやカイウスなどが「飯！」と叫んで寝間着だったり着替え終わってたりメンバーによつて様々な状態で食堂へと走る。

「おふあよーロックス〜」

「はい、おはようございませす。お嬢様」

それから少し時間が過ぎ、カノンノがお目をこすりながら食堂へとやつて来る。その後ろからカイとレイが続き、まだお寝ぼけ状態のカノンノを見たロックスは苦笑を漏らす。

「大分お疲れの様ですね。昨日は夜遅くまでお仕事ご苦労様でした」

「うん……ご飯、まだ残ってる?」

「もちろん。さ、お嬢様、カイ様もレイ様もどうぞ」

カノンノが朝食がまだ残ってるかどうかを聞き、ロックスはそれにもちろんと返して三人に席に着くように促す。そしてロックスとクレアが彼らに朝食を運んでくるとカンは両手を合わせる。

「いただきます」

「はい、どうぞ。召し上がって下さい。いただきますは、食べ物へのご挨拶なんですから！」

「へえ？」

カンの挨拶にロックスが微笑んで返し、そう元気よく続けるとレイが首を傾げると、ロックスはにこりと笑った。

「食べ物はですね、自分の命になってくれる体への大事なお客様なんです。だから、いただきますと言うのは大事な事なんですよ」

「ご馳走様もね？」

「そう。ご馳走様。もですよ」

ロックスの言葉に続けてカノンノが言うのとロックスはそうと頷く。それからカノンノはカイとレイの方を見た。

「ねえ、カイ、レイ。何か、少し思い出せたことってある？」

「いや……」

「我もだ」

カノンノの質問に二人はそう返し、それにカノンノはしゅんつとなる。

「そう……でも、いつかきつと思いい出せるよ」

そう言うカノンノは「そうだ」と言つて顔を輝かせる。

「また絵を描いたんだ。見に来てくれる？ 何かきつかけになるかもしれないし。それに、私にできる事つてこんな事しかないから……」

「ああ。見に行かせてもらおう」

カノンノのお願いにカイは頷き、レイもこくと頷く。そしてカノンノは一足早く朝食を食べ終わると「操舵室で待つてるね！」とだけ言い残して食堂を出ていった。と、ロックスがふふつと微笑んだ。

「彼女、絵を見てくれるあなたの事をすっかり気に入つてくれてるみたいですね。旦那様と奥様がいたら、あんな風に絵を見せていたのかな……」

「カノンノの両親は？」

ロックスの言葉にカイがほとんど反射的にそう質問する。と、ロックスは目を伏せた。

「彼女のご両親……旦那様と奥様はお亡くなりになられているんです」

ロックスは、カノンノの両親は腕のいい医者だったため、カノンノが生まれてからほ



んのひと月の後従軍医として収集がかり、強引に連れていかれ、戦場で殉職した。と話す。

「戦争の原因とは、なんだったんだ？ まさか——」

「お察しの通りです。星晶を巡つての戦争でした」

レイの言葉を遮り、ロックスは再び話し出す。当時ロックスはカノンノの両親の家に使用人として雇われており、国からカノンノの両親二人の死を知らされ村にまで戦火が及ぶとカノンノを守るために幼い彼女を連れて村を旅立った。そしてアンジュのいた教会へと行き着き、この船、バンエルティア号に乗って今に至る。という事だ。

「僕はお嬢様を、旦那様と奥様に代わり、立派な淑女に育てると決めているんです。僕も、お嬢様を育てる事で救われていますし」

ロックスはそこまで言うと、カイとレイに向けて我が子を心配する親のような微笑みを見せた。

「どうか、仲良くしてあげてくださいいね。カノンノお嬢様と……」  
「もちろんだ」

ロックスの言葉にカイが即答し、二人は食事を終えると食堂を出ていく。そしてカノンノとの約束通り甲板に行こうとしたその時だった。

「レイさんレイさん!!」

「キュキュー!!」

「ん?」

突如道具屋から、道具屋で商売をしているモフモフ族——キュツポとピツポが飛び出してきてレイに泣きつくように抱きついた。

「お願いだキュー! ポツポを探しに行つてほしいんだキュー!」

「ポツポ?」

「ピツポ達の弟キュー! ポツポは鍛冶屋で、今は素材を探しにルバーブ連山の方に行つてるんだキュー!」

「……分かった。詳しく話を聞こう」

モフモフ族二人に泣きつかれては弱いのかレイはため息交じりに話を聞こうと言い、カイに手で「先に行け」と促すとキュツポ達と道具屋に入っていく。それを見送つて、カイは操舵室へと上がつていった。

「あ、カイ! 来てくれたのね……レイは?」

「キュツポとピツポに連れていかれた」

カノンノはカイを見て嬉しそうに笑つた後、一緒に絵を見に来てくれるはずのレイがない事に首を傾げる。それに対しカイはさつき起きた事を説明、カノンノは「そっか……」と呟いた。

「そのポツポツっていうのは?……」

「うん、この船の鍛冶屋さん。器用でね、皆の武器を加工や強化してくれるんだ」

「加工? 強化?」

「えっと、詳しくはポツポツにね?」

カイがポツポツについて尋ねるとカノンノが説明、その中に出てきた二つの用語にカイが首を傾げるとカノンノは苦笑を漏らして話を打ち切り、スケッチブックを開くと謎の風景をカイに見せる。

「どうかな、この風景。何か思い出せるかなあ……」

「……覚えがない」

カノンノが見せてきたスケッチブックの風景にカイはストレートにそう返し、カノンノは「そつかあ……」としゅんとした表情で呟く。

「力になれると思ったけど、ごめん。何も出来なかったね……」

「……」

申し訳なさそうにそう言うカノンノを見たカイは、なんとなく彼女の頭に手を当てて頭を撫でる。

「あ……ありがとう……なんだか、今の顔……お父さんとお母さんみたい……」

「カノンノ、両親は知らないはず……」

カノンノはお礼を言った後穏やかに微笑んでそう呟き、その言葉にカイが呟くように返す。それにカノンノは「え？」と声を出した後くすつと笑った。

「ロックスから、聞いたんだね？」

そう呟いた後彼女は「お父さんの事もお母さんの事もよく知らないけど。さっきのカイの顔を見たらきつと二人もこんな風に笑ってくれたんだと思った」と話す。それにカイが「そうか」と呟くとカノンノはへへつと笑った。

「へへ。なんか嬉しいよ、カイ。ありがと……また、何か風景が見えたら描くよ。出来たら、見てね。絶対だよ」

「ああ」

カノンノの言葉にカイは頷いた。

「やろつ、瞬迅剣!!」

甲板。カノンノと話し終えたカイが出てくるとそこでは赤毛を長く伸ばし左手に剣を握った青年が、鳶色の髪をオールバックにし二刀流の青年と手合わせを行っていた。赤毛の青年の名はルーク・フォン・ファブレ。つい数日前にジェイドの紹介でアドリビトムへと避難してきたライマ国の王族であり、アドリビトムの新しい仲間だ。と言って

もルーク本人は働く気がなかったのだが「だったらお引き取り下さい」というアンジュの脅迫説得の前に修行という名目で働くことになったのだ。ちなみに一緒に、同じく王族でありルークの弟ことアツシユと、二人の剣の師匠でありライマ国騎士団総長でありティアの兄であるヴァン・グランツもアドリビトムの仲間に入っている。

現在はどうかやらルークはロイドと手合わせ中、審判はクレスが務めており、万一どちらかが怪我した時のための救護役かはたまたルークのお目付け役か、ティアが手合わせを見守っている。

「なんのー！」

ルークの放った鋭い突きをロイドは左手の剣を使っていなし、ルークの懐に入って右手の剣を振り上げる。

「虎牙破斬！」

「ぐあつ!!」

右手の剣で振り上げつつジャンプし、落ちる勢いを利用して左手の剣を振り下ろす第二撃。それをルークはくらってしまい、彼の足が数歩下がる。

「そこまでっー！」

「っ痛えー！」

クレスが叫び、ルークが痛みに声を上げる。

「大丈夫か!？」

その声を聞いたロイドも咄嗟にルークに大丈夫かと声をかける。

「ティアさん、ルークに治療術を」

「ええ」

クレスが言い、ティアも頷くと治療術の詠唱を開始する。

「だーっ!」

が、突然ルークが声を上げ、全員が驚いたように口を閉じる。

「もう、やめだやめだ!! アホらしっつもの!」

「お、おい?」

「そもそも、お前らなんか相手じゃ、ちゃんとした稽古になるわけねえんだ。あー、つまんねえ。俺いーちぬーけたっつと!」

「ルーク! その言い方は二人に失礼でしょ!」

ルークは突然声を荒げたと思うと手合わせから抜けると言い出し、その言葉にティアが眉を吊り上げてルークを叱る。が、ルークは聞く耳持たずふんつと鼻を鳴らして船の中に戻ろうと歩き出した。

「待ちなさい、ルーク」

「!？」

が、その船の出入り口からそんな威厳に満ちた声が聞こえ、ルークは驚いたようにそつちを見る。

「ヴァン師匠<sup>せんせい</sup>！」

「兄さん！」

ルークが叫び、さつきルークを止めた声の主——ヴァン・グランツはゆつくりと甲板に出るとクレスとロイドの二人に向き合い、頭を下げる。

「教え子が無礼をした。申し訳ない」

謝り、一度頭を上げた後彼はルークを見る。

「ルーク。お前も謝りなさい」

「でも……」

「ルーク」

謝るのをしるるルークにヴァンは少し語気を強める。それにルークは「へっ」と鼻を鳴らした後仏頂面ながら「わーるかったよ」と一応謝罪の言葉を発した。そしてヴァンが最近二人が自分の代わりにルークと手合わせをしていることに対しお礼を言った後にこれからもよろしく頼むとお願ひ。ルークがまあどうしてもってんなら付き合つてやると捻くれた言い方をするとクレスとロイドがそれを快諾する。という話の流れになる。

「今戻った」

「お、クラトス！」

するとそこにそんな声が聞こえ、ロイドが声の方を向いて明るく声を出す。朝から出かけていたクラトスが帰還したのだ。と、ロイドはにっと笑ってヴァンを見てクラトスを指差した。

「ああ、ヴァン。こいつはクラトス、俺が村にいた時に剣を覚えてくれたんだ」

「そうか……お初にお目にかかる。ライマ国騎士団総長、ヴァン・グランツと申す」

「私はクラトス、傭兵だ。現在はアドリビトムに雇われている」

ロイドの紹介にヴァンはクラトスに向けて名を名乗り、クラトスもそれに名を名乗り返した。と、ルークが両手を頭の後ろに回してクラトスを見る。

「へー。んじやお前の剣の師匠ってわけか」

「ま、そういう事だな」

ルークの言葉にロイドがうんと大きく頷く。と、ルークは何か自慢をするような笑みを見せた。

「まあ、同じ師匠でも、ヴァン師匠の方が強いだろうけどな」

「ルーク！」

その言葉にティアがルークを叱る。が、既にロイドが「なんだと！」と声を上げてい



た。

「クラトスはなあ！ 俺の村で一番強えんだぞ！」

「へっ！ ちっちゃええ村で一番がどうした！ ヴァン師匠に勝てる奴なんているわけねえんだよ！」

「何をお！」

「止めないか二人とも！」

ルークとロイドは額を突き合わせてどっちの師匠が強いか言い合いを始め、クレスが仲裁を始めるとヴァンは呆れたようにため息をついた後、クラトスの方を見る。

「どうだろう、クラトス殿。一手、手合わせ願えないだろうか？」

「私は構わない」

ヴァンの挑戦をクラトスは受諾、二人は適当な距離を取ると向かい合った。

「お！ ヴァン師匠！ そんな奴叩きのめしちゃえー！」

「クラトスー！ 負けんなよー！」

と、その光景を見た瞬間、弟子二人は途端に師匠の応援に熱を入れ、カイはそれを見ながら二人の方に歩いていく。

「それでは、無制限一本勝負……始めっ!!」

クレスが合図をした瞬間、クラトスは剣の切っ先が地面につくように剣をおろし、

ヴァンは剣を地面と平行に後ろへと引いて構えた。

「魔神剣！」

「光龍槍！」

クラトスが剣を振るうと同時に地に這う衝撃波がヴァンへと迫り、ヴァンが剣を前方へと着くと同時に光の槍がクラトスへと迫る。それらは互いにぶつかり合うと相殺、しかしその時には既に二人とも次の手を打っていた。

「深き地に眠れる灼熱の魔手よ、真紅の暇を待たずして全てを焼き尽くせ！ イラプション！！」

「歪められし扉、今開かれん！ ネガティブゲイト！！」

詠唱が完了しマナを解放した瞬間、ヴァンを地面から噴き出る溶岩流が、クラトスを敵を引き裂く魔空間が襲う。

「粹護陣！！」

しかし二人はその魔術さえもマナを使った障壁で自らを覆い防いだ。

「凄い、ここらまで互角だ……」

クレスが呟く。しかしその呟きの間に既に二人は距離を詰めて剣をぶつけあっていた。

「閃空剣！」

ヴァンが剣を振るい、その斬撃から放たれる剣閃がクラトスを空中へと巻き上げる。  
(いや……)

だがヴァンは気づいた。彼は自分の技で巻き上げられたのではない——  
「閃空——」

——自らその勢いを利用し宙へと舞い上がったのだと。

「——裂破!!」

「くっ!」

回転しながら宙を舞い、その回転の勢いを利用した突き下ろしをヴァンは剣を振るい  
どうにか弾く。その勢いでクラトスもヴァンの背後へと回り、ヴァンは振り返りざまに  
剣を振り下ろすが、それをクラトスは左腕に装備している盾で防いだ。それにヴァンが  
くっとなり、直後彼の周囲に氷のマナが集中する。

「守護氷槍陣!!」

「!!」

剣を床に突き立てると同時に氷のマナが解放され、彼を覆い守るように氷の槍が突き  
出る。それにクラトスが巻き込まれないように飛び退き、二人は再び一定の距離を取り  
場が静寂に包まれる。

「はあっ!!」

そして一瞬、二人は声を上げて相手に突進し再び痛烈な剣劇が繰り広げられる。

「ぬんっ!!」

幾度かの剣閃が二人の間を飛び交った後、クラトスの相手の胸を狙つての中段横薙ぎを紙一重でかわしたヴァンは剣を掲げ、一気に地面を叩き割らんとばかりの剛剣を振り下ろす。

「ぬっ!」

しかしクラトスはそれを左腕の盾で受け止め、ヴァンはくつと唸ると飛び上がる。その時彼の剣に雷が纏われ、クラトスも剣を後ろに引くように構える。

「襲爪雷斬!!」

「閃光墜刃牙!!!」

ヴァンの剣が振り下ろされると同時に放たれる落雷と、クラトスの高速の一突きがぶつかり合い、その衝撃が辺りに音として響き渡る。そして二人は向かい合い、何かを感じ取ると戦闘終了を示すように剣を収めた。

「お強いですな」

「そちらこそ」

ヴァンの言葉にクラトスも目を閉じ冷静に返す。

「やっぱクラトスって強えなー!」でも、ヴァンもクラトスと同じぐらい強えなー!」

「へっ、当然だろうが！ でも、クラトスってやつもなかなかやるなー！」

二人の戦いを見て喧嘩を忘れてしまったどころか意気投合する弟子二人。

「凄い戦いだった。こんな剣士の戦い、初めて見たよ……」

クレスもクラトスとヴァンの戦いに興奮したのか頬を紅潮させながら呟き、「ね、カイ？」とカイに言葉を向ける。それに対しカイはただ二人を見ていた。

「二人とも、まだ本気じゃなかった……」

「え？」

「……そんな気がする」

カイの呟きにクレスが固まると、カイは補足するようにそう続けた後立ち上がり、船の中に入っていった。

「本気じゃなかっただつて？ 二人とも、僕が見てきた剣士の中でもかなりの実力者、それに、こんなすごい戦いを僕は見たことがないのに、それで本気じゃないなんて……」

クレスはカイの感想を信じられないようにそう呟き、「どういうことだ……」と呟く。「ただいま」

「あ、ああ。お帰り」

と、さつきキュッポから依頼を受けてルバーブ連山までポツポを探しに行っていたレイが船に戻って来る。レイの後ろには黄色い衣服を身に纏い巨大なスパナを背負った

モフモフ族——ポツポが立っている。

「ポツポ！」

と、ポツポの気配を感じ取ったのか船の中からキュツポとピツポが飛び出してくる。と、ポツポは笑って右手を挙げた。

「ただいまだキュ！ この人に助けてもらったキュ！」

「お帰りだキュ！」

「素材はどうだったキュ！」

「バッチリだキュ！ これで、武器の強化が出来るようになるキュ！」

「勝利のダンス、開始だキュ！」

遠出した成果を聞いたキュツポがそう嬉しそうにそう言い、

「「キュ〜キュキュ〜キュ〜キュキュキュ〜♪ キュキュキュ♪ キュキュキュ♪  
キュキュツキュツキュ！」」

三匹は腰を振って歌い踊り出す。その光景を見慣れてるらしいクレスは笑い、初めて見たロイドとルークは「おー」と珍しいものを見るように声を漏らし、

「か、可愛い……」

ティアはメロメロになっていた。

「霊峰アブソール？」

ホールに戻ったカイは、頭に？マークを浮かべながらそう聞き返す。

「精霊がいるとされる雪山よ。そこへの着陸場所が見つかったの、だから、そこに行くための依頼を出そうと思うんだけど……カイは行く？」

アンジュが説明、カイに行くかどうか尋ねると彼はこくと頷く。

「そう言ってくれると思った」

それにアンジュも微笑んでそう返し、今回の依頼の内容として「精霊に会ってラザリスの事や世界の始まりの事を聞いてきてもらうね」と説明する。

「あと、エミル君とカイウス君とカノンノが同行する事になってるから。頑張ってるね。じゃあ、行つてらっしゃい」

「行つてきます」

アンジュが行つてらっしゃいと言うのにカイは行つてきますと返し、彼は今回同行するエミル、カイウス、カノンノと共に船を出ていった。

## 第十五話 風の青年と輝きの勇者

アブソール霊峰。氷の精霊セルシウスがいるというこの山にカイ、カノンノ、エミル、カイウスはやってきていた。

「ぎ、寒い……」

エミルがガタガタと身体を震わせながら呟く。まあ彼は機動力重視なのか薄着で、特に肩なんて思いっきり露出。見事に雪山の冷たい風を受けている状態だ。

「そうか？　そこまで酷い寒さじゃないと思うけど……」

しかし似たような服装のカイウスは平然としており、それにと追記するように「俺はいざとなったら獣人化して毛皮を纏えるし」と言う。と、カイが「獣人化？」と不思議そうに呟いた。

「ああ、カイウスはね。獣人に変身できるんだよ」

「ああ。俺はレイモーンの民だからな」

カノンノが説明し、カイウスが得意気に言うのとエミルが初めて変身した姿を見た時はびっくりしたなあ、と苦笑する。

「そうか？　俺は——」



「!」

「皆、敵だよ!」

それにカイウスが首を傾げながら眩くと、カイが何かに反応して腰の刀に手をやり、カノンノも大剣を構えながら叫ぶ。いつの間にか彼らの進んでいる先の方にこの山に生息しているんだろう魔物達が立ち塞がっていた。

「チツ」

舌打ちが響く。その主は普段穏やかなエミルだった。彼は腰の後ろに横向きに差している剣を引き抜くと眉間に皺を寄せて炎のように赤い瞳で魔物達を睨みつける。

「雑魚が! かかってきやがれ!!」

そしてそうドスの効いた怒鳴り声を上げると同時にエミルは我先に魔物の群れへと突っ込んでいく。

「——エミルが戦う時に出る、妙な人格の方がびっくりすんだよなあ……」

「あはは……」

カイウスは目を逸らし気味にぼそつと呟き、カノンノも苦笑。それから既にエミルと一緒に特攻しているカイに続く形でカイウスとカノンノも武器を構え魔物の群れに突進していった。

そしてあつという間にその場に死屍累々が築かれ、残った魔物達も怯えて逃走を始める。

「他に敵はいねえみたいだな」

エミルが辺りを確認してそう呟き、剣を鞘に収める。

「あつ、僕……」

と、彼はさつきまでのドスの効いた声から柔らかい口調になり、黄緑色の瞳で辺りを見回す。

「お、戻った戻った」

「え、えと、ごめん……」

「いや、いい加減付き合い長いから慣れた」

おどおどとしているエミルにカイウスはけらけらと笑う。と、カノンノがふふっと笑った。

「それに、アドリビトムには人間だけじゃなくって色々な種族がいるから、誰が珍しいとかってないよね？」

「ああ。種族の差とか感じないしさ。まあ外から見たら、相当変わったギルドに見えるかもしれないけどな」

その言葉にカイウスも笑って頷く。

「精霊も、そうかな？ ヒトとあまり変わらないのかな」

「……ヒトと同じだと思う」

エミルの言葉にカイは静かに呟く。それにエミルは「うくん」と呟いた。

「ヒトと心を通わせてくれるのかな……僕は、不安だな……何かありそうな気がするし……」

エミルが不安気に呟き、彼らは足を進めていった。その道中でカイウスがエミルに雪玉を投げエミルも投げ返していきなりタイマンでの雪合戦が始まり、最終的にはなんと戦闘モードの赤眼エミルVS獣化カイウスの一騎打ちになったりと一騒動がありながら、彼らは山頂への道を進んでいく。

「なあ、精霊はマナが豊かなところにしかいられないんだろう？」

「うん、アンジュさんからそう教わったよ」

カイウスがふと疑問に思ったように尋ねるとカノンノが頷き、カイウスは「この山に精霊がいるって事は、ここはマナが豊富なのかな？」と聞く。それにエミルも「そういう事になるのかな？」と首を傾げながら返し、人差し指を立てる、

「土地がマナに恵まれる条件は一つあって、まず一つが、地下に世界樹の根が通ってる事……」

続けてもう一本今度は中指を立てる。

「そしてもう一つが、星晶がある事」

エミルの言葉にカイウスが「こんな寒い所に世界樹の根が伸びるのか」と疑問を口に出すと、エミルは「マグマの中にも根は伸びてるっていうし、寒さは関係ないんじゃない？」と反論する。と、カイがふと口を挟んだ。

「星晶はマナが物質化したもの。なら根が張ってないところにも星晶があるのは何故なんだ？」

「そ、そこまで……僕には分からないよ」

カイの疑問の言葉にエミルは困ったように頭をかく。と、カノンノが世界樹は成長の途中であり、まだ世界中に根を伸ばしきれていない。だから世界樹はマナを物質化させることで星晶を作り、根が張ってない土地に星晶を据えて世界中にマナの恵みを与えられるようにしたっていう説があるよと説明する。

「でも、ほんとのところはまだ分かってないみたい」

「じゃあ、やつぱさういうのも含めて精霊に聞くしかないか」

説明の後にカノンノがさういうとカイウスはさう言い、彼らは歩を進めていった。

そして寒さと戦い、降り積もる雪を払い、とそこに生息する魔物を退けながら彼らは山を登っていき、彼らはようやく山頂へと到着する。

「だ、誰かいるよ?」

山頂に着くとエミルがそう言う。確かに彼らの目の前に、赤い髪を長く伸ばした長身の人物が立っている。それにカイウスも「精霊じやなさそうだな」と呟き、しかしカノンが「アンジュさんの指示だと目的地は確かにここだよ?」と言う。

「エミル、ちよつとあの人に精霊を探してらつて聞いてみるよ」

「え、ええつ!？」

カイウスに話を振られ、エミルは驚いたように叫んだ後しかしパシリ属性が染みついているためか断れずに、目の前にいる人物に歩いていく。

「あ、あのお。すいません……ぼ、僕達、その、せ……精霊を探しているんですけど……」  
「精霊を探している、だと?」

エミルの言葉にその人物は低い声で返し、振り返ると、眼鏡の奥に光る鋭い視線でエミルを射抜き、エミルはひうつとか細い声を上げると後ろに下がりながら「その、僕達は……」と続ける。と、カノンが代わりにというように前に出た。

「あの、私達はアドリビトムというギルドの者で、精霊の力を借りたいんです」  
「精霊に会わせることは出来ない。早々に立ち去れ」

カノンノの言葉を男性は一蹴。すると今度はカイウスが口を開いた。

「でも、俺達は精霊に聞かなきゃいけない事があるんだよ。話がしたいだけなんだ」

「話だと?……」

カイウスの言葉に男性はふんと鼻を鳴らす。

「そんな嘘は、今まで訪れた者は皆言っていた」

「う、嘘?」

「お前達の目的は、精霊を捕え星晶がある場所を探知させるために利用したいだけなのだろう?」

男性の言葉にエミルが声を漏らすと、彼はエミル達を疑っている口調でそう続ける。

「い、いいえ……そんな事は……絶対に……」

「精霊を知ってるんだな? あんたこそ、何者なんだよ!」

男性の威圧するような言葉に、恐る恐るながらエミルが弁解しようとした所で、カイウスがそう言つて前に出た。

「俺の名はリヒター・アーベント。ここに居る精霊と契約し、この地と精霊を守る者だ」  
男性——リヒターが名乗ると同時、いきなり雪が舞い上がったかと思うと彼の姿がそこから消える。

「っ!?!」

直後カイウスが息を飲んだ。彼はさっきの一瞬でカイウスの側面へと移動、いつの間にか抜いて右手に構えていた剣を振り下ろそうとしていたのだ。

「!」

しかしその速さに反応していたカイが、右手に逆手で握っていた片手剣——エタムで剣を防御。リヒターはふんと鼻を鳴らすと素早くバックステップを踏み、さらに左手に斧を構えた。

「精霊に会いたくば、俺に勝ってみせろ」

「そういう事か。よし、行くぜ! みんな!」

リヒターの言葉にカイウスは行くぜと皆を鼓舞し、剣を構える。それを見てエミルとカノンノも武器を構えた。

「魔神剣!」

「落ちて、ライトニング!」

カイウスとエミルが地を這う衝撃波を放ち、カノンノが上空から落ちる雷撃をリヒター目掛けて撃つ。

「陽流・甲!」

しかしリヒターは右手の剣と左手の斧を交差させて斜め十字に斬撃を放ち、その真空波で魔神剣をかき消す。ライトニングは防げずその身に喰らうものの、僅かに怯む程度の結果に終わる。

「はあああああっ!!」

「！」

しかしそこにカイが空中で回転しながらリヒターに飛びかかり、勢いと遠心力を込めてリヒターを右手に逆手で構えた刀で斬りつける。

「くっ！」

咄嗟に下がったためダメージは免れるがかわしきれずに僅かに斬撃を受けてしまう。しかしカイは手首を回転させると続けて左下から右上へと斬りあげ、リヒターに連続攻撃をしかける。その攻撃もくらくらってしまうが、リヒターは多少のダメージを受けつつも斧を振り上げ、カイの水平に薙ぐような攻撃を自らの剣で受け止めると斧を振り下ろす。

「陽流・丙！」

斧を叩きつけられた箇所から雪山にも関わらず炎が噴き出るが、三発目の斬撃が防がれるのは予想していたのかカイは凄まじい瞬発力で後ろに跳び、その斧と噴き出る炎をかわして雪の降り積もった地面へと倒れ込んだ。

「烈空斬！」

「崩蹴脚！」

「ぐっ……」

と、入れ替わるようにカイウスが剣を構えて縦回転しながら突っ込み、エミルも身体



を捻り体重を加えた蹴りを叩き込む。

「来たれ爆炎、焼き尽くせ——」

さらにカノンノも術の詠唱を開始、それを聞いたリヒターは剣と斧を目の前で交差させた。

「陽流・壬！」

「うわっ!？」

そう叫ぶと同時に、突如水柱が噴き出てカイウスとエミルの行く手を阻む。

「陰流・乙!!!」

「うわあああああっ!!!」

さらにリヒターは斧で叩き剣で突き、トドメにその二本で斬り払って二人を吹き飛ばした。

「——バーストライク!!」

しかしカノンノの詠唱が完了、リヒター目掛けて爆炎が降り注ぎ、爆炎の着弾と爆発がリヒターを包み込んだ。

「よっしゃ、やったか!？」

カイウスが拳を握りしめながら叫ぶ。

「フン……少しはやるようだな」

しかし爆発によつて発生した煙の中からそんな声が聞こえ、直後突風によつてその煙が払われる。そこには雪が解け、薙ぎ払われる程の高熱の爆発があつたにも関わらず多少の傷だけで済んでいるリヒターの姿があつた。

「癒せ、ヒール！」

しかも彼は素早く詠唱し、治癒呪文で自らの傷を癒す。しかも煙の中で使えばいいもののわざと手の内を晒している。それほどまでの余裕を彼は見せていた。

「嘘……」

「実力の差が分かつただろう？ もう一度だけ言う……精霊に会わせることは出来ない。早々に立ち去れ」

カノンノが両手で口を押さえながら眩き、リヒターは彼らを強い目で見ながら威圧するように先ほどの言葉を口にする。

「そうはいかねえ……俺達は、精霊に会わなきゃならないんだっ!!」

しかしカイウスがそれに真正面から言い返し、剣を隣に立つカイに渡す。

「カイ、こいつを頼む」

「……了解」

「すうっ……ガアアアアアアッ!!!」

カイウスから託された剣をカイは受け取り、カイウスはすうつと息を吸うと咆哮す

る。ルミナシアに住む生命はすべからず生命の源たるマナをその身体の中に秘めている。そのマナを解放、すなわち己のリミッターを解除し身体能力や精神力を一時的に高める技法。人はそれをオーバーリミッツと呼ぶ。

「目覚めろ、俺の中の野生の魂!!」

カイウスはそれと共に己の中の野性を解き放つ。その顔は人間のものからクマのようなものに変貌。身体も動物に近いものへと変化した。

「お前はリカンツだったのか……」

リヒターも驚きに目を剥き、カイウスは地面を蹴ると一瞬でリヒターへと肉薄しその拳を振り下ろす。ズガンという音と共に地面が割れるがリヒターは素早い動きでそれをかわしていた。

「なかなかの力だが、当たらなければ意味はない!——」

「だったら私達が援護するまでだよ! フラッシュユティア!!」

「——ぬっ!?!」

リヒターがそう言うのとカノンノが叫び、直後リヒターの真下に光の魔法陣が敷かれたと思うと浄化の光がリヒターを襲う。

「曼珠沙華!!」

「な、なんのっ!」

さらにそこにカイが炎のManaを宿した苦無を投げつけて追撃、しかしそれをリヒターはどうにか弾きながら魔法陣を脱出した。

「うおおおおおっ!!!」

しかしそこにカイウスが突進、リヒターも避けきれんと判断すると剣と斧を構え、直後痛烈な拳撃と剣撃がぶつかり合う。

「だりやああああああっ!!!」

カイウスが力を込めて大地を叩き、その一撃を受けた大地はその身にヒビを入れるだけではなくまるで苦痛に吼えたかのように地響きを起こし、さらにカイウスはそのヒビが入った地面のヒビに手を挿し入れる。

「どりやああああああっ!!!」

そして全身に力を込めて地面をひっくりかえして見せた。

「リカンツの力とはこれほどか……」

リヒターもリカンツの力に驚きながらも力を込めて斧を投擲、その斧がひっくり返された地面を撃ち砕く。

「バーンストライク!!」

「な?!? ぐああああああっ!」

しかし地面を目くらましに爆炎が迫り、リヒターを爆炎が呑み込む。

「へへっ、こつちが本命だよ……」

カイウスが獣人化を解きながらしてやったりな表情で眩き、直後へたり込む。

「ダメだ、獣人化で体力大分持つてかれた……」

「後は任せとけ」

へたり込んだカイウスにエミルがそう言い、剣を構える。カイもその横で自分の刀とカイウスの剣を構え、カノンノは後方支援に徹するつもりなのか大剣を下ろして詠唱の準備をしていた。そしてカイとエミルは同時にリヒターに突進し、リヒターも二人目掛けて突進しつつ、その道中に落ちていた斧を拾い上げる。

「荒れ狂う流れよ、スプラッシュユ!!」

リヒターは走りながら詠唱、魔術の発動という器用な技を披露し、カイとエミルを激流が襲う。

「エミル」

「おう！」

二人は左右に分かれて激流をかわす。

「はあああああっ!!」

「!」

その次の瞬間カイの方にリヒターが特攻、激流でエミルが援護に向かえない間に各個

撃破を目論んでいた。さらに激流はこの雪山の寒さの中で凍り始めており、氷壁を形成。すぐに援護に向かえない状態になっていた。

「陽流・甲!」

「鬼炎斬!」

リヒターの剣と斧のX字を描く交差斬りと、カイの二刀に炎を纏わせながらの十字斬りがまずぶつかりあう。

「陰流——」

「ぐうっ!」

しかしその次の瞬間リヒターは斧でカイの足元を薙ぎ払うように斬り、払い斬りを足を上げてかわしたカイを剣で斬り上げる。

「——丁!!!」

「ぐあああああつ?!」

そして斬り上げたカイを地面から噴き上がる炎が追撃する。が、カイはその炎に悲鳴を上げながらも二刀にその炎を纏わせた。

「飯綱……いや——」

そして炎を纏った二刀を縦に構え、その方向に回転する。

「——火車落とし!!」

炎を纏った二刀を遠心力の勢いも込めて振り下ろす。それをリヒターが剣斧でぎいんつという音を立てて防ぎ、弾き返す。

「陽流・戊！ 陰流・己!!!」

「ぐあああつ!!」

そこに斧を使った回転斬りからその勢いを利用した剣の斬撃、さらに剣と斧を振るつて闇の衝撃波を放ちカイを吹っ飛ばす。

「癒しの力よ、ヒール!」

しかしカノンノが治癒術で援護し、傷の癒えたカイは二刀を手に再びリヒターへと斬りかかる。

「甘い!」

右手の刀の振り下ろしをリヒターは斧で受け止め、右手の剣を突き出すがそれをカイは左手に握るカイウスの剣で受け流す。

「ぬっ!」

そのままガードの隙間について前蹴りを叩き込もうとするがリヒターは咄嗟にバツクステップを踏んでかわし、構えを取り直す。だがカイは既に地面を蹴り斬りかかっていた。

「む!」

咄嗟に剣を振るい防御、斧を振り下ろすがカイはそれを紙一重でかわし、飛び上がる。  
「飛燕連脚！」

空中を回転しながらの回し蹴り、それを受けたリヒターはぐつと唸り声を上げるがカイがこちらに背を向けて着地した瞬間を見計らって剣を振るう。しかしその剣をカイは背中を向けたまま左手に握るカイウスの剣で受け止め、そのまま弾きながら振り返って刀を振るう。

(一)いつ、もう俺の剣技に対応しているだ?!……なんとという戦闘センスだ……)

リヒターはカイの、相手の動きに瞬時に対応する直感に少し感心しながらも素早く距離を取り、詠唱を開始する。

「歪められし扉、今開かれん。ネガティブゲイト！」

叫ぶと共に開かれる闇の異空間。しかしカイは俊敏な動きで異空間から脱出すると刀を地面に突き立てた。

「土竜閃！」

「アクアエツジ！」

叫び、大地のManaが解放されると共にリヒター目掛けて突き出ていく岩の槍、しかしリヒターはそれを武器を使うまでもなく水の刃で粉碎していく。

「そこー！ フラッシュユティア!!」



「!?」

しかしその瞬間カノンノの魔術が炸裂、光の魔法陣がリヒターの真下に敷かれ吹き上がるような光の力がリヒターを襲う。

「ぐ……この程度……」

「今だ！ エミル!!」

「なっ!?」

リヒターが術を耐えきろうとしていた瞬間カイウスの声が響き、リヒターははっとなった目で、ようやくスプラッシュがこの寒さで凍った事により発生した氷壁を見る。その瞬間氷壁が何かに撃ち砕かれた。

「遊びは、終わりだ!」

撃ち砕かれた氷壁の中からエミルが飛び出し、リヒター目掛けて突進し剣を振り上げる。

「うおおおおおおつ!!」

人の限界を超えたかのような速度の連続斬り、それをエミルは叩き込んでいた。そして一閃と共にリヒターをすり抜けるように彼の背後に回り込む。己のmanaを解放、己の中のリミッターを解除し身体能力や精神力を一時的に高める技法——オーバリーミッツ。その最中、さらにその力を一点に集中して解き放つ事でのみ使える、奥義を超える

奥義。

「この一撃で、沈めっ！ 魔王！！ 獄炎波あっ！！」

人はそれを、秘奥義と呼ぶ。

「ぐああああああああっ！！」

エミルが地面に剣を叩きつけると共に発生したエネルギーの大爆発がリヒターを吹き飛ばし、この激戦によってほとんどの雪が溶けるか吹き飛ばかでもはや地表が見えている山の頂上に叩きつけられた。

「くっ……」

地面に叩きつけられたリヒターはくつと声を漏らす。が、すぐに起き上がると吹っ飛ばされていてもなお握りしめていた剣を杖にして立ち上がる。

「まだだ、俺はこの山の精霊の守護者として……精霊を私利私欲のために使おうとする者に負けるわけにはいかない……」

「ち、違うんです！ 僕達はその、本当にただ話がしたいだけで……」

リヒターの声に、緑目の平常モードに戻ってしまったエミルが慌てた様子で説得を試みる。

「そこまでよ。闘気を収めて、リヒター」

そこに氷のように透き通った、美しい声が聞こえてきた。

「そのヒト達は、敵ではないわ」

そう美しい声が続いた後、リヒターのすぐ横に吹雪が渦巻いたかと思うとその中から青色の髪を長く伸ばしたスレンダーで美しい女性が姿を現す。

「私は、氷の精霊セルシウス。あなた達が知りたいことに答えるわ」

「あーええつと……じゃあまず世界の始まり、創世の時についてかな」

美女——セルシウスの言葉にカイウスがそう、まず最初に聞きたいことを尋ねる。

「創世の時……」

その言葉に彼女は黙り込み、少しすると首を横に振る。

「ごめんなさい。それについては答えられないわ」

「ええっ!? そんなぁ……」

セルシウスの言葉にエミルが残念そうな声を漏らす。と、セルシウスは「だって、精霊にも世界の始まりの時は分からないんだもの」と続けた。彼女が言うには精霊という存在はマナを自然界の現象に作用させるために、世界が創造された後に生まれた存在とすること。それにカノンノが「自分が生まれる前の事は分からないよね」と納得したように頷く。

「そして、星晶により封じられていた『あの存在』の事しか知らないわ」

「あの存在? なんだそりゃ?」

セルシウスの眩きを聞いたカイウスが首を捻る。しかしセルシウスは再び「私達精霊にも分からない」と告げ、「精霊が生まれる以前からこの世界にいたもののように」と続ける。

「精霊ですら届かない次元にいる、何か歪んだ力……そして、それが大きな災厄となる事を、本能的に察知しているだけなのよ」

「大きな災厄になる、歪んだ力……それを、星晶が封じていたの？」

セルシウスの話を聞いたエミルがそういうとセルシウスは首肯。しかし人々が星晶を採り尽くした事で封印は解かれてしまった、と話す。

「だから、世界樹は“あなた”を遣わせたのかしら？」

「……？」

セルシウスがそう眩いてカイ達の方を見る。それにカイはカイウスとエミルの方を見た。

「え、俺じゃないぜ？」

「ぼ、僕でもないと思うけど？……」

それに二人はふるふると首を横に振る。と、セルシウスはくすつと笑ってカイに手をかざした。

「あなたの事よ、デイセンダー」

「……」

セルシウスの、カイを真つ直ぐに見ながらの言葉にカイは沈黙。

「ディツ……」

その言葉にカイウスが絶句、

「ええええええええええつ?!?!」

直後カイウスとエミルの絶叫が頂上で響き渡る。

「え……え?……」

その後ろでカノンノは急展開についていけない様子で目を丸くしていた。

「そういう事か、セルシウス……こいつがディセクターとはな」

「世界樹の福音を受けし、光纏うもの……わたしも、あなたに与して力を貸すわ」

セルシウスがカイへの助力を宣言、「あの存在が、どんな災厄かは分からないし、何を

目的としているのか、私達精霊にも分からないけど……」と呟くと、カイは少し黙った。

「あの存在……もしや、ラザリスの事じゃないのか?」

「ラザリス?……」

カイの呟きにセルシウスはそう呟き、「そうね」と呟くとリヒターに目を向ける。

「ねえ、リヒター。この地を守るだけでは済みそうにないみたいだわ」

「そのようだな」

セルシウスの言葉にリヒターも頷く。それから再びセルシウスはカイを見る。

「デイセクター。私もあなたについて行くわ。解き放たれた災厄より、この世界を守るために」

「……ああ」

セルシウスの言葉にカイは頷く。

「案内しろ」

「え？」

「お前達の拠点へ案内しろ」

「は、はいっ!!……」

その横ではリヒターがエミルに（本人に自覚はないだろうが）拠点への案内をしろと脅しをかけていた。

「まさか、あなたがデイセクターだったなんて……」

バンエルティア号に戻り事情を説明するとアンジュはカイを見て絶句する。それにカイが黙って目を細めるとアンジュはすまなそうに笑った。

「ご、ごめんなさい。なんというか……あまりにも驚いてしまって、上手く言葉が出てこ

ないの……」

「んつと……でも、それなら納得できることもあるんじゃないですか？……その、ジョアンさんや暁の従者の人、どっちも元に戻したのはカイなんだし……」

アンジュが驚いているとカノンノがそう言い、アンジュもそうね。と頷く。

「つてもなあ。取り立てて、俺達と違うところなんてないのになあ……そこぐらいだろ？ 俺達との違い？」

「という事は、それがディセンダーの力……ということなのかしら？」

カイウスが頭をかきながらそう言い、その生物変化現象を元に戻すのがディセンダーの力なのかとアンジュは推測する。

それからカイやアンジュ達は甲板へと出る。というのも本来セルシウスにも部屋を用意しようとしていたのだがセルシウスは少しでも涼しい場所がいいのか甲板でいいと言ったからだ。

「さて、セルシウス。色々、あなたから話を聞きたいんだけど」

アンジュはそうセルシウスに切り出し、まず星晶に封じられていた災厄、すなわちラザリスの事を尋ねる。

「そちらの話も、エミルに聞いたわ。あなた達が、ラザリスと呼ぶ者。それがきつと、災厄でしょうね」

セルシウスも災厄Ⅱラザリスだとして話を進めるが、何故ラザリスがルミナシアに封じられていたのか、どのような災厄が起きるのかという事はセルシウスも知らないと首を横に振る。

「ともかく、星晶の採掘が原因だったわけね」

リタがそう言い、ため息と共に「知らなかったとはいえこんな事態を引き起こすなんてね」と漏らす。

「そういえば、この世の創世に立ち会った者がいたらしいんだけど」

と、セルシウスが唐突にそんな事を言う。それにリタが「そんなヒトがいるわけ？」と尋ねる。それにセルシウスはもちろん創世に立ち会ったのはヒトではない。しかし精霊でもない。と答える。その存在から創世の時について聞いたものがヒトの祖である。とセルシウスが続けるとアンジュは話が長くなりそうだと察したのか話を聞くのはリタに任せる事にし、彼女はカイを連れて船内へと戻っていく。

「えーっと、セルシウスさんとリヒターさんをギルドの団員に登録してと……」

アンジュはセルシウスとセルシウスをギルドメンバーへの登録する作業をしており、カイはその近くで佇んでいた。

「あ、あの……」

「ん？ ああ、カノンノ」



おどおどとした様子で声をかけるカノンノにアンジュが微笑む。

「あの、カイに用事があるんだけど……」

「ああ……」

カノンノの言葉にカイは眩き、カノンノは彼の前に立つ。

「え、えつとね。その……デイセンサーだって知ってその、驚いたよね？ 私もね、なんていうか……まだ整理しきれないんだ……戸惑ってるっていうか……」

カノンノはとぎれとぎれながらも頑張ってカイに伝えていく。

「あのね、でもね。カイは私の仲間だから！ デイセンサーとか、そういう前に、このアドリビトムの仲間なんだからね！ それで、仲間は絶対に守るんだからね！」

「！」

ぎゅつとカイの手を取って握ってカノンノは熱弁、カイは驚いたように目を丸くする。

「う……」

次の瞬間、カイの頭の中で何か妙な感覚が起きる。そして自らの中で何かが弾けたような感覚を彼は覚えた。

「ふっ……」

「え？ わっ!？」

カイはカノンノに握られていた手を離れたかと思つた瞬間、ぐしゃぐしゃとカノンノの頭を撫で始めた。

「カ、カイ!？」

「当然だろ。デイセンドーだろうがなんだろうが俺は俺だ……そして、アドリビトムは俺の居場所であり、皆は大事な仲間だ」

「ふ、ふえ!？」

いきなり様子が変わつたカイにカノンノは慌てたように彼の顔を見上げる。

「デイセンドーがどうだとかに興味はない……俺は俺のやりたいように仲間を、皆を守ってみせる」

カイは、今まで見せた事のない不敵な笑みを浮かべ、今にも吸い込まれそうな深い緑色の瞳に光を宿してカノンノを見下ろしていた。

## 第十六話 王からの依頼

アドリビトムの甲板。ここでは現在カイとレイがそれぞれ刀と剣を手に向かい合っていた。アドリビトムでよく行われている自主訓練、その中にある模擬戦だ。立会人はクレスが務めている。その他にもロイドやアスベルなどアドリビトムのメンバーの中でも剣士や格闘家メンバーが観戦にやってきていた。

「……始めっ!」

クレスが叫ぶと共にカイが走り出し、レイは剣——片手用の片刃で真っ直ぐな刀身のエタムというものだ——の切っ先を地面につける。

「魔神剣!」

剣を振るうと共に放たれる地を這う衝撃波、カイはそれをジャンプでかわしながら回転、その勢いと遠心力を利用し、右手に逆手に握った刀——こちらもレイと同じエタムだ——を振り下ろす。が、レイは魔神剣を放った勢いのまま、もう一度くるんとダンスのターンステップを踏むように回転しつつ、再び剣の切っ先を地面につける。

「——双牙!!」

「ぐっ!?!」

刀がレイに届かないギリギリの位置で、再び放たれた地を這う衝撃波がカウンターの要領でカイに決まる。その衝撃波にカイがたたらを踏むとレイは素早く左手で、腰の後ろにマウントしていた銃を抜き銃口をカイに向けた。引き金を引くと共に銃声が響き銃弾が飛び出す。カイは素早く右に飛んで銃弾をかわし、懐から取り出した苦無を投げつけてレイの持つている銃を弾き飛ばした。

「チツ」

レイは弾き飛ばされた銃の方に僅かに目をやって舌打ちを叩くが、その隙をついたカイが刀を順手で両手に握って斬りかかってきたためすぐそちに目をやって右手に握っていた剣を握り直し、ぶつけ合う。その時カイの刀を炎が覆った。

「鬼炎斬！」

熱にレイが怯んだところに一気に押し切り、横一文字に炎を纏った刀を振るう。ギリギリで下がったため浅く入った程度とはいえ熱を持った刃による痛みと傷口を走る熱にレイは顔を歪めるが、鏝迫り合いと同時に後ろにやっていた左手で背負っていた盾——マーベルシールドを握るとそれを前に出す。その次の瞬間、レイの目の前にいたカイの姿が消え、同時に盾からキンツツという金属音が響きその直後レイの横を風が走る。

「影走斬……防がれたか」

後ろの方から聞こえるカイの声にレイは無言で振り返る。その時、カイはさつき収め

ていたはずの刀を抜いており、それを再び鞘に収めていた。

「抜刀……俺の技を自分の技に応用したのか……」

カイの使った技を見たアスベルが驚いたように呟く。しかし観客がそんな事を呟いている間にレイは自分に背を向けているカイに躊躇いなく斬りかかった。

「甘い」

しかしカイは振り返りながら刀を鞘から僅かに抜いてその剣を防御し、逆に左足で回し蹴りを胴目掛けて叩き込む。小竜の魂が宿ると言われる脛当てを付けた足で放たれたその蹴りはレイの纏う東方の兵士が着用する鎧——甲冑に阻まれるがその衝撃でレイの動きが僅かに鈍る。その隙に彼は宙返りで距離を取った。籠手と脛当てこそ小竜の魂が宿ると言われている籠手と脛当てを使っているものの胴体を覆うのは功夫使いが着用する衣。身軽さで言えば東方の兵士が使う甲冑で顔を除く全身を覆う——なお頭部は双方小竜の魂が宿ると言われる兜で守っている——レイを圧倒的に上回っていた。

カイは宙返りで距離を取ったかと思うとその次の瞬間には素早く地面を蹴り、一気にレイへの距離を詰める。そして再び鞘に収めていた刀を引き抜き、鋭い抜刀を放つがレイは寸前で盾を構えその刃を防ぐ。刃を返してさらに連続斬りを見舞うがレイはその全てを盾を小刻みに動かして防ぎ、反撃に剣を突き出す。しかしカイは鞘を剣に当てて

受け流しつつ剣のある方向とは逆に動いて距離を取り、仕切り直す。互いにメイン武器である剣、刀は届かない。カイが苦無を投げつけても確実にレイは盾で防御できる、レイも落とされた銃を拾えば対抗できるがそんな隙を見せれば一瞬で距離を詰められ斬り伏せられる。そんな絶妙な距離を二人は取っていた。

「！」

先に動いたのはカイだった。彼は鞘に収めたままの刀を勢いよく振るうと遠心力を利用して鞘をレイに向けて抜き飛ばす。それをレイが盾を突き出して防御している隙をついてカイは機動力を生かして背後に回り込む。しかしレイも盾で鞘を弾きながら半身だけ振り返し、剣を掲げると共に右足を踏み込み身体を回転させて構えを取る。

「剛・魔神剣!!」

「チッ!」

剣を振り下ろした地点から巨大な衝撃波が上空目掛けて壁のように生み出され、カイはもう止まれないが咄嗟にジャンプしてその衝撃波をかわし、空中で回転する。

「飯綱落とし!」

「くっ!」

回転の勢いを利用して斬りかかり、レイは剣を振り下ろした反動でかわせないものの咄嗟に盾を突き出してその刀を受け止める。

「せいっー！」

「ぐっ!?!」

そのままぶん殴る勢いで押し、空中にいたため踏ん張れないカイを押し飛ばす。

「はあああっ!!」

そして体勢を立て直すと、地面に着地しつつも押された勢いで若干体勢が戻せていないカイに躊躇いなく斬りかかる。袈裟懸けに斬り下ろし、横に薙ぎ払い、上段から振り下ろす。それをカイはステップでかわし、それだけでかわしきれないものは刀で受け流していく。そしてレイの右下から左上へとテニスのフォアハンドのように斬り上げるのを刀で受け流し、だがその勢いにカイの刀も流されてしまう。が、その時カイはチャンスとばかりに左手を腰の後ろにやり、そこに差していたナイフ——稲妻のような形状の刃をしているクリスというものだ——を引き抜くところが空きになっているレイの右脇に突き刺さると構える。

「ぐっあっ?!?!」

が、突き刺す直前カイの右側頭部に衝撃が走り、カイは吹っ飛ばされると船の床に叩きつけられる。頭が少しくらくらしながらもカイは立ち上がってレイを見ると彼女は握りしめた右拳を左に振り切っていた。どうやらカイが自分を刺そうとしているのに気づいたレイは咄嗟に剣を離して拳を握り締め、勢いよく裏拳を叩き込んだようだ。と

言ってもそのせいでレイの剣は吹っ飛んで観戦者の一人であるスタンが「うひゃあつ!?」と悲鳴を上げながら剣を抜いて上空に弾き、隣に立っていたロイドが二刀を使って落ちてきた剣を器用に受け止める羽目になっていたのだが。ちなみに殴られた拍子にカイの手から刀も飛び出し、そっちは誰に当たる事もなく船の床にカシャンツと音を立てて落ちている。

「チツ……」

まだ少しくらくらしつつもカイは立ち上がると軽装&武器がナイフのみになったため機動力を生かして俊敏な動作でレイ目掛けて突進、ナイフを突き出すがレイはそれを右手に持ち替えた盾で防御する。突き出したナイフと防いでいる盾という形だがまるで鏢迫り合いのような雰囲気二人は見せており、その目は火花が散っているというか完全に睨み合っていた。

「ふっ」

レイが脱力してナイフを外側に受け流し、盾を振りかぶって鈍器のように使いカイに殴り掛かる。

「甘い」

しかしカイは左手を懐に入れて何かを取り出すとレイに投げつけ、レイの額に当たると思うとその何か——玉から煙が勢いよく噴き出る。煙玉だ。



「ぐっ!？」

超至近距離から煙が噴き出してきたレイは怯み、さらに煙を吸ってしまったのかごほごほと咳き込む。

「隙あり!」

「きゃあっ!？」

観客たちが見たのは怯んだレイにカイが素早く足払いをかけたところまでだった。その先からは地面に落ちて転がった煙玉から噴き出した煙がカイとレイを隠す。

『……』

そして風で煙が吹き飛んだ後、その場にいた観客全員が無言になる。

「俺の勝ちだ」

彼らの視線の先ではカイがレイに対しマウントポジションを取って首筋にナイフを突きつけていた。それにレイもチツと、凄まじく苦々しげな表情で舌打ちを叩く。

「しよ、勝負あり……で、カイ。早くどいた方が……」

「?。」

クレスが勝負ありと宣言した後カイにそう言い、それにカイとレイは首を傾げる。

「あんだ、今の状況客観的に見たら明らかに女の子押し倒してるわよ……なんか、見てて物騒」

ルーティが呆れたようなというか苦笑交じりにそう言い、しかし理解できてないのか二人は「ふーん」と言っただけでカイはレイの上からどいて刀や鞘、苦無等を拾いに行き、レイも剣と銃を拾いに行く。

「……なんかあの二人、似た者同士よね……」

「そうですね……」

なんか二人揃って平然としているというか無関心というか、そんな姿にルーティとクレスが苦笑を漏らす。

「すまない、少し時間いいかな？」

「あ、ウツドロウさん。どうしたんですか？」

と、そこに一人船内から来客が来た。それにスタンが首を傾げるとウツドロウは真剣な目つきを見せる。

「いや、実は先日からのギルドに推薦しようと考えていた者がいてね。彼がこの近くに来ているという書簡が国から届いたのだが……どうやら彼は今ある手配犯を追っているようだ……これを見てくれ」

ウツドロウはそう言って一通の手紙を見せ、スタンがその手紙を受け取ると目を通す。

「……あ、これって」

「へー。あいつが一人で手配犯を追ってるの?」

「ああ。書簡によると手配犯はアルマナツク遺跡に潜伏しているようだ。すまないが、彼を迎えに行くついでに援護に向かつてくれなかな?」

スタンが呟き、後ろから手紙を覗き込んだルーティがそう呟くとウッドロウが説明の後お願い、それにスタンが大きく頷いた。

「分かりました! 俺に任せてくださいい!」

「ま、援護なんて必要ないだろうけどね」

「……面白そうだ。俺も行つていいか?」

「ああ! きつとカイも驚くぞー!」

「あいつ、口は悪いけど実力は確かだしね」

スタンとルーティがクエストに行く事を決めるとカイも同行を志願、スタンはこくと大きく頷いて無邪気に微笑み、ルーティはにししと笑いながら憎まれ口を叩く。それにウッドロウも頷き、カイ達が行く事を書簡で伝えておこうと言うと別のメンバーの方を向き直す。

「それと、こちらはごく個人的な用件になってしまうのだが……私の恩師の大切なお孫さんが、どうやら私の後を追って単身旅に出てしまったらしく、恐らく霊峰アブソールにいるのではないかということなのだ。頼む、一緒に探してもらえないか?」

ウッドロウは頭を下げてください。それにロイドが一番に「ああ！」と頷いた。

「任せろよウッドロウ！ ドワーフの誓い第二番、困っている人を見かけたら必ず力を貸そう！ だ！ 手伝うぜ！」

「俺も手伝います。騎士として、民を守るのは務めです」

「感謝する」

ロイドとアスベルが同行を志願し、ウッドロウは感謝の言葉を述べる。

「私も共に行こう」

と、さらにレイも同行を志願した。

「先ほどの模擬戦の敗北……さらに腕に磨きをかけねばならん。そのついでにはなるだろう」

「……そうか。感謝するよ、レイ君」

特訓ついではいえ搜索に参加してくれるというレイにウッドロウは再び感謝の言葉を述べる。

そしてアンジュにクエストとして登録をお願いし、バンエルティア号を走らせてカイチームはアルマナツク遺跡に、レイチームはアブソール霊峰へと向かうのであった。

そして、場所は霊峰アブソールへと移る。

「ブレイズバレット!!」

ドガガガガガッと連続的な銃声が山中に響き渡り、燃え盛る弾丸が炎に耐性の無い雪山の魔物を蹂躪する。しかしその銃弾を潜り抜け、一体のアイスウルフが銃弾を放つた者——レイに牙を剥く。

「抜砕牙!」

しかしその牙がレイに届く前にウッドロウがアイスウルフを切り捨てた。さらに近くでは残る魔物を斬り捨てたロイドが二刀を上投げて、落ちてきた刀を取ると共にくるくると回転させながら片方ずつ鞘にしまうという曲芸を見せ、アスベルがその姿に感心したように「おお」と声を漏らしながらこっちは実直に納刀する。

「……助かるよ、レイ君」

「気にするな。ところで、探し人とは?」

「ああ……先ほども説明をしたが、私の恩師のお孫さんだ。とても活発で良い子なのだ。が、何分方向感覚に難があつてね……行き先で心当たりがあるというのはこの山だという事なのだ」

ウッドロウは心配そうな様子で呟く。それにロイドも頷いた。

「確かに心配だな。よし、手分けして探そうぜ!」

「と言っても、一人だけだともしもの事があつた時に危険だな……ここは二人一組で動

くことを提案します」

「それで行こう」

ロイドが手分けをして探すという案を出すとアスベルが一人だと危険なため二人一組で動こうと補強する。それにウツドロウも領くとロイドがすぐ隣に立っているアスベルの肩を掴んだ。

「んじや、俺とアスベルで行くよ！」

「分かった」

「俺達であつちを探すから、ウツドロウ達はあつちを探してくれ！」

「うむ、気をつけてくれ。また後程、この場所で落ち合おう」

「分かりました！ 陛下もお気をつけて！」

ロイドとアスベル、ウツドロウはそう話し合い、ロイドとアスベルが雪山に消えていくとウツドロウもレイの方を振り向き、「とにかく、順番に回ってみよう」と彼が言うときも領き、二人も雪山に住む魔物を倒しながら山に分け入った。

そして、少し山奥に入る。ウツドロウはきよるきよると用心深く辺りを見回し、人の気配がないと判断すると気落ちした表情を見せる。

「……にもいない、か……チエルシー……」

「……それが、探している者の名か？」

「ん？ ああ……そういえば教えていなかったか。先生がとても可愛がっている自慢の教え子でね。筋がよく、弓の腕前は確かだ」

ウツドロウの眩きにレイが尋ねると、ウツドロウは探す相手の事も教えていなかったことに気づいたのか申し訳なきように笑いながら探し人——チエルシーの事を話す。幼いながらもとてもしつかりした子であり、今回の依頼人であるチエルシーの祖父でありウツドロウの師である者に、かつて弓の教えを本格的に請うていた頃は、チエルシーには祖父を取られてしまふと思つたのかとても嫌われたものだ。と懐かしげに彼は話す。

「……だが、いくら大人びているように見えても、まだ少女であることに変わりはない。今頃、さぞ心細い思いをしている事だろう。早く見つけてあげなければ……」

「……」  
ウツドロウは真剣な表情で雪山を進んでいき、レイも少し黙つた後その後を追いついて行つた。

「うう……」

更に雪山を進んでいくと突如、そんな泣き声のような声が聞こえてくる。

「この声は……」

ウツドロウがはっとした様子で声の方に走る。

「ぐすつ……」

その先には、桃色の髪を頂点で二つ分けに結んだ少女が泣いているような様子で項垂れていた。

「もうだめ……どこもかしこも、似たような景色ばかり……おじいちゃん……ウツドロウさまあ……」

「チエルシー……」

その少女に向けてウツドロウは雪をかき分けるかのような勢いで走り、声をかける。その呼び声に反応した少女は振り返ると共に驚きに目を見開いた。

「心配したよ。怪我はないかね？」

「ウツドロウさま…… どうしてここに？」

ウツドロウの、相手を安心させるかのような笑顔での言葉に少女——チエルシーが驚きのままに叫ぶ。それにウツドロウが先生、つまりチエルシーの祖父が手紙で知らせてくれたのだと説明。迎えに来たのだと言う。

「おじいちゃんが……もう、大丈夫だって言ったのに、また子ども扱いして……」

「そう邪険にするものではないよ。先生は、チエルシーを大切に思っているだけなのだ。」



とにかく、無事でよかった」

「ウツドロウさま……」

ウツドロウから説明を受けたチエルシーはぶうと頬を膨らませるが、ウツドロウは彼女を諭すようにそう言い、次に安心したように微笑む。それにチエルシーも感激したように声を漏らした後、ぺこりと頭を下げる。

「ごめんなさい、ご心配をおかけしました」

「分かってくれればいい。失敗は反省として、次に活かすためにあるのだからね」

チエルシーの謝罪にウツドロウはうんと頷き、次にレイを見る。

「改めて紹介しよう。レイ君、この子がチエルシーだ」

「……よろしく頼む」

「あ、もう一人いらつしやったのですか？ よろし……」

ウツドロウがレイにチエルシーを紹介、レイも挨拶するとチエルシーはそこでようやくレイに気づいたように彼女に顔を向けて挨拶しようとする。が、チエルシーはスタイル抜群の美女たるレイの姿を見ると絶句した。

「？」

「レイ君は私が世話になつているギルドの仲間だね。まだ若いが実力は確かだ。スタン君達と共に私が全面的に信頼を置いていっていると云つていい仲間の一人だな」

その様子にレイは首を傾げ、ウッドロウは微笑を浮かべて説明をすると「紹介も済んだところでギルドに戻ろうか」と言う。「チエルシーの祖父にも彼女が無事であったことを報告せねばならない」と話して彼らは麓まで戻る。そこで丁度戻ってきたロイド達と落ち合つてチエルシーを発見したことを報告して今回の協力への感謝を述べ、彼らは雪山を下りていった。

さて、カイ達がアルマナツク遺跡に向かった辺りに時間を戻そう。

カイ達はアルマナツク遺跡へとやってきてから、以前カイ達が暁の従者と戦つた遺跡の最奥地へと向かつていた。

「万策尽きたようだな」

と、遺跡の奥の方からそんな声が聞こえてくる。それにスタンが「この声は！」と嬉しそうに声を出すと走り出し、ルーティもふつと笑うと走り出す。カイもその後を追つた。そしてカイ達がやってきたのは遺跡の最奥地。そこには黒髪に青い服という華奢な身体の、背を向けているため男性か女性か判断が出来ない人物が立っていた。それと向かい合う形で、顔全体をマスクで覆い、出刃包丁のような形の剣を持った巨漢の男が立っている。

「もう逃げ場はない、大人しく投降しろ」

「誰に向かつて言つてやがる？ そんな細っこい腕で、本気で俺様をどうこうできると思つてんのか？ んどつからどう見たつて、女みてえなナリしやがつて！ あんま俺様を舐めんじゃねえぞ!!」

背を向けている人物——声から見て恐らく男性、つまり少年だろう——の言葉に巨漢の男がその体軀に似合う野太い声で威圧するような声を出す。と、少年はフツと鼻で笑つた。

「……どうやら痛い目に遭わなければ、自分の身の程もわからないらしい。おまけに、致命的に悪いのは頭だけではないようだ」

「……あア!？」

「安心しろ。貴様の収監先には、腕のいい眼科医が常駐している場所を選んでやる」

「な、なんだとつ!？ てめえ!!」

少年は挑発するように男性に向けてそう皮肉を放つ。それに乗つたのか男性の目が血走つた。

「リオン!! 助けに来たぞー!!」

「!？」

そこにスタンが声を張り上げるとリオンと呼ばれた少年は驚いたように振り向き、スタン達を見るとあからさまにぎよつとした様子を見せる。

「おらあつ!!!」

「!」

突然目を離れた隙をつき、男は出刃包丁のような剣を手に突進すると勢いよく振り下ろす。が、リオンと呼ばれた少年は咄嗟に身体を引いてかわし、男性が次に首を狙って剣を横に薙ぎ払うがそれは姿勢をひくくしてかわす。

「ふんっ!!!」

「ぐはああつ!」

そして勢いよく蹴りを放つとその一撃が巨漢である男性を吹き飛ばして遺跡の壁に叩き付け、そのダメージによつて一瞬で身体を自由を奪う。一瞬、それで片が付いた。そして少年——リオンは部下なのだろう年上の男性に男を連れていくように指示をし、男が手枷を付けられて連行されたのを見届けた後、スタンをギロリと睨みつけた。

「スタン、貴様——」

「ひっさしぶりだなーリオンー!!!」

「——ぐぶつ!?!」

しかしその口から皮肉か嫌味か怒号が発せられる前にスタンは思いつきりリオンをハグ、結果的にその口が塞がれることとなりリオンはじたばたと暴れる。なんだろうかとつても懐いている大型犬とその飼い主みたいだ。そしてリオンはスタンに至近距離

から打撃を叩き込み、スタンを無理矢理引き離してからカイを見てフンと鼻を鳴らす。「ウツドロウの言っていたカイというのはお前の事だな……」

「ああ」

「いいだろう。話くらいは聞いてやる。ただし——」

リオンの言葉にカイは頷き、リオンは再びフンと鼻を鳴らすとそう言つて突如、さつき巨漢の男との戦いでは使っていなかった剣を左手に抜いて構え、さらに右手にナイフも逆手で構える。

「——それはお前の実力の査定が済んでからだ」

「！」

「行くぞ！」

リオンの言葉を聞いたカイは咄嗟に鞘に手をやり、その瞬間リオンが声を上げてカイに襲い掛かった

「空襲剣！」

右手に握るナイフでの突進突きから後ろに跳ね上がりながら斬り上げる。しかしカイは突進突きを受けつつ後ろに下がる事で斬り上げをかわした。そして前傾姿勢を取り、刀の鞘に手をやる。

「影走斬!!」

地面を勢いよく蹴り、その反作用でリオン目掛けて突進する。が、カイはリオンの口から呪文が唱えられているのに気づいた。

「大地の壁よ！ ストーンウォール!!」

「っ!!」

大地のマナが空中に凝縮、巨大な岩が形成されてリオンの目の前に落ちる。カイは寸でで止まり押し潰されることは回避したがその岩が砕けた瞬間岩の向こうから再びリオンが斬りかかる。

「くっ!!」

カイは咄嗟に剣を横に一閃するがリオンはそれを姿勢を低くしてかわし、そのまま姿勢を上上げる勢いでジャンプし、サマーソルトキックをカイに叩き込んで彼を空中に弾き飛ばす。そしてサマーソルトから着地した後、リオンも剣を手にジャンプする。

「飛燕連斬!!」

「っ!!」

宙を舞い踊るかのような斬撃、カイはそれを刀を盾にして受けるが、リオンの右手に握るナイフによる斬撃が終わった後、リオンの左手に闇のマナが集中する。

「デビルスピアー!!」

「ぐあっ!!」

闇のManaで出来た小さな槍が投擲され、カイはその槍を防げずにうけてしまい苦しげな声を出す。さらにリオンはデビルスピアを投擲した勢いを利用して蹴りを叩き込み、カイは地面に叩きつけられる。

「この程度か？」

リオンはナイフを腰の鞘に収めて左肩を右手でトントンと叩きながら皮肉っぽくそう言う。が、カイは手を使うことなく跳ね起きて再び刀を構える。

「そうでなくてはな」

その姿を見たリオンも再びナイフを抜いて構えを取る。そしてリオンは再び詠唱を始め、カイはその隙を突こうと刀を鞘に収めたまま突進する。

「黒曜の輝き、快速の槍となり、敵を討つ！」

「影走斬!!」

リオンが詠唱しているところにカイは再び高速で接近、抜刀の勢いを込めた居合斬りを見舞うがその斬撃を間一髪でリオンは後ろに大ジャンプをしてかわす。

「覚悟はできたか？」

カイを見下ろしながらそう問うリオン。その左手には先ほどのデビルスピアとは比較にもならない巨大な闇の槍が握られていた。

「デモンズランス!!!」

そしてカイ目掛けて闇の槍を投擲、その槍こそカイはかわすがその瞬間槍が大爆発を起こし、ドーム状の闇の爆発がカイを呑み込んだ。

「ふん……」

リオンは鼻を鳴らして剣を構え、着地してから追撃を試みようとする闇の爆発の中にある人影に目を凝らす。

「……!?!」

人影、と思っていたのは人くらしいの大きさと太さの丸太。変わり身の術だ。それに気づいたりオンは周りを見回すが、その次の瞬間背後に気配を感じる。

「ぐはあっ?!?!」

その直後背中に衝撃が走り、空中で身動きが取れないリオンは吹き飛ばされ地面に叩きつけられる。

「曼珠沙華!!」

「っ!?!」

直後そこに苦無が飛び、リオンは転がって苦無をかわすが地面に着弾した苦無が爆発したかのように炎を放つのをみるとその顔に汗が一筋浮かんだ。カイはさっきのデモンズランスをかわした上でリオンを惑わす餌として丸太を変わり身に置き、デモンズランスの爆発に隠れてリオンの背後に回っていたのだ。



「飯綱落とし！」

さらにカイは空中から縦に回転して勢いをつけ斬りかかる。それをリオンはバックステップでかわすが着地と共にカイは一気に斬りかかった。

「フッ！」

「チッ！」

左下から右上へと刀の斬り上げ、リオンはそれを後ろにステップを踏んでかわすがその直後カイは左足を踏み込み、左手に逆手に握ったナイフでリオンの首を狙い追撃を仕掛けた。

「くっ!？」

咄嗟に身を反らして攻撃をかわし、そのままバク転で距離を取りながらリオンは詠唱を進める。

「ストーンプラスト！」

「苦無閃！」

そして着地と同時に魔術を発動、大地のManaによって形成された石がリオンの周囲に浮かび、弾丸となってカイに襲い掛かる。しかしカイは臆せずによりオン目掛けて突進、石の弾丸を苦無で打ち落としながらリオンへの距離を詰める。そして再び二人の剣がぶつかり合った。

「月閃光!」

「鬼炎斬!」

リオンが左手の剣を振り上げるとカイも炎を纏った刀を両手で振り下ろして對抗、片手の上に相手は振り下ろしということもあってリオンが押し負ける。

「まだだ!」

しかしリオンの鋭い回し蹴りがカイに突き刺さり、カイは踏ん張って耐えるものの一瞬硬直してしまう。

「虎牙!」

そこにリオンが右手のナイフを振り上げながらカイを斬りつけ、飛び上がる。

「——破ぞ!」

続けて左手の剣を振り下ろさんと構える。が、その次の瞬間剣が振り下ろされるより早く、リオンの腹に炎を纏った蹴りがめり込んだ。

「鬼炎——」

「ぐふっ!」

カイが足に炎のmanaを集中、燃え盛る蹴りを放ったのだ。しかもその蹴りはさらに続く。

「——連脚!!」

「がはあっ!？」

蹴り落としにリオンは再び地面に叩きつけられる。が、その直前ギリギリで受け身を取ってそのまま跳ね上がった。

「ふ……」

リオンはさっきの蹴りの乱舞の中で切ったのか、口から血を垂らしながらふつと笑う。

「まさかこの僕に一瞬とはいえ本気を出させようかと思わせるとはな……褒めてやる。褒美に……この技で決めてやろう」

リオンは双剣に炎と闇のマナを纏わせ、カイも刀を構え直す。

「塵も残さん!!」

「はいそこまでっ」

リオンが叫んだ瞬間、そんな声と共にリオンの頭が何者かにはたかれた。スコンツという音と共に炎と闇のマナが消え、リオンは自分をはたいた相手——ルーティを睨む。

「貴様!!」

「そこまでやりや査定とやらは充分でしょ?」

「なあなあリオン! カイの実力ってどうだ? 強いだろ!？」

睨むリオンに対し呆れたように言うルーティと目をキラキラさせるスタン。その二

人を見てリオンはふんと鼻を鳴らし、横槍のせいで戦意をなくしたか双剣を鞘に収めた。

「まあ……それなりの技量はあるようだな」

リオンはそう言つてカイを見る。

「使えない駒に興味はない。だから実力を試させてもらった。それだけだ」

「そうか……」

リオンの言葉にカイはそうとだけ返し、リオンはまたもフンと鼻を鳴らす。

「改めて名乗ろう……僕はリオン・マグナス。ウッドロウの下で客員剣士をしている」

リオンは短く己の名を名乗り、その後にはスタン達に「バンエルティア号とやらへ案内しろ」と言い、彼らは遺跡を出ていった。

「ふむ……」

一方レイ、バンエルティア号甲板に戻った辺りでレイが声を漏らす。どうにも先ほどからチエルシーが自分の方を刺すような視線で睨んでくるのが妙に気になる。ロイドとアスベルはクエストの終了をウッドロウから受け、後に改めてお礼をするという言葉を受けてから船内に戻っていった。一方ウッドロウはリオンの迎えに行つたスタン達

を待つて甲板に残り、ウッドロウが残っているからチエルシーも、そして何故か移動できない感じのするレイも残っている形になる。

そしてバンエルティア号がアルマナック遺跡に到着、スタン達が乗り込んできた。

「ん？ チエルシー！ よかった、無事だったんだな！」

船に乗ったスタンがチエルシーを見つけて無邪気な笑顔を浮かべ、続けてルーティが走ってきた。その後ろからカイとリオンがゆつくりと乗船する。

「心配したんだぞー。それにしても久しぶりだなあ、元気だったか？」

「ウッドロウに聞いたわよ？ 単身旅に出たってどうしたのよ？ 山で弓の修行に励んでたんじゃなかったの？」

スタンは久しぶりと挨拶し、ルーティがそう問いかけてくるとチエルシーは満面の笑顔で「ウッドロウさまがなかなか顔を見せてくれず、今はこのギルドに身を寄せていると祖父から聞いたので、居ても立つても居られなくなつて一日千秋の思いで追いかけてきた」と話す。

「チエルシー、わかつているとは思わがあくまでギルドは実力主義の世界だ。甘い考えで言えば、支払う代価が怪我だけでは済まない事もある。ここに籍を置く以上は、今後もますます弓の技術に磨きをかけていかなければな」

「はい！ チエルシー・トーン。緊禪一番頑張ります！」

ウッドロウが真剣な顔でギルドという厳しい世界での生き方を諭し、チエルシーもむんと気合を入れた様子で頷く。

「きんこ？……」

スタンがチエルシーの言葉に首を傾げた。

「心から奮起する、という意味だよ」

それにウッドロウが意味を説明。ルーティは「相変わらず小難しい言葉使ってるのねえ」とやれやれというように肩をすくめる。

「当然です。もう子供じゃないんですから！」

その言葉にチエルシーはえっへんと胸を張って答えた。と、ウッドロウはふつと微笑む。

「チエルシー。ギルドは剣士に始まり魔術師から格闘家、私達と同じく弓のような飛び道具を使う者まで大勢の人間がいる。時には皆にも教えを請うと良い、私達とはまた違う視点からの戦い方を知り、己の視野を広げる事も必ず何かの役に立つだろう」

「はい、ウッドロウさま！」

ウッドロウはチエルシーに様々なヒトと交流をすることの大切さを教える。チエルシーもそれに頷くとレイの方にとことと歩いて行った。

「改めまして、チエルシー・トーンと申します。これからよろしくお願いいたします」

「レイだ。こちらこそよろしく頼む」

チエルシーの改まつての挨拶にレイもそう返し、次にチエルシーは顔を上げる。

「ウッドロウさまは渡しません。負けませんからね！」

「?……」

チエルシーのそんな宣戦布告にレイは首を傾げるしか出来なかった。

「ふふふ……人が増えるとはやはり賑やかだな。リオン君も無事に合流できたようで何よりだ」

「僕は命令に従ったまでだ。次期国王の直々の頼みとあれば、おいそれと逆らう事は出来ないからな」

「そういうつもりで、あの書簡を送ったわけではないのだがね。互いに協力して、この先の危機を乗り越えられればと思っただよ。堅苦しく捉えてしまったのならすまなかつたね」

「フン……」

妹弟子をアドリビトムの新たな仲間を迎えたウッドロウは嬉しそうに微笑み、次にリオンに声をかける。それに対しリオンが皮肉っぽくそう言うとうッドロウは困ったように返し、堅苦しく捉えてしまったのならすまなかつた。と謝る。それにリオンはまたもフン、と鼻を鳴らした。

「ともあれ、互いに良い関係が築いていければと思っているよ。カイ君、今回はありがとう。君からも何かあればいつでも私に相談してくれ。出来る限り、力になろう」  
「ああ」

ウツドロウからのお礼に、カイもこくと頷いて返した。



## 第十七話 神子、騎士隊長、そして異世界からの仲間入り

「アンジュ」

アドリビトムのホール。そこでアドリビトムに届けられた依頼の整理をしていたアンジュは突然呼ばれ、声の方を向く。

「リタ……何か用事？」

「セルシウスから聞いたことを纏めたから伝えに来たわ」

アンジュの言葉に彼女を呼んだ少女——リタはそう伝え、頭をかいて「かなりぶっ飛んだ内容だけど、一応話しておくから」と続ける。それにアンジュも「創世の時について伝え聞いた、という“ヒトの祖”の事ね」とこの前リタに、セルシウスから話を聞いておいてとお願いしていたことを思い出す。それにリタもこくと頷くと口を開く。

「遙か太古……あたし達ヒトは、精霊に近い非物質の存在だったらしいわ」

「太古のヒト、今の私たちの先祖は肉体を持っていなかったって事？」

リタの話は最初からぶっ飛んでおり、アンジュは自分達の先祖は肉体を持っていなかった事への驚きに目を丸くする。リタが話す事曰く「“ヒトの祖”は物質体で自分達で設計し、今あるヒトとして地上に増え栄えた」。これは逆に言えばヒトの祖はドクメ

ントだけの存在だったという事。自分達の肉体、ヒトたる姿や構造を自ら設計し、非物質から物質を生み出したというのだ。あたかもミブナの里に伝わる人工精霊を創るように。

「……だとすると、ソウルアルケミーは、その当時にあつた技術で、現代まで細々と伝わっていたわけね」

「でも、結局その創世の時の事を知る非物質の“ヒトの祖”は今、いないんですよ？」

リタの話が一段落するとアンジユがそう言い、しかしリタは「セルシウスは“ヒトの祖”が遺した遺構なら知っていると云っていた」と話し、アンジユが「遺構？」と首を傾げるとリタはええと頷いた。

「天空にある宮殿、“ヴェラトローパ”よ。“ヒトの祖”、ヴェラトローパの民がその身を物質とするまで居た場所だって」

「そこにヒントがあるとしても、それも非物質なんですよ？」

「そうね、そういう事。ヴェラトローパは精霊と次元を同じくした時もあったけど、ヴェラトローパの民が地上に下りる時に、さらに次元を隔てて隠されたらしいわ」

リタは天空にある宮殿“ヴェラトローパ”にヒントがあるかもしれないと話すがアンジユはヒトの祖であるヴェラトローパの民がその身を物質とするまで居た場所ならそこも非物質じゃないのかと反論。リタもそれに肯定、かつては精霊と次元を同じくし

た時もあったけれど、ヒトの祖が地上に下りる時さらに次元を隔てて隠したそうだと話す。

「非物質じゃあ、存在しないのと一緒じゃない」

結局自分達が干渉出来ない非物質なのでは存在しないのと一緒だ。と自分が使っているテーブルに突っ伏すアンジュにリタも同じ思いなのか困ったように頭をかくが直後何かに気づいたように「いや、待って」と声を漏らす。

「……非物質を、物質に……」

「何かいい案でも？」

「ん……ちよつと、ハロルドと話してみるわ」

何か考え始めたリタに対しテーブルに突っ伏したアンジュが顔を上げてそう聞くと、リタはそう言つて科学室に戻ろうと踵を返す。

「今帰つたよ！」

と、今朝からカイ、カノンノと共にルバーブ連山に出かけていたしいなが戻る。曰く「自分の腐れ縁である歩く猥褻物が来るみたいだから、人様に迷惑かける前に捕獲してくる」とのことのでカノンノが手伝いを申し出、しいなも手伝つてくれるのはありがたいのだがカノンノが危険だと思ひ、しかし親切にしてくれるカノンノを突き放すのも良心が痛むという事で、ボディガードとしてその時すぐそこを闊歩していたカイを強制的に

同行させたわけである。

「よつと」

そしてカイが無造作に何か——赤い髪を長く伸ばした男性と思しき人物——を放り捨てるように投げ込む。

「……………え？」

アンジュはうつ伏せで倒れている男性を見て少し沈黙した後、カイを見る。と、カノノが頬を引きつかせ、しいなもため息をつく。

「こいつがあたしの腐れ縁だよ。こいつカノノを見た瞬間ナンパ始めてね。カイと一緒にぼつこぼこにしたんだよ」

「あ、あはははは……………」

しいなの言葉にカノノも乾いた笑い声を漏らす。

「えつと……………よく分からないけれど、医務室に連れて行かなくていいの？」

アンジュは困ったような笑みを浮かべながら席を立ち、男性の方に歩いていく。と、その時男性の身体がびくりと揺れ、突如がばつと立ち上がったかと思うとアンジュの手を自分の両手で覆うように包み込む。

「おお、なんてお優しいんだ。その優しさだけでこの身体の痛みが溶けていくような気持ちになる」

「……はい？」

男性の言葉にアンジュは目を点にする。

「お優しい聖女様、私の名はゼロス・ワイルダー。よければ——」

「カイ！　いくよ！」

「おう！」

「——みぎやぐはあつ??」

男性——ゼロスがアンジュを口説き始めるとしいなが叫び、直後しいなの右ストレートがゼロスの背中に、カイのハイキックがゼロスの側頭部に同時に直撃。そのハイキックの衝撃によってゼロスの身体が横に吹っ飛んだ。

「殴るよ!」

「だ、だから殴ってから言うな……がくつ」

しいなの怒号にゼロスはツツコミを入れた後、がくつと言いながら気を失い、しいなはため息をつくと彼の首の後ろにあたる部分の服を掴んだ。

「じゃあ、こいつはロイド達にでも任せてくるわ」

「え、ええ、お疲れさま……」

しいなはそう言って気絶しているゼロスを手を離れて去っていき、アンジュも苦笑交じりにその言葉を漏らした。

「じゃあ、二人もお疲れさま」

「ああ。甲板でユーリが模擬戦してたし、混ざってくるか……」

「ダメ、休憩」

次に二人に労いの言葉をかけ、カイはついさつきクエストから帰って来たばかりなのに元氣いっぱい模擬戦に混ざってこようかと言出し、しかしカノンちゃんは休憩を取るようにカイに言って彼を部屋に引っ張っていった。

「らあっ！」

「くっ！」

一方甲板。先ほどカイが言っていた通り、ここではユーリが模擬戦を行っていた。ちなみにその相手はレイで、今はユーリが、レイの放った魔神剣をジャンプでかわして素早く斬りかかり、レイも右手に握った剣で防御。共に両手で剣を握つての鏢迫り合いになっている。

「ふっ!!」

ギンツと重い金属音が響いて二人は距離を取り合う。と、その瞬間レイは左手を後ろにやり、銃を取り出す。そして素早く銃口をユーリの方に向けて引き金を引いた。

「っ!?!」

咄嗟に横に飛んで銃弾をかわすが、顔のすぐ横を通った弾丸はユーリの長い髪をかすり僅かに削る。

「ちっ!」

「ふっ!」

ユーリは舌打ちを叩いて突進、レイも右手に剣を持ちつつ左手で銃を構え、銃弾を乱射しながら突進。互いに距離を詰めつつレイは剣に繋げる前に銃での攻撃をし続ける。

「おらああああああつ!!」

しかしユーリは刀を振り回し、しかもなんの考えもなく振り回しているように見える。その刃の軌跡はレイの撃った銃弾を的確に打ち落とし、弾き、斬り裂いていた。

「なっ!」

自分を狙う弾丸を全て打ち落とすというとんでもない剣技にレイは驚き、銃が弾切れになった事に気づくのに遅れてしまう。咄嗟に銃を捨てて背負っている盾を取ろうとするが既にユーリは剣の間合いに入っており、レイは左手を後ろにやりつつ右手の剣をユーリ目掛けて突き出す。

「牙狼——」

「っ!」

しかしユーリも剣を突き出してレイの剣を阻み、

「——撃つっ！」

「ぐっ!!」

盾が構えられるより早く、右の拳をレイの腹目掛けて叩き込む。その一撃をくらったレイは鎧を突き抜けた腹への衝撃によって怯み、ユーリは素早くレイの肩を掴んで引き倒すとさらにレイの顔の真横に剣を突き立てる。

「俺の勝ちだな」

「チツ」

ユーリの言葉にレイは舌打ちを叩き、彼を睨みつける。そしてユーリがレイの上からどいて剣を収めるとレイも立ち上がって剣を鞘に収め、盾を背負い直して銃をしまう。と、その次の瞬間ユーリは鋭い目でバンエルティア号の甲板縁に用意されている登り口を睨みつけ、同時に剣を引き抜く。

「蒼破あつっ！」

叫び、剣を振るうと共に放たれるのは風の塊のような衝撃波。と、衝撃波が飛んでいく方向から一人の青年が顔を出し、衝撃波を見ると驚いたように目を剥く。

「あぶ——」

咄嗟にレイが叫びそうになる。が、青年は素早く盾を構えるとその衝撃波を防いでから甲板を見る。そしてユーリの姿を認めるとその目は呆れたように細められた。



「ユーリ……危ないじゃないか」

「ははっ。悪い悪い、ガルパンゾ国の騎士隊長様が気を抜いてないかと思つてな」

「まったく。君つて奴は……」

青年の目を細めながらの注意にユーリは悪びれもせず笑いながら返し、青年はやれやれと肩をすくめる。

「数日前に手紙を送つたはずだ。エステリーゼ様を返してもらおうよ」

「あーやっぱそれか……悪い、今ちよつと取り込み中だな……」

青年の言葉にユーリは頭をかく。

「はーいちよつとどいたどいたー!! 模擬戦やつてんならちよつと止めなさい!!」

その時、突如リタの声が響く。その横にはハロルドが立ち、後ろの方からはアスベルやクレス、ロイドにセネルがなんらかの機械——ピンク色の、例えるならチェスのルークの駒を元にしたような形をしたものだ——を前後左右から持ち上げて甲板へと運び出していた。

そして甲板の中央部分にて機械はどさりと置かれ、アスベルはふうと息を吐いた後、人の気配に気づいてそつちを向き、来客を見るとぎよつとした目を見せた。

「フ、フレン隊長!?! ど、どうしてここに!?!」

「久しぶりだね、アスベル」

慌てて敬礼を取りながらのアスベルの言葉に青年——フレンはにこやかに挨拶をする。

「っ、あんた!？」

と、そこでリタもフレンを見て絶句した後、睨みながら声を低くする。ちなみにハロルドは鼻歌を歌いながら機械——どうやらなんらかの装置のようだ——のセツティングを行っていた。

「君は……」

フレンもリタを見て声を漏らす。が、リタが目を閉じてふんつと鼻を鳴らしながら顔を背け、会話する意思がない事を示すと彼も口を閉ざした。

「フレン!」

「エステリーゼ様!」

と、またもフレンを呼ぶ声。それにフレンは大きく反応して声の方を見る。そこにはエステルが驚いた様子を見せて立っていた。

「エステリーゼ様、お城に戻ってきてください」

「……やはり、それですか……」

フレンの言葉にエステルはしゅんとした様子を見せ、ちらりとハロルドがセツティング中の装置を見る。

「フレン。そのお話の続きは少し待っていただけませんか？」

「は、はあ……」

エステル你真剣な表情での言葉にフレンも威圧され、曖昧に頷く。

「私たちの知らないところで、大きなことが起きているんです。今、それを解決できるかもしれない手段を見つけるための実験をするんです。ヒトの祖の遺構、ヴェラトローパへの道を見つけるための」

「ヒトの、祖？……」

「はい。本来非物質であるものも、己を構成する情報……つまり、ドキュメントの波動を濃密にすれば物質になる。精霊セルシウスはそう言い、事実己の姿を実体化させている。それを応用し、現在非物質となっているヴェラトローパの次元振動数を変化させ、物質化させる。これから行うのはその実験なんです」

「ヒ、ヒトの祖？ 精霊？ 遺構ヴェラトローパ？……」

突然まくし立てられた言葉にフレンは頭の上でクエスチョンマークを乱舞させていた。

「お話は聞かせていただきました」

と、そこにアンジュまでも姿を現した。

「あなたは？……」

「私はこのギルド、アドリビトムのリーダー。アンジュです」

「そ、そうでしたか！ 私はガルパンゾ国騎士団で隊長を務めている、フレン・シーフトと申します」

「エステルとアスベルから話は聞いています。ですが、エステルはこれから行う実験に立ち会いたいそうなので。まず私からお話をさせていただいてもよろしいでしょうか？」

「は、はい……」

「では、こちらへ。エステル、実験が終わった後、食堂まで来てちょうだい」

「はい」

アンジュの言葉にフレンは頷き、アンジュに誘われて——ちなみにユーリも「暇だし、俺も行くわ」とついて行った——船内へと消える。それとほぼ同時にセツティングを終えたらしいハロルドは「んじゃ、ちゃっちやと始めちゃうわね」と言って装置を操作、装置の上面にある球体が光を放ちながら、キンキンキンという音波を放つ。が、その光はやがて消え、音波も聞こえなくなっていくた。

「……何も起きないわねえ。触媒が足りなかったかしら」

「わあああああああ!!」

「きやあああ!!」

「うおおおおおおお!!」

ハロルドが呟いた次の瞬間、突然そんな悲鳴が聞こえてきたと思うとドシンという音と共にバンエルティア号が揺れた。

「今の音、なあに?」

「さあ? そんな事より、その装置はまだ手を加えないといけないんじゃないの」

「やっぱ、もうちよつと改良が必要ね。じゃあ、撤収撤収」

科学者二人組はそんな悲鳴や揺れを気にも止めず、装置の改良が必要だと結論づけるとさっさと撤収を決め、アスベル達はさっきの悲鳴や揺れを気にしつつ装置を再び科学部屋に運び入れようと、装置を持ち上げるのであった。

「星晶採掘により、生物変化現象を起こす謎の赤い煙が発生。それは人の望みを叶えながら成長し、ラザリスという自我を持ち行動を始めた……」

「ええ。そして、ラザリスの正体を知るためには精霊ですら知らない創世の時について調べる必要がある。ヴェラトローパにそのヒントがあるかもしれない。というのが現状の結論なの」

食堂。アンジュからの説明を受けたフレンは手を組んで顔の前にやり、考える様子を

見せる。と、食堂のドアがブシュ、という音と共に開いた。

「失礼します」

エステルだ。彼女は食堂に入り、フレンの前に立つ。と、少し申し訳なさそうな様子で頭を下げた。

「ごめんなさい、フレン。私はまだ帰りません……植物や、魔物……それだけじゃない、たくさんさんの苦しんでいる人達を私はこれまで見てきました。彼らを、このままにはしておけません」

申し訳なさそうにそう言い、頭を上げると彼女は「フレン、分かってください」とお願いするような目で言う。

「ですが……」

「いいのか？ 無理矢理連れてつたところで、どうせまた飛び出しちまうぜ。その方がよっぽど危ねえんじゃねえか？」

エステルの言葉にフレンが反論しようとするが、ユーリが「このまま連れて帰ってもまたすぐ同じように飛び出してしまうだけだ。そっちの方が危ないんじゃないか」とエステルを援護する。それにフレンはまた黙り込み、再びしばらく考えた後、こくと頷いた。

「……分かりました」

「フレン！」

「ただし、条件があります」

フレンからの言葉にエステルはぱあつと顔を輝かせる。が、フレンがそう追記するとエステルの表情が再び僅かに曇る。それをちらりと見た後、フレンはアンジユの方を向き直した。

「アンジユさん。僕もギルドのメンバーに正式に加えてはもらえないでしょうか？」

「えっ!？」

フレンからの真剣な表情での言葉にアンジユとエステルが驚いたように声を上げ、ユーリもその台詞は思いもよらなかつたのか目をパチクリさせる。

「おいおい。正気か?」

ユーリの言葉にフレンは首肯、「確かに星晶採掘に関する各国の不穏な動向、不可思議な現象は僕も気になっていた」と話し、さらに「国からは、エステリーゼ様の安全確保が最優先任務として言い渡されている」と続ける。どうやら騎士団の事は副官に任せていき、自身はギルドでユーリ達と共にこれからの戦いに挑むつもりのようなのだ。

「任務ねえ……」

その一連の事を「任務」と称するフレンにユーリはそう声を漏らし、フレンはさらに「任務である以上、事の真偽が明白になり事態が落ち着いてきたらエステリーゼ様には

国へ戻っていただく」と条件を付け加える。それにユーリはやれやれと息を吐いてエステルを見た。

「とんだ屁理屈も考えたもんだ。どうするんだ、エステル」

「私はそれで構いません。じゃあ、これからはまたフレンと一緒にいられるんですね」

「そういう事になりますね。これからよろしくお願いします。エステリーゼ様」

ユーリはエステルに判断を任せるらしく、エステルとしてもフレンと一緒にいられるのならば快諾。フレンも爽やかに微笑んで頷いた。

「うん。こつちもガルパンゾ国騎士団の隊長さんなら実力もあるだろうし、ありがたいわ。じゃあ早速フレン君のギルドへの登録手続きを始めないと」

アンジュも新たな心強い戦力に嬉しそうに微笑み、フレンのギルドへの登録手続きを始めないと。と席を立つ。

「あ、アンジュ様。こちらにおられたのですか」

「ロックス、どうかしたの？」

「はい。先ほど、人が空から落ちてきたんです」

「人が落ちてきた？」

ロックスからの報告にアンジュは呆けた声を出し、ロックスはええ、と頷くと「展望室の上に落っこちてきたようです」と詳しく説明する。



「ロックス。さっきの人達を、医務室へ運んだよ」

「大きなケガとかはないようだ」

と、ロックスに後ろからカノンノとカイが声をかけ、それを聞いたロックスは安心した様子で微笑む。きつと後はこの船の船医であるアニーが診てくれることだろう。

「まあ、空からだなんて珍しい客ね。つて、カイとレイもだったか」

「ええ、まあ」

アンジュの言葉にカイは苦笑する。アンジュは「最近どんな客が来ても動じなくなつたなあ」とぼやきながら、空からの珍客に顔を出してこようかなと呟く。カイ達もついでについて行くこうという事になった。

「はい。皆さん大丈夫ですよ。幸い、軽い傷で済みましたから。それにしても、空から落ちてくるなんて……」

「はい。私達は……ある人と戦っていたはずなんです……」

アニーが診察終了、軽い傷だけで特に問題もないという判断を下した後、空から落ちてきたという彼らがこの船にやってきた経緯を呟くと、茶髪にふわふわとした淡い桃色の服を着た少女がそう言い、次に金髪ツンツン、どこかスタンに似たような雰囲気を見せる少年が「急に地面が無くなって一瞬眩しい光に包まれたと思つたら、この船に向かつて落下してたんだ」と説明する。

「なあ……これって、やつぱり夢なんじゃねえのか?」

と、銀色の髪を短く切った色黒長身の青年が突然そう言い、アニーも突然そんな目に遭っては戸惑ってしまうのも当然。と彼の言葉に頷く。

「いいえ、お嬢さん! このロニ・デュナミスが今抱く戸惑いは……」

と、青年——ロニは真剣な表情に真剣な声色でアニーに目を向ける。

「あなたのような美しい方の元へと辿り着いてしまった事です!!」

「……はい?」

ロニの言葉にアニーはそんな声を出し、金髪少年と茶髪少女、そしてもう一人いる少年——黒色の短髪という髪型に服装も真つ黒。頭には竜の骨で出来ているのであろうか仮面を被っているためよく見えないが、その顔はどこかで見覚えがあるように思える。とカイはちらりと思う——は呆れたように頭をかき、目を閉じ、顔を伏せる。

「ひよつとして、頭を強く打ったのかもしれないね。ハロルドさんに見て貰った方がいいと思います!」

アニーはロニのナンパの意味をそう解釈したのか慌てて医務室を飛び出す。多分本当にハロルドを呼びに行ったのだろう。

「あ、ちよ、ちよつとお嬢さん!」

ロニはアニーが消えていった扉に向けて手を伸ばし、数瞬——時間にして十秒経った

かどうか程度——の後に扉が再び開く。

「はいはい♪ 脳ミソ見て欲しいのはどちらかしら？ 開頭術、穿頭術、好きな方選んでいいわよ」

そして医務室に、両手にドリルを握りギューンギューン回転させながらハロルドが入ってくる。その言葉に対しロニも引きつった笑みで「その両手に持っているドリルはなんでしょ？」と尋ね、その後血相を変えた様子で「大丈夫です！」とハロルドに向けてアピールするが実験体を見つけたハロルドが本気の目に怪しげな笑みを浮かべてじりじりと近づくと「つつうかお前ら助けろよ!!」と連れの少年達に助けを求めながら「うわああああ!!」と悲鳴を上げて逃げ惑う。

「その様子だと、みんな無事のようなね。とりあえず、一安心かな」

ロニが医務室を出ていき、ハロルドがその後を追っていくとアンジュは残る少年達に向けてそう言い、自らの所属、つまりアドリビトムのリーダーであることと自身の名を名乗った後、少年達に名を尋ねる。

「俺、カイル・デユナミス！」

「わたしはリアラ。そして、今部屋を出ていったのはロニです」

「僕はジューダスだ……」

最初に金髪ツンツン少年が無邪気な笑みを浮かべて名乗り、次に茶髪少女が自分の名

を名乗った後、ロニの名前を改めて紹介。最後に仮面の少年が寡黙に名を名乗った。そしてリアラが「落ちたのが船の上でよかった」と安堵する。と、アンジュが「それについてには謝らなきゃね。どうやら私達のせいのようなだから」と彼らに言う。それからアンジュはリタのハロルドの見解なんだけと前置きをした後、「次元チューニング装置の不具合のせいで、あなた達をこの船に呼び寄せてしまったらしいの」と説明する。そしてアンジュはカイル達が希望する場所に送ろうと思うんだけど、と提案。希望する行先は？ と尋ねる。

「えつと、ここからだ……どう説明すればいいかな」

「世界樹から、どの方角かでもいいんだけど」

海の上では土地勘もないのか、カイルが困ったように呟くとアンジュが世界のどこからでも分かるのだろう。世界樹からどの方角かでもいいんだけどと言う。

「世界樹って？」

と、カイルが不思議そうな声でそう聞き返した。それにアンジュも首を傾げて「世界樹は世界樹よ？ あなた達、知らないの？」と尋ねた。

「……まさか、とは思うが。ここは僕達の世界じゃないんじゃないか？」

「そういえば、さつき上で見た世界地図。私達の世界のものとは違ってた。でも、そんな事って……」

ジューダスが呟き、リアラもさつき自分が見た世界地図が私達の世界のものとは違ってたと感じづく。

「だったら、元の世界へ戻してくれ。呼び寄せたと言うのなら、戻す事くらい出来るだろう」

そしてジューダスが当然ながら元の世界に戻してくれと要求。しかしアンジュは「ハロルドさん達に聞かないと……」と歯切れの悪い返答を見せた。

「カイ、研究室へ行つて、このことを話してきてくれる？ 私はまあ、念のために部屋を用意してくれるから。お願いね」

「あ、はい」

「俺達も行くよ」

アンジュが微笑み両手を合わせてお願い、カイが素直に頷くとカイル達も同行すると言い、彼らは科学室に向かう。

「元の世界に戻せつて言ってもねえ。ま、いずれ戻れる様にはしてあげる」  
「すぐには戻れないんですか？」

ロニを追いかけるのに飽きたのか科学室に戻っていたハロルドの言葉にリアラは悲しげな表情で問う。それに対しハロルドもどういう仕組みであんた達の世界と繋がったのかが分からないからまずはそこから調べないといけないのだと返す。

「まずいな……こうしている間にも、『あの男』が多くの者を殺めてしまう……」

と、ジューダスが仮面の奥で神妙な表情を見せながらそう呟いた。

「あの男？」

「とにかく、強いものがあると聞けば戦いを挑むというめちやくちやな奴だ。腕の立つ者は目を付けられて、皆命を奪われた」

「そいつが、俺の父さんを狙ってるって分かって、それを止めるために旅をしていたんだ」

カイがジューダスの台詞の一部に反応をするとジューダスはそう言い、カイルも真剣な目でそう言う。

「全く……やつと奴を探し出して、あと少しで倒せていたかもしれないというのに……」

「そんな……ごめんなさい」

「あ、いえ！ あなた達のせいじゃ……」

ジューダスの悪態にカノンノが頭を下げるとリアラがわたわたとなる。

「まー、そりゃ悪かったけど。無理なもんは無理なんだし。そのうち戻してあげるから、それまでこのギルドで働いてればいいじゃない」

「そうするしかないみたいね、カイル」

「うん。俺、ギルドの仕事って一度やってみたかったし」

ハロルドの言葉にリアラはカイルに向けてそう言い、カイルも快諾するとリアラは一つ頷いた後、ハロルド達に顔を向ける。

「それじゃあ、私達、しばらくここでのお世話になります。これから、よろしくお願いします」

「ハイハイ、よろしく〜」

「よろしくね」

礼儀正しくぺこりと一礼、ハロルドとカノンノも頷いて返した。

「ぬうううう……」

一方その頃、どこかの洞窟の奥地であるだろう場所。青いウエーブがかった髪を伸ばし、左手に巨大な斧を握った男性は辺りを見回す。

「あの小僧ども、どこへ消えた……待てよ……俺は何故、こんな所にいる？　ここは……どこだ？」

男性は低い声でそう声を漏らしたのであった。

一方カイル達はカイ、ハロルドと共にアンジュに挨拶しようかとホールへと出る。ちなみにカノンノはアニーに医務室を片づける手伝いをお願いされて医務室へと向かった。と、甲板の方からスタンとルーティがやってきた。

「あら、新入り君？ よろしく。あたしは、ルーティ・カトレットよ」

「ああ、新しいメンバーだね。俺はスタン・エルロン。一緒に組む時はよろしくな！」

「ル、ルーティ……さんっ!？」

「ウソ……」

ルーティとスタンの姿を見たカイルとロニが硬直、ロニは素っ頓狂な声でルーティの名を呼び、カイルに至っては呆然とした様子で、その口からは「ウソ……」という声が漏れ、スタンが「名乗るだけなのにウソなんか言わないよ」と不思議そうな表情で首を傾げた。

「あ、いやっ。あ、なんでもありません……いやっ、なんでもない！」

ロニは慌ててそう言った後自分とカイルの名を紹介、よろしくと言うものの声がかなりどもっている。

「ははっ、緊張なんてしなくていいよ。ここみんなは、気さくでいいやつばかりだから」

ロニがどもっている理由を緊張と思つたスタンが穏やかに笑いながらそう言い、ルー



テイが「報酬が多い仕事する時は、あたしを呼んでね」と言つて二人は歩き去つていく。

「若かつたけど……今のは父さんと母さんだった……別の世界に……父さんと母さんが存在していたなんて……」

カイルが呆然とした様子でスタンとルーティを見送り、やはり呆然とした様子で呟く。

「あんた達、違う世界から来たのよね？ でも、あんたの両親がここに……ふくん」  
「ハロルド、これってどういう事？」

ハロルドが呟き、カイルが問うがハロルドは「そんなの分かんないわよ」と言う。仮説を立てるにしても様々な事が考えられる。とのことだが、彼女はカイルに対し「あなたが二人の子供であることは伏せておくべきだ」と忠告。カイルが「なんでだよ！」と言ふとハロルドは「あの二人の未来はまだ決まっていけない、その不確定の未来に干渉するべきではない」と述べる。

「へたしたら、この世界でのカイルが生まれなくなるかもしれないんだから」

「カイルが……生まれなくなる?!……」

「だから、あんた達同じ世界の者同士にしかこの話はしないで。それと……」

ハロルドの言葉に口ニが絶句、彼女はそう結論づけた後カイルの方を見る。

「あんたも、この件については誰にも言っちゃダメだからね」

「りよーかい」

ハロルドからの釘刺しにカイも飄々とした様子で、しかし目は真剣な様子を見せながら頷いた。

そしてアンジュがカイル達の部屋を準備し、カイはカイル達の部屋の掃除と荷物——と言つても突然強制的に連れてこられた形のため各々の武器とその手入れ用の道具、あとは野営セット等の冒険必需品や各々の私物程度だったが——を纏める作業の手伝いをした後、再びホールへと上がる。

「一つ、アドリビトムに依頼があるのだが」

そこでは丁度、ユージーンを始め、ヴェイグにテイトレイ、アニーがアンジュと話していた。

「どうかしたか?」

「おお、カイ。ちょうどいいや、お前も聞いてつてくれ」

カイが声をかけるとテイトレイがそう言つて手招き、カイはアンジュ達の近くに立つ。それからユージーンが話し出すが、要約すれば「村近辺の星晶採掘が終わり、ヘーゼル村の働き手も解放されると思つたのだが皆遠くの土地の星晶採掘のため帝国に連

れて行かれてしまい、強制労働を強いられている」とのことで、アンジュは「サレという人の仕業ね……」と哀しげな目で呟く。ティトレイも「土地のマナ不足は深刻で、村に残ってる者ももうあの土地では生活していけない。そこで村の皆と話し合って、多少不便でもマナの恵みのある土地で村を立て直すことにしたんだ」と話し、次にアニーも「キールさんが研究しているオルタ・ビレッジの構想を取り入れれば、また村人は豊かな生活を手にすることが出来るでしょう」と話す。さらにヴェイグが話す、「村人と、強制労働のために連れて行かれた者を連れ、新たな土地へ移動するためにカダイフ砂漠を越える。アドリビトムには村人が無事に砂漠を越えられるよう、魔物の討伐を頼みたい」ということだ。

「分かりました」

「アンジュさん、俺が行きます」

「そう言うってくれると思っただけ、カイ！ ヴエイグとユージーンは帝国に連れて行かれた村人を救出するために船を出ちまうし、俺とアニーはヘーゼル村に残された皆を連れて砂漠に向かうんだ。俺達全員船を出ちまうから砂漠での魔物討伐には参加出来ねえ……すまねえが、頼む！」

「任せろ」

アンジュが依頼の受諾をすると共にカイが名乗り出、ティトレイは仲間につきつい仕事

を押し付けてしまう事に対し眉間に皺をよせ、勢いよく頭を下げる。それに対してカイは言葉少なく「任せろ」と返し、カイとテイトレイは互いに深く握手をし合った。

「きつとすぐ、他にも名乗り出てくれるわ。皆、今回は船の事は気にしないで、村の人達のために頑張つて。皆の無事を祈つてます」

「はい。ありがとうございます。では、行つてきます」

アンジュは祈りを捧げるように両手を組んでそう言うときとアニーがお礼を言つて皆で一礼し、ヴェイグ達は下船していく。そしてアンジュは緊急依頼の紙を貼り出し、カイもその依頼についてきてくれるメンバーを探すためホールを後にした。

## 第十八話 砂漠での激闘

カダイフ砂漠。帰らずの荒野と呼ばれる地。ヒトからそう呼ばれる程に過酷な環境であるこの場に住む魔物——砂漠を照り付ける日光から皮膚を守る為だろうか体毛で全身を覆い、発達した角を前方に伸ばしている——エレノツサスが二匹獲物を探して歩き回っていた。すると、その足元の砂が突如盛り上がり、何かが飛び出してくる。

「ブモツ!」

二匹のエレノツサスは太陽を背にするそれらを見るがもう遅く、それらは手に持つている刀を振るい、一瞬でエレノツサスの急所を絶ち、一撃でエレノツサスを仕留めた。

「ヒュ〜♪ やるじゃねえか」

と、物陰から一人の青年——ユーリ・ローウエルが現れ、口笛を吹いてパチパチと拍手をする。が、エレノツサスを一撃で仕留めた内の一人——藤林すずは武器である忍刀を背負い、首を横に振る。

「いえ、この程度で褒められることはありません」

「そうかい? 暑い砂の中に潜って、魔物の一瞬の隙について飛び出し、さらに一撃で急所を討つ。よほどのもんだと思うけどな。なあカイ?」

「ああ。俺もタイミングはさすがに教えてもらったからな」

「すずの言葉にユーリはそう言い、もう一人の不意打ち係——カイに話を振るとカイも頷いた後、ひゅんひゅんと刀——エタムを振るってそれに目をやる。」

「それにしても、このクエストに行く前にポツポが刀を強化してくれたが……本当に軽いな。振りやすいし、動きを阻害しない。さっきの暗殺もこれだから上手くいっただよように思えるな」

「へえ、俺も帰ったら頼んでみつかない……とところで、レイも剣を強化してもらったんだろ？ どうだ？」

「……先ほど、近づいてきていたドライアドを斬り倒したが……切れ味や威力が上がっている。悪くはない」

「カイの刀に対する評価をユーリは受け止め、今回のクエストメンバー——レイに尋ねる。それにレイも剣——エタムを振るい、そう評価した。」

「それにしても、レイは同じ金属である銅を使ったからまだ分かるんだが……俺の刀は綿で強化されたんだが……どう思う？」

「……」

「カイの素朴な疑問にユーリとすずは黙り、最近モフモフ族と妙に仲の良いレイだけが「それがモフモフ族の技術らしいぞ？」と言っていた。」

それからカイ達は砂漠を進んでいく。その道中、周りに魔物がいない事を確認するとユーリはふうと息をついて懐から冷水を入れた水筒を取り出し、水で喉を潤しながら砂漠の熱気によって身体から噴き出てくる汗を服で拭う。

「確かにこの環境じゃあ、年齢とか男も女も関係なしに厳しい砂漠越えになるだろうな」  
そう言い、「加えて魔物もわんさか出やがる。命懸けもいとこだ」とククツと笑う。  
と、すが「ここまでの事態を引き起こしたのは、帝国です」と言う。それに対しユーリも「俺がガルパンゾのギルドにいた時は、俺が知るセカイは住んでた場所だけだったな」と呟いた。

「帝国の事は知ってたが、よその国や、世界の動きなんざまるで見えていなかった」  
ユーリは「本当、何でも見渡せる自由のギルドだな。アドリビトムってのは」と笑う。  
それにすずも首肯で同意を見せた。

「私も里を出て、様々な事を知りました。貧富の格差、星晶の大量消費、紛争……大国が小国に強い、単一栽培が引き起こす自然破壊、そして飢餓」

「このまま進んでいけば、世界の危機つて奴はすぐ訪れる。ラザリスがいよいよといまいと関係ねえ。国のお偉いさんは、全てを食い潰すまで気が付かねえんだな」

「その危機を回避できるかどうか。今が帰路の時でしょうね」

「ああ」

すずの言葉にユーリは皮肉っぽく笑いながら返し、それにすずがそう返答するとカイは静かに頷いた。その真剣な表情にユーリもふつと微笑を見せる。

「ま、当然だな。国のお偉いさんにや頼れねえとなると、俺達でやんなきゃな」

「ええ。ですから、カイさんは一人で抱え込まないでください。私達がいまから」

「俺達を選んだ道だ。一つの選択は小さいかもしれないけど、その選択が世界を正しい方向に変えていくだろうよ。やるんだよ、それを。お前だけじゃなくて、アドリビトムの皆でな」

「ああ……ありがとな」

ユーリの言葉にすずも頷いてカイに言い、ユーリもまたそう言う。カイも一つ頷き、彼らにお礼の言葉を示した。

「うっし。んじや行くか」

ユーリはそう言つて水をもう一飲みし、それから一行は歩き出す。

「……………」

その最後尾で、レイは無言のまま歩いていった。

「シャイニングレーザー!!」



それから彼らは帰らずの荒野を進んでいたが、その先に現れたのは以前モラード村の村長トマスから魔物——実は生物変化現象を起こしていたミゲルとジオアンだった——を捨ててくれという依頼を受けていた時に襲ってきた魔物——サンドワーム。しかしそれが襲ってくる前にこの中で唯一飛び道具を持つ（カイとすずの手裏剣や苦無などを除く）レイが光のmanaを込めた弾丸で先制攻撃を撃ち込み、同時にカイ、ユーリ、すずが地面を蹴り突進。サンドワームの周囲に円形状に開いている流砂に足を取られる前に大きくジャンプ、

「曼珠沙華!!」

「忍法、雷電!」

サンドワームに光弾が直撃し怯んでいる隙にカイは炎の、すずは雷のmanaを苦無に込めて投擲、その苦無はサンドワームの身体に突き刺さると共にカイのものは爆発したかのように燃え盛り、すずのものからは雷が流れる。

「断空牙!!」

そこにユーリが両手で握った剣で兜割りの如く上段からの一撃を叩き込む。それがサンドワームの頭部に直撃、岩のように硬い皮膚を砕くことこそ叶わなかったもののその衝撃がサンドワームの脳を揺らす。

「チッ……叩き込め! レイ!!」

思ったよりもダメージが通らなかつた事にユーリは舌打ちを叩くが、直後視界の端にレイの姿を認めると咄嗟に叫ぶ。レイは弾丸を撃ち込んだ後、流砂にはまらないよう注意しつつ素早くサンドワームの背後に回り込んでいた。そしてユーリの叫びと同時にレイも宙を舞う。そしてまるで獲物を見つけた鷹のように空中からサンドワームの背中目掛けて勢いよく急降下した。

「飛天翔駆!!」

空中からサンドワームに強襲、すれ違いざまにその突進の勢いを込めた斬撃を叩き込む。が、急降下の勢いは止まらずレイの足が流砂にはまり込んでしまう。

「ちっ」

レイは流砂から脱出しようともがき始めるがその目の前でカイが刀を地面に突き刺す。

「土竜閃!」

刀を通じて地面に地のマナを送り込み、大地から岩の槍を突き出してサンドワーム目掛け突き刺して動きを封じ、ついでにレイも先端が平らになっている所謂石柱を地面から出させて助けておく。

「らああああああつ!!」

ユーリがサンドワームに突き刺さった岩槍の上を走り、ジャンプ、そのままの勢いを

込めて大きく剣を振りかぶる。

「爆砕陣！」

勢いそのままに地面——というか岩槍——を叩き、生み出した衝撃波がサンドワームに直撃。

「戦迅——」

しかしそれだけでは終わらず、ユーリは右手をサンドワームに叩き付ける。

「——狼破あつ!!!」

ユーリの雄叫びと共に狼の形をした鬨気が放たれサンドワームに直撃した。同時に足場である岩槍がみしみしと悲鳴を上げ、それを一瞥したユーリが岩槍を飛び降り砂地の上に着地すると同時に岩槍は砕け散り、いくつもの石の塊となって落ちていくと流砂に呑み込まれていく。

「グ、オオオ……」

「いきます」

二回の連続攻撃が効いたのか動きが鈍ったサンドワームにさすが上空から飛びかか

る。  
「忍法、飯綱落としー！」

空中から高速で回転しながらその遠心力と勢いを利用して強烈な斬撃を叩き込む技

——飯綱落とし、普段は回転の勢いを利用して丸ノコのように連続して斬るのだが、今回は刀を逆に握り、回転の勢いをつけてサンドワームの脳天に刀を突き刺した。

「ギャアアアアアアアアッ!!!」

脳天に走る痛みにサンドワームの悲鳴が響き渡り、痛みの元を取り除こうと滅茶苦茶に暴れ回る。

「っ、くっ!!」

一撃で急所を貫き絶命させるつもりだったはずは予定外の抵抗に僅かに焦りを覚え、サンドワームに突き刺さっている刀の柄をしかと握る。

「きやっ!!」

しかしサンドワームの暴れっぷりは予想以上、ついに手を滑らせてしまい、ずずの身体が空中に放り出される。そしてその直後、ほぼ反射的にだろう。痛みに呻いているサンドワームは空中にいる獲物<sup>すず</sup>目掛けて牙を剥いて襲い掛かった。

「っ、忍法——」

ずずは両手を合わせて指を動かす。その直後、ずずの身体にサンドワームの牙が突き刺さる。

「すず!」

カイが慌てたように叫ぶ。が、その直後サンドワームに噛みつかれたずずの身体が霧

散した。

「なっ?!」

「忍法、写身。そして忍法葉隠れ……間に合いました」

唾然とするカイの目の前に木の葉が舞い、そこからさすが姿を現す。すずは分身を作ってサンドワームの目をそちらに向け、その隙に木の葉に紛れて逃げる特技——葉隠れを使って逃げおさせたのだ。

「ガアアアアアアアッ!!!」

未だに頭に突き刺さっている刀による痛み、そして獲物を逃がした悔しさから滅茶苦茶に暴れているサンドワームを見てユーリは「はあ」とため息を漏らす。

「しようがねえ……」

ユーリはため息の後、そう漏らし、すう、つと息を吸う。

「飛ばしていきますか!」

ユーリが咆哮すると共に、彼の身体を凄まじいオーラが包み込む。己のマナを解放、己の中のリミッターを解除し身体能力や精神力を一時的に高める技法——オーバーリミッツだ。そのままユーリはサンドワーム目掛けて突進、サンドワームも目の前の獲物ユーリに気づくと一気に襲い掛かる。凄まじい巨体に似合わない敏捷性、だが、オーバーリミッツにより一時的に限界を突破しているユーリの前にその攻撃は欠伸が出るような

速度だ。ユーリは口角を持ち上げ、微笑しながら剣で自らの周りの地面に円を描き、その円に重なるように剣を突き刺す。

「守護方陣!!!」

それと共に先ほど剣が描いた円から光の力が展開。守護の陣となつてユーリの身体をサンドワームから護る。その間にユーリはサンドワームの隙を見つけ、斬り込む。

「お終いにしようぜ!」

その次の瞬間、斬り込んだ先にいたはずのユーリの姿が消えた。

「閃け、鮮烈なる刃!」

そう思うと別の場所からユーリがサンドワームを斬り、しかし斬撃の直後またも彼の姿が消えそう思ったたら別の場所から斬りかかる。

「無辺の闇を鋭く切り裂き、仇名す者を微塵に砕く!!」

サンドワームの周囲を縦横無尽に高速で移動し、敵に狙いを定めさせず、一方的に斬り刻む。

「漸毅狼影陣!!!」

そして最後に斬り抜けた直後力の爆発がサンドワームを呑み込み、その爆発が消えた後サンドワームは息絶えていた。

「ま、ぎつとこんなもんか」

ユーリは肩をこきこきと鳴らし、戦闘開始と同時にその場に投げ捨てていた鞆を拾い上げる。すずもサンドワームの脳天に突き刺さっていた刀を抜き、刀にべつとりと血が付着しているのを見ると少し表情を歪める。

「少し休憩をして、武器の手入れをした方がいいのではないか？」

「そうだな。少し疲れたし、ちよつと休憩するか」

レイが武器の手入れを兼ねた休憩を提案、ユーリはその意見を聞き入れると休憩を宣言。ユーリは適当な石に椅子代わりにどつかと座り込んで刀の手入れを始め、すずは高い岩の影に入り込むと刀に付着している血を布巾で拭き取り、血糊を丁寧に落としていく。カイも刀を研ぎ苦無の補充、レイも剣を研ぎ銃の手入れを行い始めた。

「それにしても、あんなに暴れ回るサンドワームから振り落とされた直後襲い掛かられたってのに見事な回避だよな。忍びならあの程度は朝飯前ってわけか？」

「当然です。これくらいで動揺しているようではとても皆を束ねる忍びにはなれません」

と、ユーリはさっきのすずの回避手段に興味が湧いたのかすず話に話を振る。それにすずはごく当たり前、というように返した。と、カイがそつちに顔を向ける。

「すずは将来、忍びのリーダーになるのか？」

「正確には頭領と言うのですが……まだ、そうと決まったわけではありません」

カイの言葉の間違いを訂正しつつ、すずはまだそうと決まったわけではないと言う。と、ユーリが「胸張って、はい、そうです」って言っとけよ」とすずに言った。

「知ってるか？ 人間の脳つてのは発した言葉が一種の自己暗示になって、言葉通りの未来を実現しよう、影に日向に動いてるらしいぜ？ 本人の意思に関係なく、な」

「それは……言葉ですか？」

ユーリの説明を受けたすずがそう、彼の言葉を自分なりの言葉に解釈。「つまり、口にした言葉が現実になる、という……」と続けるとユーリは「そういうもんかもな」と返す。

「言うだけならタダなんだ、だったら夢だのなんだの、前向きな言葉は積極的に口にしたっていいんじゃないか？」

「そういう考え方もあるんですね……言葉の力……勉強になります」

「ま、あくまで一つの例だよ。病は気からとも言ふし、何事も気の持ちようって事かもな」

ユーリの言葉に対しすずはこくりと一礼、ユーリはそう話を締めた。

「……コトダマとは、なんだ？」

と、今度はレイがすずの言葉に興味を持つ。それに対しすずは「えっと」と言いよどむ。



「その……簡単に申し上げるならば、先ほどユーリさんに確認したように、〃口にした言葉が現実になる〃、という事です……昔、ミブナの里である者が死の間際にまた別の者に対し呪いの言葉を吐いて絶命、その後言葉を受けた相手も凶事に見舞われた……という話を聞きます。先ほどユーリさんが言ったように、言葉には力が宿るという考え方です」

すずは言霊について簡潔に説明、ユーリは「ま、俺のはそこまで大層な事でもないけどな」と肩をすくめて微笑を見せる。レイも「そうか」と返す。

「なあ、二人が質問したついでに俺も一ついいか？」

「え？ あ、はい……私に答えられる事なら」

最後にカイもすずの肩がびくつとされる事なら、と頷く。

「すずがあいつの攻撃をかわす時に両手を合わせて何か指を動かしてたが、あれはなんだ？」

カイの言葉にすずの肩がびくつとなる。びくつというか、ドキツという感じだ。

「あ、あれはその、お、おまじないと言いますか……」

まるで核心を突かれたかのように、外見からは見えないものの声に僅かに焦りが交えた様子ですずは説明をしていく。

「さ、先ほどの言霊と少し関係があるんです」

「言霊と?」

「まずはさつきレイに説明した言霊を引き合いに出し、カイも興味を持つ。」

「はい。言霊の中には呪力を持つとされる九字が存在するとされています。それを指を使って結ぶ、もしくは指を剣に見立て空中に線を書くことで呪いから身を守ると言われているのです」

「まずはそう言い、言霊について説明していくが、冷静な口調の中どこか慌て気味に見える。というよりも核心に触れないよう誤魔化そうとしている感じが強い。」

「ま、そういうのは流派による秘密つてもんがあるんじゃないかねえか?」

「そうか……そうだな。悪い、まず」

「あ、いえ。このくらいなら……」

と、空気を読んだユーリが助け舟を出し、カイも納得するとすずに謝罪、すずもペコりと頭を下げる。そして彼らは手入れ休憩のついでに少し水分を補給、軽食を食べる等僅かながらの休憩を取ってから彼らは再び先を進んでいった。

「しっかし、狙いの魔物が見つかんねえな……」

「テイランピオン、でしたか?」

見晴らしの良い場所にやってきた時ユーリがふと眩き、それに対してさすがそう、今回のターゲットとして定めた魔物の名を出す。それにユーリはこくと頷く。

「この砂漠の中でも、厄介な相手だ。普通の奴が束になってかかっても、なかなか倒せるもんじゃねえ。他の魔物はそうでもないんだがな」

「それを倒せば、ヘーゼル村の皆さんも無事に砂漠を渡れるのですね」

「ああ。だから、早いところそいつを見つけ出さなきゃな」

ユーリの説明を聞いたさすがそう言い、それにユーリは頷き、彼らは再び歩き出そうとする。

「……」

が、カイが突如足を止めた。

「ん？ どうかしたか、カイ？」

「……下だ!!」

先頭を歩いていたユーリが首を傾げると、突然カイが地面を見ながら叫ぶ。その瞬間突如ゴゴゴと地響きが起き、そう思うとカイ達が立っている場所の地面が僅かに盛り上がる。敵襲と判断したユーリ達が素早くその場から飛び退いた直後、砂の中から巨大なサソリのようなモンスターが飛び出してきた。

「おおっと、こいつあでかいな」

「これが、ティランピオンですね？」

ユーリはサソリのようなモンスター——ティランピオンの側面から回り込み正面に立っていたカイ達と合流、彼の軽口に対しすずは静かにモンスターの正体を確認する。体色は砂漠に紛れるためか茶色く、足は構造こそ昆虫に似ているが三対六本である昆虫とは違って二対四本、長い尻尾は反り返ってティランピオンの頭上でゆらゆら揺れながらハサミのような先端をガチガチ鳴らしている。そして普通の小さな牙と共に口を中心に×の形をするようにさらに四本の牙が生えていた。

「では、行きます」

すずは背負っている刀に手をやりながら前傾姿勢になり、ユーリも剣を抜く。レイも右手に盾を左手に銃を握って構えを取り、最後にカイも前傾姿勢になって腰に差している刀に手を添える。

「セツシブバレット!!」

レイが正面から銃弾を連射して相手の気を引き、その隙にカイとユーリが左右から回り込み、すずが正面から走り出す。

「忍法写真！」

すずが両手を合わせ指を動かし、そう言うと同時に彼女の隣にもう一人すずが姿を現し、ティランピオンを一瞬驚かせる。その隙に二人のすずは背中の忍刀に手をやり、

ティランピオンに斬りかかった。

「飛燕連脚！ からのつ、火車落とし!!」

「竜神翔！ さらに、断空牙!!!」

さらにティランピオンの右脇からカイが、左脇からユーリが、それぞれ空中を舞うような連続蹴りから続けて炎を纏った刀による回転斬り落としを決め、ユーリは渾身の斬り上げから続けて渾身の力を込めた斬り落ろしを決める。

「キシャアアアアアアアアツ!!!」

と、ティランピオンは奇声を上げて長い尻尾を振り回し、カイ達を自分から離させた。

「ちっ、苦無閃!」

「忍法雷電!」

「蒼破つ!」

「ツインバレット!」

カイ達前衛は離れつつ追撃を防ぐために、レイは前衛の後退を援護するためにそれぞれ飛び道具で攻撃を行うがそれはティランピオンの硬い身体に阻まれ効いている様子を見せていない。

「シャアアアアアアア!!!」

続けてティランピオンはハサミのような先端の尻尾を開くと炎に包まれた岩を飛ば

してくる。それをカイとせず、ユーリは走ってかわし、レイは右手に持っている盾で防ぎつつ左手で銃の空になった弾倉を外すと相手の攻撃が止んだ隙をついて盾を手放し、素早く新たな弾倉を銃に入れりロード。伏せて盾を右手で拾い上げつつ口でスライド部分を銜え強引にスライドを引いて射撃準備を整える。

「忍法、曼珠沙華！」

さすがティランピオンの顔面目掛けて爆発する苦無を投げ、爆発でティランピオンの目くらましを行う。そこにカイとユーリが斬りかかった。

「影走斬!!」

「幻狼斬！」

双方高速で突進、重い斬撃を叩き込む。その後ろでレイが宙に舞い、高速でドリルのように回転する。

「ガトリングバレット!!」

その状態から連続射撃、微妙に着弾点の違う銃撃が連続してティランピオンに突き刺さる。

「忍法五月雨!!」

銃撃にティランピオンが再び怯んだ隙にさすが連続斬りで切り込む。

「せいっ、はっ！」

さらに体術を混ぜ込み、宙を舞うように斬り続ける。

「シヤアアアアアアッ!!」

「っ?! がはっ!!」

が、ティランピオンは痛みに耐えつつ尻尾を振り回し、その尻尾がすずに直撃、ティランピオンはその手応えから敵の居場所を探知したのかすずの方に向けて尻尾の先端を向ける。そしてすず目掛けて燃え盛る岩弾が放たれる。

「っ、忍法——」

素早く指を動かすが間に合いそうにない。しかし、その次の瞬間風が走り、すずの姿が消え去った。

「大丈夫か、すず?」

カイがすずの危機を察知し、彼女を助け出したのだ。ちなみに体勢的にはお姫様抱っこ状態になっており、カイはすずに衝撃が来ないよう柔らかく砂の上に着地した。

「カイさん……ありがとうございます」

すずは簡単にお礼を述べながらカイに下ろしてもらおう。

「怪我が無くてよかった……しかし、厄介だな。接近戦を挑もうとしても尻尾を振り回されたら距離を取らざるを得ない。俺達の飛び道具じやまともにダメージを与えられそうにもないしな……」

カイは現在はユーリとレイが翻弄、ユーリは回避を、レイは盾での防御をしつつ剣術で攻撃を仕掛け、ティランピオンが尻尾を振り回して応戦している光景を見ながら呟く。

「……………」

と、さすが何かを考えている様子を見せる。

「……………カイさん」

「ん?」

「……………助けてくれたお礼に、イガグリ流の技、その一つを伝授します。私一人では足りませんが、カイさんが同時にそれを使えばこの状況を脱する事が出来るかもしれません」

「本当か!？」

「すずの真剣な表情での提案にカイが声を上げるとすずはその表情のままこくと頷く。

「それともう一つ……………」

さらにはすずはカイに何かを伝え始める。

「嗚烈襲!!!」



「エアロバレット！ 飛天翔駆!!!」

ユーリが剣で尻尾の攻撃を弾きつつ敵を砕く牙のような拳で噛みつくが如く連続して拳撃を叩き込み、レイは宙を舞って銃撃を叩き込んだ後、空気を蹴ったかのように猛スピードで急降下、強力な突きを叩き込む。

「ぐっ!!」

だがティランピオンが尻尾を滅茶苦茶に振り回し、さらに暴れ回ると共に辺りの岩場を崩し、岩を落としてくると二人ともその場を離れざるを得ない。攻撃のリズムが掴めなくなっていた。

「ユーリ、レイ」

「カイ！ すず！」

「ここは私達にお任せを」

カイの呼び声にユーリが答え、すずが静かにそう言うのと二人が一步前に出る。

「いきますよ、カイさん」

「おう」

すずの合図にカイが頷き、二人は同時に指を動かし、いや、印を組み始める。

「忍法」

ちなみにここで説明をしておこう。すずが先ほど使っていた技——忍法写身。それ

は自らのマナを体外に放出、それを練り直すことによって自らと同じ姿の実体を作り出す技である。そして技の性質上、体内に秘めるマナが多ければ多いほど、分身は数多く作り出すことが出来る。

「写身！」

「影分身の術！」

すずの隣にもう一人のすずが、カイの隣には三人のカイが姿を現し、彼らは刀を構えたとテイランピオンの周りを縦横無尽に走り出した。

「ギ、ギ」

突然三倍の数に増えた相手にテイランピオンは混乱、尻尾を振り回すがただでさえ素早い上に六人もの相手を全て振り払う事は叶わない。

「隙あり!!! 蒼破、牙王撃つ!!!」

「ギグッ!?!」

カイとすず及びその分身に気を向けていたテイランピオンは懐に入ってきていたユーリに気づくのが遅れ、ユーリは風の衝撃波とボディブローを隙を突いてテイランピオンにぶち込む。

「散沙雨！」

さらにレイが鋭い連続突きを叩き込み、一歩下がる。

「空破衝!!」

「グギアツ!!??」

そして突進の勢いを込め、強烈な一突きを叩き込んだ。

「忍法鎌鼬!!」

「風刃縛封!!」

「グギアアアアアツ!!」

さらにするとカイが上空から印を組み、風の刃でティランピオンを斬り刻む。その攻撃に対しティランピオンは痛みに吼えながら尻尾から岩弾を放つ。すずはそれをおろすが、カイの姿は霧散し岩弾は外れてしまう。影分身だ。

「幻魔烈斬影!!」

ティランピオンの注意が上空に向いていた隙を突いて凄まじいオーラを放つカイ——オーバーリミッツを解放している——が高速で懐に入りつつ斬撃を叩き込み、さらに地面目掛けて闇のmanaを込めた掌底を打ち込む。その瞬間、ティランピオンを中心とした陣が敷かれ、ティランピオンの身体が無数の糸で縛られたかのように動けなくなる。

「これで決める」

眩き、カイが刀を一閃。

「臨」

一閃と共に彼の口から言葉が紡がれ、斬撃と同時にティランピオンの周囲に不思議な円が出現、同時にカイの姿がさっきの斬撃の場所から消える。

「兵」

消えたかと思いきやまた別の場所から姿を現し、咄きと共にまた一閃するとまた消える。「闘」「者」「皆」「陣」「列」と場所を変えつつの斬撃と咄きが重なり、ティランピオンを捕らえる円も増えていく。ここでまた一つ解説しよう。言霊には呪いがあると信じられ、呪いとはドクメントに干渉、相手の内面にダメージを刷り込んでいくものである。「在」

すなわち、今のカイの斬撃は斬撃そのものによる外面へのダメージだけでなく、言霊の力を込められた刀による斬撃がドクメントにまでもダメージを与えている。ということである。

「前」

言霊の力を込めた斬撃がティランピオンに叩き込まれる。その瞬間、カイの姿が消える。

「封魔——」

また次の瞬間、カイはティランピオンの目の前、それより上空に現れていた。ティラ

ンピオンは九つの呪いの円により、その動きを封じられている。

「――九印剣!!」

そして回転しつつ力を込めた斬撃が呪いの円ごとティランピオンを斬り裂く。ティランピオンは内外からのダメージに耐えきる事が出来ず、声すら出すことなく絶命。カイはティランピオンに背を向けると静かに腰の鞘に刀を収める。ティランピオンの巨体も揺らぎ、地面に倒れ込んだ。

「なんとか仕留められたな。お疲れさん、カイ」

「ユーリもな」

ユーリがにっと笑いながらラストアタックを決めたカイを褒め、それにカイも返してユーリと軽いハイタッチを決める。

「これでヘーゼル村の皆さんも無事に砂漠を越えられます」

「では、戻るとするか」

「すずも一安心したように言い、次にレイがそう言うときユーリも「そうだな」と言い、元来た道を歩き出した。」

「!」

「が、カイは足を止めると勢いよく振り返り、遠くにある高い岩山をまるで睨むように見据えた。」

「……どうかしましたか、カイさん？」

「……いや、なんでもない」

それに気づいたさすがが問いかけると、カイは少し黙った後静かに返し、岩山から目を離すと再び歩き出す。

「危ない危ない。危うく気づかれるところだったかな？」

カイ達がいなくなった数瞬の後、カイが見据えていた岩山の上から人の気配が現れる。

「アドリビトム、ねえ……」

カイ達が去っていった方を見ながらくつと笑う紫髪の青年——サレ。さつきカイは彼の気配を感じ取っていたのだ。

「大事な働き手を奪ってくれた報い、必ず受けてもらうよ」

サレはニヤリと意地の悪い笑みを浮かべながらそう呟く。が、「でも今日はヴェイグがいないみたいだし、僕と遊ぶのはまた今度にしようか」と呟くと踵を返す。

「楽しみにしているよ……フフフ……」

そして不気味な笑みを浮かべながらサレは歩き出す。その時サレの身体を覆い隠す

ほどの砂が舞うような強風が吹き、風が止んで砂が再び地面に落ちた時、サレの姿は跡形もなく消え去っていた。

## 第十九話 遺構ヴェラトローパ

「……」

バンエルティア号の船倉を利用した乗員の船室。その一室で生活をしている少女は己の武器である銃を解体し、手入れを行っていた。

「……」

手入れの合間、彼女は右目に着けている眼帯にふと手を触れると何か考えるような物憂げな表情を見せる。と、部屋ドアが開いた。

「あ、レイ」

「カノンノ……」

「武器の手入れ中だった？ ごめんね、邪魔しちゃって」

入ってきた少女——相部屋をしているカノンノだ——に少女——レイがその名を呼ぶとカノンノは武器の手入れを邪魔したことを謝る。

「いや……ただの暇潰しだ」

が、レイはそうとだけ言って銃を組み立て直し、ホルスターに収めると立ち上がってホルスターを腰の後ろに、銃が横向きになるようにセットする。そして二、三度素早く



抜いて構えのポーズを行い、納得がいったのかよしと頷く。

「ところで、何か用か？」

「あ、うん。暇なら一緒に菓子食べないかなって。ロックスがクッキー焼いてくれたの。でもカイってば新しく入ってきた人と模擬戦やって、皆それに夢中なの」

「そうか……なら行こう」

レイの問いかけに対しカノンノはそう言い、レイはこくと頷くと長く伸ばしている金色の髪をふわりと揺らしながら部屋を出て行こうとする。

「……レイ、ちょっと止まって」

「？」

カノンノはその髪をじつと見てふとレイに止まるように言い、レイもぴたりと足を止める。そう思うとカノンノはレイの手を引いて自分が髪型を整えるのに使っている鏡の前に彼女を立たせた。そして髪の頂点から左右に分けた部分を結んだ所謂ツーサイドアップになっている髪型の、髪を止めているヘアゴムを解くと少し櫛を当てる。

「……なんだ？」

「ううん、ごめんね……レイの髪って綺麗だから。たまには他の髪型にもしてみたらどうかなって思ってた」

櫛で髪をとかしながらそう言い、カノンノはレイの金色の髪を手で持ち上げる。

「……レイの髪って、先っぽが青っぽいよね」

「……私が知っている時からずっとそうだ」

カノンノの言葉通り、レイの髪の色は綺麗な金色だが先の方だけが何故か青っぽくグラデーションがかかっている。それに対しレイもそう答え、カノンノも「そうだよね」と頷く。

(なんだろう……なんだか、ラザリスを思い出すような気がする……)

彼女も銀髪だが毛先は赤っぽいグラデーションがかかっていた、とそんな特徴を思い出してカノンノはそう考える。が、レイが「カノンノ？」と声をかけてくると彼女も「ごめんごめん」と誤魔化し笑いをしながら返し、レイの髪を持ち上げて結い上げる。所謂ポニーテールの髪型だ。

「簡単だけど、こんなのでどうかな？」

「ん……ありがとう」

もさもさと髪を触りながらレイはお礼を言う。彼女は髪型自体にはあまり頓着していないらしく——実際毎日ツーサイドアップに髪を結ってはいるものなのとなく気分で作っているらしく鏡すら見ていないためたまに左右の結び目や髪の量が見て分かるほど合っていないかったり酷い時はぐちゃぐちゃでその場合気づいたルビアやフアラ達が直している——ポニーテールを触っているのも普段と違う髪型が気になっている

だけのようだ。

「じゃあ行くっか」

「ああ」

カノンノはレイの手を引いて部屋を出ていき食堂へと向かう。

(今日も平和、というやつか……それが続けばいいのだがな……)

なんとなく、レイはそんな事を心中で呟いた。

一方甲板。カイは先ほどカノンノが言っていた通りここで模擬戦を行っていた。

「はあああああつ!!」

「せやあつ!!」

キンキンキンと目にも止まらぬ速さの剣劇がぶつかり合い、カイとその相手である男性は剣をぶつけると鏑迫り合いに持ち込む。そして互いに弾かれたように距離を取るとカイは刀を右手に逆手で握り、相手の男性も剣を右手に、鞘を左手に握ってまるでメイン武器を順手、サブ武器を逆手という疑似的な二刀流のような独特の構えを見せる。

「につししし。ガイー、負けんなよー! カイツて剣だけは強えからよー!」

観客であるルークが口の悪い応援を行う。カイの模擬戦の相手は数日前にアドリビトムに加入した青年——ガイ・セシル。元はルークの屋敷に世話になっている使用人で

ありルークの親友的存在で、クーデターによつてルーク達が国を脱出した後、ガイも別ルートで国を脱出。どうにかこうにかあつた後ルークの所在を見つけ、はるばるバンエルトイア号までやってきたのだ。ちなみに、それを知つたルークが「こつそり迎えに行つて驚かせてやる！ カイ、お前案内人兼護衛な！ この俺の従者が出来るんだから光栄に思えよ！」とお忍びという名の勝手な外出で砂漠に向かい、ガイと合流する前に色々あつたのはまた別のお話。

「苦無閃！」

「おつと！」

カイが左手を懐に入れて苦無を投げつけるが、ガイはそれを鞘で弾きながら突進。劍を振りかぶる。

「はあっ！」

「つと！」

袈裟懸けに振り下ろしてきた劍をカイはとんぼ返りでかわすが、カイが着地する頃はガイは刃を返してさらに斬りかかってくる。

「くつ！」

予想していたよりも早い連撃にカイは一瞬焦り逆手に握っていた刀で劍を防ぐ。

「はあっ！！」

「づつ!!」

しかしガイは左手に握っていた鞘でカイの右腕を殴り、カイが痛みに呻いた隙に剣を振り切つて刀を弾き飛ばす。

「弧月閃!」

「くっ!?!」

水面に移る月さえも斬り裂くかのような鋭い斬撃、カイは素早く身を引いてそれをおろすが弾き飛ばされた刀からは離れてしまい、さらにガイが一步踏み込む。

「獅子戦吼!!」

鞘を振り上げると共に獅子の鬨気がカイを吹き飛ばす。完全に刀を取りに行ける状況ではなくなつてしまい、カイはチツと舌打ちを叩くと邪魔になる刀の鞘を捨て、短刀を引き抜いて右手に順手で構える。

「魔神剣!」

先手を打つのはガイ。剣を剣先で地面を擦るように振り上げて地を這う衝撃波を放つ。カイはそれをかわし、左右に素早く動いて的を絞らせないようにしながらガイに突進、ガイに近づいて来たところで急激に加速する。

「牙突衝!」

叫びと共に突進の勢いを込めて素早く短刀を突き出す。それをガイは左手の鞘で防

ぎ、受け流す。しかしガイが追撃を試みる頃にはカイはその加速突進の勢いを使ってガイから離れていた。

「つつ……」

思った以上の速さの突進にガイは戦慄し、速さに翻弄されてメイン武器である刀を取り戻されたらまずいと判断したのか、カイの挙動に注意を払いながらそろりそろりとカイの刀の方に動いていく。そして斬り合いの隙に取られないように刀自体からは距離を取りつつ、しかしカイが刀を拾おうとすればその隙に斬り込んで制圧ができる程度の距離を保ってガイはカイを睨みつけ、剣を向ける。その間カイは一步も動かず短刀を口に銜えた状態で両手を組み指を動かし、つまり印を組んでいた。

「忍法、影分身の術！」

印を組み終わると同時にカイからマナが放出され、二人の分身が姿を現す。全員ご丁寧に短刀を銜えている状態も再現されていた。

「なっ!？」

いきなり相手が三人に増え、ガイは絶句した後分身二人に時間稼ぎをされてはカイに刀を拾われ不利になると判断したのか自分からカイに斬りかかり、カイも分身と共に短刀を握り直すと真ん中のカイが懐から何かを地面に叩き付け、同時にそれから煙が発されてカイ達を包み隠す。煙玉だ。

「くっ！」

相手の姿が隠され、ガイが警戒を強めるといきなり煙の中から三人のカイが飛び出してガイめがけて突進、ガイも鋭く素早い剣術でカイ三人を同時に相手するがその激しい波状攻撃に押されていく。

「しようがない！」

ガイは剣を振るってカイ達の攻撃を弾きながらふうつと息を吐く。

「俺の本気見てみるか!？」

剣を一振るいすると同時に彼の身体を凄まじいオーラが包み込む。限界突破だ。オーバーリミッツ

のマンの解放によって生じる衝撃波がカイ達を吹き飛ばし、ガイはその内真ん中の一人に狙いを定めて地面を蹴り突進。吹っ飛ばされた相手が体勢を立て直す前に突進の勢いを込めて斬り込み、斬られるとともにカイは霧散する。分身だったようだ。それにガイはチツと僅かに舌を鳴らした後振り返り前方に剣を向ける。

「はあああああっ!!!」

既に残る二人のカイは短刀を手に突進してきている。しかし同時ではなく微妙にタイミングをずらしている。

（先頭の方で防いで、二人目で仕留めるってわけか……つまり!）

高速での突進に焦って一人目を防ぐ、あるいは振り返りにしたら間髪入れず後ろのも

う一人が止めを刺してくる。つまり一人目は囷だ。そう予測したガイはオーバーリミッツにより一時的に限界を超えた動体視力で一人目のカイの短刀を防ぎ、受け流しつつ二人目の方に突進、

「虎牙——」

飛び上がりつつの斬り上げで二人目のカイの短刀を弾き飛ばし、無防備にする。

「——破斬！」

そして斬り下げでカイを斬り倒す。が、その瞬間カイの姿が霧散した。

「なにっ!? (くそっ、まさかカイ、俺の思考を読んで裏をかいたのか!?)」

自分が囷と読んだのが外れたガイは焦り、背後から短刀を突き立てんと迫るカイの刃を限界を超えた速さで振るわれた鞘でしのぐ。

「牙連刃!」

リーチが短く軽い短刀の利点である切り返しので速さで構えを取り直し、連続してガイを斬りつける。それをガイは鞘で防ぎ、弾く。そして短刀の乱舞が止んだ瞬間シヨルダータツクルをカイにくらわせた。

「くっっ!」

「獅子戦吼!!」

シヨルダータツクルにカイが怯んだ瞬間、獅子の闘気をぶち込んでカイを吹き飛ば



す。が、その瞬間彼が本物だと断定していたカイの姿が霧散した。「なっ!？」

三人とも霧散し消滅、それすなわち三人全てが分身だったという事だ。

「はい、ご苦勞様でした」

そして後ろからガイの肩の上に、彼の首筋を狙うように刀が置かれる。

「……煙玉で隠れている隙に、分身を一体増やしていたのか……」

「ご名答。そして三人の分身に煙を飛び出させてあたかも俺本人も一緒に戦っているかのように錯覚させ、お前の注意が分身達を向いている隙について俺は刀を拾いに行く」  
「そして気配を消し、三人全てを撃破した俺が気を抜く、もしくははさっきのように驚きで動きを止めてしまう一瞬を狙っていた。というわけか……」

ガイはそう呟いて観客達を見る。全員、完全にガイがカイの策に引つかかった事に申し訳なさそうな表情を見せ、特にルークなんてティアに手で口を塞がれてもごもご言っていた。

「ご、ごめんねガイ。僕達が教えたら一発でばれるんだけど……」

「いや、一対一という前提の模擬戦で流石にそれは無粋だ。俺が油断していたよ」

クレスの申し訳なさそうな言葉に対しガイは己が油断していたと敗北を認め、剣を鞘に収める。そして刀を鞘に収めたカイに向き直った。

「やられたよ」

「ああ」

ガイの言葉にカイは気のせいか得意気な表情を見せていた。

「ふう……皆元氣そうね」

「あ、アンジュさん」

模擬戦が終わったところに声をかけてくる女性——アンジュにカイが声をかける。

「ああ、カイ。ちよつと悪いけど研究室でリタ達に装置の進捗状況を聞いてきてくれな  
い？……さつきまで書類仕事で疲れちゃって、ちよつと休憩したいから」

「分かりました」

アンジュの言葉にカイは嫌な顔一つせずに頷き、船内に戻っていく。

「ディセンダーもあなたの言いなりね」

「あら、言いなりなんて酷いわね。教育の成果って言ってほしいわ」

セルシウスがやれやれと肩をすくめながらそう言うのとアンジュは文句をいうように  
口を尖らせてしれつとそう言う。その姿にセルシウスはふつと微笑を見せた。

「はむはむ……」

一方食堂ではカノンノとレイがおやつタイムに入っていた。メニューはカノンノの言っていた、ロックスが作ってくれたクッキー……だけではない。

「それにしても意外ですね。まさかレイヴンさんがお菓子作りに凝っているなんて」

ロックスがあははと笑う。その言葉の通り、ロックスと一緒にお菓子を作っているのはおっさんことレイヴン。その言葉にレイヴンはししつと笑う。

「お、なんだい執事君？ おっさんがお菓子作りつてのがそんなにおかしい？ お菓子なだけに」

「あ、いえつ、申し訳ありません！ 別にそういう意味で言つたわけでは……」

「でも、ユーリが言つてたけど。レイヴンさんつて甘いもの苦手なんじゃないんですか？」

レイヴンのオヤジギャグを交えた台詞にロックスは生真面目に失言を謝り、次にカノンノがレイヴンに問う。

「ま、そうねえ。甘いお菓子は女の子が好物でしょ？」

「うん、そうだねえ」

レイヴンの言葉にカノンノはレイヴン特製パフェを頬張りながら——ちなみに隣ではレイが口を挟むことなくパフェとクッキーに夢中になっている——こくこくと頷く。

「絶品スイーツが乙女のハートをとろかして、彼女は俺様にぞっこんつてなもんよ」

レイヴンはダンディを気取っているかのような口調でそう言う。

「おかわり」

その瞬間レイがパフェのおかわりを要求する。

「お、レイちゃん！ うんうん、やっぱ女の子には甘いお菓子よね。どう、どう？ おっさんにぞつこん？」

「レイヴンはどうでもいい。おかわり」

「……」

レイヴンは嬉しそうにレイに迫るがレイはレイヴンはどうでもいいと一蹴しておかわりを要求。レイヴンもしよぼんとなつてパフェのおかわりを作り始める。その哀愁漂う後ろ姿にカノンノとロックスは苦笑を漏らすしか出来なかった。

「……あ、そういうえはお嬢様。あの絵のことなんですけど」

「え、もしかして風景を知ってる人を見つけたの!？」

ロックスがふとカノンノの描く不思議な風景画の話題を出し、カノンノは思わず席を立ててあの風景を知っている人を見つけたのかとロックスに迫るが、ロックスは「いえ、そういうわけではなく……」と首を横に振る。

「その、セルシウス様に見せてはいかがでしょうか？」

「セルシウスに？」

「はい。セルシウス様は私達が知らない色々な事を知っておられるのでしょうか？ もしかしたら……」

「そっか！ うん、そうしてみる！ ご馳走様、ロックス!!」

ロックスからの提案を受けたカノンノはこくと頷くと、ストロベリーとクリームたっぷりのレイヴン特製パフェと材料が余ったからと作ってくれたフルーツサンドウィッチに舌鼓をうっているレイをその場に置いて、いつも持っているスケッチブックを抱えて食堂を飛び出した。

「おつ、どうした、カイ」

研究室に入ってきたカイに声をかけてきたのはロニ。その足元には大きな箱が置かれていた事から恐らく彼は荷物を運んできたのだろう。

「アンジュに頼まれて来た」

「アンジュも気を揉んでるんだな……無理もねえか。あれからほとんど進展してないな」

アンジュから頼まれた、という言葉のみで目的を察したロニは腕組みをしてふうと息を吐く。

「ん〜……あと一歩つてところなのよね〜。『アレ』さえあれば、いいんだけど」

「何か必要なのか?……なら依頼を出してくれれば取りに行くが?」

「ああ、俺も協力するぜ?」

ハロルドの言葉を聞いたカイが何か必要なものがあるらしいと思いつき取りに行くと言いつつ、ロニも協力を申し出る。それにハロルドは「取りに行く、ねえ……」と漏らした。

「取りに行くもんならいいけどさあ……」

「ヴェラトローパを出現させるためには、ヴェラトローパのドキュメントが必要なのよ」

ハロルドに続いてリタが説明、それにロニが「おいおい」と言いながら額を押さえた。

「ミもフタもないだろ……それが分かったら苦労しねえよ。見たことも触った事もないもの、探せるわけねえもんなあ」

「確かに。俺達が干渉できない別次元にあるから出現させたいのに、その別次元にあるもののドキュメントが必要なのはな……軽く矛盾してるじゃねえか」

ロニの言葉に続いてカイが矛盾を指摘、リタもそれは分かっているのかと頷きつつも「ほんの一部でもいいから、ヴェラトローパの純粋なドキュメントがあれば、ヴェラトローパの次元に共鳴させて干渉する事が出来る」と語る。

「もうちよつと考えてみるわ」

「無理すんなよな……寝てねえだろ」

ハロルドがぼさぼさの頭をかきながら呟くとロニが心配そうにそう言う。確かにハロルドの目の下には若干のクマが目立つ。だがハロルドは「あら！」と言つてにぱっと微笑んだ。

「こんな面白い事なんでも、寝てる時間も惜しいわよ〜♪」

「まあ、ならいいけどよ……身体壊す前にちゃんと休めよ？」

心の底から楽しそうな様子を見せているハロルドにロニは言つても無駄だと諦めたのか一つため息を漏らし、しかし部屋を出る前にもう一度、身体を壊さないようにと注意を行っていた。

「ヴェラトローパのドクメント、か……」

「どっかにありやあいんだけどよ……ま、一応アンジュに報告しとくか」

カイの呟きにロニもそう言い、休憩を終えて仕事を再開しているアンジュの方に歩いていくと、カイル曰く「ロニにとっては死活問題」とのことであるナンパもそこそこにさつきリタの言っていた事を説明。しかしアンジュもそれはどうしようもないのか「そう……」と漏らすだけだった。

「あ、カイ！」

と、食堂に続くドアの方から少女の呼び声が聞こえてきた。

「カノンノ……」

声をかけてきたのはカノンノ。その両手には愛用のスケッチブックを抱えていた。

「ねえ、カイ。セルシウスは甲板にいるかな？」

「ああ、さつきはいたぞ」

「うん、ありがと」

カノンノの質問にカイはさつきの模擬戦を思い出しながら頷き、カノンノはありがとうとお礼を言うと、「今まで描いた絵をね、セルシウスに見てもらうんだ」と言う。もしかしたら絵の風景に精霊の世界があるのかもしれないとカノンノは輝いた笑顔を見せるがしかし「いつものように知らないって言われちゃうだけかもしれないけど」と続けて苦笑する。

「……でも、不思議だな。これらの風景がどこかにあるって思ってるのが」

「確かに、不思議な事だ」

カノンノの言葉にカイもふっと笑って返す。

「皆に知らないって言われても、諦められないの……ホント、なんでなんだろうな。それに、どうして描かずにはいられないんだろ」

「まあ、まずはセルシウスに見てもらおうか。ついでに俺も一緒に行くよ」

「うん。ありがと、カイ」

むむむ、と考え始めるカノンノに対しカイは苦笑して絵をセルシウスに見てもらおうと



いう最初の目的を思い出させ、今のところやる事もないためついでに自分も同行を申し出、カノンもそれを承諾すると二人揃って甲板に移動する。模擬戦も終わり、甲板に残っているのはセルシウスだけだ。

「ねえ、セルシウス。ちよつと見てもらいたいものがあるんだけど」

「何かしら？」

「私が、描いた絵なんだけど……この中に、知ってる風景ってあるかな？」

そう言つてカノンはセルシウスにスケッチブックを見せ、セルシウスはそれらをぱらぱらと見ていった後、首を横に振る。

「いいえ……知らないわ。精霊は、この世界の事をヒトよりはわかるけれども。知らないものばかりね」

「そう……精霊にも分からないなら、やっぱりただの妄想だったのかな……」

セルシウスの言葉にカノンは残念そうな、どこか悲しげな顔を見せ、セルシウスはその顔を見て少し申し訳なさそうな顔を見せながら、ぱらりとスケッチブックをめくる。

「これは……」

めくつた先にあつた絵を見たセルシウスが絶句する。そのページに描かれているのは球体状で硬質的な宙を浮かぶ城のような物体の絵だ。

「この風景、知ってるの？」

セルシウスの反応にカノンノが食いつく。と、セルシウスは「知ってるも何も……」と漏らしながらカノンノに驚いてる表情そのままの顔を向ける。

「あなた、これがヴェラトローパよ！ ヒトの祖が地上に降りるまで過ごした……」  
「本………当に？」

「その絵を持って、研究室の皆に見せなさい。デイセクター。早く、カノンノを連れて研究室へ。いいわね？」

「あ、ああ……」

セルシウスの台詞にカノンノが驚きに声を失うとセルシウスは急いでカイに指示、カイもカノンノの肩を抱くようにして彼女を連れ研究室に移動する。

「この風景が、ヴェラトローパ？」

リタはカノンノが持ってきたスケッチブックに描かれているヴェラトローパの光景を見て驚きのまま言葉を口に作る。

「しかし、カノンノがなぜそれを？」

次にウイルがカノンノに質問する。しかしカノンノは「分かりません」と首を横に振った。いつものように紙の上に風景が見えたのだとカノンノは述べ、リタは「どういうことなの？」と眩く。

「カノンノ、あんたのドキュメントを見てもいい?」

次にリタはカノンノにそうお願い、カノンノも混乱しつつ「いいよ」と言った。そしてリタはカノンノのドキュメントを展開、難しい顔を見せる。

「この頭上のドキュメント……ハロルド、あんたのドキュメントと比べたいの。いい?」

「オツケー」

何かに気づいたのかりタはハロルドにも協力をお願い、ハロルドも軽くオツケーと返してリタはハロルドのドキュメントも展開する。と、リタは「やっぱり」と呟いた。

「カノンノの頭上に見えるドキュメントは普通のヒトとは違う……」

リタが呟くとセルシウスはカノンノの頭上のドキュメントに手をかざす。

「感じるわ。この中にヴェラトローパを……どうして、カノンノの中に?」

セルシウスの呟きにリタが「本当なの、それ!」と叫び、次に気づいたように「さらに展開すれば、ヴェラトローパのドキュメントが手に入る」と呟く。しかしドキュメントの細かい展開は被験者の身体に負担がかかってしまう。リタはそれゆえに躊躇してしまっていた。

「ううん、続けて」

しかしカノンノは自分への負担を顧みず、続けてとりタに言う。ヴェラトローパを出現させるために必要なものが今自分の中にある、だったら少しの負担くらい大丈夫。と

「強い意思にリタも「分かった」と答え、「少し我慢して」と言うとかノンノに手をかざす。その時カノンノの頭上のドキュメントがさらに細かく展開され、カノンノは気分が悪くなったのかふらつく。

「これよ。ヴェラトローパのドキュメント!!」

セルシウスが合図を出し、リタはすぐにドキュメントをコピーを始める。

「コピーできた! 可視化を解除するわ!!」

左手にコピーしたヴェラトローパのドキュメントを抱えながらリタはすぐにドキュメントの可視化を解除、するとカノンノの身体がぐらつき、華奢な身体が床に倒れ込みそうになる。

「つとー!」

そこに素早くカイが割り込んでカノンノを抱き止めた。

「カノンノ! おい、しっかりしろ!!」

カイが呼びかけるがカノンノは「う、ん……」と力のない声を漏らすのみ、リタは「やっぱり、かなりの負担だったのね」と呟き、続けて「肉体とドキュメントにズレが生じたのかも」と慌てたように声を漏らす。

「俺が医務室に連れて行く」

「私も一緒に行くわ」

「私はこのドキュメントを使って次元チューニング装置の調整をするわ！ カノンノがここまでやってくれたんだもん、絶対無駄にはしない!!」

カイはカノンノをお姫様抱っこの形で抱き上げて医務室に連れて行こうとし、セルシウスも同行すると言うとハロルドが「よく休ませてあげて」と念を押す。リタもこのヴェラトローパのドキュメントを使って次元チューニング装置の調整を開始。ドキュメントの細かい展開は危険だったが、カノンノの協力によってヴェラトローパに行く手がかりが手に入った。

「アニー、ナナリー。ヴェラトローパの次元干渉が気になるの。カノンノは任せていい？」

「は、はい!」

「デイセンダー、行くわよ」

「了解した」

セルシウスの指示を受け、カイは彼女と共に医務室を出ていき、実験を行う甲板へと走っていった。

「ええ!? その『ヒトの祖』の遺構って、空にあるの!」

甲板。カイが出てきた時に丁度、改良型次元チューニング装置を運んできた一人なのだろう。シングはハロルド達の説明を受けて驚きの声を上げていた。

「でも、何もねえぞ?」

続けて運搬係の一人なのだろう。ロニが虚空を見上げてそう尋ねる。それに対しリタは「あるの」と確信めいた口調で言い、「何もないところから引つ張り出すのよ」と力強く続ける。

「空間が反応してる……カノンノにあつたドクメントと呼応するように……」

次元チューニング装置を操作しているハロルドが静かに呟き「これを、私達と同じ物質の振動数に落としてやれば……」と言う。

「じゃあ、行くわよ!」

そう言つて彼女は装置を操作、それと共に装置の上面にある球体が光を放ちながら、キンキンキンという音波を放つ。と、ピンク色の光が虚空に現れ、それが球体状に輝いたかと思うと、その光の中からカノンノが描いていたものと全く同一と言える建造物が姿を現していた。

「なんだ?……宮殿?」

「これが、〃ヒトの祖〃の遺構……ヴェラトローパ……」

シングが呟き、ジエイドが空中の宮殿——遺構ヴェラトローパの出現に驚きの声を漏

らしていた。

「さてと！ この世界の始まり、創世の時のヒミツを探りましょうか！」

ハロルドは目の前に玩具がある子供のように、無邪気な声を響かせた。

「……」

その頃食堂、レイはパフェを食べる手を止める。

「およ、レイちゃん？ どしたの？ お腹一杯？」

レイヴンがそう尋ねる。が、レイは無言のまま、コップになみなみと注がれていたミルクを一気に飲み干すと席を立った。

「御馳走になった」

そして彼女はそう言い残し、静かに食堂を後にした。

「ちよ、レイちゃん……」

レイヴンはそうぼやいてまだ半分ほど残っているパフェを見た。

「いつくらレイちゃんの食べかけつってもさあ……おっさん、甘いもの苦手なんだよねえ……」

レイヴンは頬を引きつかせながらそう呟いた。

「世界の始まり……か」

ホール。アンジュは目を閉じてそう呟く。

「その謎が、ヴェラトローパへ行けば分かるかもしれないのね」

アンジュは目を開いてそう言う。その目の前にはカイ、ジュデイス、キール、ハロルドが立っていた。

「ラザリスの事をよく知るためにも、今回、あなた達には創世の時のについての調査をしてきてもらいたいの」

「任せてください」

「ええ。しっかりと働かせてもらおうわ」

「世界の始まり……その謎を紐解けるのか……」

「ほいほい。しっかりと調査してくるわ」

アンジュの言葉に対しカイは真面目に頷き、ジュデイスは妖艶に笑い、キールは科学者の卵として未だ誰も知らぬ謎の解明に立ち会えることに興奮し、ハロルドは飄々と微笑んでいた。

「待ってくれ」



が、それを遮る声が響く。

「レイ?」

「ヴェラトローパへの探索、我を同行させてもらいたい」

アンジュの眩きに対し食い気味でレイがそういう。それに対しアンジュは「いや、そんな事言ってももう四人決まっちゃったし……」と返す。

「……ヴェラトローパ……我はそこに行かねばならない……何かに、導かれている気がするんだ……」

レイは強い目を見せながらそう言い、その無意識化の威圧のようなオーラにキールがびくつと怯えたような反応を見せる。

「ふあゝ……」

と、空気を読まずに突然ハロルドが欠伸を漏らした。

「アンジュ、悪いけど私やつば寝るわ。私の代わりにレイをお願いできる?」

「え? あ、うん……まあ、ハロルドさんが良いんだったらいいけど……」

「んじゃ決まりね……ふあゝ」

最近寝てないらしいハロルドは大欠伸をしながら部屋に戻っていき、ハロルドが立っていた場所にレイが代わりに立つ。

「え、えーつと、なんかいきなりメンバー変わっちゃったけど……とにかく、ヴェラト

ローパの調査、お願いね！」

「了解！」

アンジュの指示に対しカイ達四人は異口同音に返し、アンジュも「行ってらっしゃい」という言葉に対してもカイが「行ってきます」と返し、四人は甲板に出る。そしてバンエルティア号もヴェラトローパ向けて急上昇をしてみた。

「……なんだ？」

ルミナシアのどこか。銀色の先に赤色のグラデーションがかかったような髪色をした、硬質的な格好をした少女は時空の乱れを感知して眩き、空を見上げる。その視線の先にはついさっきまでこの次元には存在していなかった宮殿が存在していた。

「へえ……」

宮殿——ヴェラトローパを見上げ、少女——ラザリスは妖しげな笑みをたたえていた。

## 第二十話 風の青年と創造の勇者

「ここが、ヒトの祖が今の人類になるその最後まで過ぎた場所か……」

キールが呟く。バンエルティア号からヴェラトローパへと降り立ち、少し歩みを進めたところだ。周りをきよろきよろと見回す彼の頬は興奮からか僅かに紅潮しており、平常そうに見せているようだが声も若干はずんでいる。

「私達の次元からは隠されていて、この宮殿はずっと生き続けていたのね」

ジュデイスもどこか感慨深げに呟く。と、さらに歩みを進めたところに石板が看板のように立っているのを発見する。

「ん、文字があるぞ？」

キールは石板に文字が書かれているのに気づき、手持ちの資料を取り出しながら「読めるだろうか」と呟く。が、ジュデイスが石板の前に立った。

「情報を読んだ方が早いわ。私に任せて」

「情報を……読む？……」

ジュデイスの言葉にレイが首を傾げる。と、キールが「ジュデイスは物から情報を読み取る『ナギーグ』』という能力を持つクリティア族なんだ」と説明。カイとレイは異口

同音に「ヘー」と言い、ジュデイスは石板に向かい合つて目を閉じる。

「……『創世伝えし者の為はこの空間を遺す』……つて書いてあるようよ」

ジュデイスは石板に書かれた情報を口に出し、「もしかして、創世を見た者がここにいて事かしら？」と彼らに言う。が、キールは「ありえないな」と否定。生物がそんなに長い間生きていられるはずもない、せいぜいそいつの塵が残つてるといふ程度だと反論した。

「あら、セルシウスは、創世の時を見ていた者はヒトとも精霊とも違つた。そう言つていたけれど？」

「いたとしても、まともにコンタクトを取れる存在か分からないだろう」

キールの反論にジュデイスもさらに反論。しかしキールはさらに反論し、安易な接触は危険だと主張するが、その直後何かに勘付く。

「おい……何か気配がしないか？」

「あら、もう魔物が入り込んだのかしら。もしくは、この宮殿に置かれた自動警備の類かもしれないわ」

キールの眩きにジュデイスが言い、その後半の言葉にキールは自動警備という余計なものまで物質化させたことで今ここにいない——今頃部屋でぐーすか惰眠を貪つてゐる事だろう——ハロルドに文句を言う。

「だが、ワクワクするな。先に行こう」

「ええ、賛成♪」

しかしカイは笑みを浮かべており、ジュデイスもふふつと微笑んでカイの言葉に賛成。二人は足を進める。

「はあく……ファアラに続いて無鉄砲な奴の世話をしなければならぬのか……」

その光景にキールがため息をつき、レイはそれを無言で眺めていた。

「……それにしても、とても綺麗な場所ね。幻想的」

ジュデイスがふふつと笑う。進んだ先にあつたのは石造りの通路で、中央に泉がある。十字路、さらに等間隔で樹が植えられており、泉を中心に左右対称の作りになっている。キールも「長い間誰もいないはずなのに、随分手入れが行き届いてるな……」と呟き、「これなら案内、自動警備とやらもお粗末なものなのかもしれないな」と安堵したように続ける。

「……なんて思ってた僕が甘かったよ!!」

その直後、ヴェラトローパの宮殿のような建物の中に入った後キールが叫ぶ。宮殿に入った途端、いつの間にか入り込んでいたのかあるいは長い間繁殖していたのか魔物が襲い掛かってきたのだ。クラブス種に分類され、黒い甲殻が特徴的なネガティブシザーに刺々しい触手をくねくねさせているローパー種、スティンローパーだ。

既に戦闘体勢に入っているレイが銃を左手に構えて射撃、カイも地を蹴ってモンスタ目掛けて突進し、ジユデイスも空中を舞うように跳んで槍を構えスティンローパーに斬りかかる。

「鬼炎斬！」

炎を纏った刀を振るい、ネガティブシザーの甲殻を斬る。刀自体は甲殻を傷つける程度で終わったがその斬撃の軌跡を炎が走り、その熱による痛みにもネガティブシザーが怯むとカイはその場をどくようにジャンプする。

「タイドバレット！」

そこにレイが水のマナを込めた銃弾で射撃、着弾と同時に大量の水が爆発するように溢れ出てネガティブシザーを襲い、熱された甲殻が水で急激に冷やされる。そこにカイが闇のマナを集中した右手を振り下ろした。

「滅掌破！」

闇のマナを込めた掌底が甲殻に当たった瞬間闇のマナを解放、その爆発が急激に熱せ

られた直後冷やされたせいでもろくなった甲殻を粉碎。カイは続けて左手に握っていた短刀を甲殻の砕けた部分に刺突。またも炎が燃え上がり、ネガティブシザーを内部から焼いていく。ネガティブシザーも痛みにも暴れるがカイはそれを押さえつけて炎での攻撃を続けた。ちなみにレイはもう援護はいらないと判断したのかジユデイスが相手しているステインローパーの方に向かっている。

「天月旋！」

ジユデイスはステインローパー目掛けて長い脚でのサマーソルトキックを蹴り込み、その蹴りの威力でステインローパーを空中まで蹴り上げる。

「ツインバレット！」

そこにレイが連続射撃でステインローパーを撃ち抜いた。

「あらレイ、お見事」

「……そうか？」

ジユデイスがふふつと笑いながら言うが、レイは静かにそう返すのみ。それに対しジユデイスは「あら」と一つ笑う。ステインローパーに直撃したはずの銃弾は、ステインローパーの弾力性のある身体により、貫通だけは免れていた。

「あらあら」

「なら、直接斬る」

ジユデイスが驚いたように呟くとレイは銃をしまつて剣を抜く。それにジユデイスもまた一つ笑みを浮かべて槍をくるくると回すようにして構え直し、数歩バックステップを踏むと力を込めるような前傾姿勢になり、直後一気にダツシュ。

「月影刃!」

ジユデイスの槍が加速の勢いを込められて突き出され、ステインローパーに突き刺さる。その直後、空中に跳んだレイが宙を蹴る。

「飛天翔駆!!」

空中からの急降下斬撃がステインローパーを斬る。レイはその手応えにふつと微笑を見せ、剣をひゆんと振るうと腰の鞘に収めようとする。

「きやつ!?!」

が、突然お尻を何かがぬるんと触り、思わず声を上げてしまう。

「そんな、レイ! まだ生きてる!?! ひやつ!?!」

「きやつ!?!」

ローパーは槍に串刺しにされ、斬撃をくらったにも関わらずまだ息があり、ジユデイスが血相を変えて叫ぶが彼女やレイは触手に絡め取られてしまう。

「このつ、離しなさいっ!」

「き、貴様っ!」



ジュデイスとレイが暴れるが、触手に絡め取られた時に武器を取り落としてしまったため素手でどうにかするしかなく、触手も二人も暴れまくっているため二人の豊かな胸が揺れる。

「……」

その光景にキールが目やり場に困ったように目を背けて左手で顔を隠しながら、ステインローパーの方に杖を向ける。

「白き御手よ、清冽なる柩に封じよ!! アブソリユート!!!」

キールの叫びと共にステインローパーの周辺に氷のマナが集中。絶対零度の力がステインローパーを凝固させ、動きが止まった隙にレイが銃を抜いてステインローパーを射撃、凝固していたステインローパーを粉碎する。

「ふう……」

ステインローパーが粉碎され、床に降り立ったレイはふうと息を吐いて剣を拾い上げ、ジュデイスは槍を拾うとキールの方に歩いてにこりと微笑んだ。

「ありがとう、助かったわ」

「べ、別に。フォローするのは仲間として当然だ」

ジュデイスの言葉にキールはぶいっと顔を背け、目を瞑りながらそう言う。

「この辺の敵は全滅した。先を急ごう」

そしてカイがそう言い、彼らは再び歩き出す。

「……」

「？」

が、その途中でジュデイスはキールの異変に気づいた。

「キール？　ずっと足元ばかり見ているけれど、どうかしたのかしら？」

ジュデイスはキールにそう問いかけ、レイも「気分でも悪いのか？」と問いかけるがキールは「なんでもない！」と叫んで彼女らから目を逸らす。

「僕はただ、意味もなく女性の肌を視界に入れるべきではないという常識的かつ当然の判断に基づいて……」

「あら。照れているの？」

「違う！　そうじゃなくて……」

キールの言葉にジュデイスが察したように尋ねるとキールはそれを否定するが、顔が赤く、目を瞑って顔を逸らしている状態では説得力がない。

「ふふ。隠さなくてもいいのに。こういう時は自分に素直になってもいいのよ」

「だ……だから……そんなじゃないって、言ってるだろう……」

ジュデイスの言葉にキールはさらに否定を続けるがそれは尻すぼみになっていく。顔は湯気が出そうな程に真っ赤になっていた。

「あらあら。かわいいわね。うふふ」

その初心な反応に、ジュデイスはうふふと笑った。

と、ジュデイスがキールをからかいながら歩いていると宮殿から一旦出るようになってしまい、しかしその場所——庭園に壁画があるのをカイ達は発見する。

「壁に絵が……」

「壁画だな……これは世界樹か？」

カイが呟き、キールが言う。その言葉通り壁画の中心には世界樹が目立つように描かれており、その周囲に様々な生き物が描かれているようだ。それからキールはジュデイスに「絵から情報を読み取れるか？」と尋ね、ジュデイスも「やってみるわ」と返すと絵の前に立って目を閉じ、絵から情報を読み取り始める。

「……」  
 “世界樹とは、世界を生みしもの……大地、自然の摂理、そして生命体を作り出す”

「なんだ、僕達の認識と変わらないじゃないか」

ジュデイスが読み取った情報を口にするキールはあとため息交じりに漏らす。が、ジュデイスは「続きがあるわ」と言った。

「……」  
 “世界樹の始まりは一つの種子。宙空のただ中を漂いながら芽吹き、創造を始める”……これは、大地や生命を生み出す行為ね……そして世界樹は、作られた世界と

調和を成しながら、さらに成長していく……それから調和によりマナ満ちた時、世界樹は新たな世界となる種子を付ける。」「

「なんだって?」

ジュデイスの読み取った情報、その最後の一文のキールが驚きの声を上げる。すなわち、今彼らがいる世界ルミナシアは、かつてどこか存在していた世界樹から生まれた種子が芽吹いたものである。ということだ。

「……この壁画にある情報は、ここまでよ。他にもある様だから、見に行ってみましよう」

その言葉に皆が頷き、一行はその場を後にした。再び宮殿に入って魔物と戦いつつ、彼らは新たな壁画の飾られている庭園へと到着した。まるで雨のように水が降り注いでいる光景が描かれており、その水の中にはヒトを含めた生物の絵が一つの滴につき一体ずつ描かれている。

「今度の絵はなんだ?」

キールが、早速情報を読み取り始めたジュデイスに尋ねた。

「この絵は……世界の大地が生まれた後の事ね。大地が生まれた後、ヒトの祖と精霊が生まれた。非物質だけでも、知的生命の誕生という事になるのかしら……」

「セルシウスもこの頃に生まれたのか?」

「そういう事だろうな。ジュデイス、続けてくれ」

ジュデイスの話にカイが仲間の精霊を思い出しながら尋ね、それをキールは肯定した後ジュデイスに「続けてくれ」と促す。

「……ヒトの祖は、ここヴェラトローパを創り、ヒトとなるために肉体や潜在能力を設計した。そして、設計通りの身体をまとい、地上に降りたようよ」

「まさに、ソウルアルケミー……神の成せる業だな」

ジュデイスの読み取った情報を聞いたキールが眩き、ジュデイスは、ソウルアルケミーはヴェラトローパの民が普通に持っていた能力であり、自分達には魔術の曙で失われた技術とされていたが、ここでは当たり前に使われていた。と話す。

「私達クリティアという種族、そしてこのナギグという力は、ここで決められたのね」

「人間も、ユージーンのようなガジュマも、カイウスのようなリカンツも……」

「コレットのように羽のある者も……全てのヒト、人類はここから始まったのか」

ジュデイスが己の能力を思いながら眩き、次にカイとレイがそういう。が、キールは腕を組んで首を傾げた。

「だが、〃ヒトの祖〃はなぜ地上へ？　ここに残れば、神のように生きられたらうに」

「世界と共に、創造するため、ね」

キールの疑問にジュデイスが答え、世界樹の被造物であるヒトの祖もまた、世界と共

に創造の担い手として生きる事を決めたのだと語る。それは実際に生きて、世界と調和し、経験をする事。世界にある生命全てが学び合い、向上していく事である。そうしなければ新しい発見もなかったはずだ。

「世界をより成長させていくために、一からの学びの道を選んだのね」

ジュデイスは壁画を見上げ、キール達に背を向けながらそう話す。

「それが、今の世の中の有様か？ 成長どころか後退してるじゃないか！」

その言葉にキールが叫ぶ。が、ジュデイスは「そう？」と言つて振り向き、妖しげな笑みを見せた。

「今が、学びの時かもしれないわよ？」

その妖しげな笑みと言葉にキールは硬直。ジュデイスは「次に行きましょう」と言つて歩きだし、カイとレイもその後を追つて歩いていくと、キールも大慌てで後を追いつり出した。そのままさらに奥に進んでいき、三度彼らは壁画の飾られている庭園へと辿り着く。

「この絵は何だ？ 一つは世界樹。横にあるのは……」

キールが壁画を見てジュデイスに問う。キール達から見て左側に世界樹が描かれ、右の方には大きな目玉がまるで光でも放っているかのような絵が、その二つを無限大のマークの左右の円で囲まれた形で描かれていた。ジュデイスはナギグによつてその

情報を読み取る。

「これは、世界樹の種子……ルミナシアではない種子よ。それが、この世界の近くにあってと描かれている……」

ジュデイスはそこまで言い、少し考えた様子を見せるとはつとしたように「分かったわー」と言った。

「私達の世界ルミナシアが生まれる一方で、傍らにある芽吹かなかった世界が、この世界に取り込まれている。このことなのよ、ラザリスが言った『生まれるはずだった世界』」

ジュデイスは自らの考えを話し、ラザリスの正体はもう一つの世界そのものなんだと結論を出す。

「ラザリスが、発芽しなかった世界の種子だったって？　なぜ、そんなものが取り込まれてるんだ？」

「なぜ種子を取り込んだのかはわからないわ。でも、種子を取り込んだことよってこのルミナシアに大きな災厄が起ったと……どんな災厄があったかは伝えられていないわ。ただ、あまりにも理が違う為、としか読み取れないの」

ジュデイスはキールの疑問に対し首を横に振ってそう答え、「確かなのは、ルミナシアの世界樹は、もう一つの世界を取り込んでいるという事よ」と話す。

「ラザリス……赤い煙……星晶によって封じられていたと言っていたな」

「そう、星晶はやはりそのために世界樹が生んだものみたい。人々のエネルギーにするためではなく、ね」

「……しかし、人間が星晶を消費したため、ラザリスの封印が解けた。というわけか」  
キールの呟きにジュデイスがそう言い、カイがそう続ける。

「急ぐう」

カイはそう言つて歩きだし、ジュデイスもあら、と言つて歩き出すとキールもふうつと息を吐いて歩き始める。

「……」

ただ一人、レイはその場を微動だにせず壁画に描かれている目玉のようなもの——ジュデイスがラザリスを示しているのだと話したもの——をじつと見つめていた。

「お、おい、レイ？ 遅れるな……」

「……ああ」

杖について歩いているキールの呼びかけに、レイも頷いて壁画から視線を外してすたと歩き始めた。

「はあ、はあ……」

レイにあつさりと思い抜かれ、キールはふらふらとしながら杖をついて歩いていく。



が、そのペースはカイ達と比べてかなり遅れていた。

「……少し休憩しましょうか？」

キールが遅れているのに気づいたジュデイスが彼の前まで走り、キールを覗き込むようにしながら尋ねる。が、彼はそれを「必要ない」と切り捨てた。

「この先に、僕達の……いや、この世界の全ての学者が渴望する真実があるかもしれないんだ。それを思えばこれくらい……なんともないさ」

「そう……」

キールは心の底から楽しみなように微笑んでおり、それにジュデイスは目を細めて眩いた後、キールの異常に気付いて「キール」と彼の名を呼ぶ。

「なんだ……!?!」

いきなり呼びかけられ、キールが返すと同時に彼の足がもつれ、すっ転んでしまう。

「転ばないように気をつけて。足が震えているわよ?」

「紛らわしいタイミングで声をかけるのはやめてくれ!」

一歩遅かったジュデイスの忠告に、キールは両手で石畳をだんつと叩いて彼女に叫んだ。

「せいっ!」

「はっ」

ジュデイスとキールがそんな漫才をしている間に、カイとレイは前衛でステインローパーやネガティブシザーと戦っていた。

「曼珠沙華！」

「ブレイズバレット！」

炎を纏った苦無がステインローパーに刺さると共にそれを燃やし、レイが左右に撃ち払った銃弾がネガティブシザーの甲殻を砕き、肉を貫く。敵を沈黙を確認し、カイは刀を鞘に収め、レイは銃に弾丸を補充する。

「レイ」

「……なんだ？」

カイがふとレイに話しかけ、レイは弾丸を補充した銃のセーフティをかけて腰に戻してからカイに問い返す。

「……いや、なんか様子が変だなと思ってな」

「そうか？」

「……いや、気のせいならいい」

ただただ静かに、そう言い合うのみ。そうこうしている内にキールがジュデイスに手を引かれて合流し、彼らはまた奥に向かって進みだした。そして、また庭園に出て壁画を発見する。

「中心に居るのは……人間か？ その周りには何かの周囲にあるのは武器か何かのようだが」

キールは目を凝らして壁画を観察し、そう言う。幾何学的ではぼシムメトリーな文様の中心に描かれているのは人間らしき者の姿と、その周りに人間らしき者を囲むように武器が描かれている。ジュデイスがその壁画に込められた情報を読む。

「予言ね。私達にも伝わっている、デイセンドラーの予言…… “世界の危機が生まれし時、世界樹はデイセンドラーを生み出す。それは、世界の守り手”……」

ジュデイスは壁画の情報——デイセンドラー伝説を読み取り、生まれた時には記憶がないこと、世界を救った後はまた世界樹へ還る。など、現在まで伝わっている伝説とほぼ同様な事を伝えた。

「デイセンドラーの予言のルーツはここからだったのか……」

キールが呟き、そのデイセンドラーであるカイを見る。が、キールは待てよと呟くと「何故 “ヒトの祖” はデイセンドラーを知っていたんだ」と疑問を見せる。

「創世を伝えし者より、もたらされたみたいね。そして、地上へ降りたヒトの祖が、この予言を後世に伝えていた」

ジュデイスは真剣な表情でそう言った後、「そんなところじゃないかしら？」と首を傾げてみせる。

「なあ、カイ。お前のデイセンドラーという存在は、世界樹のシステムの一つなのか？」

「さあ？」

キールの問いかけにカイは首を傾げ、キールは「本当にお前はデイセンダーなのか？」とため息を漏らす。

「ところでジュデイス。この武具みたいなのはなんなんだ？」

カイが興味を持ったのかジュデイスに問う。それにジュデイスは再び壁画に向き合  
い、情報を読む。

「光まとう者に送りし輝ける光器……『レイアント』とあるわ」

ジュデイスは輝ける光器——レイアントをデイセンダーが現れた時の為に作られた特殊な武具。ヒトの祖がソウルアルケミーによって創ったものと説明。デイセンダーはあらゆる姿に転じるため、様々な種類の武具を用意したそうだ。

「カ、カイの為だけに作られた武具だって？……」

「……俺は今のところ、忍者としてしか鍛えていないんだが……」

キールはたった一人の為にそれも様々な種類が作られたという贅沢な武具に絶句し、カイも流石に困惑を見せていた。

「でも、簡単には手に入らないみたい」

ジュデイスは続ける。レイアントはデイセンダー以外の手に渡らないよう、ヒトの祖が作った人工精霊が纏っているらしい。

「つまり、レディアントを手に入れるためには、その人工精霊と戦う必要がある訳か」  
レイがそう言う。その口元には若干の笑みが浮かんでいた。が、ジュデイスは「そう  
ね」と返すのみ、カイとキールもレイの口元の笑みには気づいていなかった。

「壁画はこれで終わりか……」

キールは壁画に描かれていたのがデイセクターの伝説、つまり創世の話は終わったと  
考え、調査はここまでかと呟く。

「思い出したわ!」

そこにジュデイスが気づく。ここへの入り口には「創世伝えし者の為にこの空間を遺  
す」と書かれていた。それを聞いたキールは「もつと奥の調査が必要か?」と尋ね、ジュ  
デイスも「『創世伝えし者』に会ってみたい」と微笑む。

「僕は反対だ! こちらに敵意を向けられる可能性がある!」

ヴェラトローパに入った時と同じく、創世伝えし者とコンタクトを取るには消極的な  
キール。しかしもうちよつと調査が必要なのは認める、と続け、ジュデイスの言う通り  
ヴェラトローパのさらに奥への調査を行う事となった。

「これは……」

「またも宮殿から出る形となり、ヴェラトローパの最奥と思える場所。そこに金色の身体で幾何学的な形をした小さな物体が浮遊していた。」

「ここ、ヴェラトローパとはまた異質なものだ……」

キールもその物体を見てそう分析。物体の質感を鑑みてこの世界には存在しないものかもしれないと呟く。

「私、呼びかけてみるわ」

ジュデイスがそう言つて一歩前に出て目を閉じる。キールも「用心しろよ」と返した。カイも万一物体が脅威だった場合すぐ対処できるようさりげなく刀に手を添え、レイは僅かに後ろに下がる。

「我々に呼びかけるのは誰だ……」

と、物体の方からそんな声が聞こえてきた。

「じゃ、喋った!?!」

キールが驚きのまま声を出す。物体は「そなたらは、ルミナシアの民か?」と尋ね、ジュデイスは首肯の後、「あなたが創世を見届けし者?」と質問を返す。

「我々はニアタ・モナド。肉体を捨て、デイセクターの介添え人として、一つの機器に宿った精神集合体だ」

物体——ニアタ・モナドは自らをそう紹介する。

「デイセンダーの介添え人？」

その中の一文にジュデイスが反応した。

「そうだ。そなたらと異なる世界『パスカ』のデイセンダーに使えしものだった」

「異なる世界のデイセンダー？ あんたの世界にも世界樹があつたつて事か？」

ニアタの言葉にキールが質問をするとニアタは「左様」と返答。しかし彼らの世界は遙か過去に寿命を迎え、もう存在していないそうだ。

「世界もなく、仕えるデイセンダーもおらず、我々は朽ちぬ機械の身体のままあらゆる世界を旅している最中に……また種子の状態だったこの世界を見つけたのだ」

「そして、このルミナシアの創世を目にした。というわけか」

ニアタの言葉にカイがそう言い、ニアタは「そうだ」とその言葉を肯定。この世界が我らの世界の記憶を受け継ぐものかどうか、それを知るために留まったのだと話す。

「記憶？」

それにキールが首を傾げる。

「世界樹の種子は、その親となる世界の記憶を受け継ぐ。どのような者が存在したか、どのような生命が存在したか……全ての情報を受け継がせる」

ニアタの言葉にキールが「本当に生物と同じなんだな」と驚いたように呟く。

「では、伝えられる記憶を元に、新しい世界は構築されるのか？」

「そうだ。そうして、生まれ行く世界は進化し続ける」

「では、このルミナシアに、あなたの故郷の記憶が？」

キールの質問をニアタは肯定、続けてジュデイスがそう問いかけるがニアタはそれを否定する。この世界はパスカの記憶を有してはいないらしい。

「だから、我々は6000年前にこの世界を去ったのだ」

「だが、お前は今ここに……」

「今、そなたらと対話しているのは、我々の端末の一つ。本来は遠く時空を隔てた別の世界にある」

「端末だつて？ 何のためにそんな事を？」

ニアタの話にキールは首を傾げる。それにニアタは「我々とて、世界樹の全てを知っているわけではない」と話す。この身体朽ちるまで、それを探求したかったのだとニアタは話した。

「ここで、観察していたつてわけか」

「それに、我々には誓いがある」

ニアタは「世界に危機訪れしとき、そこに住む民に力を貸す」と誓いを口にし、ニアタはカイを見る。

「そして、デイセクターよ。そなたが生まれたというなら、今がその時なのだな」



「ああ……この世界に封じられていたもう一つの世界……創世を見届けたというのなら、お前も見ていたんだらう？」

「それが、この世界に現れたの。一つの人格と、姿を得て……」

ニアタの言葉にカイが頷き、ジュデイスが説明。ニアタは「なるほど」と呟く。

「『生命の場』を持たない情報だけの存在が、この世界の生命力を得て、姿を持ったのだな」

「『生命の場』？ 『情報だけの存在』とは？」

聞き慣れぬ専門用語のような言葉にキールが反応した。

「世界樹の種子に実体はなく、輝くエネルギーのみで構成されている。そこには、生命を生み出す力『生命の場』と、いかなる世界を構築するかの『情報』がある。この二つがなければ、種子は芽吹かない」

ニアタの言葉にジュデイスが「情報」と呟き、察したように頷く。

「言い換えれば、ドクメントだけの存在だったラザリスに、私達の世界の人間が願う……それを叶える事で、ラザリスは力を得てしまった……そういう事かしら？」

ジュデイスが己なりの考えをニアタに問いかける。

「！」

その次の瞬間、カイが背後からの敵意に反応。振り向く。そこに移るのは棒立ちし、

全く背後の敵意——その脅威を気にも留めていないレイ。そしてその後ろから迫りくる赤い光線だった。その赤い光線はカイ達を狙ったものではない。

「！」

光線が狙っていたのはニアタだ。

「ニアタ!!!」

カイがニアタの方を向いて叫び、直後再び光線が飛んできた方を睨みつける。

「時空が騒いだと思ったら、こんなものがあつたなんてね」

「ラザリス……」

ニアタを狙った脅威——ラザリスの存在に、キールが僅かに怯えが走った様子で、しかし毅然とした様子でラザリスを呼ぶ。レイは未だ微動だにしない。

「ボクが何者か、分かったようだね」

ラザリスは嘲笑するようにそう問いかける。

「あなたは、ルミナシアに取り込まれた世界樹の種子……」

「そう。ボクは生まれるはずだった世界ジルディアにして、その一部……だけど、僕の種子は芽吹かなかつた」

ジュデイスの言葉にラザリスは頷き、説明する。

「ボクはね、あのまま朽ちるはずだったんだ。でも、君達の世界樹は僕を取り込み、星晶

で封じたんだよ」

ラザリスはそう言い、一歩一歩歩き寄りながら、カイを睨みつける。

「何のために封じたんだい、デイセンダー……生まれれる事も出来ず、価値のない僕をなぜわざわざ封印したんだ」

「……知るか」

「ふん、知った事ではないってんだね」

ラザリスは、怒りに表情を歪めながらさらに前に出る。カイ達より後ろに下がっていったレイを追い抜き、彼女に無防備に背中を晒す形になる。

「ともかく、どういうわけかボクはこの世界に解き放たれた」

ラザリスは「呆れたよ」と嘲笑する。ルミナシアは星晶の大量消費と星晶を取り合う戦争により、自滅の道を歩んでいる。それを嘲たのだ。

「だから」

ラザリスは妖しく笑う。

「この世界はボクがもろうよ!!!」

ラザリスが叫ぶと同時に、ルミナシアの大地が揺れ、大地が割れると巨大な牙のような突起物が突き出す。その光景にカイ、ジュデイス、キールは絶句した。

「なんだ、あれは!?!」

フリーズ状態から脱出したキールが叫ぶ。

「アレは、僕の世界ジルディアのほんの一部。まだまだ世界樹が生命の場を譲ってくれそうにないから、一度にはムリだけど……でも、やがてすべてをボク色に塗り替えるよ。じわじわとね」

ラザリスが不敵に笑いながら、恍惚としたように「ボクならもつといい世界を生みだせる」と語ったその時、レイの立っている方からカチャツと、銃を準備する音が聞こえる。ラザリスの背後に立っていたレイは銃を構え、引き金を引いて銃弾を放つ、  
「つつつつ?!」

カイの頭目掛けて。自分が狙われていたことにすんで気づいたカイは咄嗟にその場を飛び退いて銃弾が目の前を通るのを見、その姿を見たキールがレイを睨みつけた。

「レイ！ お前、何を考えている!?!」

「黙れ。ルミナシアの人間」

「!?!」

キールの怒号に、レイはキールを睨みつけ底冷えのするような声で返し彼を威圧する。そしてレイは銃を三人の方に向けたまま、ラザリスの前に出る。その姿はまるで主を守ろうとする騎士の如く。その姿にラザリスは満足そうに微笑んだ。

「ありがとう……ボクのデイセンサー」

「デイセセンター!?!」

ラザリスの言葉にキールとジュデイスが驚愕の声を上げる。それにレイはいかにも  
というように頷いた。

「我はデイセセンターだ。この世界ルミナシアではなく、ジルディアの……ついさつき、あの壁面を見た辺りで違和感を感じていたが、ラザリス様のお力、ジルディアの一部を見てようやく思い出せた……そして、今我は確信した」

レイは嬉しそうに微笑んで呟いた後、カイ達を睨む。

「この世界は人間の手によって蝕まれている。一度創り直されるべきだ」

「な、何を言ってるんだ!?! そんな事したら!?!」

「我は見てきた。人が人を捨てるところを、自分勝手な願いを叶えようとする人間を」

「そ、それはっ!?!」

レイの言葉にキールが叫ぶが、続けての彼女の言葉にキールは反論できなくなる。レイが見てきたという人間の行動、それはモラード村の村長トマスが赤い煙——ラザリスによつて生物変化現象を起こしたミゲルとジョアンを砂漠に捨てようとしたこと、そしてルバール連山に調査に行った時の俗っぽい二人組のことだ。そしてレイはカイを睨む。

「ルミナシアのデイセセンター。今までは仲良くしていたが、ここまでだ」

「……」

レイはカイを睨み、カイも真剣な目でレイを見る。

「今まで世話になったな」

次にレイはキールやジュデイス、さらにはその背後にいる大きな何かを見るように二人を見た。

「我は貴様ら……アドリビトムと決別する」

そしてレイは今まで自分が過ごしてきた場所との決別を宣言した。

「ルミナシアのデイセンサー。君もいずれ、ボクのものになってもらうよ」

最後にラザリスがそう呟いた瞬間、二人の姿がヴェラトローパから消え去った。

「……ニアター……」

ラザリスが去ったと確認した後、ジュデイスは改めてニアタを呼び、駆け寄って膝をつく。

「あの……ラザリスが……出現させたものが、世界を……侵食し始めている……このルミナシアの……理を変えていく……媒体だ……最終的には……世界樹の生命の場を……乗っ取る……つもりだろう……」

「そんな……どうすればいいんだ？……」

ニアタの言葉にキールが絶句し、牙のような突起物を睨みつける。

「星晶で……封じたと……言つて……いたな……世界樹が……生んだ……あの物質の事か……」

「でも、星晶のほとんどが採掘されてしまつて、残つていないわ」

その言葉にジュデイスは首を横に振る。

「そなた……モノから情報を読む力を持つよう……自らを設計して地上へ降りた……クリティア族……だな……」

ニアタはジュデイスを見て確認するよう問いかけ、ジュデイスが無言で首肯をすると、ニアタの身体から光が走つてジュデイスの前に凝縮。その光からプレートが生み出された。

「ならば……必要な事は……このプレートに記して……ある。力に……なれば……いいが……」

言い終えた瞬間、ザーとノイズのような音がニアタから聞こえ始める。

「もう、反応がない……」

「みんな、一度戻るぞ」

キールの言葉にカイは静かにそう言い、振り返る。

「今回の事も、そして……レイの……ジルディアのデイセンダーの事についても報告する」

そう言ってカイは歩き出し、ジユデイスもプレートを抱えて立ち上がり、キールも慌てて後を追いかけた。

「お疲れ様。無事に戻れて何よりよ」

アンジュはカイ達が戻ってきて安心したように微笑んだ後、違和感に気づいて首を傾げる。

「レイは？」

その言葉にジユデイスとキールが口ごもる。が、カイが構うことなく話し始める。ヴェラトローパにラザリスが出現したこと、ラザリスが変な牙のようなものを生み出したこと、そして、レイがジルディアのデイセンサーであったこと。

「レイが……ジルディアのデイセンサー？……そんな、まさか……」

アンジュはレイが敵であったことに呆然とし、信じられない様にうつむく。が、首を横に振って顔を上げた。

「カイが言っているのなら本当なんでしょうね……今はレイの事は置いておきましょう……皆、ラザリスが生み出したというあの牙のようなものの出現に動揺しているの……近隣の村とかに、被害がないか気になるよね……」



アンジュは今どうなったか分からないレイの事を気にしていてもしょうがないと聞き直り、現在世界中に動揺を走らせるであろう牙のようなものに話を変える。

「あ、そうだ。今後あれはジルディアのキバって呼びましょう。ね、決まり！」

「はい、別に構いません」

アンジュの明るい声での提案にカイは頷く。

「さて、と。ヴェラトローパでの報告は詳しくはキール君から聞こうと思うんだけど、いいかな？」

「分かりました」

報告はキールに任せる事になった後、カイは少し頭をかく。

「アンジュさん、カノンノは……」

「まだ寝てるはずだけど……じゃあ、カイにはカノンノの様子を見てきてもらおうかな」  
「分かりました」

アンジュからカノンノの様子を見てきてほしいという指示を受けたカイは気のせいかほつとした表情を見せ、キールとジユデイスに後を任せて医務室へと向かっていくのであった。

## 第二十一話 封印次元を作るために

ヴェラトローパから帰還した後、カイはヴェラトローパで起きた事の報告——ヒトの祖が遺した世界創造の真実について、ラザリスの正体、そしてレイの正体と彼女の裏切り——を同行していたキールとジユデイスに任せ、医務室にやってきていた。別に任務の中で怪我をしたわけではない。ヴェラトローパに行くために必要だったヴェラトローパのドクメントを何故か自身のドクメントの中に持っていたカノンはそのドクメントを摘出する過程で気を失って医務室送りになってしまい、カイはそのお見舞いやってきていた。

「あれっ、カイ。どうしたの？」

「カノンノ……もう起きて大丈夫なのか？」

医務室に入ってきたカイを出迎えたのはベッドに腰掛ける形で座っているカノンノ。その姿にカイが尋ねると彼女は照れたようにはにかむ。

「もしかして、心配してくれたの？　ありがと……」

はにかんでお礼を言った後、「もう仕事できるから、大丈夫」と言ってみんと力を入れるようなしぐさを見せる。

「……アニーとナナリーは？」

カイが問う。医務室には常駐している一応船医であるアニーと、その手伝い——及びアニーをナンパしてくるロニ達や仮病で休もうとする者を追い返す役——をしているナナリーの姿はなく、カノンノは、ナナリーは夕食の当番でアニーはルカから借りていた医学書を返しに行っているのだと説明。別に自分も元気だし、つきつきりになつてなくても大丈夫だと彼女は笑つた。

「そういえば、ヴェラトローパに行ってきたんだよね。どうだった？」

「ああ……」

カノンノのわくわくとした様子での質問にカイは起きた事をありのままに話す。最初こそ自分達の知らなかった真実にカノンノは「わあ！」と歓声を上げるが、話が終わるにつれ、表情が曇っていく。

「レイが……ジルディアのディセクター……」

表情が曇るカノンノにカイは何も返せず、しゅんとなったようにうつむいている彼女の頭にほん、と手を置くと彼女の頭を撫でる。

「ん……ありがとう」

なでなでされたカノンノは頬を緩ませてお礼を言う。

「うん……レイだってディセクターだもん。自分の世界であるラザリスを守るのは当然

だよね……でも、残念だなあ」

カノンノは友達であったレイが裏切ったことにはあとため息をつく。

「……それにしても、今の話の中でもヒトの祖の話……すごいよね。世界と共に、創造するために地上に降りたなんて」

カノンノは重くなつた空気を変えようと話を交える。

「私達、その“ヒトの祖”の子孫なんだなつて思つたら、すごく不思議な気分。不思議で、素敵な事だと思ふけど……でも……今の世界はどうかかな？……」

また、彼女の声がしほむ。今、ルミナシアに住んでいるヒトは皆、戦争で星晶を奪い合い、欲しがり、皆違う方向を見ている。

「世界樹は……寂しがってないかな」

「……さあな？……でも、大丈夫だと思う」

カノンノの暗い表情での呟きに、カイはそう言つてふつと笑みを見せてカノンノの隣に座つてカノンノの方を見る。

「今ここに、世界樹や世界の心配をしている奴らがいる。きっと大丈夫だ」

「……カイは、皆の事を信じているんだね」

その言葉にカノンノも儂げな笑みを見せた。

「うん。今、悲観的になつたらだめだよ」

世界をよくするために、アドリビトムはあるんだもん。とカノンノは再び笑う。が、直後彼女は気づいたように、どこか寂しげな顔を見せた。

「でも、世界が良くなったたら……あなたは、予言の通りに世界樹へ還らないといけないの？」

「……さあな」

カノンノの問いかけにカイは天井を見上げながら返す。実際分らないのだからしようがない。と、カノンノはカイの服をきゅつと掴んだ。

「レイだけじゃなくて、あなたまでいなくなったら……私、寂しいよ……」

寂しげな目で、カノンノはカイを見上げる。それに対しカイは優しげに微笑むとまたカノンノの頭にぼんつと右手を置いた。

「大丈夫だ。もしそうなくても、俺は絶対に戻ってくる」

「カイ……ありがと」

その言葉にカノンノは嬉しそうに笑う。その時、ぷしゅつと音を立てて医務室の扉が開いた。

「あの、カイさん。こちらに來ているとアンジュさんから伺っているんですが。一応怪我などしてないか確認だけでも……」

アニーはカイが怪我をしていないか確認をしようかと言うが、直後ベッドの上でカノ

ンノが甘えるようにカイの服の裾をきゅつと掴み、カイが穏やかに微笑んでカノンノの頭を撫でている光景を見ると硬直。その顔がどんだん赤く染まっていく。

「あ、ごめんなさい！ いえっ、その……カ、カノンノさんは、も、もう大丈夫ですけど、本当はもう少し休んでいた方がいいというか……その、あまりムリは……」

「ふみやああああああああつ?!?!」

真つ赤な顔であたふたアニーがそう言った直後、こちらも顔を真つ赤に染めたカノンノの悲鳴が響き渡った。

「セルシウス。ラザリスは世界樹……その中でも生命の場を狙っているようだが、生命の場というものを詳しく教えてくれないか？」

カイがホールへと戻ってくると、キールとセルシウス、リタが何か話し合っていた。ちなみにカノンノはさっきの変な勘違いの結果熱暴走を起こし、ベッドに突っ伏して布団を被り「うぅうぅ」と唸り始めてどうにもならず、申し訳なさそうに頭を下げているアニーに任せて置いてきている。

「世界樹の中にある、マナを生み出す部分。全ての源、世界樹の心臓とも言えるし、この世界そのもののドキュメントでもあるわ」

「と、なると、そのドキュメントが侵食されてしまえば、ラザリスの世界へ作り変えられる……か」

セルシウスから説明を受け、キールはそう分析。しかしセルシウスは生命の場は世界樹自身か、もしくはは世界樹の分身であるデイセンダーにしかそれは扱えないと言う。それにリタがなるほどね、と頷くと戻ってきていたカイに気づき、彼に声をかける。

「カイ、お前が生命の場を守りに行く事は出来ないの？」

「いや、分からん……生命の場というものの記憶が俺にはないからどうしようもない」  
「駄目か……」

彼の質問にカイは首を横に振って返し、それを聞いたキールはそう呟いて頭をかく。

「ラザリスが手にしたところで、簡単に扱えるものではないはずよ……恐らく、だけれどね……」

「つまり、共に滅びる可能性もある訳だな」

セルシウスの言葉にキールは最悪の可能性を想定する。

「まだ、完全に手詰まり、というわけではないわ」

と、そこにジュデイスが口を挟んだ。

「だって、彼は力を貸すと言ったもの」

そう言って彼女が取り出すのは不思議な光を宿すプレート。ニアタから託されたも

のだ。

「読んだのか？」

「ええ。あのキバは、ラザリスが封印されていた次元から、物理法則を超えて、このルミナシアへ現れている。パイプのようなものよ」

「パイプ？」

キールが尋ね、ジュデイスがジルディアのキバについて説明、リタがそんな声を漏らす。それにジュデイスはええ、と頷いて、ラザリスの世界の情報を通すパイプ、だと言う。

「で、他に読み取れたことは？」

「ラザリス、及び彼女の世界ジルディアはが封印されていた次元は、星晶によって作られたらしいわ」

「だが、星晶はこの世界の人間が採掘し、採り尽くしたと……」

キールの問いかけにジュデイスはそう続け、星晶という単語にカイが反応しそう言う。とジュデイスはまた、ええ、と頷く。

「封印されていた次元はほころんでいる。元に戻すのは星晶が必要なのに」  
「でも、どうすんのよ。星晶はほとんど採掘されて、もう無いじゃない」

ジュデイスの言葉にリタがそう繰り返す。それに対しジュデイスは「星晶の代用とな



るものを作る事が出来るみたいなの」とプレートの情報を読む。しかしそれは自分達が生活するためのエネルギーとして使う事は無理なようだ、と続けた。星晶の代用品は、ラザリスに再び封印を施すためのものであり、その代用品で「封印次元」を構築したら、この世界を包むように封印を施す。

「……そうすれば、ラザリス、そしてレイを封じられる。ということか?」

「そうみたい」

「星晶の代用はどうやって?」

結論を問うカイに対しジュデイスは肯定、リタが足をトントンとしながら話題を急ぐ。ジュデイスは三つの素材のドクメントをソウルアルケミーで構築するのだと述べる。と、彼女はトン、と細長い指を自分の頬に当てながら目を閉じた。

「二つ目は、舐めると塩辛い空色の石。二つ目は、羽があつて飛び回る実、釣鐘に羽が付いたような感じかしら?……」

「はあ?」

「三つめは、どう伝えればいいかしら。全身から汗を流すパン?……ロールパンみたいな」

「ちよつとあんた、ふざけてんの?」

ジュデイスが突然言い出した摩訶不思議な単語にリタが悪態をつく。が、ジュデイス

は真面目な様子で「名称までは分からないわ」と返した。プレートにあった情報は言葉ではなく映像、ジュデイスの主観でそう答えるしかないということだ。実際、ニアタだつてこの世界のもの名称までは分からないのだろう。

「はあ……正直ワケ分かんないんだけど……でも、塩辛い空色の石つてのは『塩水晶』ね」

「それ以外のものは、これから資料を引っ張り出して調べるしかないな」

リタは塩辛い空色の石について瞬時に正体を予測。キールは大きなため息をついてそう呟く。

「じゃあ、塩水晶の採取について依頼を出しておくわね」

「よろしく」

ジュデイスがそう言い、リタはひらひらと手を振つてそう言うときールと共に科学室に入つていった。

「えつと……ラザリスを封印するのに、何が必要なんだっけ？」

ブラウニー坑道、ここへの入り口で金髪ツンツン頭の少年——カイルが言う。

「今から取りに行く、塩水晶。それから、羽があつて飛び回る実と、全身から汗を流すパ

ン、だとさ」

カイルの問いかけに返すのはいいな。

「全身から汗を流すパン……そんなパン、お城で読んだ本でも見たことがありません……」

その説明を受けたエステルがむむむ、と考え込む様子で呟いた。この三人にカイを加えた四人が今回、ブラウニー坑道にある塩水晶の採取にやってきたのだ。

「だが、本当にパンかどうかは分からない。ジュデイスがそういうイメージで教えてくれただけだ。その残り二つが実際はなんなのかは、今頃船でリタ達が調べてくれているはずだ……俺達は塩水晶を探すのに全力を尽くそう」

カイがリタ達を信頼している様子でそう言うと、カイルがうんうんと頷いた。

「そうだよね！ でも良かった。さすがにそんなパンは、食べる気にならないもんな」  
「そこは心配するトコじゃないだろ」

若干ずれたカイルの返答にしいなが呆れ顔でツツコミを入れたのであった。

「うおおおおくん」

真っ白い骨のような岩のような身体に、剣か鈍器のように発達した両腕を持つ魔物――

「スケルトンウオリアが亡者のような声を上げながら腕を振り上げ、それと同時にカイルの真下の岩が隆起、槍のように尖って突き上がる。

「くっ、くそっ！ 負けるかあっ!!」

しかしカイルは岩の槍に突き刺される事は防ぎ、その岩の槍から飛び降りると剣を上段に構えて剣に炎を纏わせる。

「爆炎剣!」

炎を纏った剣でスケルトンウオリアを斬り、さらに爆発によって生じる爆風がスケルトンウオリアを吹き飛ばし、壁に叩きつけて粉碎する。

「ピアズクラスター!」

その横でエステルが毒を持つコウモリ——ポイズンバットに手に持っている杖で連続突きを見舞い、さらに盾で殴り飛ばす。

「せいっ!」

さらに蜂の巣のようなものが生えた亡者の魔物——グールをカイが蹴り飛ばす。が、首がぐちゃつという音を立てて飛んでもなおグールはカイに纏わりつこうとし、カイは鬱陶しそうに刀を抜くと炎を纏った刀でグールを斬り倒した。

「ええつと、確かこれのはず……」

その近くでいいなはこの坑道を照らす松明の内一つを調べており、「ああ、あつてた

あつてた」と呟くとそれをいじる。

「よし、これで先に進む扉が開いたはずだよ！ 急ぐよ！」

「あ、うん！」

「分かりました！」

「了解」

しいなが叫び、カイル、エステル、カイルは頷くとしいなが走り出した方に走り出す。

「あーもうしつこいなあ！」

カイルが後ろを振り返り、まだ追いかけてくるスケルトンウォリアやポイズンバット達を見てぼやく。

「しょうがない……」

と、しんがりを走っていたカイルが懐から苦無を取り出し、大地のマナを込める。そして大地のマナが籠り茶色に光る苦無を魔物の進行先に投げ、地面に突き刺す。と、苦無が刺さった周囲の地面にピシピシとヒビが入った。

「土乱!!」

カイルが叫ぶと共に大地のマナが解放、隆起した岩の槍が魔物の行く手を阻んだ。

「これで時間稼ぎが出来るだろ。急ぐぞ！」

カイルが叫び、一行は魔物を撒くために大急ぎで走っていった。

「……………ここまでくれば大丈夫だろうね」

坑道を走り抜け、一番奥まで来るとしいなが汗を拭いながら呟き、次にカイを見る。

「それにしてもカイ、さっきの技凄じやないか。イガグリ流忍術、じやないよね？」

「ああ…………いや、応用だよ。さすが使ってる雷電に、苦無に込める雷のManaの代わりに地のManaを込めたんだ…………まあ、ぶつつけ本番だったけどな」

しいなの感嘆の声に対しカイはにっこ笑ってそう言い、「やってみるもんだな」と締め上げる。しいなも自分達の技の応用を見せただけでなく、それを的確な状況で一発で成功させて見せたことに感心したような笑みを見せていた。

「あの、しいな。……、行き止まりなんですけど……………」

と、エステルが辺りを見回す。一応扉はあるが、カイルが押ししたり引いたりしてもびくともしない。

「この扉、開かないよ？」

そして振り返ってそう尋ね、「道、間違えたんじゃない？」と尋ねる。と、しいなはふつと笑った。

「……いつはちよつと、仕掛けがあるんだよ」

そう言ってしいなはカイルにどくように促して扉の前に立ち、扉に手をかけると横に力を入れる。と、抵抗なく扉は開いた。

「ほら、開いただろ？」

「うわあ、セコい仕掛け……」

得意気に笑ってそう言うしいなにカイルは驚きと呆れがないまぜになった様子で声を漏らした。

「それにしても、今の仕掛けにはびっくりしました……まさか、鍵とかの特別な仕掛けではなく横に開けるなんて……」

扉を潜り、一応魔物達がまだ追いかけてきた時に目くらましにするために扉を閉めてから一行は先に進み、その道中でエステルがそう呟く。

「心理トラップってやつさ」

それに対ししいなが説明。扉というのは一般的には押し引きするもの、その先入観を利用して何の変哲のない扉を開かずの扉のように見せかけてしまうというわけだ。

「先入観か……ふむふむ」

カイルが感心したように頷く。そして名案を思いついたように笑顔を見せた。

「じゃあ、人に知られたくない内緒の扉は全部さつきみたいにしとけばいいって事なんだね！」

「いや、全部そうしちまったら、仕掛けが一般的になっちまうだろ……」

先入観と心理トラップの意味を微妙に理解していないカイルの発言にしいなは再び呆れ顔でツツコミを入れた。

「先入観……すなわち、トラップというのは物質的なものだけではなく、相手の精神、考えさえも利用して仕掛けるもの、ということですか？」

「ああ、まあね。虚から実を生み、実を虚に見せかける。これこそが忍者の極意さ。あたしはまだただだけど、凄腕の忍者にもなれば、武器がなくとも口先で相手をコントロールする事さえできるんだからね」

「へえ………凄いです！」

エステルから受ける疑問にしいなは答えていき、エステルは目をキラキラさせながら返し、足を進めていく。と、エステルが踏みしめた地面がメキメキと音を立て、突如陥没。バランスを崩したエステルは「きゃあつ！」と悲鳴を上げ、そのまま地面が陥没したことによって出来た穴に落ちそうになる。

「エステル！」

が、その直前カイがエステルの腕を掴んで彼女を引き寄せ、エステルはギリギリで穴



から落ちずに済む。

「あ、ありがとうございます、カイさん……」

「いや、気にするな」

お礼を言うエステルに対しカイはただそう返すのみ。

「……で、さ。いつまでそうしてるのさ?」

「?……!?!」

しいなの呆れ気味の呟きを聞いたエステルは首を傾げるが、目の前にあるカイの顔、そして現在の自分の状態に気づくと彼女は顔を真っ赤に染め上げた。カイは咄嗟にエステルを引っ張ったのだが、その途中でそのままだとエステルが後ろに転んでしまうという事に気づき、もう片方の手でエステルを抱き止める。その結果エステルはカイに抱きかかえられているかのような形になっていた。

「(っ、っ)(っ)(っ)めんなさい!」

気づいたエステルはしゅばつとカイから距離を取る。

「おい、あまり暴れるな? また落ちるぞ?」

が、カイは平然としており、むしろ何故エステルはこんな慌てるんだと言いたげに首を傾げていた。

「ふう。この辺は地盤が脆くなってるっぽいね……カイル、悪いけどあんたの剣で突っ

ついて足場の確認とかお願いできるかい？」

「あ、うん。分かった！ 任せといてよ！」

しいなは身軽な自分やカイルならともかく、カイルやエステルでは足元が崩れたら咄嗟に動けるか分からず、それなら多少ペースを落とすとしても足場の確認をしながら動いた方がマシと冷静に判断。カイルにその役を頼むようにする。それにカイルも領いて背負っている剣を引き抜いた。

それからカイルとカイルが戦闘に立って剣や刀で地面を突っついて地盤を確認、万一の為にカイルとしいなの身軽なコンビが先行して地盤が脆くなっていないか確認。エステルは地盤の安全が確認されてから移動という正に石橋を叩いて渡る方法で一行は移動していく。

「……」

しいながふと、目の前で足元の確認をしているカイルを見て口を開く。

「カイル。あんた、あたし達の世界には慣れたかい？」

「え？ あ、うん！ 見た事ない術とかあるし、面白いよ」

しいなの言葉にカイルはいったん作業の手を止めて頷き、笑顔になる。それにしいなも面白いよと頷き、ヴェラトローパの話は聞いたかと尋ねる。自分の故郷に伝わる光気丹術はソウルアルケミーの一環、魔術の曙と言われる奇跡の術は遥か昔からあり、ヴェ

ラトローパの民はそれを当たり前の技術として使用していたのだ。その遙かな時を巡り、今までソウルアルケミーが伝わってきた事にしいなは「すごいと思わないかい？」と言った。

「はい。私もそう思います」

「うーん、そういえばソウルアルケミーってなんでも創り出せる力だったんでしょ？  
いつの頃から、ヒトはその力を失ったんだらう？」

しいなの言葉にエステルがロマンチックな事を思うような笑みを浮かべて賛成し、カイルはふと疑問を持ったようにそう尋ねる。それにしいなは「さあね？」と返した後、「だけど」と続ける。

「ほんの一部は残ってるじゃないか。あたしらが知ってる魔術って形でさ」

「え？ 魔術もソウルアルケミー？」

「そう。ドクメントの創造なんて事は、普通の人にはおいそれと出来やしないけど……まあ、ちよつとだけ使えてるってのが今あたし達の間で知られてる魔術だね」

しいなの言葉にカイルが尋ねると彼女はそう説明、それに対しカイルは「魔術が使えるってだけでもすごいと思うけどなあ」と呟いた。

「真のソウルアルケミーの使い手がいるとしたら……魔術を使うにしても詠唱も道具も要らないだらうって言われてるよ……願えば何でも現実になるんだから」

「ふうん、やっぱ神様みたいだなあ。オレ達ヒトには出来ない事だよね」

しいなの言葉にカイルが頭をかきながら呟く。が、それに対ししいなは両腕を組み、「何でもできちゃ面白くないし、それで生きてるって実感が沸くもんかねえ？」と呟く。

「そうですね……ヴェラトローパーの民、ヒトの祖は苦難に満ちたものであっても、その力を捨てて生きる事を学ぶと決めた、という話ですし……きつと、それで今私達は生きている事の喜びや辛さを知る事が出来ているのだと思います」

エステルが柔らかに微笑みながら、両手をきゅつと握り締めるように合わせて、しいなの言葉に同意する。

「あたしは、その力を捨てたヒトの祖の子孫であることを誇りに思うよ。辛かった日々も、楽しかった日々も、あたしには宝物だからね」

その言葉を受けたしいなもこくり、と頷いて返した。

「辛かった日も、楽しかった日も 自分には宝物……かあ。いい言葉だね！」

と、カイルがしいなの言葉を褒め、不意打ちのそれにしいなは照れたように頬を赤らめながら「そうかい？」と尋ね返し、それにカイルは「うん」と元氣よく頷いた。

「だって辛い事があつたらつい否定したくなるのが普通でしょ？ 忘れたりとか、誤魔化したりとか。でも、しいなは違うんだね」

「そういう事を全て宝物に出来る。それはとても素晴らしい事だと思います」

カイルに続いてエステルもしいなを褒め、その言葉を受けたしいなはうつむく。

「……それを教えてくれた友達がいたんだよ。逃げてばかりだったあたしを、体を張って叱つたり、励ましてくれたんだ……その子のおかげで、今のあたしがここにいるのさ」「へえ、そうだったんだ……その友達って、すごい人だったんだね!」

「……ああ、そうだね……多分、一生頭が上がりないよ」

カイルの言葉に対し、しいなはうつむき、どこか寂しげな言葉でそう返していた。

「……話は終わったのか?」

突然聞こえてきたカイの声、それは妙に離れていた。

「「……あ」」

というか、物理的に三人の距離とカイの距離は大きく離されている。

「話が終わったならその苦無を辿ってこっちまで来てくれ、確認は終えてる」

その言葉通り、しいな達の足元から点々と苦無がまるで、森で迷わないようパンくずを撒いて目印にしている童話のように落とされていく。その道中は所々若干地盤が崩れているのも確認できた。

「……で、手間をおかけしました……」

仕事サボって駄弁っていた事に気づいた三人はカイに向けて唱和、カイの苦無を辿

り、それだけでは通じないような部分はカイが逐一指示を出しながら、しいな達はカイに合流。先に進んでいった。

そして先に進んでいき、坑道の開けた部分に出かかった時、しいなが何かの気配に勘付いたのか足を止める。

「この先、誰かいるよ?」

そう言つてカイル達の足を止めさせ、そつと通路の先を覗き込む。道の先にいるのは大きな身体の人物。後ろを向いているため顔は見えないが、長いウエーブがかつた青い髪と、遠くからでも分かる筋骨隆々な身体が特徴的だ。と、カイルがひよこつと顔を出してその人物を確認、その瞬間カイルの顔色が変わった。

「あいつは、バルバトス!!」

「ええ!! まさか、あいつが、強い者がいると聞けば、戦いを挑むというめちやくちやな奴、かい!!」

カイルの言葉を聞いたしいなが、以前カイル達から話に聞いていた人物の話を思い出す。

「あいつも、一緒にこの世界へ飛ばされて来てたのか!」

カイルはそう言うや否や背負っていた剣を抜き、

「バルバトオオオオオオッス!!」

声を荒げて人物——バルバトスへと突進。剣を振りかぶり、袈裟懸けに振り下ろさんとするが、

「むっ？」

敵襲に気づいたバルバトスは振り返りざまにその剣を斧で防ぎ、受け流す。しかしカイルは手首を返して横に剣を薙ぎ払おうとし、しかしバルバトスはそれを再び斧で受けて押し返すと回転、その遠心力を込めた斧を横に薙ぎ払う。

「おっとー！」

しかしカイルはジャンプでそれをかわし、さらになんと空中で宙返りをして剣を振り下ろす。が、それをもバルバトスは受け止め、罅迫り合いになる。

「ほう……死に損ないがあ。まだ生きていたのか」

「ぐああっ!!」

バルバトスはそう言い、斧に力を込めて体格に劣るカイルを吹き飛ばし、

「妙な所へ飛ばされたせいであ、我あが餓えを満たす相手がいなくてなあ……」

クツクツク、と笑みを浮かべて左手一本で斧をぶうんと一振る。本来は両手で振るうのだろう巨大な刃の斧をバルバトスはその怪力を用い片手で軽々と振り回していた。

「望むところだ、バルバトス！ お前なんか父さんを殺させやしない！」

それに対しカイルは怯むことなく剣を構え、目を研ぎ澄ませて叫ぶ。

「カイル、待ちなつて！ 勝てる相手なのかい？」

しいなとカイがカイルの隣に立ち、しいなが問いかける。

「心配するなあ。その答えは一つしかない」

その問いに答えたのはカイルではなく、バルバトスだった。

「貴様達はここで骸になるだけだあ。逃げられるとは思うなよ。さあ、来い!!!」

バルバトスが威嚇するように声を荒げ、それに対しカイ達はくつと唸って構えを取る。今ここに、最凶最悪の鬼神との戦いの幕が開くのであった。



## 第二十二話 最凶の戦士との戦い

ブラウニー鉱山の奥地。塩水晶を採取しに来たカイ達の前に、カイルが追っていた存在——バルバトスが、彼もまた異世界からルミナシアに飛ばされており、彼らの前に立ちただかっていた。

「貴様達はここで骸になるだけだあ。逃げられるとは思うなよ。さあ、来い!!!」

バルバトスが声を上げたその瞬間、彼から殺気が膨れ上がる。そのあまりの殺気にエステルは「ひっ!」と悲鳴を上げる。

「エステル! 下がって援護に集中してくれ!!」

「は、はい!」

カイが指示を出し、エステルは詠唱を開始。それと同時にカイは地面を蹴り、瞬間、カイの姿が消える。

「む?」

その次の瞬間には、カイはバルバトスの目の前に立っていた。その右手は腰に収められている刀の方にあり、既に抜刀の構えは完了している。

「せやあつ!!!」

並の戦士ならば気づかぬ間に斬られる速さの斬撃がバルバトスへと迫る。

「ふんっ！」

「なにっ!？」

が、バルバトスはその刀をなんと武器を握らぬ右手で握り、止めてみせた。

「ぬるいわっ!!!」

「がはっ!!」

まさかの防御方法に硬直してしまったカイ目掛けてバルバトスは膝蹴りを入れ、カイが怯んだ隙に右手を刀から離すと彼の首を掴む。

「ぬうんっ!!!」

「がっ……」

そしてそのまま腕力に任せ、カイを地面に叩きつけた。

「安心しろお。今日の俺は紳士的だあ……楽に殺してやる」

嗜虐的な笑みを浮かべ、カイを見下ろすバルバトス。首を掴まれ、勢いよく叩きつけられたカイは意識が混濁しているのか何も返さない。

「……なんてな！」

と、思ったが突然カイが不敵に笑い、その直後カイの姿が霧散する。

「な、なにいつ!？」

突然目の前から消えた敵に今度はバルバトスが驚く番だった。

「蒼破！——」

驚きに生じる隙をつき、カイルが風の衝撃波でバルバトスを襲う。

「——追蓮!!」

しかしそれだけでは留まらず、さらに斬撃をくらわせる。

「ぐぬうつ!? 舐めるなあっ!!」

連続攻撃に対しバルバトスが声を荒げ、近くにいるカイルを睨みながら斧を振り上げる。

「幽幻符!」

「ぐうつ!」

しかしカイルの後ろから走ってきたしいなが投げた符がバルバトスに貼りついた瞬間、彼は己の力が何かに吸い取られるかのように抜けていく感覚を味わい、その間にカイルとしいながその場を脱出。

「刃にさらなる力を! シャープネス!!」

そこにエステルが詠唱を完了、仲間に力を与える呪文を唱える。

「飛燕連脚!」

「ぐはあっ!」

そして背後から力を与えられたカイが空中を舞う連続蹴りをくらわせる。

「き、貴様、何故?!」

「影分身の術さ。俺、素早さには自信あるもんで」

自分が仕留めようとしていたはずの相手が元気に蹴りをくらわせてくるのを見たバルバトスが叫ぶとカイはそう種明かしを行なった。

「散力翔符!!」

「くらえ、フレイムドライブ!」

「煌きよ、威を示せ、フォトン!」

しいなが符を投げつけ、カイルが無数の火炎弾で追撃、さらにエステルが光の陣でバルバトスの動きを封じ、光の爆発で攻撃をせんとする。

「片腹痛いわあっ!!!」

が、バルバトスは力づくで光の陣を粉碎、地面を殴ると共にその周辺が突如腐食し禍々しいエネルギーが吹き上がって符と火炎弾を防いだ。

「くっ……」

バルバトスを囲むように吹き上がる禍々しいエネルギーに、カイル達に合わせて攻撃を仕掛けようとしていたカイも攻撃を躊躇してしまふ。

「ぬううううんっ!!!」

「っ!？」

と、バルバトスはその禍々しいエネルギーを突き抜けてカイめがけてシオルダータツクルをくらわせ、カイはそのタツクルに激突し弾き飛ばされる。

「骨まで砕けろいっ!!!」

さらに斧を振るい、しかしカイは刀でどうにか攻撃を受け流す。しかしバルバトスはさらに息をつかせぬ攻撃を仕掛け、その凄まじい重圧を見せる攻撃にカイは押されていく。

「ぬんっ!!!」

「があっ!!!」

そしてついに斧の一閃がカイを吹き飛ばし、カイは坑道の壁に、壁にヒビが入るほどの力で叩きつけられる。

「カイツ!」

「エステル! カイの治療を頼むよ! カイル! あたしらは時間稼ぎだ!!」

「分かった!」

カイルが叫び、しいなはすぐさまエステルに指示を飛ばし、カイルにもそう言つて符を両手いっぱいにつととカイルも剣を構えなおして頷いた。

「蛇拘翔符!!」

「ぬうんっ!!」

しいなは符をバルバトス目掛けて飛ばし、そのほとんどはバルバトスが斧を振るう風圧で吹き飛ばされてしまうが、一枚だけがその風を潜り抜けてバルバトスに貼りつく。

「ぬ、ぐっ!!」なんだ、身体が!？」

符に込められた言霊の呪いによりバルバトスの身体が重くなる。

「空翔斬!」

そこにカイルがジャンプし、勢いをつけて斬りかかる。バルバトスも唸り声を上げてそれを防御するがその動きは鈍く、カイルはバルバトスの懐に入ると高速で剣を振り上げる。

「閃光翔墜!!」

その高速の斬撃が光となって渦巻き、バルバトスを吹き上げる。

「そこだ!」

さらに空中で身動きできないバルバトスに向けて剣を突き出すが、心臓を狙ったそれをバルバトスは左腕で防御する。

「ぬっ!!」

そしてその刃を右手で取り、握り締める。刃を鷲掴みにしたせいで彼の手が切れ、血が剣を伝ってカイルの顔に流れ落ちた。カイルの剣をしっかりと握り締められており、

その怪力相手ではなかなか奪い返せそうにない。

「ぬりやあああああつ!!!」

「ぐはあつ!!!」

剣を離させようともがいている隙を突きバルバトスはカイル目掛けて回し蹴りを入れ蹴り飛ばす。その一撃にカイルは吹き飛ばされて地面に叩きつけられ、バルバトスはカイルの剣を放り捨てる。と斧をしかと握り締めた。

「う、ぐ……」

カイルがダメージにもがいている間にバルバトスはゆっくりゆっくりとカイル向けて歩いていく。

「そうはいかないよ!!!」

が、しいなの叫びが響き、バルバトスは足を止める。

「あたしの力を見せてやる! はあああああ!」

しいなは限界突破オーバーリミットをしているのか凄まじいオーラを放っており、彼女が念を込めると共に、バルバトスが先ほど吹き飛ばし、地面に貼りついた符の一部が陣を形成。光を放つ。

「ぬうううううつ!!? なんだこれは!?! 身動きが取れん!?!」

そして辺りに風が舞い踊り、それは強力な風の結界となつてバルバトスを捕らえ、し

いなはたんつと跳躍すると風をまどつて空中を浮遊。目を瞑つてさらに念を込め、その念が最大に達した時、かつと目を開いた。

「風塵!! 封縛殺!!」

そしてしいなの声が轟くと同時、風の結界がバルバトスを巻き込んで大爆発を起こした。

「命を照らす光よ、ここに來たれ、ハートレスサークル!」

一方、エステルはしいなとカイルがバルバトスの相手をしている隙にカイの方に走り、詠唱。辺りに癒しの力を放つ領域を展開してカイの回復を行っていた。

「悪い、エステル」

回復を終え、カイは立ち上がると近くに落ちていた刀を拾い上げる。

「風塵!! 封縛殺!!」

しいなの声が轟くと同時、風の結界がバルバトスを巻き込んで大爆発を起こした。

「あ……ふう、よかつた……」

エステルは誰の怪我もなく戦いが終わった事を安堵。

「……いや」



が、カイルは静かに眩き、刀を構える。

「ぶるああああああああああつ!!!」

直後、バルバトスの咆哮が響き渡った。

「なっ!? ウソだろ!? あたしの秘奥義を受けて動けるなんて……」

しいなは己の最大の攻撃を耐え切られたことに驚きを隠せず、その隙をついたバルバトスが突進、しいなの首を右手で掴んで持ち上げる。

「女あ、なかなかいい一撃だあつたがあ……この俺の渴きを癒すにはまあだ足りん!!!」

「ぐ、この、離しなっ!!」

「しいなを離せっ!!!」

首を絞められている形になるしいなは苦しそうな表情を見せながらもバルバトスに抵抗しようとしているが手足をばたばたさせるのが精一杯。カイルもダメージを押して、バルバトスが放り捨てた自分の剣を拾いバルバトスに斬りかかるがバルバトスも斧を振るい反撃する。しかも右手に力を込めているのかしいなは「ぐ、が」と苦しげな声を漏らしていた。

「く……」

下手に攻撃を仕掛け続けるとしいなの命が危ないと思ったかカイルは距離を取り、様子見に徹する。と、カイルの後ろから何かが飛び、それがバルバトスの足元に突き刺さ

る。

「イガグリ流忍術——」

カイルの隣に立つカイルがそう呟いた瞬間、バルバトスの足元に刺さった何か——苦無の周辺の地面がひび割れる。

「——雷電！」

「ぐぬおっ!？」

地面から雷撃が飛び出し、突然の不意打ちにバルバトスが怯む。

「今だ、カイル！」

「ああー！」

カイルが叫び、カイルは皆まで言う前に剣を構え突進、その時剣に風が纏われる。

「空破、絶風撃!!！」

「ぐおおっ!？」

突風を纏った突きが隙を見せていたバルバトスを吹き飛ばし、右手に掴まれていたしいなも手放される。

「わ、つととと!!！」

首を絞められて気絶してしまったのか何も反応せず投げ出されたしいなをカイルは慌てて剣を放り捨てキヤツチ。

「カイル、戦線離脱して悪かった。今度は俺が身体を張る番だ」

「う、うん！　しいなをエステルに渡して回復したらすぐ援護するから！」

前線に立ったカイルにカイルはそう言い残すと気絶しているしいなを担いでエステルの方に走っていき、カイルも目の前のバルバトスを睨みつけると印を組む。

「忍法、影分身の術」

その言葉と共に三人のカイルがカイルの隣に姿を現し、全員が刀を抜く。

「く、くくく……ちよこぎいな。そのような小細工がなければ手も足も出ないか」

「ああ。一人じゃ敵いそうにないからな……時間稼ぎをさせてもらう」

バルバトスの挑発に対し本物のカイルが呟き、構える。

「お前はカイルの父親、スタン・エルロンを狙っていると聞いた……仲間に仇名すものは許さん。ここで……葬る！」

カイルが叫び、同時に本物のカイル、および分身のカイルが一齐にバルバトスに斬りかかった。

「曼珠沙華!!」

「土竜閃！」

カイルの一人が宙を舞いながら炎を纏う苦無を投げつけ、別のカイルが地面に刀を突き刺し、岩の槍で遠距離から攻撃を仕掛ける。

「ぬるいわっ!!!」

対するバルバトスは斧の一閃で苦無を吹き飛ばし、岩の槍を砕く。

「飯綱落とし!」

「ぐぬっ!」

しかし斧を一閃した隙を突いてまた別のカイが上空からバルバトスの背後に不意打ちを決め、バルバトスが後ろを睨みつける間に素早く引く。

「はあああああっ!!!」

「!」

その隙に最後のカイが真正面からバルバトスに突っ込んできた。その右手には闇のManaが集中している。

「滅掌破!」

力と闇のManaを込めた掌底に加え、至近距離からの闇のManaの爆発。

「ぬうん!」

「ぐっ!」

が、バルバトスの頑強な筋肉の鎧には通じておらずバルバトスのカウンターボディブローがカイに突き刺さり、彼がふらついた瞬間バルバトスは右拳を振り下ろしてカイを地面に倒すと体重を込めて踏みつける。その瞬間カイの身体が霧散した。どうやらこ

のカイは影分身らしい。

「やってくれる……」

曼珠沙華を放ったカイ——恐らく彼が本物なのだろう——が悪態をつき、その隣に二人の分身カイが並ぶ。

「お待たせ！」

と、その後ろからカイル達が合流。武器を構えた。

「くつくくく、死にぞこないどもが集まったかあ……まあいい」

バルバトスは笑いながらそう言い、斧を両手で持つとその先端をカイ達に向けてくる。

「こおの一撃で沈めてくくれよお」

「まずい！ 皆、防御して!!」

斧の先端に禍々しい闘気が集中していき、その構えを見たカイルが防御を叫ぶ。

「……あの技が、あいつの切り札か？」

「……うん。少なくともあの技、まともにくらったら命はないよ」

闘気をチャージしているバルバトスを見ながらカイが尋ね、それにカイルが頷くとカイは少し考える様子を見せた後、影分身を消滅、そのマナを自らに取り込みながら三人を見た。

「……俺に考えがある」

そして三人に作戦を説明。三人は少し驚いた様子を見せつつもこくと頷き、カイル、しいながカイルを守るように経ち、エステルも詠唱を始める。

「くつくくくくく……何をするつもりか知らんがあ……微塵に砕けろっ!! ジェノサイドブレイバー!!!」

バルバトスの声が轟くと共に禍々しい闘気が砲撃のように放たれ、巨大なレーザーとなつてカイル達に向かつていく。

「堅牢なる守護を……バリアー!」

エステルが呪文を唱え、杖を掲げて光のmanaを解放。障壁を作り出してジェノサイドブレイバーを阻む盾となる。

「く、ううううううっ!!!」

しかしそのエネルギーを前には耐える事すら難しいのか、エステルは目を瞑り、必死に集中してバリアーを維持していた。しかし、圧倒的な力の前に、ついにバリアーにピシシとヒビが入り始め、ついにバリアーが粉碎される。

「衝弾符!!!」

しかし続けてしいなが目の前に特殊な符を投げつけ、結界を張ってジェノサイドブレイバーを防ぐ。

「う、く……こいつはきついね……」

しかしその境界の維持もバリアーと同じく長くは持ちそうにない。

「カイル、カイ……あとはあんた達に託すよ……」

「うん！」

「ああ」

しいなは少しでもジェノサイドブレイバーの勢いを弱めつつ、残る男子勢に後を託す。そして境界が破れた瞬間しいなは巻き込まれないよう後ろに下がり、ジェノサイドブレイバーの前にカイルが立つ。

「うおおおおおおおおおつ!!!」

カイルはエステルのような魔術もしいなのような符術も持たない。ただ、己の剣を信じ、身体一つでジェノサイドブレイバーを防ぐ。ただ、耐える。己の身体を、剣を信じ、そして……後ろの仲間を守るために。

「うおおああああああああつ!!!」

ジェノサイドブレイバーを跳ね返さんとカイルは剣に力を込め、押していく。そして剣が振り抜かれ、ジェノサイドブレイバーは跳ね返すとまではいかずとも、逸らされた。

「カイ!!! 今だあつ!!!」

カイルの叫びが響く。その後ろで、カイは限界突破オーバーリミッツによるオーラを纏い、収めたまま

の刀に手をやって、前方にいるバルバトスを睨みつけていた。

「ぶるあああああああつ!!!」

ジェノサイドブレイバーが防ぎきられたものの疲労困憊となっていているカイル達を見たバルバトスは、己の斧で直々に引導を渡してくれようと足音を響かせ突進。

「葬る!!!」

その次の瞬間、バルバトスの視界からカイが消えた。

「な、に?……」

奴は、あの猪口才な剣士はどこだ? 俺の目の前にいるのは死にぞこないが三人、奴はどこに消えた?

「……一斬必殺」

後ろ? まさか奴は俺の目にも止まらぬ速さで俺の背後に回ったというのか?

「秘奥義」



ぼたり、ぼたりと足元から音がする。なんだ、この赤い液体は？……腹から流れている……バカな、なんだこれは……どういうことだ？……。

「暗殺術——」

いつ、俺は斬られたんだ？……。

「ぐおおおおおっ……」

「——滅殺」

背後でバルバトスが倒れる音、そして悲鳴を聞きながら、カイは既に鞆に収まっている刀に手をやり、静かに呟いた。

「し、仕留めた!?!……」

しいなが思わず声を出す。

「クク、ククク……」

その直後、バルバトスはふらつきながら立ち上がり、振り返ってカイの顔を見る。

「いいぞ……いいぞ、いいぞ！　いいぞ!!　貴様だ！　貴様が俺の渴きをいやす者！」

バルバトスの高笑いをしながらの言葉に対し、カイは無言でバルバトスを睨みつける。

「覚えたぞ、貴様の顔。次に相見える時は血祭りにあげてやる」

「そ、そうはいくか！」

バルバトスの言葉を聞いたカイルが満身創痍ながらも剣を構えて突進。

「それまで首をよーく洗っておくんだな。ククク……ハアハッハッハッハッ!!!」

だがバルバトスは地面をぶん殴って禍々しいエネルギーを噴出、カイル達の足止めをしつつ自らの足元を崩しその場を逃げていった。

「とどめを、刺せなかった……」

カイルは剣をガシャンと落とし、膝について悔しそうに呟く。

「カイル……あまり無茶をするな」

カイルの近くに歩き寄ったカイが作戦も何も考えずにバルバトスに挑んだカイルを咎める。

「でも、あいつを倒さないと父さんが!!!」

それに対しカイルがカイを見上げ、必死の形相で叫ぶ。と、その頭を後ろからしいながばしんとはたいた。

「全く、熱くなり過ぎだよ。あんなに見境なく突っ込んでたら、命がいくらあっても足り

ないね」

「……………!!」

しいなの棘のある言葉を受け、カイルはようやく己の無謀さに気づいたのかうつむいた。

「ご、ごめん！ 俺、みんなの事を考えて無かった……巻き込んで、ごめん……」

「いえ、巻き込まれた事は構いません。カイルの父親を守りたいという気持ちは分かりますし、私も協力はしてあげたいです」

「あたしも同意見さ。ただ、何でも闇雲に行くのはよしなつて事さ」

カイルの慌てた謝罪に対しエステルはにこりと微笑みながらそう言い、しいなもうんうんと頷いて返し、カイルを諭す。それにカイルが「うん……」と頷くとしいなはぼんつと手を叩き、「じゃあこの話は終わりだ」と言つて話を打ち切るとバルバトスと戦いをしていた中で多少削れてしまったものの、壁全面と言つてもいくらいにある、水晶のように輝く空色の石を見上げる。

「ふう……用があつたのはあのバルバトスつて奴じゃなくてこいつだったのね」

「それが塩水唄？」

しいなの言葉にカイルが尋ね、しいなは「そうさ」と頷くと戦いの中で削り取れた中でも大きな欠片をいくつか拾い上げる。

「これで依頼は達成。さあ、船に戻るよ」

両手いっぱい欠片を抱えてしいなはそう言った。

「ご苦労様。今回は大変だったね。恐い人に目を付けられちゃって……」

バンエルティア号に戻り、依頼達成の報告を聞いたアンジユはねぎらいの言葉をかけ、一つふうと息を吐く。

「各国も大変な状況みたい。ジルディアのキバが現れたせいで、どこも大騒ぎよ」

「以前紛争が起きていた場所も、今は停戦となつて、人々は結束し始めている様ですわ。あのキバの出現を目の当たりにする事で、争っている場合ではない、と気が付いてくれたのでしよう」

一緒にいたナタリアも嬉しそうに微笑み、報告。しかしその次には浮かぬ表情を見せた。

「ですが……この様な危機を迎える事ですか、人々は手を取り合う事が出来ないのでしょうか？……」

「そうね。でも、そんなに悲観的にならないで。手を取り合える事を『知る』その一步が大事なんだから」

「……そうですわね」

哀しげに呟くナタリアに対しアンジュはそう元気付け、ナタリアもこくと頷いた。「じゃあ、皆。今回もお疲れ様。封印次元の材料になる残り二つが分かればまたお願いするかもしれないから、その時までゆっくり休んでて」

アンジュの言葉にカイが「はい」と答えた。

「シヤクだねえ、シヤクだよ！」

とある一室。一見して貴族の部屋だと分かる豪華な作りのそこで、一人の山羊のような頭をした獣人——ヤギのガジユマだ——が悔しそうに地団駄を踏んでいた。

「あの変なもののおかげで軍の士気が下がりはなしだよ！ このままじゃあアタシの計画に狂いが出る!!」

吐き出すようにヒステリックに叫ぶ獣人の女性。するとその時、突如コンコンとノック音が聞こえてきた。

「なんだい!？」

「ジルバ様、サレ様がいらっしやいました」

「ああ、そうかい！ 入りな!!」

仲介の兵士に対しても女性——ジルバは高圧的に叫び、扉がゆっくりと開いていく。と、部屋に紫色の髪を短く整えた男性——サレがにやりとした意地の悪い笑みを浮かべて部屋に入る。ちなみに部屋に入る前に武器は没収されたのか丸腰の状態だ。

「やあどうもマデイガン様、ご機嫌麗しゆう」

「ハッ、心にもない事言うんじゃないよ！ 反吐が出るー!」

「それはどうも……それで、何のご用でしょうか?」

サレの心にもない台詞に対しジルバは吐き捨てるようにそう言い、サレはひよいっと肩をすくめ、ジルバの方から彼を呼んだらしくサレはジルバに用件を尋ねた。

「ああ、そうだったねえ……最近あんた、アタシの知らないところで色々動いてるらしいじゃないか?」

「ああ、その事でしたか……ええ。僕に傷を負わせた奴らをどうしても許せなくてね」  
ジルバの追及にサレはくつくつと笑いながら返す。それにジルバはふんと鼻を鳴らした。

「あんた、アタシとの契約を覚えてるか?」

「ええ、もちろんですとも。ウリズン帝国軍総大将、ジルバ・マデイガン様……僕は好き  
なだけ戦場で敵とみなした存在を蹂躪してもよい。その代わり、僕はあなたの手駒とな  
り指示に従う。でしたっけ？ 世の中すべてギブ・アンド・テイク♪」

二人はお互いに相手の心中を見透かすような悪い笑みを浮かべて喋り合う。

「それにしちゃあ、あんた随分勝手に動いてるんじゃないかい？ これは重大な命令違  
反だね。総大将直々の命令を無視するなら軍規違反として粛清が必要だね」

ジルバがそう言っつてパチンと指を鳴らした瞬間、扉が開いて兵士が部屋になだれ込  
む。その全てが熊や鳥、犬など獣の顔をしたヒト——ガジユマだ。

「どういうつもりか、教えていたでもいい？」

「ふん、簡単な事さ。あんたの実力は買ってたんだけどね、あたしが育てていたガジユマ  
軍団にもあんたに匹敵する実力者が出てきた……もはや貴様のようなヒューマを飼っ  
ておく必要もなくなったのさ!! いかに貴様といえど、武器がなければこの数には勝て  
まい!!」

ジルバが叫ぶと共に兵士たちが一齐にサレに槍を向ける。

「さあ、朽ち果てろ! 私の世界にヒューマなど、いや、ガジユマ以外いらぬわ!」

高笑いしながらジルバは攻撃を指示、兵士達が一齐にサレに襲い掛かる。

「吹き荒れる狂乱の嵐!! シュタイフェ・ブリーゼ!!」

しかしその瞬間サレが右腕を掲げ、そう思うと強烈な嵐が部屋の中に吹き荒れ、嵐が吹き止んだ時にはサレとジルバ以外の兵士は全て戦闘不能に陥っていた。

「な、に?……ば、馬鹿な!? そんな強力な魔術を、何故そんなにあっさりと?……」

「ああ、これですよ。ここに来る前に拝借させていただきました」

ジルバが呆然とした様子で呟くと、サレはにやにやと笑って懐から何か——星晶を取り出す。星晶のエネルギーを利用し、強力な魔術を瞬時に使ったのだ。

「バ、バカなっ!?! それは嚴重につ!?!」

「ええ。まさか僕が国に納めていたつもり星晶がジルバ様の懐に横流しされていたとは思ってもありませんでしたよ……と、いうわけで。これはウリズン帝国が押収させていただけました」

サレはにやにや笑いを消さずにそう言い、倒れている適当な兵士から剣を奪い取ると、それを引き抜いた。何をするかなど言うまでもない。

「ま、待てっ! アタシを殺せば貴様はもう後ろ盾を無くし、今までのように戦えなく、いや、軍に居られなくなるぞっ!! アタシが、お前の本来問題となる行動をアタシが揉み消してやっていったというのに!!」

ジルバが命乞いでもしているのか喚き始める。が、サレはそれをふんつと鼻で笑った。



「あなたは僕が用済みだと言っていていましたよね?……僕もなんですよ」

サレは慙懃無礼にジルバに言い捨てる。それにジルバも「なつ……」と絶句した。

「もう軍なんてどうでもいい! それよりも、僕はヴェイグを、カイを、僕に屈辱を味わせた奴らの心を踏みにじる方が大切なんだよ!!」

サレは口が裂けたかのような笑みを浮かべながら叫び、剣を振り上げる。

「やめろ、やめろおおおおおつ!!」

直後、ジルバの絶叫が響き渡った。

「サレ様! 作戦完了いたしました!! ジルバ総隊長が秘密裏に貯蔵していた星晶、回収完了です!」

「ああ、ご苦勞様」

サレがジルバの部屋を後にし外に出た時、一人の兵士が敬礼をしながら報告。サレが一応形だけ労いの言葉をかける。

「さてと。じゃあ、これはいただいていくよ? 後は手筈通りによろしくね?」

「ははっ! 了解いたしました!」

サレは手渡された星晶を入れた袋を受け取り、そうとだけ言い残すと兵士を置いて歩

き出す。

「ヴェイグ……僕に屈辱を味わわせてくれたお礼はきっちりしてあげるよ……ふふふふふ……はっはっはっはっはっは!!!」

ウリズン帝国の王城、そこを後にしながらサレは高笑いを続ける。突然強風が吹き始め、その風が止んだ時、サレの姿は消え去っていた。

## 第二十三話 風の青年はプレイボーイ？

「んっ、んう〜……」

バンエルティア号のギルドメンバーが生活している居住区。しいなはその廊下を歩きながら伸びをしていた。

「あ、しいな！」

「ああ、カイルかい」

しいなに声をかけてきたのはつい昨日一緒にクエストを受けて塩水晶の採取に向かった一人——カイル。彼の挨拶にしいなも右手を軽く上げて返す。

「何してるの？」

「あーいや。昨日の疲れが取れないのか妙に身体に違和感があつてねえ。ちよつと身体をほぐすための散歩つてところかな」

カイルの質問にしいなは答え、「カイルは？」と尋ねると、カイルは剣を引き抜き、それをじつと見る。その目には決意が込められていた。

「昨日、バルバトスと戦った時さ……やつぱり俺はまだまだだつて思い知つたんだ。だから剣の訓練をしようつて思つてさ。今から誰かに模擬戦とかお願いしようかなつ

て思ってるんだ」

「へえ、感心感心。でもなるほどね……あたしも少し付き合おうかな」

「うん！」

カイルとしいなはそう話し合いながらメンバーの大部分が生活している船倉を利用した居住区に向かう。

「……」

と、奥の方の部屋から一人の青年が姿を現す。

「あ、カイル！」

「カイル、おはよ。調子はどうだい？」

部屋から出てきた青年——カイルにカイルとしいなが挨拶。カイルもしいな達に気づき、そつちを向く。

「ああ、おはよう。しいな」

彼はふつと笑みを浮かべて挨拶。

「今日も綺麗だな」

そしてそんな言葉を吐く。

「……………」

その言葉を聞いたしいなとカイルは硬直してしまった。

「ア、アアアアアニーイイイイイツ!!」

「カ、カカカカイがつ!! カイが大変なんだつ!!」

「ふええええええええつ?!?!」

一階にある医務室。そこにクエスト等用事がある時以外はほとんど船医として常駐しているアニーはドバアンとドアを蹴り飛ばさん勢いで入ってきたしいなとカイルの血相を変えた様子に悲鳴を上げる。

「あ、頭を打ったかもしれないから急いで診察をお願い出来るかい!」

「も、ももももしかしたら昨日バルバトスと戦った時、実はポイズニックヴオイドの毒をくらつてて、それが頭に回つちやつたんじゃあ!?! げ、解毒剤とか準備出来ない!?!」

「え、ええええええええつ?!?!」

あわあわわたたと、しいなとカイルはアニーに診察を依頼して、しいなが両腕をカイルが両足を掴んで運んできたカイを突き出し、アニーもいきなりの展開に何が何だかという様子を見せながらも診察の準備を始める。

「……?!?!」

診察を行なったアニーは不思議そうな表情を見せる。

「ど、どう?..」

「いえ、どうと言われましても……特に異常はないと思いますよ? 頭を打った形跡も見当たりませんし……」

カイルの心配そうな言葉にアニーが不思議そうな顔でそう返す。

「アニー」

と、カイがアニーの手を取った。

「そんな顔をしないでくれ。アニーが笑顔でいてくれれば、どんな怪我もすぐに治るよ」  
キラキラと輝くような笑顔でそう言うカイ。それにアニーの顔が赤く染まり、「は、え?」と変な声を出す。

「ええええええええつ?!?!」

そして彼女の叫び声が医務室に響き渡った。

「あ、も、もしかしたらちよつとした診察じゃ分からない程の傷なのかもしれません!」  
アニーは慌てて立ち上がると「ハロルドさんと呼んで精密検査をしてみます!」と言つて医務室を出て行こうとする。

「アニー、ちよつと待ちな」

が、医務室の手伝い兼サボリ撃退のためここに常駐しているナナリーが彼女を呼び止め、アニーが足を止めて振り返るとナナリーはすたすたとカイの前に立つ。

「カイ、ちよつと聞きたいんだけどさ……その話し方、誰から教わったんだい？」  
「え？ 誰って……」

ナナリーの問いかけに、カイはきよとんとした様子で首を傾げた。

バンエルティア号の展望台。滅多に人が来ず、雨の日の素振り等基礎訓練やちよつとした趣味——例えばヴェイグが周りにうるさくしないよう気を遣って趣味であるエレキギターを演奏したり、キールが静かに読書をしたり——など様々な事に活用されている。ここで四人の男性が喋り合っていた。

「アホゼロサー!!!」

「ロニのバカー!!!」

「こんのスケベスパードー!!!」

「ついでにレイヴンさん不潔ですつ!!!」

「へぶつ!!」

「がはつ!!」

「げふつ!!」

「なんでおっさんもつ!!」

そこに突如乱入したしいな、カイル、ナナリー、アニーがしゃべっていたゼロス、ロニ、スパーダ、レイヴンを拳（一名杖）でぶん殴る。

「な、いきなりなんだよ!？」

「あんたらがカイに妙なこと吹き込んだことはとづくに分かってるんだよ!!」

ゼロスの抗議の言葉をしいながかき消す勢いで怒鳴り声を上げると、レイヴンを除く三人は一瞬で目を逸らす。

「え？ え？ ちょよ、ちょよと待ってよ！ おっさんそんなの知らないわよ!？」

「レイヴン、こんな言葉をしってるかい？」

両手を前に出して弁解を始めるレイヴンに対し、しいなが拳をほきほきと鳴らし始める。

「疑わしきは罰せよってね」

「そんな理不尽な!!?？」

しいなの言葉にレイヴンは悲鳴を上げるのであった。

『……』

そしていい感じに身体が腫れ上がったたり関節があらぬ方向に曲がりかけて死屍累々



となつてゐるスケベ男性陣を見下ろしてしいなとナナリーがふんつと鼻を鳴らし、アニーが不潔ですというような目で四人を見る。その杖が若干赤く染まつてゐるのはきつと気のせいだろう。

「にしても、このアホゼロス達の言う事を真に受けるなんてねえ……」

「カイつて真面目で素直だけど、変なところずれてるからねえ。女の子とのコミュニケーションとか言われて納得しちまつたんだろ」

しいなとナナリーが呆れた様子で話し合い、とりあえずあの喋り方は封印させないと大変な事になりそうだと結論づける。普段とは違う笑顔と口調のせいで、忍びである自分でさえ思わずパニックになつていた。このまま放つといたら騒ぎになる事は想像に難くない。としいなはこめかみに指をやりながら考えた。

「……あれ？」

と、カイルが声を出した。

「そういえばさ、俺達全員来ちやつてるけど……誰か一人くらい、カイを止めてた方がよかつたんじゃないか……」

「「……………あ」」

カイルの言葉に三人は異口同音でそんな言葉を重ねた。

「ただいま……あ、誰もいないや」

バンエルティア号の甲板。少し長い仕事で船を降りていたカノンノは帰ってきて挨拶をするが甲板には誰もおらず、甲板掃除の人やここで自主訓練をしているクレス達もいないなんて珍しいなあとか思いながら彼女は船に入っていく。

「あ、カノンノ。お帰りなさい」

「ただいま、アンジユさん」

ホールに入って一番に出迎えたアンジユにカノンノは挨拶し、クエストの終了を報告する。

「そういえば、甲板に誰もいないってなんか珍しいね」

「あら、そうなの？ 私さっきまで食事休憩してたから。でも確かにね、普段ならクレス君やロイド君達で騒がしいのに」

カノンノの言葉にアンジユは確かにいつも甲板から聞こえてくる騒ぎ声が聞こえてこないのは新鮮だと微笑む。

「ああ、カノンノ、お帰り」

「あ、カイ。ただいま」

医務室のある方の扉から出てきたカイは笑みをを見せてカノンノに挨拶し、カノンノも

笑顔でただいまと挨拶する。

「お疲れ、怪我とかしてないか？」

「うん、大丈夫」

すたすたと歩き寄りながらそう問うカイにカノンノは心配してもらって嬉しいのか笑顔のまま返す。と、カイはすつとカノンノの手を取った。

「よかった。カノンノの白魚のような肌が傷ついてしまつては一大事だからね」

「…………ふえ？」

カイのタラシ言葉にカノンノは一瞬呆然としてしまい、一拍遅れて顔が赤くなる。隣のアンジユも「へ？」と呆けた声を漏らしていた。

「カ、カカカカイ、どうしたの!？」

「どうしたって、何が？」

「ただ、だって、だって……」

慌てるカノンノに対してマイペースなカイ。あわあわとなっているカノンノを見てカイは「ははっ」と笑う。

「どうしたんだよ、カノンノ。なんか変だぞ？」

今のカイに言われたくないよ、と言いたいがパニックになっているカノンノの口は上手く動いておらず、「あ」や「え」という単語が口から出るのみ。と、カイはカノンノの

顎に手をやって親指でくいつと押し上げる。

「まあ、そんなところも可愛いけどさ」

「ふえ、あ……」

カイの言葉を聞いたカノンノの顔が真っ赤に染まっていき、彼女の足がふらふらと定まらなくなる。

「やめんかー!!!」

カノンノの気絶一步手前でそんな女性の声が響き、ひゅんつという風切音が聞こえる。

「はぐっ!?!」

そしてカイが突如背後から殴られたかのような声を上げ、カノンノに抱き付くように倒れ込む。

「ひゃああああああつ?!?!」

抱きつかれたような格好になったカノンノがさらに悲鳴を上げる。

「わ、カノンノ！ お、お帰り！」

「カ、カイル、ナナリーも……」

「あー。この天然バカが迷惑かけたね」

「こいつ、ゼロス達から妙な事教え込まれたらしいんだよ」

カイルが慌てて駆け寄り、カノンノに挨拶。驚いているカノンノにナナリーがそう言つてカイル——後頭部に符が貼りついている。恐らくしいなが☒力符を投げ、後頭部に衝撃が走つたせいでもさしもの彼も気絶したのだろう——を担ぎ上げ、しいなも呆れた様子でそう言う。

「アンジュ、一緒に来とくれよ。こいつがこんな妙な事口走りまくつたらこの船が大パニックだよ」

「うん、そうね」

しいなの言葉にアンジュも賛成し、しいなとナナリー、アンジュはカイルの再教育の為とりあえず空いているであろう医務室に向かう。ホールに残ったのはカノンノとアニーだけだ。

「……び、びつくりしたあ……」

「私もです。いきなりしいなさん達が医務室にカイルさんを連れて来て診察してつて……そしたら……」

カノンノとアニーは互いに苦笑を漏らしながらそう話す。

「んつと、でも……」

カノンノは頬を赤らめ、頬をかく。

「ちよつとだけ、その、可愛いつて言つてもらつて嬉しかったなあ、なんて……」

「えっ?」

頬をかきかきカノンノの言葉にアニーが目を輝かせ、カノンノは「はうっ!」と声を詰まらせる。

「ち、違うよ! ベ、別にそういうのじゃなくて……」

わたわた弁解を始めるカノンノに対し、アニーはくすくすと微笑んでいた。

「なあ、やつてる事俺達と同じなのになんでカイはあんまりアクションされてんだ?」

回復し、降りてきたロニは早速カイの口説きに引つかかっているカノンノを見て細目でぼやく。

「……日頃の行いじゃない? あと、無欲の勝利っていうかさ」

それに対し、カイルが切り捨てるようにそう言い放った。

「ふう。昨日は大変だったわ」

「うん、朝はいつも通りでした」

日付が翌日に変わり、アンジュがぼやくとカノンノも苦笑交じりにそう返す。ああいう事は軽々しく言っではいけない、誤解をされるしセクハラとか色々と問題になるかも

しれない、しかしまあ女性を褒める事自体は別に叱られるような事でもないという妙にややくい説教を行った結果、カイは時々タラシ台詞が出るようになってしまった以外は元に戻っている。

「あ、あのっ！ すみませんっ!!」

と、その時バンエルティア号の甲板から誰かが転がり込むような勢いで飛び込んだ。

「あ、い、いらっしやい！」

カノンノが慌てて声をかける。と、飛び込んできた少女——茶色の髪を短く切り活発な雰囲気を見せる——ははあはあと息を荒げながら、声をかけてきたカノンノを見上げる。

「お、お願いします！ ミラを助けてください!!」

そしてそうお願いしてきた。

## 第二十四話 マクスウエルを助けて

「はい、どうぞ。お客様」

「あ、ありがとう」

バンエルティア号の食堂。ギルドメンバーの食事——現在もセルシウスやジエイド達が食事を取っている——以外にもややこしい依頼になった時に依頼内容の説明を受けたり交渉を行ったりするために使うここに、突然飛び込んできた茶髪の少女は案内されロックスから紅茶とクッキーを差し出されると、彼女はロックスを見て一瞬きよんとしつっお礼を言う。それに対しロックスは何も気にする様子を見せず「お代わりなどがご希望でしたらいつでもお申し下さい。すぐご準備いたします」と言つて一礼、厨房に戻つていった。

「えーつと、それじゃあ話を聞かせてもらつてもいいかな？　まず、お名前を聞かせていただいても？」

少女のすぐ前の席に彼女と向かい合う形で座っているアンジュの言葉に少女は「は、はい！」と頷く。

「あの、私はレイア・ロランドつて言います。この近くのシクエリア村というところから



やってきたんですが……」

少女——レイアはわたたととなりながら説明をしていく。曰く、自分達の村では精霊の王マクスウェルを祀っており、なんとその精霊王マクスウェル自身も例えばこのセルシウスのように人の姿を取り、ミラと名乗って村で暮らしているらしい。しかし少し前に村の近くに不思議な巨大な真つ白い突起物——ジルディアのキバだ——が出現。それと共に村の近くの魔物が凶暴化を起こしているというのだ。

「それでミラは、真つ白いものが何らかの関係があるんじゃないかってそれが出てきた洞窟に調査に行ったんですが……それからミラが戻ってこなくて……調査に行こうにも、洞窟の魔物は余計に凶暴化してるし、調査のために強い人達が皆行っちゃったら今度は村が危ないしで手が出せないんです……」

「なるほど。それで私達アドリビトムに依頼をしに来た、というわけね」

レイアから説明を受けたアンジュはふむふむと頷く。

「それは気になりますね」

と、静かに食事をしていたジェイドが口を挟んだ。

「その真つ白い突起物、私達は形状になぞらえてキバと呼んでいますがそれは世界中に出現している……そのマクスウェルという精霊の安否も気になりますが、一度キバの調査をしてみるべきかもしれません」

「確かにそうね……分かりました。レイアさん、あなたの依頼はこのアドリビトムでお受けいたします」

ジェイドからの提案を受け、アンジュは「マクスウェルを助けて」という依頼の受諾を決意。レイアはぱあっと明るい表情で「よろしくお願いします！」と頭を下げた。

「精霊の王、マクスウェルかあ……」

「精霊が人と共に暮らしているっていうのも興味あるわね……」

レイアの案内で森の中をがさがさを通り、シクエリア村に向かいながらそう呟くカノンとその横でそう言うリタ。彼女らと一緒にやってきたのはマクスウェルと同じく精霊であるセルシウス、最後にカイだ。と、リタは不思議な形状の杖を手でくると弄ぶ。

「まあ、私はこのコピーズ・ロッドでジルディアのキバのドキュメントがコピーできればいいんだけど」

「それぐらいなら俺達で充分だろ？ 本格的な分析は持って帰らないと出来ないんだし

……」

リタが不思議な形状の杖——対象のドキュメントをコピーするコピーズ・ロッドだ——

を弄びながら言うのにカイがそう返すとリタは杖を肩に担ぐように持ち替えながら「自分の目で見とこうかなって思っただけよ」と言った。

「皆、もうすぐシクエリア村だよ！」

先頭で案内をしていたレイアが己の武器である棍を観光旅行の案内人が旗を振るようにぶんぶんと振り回しながら言うのと他のメンバーも前方に注目。森を抜けると村が姿を現し、その入り口に黒髪の少年が誰かを待つように立っていた。

「あ、ジュード！」

「レイア！ 大丈夫だった？」

レイアが呼び、ジュードと呼ばれた少年もレイアを見つけると彼女に駆け寄る。それにレイアはにししと笑いながら「大丈夫大丈夫」と言い、次にカイ達を指し示す。

「ほら、この通りアドリビトムっていうギルドに依頼も出来たし！」

「よかったあ。レイアがギルドの人と問題起こしたりしないかと心配してたよ……」

報告を聞いた少年はほおつと息を吐いて安心したように呟いてからカイ達を見て頭を下げる。

「初めまして、ギルドの皆さん。僕はジュード・マティス、この村に住んでる学生で、元々は医学生だったんですけど大学が戦争で休校になったので村に戻ってきたんです。今回は依頼を受けていただき、ありがとうございます」

「いえ、私達も全力を尽くしてミラさんを助け出します」

少年——ジュード・マティスはすらすらと丁寧な言葉で挨拶、カノンもぺこつと頭を下げてそう返す。と、ジュードがぎゅつと拳を握りしめた。

「ありがとうございます。僕達も精一杯お手伝いします！」

「うん！」

そして元氣よくそう言い放ち、レイアもそれに同意。

「……はい？」

「え？」

アドリビトム代表の四人が呆けた声を出し、ジュードがそれにきよとんとした声を漏らした後、何かに気づくと呆れた様子で「レイア」と呼ぶ。

「僕達も手伝うって話してなかったでしょ？」

「あつ」

ジュードの言葉にレイアがぼん、と手を叩いてそう声を出した。それを聞いたジュードがやれやれと呆れたようにため息をついてこめかみに指を当て、それからカイ達を見る。

「これから行く洞窟は結構入り組んでいて、地元の住人である僕達がいないと道に迷って危険なんです。なので、万一のためにこの村からも数人の同行者を提供しよう、とい

う事になりました」

「それが私とジュード、あと村の方で二人待つてるはずだよ」

ジュードとレイアが説明し、ジュードが「じゃあ残りの説明は村に入ってお話しましょう」と言つて彼らは村に入つていった。

「あなた方がご依頼を受けて下さったギルドの方ですね？ 感謝いたします」

感謝の意を示すように深々と頭を下げるのは好々爺という様子を見せる老年の男性。

「私はローエン・J・イルベルトと申します。この村の村長の執事をしておりまして、村長は魔物から村人を守るため怪我をなさってしまった療養中のため、私から代わつて今回のご依頼について詳しく説明させていただきます」

老人——ローエンは名前を名乗り、療養中の主人の代役を仰せつかつているという旨を説明すると再び優雅にお辞儀をする。それからローエンが話すのはレイアの言つていた事についてさらに詳細な説明と、さつきジュードが言つていた通りこの村からも四人、腕の立つ者を道案内兼戦力として提供する。という事、それはジュードとレイア、残り二人。そこまで話が進んだ時、話に同席していた男性と少女が立ち上がった。

「俺が同行者の一人、アルヴィンだ」

「アルヴィンさんは元々、この村にブウサギの仕入れに来た行商人なのですが。腕が立

つと聞きまして、無理を申し上げて今回同行していただくことになりました」

「もちろん、この依頼を済ませたら格安での良いブウサギの肉の仕入れ、よろしくな？」  
男性——アルヴィンをローエンが紹介、アルヴィンは右手の親指と人差し指を円をつくるようにくつつけてウインクしながらローエンに向けてそう答える。

「あ、あの、私が同行する、エリーゼ・ルタス、です……」

次に少女が紫色のぬいぐるみを抱きかかえながら恥ずかしそうに自己紹介をする。  
「で、ボクはティポだよ——」

その次に突然、エリーゼの抱きかかえていたぬいぐるみが口を大きく開いて喋り、不意を突かれたカノンノが「きゃあつ！」と悲鳴を上げる。

「な、なにこれ？……」

リタもぼかんとしてティポを見る。

「ティ、ティポはティポ、です……」

「そだよー。それで、ジュード君達のともだちー」

エリーゼが恥ずかしそうに言い、ぬいぐるみ——ティポはそう言つて今度はなんと浮遊、アドリビトム四人の周りをくるくると回るように飛ぶ。

「……し、新種の魔物？ いやそれにしても……造形はぬいぐるみっぽいけど……」

リタはぼかんとしつつも冷静にティポの分析を始める。

「あ、あはは……まあ、その、僕達にもティポがなんなのかはよく分かってないんだよね……」

「ええ。ですが、エリーゼさんの魔術の腕は折り紙付き。私達も皆様の助けになると確信をしております」

ジュードが苦笑交じりに頬をかきながら呟き、しかしローエンがエリーゼを褒める。

「……まあ、実力があるんならこっちに文句はないだろ。すずだつて小さいのに強いんだからな」

と、カイもエリーゼの今回の同行に文句を出さず、爽やかな笑みを交えて彼女の頭をぼんぼんと軽く叩くように撫でる。それを受けたエリーゼがぼんつと顔を真っ赤にしてうつむいた。

「お、女の子になんてことすんだー!」

そしてティポがカイ目掛けて吼える。

「えつと、では、準備ができ次第ミラさんの救出任務を開始します。レイア、ジュードさん、皆さん、よろしくお願いします」

カノンノがそう言い、ジュード達に頭を下げる。ジュード達も「こちらこそ」と言つて頭を下げて返した。

「三散華！」

洞窟の中。ジュードが拳と蹴りを織り交ぜた乱舞で、レイアが棒を最大限に使った連撃でゴーレムをがち飛ばす。

「ジュード、例のやつ！」

さらにレイアがジュードを呼び、ジュードも首肯をすると二人はゴーレムを挟むような立ち位置を取る。

「巻空鏡舞!!」

一瞬で互い違いにゴーレムをすれ違うように通り抜け、その勢いで竜巻が起きてゴーレムを上空に吹き飛ばす。

「はあああああつー！」

その頭上にカイが飛び上がった。

「飯綱落とし！」

そして縦の回転斬りで、宙にいて動けないゴーレムを一刀両断に斬り倒す。

「ナイス」

地面に降り、立ち直してからカイがサムズアップを行い、レイアもにししと笑いなからサムズアップを返す。



「湧き出でよ、闇の腕。ネガティブゲイト！」

「ヴァリアブルトリガー！」

エリーゼがティポと共に詠唱し、魔術を放つと動き回っているウルフを捕らえるように地面から闇の腕が湧き出、そこにアルヴェインが銃を撃つて援護。

「仇なす者に、聖なる刻印を刻め！ フラッシュユティア!!」

そこにカノンノが地面に聖なる刻印を打ち、ウルフの動きを止める。

「合わせろよ、エリーゼ！」

アルヴェインが叫び、距離を詰めながら剣を掲げる。と、その剣に巨大なピコピコハンマーが装着された。

「ピコ破斬!!」

ピコピコハンマー装着の剣による虎牙破斬という若干シユールな技だが、その振り下ろしの一撃にウルフは押し潰される。

「ジュードもレイアも、アルヴェインもエリーゼも連携が凄いなね！」

辺りの魔物を倒し、安全を確認した後にカノンノが歓声を上げる。カイも隣で首肯す

るとジュードは「いや」と苦笑いを見せた。

「僕とレイアは幼馴染だし、その、師匠が共通だからさ……」

「大体お互いどういう技使うのかとか、どういう動きするのだったのはもう分かっちゃうんだよね！」

ジュードの苦笑交じりの言葉に続けてレイアがえっへんと胸を張る。

「それより先を急ぐわよ……セルシウス、どこにマクスウエルがいるかとか分かる？」

リタが先を急ぐこうと言い、セルシウスに話しかける。それにセルシウスは「少し待って」と言っって目を閉じる。

「……あつちからマクスウエル様のマナを感じるわ」

彼女が目を開け、一つの方向を指差す。と、ジュードが「えっ」と声を上げ、「分かるの？」と尋ねる。

「言ってなかったわね。私は氷の精霊セルシウス。同じく精霊の特有のマナの感覚は大體掴めるわ」

「うっそ?! 精霊ってミラ以外にも近くにいるんだ……」

ジュードの質問にセルシウスがあっさり返すと、レイアが驚いたように叫ぶ。

「だから道案内は私に任せて」

セルシウスは心なしか得意な笑みを見せながらそう言っって迷いなく歩き始め、カイ

達もその後について歩いていった。

それから洞窟の奥地にやってきた時、ジュードが目の前に現れた魔物を見て驚いたように足を止める。

「な、なに？　これ？」

ジュードが呟く。彼らの前に現れたのはオタオタ。しかし普通のオタオタと違い、その身体はまるで鉱石に覆われたかのような異様な姿になっていた。

「この魔物は異質……いえ、この空間自体が異質、というべきかしら？」

セルシウスも眉間に皺を寄せながら呟く。それを聞いたカノンノが「あのキバに近づいてるって事なのかな？」と続けた。

「あるいはこの場所がラザリスの影響を受けているか……」

リタがラザリスとは今のところ無関係であるジュード達に聞こえない声量で呟く。

「ジューディスはキバを通してラザリスの世界のドクメントがルミナシアに流れ込んでるって言ってたわね……でも、今はまだ何とも言えない……確証を得たいわ」

「ああ。先を急ごう」

リタの真剣な表情での言葉にカイも頷き、ジュード達に「先を急ごう」と呼びかける。ジュード達もそれに頷き、一行は異質な魔物達を一点突破、一気に突き進んでいった。

「もうすぐこの洞窟の最深部に差し掛かるけど……」

「マクスウェル様のマナはこの先から感じるわ」

ジュードの言葉に対しセルシウスはそう言い、やがて彼らの行く先が広く開けていく。

「これは……」

「綺麗……です……」

レイアとエリーゼが息を飲む。今まで通ってきたのは飾り気のない岩の壁、しかし洞窟の奥地は真つ白い、しかしまるで宝石のような輝きを放っていたのだ。

「確かに綺麗……だけどき……なんだか、もやもやする……」

しかしジュードは何かが喉に詰まっているかのようなくらいこないと聞いたげな表情を見せ、隣に立つアルヴェインも奥歯にものが挟まったような気持ち悪そうな表情になっている。カノンも何か不安気に顔を曇らせ、自分の胸の前できゅつと手を握りしめた。

「うん……何かな？ 私達ヒトが生きていく世界じゃない？……」

「ええ。なんて言えればいいのかな？……命を感じない」

不安気なカノンノにリタも同意する。

「あれがジルディアのキバ……これが、ラザリスの世界。ジルディアの風景なのか？」

カイも苦虫を噛み潰したような様子で呟き、一行は壁——ジルディアのキバに近づくと同時に足を進めていく。その地面も硬質化、ところどころひび割れているそこに根を張っているかのように水色の植物の蔦らしきものが張り巡らされていた。そして、その地面に跪くように一人の、金色の髪に前端が緑色のグラデーシヨンのかかっている女性が座り込んでいた。

「ミラ！」

「っ、迂闊にジルディアの領域に入るな！」

その姿を見たレイアが叫んで彼女に駆け寄り、カイは直感的に嫌な予感を感じ取ったのかレイアの後を追う。

「レイ……ア……？」

女性——ミラはレイアの声に反応し、彼女の方を向く。が、その隣に立つカイの姿を見た瞬間その目が見開かれる。

「ぐあああああああつ!!!」

そして痛みからくるような悲鳴を上げ、それと同時に彼女を赤い煙が包み込む。

「ミ、ミラ!?!」

「下がれ！」

思わずミラに向けて手を伸ばすレイアだがカイがその手を掴み、緊急事態だから仕方ないが若干乱暴にレイアを後ろに引っ張る。

「ミ、ミラ!? どうしたの!？」

その後ろからジュード達が駆け寄るが前衛に立つセルシウスがジュード達を必要以上ミラに近づけさせまいと壁になる。

「ジュー、ド……レイ、ア……逃げろ……」

と、ミラはそう呟きながらふらふらと立ち上がり、ぶるぶると震えた手で剣を握ると、若干焦点の合っていない目でカイを睨み、

「うあああああああつ!!!」

「ー」

突然カイ目掛けて斬りかかる。それをカイはレイアをジュードの方に突き飛ばしてバク宙でかわし、彼女の突進の勢いを利用したような第二の斬撃をバク宙と同時に空中で抜いた刀で受け止め、鏢迫り合いの格好に持ち込む。

「身体が、言う事を効かない……逃げろ……」

ミラは弱々しい声で呟き、直後ミラが剣を振り抜くと押し負けたカイが後ろに押される。

「ぐ、あつ……」

再びミラが弱々しい悲鳴を上げ、赤い煙が彼女に纏わりつくくと、彼女の身体が腕や足がまるで鎧を着けたかのように硬化。ミラは虚ろな目に殺気を込めてカイを睨みつけた。

「デイセクター……覚悟」

口が勝手に動いているかのような淡々とした声と共にミラは再びカイに斬りかかり、カイもその剣を受け流すように防御。蹴りを入れて牽制するがミラもそれを華麗なステップでかわす。

「アサルトダンス」

「鬼炎斬！」

ミラの回転し舞うように斬りかかっつての連続斬りをカイは炎を纏った刀で弾く。

「目覚めよ、無慈悲で名もなき茨の女王！ アイヴィーラッシュユ！」

そこにリタが詠唱を終え、叫ぶと同時に地面から茨の蔦が這い出してミラを捕らえた。

「今よ、カイ！ あんたの力で！」

「了解！」

リタがアイヴィーラッシュユでミラを押さえている隙にカイは刀を鞘に収めると、ミラをジルディアの力から解放するために両手に浄化の光を纏わせる。

「う、ああああああつ!!!」

しかしその瞬間ミラが悲鳴を上げ、彼女が暴れると茨が引きちぎられる。

「なっ!?!」

「チツ!?!」

リタが驚いて硬直してしまい、ミラが再びカイに斬りかかるとカイも斬撃をかわして再び刀を抜く。浄化の際がない。

「しょうがねえ。ちよつと大人しくなつてもらうか」

浄化を行う為にもまずミラには大人しくなつてもらおう、とカノンも大剣を構えセルシウスも構えを取る。

「ミラ、一体どうしちゃったの!?!」

レイアが呼びかける。が、ミラは虚ろな目をしており、レイアの声が届いているとは思えない。

「……詳しく説明する時間はないけれど、要するにさっきの赤い煙のせいでマクスウェル様は暴走したの。デイセ……カイの持つ力があれば元に戻せるんだけど、その力を使うには時間がかかる」

「……つまり、ミラを一度戦闘不能にしないと危険だつて事ですね?」

セルシウスの説明を受けたジュードが簡単にまとめ、セルシウスもそれを首肯で肯定



する。ジュードも「分かりました」と頷いた。

「ミラと戦うのは悲しいですけど、こんな事ミラも望んでないはず……僕達も戦います！」

「ごめんね、ミラ。すぐに元に戻してあげるから！」

ジュードがそう言つて拳を構えるとレイアも棍を構え、その横でアルヴィンとエリーゼも構えを取る。

「行くぞー！」

そしてカイの合図で戦闘が開始された。

## 第二十五話 VS精霊王

シクエリア村のとある洞窟。巨大な白い突起物——ジルディアのキバ——が奥地に現れたそこに調査に行つた精霊王マクスウエルことミラが戻つてこないため探してほしい、という依頼を受けたカイ達はその洞窟を訪れていた。そしてその最奥の地にて、赤い煙に侵されたミラとカイ達の戦いが始まつていた。

「地竜閃！」

「土竜閃！」

アルヴェインとカイが地面に剣と刀を突き刺し、大地にヒビを入れるとアルヴェインは大地のマナの衝撃波で、カイは岩の槍でミラを牽制。

「瞬迅爪！」

「虎牙破斬！」

大地の力がミラの動きを抑えている隙にレイアとカノンノが突進しながらの棍による突きと大剣の空中からの振り下ろしを見舞い、それをミラは大地の衝撃波が来ている背後に飛んでかわす。

「転泡！」

「!?」

だがそこに背後からジュードが強襲、鋭い足払いでバックステップを踏んでいたミラの足元を払い、彼女を仰向けに倒させる。

「アイシクルフォール!」

さらにセルシウスが空中から氷の槍を降らせて追撃、ミラは咄嗟に顔や身体を庇うように腕を出し、腕をまるで鎧のように侵食している鉱石が槍を防ぐ。

「今よ!」

だがセルシウスはそれは予想通りとばかりに声を張り上げる。

「大地の躍動、その身を贅にして敵を砕かん!」

「蝕を知り来れ、死を纏う黒蝶」

それを合図としたかのようにリタが武器である布を振り回して立体的に魔法陣を描き、その横でエリーゼの詠唱を完了。同時にミラの真下の大地が揺れ、頭上に黒い闇のような蝶々が集まった。

「グランドダツシャー!!」

「フラッターズ・デーム!」

二人の声が重なった時、大地の怒りが岩の槍となって下から、闇の蝶々がいくつもの闇の剣となって頭上からミラを襲う。

「レイア！ ミラをいつでも回復できるように準備！」

「もちろん！」

ミラを助けるために一時的に動けなくさせる程度のダメージを与えるのが目的とはいえ、ダメージを負ったままにさせるわけでもなく、ジュードはカイがミラを元に戻した後にすぐにでも回復できるようにと準備を始める。

「風よ駆れ——」

そんな時、グラウンドダッシュヤーとフラッターズ・ディムがミラに当たると共にぶつかり合った事で発生した煙の中からそんな声が聞こえてくる。

「花散らす如く——」

「これは、皆さん！ 伏せて!!」

その言葉——魔術の呪文詠唱——を聞いたジュードが焦った様子で叫ぶ。

「アリーヴェデルチ!!」

しかし一瞬遅く、周辺に風のマナが巻き起こったかと思うとそれは花びらを散らす竜巻へと変化。一瞬でカイ達を呑み込み荒れ狂う。

「く、皆！ 大丈夫!?!」

いち早く起き上がって仲間の安否を問うジュード。しかしレイアは回復魔術の準備をしていたところに不意打ちで反撃を受けたため防御が間に合わなかったのかダメー

ジが大きく、他のメンバーもなかなかダメージをくらっている。

「ああああああつ!!!」

が、ミラは悲鳴のような雄叫びを上げて斬りかかってくる。

「ちっ!」

それに一番に反応したのはカイだった。カイとミラはどちらかの斬撃をかわし、反撃に斬撃を打ち込むが今度はそれを相手がかわすというまるで剣舞のような戦いを開始。

「こいつの狙いは基本俺だ! 今の内に回復頼む!」

「あ、はい!」

カイが自ら囿になりつつ指示を飛ばし、ジュードはそれに頷くと「エリーゼ!」と呼び、彼女に駆け寄る。そして二人が隣り合わせに立って詠唱を開始すると周囲に癒しの力が舞う。

「エイドオール!!」

二つの治癒術が共鳴し、その力を上昇。一気に仲間達を回復させた。

「うう、頭くらくらする……」

回復したとはいえレイアのダメージは酷いらしく頭を押さえており、その隣のカノンも竜巻に揺さぶられた影響かきゅくと目をぐるぐる渦巻きにしていた。

「カノンとレイアは戦闘続行が難しいようね……私も下がって二人の護衛に集中する

わ」

「俺も付き合うぜ。この騒ぎだ、洞窟の魔物連中に気づかれた時の露払いも必要だしな」  
セルシウスが戦闘不能状態の二人の護衛のため戦線離脱を申し出、アルヴィンも戦線離脱を宣言。ジュードもそれを了承するように領き、セルシウスがカノンノとレイアに肩を貸し、アルヴィンも武器を手にこの最奥地の入り口の方に走っていった。

「せあつー！」

カイとミラの戦い、カイはミラの攻撃をかわしつつ反時計回りに回転。その回転の勢いを利用して刀を振り上げるようにミラの顔面を狙って斬りつけるが彼女は顔を後ろに逸らして回避する。

「飛燕連脚ー！」

「くっー！」

しかしカイは刀を振り切った勢いを利用して連続蹴りを見舞い、着地しながらもさらに回転。刀を左手一本で握ったまま右手に闇のmanaを集中する。

「滅掌破ー！」

「ぐっっー！」

連続蹴りに続けての闇のmanaを込めた掌底破がミラの腹を捉え、さらに闇の爆発によつて吹き飛ばす。

「カイ！ 大丈夫？」

そこにリタが走り寄ってカイの安否を確認。駆け寄ってきたエリーゼの手からティポが飛んでカイの周りをくるくる回り、ジュードもその魔術師二人を守るように立つ。そしてミラも相変わらず虚ろな目のままゆっくりと立ち上がる。多少ダメージは与えたものの、まだ戦闘不能にまでするには至らないようだ。

「流石だね、ミラ」

「いくぞ、皆！」

ジュードがぼやき、カイが叫ぶ。その声を合図にリタとエリーゼが詠唱を始め、カイとジュードは武器を構えて地面を蹴った。

「虚空より出でし靈光、万物を打ち払わん……ディバインストリーク！」

ミラが詠唱を進めると共に空中に魔法陣が出現、レーザーが放たれてカイとジュードを襲う。が、二人はそれを左右に分かれてかわし、ミラ目掛けて同時に突進、挟み撃ちにする。

「滅掌破！」

「掌底破！」

息を合わせて右手の掌底をミラにぶつけ、ミラはそれを左腕で受けるがカイは闇のマナの爆発で怯ませる。

「続ける！」

「フアラ直伝！」

しかし二人はさらに自分の掌底にもう片方の手を重ねる。

「双撞掌底破!!」

「ぐうっ!?!」

掌底を重ね、その衝撃でミラのガードを破壊。

「灼熱の軌跡を以って、野卑なる蛮行を滅せよ！ スパイラルフレア!!」

そこに間髪入れずリタの詠唱が完了。巨大な炎が球体となり螺旋を描いて弾丸のようミラを貫く。

「一剣を以って、万業を滅却せん……抜刀——」

炎に焼かれつつも、ミラの口からまるで自動的に再生されているかのように呪文が詠唱される。

「サンダーブレード！」

魔術が発動すると同時、虚空に雷のマナが結集。それが剣を形作ってまるで透明人間が振るうかのように鋭くカイとジュードを襲う。

「つつっ！」

咄嗟にバック宙でかわすカイと伏せてかわすジュード。さらにジュードは地面を



蹴ってその場を離れる。

「なっ!?!」

直後カイの顔が驚愕に染まる。振るわれた雷の剣はそれだけで終わらず、まるで投擲されたかのようにカイが着地した場所に突き刺さり、電撃をまき散らす。

「ぐああああああつ!!!」

「もらった」

感電したカイが悲鳴を上げ、ミラがその隙を逃さず特攻。

「叛陽陣!」

「!」

しかしその時真横に光が走り、ミラは咄嗟に光をかわす。しかし僅かに光に触れてしまい、その光が爆発を起こしてミラを怯ませる。

「させないよ!」

間髪入れずにジュードが空中から急降下して強烈な飛び蹴りを見舞う技——飛天翔駆でミラを強襲する。

「く……」

ミラはジュードの拳を防ぎつつ剣で反撃、しかしジュードもそれを軽やかな動きで回避しつつ拳を放っていた。

「ルナティックステイング」

ミラが空中に光で魔法陣を描き、それに手をかざすと光の槍がジュード目掛けて突き出される。

「無影掌！」

しかしジュードはそれを呼んでいたかのようにバックステップを踏み、光の槍をかわして直後拳を振りかぶって突進する。

「ジュー……ド」

「!？」

その時間こえてきた声、そのミラの声にジュードは反応してしまい、拳が止まってしまふ。

「フレアボム」

「しまっ——」

しかしその声はやはり一瞬で途切れてしまい、次の瞬間ジュードの目の前に見えたのは赤い閃光——爆発。それをもろにくらってしまったジュードは吹き飛ばされる。

「白き精霊舞い、祝福の羽踊る。ナース！」

だがそこにカイがダメージを負った時に詠唱を開始したエリーゼの詠唱が終了。上空に半透明の姿の天使が現れ、降り注いだ光がカイ達の傷を癒していく。

「誘惑の罨張り巡らし、我が懐中へ！ 回復の邪魔はさせないわよ、トラクタービーム  
!!」

さらにリタが凄まじい斥力で地上の敵を上空に弾き飛ばす術——トラクタービーム  
で援護。ミラを空中に吹き飛ばす。

「く……流石精霊王ってやつか。強い」

「うん……カイさん」

降り注ぐ癒しの光で回復しつつ言うカイ。と、ジュードが彼に声をかけた。

「……僕がミラをなんとかします」

「……出来るのか?」

ジュードの言葉にカイが尋ね、それにジュードはこくりと頷く。

「なのでカイさんやリタさんには援護を……」

「分かった」

その提案をカイは頷き、後衛を振りむくとリタに向けて援護を指示、リタも頷いて詠  
唱を開始。それから二人は再びミラ目掛けて突進した。

「黒雲招来、雷神咆哮……バニツシユヴォルト!」

ミラが剣を掲げると空中に雷の球体が現れ、雷が降り注ぐが二人はそれをかわしながら  
ラスピードを緩めず突進、

「影走斬！」

さらにカイは加速しながら居合斬りを見舞い、ミラを怯ませる。

「……貫け、ハイアーザンスカイ」

対するミラは剣を掲げジャンプして突き上げ、カイを吹き飛ばす。

「目覚めよ、無慈悲で名もなき茨の女王！ アイヴィーラツシュ！」

「!?」

その直後、地面から伸びた茨がミラを捕らえた。

「今よ、ジュード！」

「はいっ！」

リタが叫び、ジュードは叫び返しながら己の限界を突破、凄まじいオーラを纏いながらミラに突進。

「臥狼咆哮!!」

サマーソルトで蹴り上げてから空中から拳を叩きつける。

「ごめんね、ミラ……」

「ジュード……」

仲間に対する懺悔、しかしそれに対し再びミラは正気を取り戻したような声を出す。

「……やってくれ！」

そして強い意志を感じる目でジュード目掛けて檄を飛ばす。それにジュードも強い意志をもって頷いた。

「殺劇！」

鋭いハイキックでミラを茨を引きちぎりながら吹き飛ばし、直後その分の距離を詰めて拳と蹴りの乱打を叩き込む。

「はあああああつ!!」

瞬間移動のような速さで背後に回った後に肘打ちで再びミラを吹き飛ばし、気合を溜める。

「舞荒拳!!!」

そして気合と闘気の全てを込めた右の拳がミラを吹き飛ばした。

「ミラー！」

拳をくらったミラは吹き飛ばされて洞窟の壁に叩きつけられ、動かなくなる。

「カイ、急いで！」

リタが指示を飛ばし、カイも何も言わず頷きながらミラに両手を向ける。ジルディアの侵食を浄化する光がその手から発され、その光がミラへと移る。

「……」

その光が止んだ後、ミラの身体からジルディアの鉱石は消え去っていた。

「これで大丈夫のはず……あとは傷を癒さない」と

「はい！ 治癒功！」

「降り注げ、博愛の慈雨。ハートレスサークル！」

次にジュードとエリーゼがミラを回復させる。

「う……………」

その回復が終わった後、ミラが目を覚ます。

「ミラ、大丈夫!？」

「ジュード……………ああ」

ジュードがミラに安否を問いつつ手差し伸べ、ミラもこくりと頷いてジュードの手を取り、立ち上がる。それから彼女はカイを見た。

「どうやら助けられたようだな……………すまない、デイセクター」

「気にするな」

ミラの言葉にカイはそう返す。

「……………え？ デイセクター?」

と、ジュードがぼかんとした声を出した。

「デイセクターってあれ？ あの、世界が危機に陥った時に現れるっていう伝説の?」

ぼかんとした声に目をパチクリさせながらジュードが問う。

「……言つてなかつたつけ？」

対するカイもきよんとした様子で問い返した。

「ディセンダーというのも大雑把なものだな……まあ世界樹が、奴が生んだのならば当然とも言えるか」

ミラも若干呆れた様子でぼやいていた。

「ミラーー！」

と、時間をおいて回復したらしいレイアがミラに駆け寄り、抱きついた。

「よかつたー元に戻つて！ 心配してたんだよー！」

「よかつたですー！」

続けてエリーゼも抱き付き、ティポもミラの周りをくるくると回る。

「ああ。心配をかけた……だが、もう大丈夫だ」

ミラは抱き付いて来た二人を安心させるように両手でそれぞれの頭を撫でながら、穏やかに微笑んで返す。

「お久しぶりです、マクスウエル様」

次にセルシウスがミラに声をかけ、ミラも「セルシウス」と彼女の名を呼ぶ。

「久しぶりだな。四千年ぶり、と言つたところか？」

「そのくらいでしようか？……先に聞いておきたいのですが、イフリート達は？」

ミラも挨拶を返し、セルシウスは若干警戒の様子を見せながらそう問う。だがミラは首を静かに横に振っただけだった。

「最近の星晶の採掘によつて、イフリート達もここに顕現する程の余力が残っていないようだ。皆、本来いるべき場所にいる」

「そう……」

ミラの言葉にセルシウスは心なしかほっとした様子を見せていた。

「しかし、以前から妙な感覚はあったが……やはり“あの存在”の封印が解かれてしまったらしいな」

「はい。だからデイセンダー……カイが遣わされたのです」

「なるほど、そういう事か」

ミラとセルシウスは近況についての報告を行った後、ミラが改めてカイ達アドリビットムメンバーの方を向いた。

「改めて、助けてもらった礼を言わせてもらおう。私はミラ＝マクスウェル、この世界の精霊の王、マクスウェルだ。デイセンダー、私も君に与し、あの存在……ラザリスと戦おうと思う」

「そりゃ心強い。よろしく頼むぜ、マクスウェル」



ミラの言葉にカイもふっと笑ってそう返す。と、ミラはやや不機嫌そうな顔を見せた。

「デイセNDER。悪いが、出来ればミラと呼んでくれないか？」

「……んじや俺もデイセNDERって呼ぶな」

不機嫌そうなミラに対しカイも言い返し、それを聞いたミラもきよんとした後、ふっと吹き出した。

「そうだな。これからよろしく頼む、カイ」

「ああ。よろしく頼むぜ、ミラ」

デイセNDERことカイとマクスウェルことミラはそう言い、握手を交わす。

「さてと。んじやまあもう一仕事終わらせるか」

「そうね。つてか、あたしにとつちやこれが主目的なんだけど」

カイの言葉にリタもそう言い、対象の物質のドクメントをコピーする杖——コピーズ・ロッドをジルディアのキバにかざす。と、ロッドに宿されていた球体に光が灯った。

「これでよしっ」と

ドクメントがコピーされたことを確認したリタは振り返って「とつとと戻りましたよ」と呼びかける。が、カイはふと自分の両手を見て、それに浄化の光を灯した。

「ちよっ、あんた何するつもり!？」

「ま、もののついでだ」

ぎよっとするリタに対しカイはそう言ってこの場を侵食しているジルディアの地面に手を当てる。と、光がカイの触れている部分を伝わって地面に広がっていった。そしてその光が治まった時、その場の風景がほとんど元の状態に戻っていた。が、ジルディアのキバ本体はなんともなく、さらにそこに接している地面は元に戻っていない。

「これって……この世界の風景に戻したっていうの!？」

「……チツ、ダメか」

リタが驚きのまま声を上げる。が、カイはそう毒づいた後、糸が切れた人形のようにその場に倒れ込んだ。

「……………」

「……………」

呻き声の後、聞こえてきた声。目の前が真っ暗だ、カイはそう思うが直後自身が目を閉じているだけだという事に気づき、目を開く。

「……………」

「……………」

カイの質問にロックスは淀むことなく答え、カイは「気を失う？」と呟いた。

「確か俺はシクエリア村で、ミラと戦ってミラを解放して……その後、ジルディアの侵食を浄化しようとして……」

「その後、気を失ったのだとリタ様から伺っております。ここへはジュード様が背負って連れて来てくださったんですよ」

カイはぼーっとする頭で記憶を辿り、ロックスが補足説明を行う。

「あ、カイ！　目が覚めたの！」

と、医務室にカノンノとジュード、ミラが入ってくる。さらにカノンノはカイが目を覚ましているのを見ると急いで彼に駆け寄った。

「カイさん、大丈夫？　いきなり気を失ったから心配したよ……」

「迷惑かけたみたいだな。悪い」

ジュードの心配そうな言葉にカイは一言謝罪を漏らす。

「覚えているか？　君はラザリスの世界の風景を　この世界のものに戻したんだ」

ミラが確認するようにカイに話し、「……しかし、あのキバを消すには力及ばなかった様だ」と残念そうに続ける。

「……すまん」

「いや、別に君を責めてなどいない。むしろ私から礼を言いたいくらいだ」

謝罪をするカイにミラは首を横に振って返し、カノンノもうんと頷く。

「元々はヒトが星晶を採り過ぎなければ、こんな事にはならなかったはずだもん。ともかく、あなたが無事で良かった」

そう言つてふわつと笑顔を見せるカノンノ。それにカイもつられたように笑つた後、ふと気づいたようにジュード達を見る。

「そういえば、なんでジュード達がここにいるんだ？」

「ああ、僕達もこのギルドのお世話になる事にしたんだよ」

カイの問いかけにジュードがそう言い、カイが「は？」と声を返す。

「あの白い物体、ジルディアのキバによる浸食はカイのおかげで止められた。しかしまたいつ浸食が起きるか分からないからな。残念だが、あの村から出て行くことにしたんだ」

「そこで、このギルドのリーダー。アンジュさんからオルタ・ビレッジの話聞いてね。村の皆もその理念に賛成、オルタ・ビレッジ建設の手伝いをする事になったんだよ。それで、僕やミラ、レイア達はこのギルドに入って物資補給を手伝う事になったってわけ。アドリビトムにはミラを助けてもらった恩もあるしね」

「そうか……心強い。よろしく頼む」

「もちろん」

ミラとジュードから説明を受け、カイは頭を下げてよろしくと言う。ジュードもうんと頷いて返した。

「あ、それでコピーズ・ロッドはリタが研究室に持って行って、今は解析に取り掛かっているの。アンジュさんから、今回もご苦労様。たまにはゆっくり休んでねって伝言」

「はい。カイ様はいつも働きづめですから。たまにはしっかり休んでくださいね」

「……へいへい」

カノンノの言葉にロックスも賛成、二人がかりに言われると弱いのか、カイは苦笑交じりに頷いて返したのであった。

## 第二十六話 帝国参戦?新たな仲間達

バンエルティア号のホール。普段なら和気藹々とした団欒も行われているこの場は現在、ピリピリと張りつめた空気に包まれていた。

「ようこそ、ギルド・アドリビトムへ。ご用件を伺つてもよろしいでしょうか?」

来客に対し用件を伺うアンジユも、普段より数割増し、相手の出方を伺う様子を見せていた。

「ウリズン帝国、現皇帝……アガータ・リンドブロム陛下」

そしてその口から来客——ウリズン帝国現皇帝の名が紡がれる。それに対し頭にネコミミを生やしたガジユマの女性——しかしその顔立ちはどちらかといえばヒューマに近く、それもかなり美人である——は、僅かに目を伏せた後、アンジユを見る。

「私たち、ウリズン帝国は……ギルド・アドリビトムへの協力に参りました」

アガータはその口から、ギルドへの協力を口に出す。

「……協力?」

それに返すのは、ホールの椅子にどっかりと座っていたユーリだ。その目はやや苛立ったように細められており、まるで睨んでいるかのようにアガータを見据えていた。

「今までいろんな村を……いや、国を苦しめておいて、今更俺達に力を貸したい。だなんて随分虫のいい事言ってくれてるんじゃないかねえのか？　まさか、そんなもんで水に流せる。とても思ってたのか？」

「……」

ユーリの単刀直入な言葉の一撃にアガーテは言い返せないのか目を伏せ、頭を力なく垂れる。ホールにいたヴェイグも腕組みをしてきつい表情——実際には普段の状態を保っているだけだが——をしており、テイトレイが慌てた様子で「おいユーリ」と彼を止めようとするものの、ウリズン帝国に星晶を奪われた結果、最終的に村を捨てる事にまでなってしまったのは事実であるため帝国側の弁護も出来ず、彼をして口を閉ざすしか出来なかった。

「……それに関しては、我々からは何の申し開きも出来ない」

アガーテの隣に立つ金髪の騎士らしい男性が、重々しく口を開く。その言葉は苦渋に満ちたものだった。

「全てはアガーテ陛下の教育係をなさっていた、ジルバ・マディガンの計画だったんだ……あまり、陛下を責めないでやってくれ」

その時、バンエルティア号の奥からそんな声が聞こえてきた。

「ユージーン？」

テイトレイが声を漏らす。と、アガーテと一緒にいたコウモリのような外見のガジユマ——紳士服を着て杖をついた、初老を越した程度の男性と言えば紳士的な老執事のように見えるが、その鋭い眼光は歴戦の戦士を思わせる——が驚いたように目を開いた。

「隊長！」

「た、たいちよお!？」

老人の言葉に今度はテイトレイが声をひっくり返す番だった。と、ユージーンは腕を組んで目を伏せる。

「ワルトウ……もう俺は隊長ではない」

「ちよ、ちよつと待てよユージーン! どういうことだ!？」

テイトレイがあわあわ腕を上下させてユージーンに問い詰める。その顔には困惑がありありと浮かんでおり、ユージーンはふむ、と声を漏らす。

「まず、黙っていた事を謝ろう。すまなかった……俺はかつて、ウリズン帝国の軍人だったんだ」

「!？」

それは同じヘーゼル村に住んでいたテイトレイも、ヴェイグですら驚愕を顔に出す告白だった。

「ジルバ・マディガン……アガーテ姫……陛下の教育係をしていた者で、ラドラス前陛下



が亡くなった後、政治に疎い陛下に変わって国政を取り仕切っていた……だが」

「ジルバ様は、帝国の発展のため、星晶を手に入れるために世界各国に軍事侵略を開始……隊長はそれに反対し、その結果軍を追われてしまったのです……」

ユージーンに続いてコウモリのガジュマ——ユージーンからワルトウと呼ばれていた——が説明を続ける。

「その後、俺は各地をさまよった後にヘーゼル村に辿り着いた……その後はお前達も知っている通りだ」

「隊長がいなくなった後、ジルバ様はかつての隊長の地位、帝国軍総大将の地位となり、事実上の独裁国家として操っていた……ですが、これを止められなかったのは私達の無力……」

「私達に出来た事は、アガーテ陛下の命を守る事……しかしその結果、軍事侵攻を止める事は叶わなかった……」

ワルトウは苦渋の様子で説明を終える。騎士らしい男性も拳を悔しそうに握りしめて言葉を吐き出していた。

「元はと言えば、私がすっかりしていれば……ヘーゼル村や様々な村の民に酷い事を……謝って許される事ではありませんが、深く謝罪させていただきます」

アガーテも心から申し訳なさそうな表情で頭を下げていた。

「あー……えーつと……だな……」

アガータの深く頭を下げての謝罪を受けたヘーゼル村住人——テイトレイが頭をばりばりとかいて何かむずがゆそうな様子を見せる。

「要するに、そのジルバ？　つてやつが俺達の村から星晶を奪うよう命令を出してたつてわけか？　それで、それをあんたは知らなかった」

「……まあ、知らなかった。で済まされる問題でもないがな」

テイトレイの単純にまとめた結論に対し、ヴェイグが静かに続ける。

「だが、それならそのジルバという奴は今どうなっているんだ？　そいつが今もお国を牛耳っているのならば、お前達が国の使者を名乗ってここまで来れるはずもないのでは？」

そして現在国を操っているジルバは今どうなっているんだ、と確信を突く。

「それは……」

「陛下、それは私から話しましょう」

アガータが言いよどむと、騎士らしき男性が前に立つ。

「挨拶が遅れた。私はウリズン帝国軍総大将、ミルハウスト・セルカーク」

「……ヴェイグ・リユングベルだ」

男性——ミルハウストが名乗ると、ヴェイグも自身の名を名乗り返す。そして一拍置

くとヴェイグは「む」と声を漏らした。

「帝国軍総大将?……それはジルバの地位だと言っていないかったか?」

「……察しがいいな」

ヴェイグの鋭い指摘にミルハウストはふっと息を吐く。

「ヴェイグ・リユングベル……君は確か、ヘーゼル村でサレに反抗した者だという報告を受けている」

「ああ」

ミルハウストの言葉にヴェイグは首肯を返す。

「……ジルバ・マデイガンは暗殺された」

『!?!』

突然の言葉にその場にいたウリズン帝国軍関係者以外の目が見開かれる。が、ミルハウストは「そして」と言葉を続けた。

「その暗殺の犯人は、サレだ。そして奴は今、ウリズン帝国を脱走し、行方不明になっている」

ミルハウストはそう、アドリビトムメンバーにとつて衝撃の真実を告白した。

「しかし、ジルバが暗殺された今、この国の主権はアガーテ様へと戻りました」

ヒトが亡くなったというのは不幸だが、不幸中の幸いだというようにワルトウが続け

る。それに対しアガーテも「はい」と頷いた。

「ジルバの……いえ、ウリズン帝国の軍事侵略およびに星晶等の強制接收、村人に対する強制労働。それらについて謝罪いたします」

実際に命令を下したのはジルバとはいえ、そのジルバは元はといえば自分の代理として国政を取り切っていたとも言える。ならば、それを止められなかったのは自らの責任。というようなアガーテはその罪を背負うというように深く謝罪の言葉を口にする。

「どうか、私達に力をお貸しください」

深く頭を下げて懇願するアガーテ。それにアンジユも困った様子を見せた。

「んーつと、な……協力しても、いいんじゃないかねえか？」

それに助け船を出したのは、なんとウリズン帝国に苦しめられていた一人であるティトレイだった。

「そりゃ、俺達の村はウリズン帝国が星晶を持っていつちまったせいで作物も取れねえし、狩りの獲物もいなくなっちゃった。でも、それを命令していたジルバはいなくなっちゃったんだろ？ だったら俺からはあんたらを責める理由がなくなっちゃったっていうか……」

ティトレイはそこまで言うと、自分の考えをどう説明すればいいのかと腕組みをして考え始める。

「ユージーンが元軍人だというのは驚いたが、ユージーンのように侵略戦争に反対し、国  
同士の共存を望む者もいるはずだ……なら、俺はそれを信じる」

彼の言葉を引き取るように、そうヴェイグが続けた。被害者である二人から出た言葉  
にアンジユはふうと息を吐く。

「アガーテ・リンドブロム陛下」

「は、はいっ！」

アンジユから呼ばれたアガーテは驚いたように耳をピクンツと動かして顔を上げる。

「テイトレイ君やヴェイグ君はこう言っています……私としては今までウリズン帝国  
の行ってきた所業を鑑みれば今回の謝罪のみで全てを水に流し、協力関係を結ぶとい  
うのは難しいです」

その言葉を聞いたアガーテがしゅんとした表情になる。その耳もぺたんと垂れ下  
がっていた。

「ですから。今までの評価を覆せる行動を見せていただきます。仮の協力関係を結び、  
私達があなた方の行動を見て、ちゃんとした協力関係を結ぶか判断させていただけま  
す」

「！」

一応の協力関係を結ぶことは出来た。それにアガーテの顔がぱつと輝き、彼女は再び

「ありがとうございます！」と言って頭を下げた。

「では後日。私達からアドリビトムへの協力のため、兵士を派遣いたします」  
「ええ」

アガータがそう言い、アンジユも微笑んで返すと二人は握手を行なった。

「へえ、そんな事があつたのか」

「ああ。でも、帝国の奴らも案外捨てたもんじゃねえよな」

バンエルティア号の甲板。ウリズン帝国領地のとある港町に停泊しているバンエルティア号のここで、ウリズン帝国からの協力の話を聞いたカイはそれを話したテイトレイに対してそう返し、テイトレイは頷いた後、ウリズン帝国の行動を賞賛してにしと笑う。

「たのもー！ アドリビトムというギルドはここかー!?」

その時、そんな大声が聞こえてきた。

「このバカ！ んな大きな声出したら迷惑でしょうが！」

直後、そんなお叱りの言葉とゴスツという打撃音、さらに「あいたー！」という悲鳴まで聞こえて来た。

「……なんだ？」

カイとテイトレイの声が重なる。するとカン、カンという数人分の足音が船に乗るために設置していたスロープから聞こえてくる。

「あの、失礼いたしました」

姿を現したのは男三人に女二人の五人組。その内の一人——銀色の髪にアホ毛がびよんと跳ねており、優しい目つきをした女性だ——が苦笑交じりにぺこりと頭を下げる。次にその隣に立つ、色黒の肌に金髪で目つきの悪い細目をした男性が敬礼を取った。

「自分達はアガールテ陛下の命により、ウリズン帝国軍よりこのギルド・アドリビトムへ派遣された者です。リーダーへのお目通りを願いたいのですが」

「ああ、あんたらが。分かった。今案内するぜ」

色黒の男性の名乗りにその話を聞いていたテイトレイが納得したように頷き、彼らを伴って船内に入っていく。カイもその後が続いて船内に入っていった。

「あなたがウリズン帝国から派遣された兵士ね。歓迎します」

「はっ！ 私はウリズン帝国軍第一部隊所属、フォックスと申します」

アンジユの柔らかな微笑みでの歓迎に対し色黒の肌の男性——フォックスが敬礼を取りながら名前を名乗る。ちなみに同席しているのはカイのみで、ティトレイは「ウリズン帝国のやつが来たんだし、ユージーンもいた方がよくねえか?」と言つてユージーンを呼びに行つてゐる。

「俺はステイサム! 格闘家やつてるぜ!」

続けて鳶色の髪を燃え盛る炎のように逆立たせた男性がぐつとサムズアップをし、タレ目を細めて快活な笑みを浮かべながら名乗る。

「私はユンと申します。魔術部隊に所属する魔術師です」

次に名乗るのは銀色の髪にアホ毛がびよんと跳ねている少女だ。おしとやかな雰囲気を見せ、穏やかな声で礼儀正しい所作の挨拶は彼女の育ちの良さをうかがわせた。

「アタシはロツタ。魔術部隊に所属する僧侶よ……まったく、皇帝命令とはいえこの私がギルド生活なんて……」

黒髪を短く切り、何故か頭の上に王冠を乗せた少女が切れ長の目で睨むようにしながら腕組みをして名前を名乗る。

「あれ? ロツタつてユンがギルドへの派遣に立候補したつて聞いて大慌てで立候補したつて聞いたんだけど?」

「う、うるさいわよ!」



と、ロツタの横に立っていた赤毛の少年が頭の後ろに両手を回しながら不思議そうに尋ね、それを聞いたロツタが顔を真っ赤にして彼を怒鳴る。それに少年はたははと笑った後、アンジュに向けてにこつと快活な笑みを浮かべた。

「最後は僕だネ♪ 僕も魔術部隊に所属してるよ。僕は——」

「マオ!!!」

赤毛の少年が名乗ろうとした瞬間、そんな驚愕に溢れた男性の声が聞こえてくる。と、その声を聞いた少年が嬉しそうに微笑んで声の方を向いた。

「ユージーン!」

「マオ、何故お前がここにいるんだ!?!」

マオと呼ばれた少年が嬉しそうに言うのに対し、ユージーンは彼に駆け寄りながらそう問い詰める。それに対してマオもにしっと微笑んだ。

「アドリビトムにユージーンがいるってワルトウから聞いてね。で、アガーテ様がアドリビトムへ兵士を何人か派遣するって聞いて立候補したんだよ!」

「えーつと……ユージーンさん、この子のお知り合いですか? あ、いえウリズン帝国の方なんですからお知り合いでしょうけど……」

マオがここまで来た経緯を説明し終えたところで目をパチクリさせながらアンジュがユージーンへと尋ねる。それをユージーンは「ああ」と肯定してマオの頭にぽんと手

を置いた。

「この子はマオ。昔、俺が軍に所属していた頃にとある任務で保護したのだが、身寄りがなくてな。俺が引き取って面倒を見ていたのだ」

「それで、ユージーンが軍を追われた時に僕も一緒に同行こうと思っただけどワルトウに預けられた挙句黙って出ていかれちゃってさー。酷いよユージーン」

ユージーンがマオの事を説明、マオもユージーンに向けて頬を膨らませぶすくれてみせる。が、すぐに「まあいいや」とけろっとした表情で続けた。

「こうやってユージーンに会えたんだしね。じゃ、これからよろしくネー」

ぐっとサムズアップをしてそう言ってみせるマオ。その笑顔も純粋な喜びを見せていた。

「ふふ。感動の再会も出来たところで、ウリズン帝国から派遣された皆さんを部屋にご案内します。カイ、あなたも来て」

「了解」

アンジュはそう言っただけ席を立ち、あらかじめ呼んでいたのだろうか、食堂の方から丁度よくやってきたフィリアにしばらくここを任せると伝えられた後カイとウリズン帝国兵士メンバーを連れて階下の居住区へと降りて行った。

「お、アンジュ様。今日もお綺麗で——」

「あらゼロス君。悪いけど、今帝国から派遣された方々をご案内してるの。お話はまた後で」

と、そこにいたゼロスがアンジュに向けて輝かしい笑顔を見せながら話し始め、しかしアンジュはそれをさらつと受け流す。それにゼロスは「帝国の？」とだけ言つて派遣された兵士達を覗き込む。と、すすす、とユンに歩き寄つた。

「初めまして、麗しきお嬢様。私はゼロス・ワイルダー。不慣れなギルド生活で苦勞する事も多いでしょうが、その時はぜひ私めにご相談ください」

ユンの手を取つてナンパを開始するゼロス。いきなりのナンパにユンも目を点にして「は、はあ……」としか返すことが出来ていなかった。

「ユンに絡むなこの変態！」

と、その隣に立つていたロツタが杖をゼロスの頭目掛けて叩き込む。ゴガツ、という凄まじい音と共にゼロスの口から「ふげっ」という情けない声が漏れ出た。

「わ、ロ、ロツタ！」

「ユン！ あんたはもうちよつと強く言い返しなさい！ こんな女の敵の変態に言い切るめられたら終わりなんだからね！」

ユンが慌ててロツタに注意しようとするがその前にロツタは言い放つ。ゼロスは床にうつ伏せで倒れ込んでおり、ユージーンが呆れた様子を見せ、マオが「うわー」と言

いながら彼をつんつん突っついていた。

「やー。いつもながらロツタの一撃はすげえよなあ、俺も何回意識を持つてかれそうになつたか……どうだ、前衛職に転職しねえか?」

ステイサムはけらけらと能天気な笑いながらそんな事を言っていた。なお、フォックスは無言でその光景を見守っている。

それから気絶したゼロスはユージョンに任せて彼らは居住区を歩いていき、ウリズン帝国メンバーに割り当てられる部屋に到着する。なお、男女混合の可能性を考慮されてか二部屋準備されている。

「では男性の方はこのカイと、医務室にゼロス君を預けた後合流するユージョンさんが部屋の準備をお手伝いします。女性のお二人は私と——」

「アンジュさん、遅れました」

アンジュがすらすらと説明していると、そんな声が聞こえて来た。

「ああ、クレア。このクレアさんがお手伝いしますね」

その相手——クレアを指してアンジュが説明を続ける。

「よろしく願いますね。今夜はウリズン帝国の方々の歓迎としてご馳走を作つてますから。楽しみにしていて下さい」

クレアもにこっと柔らかな微笑みを見せながらそう言う。

「うっひゃー。可愛いなあ!」

と、ステイサムが歓声を上げる。

「俺、ステイサム! これからよろしくな! ところで飯のメニューって——」

「やめんか!!」

さっきのゼロスのような勢いで喋り始めたステイサムを即杖でぶん殴るロツタ。ステイサムも「ぐげつ」と情けない声を出し、後ろのユンがわたわたとしている。

「……このままでは進まん。残る話は部屋の掃除と荷物の整理が終わってからで構わないだろうか?」

「ええ、そうしましょう」

フォックスがそう言い、それにアンジユが賛同すると彼は「行くぞステイサム」とだけ言つて彼の首根っこをひっ掴んで部屋に入り、カイとマオとさっきのばたばたと間に合流していたユージーンも続くように部屋に入る。それを見届けてからアンジユ、クレア、ロツタ、ユンも部屋に入つていった。

それから時間が過ぎて夜中。クレアが言つていた通り夕食はウリズン帝国からの派遣メンバー歓迎会と銘打った豪華な食事が並んでおり、派遣メンバーだけではなくアド

リビトムメンバーも大喜びではしゃいでいた。特にステイサムはロイドやカイル達と意気投合したかジユースで乾杯して一気飲みを続けたり次々肉をたいらげている。

「いやー。賑やかだねー」

それを見てけらけらと笑っているのは以前シクエリア村で共に戦った行商人——アルヴィンだ。その隣に座っているカイが横目で彼を見る。

「つーか。ミラやジュードはともかくなんでお前までここにいるんだ?」

「ん? いや、ほら言つたろ? 俺、本業は行商人なんだわ。んでこのアドリビトムは国に所属せず、色んなところに行くギルドだろ? だったら、この船に乗つてりやすぐ各地に行けて、その名産品を仕入れる事が出来るからな。リーダーさんをお願いして加入させてもらったんだよ。これでも腕には自信あるしな」

「ふーん」

カイの問いかけにアルヴィンは笑いながらそう説明。カイも乗船理由を聞き出すと興味を失つたのか食事に戻り、アルヴィンも苦笑を見せる。

「あの、アルヴィンさん」

「ん?」

と、いきなり声をかけられたアルヴィンは声の方を向く。そこにはクレアが立っていた。その両手には一切れのパイが乗っている皿があつた。

「これ、ピーチパイです。よろしければどうぞ」

「ああ、ありがとう」

アルヴィンはクレアからピーチパイを受け取り、クレアはピーチパイを乗せている台車を押して――恐らく一人ずつに手渡ししているのだろう――隣のカイにもピーチパイを渡し、また隣にもと続けて配っていく。

「ふーん……」

一人ずつ対話をしながら料理を配っているクレアを見つつ、アルヴィンはピーチパイに齧りついたのであった。

歓迎会の翌日。アンジュは昨日やってきたウリズン帝国からの派遣メンバーのギルド登録など事務作業を行っていた。その近くでは作業済みの資料を纏める係としてカイが手伝いをしている。

「アンジュ」

そこに一人の男性が声をかけ、アンジュは書類から目を離して顔を上げると「あら」と声を出した。

「ウイルさん。調査の方は順調ですか？ 昨日の歓迎会にも参加してませんでしたか」

「ああ。その件についてはすまなかつた。クレアに食事とピーチパイを運ばれてきた時に少し叱られてしまったよ。忙しいのは分かりますが一緒に働く仲間と顔を合わせるくらいはしておいたらどうですか、とな」

声をかけてきた男性——ウイルは昨日の事について苦笑を漏らした後、真剣な顔を見せる。

「封印次元を作る為の残り二つが判明した」

「ホント?」

ウイルの言葉にアンジュも反応して真剣な目を見せ、ウイルも首肯。

「羽があつて飛び回る実……これはツリガネトンボ草の事だ。もう一つ、全身から汗を流すパンというのは、多孔菌の一種、ウズマキフスベというキノコだ」

「なら、この前の塩水晶の時と同じようにそれを採ってくればいいんだな?」

ウイルからの情報を得たカイが資料をトントンとまとめながらそう尋ねる。が、ウイルは首を横に振って「そうはいかないんだ」と返した。

「?……少し危険な所でもなんとかなるだろ?」

「そういう問題ではないんだ……」

カイが首を傾げるがウイルは残念そうにそう返した後、浮かない顔を二人に見せる。

「その二つはもうこの世に存在しない……既に絶滅したものなんだ」



「絶滅……そんな……それじゃもう、手に入らないんですか?……」

ウイルの言葉にアンジュが呆然とした様子を見せる。が、その後何かに気づいたような目をウイルに向けた。

「ウイルさん、その二つはどうやって調べたのですか?」

アンジュの言葉にウイルは「その事なんだが……」と言葉を濁し、少し考えた後口を開く。

「実は、二つともカノンノが描いた風景の中にあつてな……ジュデイスがそれを見て、プレートで伝えられた情報と同じものだとか教えてくれたわけだ」

ウイルはそう言い、「それを元に調べた結果、この二つのものの正体がわかったのだが」と呟いて腕を組む。

「カノンノが……」

カイはぼそりと呟いた後、席を立つ。

「俺、ちよつとトイレ行ってきます」

「カノンノの所へ行くのか?」

席を立ったカイにウイルが微笑を浮かべながら尋ね、それを聞いたカイの動きが僅かに止まる。

「そうしてくれ。今回の件で、彼女も動揺している様だからな」

「そういえば、少しカノンノの様子がおかしかったわね……カイ、わたしからもお願い。カノンノの所へ行ってあげて」

「……トイレ行くついでに」

動きが止まったカイを見て凶星だと判断したウィルの言葉に続けてアンジユもそう言い、それにカイはそう返してその場を離れる。が、彼が向かったのはトイレがある居住区ではなくカノンノがいつもいる操舵室だ。

「……素直じゃないな」

微笑ましく笑っているウィルにアンジユもくすくすと笑いながら同意するのであった。

「ツリガネトンボ草……ウズマキフスベ……」

そんなカイを見ていたせいだ。彼らの会話を何者かが聞いていたことに二人は気がついていなかった。

「……」

バンエルティア号の操舵室。基本的には自動操縦なのか滅多に人が来ないここにカノンノはいつもいる。その彼女は現在、操舵室の正面窓から遠くの景色を眺めていた。

「カノンノ」

「え？」

カイが声をかけ、カノンノはぼやんとした声を出して振り向き、やはりどこかぼやんとした目でカイを見る。

「あ、カイ……あなただったんだ」

「ただ、何となく来てみた……その、ウィルやアンジュさんが心配してたぞ」

「そうなの？ ふふ、嬉しいな」

カイのやや目を逸らしながらの心配そうな言葉に対しカノンノはにこり、と微笑んだ後、ふと目を落とす。

「ヴェラトローパの他にも、あったんだ。ジュディスさんが私の絵を見て、これから探さなくちやいけない二つのものが、絵の中にあったって……何で、私には知らない風景が見えてるんだろう。何の為に見えてるんだろう。私って、一体何なのかな、って。ちよつと考えてた」

カノンノは不安そうにそう言う。と、カイはカノンノに近づくとその頭にぽん、と手を置いた。

「お前が何者か、なんて俺には分からん……けど、少なくともお前は俺の仲間だ。お前が何者であろうとも、俺はお前を信じる。だから、心配するな」

「うん……ありがとう、カイ」

頭を撫でながらカイはカノンノに言い、カノンノもカイからのなでなでを受け入れながら柔らかく微笑んでこくと頷いた。そしてカイが離れるとカノンノは照れくさそうに笑う。

「……私、もう少しここに居るから」

「ああ」

カイとカノンノはそう言っただけで別れ、カイはホールへと降りる。

「カイ」

「ジュデイス?」

ホールに降りて来たカイを待っていたのはジュデイス。彼女は真剣な目でカイを見据えていた。

「あなたに話があるの。甲板に来てくれて構わない?」

「構わないが?」

ジュデイスから頼まれ、カイは今度は甲板へと向かう。

「……何の用だ?」

「話したかったの、あなたと」

単刀直入に用件を聞き出すカイに対し、ジュデイスは静かにそう言っただけで振り返ると右

手を手の平を上にしてカイの方に差し出す。その手には金色のなんらかの破片が乗っていた。

「……そいつは？」

「故郷とデイセンダーの為に肉体を捨て、機械に宿った異世界の賢人達……ニアタの欠片よ。あの時、持って帰ったの。これにあつた情報……読んでいたのよ。聞きたい、かしら？」

ジュデイスは妖しく微笑みながらカイに尋ね、それにカイは若干の沈黙の後、静かに首を縦に振る。

「じゃあ、あなたに話しておくわ」

そう言い、彼女は一拍置くと話し出した。

「欠片を読んでみたら、ニアタの故郷のデイセンダーの姿が見えたわ……そのデイセンダーが、カノンノにそっくりなの。信じられなかったわ。名も……カノンノと言うらしいから」

「……面白くない冗談だな」

ジュデイスの言葉に対しカイは皮肉気な笑みを見せてそう返し、それにジュデイスも「最初は読んだ情報を疑ったわ」と返す。

「でも、何度読んでも同じだから、認めざるを得なかった」

だが次にそう言った時は嘘なんてついていない、という目を見せていた。

「欠片からとても強く伝わってくる。パスカという異世界のデイセクター、カノンノと共にずっと、故郷の世界を守り抜いていた固い絆」

ジュデイスは話す。ニアタはデイセクターを孫や娘のように愛していた。と、そして、私達の仲間のカノンノが、彼のデイセクターと、とても似たヒト、そして同じ名前だったのは偶然なのだろうか。と。

「彼、言っていたわね。『この世界は、故郷パスカの情報因子を受け継いでいない』って……でも、カノンノは存在するのよ。まるで世界の記憶が受け継がれていた様に、ね」  
「……偶然じゃないか?」

彼女の出した言葉に対し、カイは腕を組んで静かにそう返してみせる。と、そこでジュデイスは口をつぐみ、カイも背後の気配に気がついた。

「カノンノ、何か用か?」

「ううん。スケッチブックを忘れて、取りに来たの。見なかった?」

「さつき、ロックスが持つて行ったわ」

カイの問いかけに対し、さつきまで操舵室にいたカノンノは用件を言い、尋ねる。それにジュデイスがそう返すと、カノンノは「また片づけなかつたって怒られちゃうなあ」と失敗した、というように呟いた。するとその時、ジュデイスの持つていたニアタの欠

片が輝き出す。

「欠片が……」

ジュデイスがそう呟いた瞬間、欠片は彼女の手から浮かび上がり、空へ飛んでいった。

「今のは、なあに？」

「……いいえ、何でもないわ。それじゃ、またね」

ぼかんとしたカノンノの問いかけに対しジュデイスは艶やかな笑みを浮かべてそう言い、すたすたと船内に戻っていく。

「なんだったの、かなあ？」

何でもないと言われても気になるのだろうか、カノンノは欠片の飛んでいった方を見上げており、カイは彼女に一瞬目をやった後、船内に戻っていった。

「ひえええええええ!!」

「!?!」

船に入った時、食堂から聞こえてきたのはロックスの悲鳴。アンジュもぎよつとしており、カイが「俺が見に行きます!」と言って大慌てで食堂向けて走っていく。

「あわわわわわわわ」

プシュ、という音が聞こえると共に食堂のドアが開く。そこにあったのはテーブルの上のスケッチブックを見て驚愕に目を見開き声にならない声を出しているロックスの姿だった。

「ロックス、大丈夫か？」

「はっ!?!……い、いらしてたんですか……」

「悲鳴が聞こえたから来たんだが……どうした？」

「え、ええっ!……ぼ、僕はそんなに大きな声を!? す、すみません……」

カイが悲鳴の原因を尋ねるがロックスはそんな大きな声を出していたという自覚はなかったらしく、すみませんと頭を下げる。

「実は……お嬢様のスケッチブックを片付けて、ここで絵を見ていたんです。そのテーブルの上の絵ですが……」

ロックスはそう言ってテーブルの上のスケッチブック——カノンノのスケッチブック——を示す。そこに書かれているのは男女の絵だ。

「お嬢様は知らないはずなんです。旦那様と奥様のお顔は……なのに、お嬢様は……まるで、今しがた見た様な正確さでお二人の姿を描いて……」

ロックスは呟くように話す。あの不可思議な風景の絵もカノンノの想像、豊かな才能の結果なのだと思いたかった。だがカノンノの絵にはヴェラトローパーや既に絶滅して



いる植物の絵も描かれている。それを聞き、カノンノは自分には計り知れない何かを背負って生きているのだと確信した。と。

「お嬢様……」

「ロックス……」

不安な表情で呟くロックス。カイも静かに彼の名を呟くがその声は聞こえておらず、カイは静かに食堂を後にし、ホールにいるアンジュに先ほどあった事を報告する。

「そう、そんな事があったの……だから、ロックスは悲鳴をあげたのね」

アンジュはそう言うとうつぶす。

「……カノンノだけに見える風景、彼女にしかないドキュメント……カノンノには、何か隠された秘密があるのかしらね」

「心配しないでください」

不安を見せながら呟くアンジュに対し、カイが力強く返す。

「さつきカノンノに言ったけど。カノンノは俺の仲間だ。カノンノが何者であろうとも、俺はカノンノを信じる。カノンノがとんでもないものを背負って生きているのだとしたら……俺も、それを共に背負う」

カイの決意の表情での言葉。それを聞いたアンジュはくすり、と一つ笑みを見せた。

「あなたにそこまで思われて、カノンノも嬉しいでしょうね」

「…………別に。俺は仲間を守る…………それだけだ」

アンジュの言葉を受けたカイはふいっと顔を逸らし、そうとだけ言っただけ言っただけ戻って部屋に戻るつもりなのか居住区へと向かう。それを見送りながらアンジュはくすくすと笑っていた。

## 第二十七話 絆が紡ぐ新たな仲間

「……」

バンエルティア号の甲板。カイはここで日向ぼっこをしながら昼寝をしていた。

「……ん？」

が、何かの気配に勘付き、彼は目を開けるとのっそりと起き上がる。

「……アルヴィン？」

「ん？ おお悪い、起こしちゃったか？」

彼が目を覚ました原因である気配の主——アルヴィンは小鳥の足に何か手紙を括り付けながら、カイが起きたのに気づき悪いと一言謝る。

「何やってんだ？」

「ああ、商人仲間への報告つてやつ？ 良い商品が手に入りそうだな」

「へー。でも港に着いてからでもいいんじゃないかねえか？」

「情報は早さと鮮度が命なんだよ、覚えとけ……つと、よし」

カイの言葉に対しアルヴィンはそう言つて鳥の足に手紙をくくり終える。

「んじゃ、頼んだぜ」

ちゅつ、と小鳥のくちばしに一つキザに口づけをして見せてからアルヴィンは小鳥を乗せている手を掲げ、小鳥も翼を羽ばたかせ大空へと飛び立つ。

「これでよし、つと……さきで、と。カイ、いっちょ模擬戦でもするか?」

「……いや、中に戻る」

アルヴィンは一つ伸びをした後カイを模擬戦に誘うが、カイは珍しくそれを拒否。あららと笑うアルヴィンを置いて船内に歩いていく。

「つと」

その入り口でウリズン帝国からの派遣兵士であるフォックスと鉢合わせてしまい、二人はすれ違ってカイは船内に、フォックスは甲板に出て行った。

「ん?」

「じゃあ、セネル君も行けないのね。個人的には、ぴったりの仕事だと思ったんだけど……」

「ああ、悪い」

バンエルティア号のホール。ここにやってきたカイの耳にアンジュの沈んだ声とセネルの申し訳なさそうな声が聞こえてきた。

「どうかしたのか?」

「カイ。ちょうど良かった。あなた向きの仕事が来ているんだけど。受けてみる気はない？」

「仕事？　どんな仕事ですか？」

「霊峰アブソールで最近盗賊が暴れ回ってるようなの。それを懲らしめて欲しいっていう依頼。向こうの手勢はあまり多くないみたいだし、どうか？」

アンジュから説明が出た後、セネルが申し訳なきように頭をかく。

「本当なら、俺が行きたいところなんだが。これからちよつと人を迎えに行く用事が出来てしまつてな」

「人？」

「ああ。ジエイっていう情報屋だ。不可視のジエイっていえば結構有名だぜ？」

セネルがそう言つてアンジュに目を向けると、彼女もこくと頷く。

「ジルディアのキバが出てきて、今世界中が混乱してるでしょ？　しいなやすずちゃんにも動いてもらつてるけど、やっぱり情報屋が本業の人も呼んでおいた方がいいかと思つて。セネル君にお願ひしてみたの。人手不足だし、出来れば強い人がいいなあって」

「で、ジエイに頼んでみたらオツケーを貰えてな。でもあいつ警戒心強いから、面識のある奴が迎えに行った方が早いんだが……ノーマだと逆にややこしくなりそうだし、ウイ

ルも今ウズマキフスベヤツリガネトンボ草を入手する方法を探してて手が離せなくてな。シャーリーイを一人で行かせるわけにもいかないし、俺が行くのが一番早いんだ」

セネルからそう説明され、カイもなるほど頷く。

「分かりました。じゃあその盗賊は俺がなんとかします」

「行つてくれるのね。ありがとう。多分、相手は単なるゴロツキの類だから追い払うのに苦労はしないと思うけど。もし危なくなったら、無理をしないで戻ってきてね」

「はい」

カイの言葉を受けたアンジュは嬉しそうに微笑んだ後きつちりと注意。カイも頷くと彼女は行つてらっしやいと声をかけ、彼は船を出ていった。

それからカイはアブソール霊峰を登り、賊を探し回る。

「……いないな?」

だが、盗賊が潜伏しているにしては気配が無く、襲ってくるのは魔物ばかりだ。実際、彼の背後から突然アイスウルフが飛びかかってきている。

「まあ、調査だけでもしつかりしとくか」

カイはそう呟きながら刀を手にやる。

「鬼炎斬!」

そして振り返りつつ抜刀、炎を纏った刀で今にも噛みつきようとしていたアイスウルフ

を両断。アイスウルフが毛皮を燃しながら雪の上に倒れるのをちらりと一瞥したのみでカイは刀を鞘にしまい、再び歩き出した。

「……………」

先に進み、以前リヒターと出会った山頂に近づいてきていた時。カイの目の前に魔物以外の存在が映る。バンダナを頭に巻き、右手には一般的な剣を持つ男。人相が悪く、見た目で判断するのはどうかと思うが明らかに怪しい。

「……………」

が、その人物は何かに襲われたのか傷を負って座り込んでいる。と、その人物がカイに気づいた。

「テ、テメエ……………なにもんだ?……………」

「……………お前こそ、ここにいるという賊か?」

「……………チツ、あいつの仲間か……………ぐ……………」

人物——山賊は睨みを効かせてそう呟いた後、体力の限界なのか気を失う。

「あいつ?……………まあいい」

カイは一瞬山賊の言葉に不審な点を考えるが、まあいいと思い直すと先に進んでいった。それから山頂に向けて歩いていくごとに増えていく足跡や血の跡、それが酷くなっている方向に進んでいくと、やがてカイは以前リヒターと戦った山頂にたどり着いた。

以前の戦いから時間が経ったためか、その時は雪が消えて見えていた地表は再びすっかり雪に覆われていた。

「ん？」

と、そこには何者かが辺りを注意深く見回しているのを見つける。

「もしかして、賊か？」

そう呟いてカイはその何者かに近づく。

「おい、そのあんた」

「！」

カイが声をかけると、何者かは驚いたように振り返る。何かの紋章が描かれているマントを羽織り、青色と白色の帽子を被り、黒い髪を短く切っている。青色の上着を着ているが、動きやすさを重視しているのだろうか黒色のピッチリとした服をその下に着ている。

「お前は？……まだ残っていたか！」

何者か——少女はカイを見て睨みを効かせるとすぐさま剣を引き抜く。

「お前の仲間は全て私が倒した！ 残るはお前、ただ一人！」

「仲間？……何のことは分からんが……どうやらお前が敵のようだな」

少女の言葉に一瞬首を傾げるが、相手から感じ取れる殺気にカイも刀に手をやる。



「往生際の悪い……」

少女はそう呟く。と、同時に彼女は地面を蹴り、素早く突進を仕掛けてきた。

「疾風閃！」

「！」

その名の如く疾風のように鋭い突き。余りの速さにカイも息を飲み、横に飛んでその突きをかわす。が、少女はカイが逃げた先を睨みつけると地面に剣先をかすらせるように剣を振るう。

「魔神剣！」

剣を振り上げると共に放たれるのは地面を駆ける衝撃波。

「はっ！」

しかしカイはそれをジャンプでかわし、空中で回転しながら刀を抜き、捻りを加えながらさらに回転。

「なっ!?!」

あまりにも流麗な動きに少女も思わず見惚れてしまうが、カイが着地際に刀を振り下ろしてきたのを見て我に返ると慌てて後ろに下がる。回避は僅かに遅れたものの、かうじて左肩に傷を受ける程度で済む。

「はあっ!!」

カイが着地の反動で動けない一瞬の隙をつき、少女が一気に斬りかかる。

「つとー！」

カイも刀を逆手に握り直して対抗。二人の剣がぶつかり合う。

「やるな、ならばー！」

少女が力を込めて剣を振り下ろしてカイの刀を押しした後、彼女は己の剣を支えにして回転。

「空裂斬ー！」

「ぐはっ!？」

剣を軸にした回転蹴りをくらわせ、カイが怯んだ隙に着地し素早く剣を構え直す。

「絢舞!!」

「があっ!!」

豪快に剣を振り上げ、一撃でカイを吹き飛ばした。

「どうだ!? 徒党を組まねば戦えぬような貴様らに私の剣は負けん!!」

「つててて……やってくれるな」

少女の凜とした声に対し、カイも眩きながら立ち上がる。そして握りしめていた刀を再び構えた。

「どうやら、一度痛め付けられたくらいでは懲りない様だな」

その姿を見た少女はふんと鼻を鳴らし、眩く。

「お望みとあらば、何度でも相手をしてやる!!」

そして声を上げてカイ目掛けて突進、それに対しカイは刀を鞘に収めると右手に闇の  
マナを集中した。

「滅掌破!」

地面に掌底をぶつけると同時に闇のマナを解放。それは降り積もっていた雪を弾け  
飛ばせ、前方に雪の壁を一瞬だが作り上げる。

「なっ!?!——」

「どうやら、剣だけじゃ勝てそうにないな」

「——後ろ!?!」

相手の姿が雪に隠れ、少女は足を止める。その時にはカイは後ろに回り込んでいた。

「ぜりやつ!!」

「づうつ?!?!」

懐に入っつての痛烈な回し蹴り。咄嗟に狙われていた腹を腕で庇ったものの凄まじい  
威力に少女は吹き飛ばされてしまう。

「くっ……やるな」

「お前もな。簡単な相手だと思って悪かったよ」

少女が眩き、カイも改めて目の前の少女が強い相手だと認識し直す。

「参るー！」

先手を打つのは少女。地面を蹴り、雪を踏み散らしながらカイ目掛けて突進する。それに対し、カイも刀を鞘に収めつつ中腰の体勢になって少女を待ち、彼女が射程範囲に入った瞬間刀を抜き、刀に纏わせていた炎のマナを解放する。

「鬼炎斬！」

居合いによるスピードで一閃、咄嗟に防御した少女の剣に一の太刀は阻まれるが続けて刀を返し上段からの振り下ろしが続く。

「甘いっ！」

しかし少女は鋭く剣を振り上げて二の太刀も防ぐ。

「終わりにするぞー！ これぞ我がヴァレンス家奥義が一つ、鱗人閃邀撃!!」

「なにっ!? くそー！」

そして素早く剣を返すとカイ目掛けて連続で突きを入れ、しかしカイも刀を手放すと左手に握ったナイフで突きを防ぐ。だが全てを防ぎきるには至らず、少女はトドメとばかりに至近距離からのダッシュ突きでカイを吹き飛ばさんと迫る。

「そうは——」

しかしカイもダッシュ突きを紙一重でかわすと空いている右手で少女の突き出して

いた右腕を取り、膝蹴りで少女の腹を蹴り上げてダメージを与えつつ彼女を無理矢理宙に浮かせ、

「——いくかつ!!!」

突進を受け流した勢いで少女を投げた。

「へぶっ!?!」

しかしカイも妙な体勢になってしまつてこらえきれずにすつ転び、両者痛み分けとなる。

「ぐっ……まだだー!」

「こっちもな!」

戦いはまだ終わらず、少女は蹴られた腹を押さえながらも素早く立ち上がり、カイも僅かに遅れて立ち上がりながら印を組む。

「影分身の術!」

印を組んでマナを解放、カイの横に三人の分身が姿を現す。

「分身か……だが、ジェイのおかげで見慣れている!」

「……ジェイ?」

少女はいきなり相手が増えたにも関わらず不敵に笑つて叫ぶ。その中の一つの名詞にカイが反応した。

「……ジエイって、不可視のジエイか？」

「……そうだが、それがどうした？」

カイの言葉に少女は怪訝な目を向けて首を僅かに傾ける。

「ちよつと待ってくれ！ お前、もしかしてセネルを知ってるか!？」

「ク、クーリツジを知っているのか!？」

その言葉に今度こそ少女はしつかりとした反応を見せる。

「……一つ確認を取りたい」

カイは分身を消して少女に呼びかける。

「あんだ、盗賊団の用心棒とかそういうんじゃないのか？」

「ば、馬鹿を言うな！ 罪のない民間人を襲い、金品を奪う下劣な行為。そんな腐った根性の輩に手を貸すはずがない!!」

カイの確認の言葉を受けた少女は顔を赤くして叫ぶが、直後顔を青く染めて震える手でカイを指差す。

「ま、まさかお前も……悪党の仲間ではなかったのか？」

「……俺はギルド・アドリビトム所属。カイ。セネルとは同僚で……ここには最近こちら辺を騒がせている盗賊を懲らしめてくれという依頼を受けてやってきたんだ」

少女の言葉を受けたカイはお互い誤解していたことを察し、名乗る。そしてお互いに

武器を収めて状況を把握する。

「すると、何だ……私は、人助けに来た貴公を悪党と間違えて襲ってしまったと……」

「そういう事になるな……」

「すまない。私はてつきり……」

「いや、俺も相手の確認をせず斬りかかったのは悪かった。お互い様だ」

少女とカイはお互い確認不足で戦った事になり、互いの非礼を詫げる。

「しかし、アドリビトムか。クーリッジ、またギルドに所属したのだな……」

少女は何か考える様子を見せた後、「そうだ」と呟いて再びカイを見る。

「どうだろう。私も貴公と共にそのギルドで働かせてはもらえないだろうか？」

「は!？」

「驚く事はないだろう？ 困っている人を助けるのは、騎士として当然の務めなのだか

らな」

少女はそう言って優しげに微笑んで見せる。それに対しカイは困ったように頭をか

いた。

「……まあ、入団とかそういうのはアンジュさん……うちのリーダーと交渉してくれ。

俺じゃ決められん……まあ、人手不足で困ってるから多分大丈夫だとは思うがな。お前

の強さは分かったし」

「決まりだな」

カイの言葉から少なくともギルドまで連れて行ってくれるという事だけは言質が取れ、少女は握手を求めるように右手を差し出す。

「私はクロエ。クロエ・ヴァレンスだ。改めて、よろしく頼む。カイ」

「ああ」

少女——クロエの自己紹介にカイも握手をしながら返した後、二人は下山。バンエルティア号へと向かうのであった。

「……がバンエルティア号……噂には聞いていたが……」

船内に入り、クロエがきよろきよろと辺りを見回しながら呟く。

「お前……クロエじゃないか！」

突然聞こえてきたびびくりしたような声、その声の主——セネルはクロエとカイの元に駆け寄ると目を丸くしてクロエを見る。

「何をしているんだ、こんな所で」

「アブソール霊峰で戦った」

「カ、カイ！ 余計な事を言わないでくれ!？」



セネルが驚いたようにクロエに問いかけ、それに対するカイのあっさりした説明にクロエがびくつとなつてカイを小突くが、セネルは納得したように「成程」と呟くと腕を組んでカイを見る。

「大丈夫だったか？　こいつ、いきなり襲いかかったりしてくる事があるからな。不埒な誘拐犯め、根性を叩き直してやる！」……だったか？」

「うう、うるさい！」

セネルはカイの安否を問いながらも悪戯っぽく笑いながらクロエに告げ、クロエは顔を真っ赤にして彼を怒鳴る。

「それにしても偶然というか運が良かったよ。ジェイに頼んでお前の居場所を調べて、お前もギルドに勧誘しようかと思つてたところだったんだ」

そう言い、セネルは再び冗談っぽく笑いながら「無鉄砲だが、クロエは腕が立つから」と彼女をからかう。それにクロエも「無鉄砲は余計だ！」と再び嘯みついた。

「セネル、クロエもこのギルドに入りたいそうなんだが」

「ああ、じゃあここから先は俺が引き継ぐよ」

カイから説明を受け、セネルは了解と頷くとクロエを引き取ると言い、彼女を見る。

「まあ、無事で良かった。故郷が戦争に負けてから何の音沙汰もないから、心配したぞ」

「……す、すまない……迷惑を、掛けた」

「そう思うんだったら、その分、ここで頑張つて働けばいいさ」

「ああ……そうだな。ぜひ、そうさせてもらおう」

セネルから安堵の声を聞かされたクロエはうつむいて謝罪の言葉を出す、それに対しセネルはそう言い、クロエもふつと笑つてそう返す。

「では、カイ。もし何かあつたらいつでも頼つてくれ」

「ああ。しつかり手綱を握らせてもらおうよ」

「お、それは助かるな。だが気をつけるよ？ こいつは相当なじやじや馬だからな」

「お前達は!!」

クロエの言葉に対しカイが悪戯っぽく笑いながらそう告げるとセネルも悪ノリ、クロエの怒鳴り声が再び響き渡つた。

それからふんつと分かりやすいほどに拗ねた様子のクロエと笑いながらまあまあと彼女の機嫌を直そうとしているセネルを見送つてから、カイはちらりと背後を見る。

「で、いつまで隠れてるんだ?」

「気づいていましたか」

カイがそう問うた直後、バンエルティア号の影から一人の少年——紫色のだぼつとした服を身にまとう小柄な少年——が現れた。

「お前がセネルの言つていた、不可視のジエイか?」

「ご名答。セネルさんに頼まれたので、これからこのギルドでお世話になります」

ジェイは目を細めてにこつと微笑み、自己紹介をした後、まるで相手を見透かそうとするようにうつすらと目を開く。

「よろしくお願いしますね、デイセクターさん」

「……アンジュさん達から聞いたのか？」

彼の口から出された単語にカイがそう尋ねると、ジェイは再び笑う。

「このギルドにデイセクターを名乗る者がいる。とは聞いていたのですが、あなたのようにですね」

「!？」

カマをかけられた。それに気づいたカイはしまったとばかりに口を押さえるがもう遅い。

「ご心配には及びません。別に他言するつもりはありませんから」

しかしジェイはそう言いながら、カイの横をすれ違うように歩き出す。

「何かあれば、いつでも声をかけて下さい。これでも腕は立つつもりですので」

そこまで言って、ジェイは階下に姿を消していく。

「……面白い奴らが仲間になったな」

その光景を見て、カイは微笑を浮かべながらそう呟いた。

一方、その頃。カダイフ砂漠。ここにはそこを通過とうとする商隊や旅人をカモにする盗賊団が存在していた。

「……」

それに、彼らが狙っていたわけでもないのに二人の少女が不幸にも鉢合わせてしまう。一人は左目に星のような飾りをつけ、綺麗な鉱石の装飾を身につけた不思議な雰囲気漂わせる少女。もう一人は右目に眼帯をつけ、背中に盾を背負い腰の左側に剣を、後ろに銃を携えたまるで騎士のような少女だ。

「きへへっ、上玉の女が二人か」

盗賊の一人がペロツと舌なめずりを見せ、二人の少女をジロジロと舐めまわすように見るとナイフを取り出して少女達に突き付けた。

「大人しくしな。そうすれば命だけは助けてやるぜ?」

そう言い、「命だけはな」と続けると盗賊団の男達はひやははと下品に笑い始める。

「……哀れな奴らだ」

と、右目に眼帯をつけた少女が隠れていない左目に憐れみの感情を込めて男達を見据え、呟いた。と、左目に星飾りをつけた少女が首を横に振る。

「そう言つてやるな。ボクには分かるよ……彼らもこの世界のヒトに捨てられてしまつた存在だ」

「何を言つてやがる!?!……まあいい、お前らはなかなかの上玉だ。捕まえて売れば良い金になる……まあ、その前に楽しむのも悪くはない」

少女の言葉に盗賊団の頭領らしき男性がそう言い、剣を引き抜く。

「お前ら、こいつらを捕まえろ! その後は存分に楽しんでいいぜえ!!!」

頭領の叫びに呼応するように盗賊団が吼え、次々に剣やナイフ、斧など武器を構えていく。

「お下がりにください」

「任せるよ」

「はっ!」

眼帯の少女が星飾りの少女を守るように前に出ると、星飾りの少女は任せるよと一言だけ言うに留まり、その言葉に眼帯の少女は領くと左手で素早く銃を引き抜き、銃弾を連射。男達を一気に戦闘不能に陥れていく。

「く、くそっ!!」

銃弾をかわした男の一人が剣を振り上げ、眼帯の少女へと斬りかかる。しかし彼女はそれを右手の剣で軽く受け流すと左手に握っていた銃を手放し、男に膝蹴りを入れて怯

ませた隙に銃を持っていた手で相手から剣を奪い取る。

「借りる」

そう呟きつつ右手の剣で相手を斬った後、彼女は両手に剣を持って男達に斬りかかった。

「ぬんっ!!」

右手の剣を振り下ろし、剣ごと相手を斬り倒し、そこに背後からかかってきた別の敵を左手の剣で受け止め、素早くもう片方の剣で斬り倒す。

「な、馬鹿な……」

頭領が呆然とした様子で呟く。眼帯の少女はたった一人で大勢の男達を、星飾りの少女を守りながらあつという間に全滅へと追い込む。

「チツ、使えねえ手下どもがー」

頭領は舌打ちを叩いて立ち上がり、剣を構える。紫色に光る刃の両刃片手剣。しかし普通の武器とは違うオーラがその剣から放たれていた。

「……ほう、なかなかの武器らしいな」

「ククク、この前砂漠に迷い込んだ旅人から奪い取ったんだ。腕のある剣士だったようだが疲労困憊の中襲えば簡単なものさ」

眼帯の少女がその剣のオーラを見抜き、頭領に声をかけると彼も得意気に笑いながら

そう言い、剣を両手で握って斬りかかる。

「はあっ!!」

眼帯の少女も左手に握る盗賊の剣でそれに対抗する。だが二人の剣が直撃した直後盗賊の剣がへし折れ、眼帯の少女の身体が僅かに斬られる。

「く……」

「ククク。そんじよそこらの剣じゃこいつにや勝てねえぜ？ 売り物にあんまり傷をつけたくないんでねえ。大人しくしてくれればこれ以上痛い目にあわせることはないけどよお？」

斬られた部分に手をやる眼帯の少女に対し、頭領は再び得意気に笑って降参を勧める。

「……面白い」

が、眼帯の少女はニヤリと笑い、折れた盗賊の剣を投げ捨てると背負っていた盾を左手に構えた。

「あのギルドと決別した時から持っているこの剣、もう私の力についてこれないようだ……その剣、貰うぞ」

そう言い、不敵に笑って眼帯の少女は己の握る剣——エタムの切っ先を頭領に向ける。

「取れるもんなら、取ってみやがれえっ!!」

それに対し、頭領は剣を振り上げると突進、勢いよく振り下ろす。が、眼帯の少女はそれを盾で受け、しかし受け止めるまではせずに受け流した。

「にやろ、舐めんなあっ!!」

頭領は怒鳴り声を上げて剣を振り回すが、その全てを眼帯の少女は今度は防ぐまでもなくかわしていく。

「遅いな」

「があっ!?!」

そして剣の一振りで頭領に傷を負わせ、刃を返して腹に柄で一撃を叩き込む。その痛みに思わず頭領は剣を手放して倒れてしまい、星飾りの少女も頭領の方へと歩みを進める。

「ひいっ! す、すまない! 俺が悪かった!! ど、どうか命だけは!!」

剣を手放した丸腰状態になってしまった頭領は自分も殺されてしまうと思ったか土下座で命乞いを始める。

「別に殺すつもりはないよ。悪いのは君じゃない……君を捨てたヒトがはびこるこの世界だ」

「……え?」



星飾りの少女は微笑を浮かべてそう呟き、頭領は驚いたように顔を上げる。

「この世界では国が民を、親が子を、ヒトがヒトを捨てる。君もそうなんだろう？」

「……あ、ああ。俺の村は飢饉に襲われて、だが国は助けてくれなくて……こいつらも同じように……」

星飾りの少女が問いかけると頭領は頷き、今は全員息のない手下を見回す。

「やっぱり……どうだろう？　ボクと一緒に来ないかい？」

「なに？」

星飾りの少女の言葉に頭領は再び驚いた声を出す。

「ボクが創る世界はこんな汚い世界じゃない。ボクは、ボクの世界の住人が快適に暮らせる世界を創る事を約束するよ……君も、君を見捨てたこの世界を捨てて、ボクと一緒に来ないかい？」

そう言う星飾りの少女は相手を惑わせるかのような微笑みを浮かべており、頭領は少女のその微笑みに呑み込まれてしまう。

「あ、ああ」

気づけば、彼は頷いてしまっていた。それに星飾りの少女は満足したように頷くと、彼に視線を合わせるように膝をつき、彼の肩に手を乗せる。

「お、お前は……いや、あなたは……」

「ボクの名はラザリス。この世界をボクの世界、ジルディアへと生まれ変わらせるため、君の力を貸してくれ」

「は、はい……ラザリス様」

星飾りの少女——ラザリスの微笑みに頭領は完全に呑み込まれており、彼の身体が赤い煙へと包まれていく。

「まずは、この場所をボクの世界の住人に快適な場所に変えないとね……」

ラザリスはそう呟いてカダイフ砂漠の一角を見回す。頭領を包み込んだ赤い煙が消えた後、そこにはまるで鉱石から出来たゴーレムのような魔物が存在しており、それはまるで主に忠誠を誓う騎士のごとく、ラザリスに向かって跪くように座っていた。

## 第二十八話 化石の思い出と新たな仲間達

「アルヴィン様、お手紙が届いております」

「お、サンキューロックス君」

バンエルティア号のホール。ロックスと彼を手伝っているのだろうフレンは大きな袋にたくさんの手紙を入れてやってきており、ロックスが丁度ホールにいたアルヴィンに手紙を手渡す。

「ああ、ゼロス様。あなたにもお手紙です」

「お、なにになに？ んーと、見覚えのない名前だな……また新しいハニーからのラブレターかな？」

続いてゼロスにも手紙を手渡し、ゼロスはにやけながら手紙を受け取ると鼻歌交じりに去っていく。

「……ロックス」

と、彼と入れ替わるようにフォックスが合流した。

「以前提出したウリズン帝国への報告書の返答がそろそろ届いている頃合なのだが……」

「ああ、ウリズン帝国様からのお手紙も届いております」

「すまない。私が代表して預かろう」

「ええ、ではお任せいたします」

フォックスはロックスから手紙を受け取るとぺこりと一礼して去っていく。

「真面目なお方ですね」

「そうだね。剣術も魔術も申し分ないし、彼がウリズン帝国軍所属なのは分かっているけど、ぜひ僕の部隊にスカウトしたいくらいだ」

ロックスの言葉にフレンも同意してフォックスを評価する。

「なー、ロックス」

「あ、ロイド様。どうなされましたか?」

「いや、俺達宛ての手紙って来てないか? 多分俺かコレット宛てだと思っただけだよ」

と、話していた二人にロイドが声をかけ、気づいたロックスが用件を尋ねロイドがそう言うのと、ロックスは「ロイド様宛て……」と呟きながら郵便袋を探る。

「……いえ、来てませんね」

「そっか……悪いな。んじゃ」

郵便袋を隅々まで探すがロイド宛てもコレット宛ても手紙は来ておらず、首を横に振って言うロックスにロイドは困ったように頭をかきながらそう答え、去っていく。快

活な普段のロイドからすれば想像できない様子にロックスとフレンは首を傾げていた。と、ロックスはホールに戻ってきた相手を見て「あつ」と声を出す。

「アンジュ様、お手紙が届いてますよ」

ロックスはそう言って戻ってきた相手——アンジュに手紙を渡し、アンジュも「ありがとう、ロックス」とお礼を言いつて手紙を確認する。

「このハンコは、オルタ・ビレッヅからね」

「ヘーゼル村の皆さんや、ここにいらっしゃる皆さんの故郷の方々も集まって、もうそろそろ一つの村らしくなっているんじゃないですか？」

オルタ・ビレッヅからの手紙と聞いてロックスが嬉しそうに言い、アンジュも一つ微笑みながら手紙に手を通す。

「まあ……」

「どうかしました？ 何か、良くない事でも……」

「色んな所から人々が集まっているせいか、文化や価値観の違いで衝突が起きているみたい……」

アンジュの呟きにロックスが不安気に聞くとアンジュは手紙の内容を説明。それだけのやり方を、みんな譲ろうとしないうまく、多様な文化と価値観をまとめる事の難しさに彼女は悲しげな顔を見せた。

「けれども……皆さん一人ひとりはいいい人なんですから。それぞれ、よかれと思って自分達のやり方を提案してくれてるんですよ」

「でも、どうすればいいの。みんなが一つにまとまる様にするには……」

ロックスのフォローに対してアンジュが言うと、ロックスは「そうですね……」と考える様子を見せた後「そうだ」と一つ案を思いつく。

「種族や文化の違いは押し付けるのではなく、分かち合うべきだと思うんです。そうする事で、〃お互いが自らの価値観を変える事が出来ると認識〃出来るんじゃないでしょうか」

そう言い、ロックスは互いの文化の違いを分かち合う事を提案してみてもどうだろうかと言う。時間がかかるかもしれないが、ただ否定するだけではなく、選択肢を増やして肯定の力で導いていこう。と彼は提案した。

「そうね。自分自身の事をダメだと思っても、人って色々やってるうちに〃自分にこんな力があつたんだ〃と気付けるものね」

「その……アンジュ様。一人で抱え込まないで下さい。僕に出来る事なんて、たかが知れてますけど……」

ロックスの不安な言葉に対しアンジュはふふつと笑った。

「あなたも、もつと自信を持ちなさい。あなたがわたしの教会に来てくれなかったら、

きつとアドリビトムは無かったよ。あなたが提案してくれて、色々奔走してくれたから、アドリビトムが誕生したんだし」

「あ、いや、それは……提案した以上は、僕がやらなくてはダメかなと思って……」

「もう、あなたに全部任せて わたしは隠居してもいいかなー」

「そ、それは困りますってば!!」

アンジュの言葉にロックスは照れるが、その次の言葉に対し必死に叫ぶ。とアンジュはちやつかりとした悪戯っぽい笑みを見せた。

「おだてには乗らないかあ。残念だなあ……」

（うう、また丸め込まれる所だった……家事だけって約束のはずが、ほとんど任されてきたもんなあ。トホホ……）

危うくまた何か押し付けられそうになったロックスは過去を思い出し、トホホと呟いたのであった。

「お話中申し訳ありませんが、よろしいでしょうか？」

「あ、ジェイドさん。どうぞぞ？」

と、そこにジェイドが口を挟んだ。その横にはウィルが立っている。

「採取したドクメントの解析が終わりました。以前ジュデイスの報告にあつた様に、あのキバは、ラザリスの世界の情報をルミナシアに送り込むパイプになっている様です」

「ニアタ、という方からの情報は正しかった。そういう事ね」

ジェイドから聞いた報告にアンジュが確認するように問うと、ジェイドは「そう判断してもいいでしょう」と肯定する。

「あのキバの周辺から、徐々に世界の侵食が進んでいる。キバを含め、あれらのものは、この世界を構成している何ものにも該当しない……カイが侵食を戻す能力を持っているとしても、限界があるでしょう。侵食はキバがある限り続きますから」

「そうね。実際前に一度、侵食を戻そうと無理しすぎて倒れちゃったし……根本から解決するには、封印次元を早急に作り上げる事ね……でも、その為には星晶の代わりを作らないと……」

アンジュはジェイドからの報告を聞きながら、前にカイがキバ自体を浄化しようとして倒れてしまった事を思い出す。解決策である封印次元を作るため、星晶の代わりを作る事が現在の目的だ。しかし、その残る二つの材料は既に絶滅しており、この世界には存在しない。

「ウズマキフスベは20年前に絶滅した、と言われていた……だが、発見出来る可能性はあるだろう。絶滅したのはたった20年前。さらに言えば、生態や分布もわかっているからな」

が、ウィルは世間的に絶滅したと言われていても、まだ生き残りが存在するかもしれ



ない。という希望を見出す。

「じゃあ、そのウズマキフスベはまだ見つかるかもしれないのね」

「ああ。しかし、ウズマキフスベが生息する季節は限られていて、今はその季節ではない……ツリガネトンボ草の方は、もつと古くに絶滅していて……化石なら入手出来るのだが……」

ウズマキフスベが入手できる可能性にアンジュは希望を取り戻すが、ツリガネトンボ草はもつと古くに絶滅していて生き残りを探すのは困難であり、入手できるのは化石くらいだ、とウイルは言う。と、ジェイドがそれに反応した。

「化石にでも、わずかにドクメントがあるなら採取する価値はありますね」

「それならば、オレが場所を知っている。採取を依頼として届けさせてくれ」

「ええ、もちろんよ」

必要なのはドクメント。化石になったと言えどドクメントが残っているのならば採取の価値はあるというジェイドの言葉を聞いたウイルはその化石のありかを知っていると答え、その採取を依頼として届けると申し出る。それにアンジュはこくり、と頷いた。

「と、いうわけで。カイ、毎回悪いけれど……今回あなた達にはアルマナツク遺跡へ行つて、ツリガネトンボ草の化石を取ってきてもらいたい。同行するのは、ルカ君とルーティ、そしてカノンノよ」

「遺跡に化石なんてあるの?」

アンジュから説明を受けたルカが問うと、アンジュは「遺跡の中にある。生命讃歌の間」に化石が飾られている」と補足説明。と、ルカは「それって盗むって事じゃないか!?!」と思わず叫んだ。

「あそこは、世界文化遺産なのに……僕、そんな事出来ないよ」

「あら、後で返せばいいんじゃない? 世界救済の為なら、神様も世界樹も罪をとがめたりしないわ」

うつむくルカに対しアンジュはあっさりと言う、「生命讃歌の間は特殊な仕掛けに隠された秘密の部屋にあり、その仕掛けの解除はルーティに任せればいい」と説明を続けた。

「それじゃあ、行つてらっしゃい」

「オツケー。任せといて♪」

「何だか気が重いなあ……」

平然としているアンジュ及びむしろテンションを上げているルーティに対し、ルカは

ため息を漏らして呟いていた。

「あ、そうそう言い忘れてた」

と、出発しようとしていたカイ達をアンジユが呼び止める。

「あのね、キール君からの要請でこのギルドにも教師を迎える事になったの。流石にキール君だけじゃ皆の学習教育まで行き届かなくて」

「そ、そうだね……僕もたまにルビア達に色々聞かれるし……」

アンジユの言葉を聞いたルカはうんうんと頷く。と、そこにいたロイドが口を挟んだ。

「それでさ、俺達の村の先生にギルドに来てくれてって手紙を送ってさ、来てくれることになったんだ……なんだけどさ、最後に手紙が来たのが丁度アルマナック遺跡辺りなんだよ……で、手紙が来たのは結構前で、それ以来音沙汰なし……」

ロイドは腕を組んではあくため息をつく。コレットも何か考えるような「うーん」という声を出す。

「もしかしたら、いつものアレになっちゃってるかもしれないね」

「いや、多分確実になってるな……そういうわけで、多分先生だけだと到着が遅くなると思うんだ。もののついでって言ったら悪いけどさ、迎えに行ってもらえたと助かるよ」  
「分かった」

コレットの言葉に対しロイドは妙に自信のある様子で頷いてみせ、両手を合わせてお願い。それをカイが了承するとロイドは「悪いな!」と返した。

「まあ、そういうわけで。ツリガネトンボ草の化石と一緒に、その先生さんも連れてきてね……キール君が胃痛で倒れちゃったらそれはそれで問題だし。じゃあ、改めて行つてらっしゃい」

「行つてきます」

改めてのアンジュの送り届けにカイも返し、彼らは改めて船を出て行つた。

「ここは、予言にあったディセンダーを迎える為に、古い時代に作られた遺跡らしいわね。きつと、相当な数のお宝が眠ってるんでしようね〜!」

「あはは……ルーティさん、目的忘れないでね?」

んふふ、と笑いながら機嫌よくそう言うルーティにカノンが苦笑交じりに釘を刺すとルーティは「分かってるって」と返す。

「今回の目的は、ツリガネトンボ草の化石の入手と、ロイド達の先生を連れてくるんだよね?」

「ああ……以前ここに潜入した時、特殊な魔物が多くて手こずつたしな。なるべく急い

で合流しよう」

ルカの確認を聞いたカイが、前に暁の従者がらみでこの遺跡に入った事を思い出す。と、ルカが「そういえばさ」と呟いた。

「デイセクターを崇めていた 暁の従者って、どうしてるんだらうね」

「最近聞かないわね。世間からフェードアウトしちゃったんじゃない？」

「もしもカイがデイセクターだと知ったら、どういう反応をするだろう？ やっぱり崇めたりするのかな？」

「遠慮する」

ルカがカイの方を見ながらふっと疑問に思った事をそのまま出すように言うと、カイは即座に嫌そうな顔で返した。

「あら、上に立つのが苦手なの？ でも、あんたなら人々を導けるかもね」

「冗談拔かせ。めんどくさいだけだ」

カイの遠慮を謙遜と取ったのか単に弄る道具にしたのかルーティのにやにや笑いながらの言葉にカイも皮肉染みた笑みを見せながら返す。

「そう、かな？……だって君は何でも、やってしまうもの。とりあえず、やろうとする。そして、前進して強くなってく……」

「あんたがデイセクターなんだなって思うところは、言い伝え通り不可能を知らないっ

てところだわ。この世界のみんなが、あんたみたいになれればいいのに」

カイのめんどくさいから嫌だ、という言葉に対しルカがその言葉を否定するように言う。とルーティも援護。するとカノンもうん、と頷いた。

「カイって口では面倒とか言いながら結局なんでもかんでもやつちやうだもん……私達もそれに引つ張られてるし、何でも“やってみよう!” って行動する様になるよね？」

世界のみんながそうなれば、世界は変わると思うな」

「……」の話は「」までにしよう。とつと仕事を進めるぞ」

形勢不利と判断したか話を無理矢理打ち切つてその場を逃げ出すように歩き出すカイに、カノンノ達はくすくすと僅かに笑い声を零した。

「これ程の遺跡が、これだけ完璧な状態で保存されているというのは珍しい……苔の付着の仕方や、材質の劣化の具合からも相当に古い建造物の様だな……」

遺跡に入った時、聞こえてきたのはそんな女性の声だった。

「ディセンドー伝説によるとこのアルマナツク遺跡はディセンドー信仰のため建造されたものらしいです。遺跡の様式から考えても……」

女性の言葉に続いてそんな青年の分析するような声が聞こえてくる。

「何かしら？」

ルーティが首を傾げ、声の方を見る。そこには遺跡について熱く語る男性と女性、そ

れを興味深く聞いている少女、そしてその後ろで頭を抱えている少年の姿があった。少年はカイ達の足音で彼らに気づいたのか振り返る。

「あれ？ キミは？……」

「俺達はギルド・アドリビトムの者だ。ロイド達の頼みで先生を探しに来たんだが……」  
「ああ、あなた達が！」

首を傾げる少年に対しカイが名乗ると少年は目を輝かせ、熱弁を振るっている女性の方を向く。

「姉さん！ 迎えの人が来たよ！」

その言葉に姉さんと呼ばれた女性も我に返ったようにカイ達の方を向く。

「あなたが、アドリビトムの……？」

「ああ。俺はカイ」

「ボク達の到着が遅いから、わざわざ迎えに来てくれたんだよ！ ほら、姉さんの仕事はギルドで生徒に学問の楽しさを教える事でしょう？ いままで道草してるのは良くないよ」

「わかっていてよ、ジーニアス。お待たせしてしまったわね。私はリフィル・セイジ」  
「ボクは、弟のジーニアスだよ」

女性——銀髪で、さつきまでは目を見開いて熱く語っていたのだが今は冷静で知的な

印象を与える——はリフィルと名を名乗り、それに続いて彼女と同じ銀髪の少年がジーニアスと名乗る。

「えつと……とところで、リフィルさん。そちらのお二人もロイド達のお知り合いなんですか？」

「んーと、話には聞いてなかったんだけどなあ？」

カノンノが残る二人を見て首を傾げ、ルカも頭を捻る。と、茶髪の青年が「ああ」と呟いた。

「いや、俺達は別にリフィルさんの知り合いってわけじゃないんだ」

青年はそう言って自分の胸に手をやる。

「俺はスレイ。世界を巡ってディセンダー伝説を調べててさ、このアルマナック遺跡の調査に来てたんだけどそこでリフィルさんに会って話してたんだ」

青年——スレイが名乗った後、その隣に立っていた少女も持っていた槍を地面に立てて凜と背筋を伸ばした格好で口を開く。

「私はアリーシャ。スレイの従士だ」

「んーつと、堅苦しく言ってるけど……要するに俺の旅の連れだよ」

生真面目に名乗る少女——アリーシャにスレイは困ったように頬をかいてそう言った。



「まだこの遺跡を、十分に検証し尽くしてはいないのだけれど……仕方がないわね。ひとまず、ギルドに案内してただける？」

「ああ、それなんだが。もう少し待ってくれないか？」

「……どういふことかしら？」

リフィルのお願いに対しカイはそう返し、リフィルが首を傾げるとカイはこれから行すべき事を説明する。

「……つまり、そのラザリスとやら、ジルディアを封印する封印次元を作るためにこの遺跡の奥地にある生命賛歌の間に行く必要がある。というわけね」

「ああ。だからアドリビトムに連れて行くのはそれが終わってからにしてほしい……もちろん、一緒に来てくれれば魔物の脅威からは全力で守ろう」

リフィルは一発で話の要点を呑み込み、カイもそう言う。と、リフィルはこくりと頷いた。

「ええ。なら一緒に行かせてもらおうわ。私もこの先の検分を行ないたいと思っていたところだし」

「なら、俺達も一緒に行くよ。俺、これでも剣には自信があるしさ」

リフィル達だけでなくスレイ達も同行を決め、カイはこくり、と頷くとルーティに目配せ。するとルーティも「オツケー」と言っで左手の親指と人差し指の先を指で円を作

るようにくつつけた。

それからカイ達は遺跡の入り口まで戻ると、すぐ近くにあった装置にルーティが近づく。

「んー、仕組みはわからないけど とりあえず触ってみましょっか」

「ちよつ、ちよつと!!……そんなわけのわかんないもの触っても大丈夫なの?」

とりあえずと装置を触り始めるルーティにルカが慌てる。が、装置はうんともすんとも言わず、ルーティが焦れたように装置に蹴りを入れると、装置が起動して扉が開いた。

「うそっ!!」

「ホホホホホ! トレジャーハンターの腕にかかれば、ざつとこんなものよ!」

驚愕の声を上げるルカにルーティは得意気に笑う。

「何をしとるかあっ!!」

「ひゃあっ!!」

が、直後リフィルの怒声が響き渡る。その隣に立っていたカノンノの悲鳴も聞こえた。

「貴重な遺跡に傷をつけるとは! 貴様、何を考えているっ!」

「え、いや、そのっ……」

圧倒的なりフィルの剣幕にさつきまで得意気に笑っていたルーティも言葉を失って

しまう。

「姉さん！ だから、今はアドリビトムの人達も急いでるんだって!!」

「むう……分かった。説教は後に回すでしょう」

ジーニアスが大慌てで説得を開始、リフィルも説教は保留とし彼らは先に進んでいく。

「彼の者らの刃に消え得ぬ炎を宿せ、アグリゲットシャープ!!」

「氷月翔閃!!」

「裂駆槍!!」

遺跡の奥に眠っていた魔物達が現れる。が、カイ達が戦いに出ようとするのをリフィルが制し、彼女は詠唱すると素早く魔術を発動。スレイ達の力を底上げし、続けてスレイの冷気を宿した剣による斬撃とアリーシャの自分の背丈ほどもあり長大な槍の渾身の突きが魔物に決まる。

「蒼溟たる波濤よ、戦禍となりて、厄を飲み込め！ タイダルウェイブ!!」

そこにけん玉を使って集中力を高めていたジーニアスの詠唱が完了、水のマナが結集して大洪水を起こし魔物達を激流に呑み込んで葬り去る。

「すげえ……」

ぼかーんと口を開いて声を漏らすカノンノ。スレイとアリーシャはともかくとして教師と聞いていたリフィルは魔物が現れたにも関わらず冷静に判断、魔術を発動。ジーニアスも年齢に似合わない上級術で魔物を一掃してみせていた。

「うひゃー、最近の教師ってのはとんでもないわねー。こりゃ、あたしがトレジャーハンターだとか言つて下手に怒らせない方がいいかも……」

ルーティも悲鳴を小さく留めたような様子で声を漏らす。

「……ねえ」

と、ルカが何か気になったのかルーティに話しかける。

「ルーティは、お宝だったら何でも持つて行っちゃうの？」

「まあ、基本的にはそうね。何たって、お宝なんだし♪」

ルカの質問をルーティは嬉しそうに笑いながら肯定。すると、それを聞いたルカが「そっか……」と何か思っているかの様子で眩き、ルーティが首を傾げながら「何よ？」と今度は彼女が問いかける。

「あ、えつと……ちよつともつたない気もするなあと思つて……昔、習つた事があるんだ。遺跡から、歴史の解明の手がかりになる宝物がどんどん持ち出されて……結果的に何百年も、重要な歴史的研究が遅れてしまう事例があるんだつて」

「ちよつと、あたしをそこらの盗掘家と一緒にしないでよね」

ルカの言葉を聞いたルーティが唇を尖らせると、ルカは慌てて謝りながら「そういうわけじゃ……」と弁解しようとする。が、ルーティは腕を組んで「でもまあ」とそれを遮った。

「ルカの言う事も一理あるわ。だからつて、あたしの生き方がどう変わるつてわけでもないけどね」

どんな高尚な理屈をこねたつて結局、世界は「今」を生きる者の為にある。もちろん過去をないがしろにするつもりはない。だけど過去の為に、ただ「今」を犠牲にするのは間違つてるんじゃないか。とルーティは話した。

「そつか。ルーティがお金を稼いでいる理由つて……」

それを聞いたルカはルーティがお金を稼いでいる理由を思い出す。彼女は孤児であり、同じ境遇の子供達が故郷にいる。みんな今を、今日を生き延びるのに必死。彼女はそんな子供達のためにお金を稼いでいるのだ。

「だからあたしは、あの子達の為にもあたしに出来る事をする。これから先も、ずっとね」

「うん……わかつたよ。色んな立場の人がいるつて事なんだよね……世の中つて、難しいや……」

ルーティは決意を固めた瞳で力強くそう言い、それを聞いたルカもこくり、と頷いた後「世の中って難しいや」と締めたのであった。

それから遺跡のトラップをリファイルが、ルーティでは遺跡に余計な損害を出しかねないと言い出して解除していきながら、ついに遺跡の最奥地——生命賛歌の間までやってくる。

「すごい！ここが世界文化遺産の『生命賛歌の間』……色んな化石がある」

「これらの化石は自然の調和、絡み合いを表しているもの、と言われているわ」

ルカの言葉にリファイルが、教師が生徒に教えるように生命賛歌の間について説明する。

「様々な植物、生き物、ヒト……世界樹……いつから、ヒトは調和を見失ったんだろうね」ルカがそう言うが、ルーティは資料を読みながら化石の一つに近づいていく。

「ええと、渡された資料によると……どうやら、これの样ね」そしてひよいっと目的のツリガネトンボ草の化石を取る。

(……スルーされたっ……)

「でも、ま、不満ばかり言ってもね……」

「えっ……」

自分の言葉のスルーされたルカはショックを受けるが、ルーティは化石を大事に保管

しながらそう返し、振り返る。

「先へ進まなきや。昔は昔、今は今でしょ。さあ、化石も手に入れられたし、ここを出るわよ」

ルーティはそう言って歩き始め、ルカも慌てて後を追う。カイとカノンもリフィルとジーニアス、そしてスレイとアリーシャを連れて遺跡を出て行った。

「ご苦労様。無事にお迎え出来たみたいね」

「ここが、アドリビトム……噂以上の設備ね」

バンエルティア号に戻り、アンジュが出迎える。リフィルはバンエルティア号内部を見ながらその設備に驚く。と、彼らが帰ってきたのを聞きつけたのかロイドとコレットが駆け寄ってくる。

「先生！ 良かった、無事に……あれ、ジーニアス!? お前も来てたのか!」

「聞いてよロイド！ 姉さんたら、またいつもの悪い病気が始まって……」

「何ですって?」

「な、何でもないです……」

ロイドはジーニアスの存在に驚き、ジーニアスが相変わらずのリフィルの悪い病気に

ついて訴えようとするが、リフィルが笑顔で問いかけるとすぐさま首を横に振って沈黙する。

「とにかく、二人とも無事に着いて良かったです」

「そうね。ええと……カイといったかしら。これから、弟共々、よろしく頼むわね」

「ああ。こつちこそよろしく頼む」

コレットがにこりと微笑んで言うとりフィルも頷いて返し、改めてカイに挨拶する。

「ねえ、ロイド。船の中を案内してよ。僕、こんな大きな船初めて！」

「ああ、いいぜ。好きな所を案内してやるよ」

「わあーい！ それじゃあね、ええつと……」

「ロイド君、ついでにと言つてはなんだけど。リフィルさんの案内もお願いできないかな？ 案内が終わったらコレット達の部屋で待つてもらえるようお願い」

「ああ、任せといてくれよ！」

「分かりました」

ロイドがジーニアスに船を案内しようと申し出、アンジュがリフィルの案内もお願いする。それにロイドも大きく頷いてから、アンジュはリフィルを見る。

「申し訳ありません。これから少し緒連絡と緒作業がありますので……また後程改めてご挨拶させていただきます」



「ええ。よろしくお願いするわ」

アンジュとリファイルは後の約束を取り付け、リファイルとジーニアスはロイド、コレットと一緒に去っていく。と入れ替わるように化石を研究室に届けに行っていたカノンが戻ってくる。

「化石は研究室へ届けておいたよ」

「これで何か進展があればいいね。それじゃあ、今回もご苦労様」

「なーんか、高価なお宝があると思ってたんだけど、今回は縁がなかったわねえ。でも、あの部屋の仕掛け。まだ何かありそうだよ」

「ええ……盗む気満々じゃないか」

リファイルがいなくなった事で隠す必要がなくなったルーティはトレジャーハンターの本性を見せ、ルカが呆れた様子を見せるとルーティは「ふふん」と得意気に鼻を鳴らす。

「じゃ、ルカ。あんたに問題ね？ もんだーい、そのー！ アルマナック遺跡が作られた目的は？」

「ええと……ディセンダーを迎える為に作られた……」

「もんだーい、その2！ ディセンダーは誰？」

「ええと、その……目の前にいる……カイ……」

二つの問題にルカが答えた後、ルーティは続けてカイに「質問」と呼びかける。

「あの遺跡、要る？ あそこで暮らしたい？」

「いや、いらん」

「ほら、カイがこう言ってるんだからいいじゃない！」

「む、無茶苦茶だ!!……」

ルーティからの質問にいらないとカイが正直に答えると、ルーティは満面の笑顔で屁理屈を言ってみせる。そのとんでもない屁理屈にルカも悲鳴を上げ、カノンノとアンジュは苦笑を漏らした。

「……ディセンドー？」

と、スレイとアリーシャがぼかんとした声を出した。それを聞いたルーティが二人の方を見てうん、と頷き、カイを親指で指し示す。

「こいつ、ディセンドーよ。一応」

「一応言うな」

ルーティの言葉にカイが目を細めてツツコミを入れる。

「ディセンドー様……降臨なさっていたのですね！」

と、いきなりアリーシャがカイの手を取り、すごくキラキラした目でカイを見る。

「え？ は？」

カイもフリーズしていた。

「……ルカ君。スレイ君とアリーシャさんって実力はとうだった？」

「え？ えーと、二人とも結構強かったと思うけど……」

「なるほど……」

アンジュはルカからの言葉を聞いて何かを考えだし、ルカが嫌な予感とでもいいような顔で「アンジュさん？」と問いかける。

「スレイ君、アリーシャさん」

「はい？」

アンジュが呼びかけ、二人が返事をする。

「今、このルミナシアが危機的状況なの……戦力になる人は歓迎するわ。私達に力を貸してもらえないかしら？」

「……分かりました！ 俺でよければ、力になります！」

「私も助力します」

「決まりね」

スレイとアリーシャはアンジュの話を聞き、アドリビトムへの入団を決意。アンジュもこつと微笑むが、ルカはその隣で引きつった笑みを浮かべる。

「デイセンダー様。あなたのお力になれるよう頑張ります！」

「お、おう……っーかディセンドーって呼ぶの止めてくれ……」

アリーシャは再びカイの方を向き直し、彼の手を握ると深く礼をする。それに対しカイは嫌そうなしかし相手に純粋で悪意がないためどう指摘すればいいのかわからない、という様子を見せていた。

「……」

アリーシャに手を握られているカイを見たカノンノは妙にぶうと頬を膨らませており、それに気づいたルーティはくすくすと笑っていた。

「……」

「マクスウエル様、お気づきですか？」

それらを遠目で見る二人の精霊——精霊王マクスウエルことミラと氷の精霊セルシウス。ミラは難しい目を見せ、セルシウスも何かに勘付いている様子でミラに話しかける。ミラも「ああ」と頷く。その二人の視線の先にはアドリビトムへの入団手続きを取っているスレイの姿があった。

「あの人間のドキュメント……普通とは違う」

「ええ……基本的には何の変哲もない人間のドキュメント……しかし、ドキュメントの一部

に精霊に近い部分があります」

「……調べてみる必要があります」

「……調べてみる必要がありそうだな」  
ミラとセルシウスはそう話し合い、スレイ達に気づかれる前にその場を去っていった。

## 第二十九話 精霊に近いもの

「……」

バンエルティア号の食堂。アルヴィンはこの入り口付近で壁に背を預け、何事か考えている様子を見せながら視線をキッチン内に向けていた。

「ロックスさん。こちらの食器はどこに片付ければいいでしょうか？」

「あ、申し訳ありませんクレア様。ではそちらの棚に入れておいてください」

「はい」

「あの、クレアさん。今日の夕食なんですけど……」

「ええと、今日は朝に買ってきた食材が……」

その視線の先では慌ただしく働いているロックスとリリス、そしてクレアの姿があり、アルヴィンの視線は心なしかクレアを見ているような気がする。

「よう、アルヴィン君。何やってんの？」

「ん？ ああ、ゼロスに……ステイサムとフォックス。それにヴェイグか」

声をかけてきた男性にアルヴィンは目を向け、そこにいた四人に返す。

「いや、なんでもねえよ。ちよつと考え事だ……お前らは飯か？」

「そんなところだ……クレアがピーチパイを作ると言っていてな」

「クレアちゃんのピーチパイはめっちゃ美味えからな！ 可愛いし、ぜひ帝国軍で料理係をしてもらいてえよ！ きつとあつという間に帝国軍のアイドル間違いなしだぜ！」

アルヴィンのどこか誤魔化すような返答と質問に対しヴェイグが静かに返し、ステイサムがにじしと笑いながら言う。と、その言葉にヴェイグの目が鋭く研ぎ澄まされ、殺気を感じたステイサムが「ひゃあつ！」と悲鳴を上げる。

「全く。貴様も帝国軍の一員であるならば自覚を持ち、その軽い口を慎んだらどうだ？」  
「ちえつ。まったくフォックスはお堅いよなあ」

フォックスが呆れた様子でステイサムを嗜め、ステイサムも肩をすくめてやれやれという様子を見せる。

「で、フォックスはステイサムの目付け役つと。ゼロスもどうせステイサムと同じく隙あらばクレアちゃんを口説こうつて？」

「ん？ あ、ああ、ま、そんなところか？」

アルヴィンの言葉にゼロスはまるで不意を突かれたようにどもった様子でアルヴィンの言葉を肯定、ヴェイグに睨まれる羽目になっていた。それから四人はヴェイグを先頭に食堂に入っていく、ヴェイグを見たクレアも嬉しそうにピーチパイの準備を開始。アルヴィンはそれらに背を向けてその場を去っていった。

「裂駆槍!!」

一方甲板。現在ここでは模擬戦が行われており、黒豹のガジユマー——ユージーンの槍と先日アドリビトムの仲間に入った少女——アリーシャの槍がぶつかり合い、こすれ合つて火花を散らしながら互いの頬をかすめる。

「今です、カイ!」

アリーシャが叫び、カイが飛び上がる。ちなみにカイの事を「デイセNDER様」と呼んでいたアリーシャだったがそれをカイは嫌がつており、しかし「敬意を表するため」と言つてその呼び方を止めなかつたアリーシャに対しカイは最後にはガン無視の姿勢を取り、アリーシャに対するカノンノ達の説得もあつてアリーシャの「デイセNDER様」呼びを止める事に成功していた。

「曼珠沙——」

「つと、そうはいくか!」

「——っ!」

炎のmanaを纏つた苦無を投げつけようとするカイだが、テイトレイが左腕に装着しているボウガンをカイの方に向け、矢を発射。カイは投げつけようとした苦無で咄嗟に矢



を弾くが矢の勢いに押されてバランスを崩し、苦無を投げることなく甲板に着地する。

「よし、今だユン！」

「刃に更なる力を、シャーブネス！」

「ごくろの円舞に魅了されし者、炎をまといて踊り狂わん！ エクスプロード!!」

カイの体勢が崩れたところを逃さずタイトレイが叫び、ロツタがユンに向けて支援術を詠唱。ユンが詠唱を終えて叫ぶと共に上空に巨大な火の玉が出現、カイ目掛けて落ちてくる。

「堅き守りよ、バリアー！」

が、今回の模擬戦で後衛を守っていたキールが障壁を張り、エクスプロードの爆発からカイを守る。

「万物の始まりたる炎よ、刹那にて薙ぎ払え！ ブレイジングハーツ!!」

そこに続けてカイチームの後衛であるマオが詠唱完了、巨大な二つの炎を放つ。

「やばっ！ マオつたら本気じゃない……：神よ、我らに堅牢なる守護を！ フィールドバリアー!!」

マオの魔術を見たロツタが目を剥き、大慌てで詠唱すると先ほどキールが使ったものよりも巨大な障壁がマオの炎を防ぎ、しかし二つの炎が組み合わさって十字を描くような爆発を受け切ると同時に障壁も破壊される。

「ふむ……」

と、ユージーンが少し声を漏らし、槍を刃を上にして甲板に立てる。

「今回のチーム戦の演習はこの辺にしておこうか」

「は、はい！ ありがとうございます！ 誉れ高きユージーン・ガラルド將軍直々に稽古をつけていただき、感謝いたします！」

「俺はもう將軍ではない……」

ユージーンの言葉にアリーシャがべこりつと頭を下げてお礼の言葉を述べる。が、それに対しユージーンは困った様子で呟いた。

「はっせい、たあっ！」

「せあっ!!」

一方カイ達のチーム戦での模擬戦が行われている場より少し離れた場所ではクレスとスレイが模擬戦を行っていた。

「見切れるか!? 無影衝！」

後方に一瞬身を引いて力を溜め、逆手に構えた剣を前に飛び出しながら振るい真空の衝撃波を放つ技——無影衝。しかしクレスはその衝撃波を見切ったようにかわしながら剣を振るい、その剣はスレイの胴に触れるか触れないかの位置でぴたりと止まる。が、止まる前の剣速はもし止めていなければスレイの胴を真っ二つにしていただろうと

思わせるほどのものを見せていた。

「……………ここまでかあ」

スレイはあ、と息を吐いて脱力。クレスも剣を下げると鞘に収めた。

「いや、スレイもなかなかやるよ。どこで修行したんだい？」

「あ、いえ。俺のは故郷近くで狩りでウリボアを倒してた内に……って感じだから」

クレスの笑顔を浮かべながらでの言葉にスレイは照れくさそうに頬をかきながら返す。それにクレスは「へえ」と感嘆の声を漏らした。

「スレイはいるか？」

と、そこに凜とした女性の声が聞こえ、クレスが声の方を向く。

「ミラ。スレイならここにいるよ？」

「はい。何か用ですか？」

クレスの呼びかけに続いてスレイが尋ねる。それにミラは「ああ」と頷き、横に立つセルシウスにちらりと目をやった後、もう一度スレイを見る。

「実は、君に折り入ってお願いがあってな。私達と共に来てほしい。アンジュには既に話を通している」

「カイ。あなたにも一緒に来てほしいのだけれど？」

「ん？ ああ、分かった」

ミラとセルシウスはスレイとカイに同行を求め、二人も理由を言われなかったため首を傾げながらも、断る理由はないためか了承。カイ達はルバーブ連山へとやってくる。

「ところでミラ、俺とスレイに何の用事なんだ？」

「ああ……どちらかといえばスレイに用事があるんだ。カイにはいわば証人、立会人を頼みたい」

「俺に？」

カイの言葉に対しミラはそう説明。スレイも首を傾げて自分を指差す。それにミラはこくりと首肯した。

「以前、君を見た時から不思議に思っていたんだ……君のドキュメントには我らに近いものを感じる」

「ド、ドキュメント？ 何それ？」

「えーと、リタが説明するには生物の構成を成す設計図のようなもの、だったか？」

ミラの言葉にスレイが頭の上にクエスチョンマークを出しているような表情で聞き返すとカイが説明。スレイも理解したのかしてないのか微妙な表情で腕を組んだ。

「噛み砕いて説明すると、スレイの中には私達精霊と似た力を感じるの……その力をうまく使えば、私達の力を貸し出す事ができるかもしれないのよ」

そう言い、セルシウスは両手をスレイに向けて手の平を上にして差し出す。と、その

手の平に美しい氷の結晶が現れた。

「これが私の力を込めた、特別製のセルシウスの涙……これを使ってみて」

「なるほど……分かった。やってみるよ」

セルシウスからセルシウスの涙を受け取ったスレイは頷き、目を閉じて心を落ち着け、不動で直立する。が、そのまま待っていても何も起きず、スレイは困った様子でミラ達を見る。

「えっと……どうすればいいの？」

困ったように笑いながら尋ねるスレイにミラ達もうつぶいて腕を組む。

「……私達にも予想はつかない」

「仕方ないわ。一応ここに来るためにクエストを受注しているし、クエストをこなしながら試していきましょう」

「了解した」

ミラの言葉にセルシウスはふうと息を吐きながら依頼書を見せてそう言い、カイも了解と返した。

今回のクエストは突然変異で現れたらしいミニデカパンというやや矛盾した種族名な、要するに突然変異で縮小したデカパンの討伐。だが突然変異で現れたせいかなかなか見つからず、カイ達は山を歩き回っていた。

「しかし、なかなか出てこないな」

「うむ……」

カイは二本の木の枝を棍棒のように振り回して襲い掛かってきたコパンの枝を刀で受け止め逆に蹴り飛ばしながらまるでなんでもないかのように会話をし、ミラも腹をさすりながら眩く。それをカイはちらりと見、ふうと息を吐いた。

「腹も減ってきたしな。もう少し探していなかったら一度バンエルティア号に戻って休憩、態勢を立て直すか」

「う、うむ。そうだな、そうしよう」

「じゃあ、もうひと踏ん張りだね」

カイの提案にミラは目を輝かせて頷き、スレイもこくりと頷いて返す。

「！」

と、セルシウスが後ろから何かの気配に勘付き、振り向いて拳を構える。その直後、細長い木の枝がセルシウスに棍棒の如く襲い掛かり、セルシウスがそれを腕をクロスして受け止めると続けてカイが刀を抜きながら振り返り、やや太いが短い木の枝を受け止める。

「な、なにあれ!?!」

「……なるほど。突然変異でデカパンが小さくなっているとするならば、その逆もまた

しかりか」

スレイが素つ頓狂な悲鳴を上げ、ミラが気付いたように眩く。カイ達の目の前に現れたのは標的であるミニデカパンともう一体、逆に突然変異で巨大化したコパン——名を付けるならばデカコパンとでも言おう——だった。さらにそれに付き従うように普通のコパンも群がってきた。

「余計なもんがくつついてきたが、とにかく標的発見だ！ 行くぞー！」

カイの掛け声が開戦の合図となり、その場にいた全員が武器を構え突進した。

「影走斬!!」

刀を鞘に収め、鋭く突進しながら居合斬りを決める秘技——影走斬。その刃は今回のクエストの標的であるミニデカパンを狙っていたがミニデカパンは棍棒を構え、その小さな体躯に似合わない怪力で斬撃を防ぐ。そしてその後ろからコパンが二体飛び出し、カイに襲い掛かる。

「フリーズランサー!!!」

が、それをセルシウスが放った氷の槍が阻む。

「サンキュ、苦無閃！」

続けてカイが左手で苦無を投げ、コパンを貫いた。

「黒雲招来、雷神咆哮！ パニツシユヴォルト!!」

ミラは詠唱と共に雷球を上空に生み出し、雷球から落雷を落としてコパン達を撃つ。が、その落雷をかわしながら数体のコパンが棍棒を両手にミラに殴りかかる。

「地竜連牙斬!!」

しかしミラに襲い掛かってきたコパンをスレイが流れるような連続斬りで迎撃。だがコパンはまだどこからかぞろぞろと湧いて出てくる。

「ふむ。どうやらあのデカコパンをリーダーに統率を取っているらしい……ここは奴を倒し、統率を乱すべきだな……私が前線を行こう、援護を頼む」

「分かりました」

ミラの指示にスレイは頷き、同じ結論に至ったのだろうかカイとセルシウスも共にデカコパンへと突っ込んでいった。

「フリーズランサー!!!」

セルシウスが氷の槍を放ってコパンの群れを牽制すると共にデカコパンとその横のミニデカパンに攻撃、

「熱破旋風陣!!!」

さらにスレイが炎を纏った剣を振り下ろしさらに剣を中心に熱風を放ってコパンに攻撃、ミラ達の道を作る。

「アサルトダンス!」



「鬼炎斬！」

ミラの舞うような連続斬りがデカコパンに、カイの炎纏う十字斬りがミニデカパンに決まる。

「なっ!?」

決まった。しかしそう思った攻撃は棍棒に防がれており、二体が棍棒を振り回してカイとミラを弾き飛ばす。

「チツ」

「くっ」

カイは長大な棍棒の遠心力を利用した強力な薙ぎ払いを、ミラは二本の棍棒の力を合わせた振り払いを受けて吹き飛ばされ、しかし双方空中で回転し受け身を取る。が、その時デカコパンが指揮するように棍棒を振るい、コパンが一斉にカイとミラに襲い掛かる。

「めんどくせえな！」

カイは怒鳴り声を上げて腰の後ろに差していた短刀を抜き、二刀流の構えになつてコパン達を迎撃。他の三人もコパンの迎撃に移るが数の差からこのままではジリ貧だ。

（くそ、このままじゃ皆やられる……こうなったら！）

スレイは右手で剣を振るいながら左手を懐に入れ、ルバーブ連山に来た時にセルシウ

スから貰ったセルシウスの涙を取り出した。

「俺の中に眠る力よ、頼む！ 力を貸してくれ!!」

スレイが心から願い、叫んだその時、セルシウスの涙が光を放ち、その溢れ出る力をスレイはその身にまとう。

「水神招来!!」

光の中にいるスレイがそう叫ぶと同時に彼が纏った光が弾け飛ぶ。その光の中から金色の光る髪を伸ばし、淡い青色に光る白色の衣を身にまとったスレイが姿を現した。その右手には己の身の丈もあろう程の弓が握られている。

「蒼の四連!」

弓に矢を番えるようなポーズをしながら叫ぶ。と、青い光のエネルギーが四本、別々の軌道を描きながらコパンを貫く。

「蒼海の八連!! 全てを貫け!!」

今度は八本の青いエネルギーがさらに多くのコパンを貫き、さらに力を解放すると先ほどよりも多くのエネルギーが螺旋を描いてコパンの群れを一掃する。

「凄い、これがスレイの力……」

「よし、畳みかけるぞ!」

自らの力を纏ったスレイの力にセルシウスが驚嘆し、コパン達の攻撃が止んだ隙をつ

いてミラは限界突破を行ない、セルシウスとカイもそれに続く。

「俺が隙を作る！ 唸れ疾風、風刃縛封!!」

「援護するわ！ 白き御手よ、清冽なる枢に封じよ！ アブソリユート!!」

カイが左手を掲げるとミニデカパンが風の刃に囲まれて動きを封じられ、セルシウスが両手を突き出すとデカコパンが氷の枢に封じられる。

「スレイ!」

「ああ、ミニデカパンは任せてくれ!」

ミラが叫び、スレイはその意思を理解しているようにミニデカパンに弓を向ける。それを見たミラもよしと頷いて宙を舞う。その時、彼女の身体に炎が宿った。

「始まりの力、手の内に!」

炎を纏い、デカコパンに進軍。すれ違いざまに斬りつけながら着地し、剣を掲げるとデカコパンの足元から水流が上空目掛けて放たれ、デカコパンを空中に打ち上げる。

「我が導となり、こじ開ける!!」

剣を振るって風の刃をデカコパンにぶつけ、さらにジャンプすると巨大な岩石の槍を撃ち、デカコパンに直撃させる。そして彼女が両腕を広げると、彼女の上下左右四方にそれぞれ赤、緑、青、黄の色で出来た四つの魔法陣が構成される。

「スプリームエレメンツ!!」

そしてその四つの魔法陣から無数のレーザーが放たれ、デカコパンを呑み込んだ。  
「水神招来！」

ミラが炎を纏った斬撃をくわらせていたのと同時、スレイも動いていた。

「我が弓は蒼天、蒼き渦に慚愧せよ!!」

弓から放たれた青きエネルギーがミニデカパンを呑み込み、その圧力で攻撃すると共に動きを封じ込める。と、スレイの弓がその形状を変化、片手の剣のような形に変わり、スレイは波に乗っているかのようなスピードでミニデカパンに突進。

「アクアリムス!!!」

その一撃がミニデカパンを貫いた。

「クエスト達成つと」

「ふう、お疲れ……」

カイが呟くように言うと共にスレイも言い、同時に彼の姿が元に戻る。その左手にセルシウスの涙も再生した。と、スレイは肩を落としてうつむくと大きくため息をつく。疲労困憊という様子が見て取れた。

「大丈夫？ スレイ？」

「ああ、うん。ありがとうセルシウス……でも結構つらいな。あまり多用は出来そうにない」

「そうか……私からも力を分け与えられればよかったが……しない方がよさそうだな」

セルシウスの言葉にスレイが息を荒げながら感想を述べるとミラがふむ、と唸って呷く。それにセルシウスが「そうですね」と同意した。

「精霊王であるマクスウェル、ミラの力は私達とは違う……これ以上の負担をスレイにかけるのは得策ではないでしょう」

「そうだな……あとは、イフリート達と連絡を取ればいいのだが……今の状況では難しいか。何か直接コンタクトを取る手段を考えよう……私にその程度でいいから力が戻ればいいのだが」

ミラは呟き、ジルディアの侵食が原因なのか本来の力が全て戻ってこない己を恨む。

「まあ、その話は後にしよう。スレイを休ませたいし、クエストは終了したんだから船に戻ろうぜ」

「ああ、そうだな。行くとしよう」

カイが船に戻ろうと提案し、ミラも同意。一行はルバーブ連山を降りると迎えに来たバンエルティア号へと乗船していった。

## 第三十話 ニアタとの再会

「……」

バンエルティア号の展望室。そのテーブルで銀髪の少女は何かの作業を行っていた。

「あ、ユンさん。何してるの？」

「はい。ちよつと研究中で……」

と、そこに偶然やってきたカノンノが声をかけ、少女——ユンが恥ずかしそうに笑つて返すと、一緒にいたジーニアスとカイルが「研究？」と興味を持つ。それにユンは「はい」と頷いた。

「私の研究テーマは『遠く離れた相手と会話が出来る通信魔術』なんです」

「遠く離れた人と……便利だね、それ！」

「はい。この研究が上手く行けば、手紙を使わなくても遠くにいる人と話す事ができるんですよ」

ユンとカノンノは笑顔で会話をする。

「まず、声や音というのは空気の振動によつて伝わっているんです……えつと、これが空

気の振動を利用して遠くまで声を伝える装置の試作品なんです……試してみますか？」

ユンはそう言って円柱状の中は空洞になっている、まるでコップのような物体を二つ、糸で底同士を繋げているようなものを見せる。

「何これ？」

「えっと、これを二人が一つずつ持って、離れてください。この糸がピンと張るのがポイントですよ？」

「うん、分かったよ」

カイルが首を傾げているとユンが説明しながらコップのような物体をカイルとジーニアスに手渡し、ジーニアスも頷くとカイルから距離を取って糸をピンと張る。

「で、話す人と聞く人に分かれて、話す人はこの装置を口に当てて、聞く人は装置を耳に当ててください」

ユンの教えの元、ジーニアスが話す人、カイルが聞く人に分かれてカイルがコップのような物体を耳に当ててのを確認してからジーニアスがコップのような物体に口を当ててる。

「カ、カイルー？ 聞こえるー？」

「わあっ!？」

恐る恐るジーニアスがコップのような物体に向けて話しかけるとカイルの驚いた声が響く。

「び、びつくりしたあ……この中からジーニアスの声が聞こえてきたよ！」

カイルが慌てたように言い、今度はジーニアスがコップのような物体に耳を当て、カイルがコップのような物体に口を当てる。

「ほら、ね？ 聞こえるでしょ？」

「ほんとだ！」

カイルとジーニアスは二人で目を輝かせる。

「この原理を風の魔術を使って、遠くに声を届かせられないか。とっているんですが……」

「ねえねえユン！ これちよつと借りていい？ 皆にも教えてあげたい！」

「え？ あ、はい。どうぞ」

目をキラキラさせているカイルのお願いをユンは快く受け、カイルとジーニアスは「やったー！」と歓声を上げてユンのいう装置を持っていく。

「えつと、なんかごめんね？」

「いえ。私の研究に興味を持ってくれて嬉しいです」

あはは、と苦笑いしながら謝るカノンノにユンは心から嬉しそうな表情でそう返し



た。

と、そんな事が起きている中。カイは甲板で行われている朝の鍛練——主に劍士組と一緒に素振りか格闘家組と一緒に型の訓練に始まり、すずやしいなに師事かしなければ独学での忍術訓練をしたり相手がいれば模擬戦もある——を終わらせてホールに戻ってきていた。

「ん？」

ホールの依頼受付カウンター席の近くでアンジユ、エステル、ナタリア、ロックスが談笑している事に気づき、カイはそつちに歩き寄る。

「なにか良い事でもあったのか？」

「あ、カイ様。いえ、この前オルタ・ビレッジで少々問題が発生していたんですが……」  
カイが声をかけるとロックスが話し始める。曰く、少し前にオルタ・ビレッジで違う文化同士の衝突があり、その相談の手紙が来ていたそうだがその返答に互いに違う文化や方法を学んでみてはどうかと提案したところ、一度主義主張を忘れて相手の事を学習したら新しい方法が次々に生まれて効率が良くなった。ということだ。

「ロックスのおかげよ」

「いいえ、彼ら自身の力ですよ。新しい価値観と手段を、自分達で生み出してくれたんです」

アンジュが誇らしげに言うのとロックスは謙遜。しかしナタリアは感動した様子を隠していないかった。

「星晶の採掘を行わず、環境をありのまま利用して、充足した社会を作るというオルタ・ビレッジの実現！……アドリビトムの皆さんの目標が達成されたのですわね」

「人々の間でも、ああやって受け入れ合う事が出来るなら……国同士でも、きつと実現出来ますよね！」

「ええ。そうしよう、と私達が働きかければ、きつと出来ますわ！」

「ですね！ わたし、頑張ります！」

ナタリアとエステルも手を取り合い、互いに受け入れ合う社会の実現を誓い合った。

その姿を見ながらアンジュはふふつと笑い、仕事に戻る。

「アンジュ、皆が集めてきてくれた依頼のメモを回収してきたわ」

「ありがとう……あら？」

そこにジュデイスが数多くの依頼メモを持って話しに入り、アンジュはそのメモを受け取って適当に一枚取る。と、それを見ておかしな声を出した。

「どうかしたんですか？」

「みんなが街に行った時に、ついでに依頼を集めてきてくれるでしょ。カノンノが集めてきた依頼のメモの中に たまに妙な文字が交じっているのね……ホラ、こういう字」

アンジュがそう言って書類——依頼のメモをカイに見せる。それには確かにルミナシアで使われている共通語の中に不思議な文字が書かれており、アンジュはロックスに「この文字知ってる？」と尋ねる。

「……いいえ、この文字については、知りません。でも……たまに、こういう事がありました。ええ、昔から……ただ、お嬢様が遊びで考えたものだと。絵を描く時と、同じ様に……」

「変ね。カノンノは、仕事に遊びを持ち込む子じゃないし」

そう言ってロックスはなんとも言えない不安げな表情を見せ、アンジュもそう呟く。

「？ ねえ、今、私を呼んだ？」

「カノンノ」

と、話が聞こえたのかカノンノがやってくる。アンジュも「ちょうどよかった」と言つて彼女の書いた依頼のメモを渡す。

「あなたが街で集めてきた依頼のメモ……ここに書かれている文字について聞きたいのだけだ」

そう言うアンジュに対し、カノンノは依頼のメモに目を通す。そして謎の文字の部分に差し掛かると「あっ」と声を出した。

「いけない。急いで書いたから、つい……これは、ええつと……  
『納品』って書いたつも

りだったんだけど」

「つい、というの、この文字、無意識に書いているのね」

「……うん。でも、文字の意味は……わからないの」

カノンノの言葉から気になったところをアンジュが尋ね、カノンノもそう答える。曰く、文章を書いているといつの間にか書いてしまう事がある。しかし、風景を描く時とは違う。風景は紙の上に浮かんでくるから。ということだ。

「ヴェラトローパの事もそうだったわね。絶滅したはずの生物も、あなたは知っていた……あなた、ひよつとして“過去”が見えるんじゃない？」

ジュデイスがそう、カノンノが以前絶滅したはずの生物や皆の知らないヴェラトローパについて知っていたことからそう仮説を立てる。

「過去？……私にはわからない……」

「見える……そうね。私達クリティア族の様に、情報を読み取っている……とも考えられるわね」

「だが、前にリタがカノンノのドクメントを見た時にヴェラトローパそのもののドクメントがカノンノの中にあっただから、見えるのはまた違うんじゃないか？」

ジュデイスとカイは仮説を立てていくが、エステルがカノンノの謎の文字を見る。

「……でも、これらの絵、それに文字。私達の歴史にはないものです……少なくとも、私

が城で読んでいた書物で見たことがあります……」

エステルはカノンノの書いた謎の文字を、少なくとも自分の知っている限りでは歴史上存在しないものだと言う。

「……ニアタなら、わかったかもな」

「ニアタ……あのヴェラトローパで、色々教えてくれたつていう……」

カイがそう口に出すとカノンノが眩き、それをジュデイスが首肯。ルミナシアの創世を見届けた賢人であり、さらにはルミナシアだけではなく異世界も見てきたのだと説明する。

「きつと色んな事を知っていたでしょうね」

「私、会ってみたいな。ニアタに……」

「ニアタはラザリスに壊されてしまったの。行っても無理よ」

ラザリスに破壊されてしまった今となっては無意味だが、カノンノはニアタに会ってみたいと言う。

「でも、行きたいな……ねえ、カイ。ヴェラトローパへの同行を依頼に出したら、一緒に行ってくれる?」

「当然だ」

カノンノのお願いをカイは二つ返事で了承。それを聞いたアンジュが穏やかに微笑

んだ。

「さて、と。カノンノ、後はあなたが依頼を出すだけ、ね」

「うん！」

そうやって差し出された依頼書をカノンノは笑顔で受け取った。

「あの風景の中に立ってる……私が描いた、あの風景の中に……」

ヴェラトローパに立ったカノンノはどこか感動を交えた様子で呟き、不思議な気分だと感想を述べる。

「私にあるドクメントに、何の意味があるんだろう。それが何なのか、分かれればいいな」  
感じる疑問を解決したい。そんな欲求を見せるカノンノだが、次にどこか不安気な様子を見せた。描いた風景はヴェラトローパ以外にもあり、その中には綺麗なものだけではなくまるで世界の終わりのような風景もあったらしい。

「ヴェラトローパが実在した様に、世界の終わりの様な風景も、実在……するのかな」

「悪い事を考えるな。クラトスだと言ってたぜ、悪い未来はそれを思い描く不安、恐れ、それらの負の感情によって作られる。ってな」

「悪い未来が……作られる？」

「ああ。悪い事を考えると不安になる。その不安が恐れを作って未来へと踏み出す一歩を奪う。そのせいで望む未来から遠ざかってしまう。ってな」

カイはそう言つて一つ笑みを見せ、カノンノの頭にぽんと手を置いた。

「安心しろ。もしもこの世界にそんな恐ろしい事が起きようとも、俺がなんとかしてみせる」

「カイ……」

その言葉にカノンノは不安を無くせたのか笑顔を見せる。

「あーはいはい、いちやつくのも結構だけどそろそろ行こっかー」

と、今回同行している——アンジュ曰く「この前行つた時に通路が失われたみたいだから、今回は箒で空を飛べるアーチェと、よく分からないけど羽を生やせて飛べるっていうコレットに同行をお願いした」ということだ——アーチェが呆れた様子を見せてそう言う。ちなみにコレットは「二人とも仲良しだね」とほんわかつた微笑みを見せている。

「な、ちちち違うよアーチェ！ わ、私別にいちやついてるつもりなんて……」

アーチェの言葉を聞いたカノンノはほんつと顔を赤くしてわたわた弁解を始める。が、アーチェは「はいはい」とテキトーに流しており、コレットは相変わらずのほわほわ笑顔を見せ、カイはどうしてカノンノがこんなに焦っているのか分からない様子を見

せながら先頭を歩き始めた。

それからカイ達はネガティブシザーやステインローパーの群れを掻い潜りながらヴェラトローパの最奥。以前カイがレイ達とやってきた時、通路が失われた場所までやってくる。

「この先なのね……でも、ここを通るには……」

「ん、パツと飛んでって探したいけど」

カノンノが呟き、アーチェはそう言っただけじつと辺りを観察する。

「向こうとこつちの間に気流があつて、ホウキで飛んでくのは危険かも」

「うん、私もそう思う……」

飛行要員の二人は空を飛べるからこそ、ここで飛ぶのは危険だと意見する。

「なら、他に道がないか探してみるか」

「そうね。戻りながら他の道を探して、いざダメなら船に戻って作戦の練り直しを提案するしかないか」

カイの言葉にアーチェも賛同。カノンノとコレットも反対意見はないのか四人は踵を返すと一度入り口まで戻っていく。その道中、ヴェラトローパの宮殿部分から出て石橋を渡っている時。カノンノがふと橋から宮殿の土台となっている部分に目を向けると「あつ」と声を出した。



「ねえ、下に道がある」

「あ、じゃあ、ちよつとあたしが見てくる！」

「私も行くよ」

カノンノが言うのとアーチエが箒にまたがってそう言い、コレットも羽を出してその後に続く。それからカイとカノンノが少しばかり待っていると突然床が割れ、隠し階段が姿を現した。

「大丈夫、降りられそうだよー！」

「カイ、私達も行こう！」

アーチエの呼びかけを聞き、カノンノもカイに呼びかけて階段を降りて行った。

「そういえば、そのニアタがいた世界にも世界樹があつたんだよね？」

「前に会った時はそう聞いたな」

「世界樹があるのは、私達の世界ルミナシアだけじゃないんだね……ここは、どこかの世界の子どもなんだ」

「そのニアタさんが教えてくれたんだね。異世界からやって来て、このルミナシアの創世を見届けて」

アーチエの言葉にカイがそう返すとカノンノは何か不思議そうな様子でそう呟き、コレットも呟く。

「故郷を失って、永遠の時間を一人ぼっち……かあ。そうしたくなるのも、わかるかも」  
「うん……一人ぼっちで生きて行くのは、寂しいだろうね」

長命種であるハーフェルフであるため似たような経験があるのだろうアーチェの言葉に、カノンも同意する。

（偶然なのかしらね。私達の仲間のカノンが、彼のデイセクターと、とても似たヒト、そして同じ名前だったのは……）

その言葉を聞いたカイの頭の中に、以前ジュデイスから聞いた言葉が反芻される。

「カイ？ どしたの？ だいじよぶ？」

「！」

と、傍から見て様子がおかしかったのかコレットが顔を覗き込むようにしてカイを呼んでおり、コレットに呼びかけられてようやくカイも気づいた様子を見せる。

「いや、なんでもない」

「そう？ おでこに皺が寄ってたよ？」

「もし、つらかったら戻ってもいいから」

「カイ、無理しないでよね」

コレットの言葉を皮切りにカノンも、アーチェまでも心配してくる有様。カイは自分に呆れたように一つ息をついた後笑みを見せた。

「心配かけて悪い。だが大丈夫だ……さあ、とつとと行こう」

そう言い、向かう先に目掛けて足を踏み出す。その時グルルという音が聞こえてきた。

「アーチエか？ 腹減ってるんならこの依頼が終わった後なんか作ってやつから我慢しろ」

「どういう意味よそれ!？」

呆れた様子のカイの言葉にアーチエの怒号&ライトニングが放たれる。アーチエの手の平から光線のように放たれた雷をカイがひよいつとかわすと、ギャツと小さな悲鳴が聞こえる。

「カノンノ!? コレット!? 大丈夫か!？」

「なんかあたしと比べて扱い違いすぎない!？」

カノンノかコレットが流れ弾に当たったと思ったのかカイが呼びかけるとアーチエがさらに怒る。

「カイ? 私達はだいたいよぶだよ?」

が、コレットは不思議そうに首を傾げており、その隣の無傷のカノンノもうんと頷く。それを確認したカイも悲鳴の方を見ると、そこには白黒の毛が生え、長いくちばしを生やした二足歩行の魔物——ゲオプシテイスが群れをなして立っていた。その内一体は

毛皮が焼け焦げている。

「ああ、あれか」

呟きつつカイは腰の刀に手をやり、カノンノも大剣を構える。コレットも両手に戦輪チャクラムを構えて背中に光の羽を出す。アーチエも箒にまたがって詠唱を開始。

「なんでもかんでも押し潰せ〜！ ロックマウンテン!!」

アーチエが魔術を放つと無数の岩が落下し、ゲオプシテイスを押し潰しながら砕け散る。

「影走斬!!」

さらにその岩石の落下を潜り抜けてカイが刀を振るい、落下してくる岩から逃げ惑うゲオプシテイスを斬り倒す。そして落下する岩が消えた時、ゲオプシテイスはようやく単身突っ込んできたカイに狙いを定める。

「やああああああつ!!」

その背後からカノンノが強襲。華奢な身体で振るうには見合わない大剣でゲオプシテイスを斬り倒し、自分は囷だったのだろう、カイも混乱しているゲオプシテイス目掛けて右手に刀、左手に短刀を構え斬りかかった。

「御許に仕えることを許したまえ……」

そんな二人の援護のため、コレットも詠唱を開始する。

「響けんそうれん……あ、間違えちゃった……失敗、失敗〜♪」

だが途中で詠唱を間違えてしまい、失敗失敗と言いながらへぺろと舌を出す。

「……あれ？」

が、直後彼女が見たのは天使の祝福を受けて威力を増した天の裁きが辺り構わず降り注ぐ光景だった。その裁きをくらったゲオプシテイスは一撃で浄化され、カイとカノンも「うおつ」だの「ひゃあつ」だの悲鳴を上げて裁きをかわしていた。後衛のため裁きが降り注いでいないところにいたアーチエは「うひゃー」と呟いてドン引きしている。

そしてその裁きが止んだ時、襲い掛かってきたゲオプシテイスどころか騒ぎを聞きつけて獲物がいると思ったのだらうか、他のゲオプシテイスの群れやメデューサローパーまでもが駆逐。残っていたのはカイ達四人だけだった。

「……えへっ、グー、だね♪」

誤魔化すようにウインクをして右腕を掲げるようにポーズを決めるコレット。しかしカノンとアーチエはジト目を彼女に向け、カイはすたすたとコレットに近寄る。

「ぎゃんっ」

そして彼はびしつとデコピンを決め、コレットの悲鳴が小さく響いたのであった。

それから彼らは再び先へと進みだし、ついにヴェラトロローパの最奥までたどり着く。

「これは？……これが、ニアタ？……」

「つてよりは、部品じゃない？ 何か光ってるけど」

カノンノとアーチエがそう話す。彼らの目の前にあるのは粉々に砕けたニアタと紫色の光。カノンノが「ニアタ」と呟いて一歩近づくと、突然紫色の光が強まり、そう思うとニアタの部品は独り独りに集まって元の姿に戻った。

「わああっ!?!……………す、すごい……………自分で直しちゃった……………の?……………」

「そなた……………カノンノ……………か?」

「どうして私の名前を?」

アーチエが驚いているとニアタもまた驚いたような声色でカノンノの名を呼び、カノンノがなんで自分の名を知っているのか。とニアタに尋ねる。

「ジューデイスから、ニアタのパーツから読み取った情報を聞いたんだが……………ニアタの世界のディセンダーの姿はカノンノにそっくり……………いや、彼女の名前もカノンノだったそうなんだ」

「ニアタの世界のディセンダーと、私がそっくり? 名前も……………同じなんて……………でも、私はパスカなんて世界や、ニアタの事なんて何も知らない……………」

「混乱させてしまった様だね。すまない」

カイから話を聞いたカノンノは混乱するが、その姿を見たニアタが謝罪。カノンノがニアタの世界の事を知らなくても当然。何故ならこの世界ルミナシアに故郷パスカの

因子はなく、カノンノはこの世界の住人であり自分達の世界とは何の接点もないのだから。と説明する。

「わ、私はただ……あなたに聞きたい事があって……色んな世界を旅したあなたなら、何か知っているかもって……」

「何を聞きたいのかね……」

カノンノのどこか焦ったような言葉に対しニアタは落ち着いた様子で返答。カノンノはニアタに近づくとスケッチブックと謎の文字を書いたメモを取り出し、ニアタに見せる。

「あの、この風景を、見た事はありませんか？……この世界にはない風景なんです。この文字も……」

「これは……この風景は我々がかつて訪れた別の世界のものだ……この文字にも見覚えがある。これはまた別の世界のものだ……」

「それって……」

ニアタはカノンノのスケッチブックに描かれた風景や謎の文字を見覚えのあるものだと言う。それにカノンノが驚いているとニアタは「仮定だが」と前置きをして話し始めた。

「そなたの中にあるのは、かつてあった世界の因子ではないだろうか？ その因子は

この世界のどこにもなく、そなただけに受け継がれているのだ」

「それが、なぜ……私に？」

「それは、我々にもわからぬ」

ニアタの仮定を聞いたカノンノはかつてあつた世界の因子が何故自分だけに受け継がれているのか、と問う。が、ニアタはそれは分からない。と返答。しかしカノンノの存在から我々の世界以前にもカノンノの因子があつたという事かもしれない、どこかの世界にカノンノという個体の情報の根源があり、その世界から派生したのがこころミナシアや自分達の世界パスカなのかもしれない。という仮定を出した。

「皆さ〜ん!!」

と、そんな焦つた声が聞こえてきた。

「ロックス、どうしたんだ？」

「皆さん、船が……船が……高度を保てなくて、降下し始めたんです！ 皆さんの帰還を待とうにも、この高さまでバンエルティア号が上がれなくなつてしまつて……」

「じゃあ、私達はここに残された状態に？」

「あたしはホウキがあるけど、せいぜい一人が限界よ！」

「私は……出来るかなあ……」

ロックスの説明を聞き、アーチエが焦り、コレットは他の人達を運べるかと不安にな



る。ロックスは混乱しているのか「大丈夫です！ 僕が持ち上げて飛んで連れて帰りま  
す!」と言っており、カノンノに「そんなの無茶だよ!」とツツコミを入れられていた。

「待ちなさい。そなた、今バンエルティア号、と言ったかね?」

「え、ええ。そうですが…(…何だか硬そうなヒトだなあ?)」

「……それは驚きだ。ますますこの世界に興味が湧いた」

「話は後だ。一度戻るぞ」

ロックスがニアタの事を硬そうな人だなあという印象を持っている横でカイは一度  
戻ろうと提案。カノンノ達も頷いて元来た道に戻り、バンエルティア号が待っているは  
ずの場所に戻ってくる。だがそこに船の姿はなく、彼らがヴェラトローパから見下ろす  
とどうにか視認できるほどの距離までバンエルティア号は下降していた。

「も、もうあんな所まで……」

「えっと、コレット。あたしがカイを運ぶからあなたはカノンノを……」

カノンノが慌て、アーチエはコレットに指示を出し始める。

「いや、心配はいらない」

が、それをカイが制し、彼は印を組み始める。

「忍法、影分身」

そう言うと共に彼の両隣に現れる二体のカイの影分身。しかし彼は続けて新たな印

を組んだ。

「影幻術——」

印を組み終えた時、二体の影分身が正に影のように黒くなり、直後溶けるように崩れると組み合わせる。

「——鴉」

その組み合わせさせた影は赤く目を輝かせる巨大な鴉の姿に変化していた。その巨大さたるや人二人は軽く乗せられるはずだ。現に背中に飛び乗ったカイの横にはまだ一人乗るには十分なスペースが残っている。

「カノンノ、乗れ。アーチエはロックスを、コレットはニアタを頼む」

「オツケー！ ロックス、乗って！」

「うん！ はい、ニアタさん」

カイが指示を飛ばし、アーチエが領いてロックスに乗るよう促すとロックスは「失礼します」と言つてアーチエの後ろに座り、ニアタはコレットに抱きかかえられる。

「んつと……」

しかしカノンノは踏ん切りがつかないのかおどおどと視線をさまよわせるばかり。

「カ、カイ、やっぱカノンノはあたしが……」

アーチエが申し出るが、カイはそれを遮るようにカノンノに向けて手を伸ばす。

「カノンノ」

カノンノに向けて手を伸ばし、カイは真剣な目を彼女に見せる。

「安心しろ。俺を信じろ」

「カイ……うん！」

真剣な目に相手を勇気づける笑顔でのコンボにカノンノは頷き、彼の手を取ると鴉に飛び乗る。

「よし、いくぞー！」

カイが合図を出すと鴉は翼をはためかせてジャンプ、そのままグライダーのように少しずつ落下していく。アーチエとコレットもその後続いた。

「……ほんと、あれであの二人付き合っていないのが信じられないわ」

「ふふ。しかし、カイ様にならお嬢様を任せられますね」

「ありや意外。カノンノは嫁にやらんとかいうお父さんポジションだと思ってた」

「私はそこまで言うつもりはありません。私はお嬢様の幸せを心から望んでいますので、恋愛にまで口を出そうとは……」

呆れた様子のアーチエにロックスがそう言うのとアーチエは悪戯っぽく笑いながら言  
い、ロックスも穏やかに笑う。

「ですが、相手がお嬢様を悲しませる、もしくは私が認められない男だった場合……」

だが次の瞬間ロックスの笑みに黒いものが宿り、アーチエは背筋に寒気を感じた後見なかったことにして前を向き直したのであった。

「ほう、驚きましたね。この船は星晶を使用した内燃機関と思っていたのですが」  
バンエルティア号の機関室。ニアタはやって来て早々、カイ達からの紹介と説明もそこそこにここに来てきてエンジンの不調を確認していた。すると一緒にエンジンを調べていたジェイドが呟く。

「これは半永久機関だ。別の世界で同じ仕組みの船を見た事がある……ふむ……異常の原因は調整に必要な計算を間違えた為だろう」

「うっ……」

ニアタの言葉に調整をしていたのだろうチャットが渋い顔を見せる。

「では、機器類自体に異常は無いのですね」

「そういえば、僕達この船に乗って長いけど、燃料の星晶を補充したところは、一度も見  
た事なかったよね」

ジェイドが機器の異常がない事を確認すると古株であるエミルがそう呟き、それを聞いたジェイドがチャットを見る。

「チャットは知っていたのですか？」

「もちろんです」

「……本当ですか？　そういう大事な話は、早くして頂かないと困ります」

チャットは得意気にジェイドの質問に答えるが、それを聞いたジェイドは目つきを鋭くした。

「いいですか。この船は星晶で動いていない。これがいかに重要な話かわかりますか？

星晶を採り尽くし、後退に向かうしかないこの世界を救う光明となるかもしれないのですよ？」

「それじゃあ……」

「もし、この機関の仕組みを解明し、同じ物が作れたとしたら……星晶を巡って国家同士が争う事も、採掘の為に人々が駆りだされる事も無くなりますよ」

「そ、そうですが！……ボクはひいおじいさんとの約束で、この船の技術を守る様に言われていたんですよ！」

ジェイドの説明と指摘を受けたチャットはそう強く言い返し、「今回故障したのは想定外でしたけど……」と声を漏らす。

「灯台下暗し……だね。変わった船だなあ、とは思っていたけど」

「この機関はヴェラトローパの民によるものか、それとも異世界の物なのか……いずれ

にしろ、星晶を用いない優れた技術を持った民がいたんですね」

「半永久機関、か……方法が無い訳ではないが……」

ジェイドの言葉を聞いたニアタが呟く。

「何か名案でも？」

「いや……今はまずこの船を直そう」

ニアタの呟きを聞いたジェイドがそう尋ねるが、ニアタはそう言つて調整を再開。すると船の駆動音が変わり、それを聞いたチャットの頬がほころんだ。

「ああ、直りました！ ううっ……本当に良かった……」

「船の高度も上がっている様ですね。やれやれ、一時はどうなる事かと思ひましたよ。これでまた仕事に励めますね」

チャットの嬉しそうな言葉に続き、ジェイドはそう呟いたのであった。それを見届けたニアタはふよふよと浮遊し、ホールへと移動する。

「ニアタ」

と、ホールへと来たニアタにカノンノが声をかけた。

「なぜ、アドリビトムに力を貸そうと思つたの？」

「誓いを立てたのだ。我々の故郷の因子を受け継ぐ世界に力を貸していくと。我々は死ぬぬ機械の身体。永遠の時間を生きなければならん……故郷のデイセンサーに仕え

る為に、我々が選んだ道だが」

「私も、この世界も、ニアタの故郷の情報因子を受け継いでいないんでしょう。なのに……」

ニアタの言葉にカノンノはそう尋ねる。だがニアタは「我々のデイセクターなら、そんな事は考えないさ」と返した。

「危機が訪れれば、乗り越える。我々は、その意志を受け継いでいるだけだ……それに因子を引き継いでいないこの世界に、そなたがいる事にも興味がある」

ニアタはそう言った後少し黙り、「いや、興味と言う言い方は良くないな……」と言って発言を訂正するように声を出した。

「嬉しいんだよ。またカノンノに出会えた事が……」

「私は……ニアタの世界のカノンノにはなれないよ……」

「我々はそんな事は望んではいないよ。そなたは、そのまま自分の望む姿でありなさい」

「……うん。ありがとう」

ニアタの言葉に対し不安気にニアタの世界のカノンノにはなれないと言うカノンノだったが、ニアタはそんな事は望んでないと返す。その優しい言葉にカノンノは嬉しそうに微笑み、返す。

「あ、そうだ。カイにもお礼を言わなきゃ！」

ニアタにお礼を言っただけでいい出たのか、カノンノはそう言っただけでいい。機軸の身体のため目などの器官はない。しかしその様子はどこか愛娘を見守る父親のような雰囲気を見せていた。

「カイ！」

カノンノがやってきたのは甲板。カイはそこで手すりにもたれかかって風景を眺めており、カノンノの呼びかけを聞いてゆつくりとカノンノの方を見る。

「よお、なんか用か？」

「うん、用事っていうか……お礼を言っただけでいい」

カイの言葉にカノンノはそう用件を伝え、カイは「お礼？」と尋ね返す。

「ヴェラトローパへ連れて行ってくれた事、嬉しかったよ。ありがとう！」

カノンノは元気に微笑んでお礼を言い、それを聞いたカイはふん、と一つ鼻を鳴らしてそっぽを向く。

「別に。俺は依頼を遂行しただけだ」

「でも、嬉しかったの。私の存在が何なのか、はつきりとはわからなかったけど……仮にニアタの話が正しかったとしても、私の中に過去の世界の記憶が何の為にあるのかなんて、わからないけど……」



素直ではないカイに対しカノンのはやや不安気な様子を見せつつ、しかし嬉しそうに微笑む。

「……まで考えられるようになったのはカイが、依頼を出したら一緒に行ってくれて言つたおかげだから。だからね、ありがとう」

「……どういたしまして」

カノンノの輝かんばかりの笑顔でのお礼にカイはそっぽを向いたまま静かにそう返したのであつた。

「ふんふんふんふん♪」

それから時間が過ぎて星の輝く夜中。ハロルドは以前ヴェラトローパを出現させようと作つた装置——結果的にカイル達をこの世界に呼び込んでしまったものだ——を甲板に出して操作を行つていた。その近くにはカイル、リアラ、ロニ、ジューダスが立っている。が、装置はキンキンキンという音を発した後沈黙。ハロルドはふむうと声を漏らした。

「失敗みたいね」

「またかよ……」

ハロルドの言葉にロニは気が抜けた様子で呟く。

「いつになつたら元の世界に戻る事やら」

「まあ、バルバトスがこつちの世界にいるんだから。放つて帰るわけにもいかないけどね」

ジューダスはため息交じりにそう呟くがリアラは苦笑交じりに言い、ジューダスは無言でひと足先に船内に戻っていく。

「おいジューダス！ 片づけんの手伝えよ！」

ロニが声を上げるがジューダス是我闕せずとばかりに歩いていき、ロニも諦めたのかため息交じりに装置を乗せている台車のタイヤロックを外し、カイルとリアラに前方や周囲の注意を任せると台車を押して船内に戻っていった。

「……………は？」

バンエルティア号から遠く離れたとある森の近く。そこに突如光が走ったかと思うと二人の人間が姿を現した。一人はオレンジ色のふわふわとした髪質で華奢な身体にローブを身にまとうその姿はまるで僧正を思わせる。もう一人は桃色の髪で頭にチューリップのような髪飾りをつけている。オレンジ髪の方は立って辺りを見回して

いるが、桃色髪の方は気を失っているように倒れ込んでいた。

「……は一体？ 確か……」

オレンジ髪の僧正は眩き、何が起きたかを思い出そうとする。しかしその時、近くの森の繁みがかさがさつと揺れるとウルフの群れが無防備な獲物である二人に襲い掛かってくる。

「くっ！」

僧正はもう一人の少女が起きそうにないと判断すると近くに転がっていた愛用の杖を握りしめ、持ち上げる。その時杖の先端にまるで三叉槍トライデントのようにくつついていた三本の蠟燭に魔力の火が灯った。

「バリアー！」

叫び、魔力を解放。同時に二人を覆うように魔力の障壁が出現し、ウルフ達は障壁に直撃するとその痛み<sup>オーバーリミッツ</sup>に怯む。その隙に僧正は己の中のマナを解放、限界突破を行った。

「原始灼光！ エンシエントノヴァア！！」

周りのマナをかき集め、解放した己のマナをも加えて古の炎を呼び出し、ウルフ達を一撃で薙ぎ払う。生き残ったウルフもその魔術の威力を見て恐れをなしたのか森の中に逃げていき、僧正は骨も残さず焼き尽くされたウルフを見ると哀しげな目を見せ、杖を置くと片膝について両手を組み祈りを捧げるように目を閉じる。

「……どうか、あなた方に神の、我らが世界樹のご慈悲があらん事を」  
ウルフ達の冥福を祈る僧正。と、その後ろから「う、ん……」という声が聞こえてきた。

「起きたか？」

「え？……あれ？　ここどこ？　世界樹の麓……じゃないよね？」

僧正の言葉に少女は辺りをきよろきよろと見回しながら尋ねる。

「えつと、私達つて確か……」

「状況はよく分からないんだよね……とりあえず、そこに建物があるし。ここで話し合  
うよりあそこで話した方が安全だと思うよ」

少女の言葉に僧正がそう言い、杖で一つの方向を指し示す。そこには石造りでどこか  
コロシラムのような様相を見せる建造物があった。

「んく……そうだね。ま、何かあつても私達なら大丈夫か」

「うん。出来れば荒事は避けたいけど」

少女と僧正は能天気になんか笑いながら言い、少女は近くに落ちていた身の丈程ある大  
剣を背負い、僧正も杖を背負うとその建物の方に歩いていった。

## 第三十一話 風の青年と空の少女

大空を移動する船——バンエルティア号。ギルド・アドリビトムの拠点であるこの船は今日も世界樹に見守られながら大空を飛んでいた。

「うーん。今日も青空広がるいい天気。気持ちいいねえ〜」

その甲板に姿を現すのは澄み渡る空のような青色の髪を背中まで伸ばした少女。頭には牛の角を模した飾りのついた額当てを付け、全体的に赤色を基調とした防具に身を包んでいる。左腕には刺々しい装飾がついた銀色の盾を装備していた。

「う〜っし、始めようかな〜」

少女はそう言いながら丸出しになっている二の腕を揉み、軽くストレッチをしてから、背負っていた銀色の斧を抜き、右手に握る。

「ぜああああつっ!」

獣の咆哮のように叫びながらぶおんつと風切音を立てて右上から左下に袈裟懸けに振り下ろす。

「ぬんっ!!」

振り下ろした直後、一步踏み込みながら横に斧を薙ぎ払う。さらに彼女は斧の重量を

利用して高速で回転、

「せいっ!!」

その遠心力を利用したさらに威力の高い薙ぎ払いを続ける。少女はずぎあつと音を立てながらブーツで地面を踏みしめ、回転を止めると斧を両手で握って振り上げる。

「どっせええええいっ!!」

ぼおんつという空気が爆発するような音を立ててバンエルティア号の床目掛けて振り下ろされる斧。触れるものすべてを打ち砕かんばかりの勢いで振り下ろされた斧は、バンエルティア号の床すれすれで止まっていた。

「…………ふっ」

少女は一つ笑みを浮かべると斧を右足で蹴り上げ、一旦空中に投げだすと落ちてきた斧を受け取り、くるくると回転させてから刃部分を上にしてどんつと床に立てる。

「うくん。絶好調の斧の冴え、我ながら惚れ惚れしちゃうねえ」

満足そうにうんうんと頷く少女。以前甲板で素振りをしていた時勢い余って甲板の床をかち割ってしまった、このバンエルティア号の船長でありギルドのリーダーであるチャットに怒られたのも今となってはいい思い出。と彼女は回想した。

「よ、相変わらずだな。ルキ」

「んお? あ、ルーク」

そこに声をかけられ、ルキと呼ばれた少女は振り返るとそこにいた赤髪短髪の青年——ルーク・フォン・ファブレを見て左手を上げ、続けてにかつと笑う。

「どう？　一戦やんない？」

「遠慮しとくよ。それよりカノンノが呼んでたぜ？」

「ん？　そう？　分かった。あんがとねー」

ルキの誘いをルークは引きつった笑みを浮かべて断り、用件を述べる。それを聞いたルキはこくと頷いてルークにお礼を言い、斧を背負うと船内に戻っていった。彼女はそのまま普段雑談に使っているホールを素通りして下に降り、機関室で目当ての相手を発見する。

「カ〜ノ〜ちゃんっ！」

「わひゃっ!？」

機関室に用意されているクエストカウンターの前でこの船の船長でありギルドリーダーのチャットと話していたピンク髪の少女——カノンノにルキは後ろから抱きつき、不意打ち気味の抱擁にカノンノは小さな悲鳴を上げる。

「ねーねー、なんか用事があるって聞いたけど、なにになに〜？」

「あ、うん、その……」

ルキのわくわくと目を輝かせながらの言葉にカノンノは苦笑、

「そのね……別の世界に興味とかある？」

「……はい？」

続けて彼女から発された言葉にルキはきよとんと目を点にし、呆けた声を出したのであった。

「……ルミナシア？　ここグラニデ以外にそんな世界があるの？」

親友カノンノ・イアハートから説明を受けた、この世界グラニデのデイセンサーであるルキは首を傾げる。

「その通りだ」

それを肯定する声我突然聞こえる。その声の主は電球のような機械生命体——ニアタだ。

「ああ、ニアタ。そういうえばあんたもパスカとかいう世界の出身だっけ？」

「ああ。そして我々の分身とおうか、そのような存在がルミナシアにいてな。この世界で使われている半永久機関の知識を欲しいと言われたから、設計図をカノンノ達に届けにいつてもらいたいのだ。あと、しばらくルミナシアで過ごしてみてもどうかかと思つてな」



「すつごいんだよ！　なんかき、そのルミナシアにもアドリビトムがあつて、皆もいるんだつて！」

ニアタの説明に続けてカノンノは目をキラキラと輝かせ、興味津々の様子を見せる。  
「皆も？　え、あたしもいんの?!」

カノンノの言葉を聞いて何を勘違いしたのかルキは自分もいるのかと目を輝かせる。

「……ルキ本人はいないそうだが……ディセンダーは誕生しているそうだ」

「おお、ディセンダーいんの!!　じゃあ行つて会つてみようかなあ」

一応ニアタもそうフォローを入れ、ルキは自分と似て非なる存在がいる事に興味を持つ。  
つ。

「おい、カノンノ」

と、そこにまた新たな声が聞こえてくる。低く不機嫌そうな刺々しい声にルキは声の方を向く。そこにいるのは赤と黄のオッドアイに紫色の髪をした少年だ。

「あ、ゲーデ。なんか用?」

「テメエに用はねえ。ルーティの奴がうぜえぐらいにニヤニヤしながらカノンノが呼んでたわよ?　浮気?　いいご身分ね」とかうざつてえこと言つてきやがっただけだ。用件はなんだ?」

ルキの言葉にゲーデと呼ばれた少年は不機嫌そうに眉間に皺を寄せながらカノンノ

に毒づく。

「あ、うん。ちよつと異世界に行く事になったんだけどさ。ゲーデも一緒に来ない？」  
「異世界に?……断る、面倒だ。そもそもディセクターが誰もいなくなっちゃったらどうすんだよ」

カノンノの誘いをゲーデはふんつと鼻を鳴らして断り、ルキが行くというのを予想したのかディセクターがいなくなることを危惧する。

「あ、そだね! じゃあ後は任せたまよ、ゲーデ!!」

「……テメエ、なんでこの時代にテメエが呼ばれたのか忘れたのか?」

ウインクしながらバンツと力強くゲーデの肩を叩き、もう片方の手でサムズアップを決めるルキにゲーデが呆れ顔でツツコミを入れる。グラニデ・ディセクターであるルキがこの時代に誕生した理由、それは世界中から生み出された負を世界樹が浄化しきれずに負が蔓延し始めたためであり、さらに言えばゲーデはその最中、世界樹の根が傷つけられたことにより世界樹の中から出てきてしまった世界の負の想念である。

「だーいじょうぶ! 今はもうあんたも立派なあたしの後任ディセクターだし!」

だがルキは笑顔で言いきり、ゲーデは呆れたように右手を顔に当てる。

「とかなんとか言つて、ゲーデさんがルミナシアに行きたくないのつてリリスさんと離れたくないからですよね?」

「なっ!？」

ルキとゲーデのデイセンダー漫才を聞きながら、チャットがくすくすと笑ってカウンターに肘をつきながら言う。その言葉を受けたゲーデの顔が赤く染まった。

「なっ、バ、バカ言ってるじゃねえ!」  
「べ、別にあいつのことなんざ関係ねえし、気分が乗ってたら異世界でもどこでも行つてやらあ!」

ゲーデが顔を真っ赤にしながらぎゃんぎゃんと吼える。

「そうなの、ゲーデ?」

「!?!?」

「「あ」」

と、ゲーデの後ろからそんな哀しげな声が聞こえ、ゲーデは顎が外れんばかりに口を大きく開けながら振り向き、ルキ、カノンノ、チャットの声が重なる。彼らの視線の先には金色の髪をポニーテール風に結った、エプロン姿が良く似合う美少女が立っていた。

「あの、えーとその……ごめんなさい」

「うん、なんていうか。ごめんね」

「ま、なんとかなるさ!」

チャットとカノンノは目を逸らしつつ謝罪、ルキはよく分かってないのかウインク&

サムズアツプを見せた。

「え、あ、いや、リリース、こ、これはその……」

「ううん、いいのよゲーデ……その、ルミナシア？　だっけ？　行きたいんだったら、私は止めない……」

弁解しようとするゲーデの先手を打つようにリリースはしゅんとうつむきながらそう返し、踵を返す。

「ま、待てよ、誤解だ！」

が、リリースが歩き去る前にゲーデが彼女の肩に手を置いて強く誤解だと主張した。

「で、でも……」

「俺はどこにもいかない！　お前とずっと一緒だ！」

「ゲーデ……」

ゲーデは聞いてる方が恥ずかしくなりそうな告白をリリースに行い、リリースも嬉しそうにこつと笑みを見せる。

「ありがとう！」

「うわっ!？」

そしてその直後ゲーデに思いっきり抱きついた。

「な、リリース、やめっ!？」

「やーだ♪」

抱きつかれたゲーデは顔を真つ赤にして大慌て。リリースはむしろ力を入れて抱きしめており、ゲーデは引きはがさうかどうしようかと手をおろおろと動かしている。しかし抱きしめられている彼の視界の外でリリースはくすくすと悪戯っぽい笑みを浮かべていた。

「……また、からかわれてますね」

「あはは……」

チャットがカウンターのの上に頬杖をつきながら呟き、カノンノも苦笑する。

「どうしたの、ニアタ？」

一方こちらはルミナシア、ここの操舵室でニアタが何かをしているのに気づいたカノンノが尋ねるとニアタがああと頷いた。

「少しグラニデとの通路を開いているんだよ」

「グラニデ？」

「私の本体がいる世界だ。少しあちらの者に頼みがあつてな」

カノンノの問いにニアタがそう言うとカイが尋ね返し、ニアタは説明。とニアタは何

かを感じ取って顔を上げた。

「上手く行つたようだ、グラニデのディセクターもやってきている。甲板で出迎えるでしょう」

「うん！ ほら、カイも！」

ニアタの言葉を聞いたカノンノは楽しそうな表情で頷くとカイの手を引つ張つて甲板に向かい、カイもやれやれとため息をつきながらカノンノの横を歩く。ニアタも浮遊しながらその後を追つて行つた。そして一行が甲板に出てくるとカノンノによく似た女の子がニアタに気づいて声を出した。

「ニアター！」

「カノンノ、ようこそルミナシアへ」

「……ほんとに私そっくり……」

その女の子——カノンノ・イアハートの声にニアタが優しい声で言うとかノンノ・グラスバレーが唾然とした様子で呟き、カイもああと頷く。するとイアハートがカノンノに近づき、彼女の手を握る。

「あなたがルミナシアのカノンノ？ 私の世界のニアタから話は聞いてるよ。私、カノンノ・イアハート」

「え、えと、カノンノ・グラスバレーです」

「あんたがこの世界のディセンダー？ あたしルキ！ よろしくねー！」  
「カイだ……よろしく頼む」

イアハートの挨拶にカノンノが困惑気味に返すと次にルキがカイの肩をばんばんと叩きながら挨拶。カイも名乗りを返すとニアタがふむと唸った。

「ふむ、しかしカノンノが二人だと呼ぶ時にややこしいな……両方とも名字呼びにしてもらうか？」

「グラニデのカノンノはともかくこのカノンノは既に名前呼びが定着してるだろ？

グラニデのカノンノをイアハートって呼べばいいじゃねえか」

「なら、私はそっちのカノちゃんをグラスバレーって呼ばせてもらうけど、オツケー？」

「うん、いいよ」

イアハートの言葉にカノンノが頷きながら名乗るとニアタがそう呟き、それにカイが言うどルキが確認を取るように尋ね、二人の提案にカノンノ二人が同時にステレオで返す。

「じゃあ立ち話もなんだ。こっちのリーダーに挨拶した方がいいだろうし、入ってくれ」

「それじゃ、お邪魔しまーす♪」

カイがアンジュ達に紹介しようと誘い、ニアタはそうだったなと頷いて彼らを船の中に入れる。そしてホールにいるアンジュの前にカノンノ二人が並ぶとアンジュもぽか

んと口を開いてしまった。

「……ホント、双子みたい……でも、血も繋がってないし、そもそも別の世界の……別人なのね……」

「カノンノ・イアハートです、よろしくお願いします」

「グラニデ・ディセンダーことルキです！」

アンジュの言葉にカノンノが一礼しながら名前を名乗る続けてルキが名乗り、さらに続けてニアタが言った。

「こちらではグラニデのカノンノにはイアハートと名乗らせる。グラニデの者達は逆にごちらのカノンノをグラスバレーと呼ぶが基本的にグラニデのカノンノをイアハート、こちらのカノンノはそのまま構わないそうだ」

「ええ、分かったわ」

ニアタの話をアンジュは了承。ニアタは頷くように身体を動かした後、イアハートの方を見る。

「カノ……イアハート。頼んだものは持ってきてくれたかな？」

「うん！」

『頼んだもの？』

ニアタの質問にイアハートは元気よく頷き、その言葉にカイ、カノンノ、アンジュは



もちろんルキまでも首を傾げる。

「うん、私の世界グラニデで今使われてる、マナに変わる代替エネルギーの発生装置の設計書だよ。この世界には必要だからって聞いて、持って来たんだ！」

イアハートの言葉を聞いたアンジュがはっとした表情を見せる。

「ジェイドさんが前に言ってた、星晶に頼らなくてもいい……あの……」

「そう、これは内燃式半永久機関の設計書だ。グラニデでは既に使用していて、全ての民に安全に供給する事が出来る……これが完成すれば、この世界は、星晶の枯渇に苦しむ事も無くなるだろう」

「すごい……もう星晶を巡って国同士が争う必要もないし、採掘の為に人々が駆りだされる事もないし……何より、採掘が止まれば、土地はマナを失わず、やせ衰える事もない……これで、もつと多くの人を救う事が出来るのね！」

ニアタの言葉を聞いたアンジュが感激したように両手を組み、握りしめる。

「ところで、アンジュ。頼みがあるのだが……」

「何かしら？」

「彼女に、この世界を見せたくてね。しばらく、アドリビトムに置いてくれないだろうか？ 腕は保証するよ」

ニアタからの頼みにアンジュはにこつと微笑んで頷いた。

「ええ、お安い御用よ。その代わりに、ちゃんとして働いてもらおうからね」

「わあ!! ありがとうございます! よーし、頑張らなくっちゃ!」

「腕が鳴るね!」

快く受け入れてくれたアンジュにイアハートは嬉しそうにお礼を言い、ルキもぶんぶん腕を振り回す。

「じゃあ二人のギルド登録をしておくわね」

「うん! じゃあイアハート、ロックスにも挨拶しに行こ」

「ロックス?」

「私の親代わりなの! さ、行こう!」

ニアタの説明を受けたアンジュが頷くとカノンノがイアハートの手を握ってそう言い、その言葉にイアハートが首を傾げるとカノンノは笑顔でそう言い、彼女を食堂に引っ張って行く。

「こつちのカノンノも元気だねえ」

「そうか?」

ルキの言葉にカイが聞き返しているとふとアンジュが考えるような表情を見せ、ニアタが「どうした」と尋ねるとアンジュはぼそりと呟いた。

「ねえ、いきなりカノンノが二人に増えちゃったらロックス驚かない?」

「……………あ」

アンジュの言葉に全員が異口同音でそう声を出し、直後カイとルキは食堂に走る。二人が食堂のドアの前に来たその瞬間食堂の中から「ひええええええ!!」というロックスの悲鳴が聞こえ、カイは大急ぎでドアを開け食堂に飛び込んだ。カノンノ二人を見たロックスは驚きのあまり目を丸くしてじたばたと飛んでいる。

「おじよ、おじよ、お嬢様、お嬢様が二人!？」

「落ち着け! ロックス!」

ロックスの焦り声にカイが呼びかけ、ロックスはあわわわわと声にならない声を零す。それにイアハートは苦笑を浮かべ、カノンノも苦笑しながらイアハートを指した。

「え、えと、ロックス。この子はカノンノ・イアハート、グラニデの私なんだ」

「よ、よろしく……………イ、イアハートって呼んでください」

「え、あ、あの、は、はい。ロ、ロックスプリングスです、ロックスとお呼びください」カノンノの言葉にイアハートも苦笑交じりに一礼して名を名乗り、ロックスもようやく落ち着いて自分の名前を名乗った。

「ああ驚いた……………心臓が口から飛び出るかと思いましたよ」

ロックスは名乗った後ほおつと胸を撫で下ろしてそう呟き、カイとニアタは苦笑の声を零す。それからカイはイアハートとルキを見る。

「んじゃあとりあえず、お前らはこの船のメンバーに挨拶してくるといい」

「うん。んじゃ行く、カノちゃん」

「うん」

カイの言葉にルキはそう返すとイアハートを連れて食堂を出て行き、カノンもその後を追う。それを見送ったカイは未だに息を荒げているロックスを見た。

「驚いたか？」

「当たり前です、お嬢様の後ろからもう一人お嬢様がびよこつと顔出したんですよ、本当に心臓止まるかと思いましたが……」

カイの苦笑気味の言葉にロックスは全くもうと呟き言う。それからうんと頷いて気合を入れた。

「それじゃ、イアハート様やグラニデの方のために今日のご馳走を用意しましょうか」

「頑張れよ」

「もちろんです」

ロックスの言葉にカイも応援の言葉を口にし、その言葉にロックスはもちろんと答え  
た。

それからカイはロックス達の邪魔になってもいけないからと甲板で風景を眺めてい  
た。

「やほー」

その後ろから声をかける相手。それにカイはふうと息を吐く。

「なんか用か？ ルキ」

「まね。あんたもディセクターなんでしょ？」

振り向きながらのカイの問いかけにルキはそう言い、背負っていた斧をカイへと向ける。

「お近づきの印に一戦やんない？」

「……喧嘩なら買うぜ」

その言葉にカイも腰の刀をキンと親指で抜きながら、不敵な笑みを浮かべて答えた。

「はい、ちよつとタンマ」

が、そこにイアハートが口を挟み、彼女は腰に手を当ててふんと鼻を鳴らした。

「悪い事言わないから、どこかテキトーな空き地でやった方がいいよ。船を壊したくなければ」

そして彼女は警告するようにそう言い放った。

コンフェイト大森林。ルキからの挑戦を受けたカイだったが、イアハートからの警告

にも似た申し出により彼らはここにやってきていた。カイは片刃で腹部分は中腹から下にかけて黄色く染まっている、やや婉曲した刀——アトア・マタルアの背を撫でて精神を集中するように目を閉じ、ルキは銀色の斧を握りしめて笑みを見せる。

「……本来ならばこのような助言は不公平であろうが、カイ。気を付けておけ」  
「ん？」

カイにニアタが話しかけ、ニアタはルキの握る銀色の斧を見る。

「彼女が身にまとう装備。あれこそレディアントだ」

「ヒトの祖がソウルアルケミーで作ったっていうあれか」

ニアタの言葉を受け、カイは以前ヴェラトローパでジュデイスから教えられた——彼女も石板の情報を読んだだけだが——事を思い出す。

「彼女のいたグラニデではマンダージの民という先住民が作ったものだが……既存の武器を遥かに超える武具であることには変わらない」

「ご忠告ありがとうございます」

カイはニアタの忠告に一言礼を言ったのみで彼の事を意識から消し、ルキとの模擬戦に集中。ニアタもふつと一つ笑い声を漏らすとその場を去った。

「二人とも、準備はいいね？」

立会人を申し出たクレス——観客という意味なら他のメンバーも大体やってきてい

るのだが——の言葉に二人とも黙って頷く。

「じゃあ、模擬戦を開始する」

クレスはそう言い、右手を挙げる。

「始めっ!!!」

「っしやああああああああっ!!!」

「!?!」

クレスが合図を出し、右手を勢いよく振り下ろした瞬間、ルキの咆哮が響き渡り同時に彼女は地面を蹴ってカイ目掛け突進。右手の斧を振り上げるとその突進の勢いのまま振り下ろした。

「っ!?!」

いきなりの先制攻撃に面食らったカイも咄嗟に後ろに飛んでその斧をかわす。振り下ろされた斧は地面を砕き、クレーターを作り上げた。

「つぶねえ……」

一発で地面を叩き割るような一撃を見たカイの頬に冷や汗が流れるが、ルキは息をつかせる間も与えず斧を振るい、カイも刀で防御を開始した。

「……あの戦士。華奢に見える身体に似合わぬ怪力だ」

観戦をしているヴァンが眩き、カノンノが彼に目を向ける。ヴァンは先ほどルキが作

り上げたクレーターを見た。

「たった一発で大地を抉る一撃、生半な力だけで出せるものではない。あの武器の重量はもちろんのこと、それを操る彼女の力も相当なはず……まともに打ち合えば私でもたん」

使い手を選ぶ大剣さえルーク達の振るう片手剣と同じように振り回す怪力を持つヴァンでさえそう評価するルキの怪力。それにカノンノは頬を引きつかせた。

「だが、流石はカイと言ったところか。まともに打ち合えば負けると分かり、受け流しを徹底している」

ヴァンの言葉通り、カイはルキの放った一撃から彼女の力が自身を上回っていることを悟ったのか相手の攻撃を真正面から受け止めることなく、その衝撃を逃がしながら回避に専念していた。

「どっせいっ!!」

打ち下ろされた斧をカイは刀で受けつつ受け止めようとはせずにその勢いを利用して後ろに飛び、間合いを開ける。

「苦無閃!」

そのまま左手を懐に入れ、取り出した苦無を投げつける。だがルキはそれを左腕に装備している盾で受け止めた。



「チツ」

カイは舌打ちを叩き、左手に広がる森林に目を向けるとその中に飛び込んだ。

「逃がさないよ!!」

ルキもすぐさま後を追う。

「どっせい! 爆碎斬!」

斧を地面目掛けて撃ち込み、地面を割って岩をまき散らす技——爆碎斬により、石礫がカイを襲う。しかしカイはそれを辺りにどっしりと存在する木々を壁にしながら縦横無尽に動き回り、ルキを攪乱していた。

「忍法、影分身の術!」

いや、それだけではない。カイは己のmanaを具現、二体の分身を作り出して別々の方  
向からルキに襲い掛かる。

「へへ、面白い技使うじゃん」

が、ルキは不敵に笑って斧を構えると身体を捻る。

「裂旋破!」

勢いをつけて斧を振るい、その斧の刃を受けたカイの一人は分身だったのか霧散。しかし背後を取ったカイの一人が刀を振り上げた。

「甘いつ!」

だがルキは回転の勢いを利用して振り返りながら回し蹴りに繋げ、その蹴りをくらったカイも勢いよく吹き飛ばされるが地面に叩きつけられると同時に霧散する。

「取った!」

「おっと!」

再び死角からルキを狙うカイ。しかしルキは斧をぶんと一振りして牽制し、そのままの勢いで反撃開始。カイの刀とルキの斧がぶつかり合うキンキンという音が響く。

「せいっ」

「つと!」

ぶんと逆袈裟懸けに振り下ろされる斧をカイは刀で受け流すが、その斬撃は威嚇や牽制目的のものであり、わざと受け流させて隙を作らせたところにルキは前蹴りを蹴り上げ、カイの顎をかち上げる。

「ぐっ!」

「もらった!」

顎を蹴り上げられたカイはふらついて動きが止まってしまい、ルキは斧で薙ぎ払う。が、その瞬間カイの姿が霧散。ザクツと嫌な音が響いて斧が止まる。

「ふえ?」

ルキはぐいぐいと斧を引っ張る。だが、その斧はカイの分身のすぐ後ろにあった大木

に見事に食い込んでしまっていた。

「斧がーっ?!?!」

「隙あり!」

悲鳴を上げるルキとその隙を狙い木の後ろから、肉厚であり幅広の左右対称となった両刃の短剣——グラディウスを構えて飛び出すカイ。そう、あの三人は全て分身。カイは分身に戦いを任せて身を潜め、この機を狙っていたのだ。

「もらった!」

斧が使えず、反撃できないルキ目掛けてカイは短剣を突き出す。その刃は人体の急所、首を的確に狙っていた。

「っ!!!」

が、ルキは斧から手を離すと上半身を反らした突きを回避。

「でりやっ!!」

「づっ!?!」

そのまま上半身を反らした勢いでサマーソルトキックをカイの右腕に打ち当て、彼の手からナイフを弾き飛ばす。

「ぐあっ……」

「そいやあっ! 幻竜拳!」

腕を蹴り上げられ、走る痛みと痺れに苦悶するカイ目掛け、宙返りから体勢を立て直すと同時に拳を構え、突進。鋭い右ストレートを放つ。

「つつー！」

が、カイは痺れる右腕で防御は困難と判断したのか左手で右ストレートを逸らす。

「ほっ、せやつー！」

が、ルキは拳だけではなく蹴りまで交えた体術を披露。左ハイキックと見せかけて上から下へと蹴り下ろし、それをカイが小ジャンプでかわすとルキは身体を低く伏せて回転。着地際のカイの足に右足で足払いをかけ、カイが体勢を崩して倒れると彼女は素早く立ち上がって身体を捻り、ジャンプ。

「崩襲脚！」

「つつー！」

足を叩きつけ、踏みつけるような一撃をカイは横に転がってかわすが彼女の蹴りが入った地面が割れる。まともにくらうわけにはいけない威力にカイは齒噛み。右手をぐつと握る。

（やつと痺れが取れたか……）

右手をぐーぱーと閉じ開きさせ、痺れが取れたことを確認したカイは、右手を蹴られた時にどこかに吹っ飛ばされたグラディウスの回収を諦め、腰の鞆に収めていたアト

ア・マタルアに手をやる。その間にルキも大木に食い込んだウォーリアアクスの方へ移動していた。ぐいぐいと斧を引つ張るが、元々自分の力で木に打ち込んでしまったためかなかなか外れる様子を見せない。

「……しゃーない」

ルキはふうと息を吐き、ウォーリアアクスをさらに力強く握りしめる。

「剛招来！」

めき、と音を立てて彼女の筋肉が脈動。内なる力を呼び覚まし、強化した腕力を使ってウォーリアアクスを力づくで引っこ抜きどすんと肩に担いだ。

「さあ、第二ラウンドと行こうか？」

左手でくいくいと挑発するように動かすルキだがカイは挑発に乗る事なく鞘に収めたままの刀に手を添えて居合いの状態を崩さず、目を細めてルキの一挙一動を見定めようとしていた。

「……しゃーないなあ」

ルキはつまんなそうにため息をつくど地面を蹴り、カイ目掛けて突進するとその勢いを込めて斧を振り下ろす。

「ぜあっ!!」

が、カイはその太刀筋を見切って抜刀、彼女を一刀の元切り伏せんとする。

「双——」

しかしルキはそれを見越していたのか、もう一步踏み込む。

「——牙掌！」

斬撃がルキの胸を斬りつつも刃が彼女の身体を深く裂く前に放った左の拳がカイを殴り飛ばす。だがカイは殴り飛ばされたのを利用して木の枝に掴まるとそのまま身軽に枝の上に乗る。

「よし！ 大木ならそうそう倒れはしない！ 今の内に体勢を立て直すんだ！」

観客の一人であるスタンが歓声をカイに向ける。

「ふふふ……」

が、イアハートが不敵な笑みを浮かべた。

「皆……忘れてもらっちゃ困るよ？」

イアハートはルキを見て、言葉を紡ぐ。

「ルキは不可能を可能にする者だよ？」

「どっせーいっ！！」

イアハートが自信満々にそう言うのと同時にルキがカイが乗っている木目掛けてウオーリアアクスをぶつける。ズドゴンという轟音が響いたかと思うと、少し遅れてメキメキという嫌な音が響く。

「な、おわああああああつ?!?!」

ルキはカイが乗っていた大木を一撃でへし折り、カイは悲鳴を上げながらもただ落下するのではなく近くの木を蹴り、また別の木を蹴って移動しながら着地。

「どっせいやつ!!」

「うおっ!!」

着地際を狙いウォーリアアクスを横に薙ぎ払うルキ。それをカイは前方にルキを飛び越える勢いのジャンプでかわすが、その斧の軌道上にあった木に斧が直撃。またも木がへし折られとまではないかないもののメキメキと嫌な音を立てて傾き、ルキが「ふんつ」とちよつと力を入れて引つ張ると食い込んだウォーリアアクスは苦もなく引き抜かれる。

「くそ……作戦台無しじゃねえか」

カイはルキが斧を振り回せないように、または斧を振り回した結果木に刺さって使えなくなるなどの効果を見込んで障害物の多い森の中に誘い込んだらしいが、その木を力づくでへし折り木に食い込んだ斧をあつさり引き抜かれるようになると作戦自体が瓦解してしまう。

「チッ」

カイは舌打ちを叩くとルキから距離を置いたまま走り出し、ルキもその後を追う。そ

のまま二人は森を飛び出した。

「ありや、小細工終わり?」

「テメエみたいなふざけた奴に策を弄するのがバカらしくなった……真正面から、こいつで勝負だ」

ルキの言葉にカイは刀を構えながらそう言い、それにルキはひよいと肩をすくめて呆れた顔を見せる。

「あんたもこんぐらい出来ないと世界なんか救えないけどね」

世界を救う事を使命として生まれた希望の使徒、デイセンドー。かつて世界を救ったその先達としてそう言うルキ。だが続けて彼女は好戦的に笑い、口の中から歯をまるで牙のように覗かせる。

「まあ、こいつで勝負ってんなら話は早いけどさ」

そう言い、右手で斧を一振りするとなんと斧の柄が伸び、片手用の斧が両手用に早変わり。ルキはくるんくるんと斧を弄ぶように回すと両手でぐつと握り締めた。

「影走斬!!」

最初に仕掛けるのはカイ。瞬時に距離を詰め、抜刀から一撃を見舞うがルキはそれを斧を使って防ぎ、ぶんと勢いよく振るって逆にカイを弾き飛ばした後斧を一回転。

「爆碎斬!」



その回転の勢いも込めて地面に斧を叩きつけ、地面を砕き石礫を前方に放射線状に放つて牽制する。が、弾き飛ばされたカイは着地と同時に再び地面を蹴り、くるくると回転しながら宙を舞う。

「曼珠沙華!!」

そのカイの手から燃え盛る苦無が放たれ、石礫に当たって弾かれ近くに木に突き刺さるとぶすぶすと煙を立てて炎は鎮火する。

「何人たりとも、止められないよー!」

と、ルキがずうん、と大きく四股を踏むように足を踏み込み、前傾姿勢を取る。

「割破爆走撃!!」

ドン、と勢いよく地面を蹴つてタツクル。斧を前に突き出しての突進の重圧にカイはその場を飛び退くが、ルキの進行上にあつた木にルキがぶつかると、木はメキメキと音を立てて倒れていく。

「ちえ、外したか」

「巨大なボアかお前は……」

ニヤリと牙を見せながら笑うルキにカイはツツコミを返す。

「ぬりゃあつ!!」

「つと!」

が、そこにルキが斬りかかるとカイも刀で斧を受け流し、続いての斧の一撃も再び受け流すという剣劇が開始。ルキの斧は受け流されるがカイの方も受け流しに精一杯で反撃のタイミングを掴めない様子だ。

「はあっ!」

「甘いつ!」

しかし攻勢に出ようと刀を振るうカイ。だがルキもそれを斧で防ぎ、鏝迫り合いの後二人は弾かれたように距離を取る。

「チッ!」

「ふうっ」

カイは素早く刀を鞘に収めると居合いの構えを取り、ルキは斧をずっと自分の横に立てて仁王立ちの構えになると互いに目を閉じる。互いに己の気を練り、心身を集中。次の一撃に全てを賭けるようだ。

一瞬の間の後、互いに同時に目をカツと見開くと二人から尋常ならざるオーラが放たれる。限界突破だ。オーバーリミットそして互いに地を蹴り突進。

「暗殺術・滅殺!!!」

「斬!!!」

一瞬の交差の後、先ほど互いが立っていた場所の距離まで離れる二人。ヒュンヒュン

という風切音が上の方から聞こえ、その風切音は徐々に地面へと近づくとサクツという何かに刺さった音がして止まる。

「……俺の、負けか」

カイはそう呟き、どさりと倒れ伏せる。その右手に握るアトア・マタルアは刀身が半分より先が失われていた。

「カイツー！」

カノンノが大慌てで駆け寄り、イアハートがルキに「手加減しなさいバカ！」とお叱りを飛ばしながらカノンノに続き、さっきの斧の一撃が刀をへし折っただけではなくカイにまで刃を届かせたのか流血しているカイを見る。

「イ、イアハート、どうしよ、カイが、カイがつー！」

「落ち着いて、グラスバレー」

あわあわと慌てているカノンノにイアハートは安心するように呼びかけ、カイに手をかぎす。

「命を育む女神の抱擁、彼の者に聖なる恩恵を……キュア」

かぎした手から光が溢れ、その光を浴びたカイの傷が癒えていく。

「よかった………凄いな、イアハート！」

「いやあまあ………相方があんなだからさあ」

カノンノがカイの無事に安堵し、満面の笑顔でイアハートを褒めると彼女は苦笑交じりにそう言うってルキを見る。

「ルキって敵と見ればすぐ突っ込んでくし防御や回避はするけど基本倒れるまでに倒せばいいなノリだから……私も前衛で戦うよりも後衛でサポートするのが癖づいちゃったんだよね……そしたらいつの間にか魔術の腕が上がっちゃって」

「なるほど……」

あはは、と苦笑気味に言うイアハートにカノンノも納得したように苦笑する。

「ふむ、応急の治癒は終わったようだな」

「あ、ヴァンさん」

「では彼は私が船まで運ぶとしよう」

と、既に治癒が終わったのをヴァンが確認。彼がカイをおぶり船まで連れて行くことと申し出るとカノンノも「お願いします」とぺこりと頭を下げ、ヴァンの隣を歩きながら、気を失ってはいるものの安らかな寝顔を見せているカイを見てふふつと微笑む。

「……なんか、ああいうのいいなあ」

イアハートは穏やかな雰囲気を見せるカノンノを見てどこか羨ましそうな声を漏らす。

「あの二人、なかなかいい感じでしょ？」

「あ、ルーティさん」

と、森に来たついでに珍しいキノコだの薬草だのを探していたらしいルーティが膨らんだ袋を肩に担ぎながら合流。にやにやと笑う。グラニデでもゲーデとリリースをからかっていた時と同じにやにや笑顔を見たイアハートは苦笑する。

「世界が違っても、皆根本は同じなんだって分かるわ」

「ん？ どゆこと？」

「いえ、こちらの話です」

イアハートの呟きにルーティが首を傾げると、イアハートはそうお茶を濁して船に戻ろうとさつきヴァン達が歩いていった方に後を追うように歩いていく。ルーティは不思議そうな顔を見せながらその後を追いつき出した。

## 第三十二話 輝きの勇者達のとある一日

ルミナシアのとある港町。カイはアドリピトムに寄せられたクエストを終えた後、帰りの道の道中にあるこの港町に少し寄り道をしていた。

「くあく。しつかしギルドってのは自由でいいよなあ、軍だと任務の最中にそうそう寄り道もできやしねえし」

伸びをしながら笑顔でそう言うのは鶯色の髪をした格闘家——ウリズン帝国からの派遣兵士であるステイサムだ。すると黒髪に何故か王冠を乗せた少女——ロツタが彼に冷たい目を見せる。

「それならとつと軍を辞めてギルドに入ったら？」

「おつとそりゃ勘弁。軍の方が給料いいしな」

「そうなのか？」

ロツタの言葉にステイサムはにししと笑う。と、給料という言葉にカイが反応した。

「おう。まあギルドってのは規模にもよるから一概には言えねえけどな」

「ギルドは民間経営なのに対して軍はやっぱり国がやってるからね。給料が高いというよりも安定してるっていう方が正しいかしら」

ステイサムとロツタはギルドと軍の違いについて説明。もう一人の同行者であるカノンノが「へ〜」と頷いた。

「なんならカイもカノンノちゃんもウリズン帝国軍に志願したらどうだ？ 二人ほど強けりやぜつてえ採用されるぜ？」

と、ステイサムが目をキラキラさせながらカイとカノンノを軍にスカウトし始める。

「え、えーと……遠慮しようかなあ……」

「俺はアドリビトムを離れる気はない」

が、カノンノは苦笑気味に、カイはきつぱりとスカウトを断る。

「そーかよ、ちえっ」

ステイサムも本気ではなかったのか食い下がる事もなく両手を頭の後ろに回し、唇を尖らせるだけで話を終える。と、彼は露店に目を向けて「おっ」と声を出した。

「わり、俺ちよつとその辺で買い食いしてから帰るわ。あとよろしくっ！」

「あ、ちよつとこらー！」

ステイサムはそう言うや否や道端に並ぶ露店に買い食いしに走り、ロツタが注意するが止まる気配はない。

「……ったく」

ロツタは悪態をついて歩き出し、カイとカノンノも苦笑を漏らしながらその後を着い

て行った。

「あ、ロツタ。お帰りなさい」

「二人もお帰り！」

港に停泊していたバンエルティア号。その甲板に上がると本日の甲板掃除の当番であるユンとコハクがモップを手に出迎える。カノンノとロツタも「ただいま」と返した。「ねえ、もう掃除終わったの？ 暇だし手伝おうか？」

「ん〜と……じゃあお言葉に甘えて。私ちよつと中に用事あるから、お願いしていいかな？」

「うん！」

カノンノが掃除の手伝いを申し出るとコハクは中に用事があると返答してお願い。カノンノが笑顔でそれを了承するとコハクはカノンノにモップを手渡そうと彼女に歩き寄る。

「あ、コハクさん。その辺はまだ濡れて……」

「え？ きやつ!?!」

ユンが呼びかけるのと、ユンが注意した地点を踏んだコハクが足を滑らせてバランス



を崩すのは同時だった。

「おっと！」

だがカイがすぐに駆け寄り、コハクを抱きとめるようにして押さえる。

「あ、ありがとう……」

「気にするな」

カイはコハクを右手で抱き押さえる形になっており、足を滑らせてしまった恥ずかしさや照れからかやや頬を赤くするコハクにカイはそうとだけ返す。と、その時カイは船内から鋭い殺気が飛ぶのに気づき、さらにその直後船内から何かの勢いよく飛んでくる。

「はっ！」

カイは飛んできた物体からコハクを庇うように後ろにやりつつ、左手一本で腰の左側に下げていた刀を逆手で抜いて振り上げ、飛んできた物体を弾く。と、その物体は霧散。どうやら何かのエネルギーで作られた弾丸らしい。

「ちよ、カイ待っ」

飛んできた弾丸を見たコハクが慌て出してカイに呼びかけるが、その前に船内から再びエネルギー弾が次々と放たれる。

「カノンノ、コハクを頼む！」

「あ、う、うん！」

カイはカノンノにコハクをやや乱暴に投げるように託し、左手に握っていた刀を右手に持ち替えると弾丸を次々と弾いていく。

「くおおおおらあああああ!!!」

そして弾丸の雨が止んだかと思うとそんな怒号と共に黒髪長髪で背の高い男性が怒りに燃えた目で船内から飛び出し、カイにガンをつける。

「デメエ、コハクに近寄るんじゃねえ!!!」 コハク！ もう大丈夫だからな!!!」

「もう……」

男性はカイにガンをつけた直後コハクに呼びかけ、しかしコハクはむしろ恥ずかしそうに顔を手で覆っていた。

「……コハク、知り合いなの？」

カノンノがきよとんとした様子でコハクに尋ね、コハクは小さくこくり、と頷いた。

「えつと……私のお兄ちゃん」

「あーお兄さんかあお兄さん……お兄さん？」

コハクの言葉にカノンノはうんうんと頷く。が、直後ドスの効いた顔をしている長身の男性を見上げる。

「ええええええええつ?!?!」

直後カノンノの驚愕の悲鳴が響き渡った。

「俺はヒスイ。ヒスイ・ハーツだ。あつと、コハクが世話になつてゐてえだな。ありがとうよ」

「あ、は、はい。えつと、カノンノ・グラスバレーです……」

落ち着いた後、男性——ヒスイは己の名前を名乗った後、カノンノに対しコハクが世話になつてゐる事に対する感謝の言葉を投げかけ、カノンノも曖昧に頷いて名乗った後に首を傾げる。

「えつと、それでその、ヒスイさんはなんでここに？」

「ああ。話せば長い事になるが……」

「一言で言うると、私が誘拐されたつて勘違いしてこのギルドに私の搜索依頼を出しに来たそうなの……まったくもう、ほんと恥ずかしいんだから」

カノンノの質問にヒスイは神妙な顔をして語り始めようとするが、すぐにコハクが一言で説明。恥ずかしそうに顔に手を当てる。

「なんだよ、兄が妹を心配する。ごく当たり前の事じゃねえか……こんな悪い虫がくつつくかもしれないえだろ！」

「……俺？」

ヒスイはそう言つてカイをびしつと指差し、カイは不思議そうな表情でそうぼやく。

「カ、カイはそんな人じゃないよ！ カイにはカノンノがいるんだからそんな失礼な事言わないで！」

「コ、コハク何言つてるの!?! わ、私とカイはそんなんじや……」

失礼なヒスイにコハクは毅然と言い返し、だがその中の一言にカノンノは慌て出す。

「つていうか」

コハクはヒスイを睨みつけ、その睨みにヒスイが怯む。

「ぐふっ!?!」

直後ヒスイの腹にコハクの蹴りが突き刺さり、彼は吹き飛ぶと甲板に叩きつけられる。正に無言の腹パンならぬ無言の腹キックだ。

「喧嘩はダメつて……いつも言つてるよね？」

そしてコハクはにっこり笑顔で、甲板に倒れ伏すヒスイにそう呼びかけたのであった。

「ヒスイ！ アンジュさんがアドリビトムへの入団申請が終わつたつて！ あ、カイにカノンノ、ロツタもお帰りなさい」

するとその時シングが船内から顔を出してヒスイに呼びかける。

「ん？ アドリビトムに入るのか？」

「おうよ。妹を、コハクを守るのは兄である俺の役目だからな！」

カイの言葉にヒスイは立ち上がってそう宣言する。

「もう、ヒスイは心配性だなあ」

が、シングは呆れたように笑ってコハクの横に立つ。

「コハクはこの通り、俺が全力で、しっかりと！ 守ってるってのに！！」

「だから、それが全力で心配だって言ってるんだッ！」

シングの言葉に対しヒスイは怒号を上げて突進、「おら離れろッ！」とシングとコハクを引き離し、シングにしっしっしと手を振る。

「てめえとコハクを二人つきりになんて絶対させねえからなッ！」

そしてびしっしとシングを指差して宣言。コハクはまた呆れたようなため息を漏らした。

「まあえつと……カイ、手伝って欲しい事があつたらいつでも呼んでね。こう見えてお兄ちゃんも、結構頼りになるんだよ」

一応ヒスイのフォローに回るコハク。するとシングもそのフォローに気づいたのかうんうんと頷いた。

「そうそう。枯れ木も山の賑わい……ってね！」

「てめえ!! 意味わかって言ってるのか!？」

「あ、あれ……何か違った？」

シングの言葉にヒスイが怒号でお返しするとシングは引きつった笑みを浮かべてそう返すのであった。

「えーと、ひーふーみー……これとこれを買ったから次は……」

「カノちゃん、まだー？」

一方バンエルティア号が停泊している港町。イアハートはルキと共に買い出しにやってきていた。ちなみにイアハートは買い出しメモを確認しながら町の全体図とにらめっこし、荷物は全てルキが持っているのだが両手に抱える程の荷物を苦もなく持っている辺り流石の怪力である。

「はいはいちよつと待って。これはあの店として、これはここの店に売ってるだろうか……」

ルキをあしらいながらイアハートはどこで何を売っているのかを再度確認する。そして道順を決めたのかうんと一つ頷き、メモを見ながらくると踵を返し歩き始める。

「きやつ!？」

だが前方不注意だったせいで他の歩行者とぶつかり、そのまま尻もちをつく形で倒れてしまう。

「すまない、大丈夫か？」

「あ、こちらこそすみません」

が、すぐにぶつかってしまった相手が謝罪しながら手を差し伸べてきたためイアハートも反射的にその手を取りながら謝る。

「！」

と、その相手は自分の顔を見て驚いた様子を見せており、イアハートは首を傾げた。

「どうかしましたか？」

「あ、ああ……いや、知り合いに似ていたものでな。失礼」

イアハートの疑問の声に相手はそう言って一言謝罪、イアハートは相手に立たせてもらってからもう一度ペこりと頭を下げる。

「その、ありがとうございます。それとすみませんでした」

「気にしなくても構わない。我も前を見ていなかった」

イアハートの謝罪の言葉に相手も気にするなど返し、イアハートは頭を上げるとそこでようやく相手をちゃんと見る。キリッとした吊り目に凜とした顔立ちや綺麗な姿勢はまるで騎士のようだが何故か右目には眼帯をつけており、すらっとした体型だが大き

く膨らんでいる胸が相手が女性であると主張している。

「……」

そこを見てイアハートはつい自分の胸を見てしまった。

「どうかしたか？」

「あ、いえなんでもありません！ その、失礼します！」

不思議そうに見てくる眼帯の女性に対しイアハートはそう言い、やや引きつり気味の笑顔を浮かべてぺこつと頭を下げ、「ほら行くよルキ！」と言つてすたすたと足早に去っていく。

「……？」

眼帯の女性も不思議そうにそれを見送るが、やがてまあいいと呟く。

「さて……名物の菓子屋というのはどこにあるのか……ラザリス様の口に合えばいいのだが」

そして眼帯の女性——ジルディアディセンドーことレイはそう呟いて町の全体図とにらめっこを始めたのであった。

「ふう、びつくりした」

「ん〜……」



レイから離れてからイアハートが呟くが、ルキは話を聞かず考える様子を見せる。  
「どうしたの、ルキ？」

「ん、いや……さっきの女の人、なんか妙な感じがね……ま、いつか。細かい事は気にしない」

「そうそう。さつさと買い物済ませて帰っちゃお」

イアハートとルキはそう話しながら歩いていく。

「おろ？」

「どうしたの？」

と、ルキが変な声を出し、前を歩いていたイアハートが振り返る。

「んにや、あれアルヴィンじゃない？」

「ん？」

ルキがそう言い、両手が荷物で塞がっているため顎で示しイアハートもそつちを見る。そこにいるのは確かにアルヴィンだ。ローブで顔を隠している誰かと何か話している様子で、しかしもう話は終わったところなのか二人は互いに背を向けると離れていく。

「おーい、アールヴィン！」

「うおっ!？」

ルキが大声で呼ぶとアルヴィンはびくつというような感じの反応を見せ、ルキとイアハートを見てほおつと息を吐く。

「なんだ、お前らか……買い物か？」

「うん、買い物当番だし」

「アルヴィンはどうしたの？」

アルヴィンの言葉にルキが肯定、イアハートが首を傾げて問いかける。と、アルヴィンは苦笑いを見せた。

「まー、いや、そのな……男には色々あるもんなんだよ」

そしてキリツとした顔でそう言ってみせる。

「へー」

が、当の二人からは冷たい目で見られるのであった。

「あー、まあ、ちよつと用事があったただけでな。んじや、俺はこれで  
そう言い、アルヴィンはすたすたと妙に足早に去っていく。

「ルキちゃん、イアハートちゃん」

「んお？ あ、今度はゼロスだ」

「フォックスさんも、こんにちは」

「ああ。買い出しご苦労様」

と、さらに声をかけてきた男性——ゼロスにルキが返し、イアハートはゼロスと一緒にいるフォックスに挨拶を返す。ゼロスはどこか焦ったような顔をしており、フォックスは対照的に色黒な肌に爽やかな笑みを浮かべている。

「ところで、買ひ物はまだ残っているのだろうか？」

「え？ あ、はい」

「なら、俺とゼロスも手伝おう」

「「えっ!?!」」

フォックスの申し出に驚いたような声を出すのはイアハートとルキ、そして何故かゼロスだ。

「驚く事は無いだろう？ 女性を助けるのは当然だ。なあ、ゼロス？」

「あ……ああ、そ、そうだな」

フォックスの言葉にフェミニニストであるはずのゼロスはどこか歯切れの悪い様子で頷いており、フォックスはルキの持つ荷物を取るとそのままゼロスにパスする。

「のわ、ちよ、重っ!?!」

いきなり渡された荷物の重さにふらつくゼロスだがフォックスは気にすることなく自分ではふらつかない程度の荷物を持つ。

「では行くか」

「あ、はい……」

フォックスの言葉にイアハートもこくりと頷き、イアハートを先頭にルキが続き、その次にゼロス、最後にフォックスが歩いて彼女らは買い出しを続けていった。

「あいててて……」

一方闘技場。腕に自信のある戦士達が時には一人で、時には信頼できる仲間と共に、時にはちよつと気が合った同志と共に魔物やまた別の戦士達と真剣勝負を行う場。金髪のツンツン頭の少年——カイル・デユナミスは腕に傷跡を残しながら、闘技場の戦場から退場していた。

「だ、大丈夫か、カイル？」

「大丈夫？……」

同行していた彼の兄貴分——ロニと、仲間であるリアラがカイルに問いかける。それにカイルは「ああ、大丈夫大丈夫」と返した。

「あー。やっぱり俺ってまだまだだなあ……でも、ここのチャンピオンに挑戦するっていうスタンさんはやっぱりすごいや！」

「そうだな……」

カイルの言葉にロニが頷くと、この闘技場の支配人——モルモが「これよりこの闘技場のチャンピオン、マイティ・コングマンと挑戦者スタン・エルロンのエキシビジョンマッチを開始しまーす」という声を響かせ、観客達が大きく盛り上がりを見せている光景を見る。

「遅れて申し訳ありません」

と、戦いで怪我をしてしまった選手を手当てするための看護スタッフがやってきたらしく、カイルとロニは声の方を見る。そこに立っているのは救急箱を携えた、オレンジ色のふわふわとした髪が特徴的で、瞳の色はまるで世界を照らす太陽のような優しげに光る赤眼の、華奢な身体に看護服を着た人物だった。その女性的な顔立ちでのぼげな微笑にロニはもちろん一瞬カイルですら見惚れてしまう。と、カイルが見惚れたのにリアラがむっとした表情を見せた。

「えっと、カイル君、ですよね？ 怪我の場所は？」

「あ、は、はい！ えっと、右腕です。それと脇腹と……」

「えーつと……あ、ここですね。今薬を塗って包帯を巻きますから。じつとしてください」

怪我の場所を聞かれたカイルは我に返って怪我した場所を教え、看護師も怪我の場所を確認すると手際よく薬を塗り、包帯を巻いていく。

「な、なんか手馴れてますね……ここのお仕事とか長いんですか？」

「あ、いえ。この仕事を始めたのは少し前で、ここで住み込みで働き始めたんです。まあ看護というか治療の経験は長いですが」

「住み込み？……って事は、もしかして戦争で……」

看護師の話聞いたカイルはもしかして戦争で家や帰る場所を無くしてしまったのではないか、自分は聞かれたくない事を聞いてしまったのではないかと焦ってしまうが、看護師は穏やかに微笑む。

「いえ、ちよつと説明がし辛いんですけどね。モルモ……この闘技場の支配人とは旧知の仲で、行き場のない僕達をスタッフとして雇ってくださったんです」

「そうだったんですか……」

看護師はそう説明し、治療を終える。

「これで大丈夫だと思いますが」

「んーつと……」

カイルは立ち上がり、少し屈伸したり腕をぐるぐる回したり身体を捻ってみせる。

「うん、大丈夫です。ありがとうございます」

身体の確認を終えたカイルはぺこりと頭を下げる。それに看護師もよかった、と微笑む。

「あの、実は俺も少し治療をしていたのですが……」

「はい？ え？ えっと、あなたも参加していたんでしたっけ？……」

突然ロニが口を開き、看護師は呆けた声を漏らす。

「いえ、実は先ほどあなたを見た時、私のハートが撃ち抜かれてしまったのです。どうか私とお付き合いをし、このハートの治療をお願いいたします！」

ロニは看護師の両手を取って口説き始め、カイルとリアラが「また始まった」とぼやく。

「え、えーっと……す、すみません。その治療は出来ません」

看護師の申し訳なきように笑いながらの言葉にカイルは「あ、またフラれた」と呟き、ロニががーんとした表情を見せる。

「あ、いえいえ違います！ その、付き合うのは無理ということ……」

すると看護師は慌てた様子を見せ、その様子を見たリアラが何か察したような表情を見せる。

「あ、もしかして、もうお付き合ひしてる方がいらつしやるとか……」

リアラはどことなくわくわくした様子で尋ね、しかし看護師は「そういうわけでもなくって」と呟いて頬をかく。

「あの、僕そういう趣味はないから……」

「「……………はい？」」

看護師の言葉に三人の呆けた声が重なる。

「いえ……………僕、男なんですけど」

直後の看護師のさらなる言葉に三人が固まった。

「ミアハー！ 次の患者さんがもうすぐ来るよー！ 結構重症だから手伝ってっぺー！！」

「あ、うん、分かった！ すみません、僕はこれで」

女の子の呼び声を聞き、ミアハと呼ばれた看護師は頷き、カイル達に一礼をすると走り去っていった。

「おと、こ？……………」

「と、とつても綺麗だったのに……………自信なくすなあ」

「そ、そんな！ リアラだつてとつても可愛いよ！」

「カイル……………」

「リアアラ……………」

ミアハの正体にカイルが啞然とし、リアアラは相手が男の娘だったという事実にしよんぼり、それに慌てたカイルがリアアラを元気づけるとカイルとリアアラは互いの名を呼んで二人だけの世界に入る。



「……」

その横でロニは未だ硬直していた。

「ごめんごめん、お待たせ。ちよつと絡まれちゃつてた」

「あはは。男の人？」

「うるさいなあ……」

ミアハはさつき自分を呼んだ桃色の髪の少女に謝り、それに少女が笑いながら慣れたように悪戯っぽく問いかけるとミアハは唇を尖らせる。と、桃色の髪の少女はミアハの後ろに回り込んだ。

「はいはい。早くみんなのお手伝い！ 後で食事持つていくからね」

「うん、よろしく」

ミアハの背中を押しながらの桃色の髪の少女の言葉にミアハはよろしくと言つた後、思ひ出したように「それと」と続けた。

「僕達、明日シフト空いてるのでいいんだよね？」

「うん。いつものように登録しとく？」

「お願い。やっぱ腕が鈍るのはまずいしね」

二人はそう話し、桃色の髪の少女は「りょーかいっ」とおふぎの敬礼を取つた。

「じゃあ明日のチーム戦、登録しておくね。登録人数は私とミアハの二人で、チーム名はいつものように『チーム・テレジア』」

桃色髪の少女はそう言っただけで走り去っていく。

「お願いねー」

その後ろ姿に向けて、ミアハは呼びかける。

「カノンノー」

カノンノ、と。

## 第三十三話 砂漠での決闘、風の青年VS創造の勇者

灼熱の太陽が照り付ける広大な砂の大地、カダイフ砂漠。カイは仲間と共にそこをやつてきていた。

「えーつと、ここにリングスポットがあるんだよね？」

同行者の一人であるコハクが尋ねながら、リングスポットに宿る自然の息吹を吹き込む対象であるソーサラーリングを見る。

「今回目指すリングスポットは、カダイフ砂漠奥地の赤い水が湧く、〃赤のオアシス〃という所にある」

コハクの確認の言葉に対し説明を行うのはクラトスだ。

「だが、赤い水に不吉を感じた当時の者達が赤のオアシスに近づけぬよう壁を作り封じている。目的を果たすためにフィリアから爆弾を借りてきている。一応私が預かるが、くれぐれも取り扱いには注意しろ」

クラトスがそう言い、爆弾を専用の頑丈な箱に嚴重にしまい込む。と、もう一人の同行者であるコレットが「ねえねえ」と話しかけた。

「これから行く赤のオアシスって、どんな所だろ？」

「大昔の人が不吉に思ったくらいだから、血の色かもしれないよ」

「そっかあ。いちごのジャムみたいな水だったらしいのね。一杯取って、好きなだけアイスやヨーグルトにかけたり出来るから」

コレットの言葉にコハクが先ほどのクラトスの発言を思い出しながら言うところにはどこかずれたような発言を行う。と、コハクの目が輝いた。

「ジャムかあ。わたしだったら、赤ミソがいいな！ 赤くておいしそうなものって、他に何かあるかな？」

「うーん……意外と思いつかないね」

コハクとコレットがきやつきやつと談笑しながら歩き、その前をカイとクラトスが歩く。そしてクラトスの先導で赤のオアシスがある帰らずの荒野を歩いていた時、突然銃声が響いたかと思うとカイの足元に銃弾が着弾。全員が咄嗟に構えを取って銃声のした方を向いた。

「外したか」

銃声をした岩山の上に誰かが立っている。それは分かるのだが照り付ける太陽を背にしているせいで顔が分からない。

「デメエか、レイ」

だがカイがいち早く襲撃者の正体を言い当て、岩山の上に立つ襲撃者はフンと鼻を鳴

らすと岩山から飛び降りてカイ達と対峙する。その姿はカイの言った通りジルディアのデイセンダー——レイだった。

「レイ!!」

「久しいな、ルミナシアのデイセンダー。そしてアドリビトム」

「何故お前がここにいる?」

コハクとコレットが驚いたように声を上げ、レイが冷笑を浮かべながら挨拶を返すとクラトスがそう問う。

「全てはラザリス様のお心のままに」

レイはクラトスの問いに対してそうとだけ答え、ギロリと眼帯で隠れていない左目でカイ達を睨みつけた。

「貴様らの目的は知らん……だが、ラザリス様の邪魔をする者は今ここで斬り捨てる!」

そして彼女はそう声を響かせ、紫色に光る刃の両刃片手剣を引き抜く。その時剣から普通の武器とは違うオーラがあふれ出す。

「……クラトス、コレットとコハクを連れて先に行ってくれ」

「いいのか?」

カイもすぐに刀——アトア・マタルアを抜きながらクラトスに呼びかけ、クラトスも剣を構えつつカイに問い返す。

「俺達の目的はソーサラーリングの強化だ。それに、もしこの先で何かあった時にコレットとコハクを確実に守れるかと考えたら俺よりクラトスが行った方がいい……勝てなくても、三人が戻ってくるまで時間稼ぎすればいいだけだ」

「……承知した」

カイの冷静な判断を聞いたクラトスは静かに頷き、「だが」とカイに返す。

「レイの持つ剣に注意しろ……あれは恐らくエクスカリバー」

「……なんだそれ？」

「世界に一つと言われる名剣の一つだ……その力は既存の武器と比べ計り知れぬ力を持つと言われている」

「……了解。気を付ける」

カイとクラトスはそう会話し、カイは刀を右手に順手で構え、左手に短剣を逆手で構える。

「なるべく急ぐ。この場は任せたぞ！」

そしてクラトスが合図を出し、カイ以外の三人は急ぎその場を走り去った。

「作戦会議は終了か？」

「待つてくれてありがとよ」

律儀にカイとクラトスの話し合いが終わるまで待つていた様子のレイにカイも挑発

するような笑みを浮かべて返す。

「なに、気にするな……我の目的はルミナシアのデイセンダー、貴様一人だからな。奴らには興味もない」

そう言い、レイは左手に握った銃をカイに向ける。

「ルミナシアのデイセンダー。貴様はここで死ぬ」

そして帰らずの荒野に一発の銃声が響き、同時に風が強まり砂が吹きすさぶ。その中、カイが立っていた場所に見える影がぱたりと倒れた。

「……」

だがレイは油断する事なく左手に銃を握ったまま、エクスカリバーを地面に突き刺して背負っていた盾を右手に握り、辺りの気配に気を配る。すると彼女の背後の砂が突如爆発したかのように飛び散り、そこからカイが飛び出すと右手に握る刀でレイに斬りかかる。その時砂嵐が止み、先ほどカイが立っていた場所に砂で埋もれかけている木が倒れているのが見えた。

「！」

カイが背後から斬りかかるのに対してレイは振り返りながら盾を突き出し、その刃を防ぐ。そしてお返しだというように銃口をカイに向けるがカイは刀が防がれた瞬間すぐさま距離を取っており、銃弾も危なげなくかわしながら刀を鞘に収めて両手を組み印

を組む。

「影分身の術！」

己のマナを具現化し、そっくりな分身を作り出す技——影分身の術。それを使い己を含め三人に増えたカイは散開し正面と左右からレイに突進した。

「面倒な」

レイはちつと舌打ちを叩いてそう呟くと接近戦のため銃をホルダーにしまい、地面に突き刺していたエクスカリバーを引き抜いて構える。

「影走斬！」

一番最初に斬りかかるのは正面から突進してきたカイ。彼は一気に加速してすれ違いざまに居合斬りを狙ってくるがレイはそれをエクスカリバーで受け止めて鍔迫り合いの形に持っていく。

「もらった！ 鬼炎斬！」

「！」

その後ろから右から回り込んできたカイが刀を掲げて飛びかかり、その刃に炎を纏わせて振り下ろすがレイは左手に握る盾を後ろに突き出して刀を受け止める。

「隙あり！ 閃走牙！」

そこに左から回り込んだカイが肉厚の短刀グラディウスを手に突進、ナイフを突き立



てんと迫る。

「くっ！」

「な！？」

だがレイは正面のカイに向けて踏み込んで頭突きを入れ、相手が怯んだ隙にタックルを入れて吹っ飛ばしつつ自らも移動。無理矢理にナイフをかわしつつ倒れ込んだ正面のカイの顔を力いっぱい踏んづけて追撃する。

「まだだ！」

「ふんっ！」

そこに背後からかかってきたカイが迫るが、レイは盾をぶん投げて相手を怯ませ、その隙に体勢を立て直す。

「……流石だな。三人の同時攻撃くらいならいなすか」

カイがグラディウスを手で弄びながら呟く。どうやら彼が本物のカイのようだ。

「なら……こいつでどうだ？」

再び印を組むカイ。その横にさらに四人のカイが出現し、顔を踏んづけられたダメージで消滅したカイを除いて合計六人となる。

「倍になれば攻撃が通るとでも？」

それに対し、レイは綺麗な顔に冷たい笑みを浮かべ、エクスカリバーを向ける。

「ならばかかってこい」

「言われずともな!」

レイの言葉に返すようにカイが声を上げると共に、カイ達は一斉に何かを投擲。レイの周囲に着弾したそれは一斉に煙を巻き上げて彼女の視界を奪う。

「煙玉か……小細工を」

毒を混入させている可能性もあるため、毒や麻痺などの治療作用がある薬——キュアボトルの液体を口に含みつつレイは辺りの気配に意識を集中する。

(煙の中走り回る気配……なるほど、どれが本物か分からなくさせる策か)

レイは気配を感じつつ、カイの作戦を読む。

(愚策だな)

そして口元に失笑を浮かべ、煙を破って正面から襲ってくるカイを見る。

「分からねのならば——」

四方八方からレイに刃を向けるカイとその分身。それを見ながらレイは好戦的な笑みを口元に見せ、同時に彼女を圧倒的なオーラが包む。オーバリーミッツ限界突破だ。

「——全てを叩き潰すのみ!」

右手に握るエクスカリバーを地面にざくりと突き刺す。その時光で形成された円形の魔法陣が彼女を中心として地面に描かれ、その魔法陣から放たれる光の奔流が周囲の

カイを一斉に空中へと押し上げる。

「秘奥義」

引き抜いたエクスカリバーにその光の力が纏われ、レイは跳躍。目の前にいるカイに向けて剣を振り上げる。

「龍虎——」

剣を振り下ろし、正面のカイを斬りつけながら落下。

「——滅牙斬!!!」

エクスカリバーが地面に当たると同時に力が解放され、まるで光の竜が天に昇るかのような衝撃が周囲を襲う。その光が止んだ時レイの周辺、先ほどまで光の魔法陣が敷かれていた場所は砂が吹き飛び、クレーターのようになつていた。

「……逃がしたか」

「つぶねえ……」

だがそのクレーターのギリギリ外にカイは立っており、同時に彼を纏う圧倒的なオーラが消え去る。彼女が秘奥義を放った瞬間、彼も限界突破オーバーリミッツを行なつてギリギリ彼女の攻撃を回避していたのだ。

「影分身の術。己のmanaを具現化し、分身を作り出す。だがその弱点として己のmanaを分身に分け与えるため個々の戦闘力が下がってしまう」

「チツ、よくご存じで」

「見ていれば分かる」

レイの分析にカイは舌打ち交じりで返答。レイもそうとだけ返し、カイは左手で頭を押さえ、ややうつむきながらため息をつく。

「押さえ込んでアドリビトムまで引きずっていかうかと思つてたんだが、無理か」

目を閉じてそう呟くカイ。すると彼は目を開き、鋭く研ぎ澄ませた。

「（こ）からは全力で叩き潰す」

「望むところだ」

カイがそう言つて身体を右半身を前にするように構えて右手に握る刀を順手で構えると、レイも右手に剣を左手に盾を握り、盾を前方に突き出すように構えながら答える。そしてカイの体勢が前かがみになると、突如彼の足元の砂が爆発したように後ろへと飛び散り、同時に彼の姿がレイの視界から消える。だが彼の姿が消えるのと同時にレイは振り返り、その直後カイの握る刀がレイ目掛けて真正面から振り下ろされる。しかしレイはそれを盾で防いだ。

「チツ」

舌打ちを叩くカイ。だがレイは剣を振り上げ、力強く振り下ろす。

「剛・魔神剣!!」

「曼珠沙華!!」

劍が地面を叩き、衝撃波を発生。だがカイは宙を舞うように飛んで衝撃波をかわし、逆に炎のマナを込めた苦無を投げつける。それをレイは盾で防ぎながら、重力に従って落下するカイ目掛けて突進。

「甘いな」

だがカイは影分身の術で分身を生み出し、さらに印を組む。

「影幻術・鳥」

彼が咄くと同時に影分身は黒い大きな鳥の姿に変化。レイ目掛けて突進する。

「なっ!?!」

レイは足を止めて影鳥のかぎ爪による攻撃を盾で防ぐ。だがその間にカイは着地して体勢を立て直し、同時に影分身は霧散。そのマナがカイの元へと戻っていく。そして間髪入れずにカイは右手に逆手で刀を握り、砂を蹴ってレイに斬りかかった。その時刀に炎が宿る。

「火車落とし!」

「つつ!」

回転し、遠心力によって威力を高めた炎を宿す斬撃を盾で防ぐレイだが、カイはそれくらいは読んでいたのか防がれると同時に短剣を抜き、防御の隙間から突き刺そうと迫

る。

「くっ！」

レイも咄嗟に身を翻して短剣をかわし、盾を押し込んでカイを怯ませる。カイは盾に押されて、レイはその隙に体勢を立て直すために一旦バックステップを踏み、距離を取る。そしてカイは右手の刀を逆手で、左手の短剣を順手で握り、レイは左手の盾を前に突き出しつつ右手のエクスカリバーを構え直す。そして再び砂の爆発と共にカイの姿が消え、そう思うとレイの目の前へと現れる。

「はあっ！」

「ふっ！」

カイが左手の短剣を突き出し、レイはそれを盾で防ぐ。直後カイは右腕を振り上げ、刀の切っ先を盾の後ろのレイに向けて振り下ろした。

「くっ！」

直後レイは剣をカイの手首目掛けて振るい、彼の手を斬り飛ばそうとする。しかしその刃は彼の手首に巻かれているリストバンドにガギンという固い音と共に阻まれた。

「なっ!?!」

「危ない危ない。リストバンドに鉄製の暗器を仕込んで助かった」

レイが驚愕に固まった瞬間、カイはそう呟きながらすぐに刀を手放して懐に潜り込

む。

「しまっ！」

レイも動き出すがもう遅く、カイは素手に闇のmanaを集中。

「滅掌破！」

「ぐふっ!?!」

素手をレイの腹に押し当て、闇のmanaを解放。装備している鎧越しに衝撃が伝わり、レイは盾から手を離して吹き飛ばされる。が、げほげほと咳き込みながらも彼女は銃を抜き、短剣を右手に持ち替えて突進してくるカイに向けて乱射。彼の足を止める事に成功した。

「……」

カイとレイは睨み合い、カイはさっきの攻防の間に投げ捨てた刀を拾いながらレイの盾に砂を蹴りかけて盾を砂に埋め、レイはその間に銃の弾をリロードする。

「ヒートバレット！」

先手を打つのはレイ。前方に振り払うように銃弾を連射してカイを狙うが、カイはその銃弾を見切って全てかわし、二刀を手にレイへと斬りかかる。

「甘い！」

だがレイは右手の刀の斬撃をエクスカリバーで受け、すぐさま銃口を近づいているカ

イへと向け、同時にカイも短剣をレイの顔目掛けて突き出す。

「っ！」

カイの突き出した短剣が顔を横に逸らしてかわしたレイの頬にかすり傷をつけ、レイの放った銃弾が顔を横に逸らしてかわしたカイの髪にかすって髪先端を削り取る。

「やってくれるな！」

「こつちの台詞だ！」

レイとカイは互いに吼え、同時に二人は再び限界突破オーバーリミッツを行う。その時に発生した衝撃波に互いが吹き飛ばされ、再びやや距離が開く。

「はああああああつ!!」

「うおおおおおつ!!」

パンパンッと銃弾を撃って牽制しつつレイが突進し、それに怯むことなく銃弾をかわしながらカイも突進する。その時カイの刀に炎が走る。

「鬼炎斬！」

「剛・魔神剣!!」

炎を纏って横に振るう刀と勢いよく振り下ろされた剣がぶつかり合い、衝撃で周囲の砂が飛び散る。その後レイは銃をカイに向けるが、カイも左手の短剣でその銃を弾き、放たれた銃弾がカイの頬を掠って砂に着弾する。



「はっ!」

銃を弾いた後にカイは短剣をレイの足元に投擲、レイも素早く動いて短剣をかわすが、直後砂地に地のマナが集中する。

「朧土乱!!」

「くっ!?!」

次々と突き出る岩の槍にレイはたまらずバックステップを踏む。だが連続攻撃をギリギリで回避したためか体勢を崩している。

「これで決める!」

その機を狙い、カイが刀を握り直して突進。その時刀に光が宿る、その正体は呪力。刀を敵の肉体のみならずドクメントを直接傷つける必殺の刃へと変貌させる力だ。

「封魔九印剣!!」

レイ目掛けて放たれる呪毒宿す刃。高速で迫るそれをレイはじつと見つめる。

「はあっ!」

そしてエクスカリバーの一閃で刀を逸らす。それにカイは目を見開くが、すぐに二の太刀を放った。

「させんっ!」

だがレイはそれも防ぎ、さらにカイは刀を手元に戻した直後レイの首を狙って突き出

すがそれをも弾く。カイの剣劇に完全に対応していた。

「まだ、剣術ならば我の方が上だな」

「チツ」

レイの言葉にカイは舌打ちを叩くが、そこで彼はレイの左手に握る銃に魔法陣が展開されている事に気づいた。

「いつ、私の秘奥義が剣のものだけだと言った？」

「しまっ!!」

レイの不敵な笑みでの言葉にカイが声を上げるが、その時にはレイは銃口をカイに向けていた。その時、魔法陣が光を放つ。

「X<sup>クロス</sup>バスター!!!」

「ぐああああああああっ!!!」

魔法陣が敷かれた銃口から光の波動が放たれ、それに呑み込まれたカイの悲鳴が響き渡る。

「く……」

光の波動が止んだ時カイは傷だらけになって倒れており、レイはそれを見降ろしながらニヤリと笑って彼へと近づく。

「死ね、ルミナシアのデイセンサー」

そう言い、レイはエクスカリバーを振り上げる。

「エンジェルフェザー!!」

「っ!?!」

その時突如彼女に光輪が襲い掛かり、レイは咄嗟に飛び退いてその攻撃をかわす。

「魔神剣・双牙!!」

更に追撃するように二発の地を這う衝撃波がレイを呑み込まんと迫り、その二つをかわすためにさらにバックステップを踏む。

「カイ！ しっかりして！」

その隙にコハクがカイへと駆け寄り、治療術を使ってカイの治療を始める。

「どうやら間に合ったようだな」

「レイ、一緒にアドリビトムに帰ろ？」

そしてクラトスがレイの前に立ちふさがった。その横にコレットも立ってレイの説得を開始する。

「我は既に貴様らと袂を別った身……ラザリス様を裏切るわけにはいかん」

だがレイはコレットの説得を一刀両断する。

「今我がすべき事、それはルミナシアのデイセンダーの抹殺だ」

「ならば、まず私達を倒してみるのがいい」

レイの言葉に対し、クラトスが剣を突きつけながら威風堂々とレイに言い放つ。その横でコレットとコハクは悲しそうな目を向けつつも、カイがやられるのならば黙ってはいられないのか構えは崩していなかった。

「……チツ」

人数による形勢の不利を考えたか、レイはエクスカリバーを地面に叩きつけその衝撃波で砂を舞い上がらせると己の身を隠す。そして舞い上がった砂が全て消えた時、レイの姿は消え去っていた。

「……行つたようだな。だが念のため私が警戒を行う。コレット、カイを頼むぞ。コハクはコレットとカイの護衛に回れ」

「うん！」

「分かりました！」

クラトスはレイの気配が消えたことを確認しつつもまだ警戒は緩めずに二人に指示、コレットは頷くとカイに肩を貸し、コハクも二人につく。そのまま四人は砂漠を後にしていった。

「お疲れ様。これでまたリングの効果が上がったね。キール君、新しい効果がどんなも

のわかるかな？」

バンエルティア号に戻って報告を行った時、まずアンジュは砂漠から帰ってきた四人を労わり、次にソーサラーリングをコハクから預かったキールに対してソーサラーリングに宿った効果を尋ねる。それに対しキールはソーサラーリングを確認して、アンジュの方を向いた。

「そうだな、今のリングの能力は……魔物に向かって撃つと、わずかな間だが相手の動きを止める事が出来るはずだ。あとは……火の力が強まっているな。雪の塊くらいは溶かす事が出来るかもしれないぞ」

キールの報告を聞き、アンジュは「そういった環境の所では活躍しそうね」と結論を出す。

「それにしても、まさか砂漠にレイがいたなんて……という事は、ラザリスも砂漠に？……」

「確証はないがな」

アンジュはかつての仲間であり、今はジルディアのデイセクターとしてアドリビトムと敵対する立場にあるレイの事を考え、彼女の主であるラザリスも今は同じ砂漠にいるのだろうかと考える。それについてクラトスが冷静に述べると、アンジュもこくりと頷いた。

「とりあえず、カダイフ砂漠については注意しておくべきかしらね。まあ、それはおいおい考えるところとして」

そう呟いた後、アンジュはにこつと微笑んだ。

「それじゃ、今回もご苦労様。また仕事を受けに来てちようだい……ああ、カイはちゃんと診察を受けるようにね？」

「分かつてますよ」

アンジュの言葉にカイは苦笑交じりに答え、それから各自解散、カイは医務室の方に歩いて行つた。

一方、カダイフ砂漠。

「へえ、デイセンサー達が砂漠にねえ」

「はい。目的は分かりませんが……」

レイから報告を受けたラザリスの言葉にレイは目的が分からなかつた事も報告、申し訳なさそうに頭を下げる。だがラザリスは「別にいいさ」と答えた。

「今、ボクがするべきなのは彼らにとつて住みやすい世界へとルミナシアを変える事。

今はここだけしか変えていないけど、いずれはルミナシアの全てをボクの住人の理想

郷に変えてやる。ふふ、ふふふふふ……」  
そう言い、ラザリスはふふふふふと笑い始めた。

## 第三十四話 チーム・テレジア

「ぬりゃあっ!!!」

バンエルティア号の甲板。普段鍛錬や組手が行われているここでいつものように組手が行われていた。戦っている一人はカイ、その相手をしているのは筋骨隆々の巨体を惜しげもなくさらしているスキンヘッドの男性だ。

その丸太のように太い腕から放たれるパンチがカイを襲うが、カイはそのパンチを見切つてぎりぎりかわし、その放たれる風圧にやや怯みつつも左腰に挿していた刀を逆手で引き抜きつつ男性目掛けて逆手居合斬りを見せる。

「ファルコンフレツジ！」

「ぐふっ!?!」

だが男性は巨体に似合わぬスピードの膝蹴りでカイに反撃、斬撃を与える前に攻撃をくらつてしまったカイは怯み、同時に刀が弾き飛ばされてしまう。

「あ、カイ！」

「もらったあっ！」

観客のカイルが悲鳴を上げ、カイが見せた一瞬の隙を見逃さず男性は両拳を打ち合わ



せると拳を電撃が纏う。

「ボルトスラストオ！」

そして電撃を纏うストレートがカイ目掛けて放たれた。

「そうは——」

「ぬおっ!？」

だがカイは攻撃を紙一重でかわしつつ咄嗟に男性の腕を取り、さらに足払いで相手のバランスを崩させる。

「——いくかつ!」

「ぬおがつ!？」

そしてどしやあんという音が響く。カイは男性の巨体を背負い投げで投げ、甲板に叩きつけたのだ。そして間髪入れずにナイフを抜くと相手の喉元に突きつける。

「……俺の勝ちだな」

「……ちいつ」

カイの言葉に男性は悔しそうに舌打ちを叩くと降参の意を示すために両手を挙げる。

「そこまで! 勝者、カイ!」

そして今回の組手で審判役を務めていたスタンが声を張り上げた。

「うっはー。カイ、あんたコングマンの巨体ぶん投げるなんて、やるわねえ……」

見学していたルーティが驚いたように声を漏らす。

「セネルから投げ技の際の体重移動や重心のコツを教わってたからさ」

「あー……あいつこの前ドラゴンぶん投げてたっけ」

セネルは投げ技の達人、なにせ己の数倍の巨体を誇るドラゴンの尻尾を掴み、その巨体を持ち上げて地面に叩き付けるわ投げ技と言っているのかは不明だが敵の種類によつては巨大な敵の体内に潜り込んで内部からダメージを与えるというトンデモ技の使い手なのだ。その直伝と言われてしまい、ルーティはつい納得してしまった。

「いっつちちちち……」

「大丈夫か、コングマン？」

「けっ、テメエに心配される程やわじゃねえや」

頭を押さえながら起き上がる男性——コングマンにスタンが心配そうに手を差し伸べるが、コングマンはその手を払いつつ自力で起き上がる。棘のある言葉や行動だがその顔には笑みが浮かんでおり、ちよつとしたじゃれ合いのつもりらしく、スタンもそれを分かっているのか苦笑を見せていた。

「おう。テメエ、カイとか言ったな？」

「ああ」

立ち上がったコングマンはカイを呼ぶ。それにカイが反応するとコングマンは両腕

を組んだ。

「改めて名乗るぜ、俺様はマイティ・コングマン。闘技場無敗のチャンピオンだ！」

「ま、今はスタンに負けちゃってるけどね。あと、ついさつきカイにもね」

「るせい！」

コングマンの威勢のいい名乗りにルーティが茶々を入れ、コングマンはルーティに怒る。

「まあ、スタンがチャンピオンを辞退したから、今も俺様がチャンピオンだがな……だが、そんなものでチャンピオンになることあ俺様が許せねえ。だから決めたのよ、俺様はこの船で武者修行に励み、スタン・エルロン。テメエをぶつ飛ばすってな！」

「んく……俺はジルディアの問題の解決を手伝ってくれたらそれでいいんだけど……」

「ふん。勝ち逃げなんか許さねえぞ！俺様はチャンピオン、この世界のガキどもの夢そのものなのよ。チャンピオンは常にナンバーワンでなくちやなんねえんだ！だからスタン、テメエに勝つまで俺はこの船を離れねえ！そしてカイ、テメエにも勝つ!!」

カイに話していたはずなのに唐突にスタンへ挑戦状を叩きつけるコングマン。それに対しスタンも困ったように頭をかくとコングマンはふんと鼻を鳴らして己の信念を語り、スタンのみならずカイへも挑戦状を叩きつけた。

「……知り合いだったのか？」

「あく、まあちよつとした腐れ縁ってやつ？ 恋敵っていうか」

「恋敵？」

だがそのカイは挑戦状云々の前にスタンとコングマンが知り合いであることが疑問であるように問い、その質問にルーティが笑いながら答える。それにカイが再び首を傾げた。

「あの、スタンさん……こちらにいると伺ったのですが……」

と、船の中から緑色の髪を三つ編みのおさげにしたメガネの女性——フィリア・フィリスが出てきてスタンに声をかける。

「フィ、フィリアさん！ お久しぶりです」

「コングマンさん、なぜこちらへ……」

と、コングマンは突如フィリアの方を向き、彼女に近づいて跪くと妙にキラキラとした笑顔を振りまきながらフィリアに挨拶。フィリアも驚いたようにコングマンに問いかけた。

「ご存知のように、俺はスタンに負けてしまいました。今もスタンの代わりとしてチャンプイオンの座を守り抜くと誓っていますが、そのためには力不足。そのため俺は武者修行に励むと誓い、ここへやってきたのです」

「は、はあ……」

「ですがフィリアさん、あなたの事も俺が守ります。チャンピオンの名に賭けて！」

「え、えーと……ス、スタンさん、アンジュさんがクエストでお呼びなので、その……」

「ああ、分かったよ。ありがとう、フィリア」

「い、いえ……」

コングマンの言葉にフィリアは困ったような反応を見せつつ、用件のあるスタンに説明。スタンが爽やかな笑顔でフィリアにお礼を言う、彼女はぽつと顔を赤らめてうつむいた。

「……ま、そういうわけ」

「なるほど」

ルーティの言葉にカイは納得いったように頷いた。

「カイ、皆。ロックスがおやつだつて呼んでるよ」

「今日は、クレープシュゼットだよ！」

と、スタンと入れ替わるようにカノンノとイアハートが船から顔を出しながら甲板の皆を呼ぶ。と、二人を目の当たりにしたカイルが「うわあつ！」と声を上げた。

「やっぱ、二人並ぶとビックリするなあ……」

「なんでいこの嬢ちゃん？ 双子か？」

「あゝ。まあそういう事にしといて」

カイルがふうと息を吐き、コングマンが首を傾げるとルーティが誤魔化す。そのまま一行は食堂へ行き、グレープシユゼットを食べ始める。

「あ、そうだ」

と、カイルが何か思い出したようにカノンノ達を見る。

「カノンノにイアハート、最近チームで闘技場に参加しなかった？」

「ううん？」

「してないけど……」

カイルの質問にカノンノとイアハートは首を横に振って返す。と、カイルが「おかしいなあ」と漏らした。

「最近、闘技場チームバトル部門の優勝者のメンバーの名前がカノンノって言うらしいんだ」

カイルはそう話し、「髪もピンク色で、女の子で……とにかく、カノンノそっくりらしいんだよ!」と証言する。

「おう、そういうやそんな噂を聞いた事あるな。俺様は個人部門専門だったから興味もなかったが……」

チャンピオンであるコングマンがその噂を肯定する。が、「まあ、俺様の筋肉についていける奴がいればチームバトル部門のチャンピオンも俺様だったがな」と彼はがははと

笑いながら続けた。

「うう……知らないなあ？」

カノンノが首を傾げ、困ったように呟く。

「でも、ちよつと興味あるかも」

「そだね。あたしも見てみたい」

するとイアハートがくすつと笑いながらそう言い、ルキもうんうんと頷く。

「確かに面白そうだな」

「ふむ。それは、興味あるな。行くのであれば、我々も付いて行こう」

カイも好戦的な笑みを浮かべて呟くと、いつの間にかニアタもそう続ける。

それからおやつを食べ終えた辺りでその噂に興味を持ったカイ、カノンノ、ルキ、イアハート、ニアタはその噂を話したカイルと共に闘技場へとやってくる。

「世界中の屈強なツワモノが集う闘技場へようこそ！」

カイ達を出迎えるのは白い小さな身体で二股の尻尾を羽ばたかせて飛行する、ロツクスに似た不可思議な生物。闘技場の支配人であるモルモだ。

「すまない。最近、カノンノという少女がチームバトルに出場している。という噂を聞いているんだが……」

「ああ、カノンノのこと？ 最近よく聞かれるんだよねえ」

カイの質問にモルモはまるで古い友達が褒められているかのような上機嫌の様子を見せる。

「つて、うわあつ!？」

「どうした？」

と、モルモは突然驚いたように声を上げた。

「カ、カノンノ!?! なんでここに、確かさつきミアハと一緒に……つて、え、二人!?!」

モルモが驚いた様子で見ているのはカノンノとイアハート。二人ともぽかんとした様子で「え?」と漏らしている。

「……そのカノンノっていう子、カノちゃんやグラスバレーとそっくりみたいだね」

ルキがモルモの反応からそう述べる。

「……」

と、ニアタは何か引つかかっているような様子を見せながら無言になった。

「……べ、別人なの? あーびっくりした……えつと、カノンノだっけ? それなら今、チームバトルで戦ってるはずだから見てくるといいよ。もちろん、挑戦したいならご自由にお客さんを楽しませてくれるなら乱入大歓迎が闘技場だからね!」

モルモはそう闘技場のスピーチ交えにカイ達を誘い、カイもこくりと頷いて客席の方へと向かっていった。



そして闘技場の客席にやってきた時丁度歓声が聞こえ、その内容から丁度件のカノンノを名乗る少女の試合が始まる様子だ。

「さあ、突如現れ、チームバトル部門のチャンピオンとなったチーム・テレジア！ 新たな刺客を前にその実力を見せるか!? それとも新たな刺客が新たなチャンピオンへと昇り詰めるか!?!」

「テレジアだと!?!」

司会の言葉に反応するニアタ。その横でイアハートが「え?」と口を手で押さえながら呟き、ルキも「ほえ?」と声を漏らす。

「ウソ…………ぐ、偶然?」

「だと…………思いたいよね…………」

イアハートとルキがぼそりと呟き、彼らは客席から闘技場を見下ろす。そこに立っているのは剣士、戦士、魔法使い、僧侶という所謂スタンダードなパーティ。それに対峙するのはオレンジ色のふわふわとした髪質で華奢な身体にローブを身にまとった僧正風の青年と、桃色の髪で頭にチューリップのような髪飾りをつけている。カノンノによく似た少女だ。

「……………」

その少女を見た瞬間、ニアタが固まった。

「あ、あれってミアハだ」

その横でカイルが僧正を見てそう呟く。

「知り合い？」

「うん。この前闘技場で傷の手当てをしてくれただ」

「つて事は、あの人はスタッフか」

カノンノの質問にカイルがそう説明、カイが呟く。

「さあ、バトルスタートです！」

司会の声と共に、カーンという試合開始を示す鐘の音が響く。それと同時に戦士と剣士が突進、魔法使いと僧侶も詠唱を開始した。

「シャープネス！ バリアー！」

しかしそれよりも早く、いや、もはや無詠唱の速さでミアハが補助魔術を発動。カノンノに力を与え、さらに守りを固める。

「怒れる焰、猛追……：ファ——」

「ファイアボール！」

「——きゃあつ!？」

さらによくやく詠唱を完了させた魔法使いよりも早く、それどころか無詠唱でミアハは炎属性の初級魔術を発動。魔法使い目掛けて火球を放ち攻撃する。

「まずい、先にあの魔術師を片づけるぞ！」

「おう！」

剣士と戦士もミアハに狙いを定め、彼に足を向ける。

「そうはいかないよ！」

だがそこにカノンノが斬りかかった。

「ちっ、邪魔だ！」

戦士が己を振りかぶり叩きつけるように振り下ろすが、ミアハが張った障壁が斧の刃からカノンノを守る。

「せやあつー！」

「ぐあつ!？」

そしてカノンノが反撃するように剣を振りあげて戦士に斬りつける。さらに刃を返して剣を掲げ、追撃を見舞おうと構えていた。

「危ない！」

しかし剣士はカノンノへの反撃よりも戦士を守る事を選択。左手に盾を構えながらカノンノの前に躍り出て防御態勢に入る。

「すうっ……せああああああああつ!!！」

息を吸い、声を放ちながら勢いよく剣を振り下ろす。ガギインという音が響いて剣と

盾がぶつかり合い、そう思うとバギンという音が響いた。カノンノの剣の一撃が剣士の盾を砕いたのだ。

「んなっ!？」

見た目華奢な少女が盾を一撃で粉碎してくるとは想像だにしていなかったのか、剣士は驚愕に固まってしまふ。

「ミアハー！」

瞬間、カノンノはその場を横に飛び退きながらミアハに呼びかける。彼は既に詠唱を行っていた。

「穿て、灼熱の旋槍！ スパイラルフレア!!」

叫び、炎のマナを解放。それは灼熱の矢となりて渦巻き、剣士と戦士を呑み込む。

「ぎやああああああつ!!」

二人の悲鳴が響き、炎が消えた後二人は黒こげになって倒れていた。

「やば、回復！」

「は、はい！」

後衛の魔法使いが僧侶に回復を指示、僧侶も頷くと詠唱を開始した。

「させないよー！」

「ひうつ!？」

だが、ミアハの攻撃の合間に距離を詰めていたのだろう。僧侶の前にカノンノが立つて僧侶に剣を向ける。

「くっ!?!」

「詠唱するならミアハの方が早いし、最悪剣で殴ってこの子を気絶させた後、すぐに追撃する……さあ、どうする?」

魔法使いがすぐに詠唱を開始しようとするが、カノンノは冷静に、だが綺麗な微笑みを見せながらどうするかと尋ねる。それに魔法使いは「ぐぬぬ……」と唸り声を上げた後、はあとため息をついて杖を放り捨てた。

「降参<sup>リザイン</sup>」

カランカランと音を立てて杖が床を転がり、魔法使いの降参の宣言が響く。彼女は僧侶にも目を向け、僧侶もこくと頷くと杖をそつと床に置いた。これでチーム全員が戦闘続行不可能の状態になり、先ほどチームの一人から降参の宣言もなされた。

「試合終了! チャンピオンチーム・テレジア! 数の不利をもとめせず圧倒!!」  
カंकカंकカンカーンと鐘の音が四度鳴らされ、司会の高らかな宣言が続く。

「強い……」

客席のカノンノもほかーんとした顔を隠せていなかった。

「あれは、もはや……」

ニアタが呆然とした、信じられないとばかりの声を出す。

「……………あのミアハってやつ……………」

カイも客席からミアハを睨み、声を漏らす。

「……………気になる？」

と、ルキがそう声をかける。彼女もミアハに目を向け、さらにカノンノにも気を向けていた。

「ニアタが色々気になってるっぽいんだけど……………」

ルキはニアタの方をちらりと見ながら、どこか輝いている目を見せる。

「……………乗ってやる」

「おけー」

その真意を見抜いたカイの言葉にルキは笑顔で頷き、二人は客席から飛び降りた。

「カイ!？」

「ルキ!？」

カノンノコンビの驚愕の声が重なるが、二人は既に闘技場へと降り立っていた。そしてルキは背負っていた斧を右手に握り、ズドンと床に叩きつけて床にヒビを入れながらミアハとカノンノをびしっと指差す。

「あたしらアドリビトム！ チーム・テレジアに挑戦する！」

「乱入オツケーが闘技場のルールだよな!？」

びしっと指差ししながら宣言するルキに続いて、カイも刀を抜きながら宣言。

「おおっと、ここで乱入だあ! しかもチーム・テレジア、言うまでもなく挑戦を受ける模様!」

司会の声が響く。その言葉通り、既にミアハの元に戻っていたカノンノは剣を構えており、隣のミアハも戦闘準備は万端の様子を見せている。

「さあ、あのアドリビトムからの挑戦者! チーム・テレジア相手にどのような戦いを見せてくれるのか! さあ、バトルスタートです!」

司会の声と共に試合開始を示す鐘の音が響く。それと同時にカイの姿が消えた。

「バリアー!」

しかし同時にミアハがやはり無詠唱で魔術を発動、自身の周囲に障壁を張り、同時にその障壁にガギンという音が響く。カイが透明な障壁に刀をぶつけたのだ。しかしその強度は強く、障壁を砕くには至らない。

「焔よ、雷となりて敵を討て——」

だがミアハは既に反撃の魔術を発動するための詠唱を開始しており、カイもどのような魔術が来ても対応できるような距離を取ろうと下がる。

「——ファイアボルト!」

「ぐぼっ!？」

だが詠唱が完了し、魔術が発動しただろう瞬間。カイを小さな爆発が襲う。

「な、んっ——」

「焰よ、雷となりて敵を討て！」

「——やべっ!？」

自分が反応できない程の速さで発動した魔術にカイは面食らう。特定座標への小規模攻撃、例えばエクスプロードの規模を小さくして威力を劣化させる代わりに詠唱速度やmana消費量減少に特化させたオリジナル魔術かと咄嗟に思考を働かせて対策を練ろうとするが、同じ詠唱が聞こえてきた事に気づくと動き始める。

じっとしていればただの的、元よりカイは機動力に重視した戦い方を得意とする。彼はずぐさま相手に的を絞らせないように動き回りつつ、ミアハの張ったバリアーの穴を見つけ出す事を試みた。

(……くそ、穴が見当たらない)

しかしその結果は芳しくなく、カイは思わず舌打ちを叩く。ミアハの張ったバリアーは彼の周辺を完璧にガードしており、苦無を投げつけてバリアーの感触を確かめるがやはり砕くには相当の力が必要になりそうだ。

「静かなる焰、捕捉せよ！」



と、ミアハが新たな詠唱を唱え、同時に彼の周囲に五つの赤い球が出現。そう思うとそれらは意思を持ったかのようにカイ目掛けて飛んできた。

「どわっ!!」

咄嗟に伏せて飛んでかわすが、それらは不可思議な軌道を描いて再びカイに迫り、カイも地面を蹴って走り出すがそれらはなんとカイのスピードについてきていた。いや、単体のスピードではギリギリカイの方が上、だが複雑怪奇に動く赤い球体のコンビネーションによってカイの移動先を押しさえ、結果としてカイについていつていた。そしてついにカイが赤い球体に囲まれる。

「起動せよ、サイレントフレア!!」

ミアハがそう唱えた瞬間、赤い球体が紅の光を放ち、一気に爆発。カイを呑み込んだ。「カイツ!!」

カノンノとエアハートの悲鳴が重なる。

「げ、やばっ!!」

「よそ見してるなんて余裕だね!」

「くっ!!」

ルキも爆発に巻き込まれたカイを見て悲鳴を上げるが、その隙について猛攻をしかけてくるカノンノに対抗するためすぐ視線を元に戻す。

「とう、せい、はっ！」

「おっと！」

カノンノは自分の身の丈もありそうな両手剣を軽々と振るっており、しかもそれでいて両手剣使いによくある一撃の間に隙が大きいという事もなく、身体全体を使って力と速さを見事に両立させた剣技を見せていた。単純な一撃の重さだけならばルキの方が確実に上、しかしその速さや剣の技によってルキはカノンノに追い詰められていた。

「せいやっ!!」

「なんのー！」

カノンノの振り下ろす剣をルキは左腕に装着した盾で受ける。マンダー<sup>ディセクター</sup>の民の超技術によって作られた救世主用の武器、ただの鉄製だろう盾のように容易く砕かれる事は無く、ぶんと腕を振って剣を押しつける。

「こんの、爆砕斬！」

「わととっ!?!」

さらにルキは一度仕切り直すために斧を床へと叩きつけ、砕いた岩片を前方に放射させて攻撃を行う。

「カイ！」

岩片にカノンノが怯んだ隙にルキは体勢を立て直しつつカイを呼ぶ。その時爆発によつて発生した煙が、風によつて吹き飛んだ。

「……あぶねえ。土乱で壁を作つてなかつたらやられてた……」

そこにはとどころどころか砕け崩れている岩の壁に囲まれたカイの姿があつた。どうやら咄嗟に地面から岩を隆起させる特技——土乱を応用して壁を作つたらしい。だが爆発の力全てを防ぎきる事は出来なかつたらしく、身体に若干の傷がついている。

「カイ、大丈夫!？」

「ああ、だけどあいつのバリアーは固い……俺じゃあ突破に時間がかかりそうだ」

「そう……あのカノちゃんそつくりのカノンノも、大分強いね……力押しでどうにかなる相手じゃなさそう」

カイとルキはさつきまでの戦いから得た己の考えを話し合い、互いに一瞬沈黙。

「いくぞ！」

そして同時に突進する。カイはカノンノへ、ルキはミアハへ。要するに選手交代だ。

「崩襲脚！」

ダンツと勢いよく地面を蹴つて飛び上がり、捻りを加えて蹴り下ろすような形の飛び蹴りを見舞うルキ。しかしその攻撃は障壁に阻まれ、ビリビリと障壁が揺れる。

「く……」

それと共にミアハもカイの攻撃では全く見せなかつた焦りの表情を見せる。

「せいっ!」

「つと!」

カイも鋭く踏み込むと刀を振るい、カノンノはステップを踏んでかわしながら反撃に剣を振るう。しかしカイは引き戻した刀で剣を受け流すという一進一退の攻防を見せた。

「だったら」

カイは左手を懐に入れ、何かを取り出すと勢いよく地面に叩きつけ、同時にその何かがぼふんと小さく爆発すると彼を煙が包み込む。煙玉による煙幕、カノンノがそう判断した次の瞬間その中から数人のカイがカノンノへと飛びかかった。カイの得意技、影分身の術だ。

「ええっ!」

ぎよつととするカノンノだったが待つてくれる相手でもなく、カノンノは刀やナイフを手を斬りかかってくるカイを睨むと剣を振るう。だが数の差もあつてか防戦一方の状態になつてしまつていた。

「カノンノ、伏せて!」

と、ミアハの声が響く。それと同時に空中に炎のManaが集中した。

「来たれ爆炎、焼き尽くせ！ バーンストライク!!」

そして巨大な火球が具現、カイとミアハの指示通り伏せているカノンノ目掛けて降り注ぐ。カノンノは伏せていたためダメージはそこまでなさそうだが、カイは回避に精一杯になっており、その内分身が次々と火球に当たって消えていく。

「もらったあつ!」

だがカノンノの援護のために攻撃魔術を放つときにバリアーが消えてしまったのか、ルキがミアハに突進。斧を振り上げると叩きつけるように振り下ろし、ミアハは咄嗟にバックステップを踏んで距離を離そうとする。しかし再びバリアーを張られては面倒とルキも考えているのか、彼女はミアハから離れないよう常に距離を詰めるように動いていた。

「せいやあつ!!!」

「くつ!」

ルキの斧にミアハは杖を振るい対抗する。しかしまともにぶつかり合っては後衛型の彼はもたないため受け流し、回避に努めた時間稼ぎが精一杯の様子だ。

「君達が何者なのか知らないけど……こうなったら本気出すしかないみたいだね!」

ミアハが何か覚悟を決めたような目でそう叫び、杖をぶんと振るってルキを一瞬引き

離れた瞬間、彼の杖の先端についている三つの蝋燭を炎が覆い、まるで刃のような鋭い形に変形する。それはまるでトライデントのようだ。

「せいやつー！」

「え、わつと!？」

杖がいきなり槍に変化したという光景に驚いていたルキはしかし炎の槍の突きを反射的に身体を逸らしてかわす。

「うっひゃービシヨップかと思つたのに何、槍戦士?」

「あいにくビシヨップですけど……色々あります。護身くらいには近接戦闘を修めるんです」

ルキは斧の柄を伸ばして両手持ちにシフトしながら呟き、それに対しミアハも槍と化した杖をひゅんと振るうと構え直す。

「シャーブネス、バリアー」

相変わらず無詠唱に近い速さで自らに補助魔法をかけるミアハ。しかしそれでもなお近接戦闘のスペシャリストである戦士、それもかなりの実力を持つだろう彼女には勝てないと彼は直感していた。しかしルキも彼が本来はビシヨップであることから魔法を警戒し、しかし彼が詠唱を始めたらすぐに距離を詰めて攻撃を仕掛けられるよう身構え、互いに硬直状態となっていた。

「刹月華！」

「くっ！」

左右に刀を切り払い、後ろ回し蹴りへと繋げる特技——刹月華がカノンノに迫り、カノンノは刃を剣で受けつつ回し蹴りを頭を後ろに反らして回避。

「掌底破！」

「はぐっ!？」

だがそこにカイはさらに左手の掌底で追撃を入れ、腹に掌底を入れられたカノンノは苦し気な息を吐く。

「こんのっ！」

しかしカノンノは下がる事なく逆に踏み込む。

「獅子戦吼!!」

「がふっ!？」

そしてカイ目掛けて膝蹴りを叩き込み、さらに膝から獅子の鬨気を放って吹き飛ばす。

「やああああああっ!!」

さらに吹き飛んだカイ目掛けて追撃を叩き込もうと突進する。

「かかったな」

「!? きやあああああつ!」

しかしカイがそう眩いた瞬間、カノンノが踏み込んだ地面から電撃が流れ、彼女を麻痺させる。

「忍法雷電、トラップバージョンだ」

苦無に雷のマナを込めて地面に突き刺し、時間差で電撃を起こし攻撃する特技——雷電。カイは獅子戦吼で吹き飛ばされた時、咄嗟にそれを仕掛けていたのだ。

「ぐ、げほっ」

だがカイも獅子戦吼のダメージで反撃を行う余裕はなく、カノンノの追撃を食い止める結果で終わってしまった。

「カノンノ!」

「よそ見してたら危ないよっ!」

ミアハが叫ぶがルキがその隙をついて攻撃を仕掛けると彼はバックステップとサイドステップを駆使して回避を始める。やはりシャープネスとバリアーによる補助を受けていてなおミアハは接近戦ではルキにかなわない。



「ファイアボール！」

無詠唱に近い速さで火球を放ち弾幕を張ってルキの動きを一瞬止める。その隙にミアは杖を自分のすぐ横に立てて合掌。その瞬間彼を圧倒的なオーラが包み込む。限界突破だ。  
オーバリーミッツ

「緊急用の技だけど、やむを得ない！」

そしてミアは杖を右手で握り締め、右足を後ろに引いて杖を地面と平行に構え、開いた左手をルキの方に向ける。その時ミアハとルキの間に数個の魔法陣が出現した。

「秘奥義、クリアレストロツド!!!」

勢いよく先端に炎を纏った杖を投擲、それは魔法陣を通り抜けるごとに炎の勢いが増していき、しまいには全体が燃える炎の槍と化する。

「!」

それを見たルキも咄嗟にオーバリーミッツ限界突破を行い、斧の柄を伸ばして両手で握り締める。

「秘奥義、烈破焰焦撃!!!」

斧に炎をマナを込め、全力で振り下ろす。その斧と杖がぶつかり合い拮抗。

「うおおおおおおお!!!」

ミアハとルキの声が重なる。だがその時斧と杖に宿る炎のマナが膨張、

「なっ!」

「きゃあああああつー！」

突然の大爆発を巻き起こした。

「ルキー！」

「ミアハー！」

鏢迫り合いになっていたカイとカノンノも思わず呼びかける。

「きゅー……」

その爆発が止まり、爆発によつて発生した煙が止んだ時。ルキとミアハは二人とも目をぐるぐると渦巻きにして気絶してしまっていた。目の前で爆発をくれば流石のルキも耐えきれず、多少離れていたとはいえ僧正のミアハでは防御力が足りなかつたらしい。審判から二人の戦闘不能アナウンスが響く。

「これで残るのは俺達だけか」

「ふふふ……久しぶりに面白くなってきた」

カイとカノンノは鏢迫り合いの状態でそう語り合い、互いに相手の刀剣を弾くと距離を取る。そしてカノンノが目を閉じ、口から何か言葉を紡ぎ出すと共に魔力が彼女の周囲へと集中する。魔術を使う気だ。

「詠唱はさせん！」

相手の目論見を予想したカイがすぐに苦無を投げつけ、カノンノの詠唱妨害を図る。

「そう来ると思った！ ストーンブラスト！」

しかしカノンノが詠唱していたのは詠唱時間の短い初級魔術、大地から放たれた石礫が苦無を防ぎ、その隙にカノンノは再び詠唱を始めた。

「氷結は終焉！ せめて刹那にて砕けよ！！ インブレイスエンド！！」

水のマナが集中し、巨大な氷塊がカイの頭上に具現。そのまま重力に従い落ちてくる。

「っー」

氷塊を見上げたカイも咄嗟にその場を飛び退いてかわす。だが氷塊は落ちた瞬間破砕、強大な質量によるプレスだけではなく破砕時に発生する氷の欠片の刃や鈍器による全方位攻撃にカイは怯む。

「やあああああああつ！！」

さらに間髪入れずにカノンノが突進、下段に構えていた剣を振り上げるように斬りかかる。

「ちいっー！」

氷片を気にする余裕もなくカイはカノンノの剣劇に対抗し始める。右下から右上への斬り上げを刀で受け流すように弾き、続けて先ほどの軌道をなぞるような逆袈裟への振り下ろしをバックステップで回避。続けて突進しつつその勢いを利用した柄による

突きを、刀を上空に放り捨てて空けた右手でカノンノの手ごと柄を掴んで防御。さらに自分の方に引き寄せて密着させ、膝蹴り及び獅子戦吼を封じる。客席からカノンノ・グラスバレーの「あー！」という声が聞こえるが気にしない。

「もらった!」

ともかくカノンノの動きを封じた隙に左手で短剣——グラディウスを抜いて左手をカノンノの後ろに回し、カノンノの背中から短剣を突き刺そうと試みる。

「古より伝わりし浄化の炎——」

「え!」

瞬間、カノンノの口から詠唱が聞こえてくる。同時にカイとカノンノの頭上に炎のマナが集中。

「——落ちろ!——」

「待て、嘘だろ!」

「——エンシエントノヴァ!!」

焦るカイも何のその、カノンノの魔術発動の宣言が響き、カイを狙う浄化の炎が落ちる。このままではやられるとはいえ術者である自分もろとも狙う自爆行為をカノンノは躊躇いなく行っていた。ドゴオンという爆音が響き、爆発の衝撃で割れた床の破片が辺りに飛び散り、煙が舞う。

しかしその煙の中から何かが飛び出すとゴロゴロと転がる。恐らく落ちてきた浄化の炎と第二撃の爆発を間一髪かわしたカイとそれに掴まれているカノンノだろう。しかしカノンノは自力で回転を止めると倒れていたカイの上に素早く乗つかる。マウントポジションの体勢だ。そのままカノンノは右手を振り上げるが、その手に剣が握られていない——流石にあの緊急回避から持ち続ける余裕もなかったのだろう——のに気づくとそのまま拳を握りしめ、勢いよく振り下ろして直接カイをぶん殴る。

「容赦ないっ!」

客席のカイルが悲鳴を上げる。華奢な体格に見合わない大剣を力の限り振り回し、零距离から自分が巻き込まれる事をいとわない魔術を放ち、拳句には得物がなくなつたからとマウントポジションでの殴り合いに持ち込む。可憐な容姿からは想像も出来ないダーティな戦い方を見せていた。なおカイも最初はついていけず何度か顔面を殴られていたが、今はカノンノの両腕を自分の両手で掴み、睨み合いに持ち込んでいる。

「細やかなる大地の騒めき、ストーンブラスト!」

「いててっ!」

しかしカノンノは石礫を呼び出し、それをカイの身体に当ててちくちくと痛めつける。自分が巻き込まれて有利な状態を崩さないよう威力を大分弱めているが、それでも少しずつダメージを蓄積させるには充分。これで相手のギブアップを狙う、それがカノ

ンノの作戦だ。

「ここまで持ち込まれるのはミアハやスタン達と戦った時以来だね……」

べしべしと石礫に痛めつけられるカイを見ながらカノンノは遠い昔を思い出しほそりと呟く。するとカノンノは自分の両腕が自由になった感覚を感じる。恐らくカイが掴んでいた手を顔の防御に回したのだろう、顔面は生物の共通である急所、本能的に守りに行くのは何もおかしくはなく、カノンノはならば追撃にとまた拳を振り上げる。

「っ!?!」

直後彼女は嫌な予感を感じ、咄嗟に顔を横に動かす。その時カノンノの頬に何かが掠り、同時にカノンノは見下ろしたカイが自分に右手を向けていることに気づいた。そこから見える袖口から何かキラツと光を放つ。

「外したか! ならもう一発!」

「ひゃあっ!?!」

そう言い、左手で右手首をパンツと叩くカイ、直後光る何かカノンノ目掛けて袖口から飛び出、カノンノは咄嗟に飛び退いてその暗器をかわす。だがこれでマウントポジションが崩れ、カイも素早く立ち直す。

「……」

互いに睨み合いになる。互いに得意とする武器は遠くに離れており、不用意に取りに

行けばその隙を突かれるのは自明の理。

「逆巻く水流——」

先に動くのはカノンノ、剣の方に走りながらその口から紡がれる詠唱を聞いたカイも地面を蹴り走る。

「——弾丸となりて敵を貫け、アクアスパイク！」

放たれるのは螺旋を描いて敵を貫かんと迫る水流。カイの移動先を正確に狙った弾丸を彼は咄嗟に前転しハンドスプリングの要領で飛び回避、その隙にカノンノが自分の剣へと飛び込む。

「させん！ 曼珠沙華!!」

だがカイはハンドスプリングからジャンプの二段回避でアクアスパイクをかわした直後、その体勢から炎を纏う苦無を投げつける。相手の最終目的地は剣、ならば狙うべきはそこをという大雑把な狙いながらも燃える苦無がカノンノの手に剣を握らせることは防ぎ、今度は逆に自分が己の刀へと手を伸ばす。

「さ、せ、な、い、よっ！」

「ぐっ!?!」

だがカノンノもカイの目的は刀であるためそつちに走り、結果的に先回りをしてカイにタツクルをくらわせ押し倒す。

「何度も同じ手をくうかつ!」

「きやつ!」

しかしカイも完全にマウントポジションを取られる前に彼女を投げ捨てるように体勢を崩させ脱出。しかしカノンノはすぐに受け身を取って立ち直し、カイが武器を拾いに行くどころか動けばすぐに対処できるように構えていた。

(苦無は既にあと一本、遠距離戦に持ち込まれたら魔術が使えるあつちが圧倒的に有利……素手勝負に持ち込むしかないか……)

カイは右手に握った苦無にちらりと目をやり、精神を集中。一気に力を解放する。限界突破を行い、地面を蹴ると縦横無尽に動き回ってカノンノを攪乱する。

「ふう……私に残された力を!」

だがそのカノンノもふうと息を吐くと力を解放、限界突破を行う。そして同時にカノンノから放たれるマナが膨張する。

「宙そらを越え、今ここにパスカの光を!」

「つつ!?!」

やばそうなプレッシャーを感じ、カイは咄嗟に苦無に呪力を注ぎ込む。

「封魔九印剣、苦無バージョン!!」

「これが私の!! ラヴ・ビート!!!」



呪力を込めた苦無での連続斬りに耐え、カノンノがマナを解放。マナが桜の花びらを形作り、衝撃波となつてカイを襲う。カイは衝撃波に吹き飛ばされつつも最後の力で苦無を投げつけ、それがカノンノの右肩へと突き刺さる。

「づあつー！」

「あ、ぐっ……」

衝撃波に吹き飛ばされ地面に叩きつけられたカイが苦痛に声を漏らすと共に、カノンノも苦無に込められた呪力の毒が効いたのかがくりと倒れる。同時ノックアウトによる引き分けだ。

「カイー！」

「ルキーー！」

引き分けのアナウンスが実況から放送されると同時、グラスバレーとイアハートが飛び降りてそれぞれの相棒へと駆け寄る。

「え、な、なに？……私にそっくり？」

「あ、あのー！」

カノンノが二人を見てぽかんとした声を出すと、そこにカイルが駆け寄る。

「すいません、あの、ちょっと会ってほしい人がいて……この後、闘技場の入り口まで来てもらえませんか？」

「えっ……あ、うん……いいけど……」

カイルの突然の言葉にカノンのはほかんとしつっこくと頷いた。

「やはり……」

場所が変わり、闘技場入り口。ニアタはカノンノを見て感極まったような声を出しており、カノンノも驚いたように口に手を当てていた。

「そなた……そなたは!! 我等がデイセクター!!」

「ええー!」

「それじゃ……まさかパスカって世界の……でも、パスカは寿命を迎えた世界。まさか、幽……」

ニアタの言葉にグラスバレーが驚きの声を上げるとイアハートは自分の知る知識から何か結論を導き出そうとするが、考えると怖くなるので首を横に振って考えを打ち消す。

「ニアタ……ニアタ……なの!? 迎えに来てくれたのね」

「ニアタ……ニアタ・モナド、もしかして、デイセクターの玉座!?」

パスカも感極まったように話し、その隣に立っていたミアハが驚いたようにニアタに

尋ねる。

「やはり……そなたはテレジアのデイセンサーか。だが、そなたら……現身……いや、一体、どうしてこんな所に……」

「ミアハとパスカで遊んで、テレジアに行こうと思ったら、おかしな力に引つ張られて、ここに飛ばされちゃったの」

「それで、モルモがこの闘技場の支配人をやってたから住み込みでアルバイトをしてたんです。腕が鈍ったらいけないのでたまにチームを組んで参加もしてましたが」

ニアタの質問にカノンノとミアハが答える。

「……カノンノ、今のパスカの年号を教えてもらえないか？」

「第四樹暦五十八年だよ？ ニアタったら、変な事を聞くね？」

（パスカの世界樹が四度目の実りを過ぎた辺りか……では、あと三度の実りの後、パスカの世界は寿命を迎える……我等がデイセンサーとテレジアのデイセンサーは、時を越えたのか……）

ニアタの質問にカノンノはきよとんとししながら答え、ニアタはそこでカノンノとミアハの状況を把握する。

「ところで、ここはテレジアじゃないみたいだけど、どこなの？」

「そうだな、この世界については船へ戻りながら教えるよ」

「船？」

「心配は要らない。それより……カノンノ……今は……そなたに会えた事を喜ばせておくれ……」

「ふふ、どうしたの？ おかしなニアタ……」

ニアタは感動したような声を出しており、カノンノはふふつと、どこか包み込むような微笑みを見せながらそう呟く。それからミアハとカノンノでモルモに事情を説明、モルモも「ニアタに会えたの！ じゃあ今度改めてオイラからも挨拶に行くから！」と嬉しそうに答え、それだけでしばらく休みの許可を得て闘技場を出ていく。

「……ねえ」

と、ミアハがカイとルキ、グラスバレーとイアハートの四人に声をかける。

「あなた達がこの世界のディセンダーなんですか？」

「ああ、俺はそうだが……カノンノとイアハートは違う」

「あたしはグラニデっていう世界のディセンダーで、カノちゃん……イアハートもグラニデの住人だよ」

ミアハの質問にカイとルキが答え、グラスバレーとイアハートも首肯。

「そうですか……では、一つ質問をしていいでしょうか？」

ミアハはにこつと、人畜無害な笑みをカイ達に向ける。

「僕<sup>テレ</sup>の世界とカノン<sup>ス</sup>の世界<sup>カ</sup>って、滅んじやってるんですよね？」

「!!?!」

人畜無害な笑顔からは想像出来ない重い質問に四人は面食らってしまった。

「……どうやらそうみたいですな」

「あつ、いや、その……」

ミアハの言葉にグラスバレーがどうにか誤魔化そうとするが言葉が出てこない。

「いえ、予想はついてましたから」

「……え？」

その言葉にイアハートがぼかんとした声を出す。

「答えは簡単です。先ほどの闘技場にいたモルモ、彼は僕がテレジアに生まれた頃にパートナーとして共に戦ったヤウンという世界のデイセクターです。しかしここはヤウンではない……モルモにこっさり聞いたんですが、このモルモは転生した存在、ヤウンの記憶は僕達に出会って唐突に思い出したみたいなんです。そしてヤウンは僕、テレジアの世界樹の種子から再生した……つまり、モルモがヤウンの輪廻から解き放たれ、この世界に転生する程の時間が立っている、ヤウンが滅びている。となればその種子の元である僕<sup>テレ</sup>の世界と、ヤウンと同じくテレジアの世界樹の種子から再生したカノン<sup>ス</sup>の世界<sup>カ</sup>が滅びている。と考えるのは当然です」

ミアハは筋道立てた考え方でテレジアとパスカが滅びているという仮定の理由を説明する。

「あ、でもカノンノはその事にまだ気づいてないみたいなので……秘密にしていただければありがたいです。僕もカノンノの悲しむ顔なんて見たくありませんから」

「……分かった」

ミアハの申し訳なさそうな言葉にカイも笑みを浮かべ、こくりと頷いた。

「ふんふん……これまた、思わぬ事故が起きちゃったわね」

バンエルティア号に戻り、ニアタは「時空を越えるといえれば心当たりがある」と言っ  
てハロルドを呼び出し、話をする则彼女もふんふんと頷く。ちなみにカノンノ達はいっ  
の間にかいなくなっていた。

「では、カイル達を元の世界へ戻すはずが……時間を遡った所に存在する我等のデイ  
センサーを、この世界へ呼び込んでしまったわけだな……」

「戻すのには時間がかかるみたいね……カイル君達だつて、まだ成功しないし」

「まー、そう焦らない焦らない。今回の失敗だつて、ひよつとしたら世紀の大発明に繋が  
るかもしれないのよ♪」

ニアタが結論を確認するとアンジュは現状を鑑みて呟き、しかしハロルドは気にしてないかのようにはやははと笑う。

「アンジュ、それまで彼女をこの船に置いてもいいかね？」

「ええ、断る理由は無いし」

「彼女の時間では、まだ故郷は存在している。カイも、アンジュも、パスカが滅びた事や、我々の身の上の事を、彼女に話さないでおいでくれ」

「ああ……だが、ミアハは気づいていたようだ。だけどミアハもカノンノには秘密にしてくれってさ」

「そうか……やはり、彼は聡明だな」

ニアタのお願いに対しカイがそう返すと、ニアタは何か思うような口調でそう呟いた。

「ところで、あなたのデイセンサーを何と呼べばいいかしら？」

「ふむ、あの子には姓がない。故郷の名が姓と言ってもよいな……では、〃パスカ〃と名乗らせよう」

「それじゃあ、パスカのメンバー登録をするね」

「感謝する……」

ニアタはパスカのデイセンサーであるカノンノ改めパスカのメンバー登録をアン

ジユが行ってくれることに対して礼を言う。

「ところで、トリプルカノンノはどこに行つたの？」

そこに突然ハロルドがそうぶつ込んだ。

「ああつ!? まさか、ロックスの所に!？」

「ぎやああああああああ!!!」

アンジユがまさかというように叫ぶと同時にロックスの悲鳴が聞こえてきた。

「カイ、食堂へ行つてちようだい!!」

「了解!」

「我々も共に行こう!」

アンジユがすぐさま指示を出し、カイも言われるまでもないとばかりに食堂へと走る。ニアタもそれに続いた。

「お、お嬢様が三人……あわわわわ……僕は、僕は、そろそろお迎えが来るのか……」  
「ロックス落ち着け! お迎えはまだ来ない!」

カイとニアタが食堂に飛び込むと、ロックスはトリプルカノンノを見て慌てたようにふらふらと飛んでおり、その目はぐるぐると渦巻きを描いている。完全に錯乱しかけて



いるロックスに慌ててカイが声をかけ、その次にニアタがロックスに近づく。

「驚かせてすまない。彼女は、我々のデイセンダーだ」

「ニアタ様のデイセンダー……（…し、しかし……ニアタ様の故郷は……）」

「（その話については、触れないでやってくれ……）……ともかく、事情は後で話す。今は、彼女を受け入れてやってくれ」

「わ、わかりました……」

ロックスとニアタはトリプルカノンノに聞こえないようにこそそと話し合い、その隙にカイがニアタとロックスの相談を不審に思われないようにするついでに、トリプルカノンノに対して「パスカのデイセンダーのカノンノはこっちではパスカと名乗るようになしてくれ」と事情を説明する。

「三人に見えたのは、幻覚じゃなかったんですね……」

「紹介するね。私の家族、ロックスだよ」

ほおつと安堵の息を吐くロックスを指しながら、カノンノがパスカにロックスを家族だと紹介、パスカもペこりと頭を下げた。

「よろしくお願いします、ロックス。私の事は、パスカと呼んで下さい」

「は、はい、こちらこそよろしく……あつ、そのつ、そんな堅苦しくなくて構いませんから。ホント……」

「はー！」

ロックスはお嬢様であるカノンノとそっくりなパスカに堅苦しく接されるのが気になるのかそう答え、パスカも輝くような笑顔でこくりと頷いた。

「しつこしまあ、ほんとそっくりだねえ……あ、ロックス。皿洗い終わったよ」

「ああ、ありがとうございますいい様」

すると当番だったのか皿洗いをしていたしいなが手を布巾で拭きつつトリプルカノンノを見比べながらそう呟き、彼女らに近づくとパスカの肩にぽんと手を置いた。

「ま、仲良くやろうじゃないか。これからよろしくね」

そしてにっと笑みを浮かべてそう言い残すと食堂を出ていき、自分の部屋に戻っていく。

「しつこつ、なーっ！」

「のぎやあつ!？」

すると突然背後から何者かがしいなに抱き付き、右手を腰に回し左手で胸を明らかに揉む。そんな事をしでかすバカは彼女には一人しか……いや、船には何人か心当たりがあるが、少なくとも今の彼女の頭には一人しか浮かばない。

「このアホゼロスー!!!」

「ぶぎやっ!？」

振り払い、振り返り、鉄拳制裁。一連の流れに全く無駄がなく、その拳はゼロスの顔を的確に捉えていた。

「お、おおう、愛が痛いぜ……」

「この馬鹿！ いきなり何すんだい!?!」

鼻を押さええごころごとく悶えるゼロスにしいなが腰に手を当てて説教開始。

「何があつた?」

そこにフォックスが顔を出した。

「ああフォックス！ こいつがまた馬鹿な事をしでかしたんだよ!」

「そうか……なら俺が連行しよう」

「任せたよ！ つたく。ウリズン帝国がいいならゼロスをやるからフォックスを正式にうちに貰いたいくらいだよ」

フォックスに対しそう言い、しいなは頭の上から怒気をまき散らしながらその場を後にする。

「やつほー、しいな」

「ああ、マルタにエミル。なんだい、デートかい?」

「残念だけどクエスト。でもコンフェイト大森林にお花畑があつたらお花畑デートつていうのもいいなあ……」

その途中で偶然会ったマルタとエミルとしいなはからかうように話しかけ、マルタはデートではなくクエストだと言うがしかしロマンティックな光景を妄想。しいなは苦笑しつつも「気をつけなよ」と言い残して部屋に戻ろうと歩き出す。

「あれ？ しいなさん、何か落としましたよ？」

「え、どれだい？」

エミルが突然話しかけ、しいなが振り返る。確かにさつきしいなが歩いていたところに片手に収まる程小さく折りたたまれた紙が落ちていた。

「……心当たりないんだけどねえ？」

「そ、そうですね？ すみません。でも確かにしいなさんの帯のそこから落ちたような……」

首を傾げるしいなにエミルは慌てて頭を下げる。と、しいなはひよいとその紙を拾い上げた。

「まあ、あたしの方で調べてみるよ。誰かの手紙が落ちてたんならあたしから届けとくから」

「お願いね、しいな。じゃ、エミル。早くデートに行こよ」

「ク、クエストじゃなかったっけ？……」

マルタはぱちんとウインクをしてしいなに紙の件をお願いし、エミルを引っ張って

く。エミルもクエストがデートにすり替わっていることにツッコミを入れながら彼女に引つ張られていき、しいなはそれを生温かい目で見送った後、部屋に入ってしまった。

「あ、お帰りしいな」

「ただいま」

ルームメイトのコレットから挨拶を受け、しいなも挨拶を返すと自分用に割り当てられた椅子に座り、さつき拾った手紙を見る。

「どしたの？」

「ああ、ちよつとね」

「? あ、私ロイドと遊ぶ約束があるから。行つてきます」

「ああ、行つてらつしやい。あんまり遅くなるんじゃないよ」

「はーい」

しいなとまるで娘と母親みたいな掛け合いをしながらコレットは部屋を出ていく。それを見送つてからしいなは改めて手紙を確認、しかし宛名などは見当たらず、しいなは不思議そうに目を細める。

「……悪いね、ちよつと中身を検めさせてもらうよ」

相手も知らぬ手紙の差出人にそう言い、しいなは手紙を広げる。

「!?」

瞬間、しいなの目が見開かれた。

バンエルティア号の甲板。そこにいたアルヴィンが空を見上げていると、彼に向けて小鳥が一羽飛んでくる。アルヴィンが左腕を上げ、人差し指を伸ばすと小鳥は小枝に止まるようにその指に止まり、アルヴィンは右手で小鳥の足にくくられていた手紙を外し、中身を確認する。

「……………もう、時間もねえか……………」

そして彼は小さな声でそう呟いた。

## 第三十五話 見つけた希望、暗躍する絶望

「アンジュ、しばらく外出したいんだけど」

「あら、しいな。どうしたの？」

バンエルティア号のホール。いつもの事務処理をしていたアンジュにしいなが外出の許可を申請。アンジュがどうしたの、と尋ねる。

「あーほら、そろそろ世界情勢の調査を進めておきたくてね。ジルディアの牙の出現で戦争は一応収まってるけど、それがいつまで続くかも分からないし。悪いけどしばらく戻らないと思うから」

「なるほどね。分かりました、お願いしますね」

しいなからの説明を受けたアンジュは長期間の外出という申請を受理。やけに多い荷物を提げて船を出ていくしいなを「行ってらっしゃい」と手を振って送り出した。

「……それにしても、しいなにとしては荷物が多いわね。まるでどこかに攻め込もうとでもしてるみたい」

なんとなくそんな事を考え、口に出す。だがそこで独り言は終わり、彼女は再び事務処理へと戻った。

「リタ、調査の調子はどうですか？」

「あゝ。今はカイ達に取ってきてもらった化石のドキュメントを調べてるんだけど……大体、既に化石になっちゃってるものだから、ほとんどが鉱物のドキュメントなのよね」

食堂。おやつの時間ということでエステルに研究室から引つ張り出されたリタはエステルからの質問にそう答え、テーブルに突っ伏しながら「結局ツリガネトンボ草本来のドキュメントは、あまりわからなかったわ」と浮かない顔で回答を締めた。

「ウズマキフスベの方もまだだな。ただでさえ絶滅しているとされている……早く生息の時期に入ってくればいいのだが……」

研究班の一人であるウイルもそう唸っていた。

「まあ、根を詰め過ぎても身体に毒だろ」

と、カイがそう言ってるリタ、ウイル、エステルの前にお菓子を乗せた皿を一つずつ置いた。

「ユーリ直伝の蜜蜜ザツハトルテだ。疲れてる時は甘いものが一番ってな」

「わあ、ありがとうございます！」

「ん、さんきゅー」



「ただこう」

カイの言葉にエステルは顔を輝かせてお礼を言い、リタはさっさとお礼を言つて食べ始め、ウィルも静かにお礼を言うと食べ始める。カイもウィルの隣、リタの向かいに座ると自分の分の蜜蜜ザツハトルテにフォークを突き刺した。

「だが、絶滅してるのは面倒だな。まだ残ってるなら世界のどこだろうが取つて来てやるつてのに……」

「無茶しないでよね？　大怪我でもされたら寝覚めが悪くなるわ」

「はは、心配してくれてありがとよ」

カイがため息交じりに呟いた言葉にリタはぶつきらぼうながらもカイを心配している様子で返し、それにカイが笑いながら返すとリタは「そんなつもりじゃない！」と怒鳴つてばかりとザツハトルテを齧る。

「しかし……実際問題絶滅してたら手に入れようがないんだよな……今ある植物のドクメントでどうにかならないのか？」

「無茶を言うな。植物と一纏めにしても一つ一つドクメントは違う。そんなものを代用に出せるはずが……む？　ドクメントを……代用？」

「一つ一つ違うドクメント……生物の進化、混種……ドクメントの共通性……」

カイの言葉にウィルが呆れたように返すが、そこで何かに気づいたように沈黙。ぶつ

ぶつと何か呟いていた突如リタががたと立ち上がった。

「ちよつと！ ツリガネトンボ草って、何目何科何種!？」

「そうか、その手があった!!」

リタが立ちあがった直後ウィルも同じく席を立つ。そして二人はほとんど同時に叫んでザツハトルテを素早く食べ終わると「ご馳走様」と言葉少なく挨拶をして食堂から出ていこうとする。

「リ、リタ？ どうしたんです？」

「カイの言葉がヒントになったのよ！ 感謝するわ！」

「こうしてはいられん！ 急ぐぞ！」

ぼかんとするエステルにリタは先ほどまでの浮かない顔はどこへやら元気に笑って食堂を出ていく。それをカイとエステルはぼかんとした表情で見送り、顔を見合わせると思議そうに首を傾げ合うのであった。

「ふーい、甲板掃除完了つと。さて、昼寝でもすつかねえ」

「カイ、ロックスにおやつ作ってもらおう？」

数日後。甲板の掃除当番だったスパードは掃除用具を片づけながら伸びをし、部屋に

戻って昼寝でもしようかと考える。その横で同じく掃除当番だったカノンノはやはり掃除当番だったカイをおやつに誘っており、スパードはそれを横目で見ながら「お熱いねえ」とからかう。と、それを聞いたカノンノが顔を赤くして「違うよ違うよ」と慌て出し、スパードはキヒヒと意地の悪い笑みを浮かべる。

「あ、スパード君。丁度良かった」

「カイにカノンノも、良ければ聞いていってくれ」

「んお、どうしたんだよアンジユ？」

「ウイルさんにヴェイグも、どうしたんですか？」

ホールに入ったところでアンジユがスパードを、ウイルがカイとカノンノを呼ぶ。ホールで話し合いをしている二人の横にはヴェイグが立っており、カイ達三人も呼ばれて断る理由がさほどないため彼らの方に歩いていく。

「実は、数日前のカイの発言がヒントになつてな。ツリガネトンボ草自体は既に絶滅しているが、ツリガネトンボ草の進化種からツリガネトンボ草のドクメントを抽出する方法を思いついたんだ。上手くやれば進化種に受け継がれたドクメントで補完できるかもしれない」

ウイルの説明にアンジユが「絶滅したサーベルタイガーのルーツをトラやライオンに求めるようなものね」と例をあげて補足する。

「ツリガネトンボ草の進化種は14属2000種近くに及ぶ」

「2000種ウ!? おいおい待てよ、ンなもん集めきれわけねえだろオが!」

ウイルは凶鑑を見せながら説明し、だがその膨大な種類にスパードが素っ頓狂な悲鳴を上げた。

「無論、アドリビトムだけで集めていてはキリがない。比較的安全な場所にあるものはこの船のメンバーの故郷の人々や各国ギルドへ採取を依頼する予定だ」

「ウリズン帝国にも伝書鳩を飛ばして採取の依頼をしたわ。私達は、私達でしか集められないものを採取するのよ。それで……つと、その進化種の名称や分布が不明なものもあるけど、まずは判明しているものからね」

ウイルに続けてアンジユが進化種の名称分布が判明しているものから確実に採取をしていくと説明する。

「今回採取を依頼するのはアプソール霊峰の『オイルツリー』という樹のドクメントだ。オイルツリーの分布地への道は長らく崩落していたが、先日セルシウスに頼み、氷の橋をかけてもらった」

「ヴェイグ君は雪道にそれなりに慣れてるそうだから今回の採取を依頼したの。けど雪山つてもしもの事があるかもしれないでしょ? よかつたらスパード君やカイ達にも一緒に連れてもらいたいなあって」

ウィルが説明を終えるとアンジュがそう言い、にっこりとした笑顔に手を組むという聖女のお祈りスタイルでお願いを開始する。

「分かりました。俺は行きます」

「私も行くね」

「……チツ、しゃーねえな。俺も行ってやるぜ」

カイは二つ返事で依頼を受け、カノンノも了承。スパードも流れに乗せられたかやれやれと肩をすくめて同行を決めたのであった。

「じゃあ、俺達掃除終わらせたばかりでまだ準備も出来てないし、一度解散。三十分くらい後にまたホールに集合しよう」

「うん、分かった」

「おう」

「分かった」

カイの指示にカノンノ、スパード、ヴェイグは領いて了解の意を示す。それから準備が出来ていないカイ達三人はもちろん、ヴェイグも何か忘れ物でもあるのか船倉の居住区へと戻っていった。

「ではクレア様。買い出しの方、よろしくお願いいたします」

「はい。任せてください」

「申し訳ありません、夕食に使う香辛料を買い忘れていたとは……」

「いえいえ」

一方食堂。クレアはロックスから買い出しをお願いされ、カゴを手にこくんと頷く。普段買い出しとなると一つのギルドでも必要なものが多く、数人単位の班で手分けして行うのだが、今回はちよつと買い忘れたものを買に行きただしそこまでかさばるものを買うわけではないため彼女一人でも大丈夫ということだ。ロックスやアンジュへの挨拶もそこそこに、クレアは停泊していた港から街へと出て街中を歩いていく。

「お、クレアちゃん」

「あ、アルヴィンさん。こんにちは」

すると偶然街に出ていたのだろうかアルヴィンがクレアに声をかけ、クレアもにこつと微笑んで挨拶を返す。

「買い物か？」

「はい。ちよつと買い忘れがあったそうで……」

「そうか……うっし、俺もついてってやるよ。交渉だろうが荷物持ちだろうが任せとけ」

「え!?! いえ、でも悪いですし……」

クレアの目的を聞いたアルヴィンは頷いてそう返し、それを聞いたクレアが慌て出

す。

「まあ気にするなつて。これでも俺は商人だからな、商品の良し悪しを見る目と値引き交渉には自信があるぜ？」

につ、と笑つてみせるアルヴィン。それにクレアもくすりと微笑んだ。

「分かりました。ではお言葉に甘えます」

「おうよ、任せとけ」

アルヴィンの同行を決めてクレアは再び歩き出す。その後ろでアルヴィンはどこか緊張の面持ちでふうと息を吐いていた。

それからクレアは気づいたら人通りの少ない裏道を歩いていた。いつの間にか追い抜かれたアルヴィンに「香辛料買うのか。だったらいい店知ってるぜ」と先導された結果である。

「あ、あの……アルヴィンさん？」

「……悪い、クレアちゃん。この先にいい香辛料の店があるつて話は嘘なんだ……」

クレアの言葉にアルヴィンは良心の呵責を受けたような声で返し、振り返る。

「どうしてもクレアちゃんと二人きりになりたくてさ」

「どういう意味ですか？」

アルヴィンの言葉にクレアはやや警戒の目を向ける。年頃の美少女が年上の男性と

人気がないところで一緒、それなりに危険な香りがするシチュエーションである。

「むぐつ!？」

するとその瞬間クレアの背後から何者かの手が回り、彼女の口を押さえつける。それにクレアはじたばたと暴れるが口に押し当てられた布からもごもごこと声が出ただけの結果となり、不意にクレアの意識が消えたかのように彼女は脱力する。

「な、え?……」

その光景にアルヴィンがついていけないように目を丸くする。

「うふふ……」協力ありがとう♪」

その目の前で気絶したクレアを抱きかかえながら、紫色の髪をした青年がいやらしい笑みを浮かべていた。



## 第三十六話 雪山に継がれた命

「でエ、採つて来なきやなんねーオイルツリーってのはどんなモンなんだ？」

「寒冷地に生息する植物で、その名の通り油分を多く含むそうだ」

「外見的なモンは？」

「大型植物で、樹全体が赤いらしい。この環境の中では目立つから すぐ判別出来そう  
だ」

「大型？ そりやまた、持つて帰るのも一苦勞だな」

アブソール靈峰。ここに生息するオイルツリーのドクメント採取に来ていたスパードは目的ものの外見を尋ね、ヴェイグの説明から大型の樹木だと判断したスパードはめんどくさそうに表情を歪める。しかしヴェイグはコピーズ・ロッドを彼に見せた。

「コピーズ・ロッドを持つてきている。ドクメントさえ採取すればいいそうだ」

「ふーん。じゃあ、まあ楽だな」

ヴェイグの言葉にスパードは一安心したようにふんふんと頷く。その後両手を後ろに回して何か考えるように空を見上げた。

「しっかし、進化ねえ。化石になったアレよかずいぶん形状変わつてそうだな」

「もらった資料には、種子のサイズをより小さく、そして多くしていった進化種であると書かれていた。寒冷地で生き延びる為に、エネルギー効率の良い油脂の形で樹や種子に養分を蓄えるよう、進化したらしい」

スパードが思い出すのはツリガネトンボ草の化石。それについてヴェイグはもらった資料に書かれていた事を暗唱するように口にした。

「そんな進化種が世にあふれてるんだ。世界つて変化してるんだね……ヒトも変わってるのかな？」

「そうだな。ヴェラトローパから地上に降りた多くの人種も、何らかの変化はしているだろうな」

それを聞いた同行者の一人——カノンノが言うときカイが頷く。

「にしても、一つの生物から2000種つてなあ。どんだけだよ……ま、やるしかねーんだけど」

スパードはアドリビトムで集めきれぬわけないと狼狽した2000種にも及ぶツリガネトンボ草の進化種や混種を思い出しながら呟き、しかしやるしかないと言い直る。

「んじゃ、とつととやるとすつかねえ」

「ああ。急ぐ……なんとなく、嫌な予感がする」

スパードは伸びをしてこきこきと肩を鳴らしながらそう言い、カイもスパードの言葉

に頷くとふと虚空を見上げるのであった。

「しっかし、進化種ねえ……」

雪山を歩きながらスパードがふと呟くと、何かを思いついたようにニヤリと笑った。

「なあ。ヒトの進化種って、どんなのがいると思う？」

「……どういう意味だ」

スパードの唐突な話題にヴェイグは冷たい目でスパードを見る。なおヴェイグのこの目は素であり、特にスパードを呆れているとかそういうわけではない。

「例えば、ほら、種の存続の為にだな……狙ってる女の好みのタイプが見破れる進化種とか、スリーサイズがわかっちゃう進化種とか」

「……………」

スパードの話聞き、ヴェイグは一瞬で興味をなくしたのか無言で先に進む。

「だってよオ、ただでさえ出会いが少ない世の中だぜ？ そんな中から、カップルになれる確立なんてそれこそ……」

それに気づかず話し続けるスパードだが、少しするとヴェイグが先に進んでいるのに気づき「うおいつ！」と叫ぶ。

「無視かよっ!? 今のはツツコむところだろーが！」

ヴェイグはスパードの叫びも聞かず、むしろ「とつとと行くぞ」とやんわり注意をす。それにスパードは「つたく」と声を漏らすとため息をついた。

「はーやれやれ、ヴェイグには出会いの少ない苦しみが分かんねえのかねえ。なあカイ……つと」

スパードは参ったようにため息をつき、カイに同意を求めるが、直後すまなそうに笑った。

「いや、悪い悪い。お前にはカノンノがいたんだっけな。悪かった、忘れてくれ」

「なっ!? ち、ちちち違うよスパード! わ、私とカイはそういうんじやなくて……」

「あん? 違うのか? てつきりそういう仲なんだからお前とカイ、一緒の部屋なのかと思つてただけだよ」

「違うよ!? わ、私はカイの教育係で、レイもそうだったから一緒の部屋だったただけ……」

スパードの言葉に反応して顔を真っ赤にするカノンノ。それをスパードは面白がつてからかい、カノンノもむきになって反論する。スパードは完全に面白がつていた。

「でっ!!」

するとスパードの後頭部がつんつと衝撃が走る。

「あまりカノンノをからかうな」

カイが鞘に納めたままの刀でスパードを小突いたらしい。そのままカイはカノンノに「行くぞ」と促し、カノンノも無言で頷くとカイと一緒に先に進む。

「は……カイの方からカノンノへは脈無しなのかねえ。対してカノンノの方はと……ま、あんまからかいすぎても後が怖いし、この辺にしとくか」

スパードは自己流で分析を行いつつ、そろそろふざけるのはやめるかと思いつて先に行つた三人の後を追うのであつた。

それから雪山を、先頭をスパード、少し遅れてカイ、真ん中をカノンノ、しんがりをヴェイグという陣形で歩いていると、突然ヴェイグが足を止める。

「どうしたの、ヴェイグ？」

振り返つたカノンノが問いかけ、スパードとカイもどうかしたかと足を止めて振り返る。

「風に乗つて、声が聞こえた……」

「ハア？ そりやお前、ただの空耳じゃねーの？」

ヴェイグの呟きにスパードが不思議そうに聞き返す。

「きやあああ……」

しかしその次の瞬間、今度はカイ達三人の耳にも絹を裂くような女性の悲鳴が聞こえてきた。

「クレア?……」

「クレアは街に買出しに行つてたはずだ……」

「けど、今の声は……」

ヴェイグが声の主を言い当て、しかしカイはクレアは麓の町で買い出しをしているはずだと発言。しかしカノンも声がクレアのものとはよく似ている、と言いたげに言う。

「クレア……クレアアアアアアアアア!!!」

ヴェイグが絶叫しながら、声の聞こえてきた奥の道へと走る。

「オイ! 落ち着けて!!」

「痛ツ……何をする!! その手を離せ!!」

しかしスパードが咄嗟にヴェイグの長い三つ編みの髪を掴み、彼を止めた。しかし突然髪を引っ張られたヴェイグは怒り、振り返つて声を荒げる。

(やべエ! 咄嗟に髪の毛掴んじまった! こいつの髪、何でこんな長エンだよ!?)

スパードは慌てて髪から手を離れた後、ゴホンと咳払いをしてヴェイグを真剣な目で見た。

「……こうでもしなきゃ、お前は俺の話なんか聞かなかつたろーが。つたく……一人で暴走してんじゃねえ! お前がそんなで、確実にクレアを助け出す事なんて出来るのか? ちつたア、頭冷やせ!」

その言葉にヴェイグがはっとしたような表情になり、続けて面目なさそうにうつむいた。

「……そう、だな……スパードの言う通りだ……すまなかつた」

「おう。わかりやあいなんだよ」

「大丈夫だよ、ヴェイグ。私達だって一緒なんだから」

ようやく落ち着いたらしいヴェイグにスパードがうんうんと頷くとカノンもフォローに回る。

(危ねエ危ねエ……何とかそれっぽく誤魔化せたぜ)

その後ろでスパードは何とかそれっぽく誤魔化せたことに安堵の息を吐く。

「だが、もしかしたらクレアに何かあったのかも知れない。急ごう」

しかしカイは落ち着くのは当然だが急ぐよう主張。そこについては反論はないため彼らは一気に山奥へと走り出すのであった。

「クレア!」

「ヴェイグ……」

アブソール霊峰の奥。樹全体が赤い大型植物——オイルツリーを背にしてクレアは立っていた。

「ようこそ、アドリビトムの諸君。そして久しぶり、ヴェイグ」

ただしサレに抱きかかえられ、その首筋に剣を突きつけられながら。

「サレ！」

「やつと会えたね、ヴェイグ」

「ごめんなさい……ヴェイグ……街に出ていた時に——」

「ねえ、クレアちゃん。あんな場所で会うなんて、本当に運命を感じたよ……」

ヴェイグの怒りの声もどこ吹く風というように答えるサレは、クレアの言葉を遮って嫌な笑みを浮かべる。

「クレアちゃんには、キミ達をおびき寄せる餌になってもらおうと思ってね……でも、まさか君達の方……しかもヴェイグがやって来てくれるなんて、ますます運命を感じちゃうなあ」

「クレアを、クレアを離せっ!!!」

サレの言葉で我慢が限界になったのかヴェイグが大剣を抜き、サレ目掛けて突進する。

「ファイアボール！」

「!?!」

しかし別の方向から炎の弾丸が飛び、ヴェイグの行く手を阻む。炎、サレが得意とす



るのは風の魔術。つまり別の人間だ。

「サレ様に近づかないでもらおうか？」

「つ……………バカな……………お前は……………」

「ンな、馬鹿な……………」

出てきた色黒で金髪の剣士を見て、ヴェイグとスパーダが声を失う。カノンノが「そんな……………」と口を手で押さえた。

「フォックスさん!? どうして!？」

そして我慢できなかったように叫ぶ。先ほどヴェイグに攻撃を仕掛けてきたサレの仲間、それはウリズン帝国からアドリビトムに派遣された兵士——フォックスだった。

「……………フォックス、どういう事だ?？」

「どういう事も何もないさ。俺は元々サレ様の手下でね、まあ、所謂スパイってやつ?」「君達の行動はフォックスからしつかり聞かせてもらったよ。なんだっけ、このオイルツリーが必要だとかなんとか?」

カイの言葉に対しフォックスはアドリビトムで見せていた真面目な顔はどこへやら、チンピラのようなあくどい笑みを浮かべながら答え、サレはオイルツリーを見ながらそう答える。

「ああ、そういえば……………キミ達が働き手を奪ってくれたせいで、ホスチア星晶の採掘がストップし

てしまったんだっけ。ウリズン帝国に忠誠を誓う騎士として、これは許せない事だよね？」

「ケツ、国のお偉いさんぶつ殺してトンズラこいといって忠誠なんざ、騎士の風上にも置けねえな」

「ホステア星晶の採掘が、世界の危機を招いているんですよ！　今は国も、種族も奪い合うのを止めて、世界を守る為に心を一つにすべき時です！」

サレの言葉に一応仮にも騎士の家系であるスパードが吐き気を催したような表情で答え、クレアがそう訴える。

「だったら僕は、それを踏みにじるまでさ！　僕は人の心の力なんて信用しないからね……」

サレはそう言うときクレアをフォックスへ押し付け、クレアは逃げようとするがフォックスが力づくで抑えこむと剣を抜き、首筋に押さえるように突きつけて先ほどのサレのようにクレアを拘束する。

「人の心の力っていうのがあるのなら……これをどうにかしてみなよ！」

サレがそう言ってパチンと指を鳴らす。と、その瞬間突然オイルツリーが燃え上がった。

「なっ!?!　テ、テメエ何しやがる!?!」

「ははははは!! さあどうするんだい? この樹が必要なんだろう、早く消火しないと燃え尽きてしまうよ?」

スパードが叫ぶがサレは歪んだ笑みを浮かべながら嘲笑。カイがちつと舌打ちを叩く。

「カノンノ! 水属性魔術で消火を!」

「! う、うん!」

カイから指示を受け、驚愕に硬直していたカノンノは頷くと詠唱を開始する。

「魔神剣!」

「きやあつ!」

しかしその瞬間衝撃波がカノンノを襲い、詠唱を妨害する。

「くそ?! まだいやがったのか!」

まだ伏兵が隠れていたのかとスパードが辺りを見回す。

「ああ、そうそう。スパイはフォックスだけだと思つてたんだっけ? フッフ……ざあんねん」

それを見たサレがクククと笑い始め、同時に降り積もった雪を踏みしめ、一人の男性が影を背負つて現れる。

一方バンエルティア号が停泊している町。ジュード、アニー、ルカの医学生と医学生希望学生の三人は医学書や参考書、医療道具を買いに三人で買い物に出かけていた。そして今は医学生であるジュードをメインに三人で最近の医学論についての話の花を咲かせている。

「たっ、大変だー！ 裏路地で血まみれの男が発見されたらしいぞー！」

「通り魔か、通り魔なのか!？」

「早く、早く医者を呼べー!!」

すると突然そんな大騒ぎが聞こえ、ジュード達三人は顔を見合わせると騒ぎの方に行く。その騒ぎの方には人混みが出来ていた。

「すみません！ こちらに怪我人がいるって聞いたんです！」

「な、なんだ!? 医者か!？」

「私達はまだ医者ではありませんが、ジュードさんは医学生です！」

「そ、そうか！ 医者があるまで応急処置を頼めるか!？」

「もちろんです！ アニーとルカも手伝って！」

「はい！」

ジュードと町人は慌てながらも要点をまとめ、ジュードが応急処置を行う事に決定。人混みをかき分けながらその怪我人へと近づくと、

「「っ!」」

すると三人が息を飲む。先ほどの話通り血まみれ、特に背中を斬られたのだろうか、茶色のコートはボロボロでそこから酷い出血になっている。それだけではない。

「アルヴィン!?!」

怪我人は彼らの仲間——アルヴィンなのだ。ジュードが慌てて駆け寄り、アニーとルカが医療道具を準備する。

「ゆ、優等生、か?……」

「アルヴィン、喋っちゃダメだよー」

「ど、どうしてこんな怪我を!?!」

息も絶え絶えのアルヴィンにジュードが喋っちゃダメだと言い、アニーから受け取った脱脂綿をピンセットで挟み、消毒液に浸して怪我の場所を消毒する。アニーも何故アルヴィンがこんな大怪我をしたのかと尋ねた。

「やられた……サレだ……」

「サレって、ヴェイグさん達の村を襲った……」

「そんな!?!」

アルヴィンがそう証言する。突如現れたサレがクレアを誘拐、どこかへと消えてしまったと。ルカとアニーがそれに絶句する。

「それだけじゃねえ……ジュード、急いでバンエルティア号の皆に知らせるんだ……つづつ!」

「怪我人を放つてはおけないよ!」

怪我は思ったより深いのか痛みに呻きつつもバンエルティア号にクレアの誘拐を知らせろと言うアルヴィンにジュードが首を横に振る。

「いいから聞け! 俺を怪我させたのは……サレじゃねえんだ……」

「そんな……アルヴィン程の実力があつて、ここまでの怪我をさせる人なんて早々……」  
「不覚を取られた。サレがクレアちゃんを攫った時、駆けつけてきた奴がいて、安心しちまったんだ……アドリビトムの仲間だったんだからな」

「そ、それって!」

「アドリビトムに……裏切り者が?……」

アルヴィンの話を聞き、ルカとアニーが信じられないという様子で呟く。しかしアルヴィンはその信じられない真実をこくり、と頷いて肯定した。

「裏切り者の名前は……げほっ!」

そこまで言い、苦しくなったのかアルヴィンはげほつと咳き込む。

「そ、そんな……」

「まさか……」

「クソ、なんでテメエがつ!？」

アブソール霊峰の山奥。燃え盛るオイルツリーを背にし、影を背負った青年。その嘲るような笑みを浮かべた顔を見たカノンノが絶句、ヴェイグが信じられんというように呟くとスパードが声を荒げる。

「どういうつもりだ……」

最後にカイがギリツと歯ぎしりをし、睨みを利かせる。

「ゼロス!!!」

そしてその相手——ゼロス・ワイルダーの名前を怒りに燃えた声で告げたのであった。

「……悪いな、カイ」

その言葉に対し、ゼロスは静かに呟くと剣をひゆんと軽やかに振るうと涼やかどころか冷たい視線でカイ達四人を見る。それに対しスパードが拳を震わせた。

「……クソツタレが! 俺が言えるこつちやねえが、テメエロクデナシだが良い奴だつて思ってたのよ!」

「本当にスパードの言える事じゃないけど……嘘だよ、ゼロス!?! 何かの冗談でしょ!？」

スパイダが声を荒げ、カノンノがスパイダにツツコミを入れつつゼロスに呼びかける。

「冗談でもなんでもねーよ……本気で来ないと、お前ら……死ぬぜ?」

そう言い、ゼロスは胸元にかけての見覚えのないペンダントを握る。するとそこから凄まじいエネルギーが放出された。

「あれは……ホスチア星晶!」

「ホスチア星晶のエネルギーを……取り込んでいるというのか……」

カイが驚いたように叫び、ヴェイグが警戒を強める。その瞬間ゼロスの背中にオレンジ色の光の翼が具現、さらに剣や翼に紫電が走る。

「て……天使?……」

「ああ、言っただけだったか? 俺もコレット達と同じ天使なんだよ。つっても血は薄くてな、ホスチア星晶みたいな莫大なエネルギーで補助しねえとろくに羽も生やせねえ半端者さ」  
カノンノの呟きにゼロスは自嘲気味の薄い笑みでそう返し、その次の瞬間彼の目が鋭く研ぎ澄まされる。

「さあ、始めようぜ!」

「上等だ。ぶん殴ってバンエルティア号に引きずっていつてアンジュさんから説教受けさせてやる!」



ゼロスの言葉に対しカイも刀を抜いて叫び返し、それを合図に全員が戦闘体勢を取った。

「フフフ……仲間裏切られてるのを目の当たりにしてもまだ、絶望はしないか……」  
それを見たサレも剣を構え直し、フォックスをちらりと見る。

「クレアちゃんを逃がすな。だが必要以上に傷つける事も許さない……奴らは僕の獲物だからね」

「はっ!」

サレの指示にフォックスも素直に従い、クレアを連れて下がっていく。

「さあ、本気で叩き潰してやるよ……君達、ヒトの心をね!!!」

「面白え! ケツから蹴り上げてやるぜ!」

「待つてろ、クレア……」

サレの言葉にスパーダが声を荒げて返し、ヴェイグも静かに闘志を燃やしながらそう呟いた。

## 第三十七話 裏切りの天使

「どけええええええつ!!」

アブソール霊峰の山奥にそんな怒号が響く。その声の主——ヴェイグは憤怒の形相で目の前の敵——サレ目掛けて襲い掛かる。

「あつはははは！ どうしたんだいヴェイグ。その程度？」

その怒りに燃える剣をサレはあつさりといなし、ヴェイグの心臓目掛けて剣を突き出す。

「させるかつ！」

「おっ!？」

しかしその剣がヴェイグの鎧を貫き心臓を穿つ前にスパーダが横からタツクル。サレを押してヴェイグを助ける。

「今だ！ クレアを助けにつ——」

「させると思ふかい？ ウィンドエツジ！」

「——がっ!？」

「スパーダ!!」

自分がサレを押さえつけている間にヴェイグにクレアを助けに行かせようとするスパードだが、サレはほぼ無詠唱で初級魔術を発動。風の刃でスパードを斬りつける。それを見たヴェイグは咄嗟にスパードを助けるためサレ目掛けて剣を振るう。しかしサレはその剣を間一髪でかわし、すぐに体勢を立て直した。二対一、それなのに攻め切る事が出来ず二人は歯噛みした。

「ふっふふ。心配しなくてもいいよ、ヴェイグ。クレアちゃんには傷一つつけない……君達が立ち上がれなくなつてから、ゆっくり、ゆっくり甚振つて君達の心をへし折つてあげるからね！」

「下種野郎がっ！」

サレは「ふふふ」と怪しく笑いながらそう言うと「ひやはははは」と大きく笑い始める。その姿に先ほどの風の刃で切った頬から血を流しながら、スパードは怒りに吼えたのであった。

「カノンノ！ 俺がゼロスと戦う！ お前はオイルツリーの消火に行くんだ！」

「うん！」

カイが指示を出しながらゼロスに向かい、カノンノも頷くとサレの策略によつて燃え

盛るオイルツリーへと走る。

「おっとカノンノちゃん。俺を放っておくなんて寂しいなあ」

「っ!?!」

しかし突如カノンノの目の前にゼロスが現れ、カノンノが怯んだ一瞬でゼロスは彼女へと剣を振るった。

「頭を下げろ!」

「!」

そこにカイの指示が飛び、カノンノは咄嗟に頭を両手で押さええてしゃがみこむ。

「うおっと!?!」

直後ゼロスの焦った声とキンキンツと金属音が響く。恐らくカイが苦無を投げつけてゼロスを牽制したんだ。そう考えながらカノンノは這うようにその場を移動し始めた。

「はあっ!!」

カイの、風をも斬り裂くような勢いで放たれた斬撃をゼロスはバックステップを踏んでかわすとそのままノンステップで全身し攻撃へと移る。背中に生えた光の羽によつ

て生み出された飛翔能力を生かし、バックステップは足で、だが前進は飛行することによってノンステップでの攻撃を可能にし、結果ゼロスのスピードが増していた。

「チッ！」

カイも咄嗟に左手で短刀を引き抜き手数を増やす。しかしゼロスは飛行能力を生かして四方八方から攻め立て、カイの手数でさえ防戦一方になっていた。

「牙連刃！」

アンジユ直伝の短剣術——鎌鼬を起こさんばかりの短刀の連続斬りでゼロスを牽制。

「からの——」

刀を僅かに上へと放り投げ、その隙に右手に苦無を握り、それに炎のmanaを込める。

「——曼珠沙華!!」

「ちいっ！」

手首のスナップで燃える苦無を投げつける。それをゼロスが盾を構えて防ぐと同時、カイは上に投げ上げた刀を握りしめ、左腕を後ろに下げて刀を左腕の方へ持つていく。

「ぜあっ!!」

渾身の力を込めた薙ぎ払い、それがゼロスの構えていた盾を弾き、さらにゼロスを吹き飛ばして体勢を崩させる。

「取った！」

短刀を握る左手に力を込め、地面を蹴つて倒れ行くゼロスに突進。そのままゼロスにトドメを刺すため短刀を突き出そうとする。

「甘え！」

「がっ!？」

しかし、ゼロスは鋭い蹴りをカイの腹に入れる。カウンター、しかし倒れていく体勢で放てるはずもない力強い一撃に今度はカイが吹き飛び、尻もちをつく。その間にゼロスは不自然な軌道でぐるんと後ろ向きに回転、体勢を立て直す。

「だーから、今の俺は空を飛べるんだっての」

重力に従う生物では不可能な挙動。だが、今のゼロスにとって重力の束縛はそこまでの意味を持たない。人間は体勢を崩した状態になれば回避不能、と反射的にトドメに移行してしまったカイはそれを見落としており、ゼロスは今度は自分が体勢を崩し回避不能になったカイ目掛けて剣を振り上げる。

「落ちて、ライトニング！」

「！ っと」

だが剣が振り下ろされようとしたその時、そんな声が響くと共にゼロスの真上から雷が落ち、ゼロスはバックステップを踏んで落雷をかわすとニヤリと笑った。

「やってくれるね、カノンノちゃん」

その不敵な目の先には、カイにオイルツリーの消火を指示されたはずのカノンノが立っていた。

「カノンノ……」

「カイ、無茶はダメだよ……ゼロスはあるんだけど、強い」

カイの呟きに対し、カノンノは言葉静かにそう言う。その言葉に対し、カイはふっと笑うと立ち上がった。

「確かにな。俺一人ではどうにかなる相手じゃなかったか」

「うん。ここは二人で戦おう……すぐに倒せば、消火も間に合うよ」

カイが刀を構え直す横で、カノンノも大剣を構え直す。ゼロスもそんな二人の姿にふっと一つ笑みを浮かべると構えを取り直すのであった。

「ふうん。仲間と戦ってるっていうのに、まだ余裕があるか……」

「テメエこそ、随分余裕見せてくれてんなっ!!」

一方サレはゼロスと戦うカイ達を見ながら呟き、それに対しスパードが怒号を上げて剣を振るう。しかしサレはカイ達の方を注意しながらスパードの二刀に対抗。己の剣を振り上げてスパードの剣を上空へと弾き飛ばす。

「終わりだ」

「そうはいかんー！」

振り上げた剣をがら空きになったスパードの脳天目掛けて振り下ろそうとするサレ。だがそこにヴェイグが割り込んで剣を横薙ぎに振るいサレを胴から両断しようとする。

「おっと」

しかしサレはまるで風に踊る木の葉が人の手から逃れるかのように、ヴェイグの剣から逃れてバックステップを踏む。

「甘エんだよー！」

「ー！」

しかし、さらにスパードが続く。彼は上空に弾き飛ばされた二刀をジャンプで掴み取るとそのままサレ目掛けて斬りかかる。いきなりの攻撃に対するアドリブのリカバリーにしては早すぎる。

（誘われたか）

己の身と命を賭けてサレの攻撃を誘導、そこにヴェイグが攻撃を仕掛けて倒せればそれでよし。回避されたら自分が追撃を仕掛ける。ヴェイグの第二撃が良くも悪くも成功する事が前提、そもそも第二撃を仕掛けられなければ無防備な自分は大ダメージ、最悪死ぬこともあり得る作戦。

（反吐が出るねー！）



仲間を信じているからこそできる。そう言っているような作戦にサレは齒噛みし、即座に詠唱。

「疾風の爪よ、ガステイーネイル！」

「ぐあっ!!」

風が刃となり、鋭い爪のように上空のスパルダを切り刻む。スパルダはその痛みに耐えて着地、その隙をヴェイグがカバーする。だが同時にサレにも体勢を立て直す猶予を与えてしまった。

「悪い、ヴェイグ」

「気にするな」

立ち直したスパルダは傷ついた帽子を被り直しながらヴェイグに謝罪、ヴェイグが言葉少なくそう返すと二人は再びサレを睨みつける。その光景にサレは口内でチツと舌打ちを叩いた。

「やあああああっ!!」

「とっ!」

一方ゼロスと相対するカノンノは身の丈程もある大剣を振るい、ゼロスはその剣を盾

で防ぎつつ衝撃を後ろに飛んで緩和させる。

「取った!」

「っ!」

しかしそこに背後からカイが斬りかかり、咄嗟にゼロスは後ろを向いて剣を振るい、カイの刀を受け止める。だが次の瞬間カイの左手が動く。その手には短刀が握られていた。

「くそ! 落ちろ、ライトニング!」

「づっ!?!」

辛うじて詠唱が間に合い、落雷がカイを撃つ。その一撃に一瞬麻痺して動きが止まったカイを蹴り飛ばしながらゼロスはカノソの追撃を回避し、離脱。体勢を立て直す。

「つ……ゼロスお前、そんなに強いなら普段の仕事も真面目にしろよ」

「はあつ、仕事は毎日毎日後を考えなきゃ体がもたねえけど、今は後のこと考える余裕もねえ。出し惜しみが出来ないんだよ」

身体の麻痺が取れたカイはゼロスに皮肉を放つが、ゼロスもそう言い返す。

「ああそうかい!」

叫び、その瞬間彼の姿が消え同時にさっきまで彼が立っていた場所の足元の雪が舞い散る。そしてゼロスの背後にカイが現れ、彼は鞘に収めていた刀に手をかけ、高速で抜

き放つ。

「お前はそういう時、敵の背後に回って攻撃を仕掛けてくる」

「!?!」

しかしゼロスはそれを見切っていたように、振り返る事すらせずに盾でその刀を受け止めてみせた。

「ふっ!」

「があっ!?!」

さらに振り向きざま、居合いを防がれて驚愕に固まっていたカイの腹に鋭い蹴りを入れて吹き飛ばし、カイは雪の上をごろごろと転がる。ゼロスはそれを眺めながら足を下ろし、剣を構え直した。

「カイッ!」

それを見たカノンノが信じられないというような表情を見せつつ、カイが体勢を立て直す時間を稼ごうと大剣を振り上げるとゼロスへと斬りかかった。

「甘え」

「っ!?!」

しかしゼロスはカイを注視していたのが嘘のように彼から目を離すとカノンノに剣を向ける。誘い込まれた、とカノンノは直感するが既に遅く、ならば真正面から打ち破

ろうと大剣を振り下ろす。

「おっと」

「え!？」

が、その剣が振り下ろされることはなかった。何故か、剣の支点である腕がゼロスの左手に押さえられてしまったせいだ。

「カノンノちゃんに限らず、ヴェイグ君とかの使う大剣はその重量を生かして振り下ろされれば厄介だ。なら話は簡単……振り下ろさせなけりゃいい。剣を封じて、ついでに大剣を握る両腕も押さえられて一石二鳥ってね」

右手が剣を握っていないなければちつちつと指を振ってキザに決めていそうなほどに平然と語るゼロスだが、動きを封じられたカノンノは啞然とするしかない。剣を振り下ろさせなければいい。そう言うのは簡単だ、しかしそのためには相手の腕を押さえるために相手に近づかなければならず、万一失敗すれば逆に一番危険だと語る振り下ろしを無防備にくらう羽目になる。

だがその変形白刃取りが成功した今、カノンノは剣を動かすどころかしつかり掴まれた左腕を動かす事すらままならない。かと言って右手を離してしまえばもし手を離された時左手一本で上段に構えた剣を支えなければならず、それは不可能。バランスを崩して逆に隙を見せる羽目になる。剣を離すなど論外、落っこちてきた剣が頭に当たって

ばたんきゅーは目に見える。つまりカノンノの剣は完全に封じられていた。ここまで接近されていては詠唱の隙もない。

「獅子——」

それなら体術で戦えばいい。カノンノはそう切り替え、左膝に闘気を集中、獅子を象った衝撃波を放つ膝蹴りを叩き込まんとする。

「おっと」

「——戦っ!？」

しかしそれさえもゼロスは読んでいたのか右足でカノンノの膝を押さえつけ、獅子戦吼を封じてみせる。

「きゃっ!？」

さらに続けて左足で、カノンノの身体を支える右足に足払いをかけると同時に手を離し、軸足を払われた上に上段に構えていた大剣を支える手を離されたカノンノはバランスを崩してずっこける。だがゼロスは天使の飛行能力によって両足を使ってもなおバランスを崩すことはない。

「落ちな、ライトニング」

「きゃあああああっ!？」

さらにゼロスは詠唱し魔術を発動。カノンノ目掛けて雷を落として攻撃、同時に電撃

で麻痺させる。

「悪いけど、しばらく動けなくなってもらうぜ」

そう言い、ゼロスは倒れたカノンノを見下ろしながら剣を振り上げる。

「！」

が、ゼロスは直後振り返って盾を構える。盾からキンキンツツという音が響き、直後ゼロスに斬りかかった。

「相変わらず、カノンノちゃんの事になると速いな！」

ゼロスもそう言っただけで斬り合いに応えるが、カイは至近距離から苦無を投げつけ、しかもかわして地面に刺さった苦無からは炎が吹き出るわ氷槍が突き出るわ電撃が流れるわ岩の槍が突き出るわの消費を気にしない総攻撃。しかしゼロスはその猛攻の中でカイはさりげなくゼロスがカノンノから距離を取るように仕向けているのに気づく。

（ほんとに……カノンノちゃんが大事なんだねえ）

ふ、とゼロスは小さく笑みを浮かべる。果たしてその理由はなんなのだろうか、と考えたくもなるがそんな隙は見せてくれそうにもない。とにかくその思考は頭の片隅に追いやり、ゼロスは自分の顔目掛けて突き出された刀を顔を横に動かしてかわす。しかしかわしきれず、頬に一筋の傷が走った。

「やってくれるな……」

こちらの動きに即座に対応してくるカイにゼロスは微笑を浮かべて盾を顔を覆うように構え、直後カイが至近距離から投げつけた苦無を防ぐ。

「影走斬!!」

「っ!!」

しかしカイの攻撃は続き、牽制の苦無を防御させて防御が空いたところに高速で突進、すれ違いざまに渾身の一撃を叩き込む。ゼロスは腹を斬られるが辛うじて刃をバツクステップでかわし、胴から真つ二つにせんばかりの斬撃を動ける程度の出血に留める。

「斬魔!!——」

だが回復させる間は与えないとばかりに、カイがさらに背後から襲い掛かる。ゼロスは背後から迫る熱気に回復魔術を詠唱する暇もなく振り返り、熱気に向けて盾を構える。直後炎のManaによって発生した炎を纏った刀が盾に阻まれる。

「——龍炎剣!!」

突きは阻まれ、しかし十字斬りの薙ぎ払いが盾を弾き、振り下ろしがゼロスの左肩を捉える。刃に斬られ、熱気に焼かれる痛みにもゼロスは端正な顔を歪めつつ右手の剣を握りしめた。同時に剣に紫電が走り疾風が纏う。

「風雷神剣!!」

空を切り裂き高速で突き出された剣はカイの脇腹を抉り、同時に体内に電流を流してカイにダメージを与える。しかしカイは脇腹を抉られつつも炎を纏った足で回り蹴りを喰らわせてゼロスを蹴り飛ばし、対するゼロスも蹴り飛ばされながら剣を回転させ、吹き飛ばされる衝撃を敢えて利用して剣を引き抜き、より深くカイの脇腹を抉り取る。

「……」

「くそ、つたく。こりやこの仕事が終わつたら入院かな。美人のナースさんがいる病院がこの辺にありやいいんだが」

肉を抉り取られた脇腹を左手で押さえながら無言で痛みに僅かに顔をしかめるカイと、もはや盾を装備した左腕を上げる余力もないままに軽口を叩くゼロス。脇腹を押さえる左手が真っ赤に染まり、ゼロスも先ほど斬られた腹の傷が開いて血が流れ出ている。互いに満身創痍、向かい合う二人の周りには血によって赤く染まる雪が積もっていた。

「しゃあ!!」

互いに気合を入れて突進、カイは刀を右手で逆手に握りながら、捻りを加えてジャンプし大回転。遠心力と重力を利用して威力を最大限に高めてゼロスに斬りかかる。

「閃光——」

しかしゼロスも負けじと回転、巻き起こる風が竜巻のように吹き上がってカイの振り



下ろす刀の威力を押しさえこむ。

「——墜刃牙!!!」

そして空中のカイ目掛けて渾身の突きを叩き込み、カイが辛うじて防御へと回した刀を根元からへし折る。

「まだだ!」

だがカイ自身にその刃は届かず、カイは着地すると同時に構え、左手の掌底をゼロスの腹へと叩き込む。真つ赤に染まった掌底により、ゼロスの腹が赤く染まる。

「これで——」

掌底を決められ、動きが止まったゼロスにカイは右手で追撃を仕掛ける。その手には短刀が握られていた。

「カイ!! ダメ!!!」

「——最後だ!」

ようやく痺れが取れ、立ち上がったカノンノが声を上げる。しかしもう止まらない。カイの短刀が突き刺さり、辺りに鮮血が飛び散る。

「やって……くれたな……」

ゼロスがひひつと不敵な笑みを浮かべ、力が抜けていくように倒れる。カイは短刀を引き抜くと振り返り様に振るう。短刀にべつとりとついた血が空中へと払われ、降って

いく雪さえも赤く染め上げる。倒れたゼロスからも真つ赤な液体が広がっていく。振り返ったカイはもはやゼロスには一瞥もくれず、彼の真つ赤な左手が僅かにぶるぶると震え、しかしそれを隠すように彼のズボンのポケットへとしまわれた。

## 第三十八話 心と絆とピーチパイ

「は、ははっ……あっははははははは!!」

アブソール霊峰の山奥にそんな笑い声が響く。相手を心から嘲るようなその笑い声の主——サレは嘲笑の顔のまま、目の前で動揺を隠せずにいるヴェイグを一瞥する。

「どうだいヴェイグ!? 仲間同士が殺し合い、仲間が仲間を殺す光景は!? 所詮絆なんて、人の心なんてそんなものなんだよ!!」

サレが嘲笑するのはヴェイグのアドリビトムの仲間であるカイが同じくアドリビトムの仲間であつたゼロスを殺したこと。

「っ……違うー!」

ヴェイグはサレの叫びに一瞬声を詰まらせる。だが、次の瞬間詰まっていた声が吐き出され、鋭い大剣の一閃がサレを襲う。

「おっと!」

「カイの事だ、上手く手加減をしたはず……すぐに連れていけばまだ命は助かるはずだ……」

「ふふふ……なら、やってみなよ!」

ヴェイグの強い反論にサレはしかし笑いながらそう答え、剣を構え直す。自分の心臓を狙うように切つ先を向けてくるサレを睨みつけ、ヴェイグも大剣を正眼の構えに取り直した。

「あ……あ……」

赤く染まった雪、そこに倒れるゼロスとそれを彼の隣で見下ろすように立ち尽くすカイ。カノンノはその光景を見て呆然としていた。カイがゼロスを殺した。その現実を信じられないように彼女は震える。

「う、ううん、でも……助けなきや……」

しかし震えながらも彼女は歩き出す。ダメージによつて身体は重いがまだ回復魔術を使うくらいは出来るはずだ。そう思つて彼女はゼロスの方に駆け寄ろうとする。

「来るな、カノンノ！」

「!？」

だがその時カイからそんな鋭い声が飛び、カノンノはびくりと震えると足を止める。

「来ても……無駄だ」

彼は冷たいまでの口調でそうカノンノに言う。来ても無駄、その意味する言葉を考へ、一つの結論に至ると彼女は信じられないというような表情でがくと膝をつき、地

面に座り込んでしまっていた。

「幻龍斬!!」

鋭く突進、斬り下げのフェイントを入れて思い切り斬り上げる。身の丈程もある大剣を使っているとは思えない速さを持つそれを、サレは難なく受け流していた。

「どうしたんだいヴェイグ、攻撃が粗くなってるよう。」

逆に不敵な笑みを浮かべて挑発する余裕まで見せながら、サレは右手に握るレイピアをヴェイグの顔面目掛けて突き出す。咄嗟に顔を横に逸らしてレイピアをかわすが、しかし避けきれずにヴェイグの頬が切れて一筋の血が流れた。

「く……」

自分の顔のすぐ横を通ったレイピアに戦慄しつつも、ヴェイグは怯まずにサレを睨みつける。

「下がれ、ヴェイグ!」

「!」

しかしその時後ろから声が飛び、ヴェイグははつとなると咄嗟に後ろに下がる。その時先ほどまでヴェイグの首があったところをサレの剣が一閃していた。もし下がっていなければヴェイグの首は確実に斬り裂かれている。

「風よ切り刻め！ ウィンドカッター！」

さらにスパードの詠唱が響き、三方向から風の刃がブーメランのように弧を描いてサレに襲い掛かり、サレも咄嗟にバックステップを踏んで距離を取ると共に風の刃を回避する。

「すまん、スパード」

「気にすんなよ。それより熱くなりすぎんじゃねエ」

フオローをしてくれたスパードにお礼を言うヴェイグに対し、スパードは静かにそう返す。

「言つたろうが。テメエ一人で暴走してて確実にクレアを助けられるとは限らねエ。俺達だつて一緒なんだ、ちつと頭冷やせよ」

「……ああ」

スパードからの忠告を受け、ヴェイグは静かに頷くと冷静さを取り戻した顔つきで大剣を正眼に構え、スパードも二刀を構えてステップを踏むようにゆらゆらと揺れながら二人は息を合わせる。

「行くぞ！」

そして二人は全く同時に飛び出した。

「斬り刻め、ウィンドエッジ！」

サレは微笑を浮かべると指一本動かすことなく魔術を発動、不可視の空気が風の刃となりヴェイグ達に襲い掛かる。しかし同じ属性の魔術を使うスパイダはそれを見切つてスピードを落とすことなく回避するとサレに突進、二刀流の手数を生かして斬り込んだ。

「甘いね」

しかしサレは剣を一本の剣のみでスパイダの二刀をしのぎ切り、逆にスパイダが二刀をクロスさせたのを見切つて剣を押し当て、鏝迫り合いに持ち込む。だがスパイダもそこまでは予想していたようにニヤリと笑うと片足の先を雪に入れ、思い切り蹴り上げてまるで砂をかけるようにサレの顔面に当てる。その荒い攻撃にサレも一瞬怯んでたまらず数歩後ろに下がる。

「舐めるな、ウィンドエッジ！」

「ぐあつ!？」

だがサレはただでは終わらず、後ろに下がりとつ魔術を発動。適当な狙いだつたのだがスパイダの悲鳴と彼の右足から飛ぶ血が風の刃の命中を示し、そうすぐには動ける傷ではない事をサレは手ごたえから察して微笑する。

「っ！ 今だ、ヴェイグ！」

「！」

しかしそこに、素早くバックステップを踏むスパイダの後ろからヴェイグが大剣を振り上げてサレに斬りかかる。前蹴りによる雪かけとバックステップをほぼ同時にやっている上に右足を怪我したためバランスを取るのに失敗して尻もちをついているがその隙はヴェイグが埋める。さらにこの一撃で決めるといふ闘志をサレは感じ取った。突きと機動力に特化させた細剣ではヴェイグの大剣を防ぐことは不可能、バックステップによる回避も間に合わない。

「ウ、ウォールウインド！」

咄嗟に横殴りの突風を放ち、ヴェイグの大剣の軌道が僅かに横に逸れると同時にサレも突風の向きとは逆の方向にステップを踏んで大剣をギリギリでかわす。しかし彼を着ている服の肩部に剣が掠り、大剣に纏っていた冷気が僅かに服を凍らせる。一步遅ければ右肩を持っていかれている、それほどにギリギリでの回避成功だった。

（この僕が、防衛魔術を……）

自分が好む魔術の使い方は暴風による蹂躪や風の刃による罫り殺し。そんな自分が万 one のためにと半ば馬鹿にしながら覚えた防衛魔術を使わされた事にサレの心にまたも屈辱が走った。

「死ねえ、ヴェイグ!!」

その屈辱を与えた相手——ヴェイグは渾身の力による振り下ろしを行った結果、その



勢いで動けなくなっているはず。大剣使いの弱点を的確に狙い、サレは細剣を構え、ヴェイグの顔面目掛けて突き出していった。狙うは目、生物の共通の弱点であると同時に強い心を示すようなその光を潰そうとサレは狙う。

「ぬんー！」

「な!?!」

だがヴェイグは両手で振り下ろした剣を右手一本で振り上げ、乱暴なまるで薙ぎ払うような剣がサレの剣を弾いて防ぐ。しかしそれは相手も回避され、反撃に対する抵抗や牽制だったのだらう。乱暴な薙ぎ払いは重心の移動や反動が考えられておらずヴェイグは雪の上でたたらを踏む。それならば軽量の細剣を操るサレの方が攻撃態勢を整えるのは早い。

「悪あがきもそこまでだ!!」

端正な顔に凶暴な笑みを浮かべたサレの凶刃が再びヴェイグを狙う。回避は間に合わない、防御も不可能。取った、とサレは確信する。

「ウインドカッター!」

「っ!?!」

ヴェイグに剣を突き出す直前、そんな声が響くと同時にサレ目掛けて不可視の刃が舞う。サレの着ている服は特殊な魔術布で編まれており、粗悪な鎧とは比べ物にならない

防御力を持つと共に風属性の攻撃に対する耐性を与えている。しかし顔目掛けて襲い掛かる不可視の刃をサレは人間としての反射で庇っていた。

「俺を忘れてもらっちゃ困るぜ」

「この死にぞこないがアアアアアアア!!!」

ニヤリ、とサレに右手を向けていたスパードが不敵な笑みを浮かべる。右足からは血が流れており、機動力こそ奪われているが魔術を撃つなら支障はない。その反撃にサレが怒号を上げるが、一瞬遅れて我に返る。

「はあああつー!」

しかしもう遅く、ヴェイグは圧倒的なオーラに身を包んでいた。限界突破、オーバーリミッツその力が大剣に伝わり、大剣がより巨大な氷の剣となる。

「絶対なる終焉、それが貴様の運命だ!」

「う、うおおおおおつー!」

口上と共に突進、その勢いを込めて大剣を振り下ろす。それに対抗するためサレもレイピアを突き出した。小規模の竜巻を纏ったそれは触れたものを引き千切る力をそなえていたが、風のレイピアは氷の大剣とぶつかり合うと同時に砕け散り、それだけにとどまらずサレの右肘から先をも持つていく。自分の右腕が斬り落とされたのに気づいたサレが「な」と絶句して目を見開くと同時、鋭く、それでいて重く振り下ろした大剣

がサレを捉え、解放された冷氣がサレの身体を一瞬で氷漬けにする。「絶氷の剣、その身に刻め！」

しかしまだ終わらない。突進斬りの勢いでサレの右隣に回り込んだヴェイグは大剣をびゅんと一振るいすると大上段へと構える。

「奥義!! セルシウスキャリバー!!!」

「ぐ……ぐあああああああつ!!!」

一閃。その一撃は氷漬けになったサレを斬り裂き、氷が砕けたサレはついに雪の地面へと倒れ伏した。

「終わりだ、サレ。大人しく降参しろ」

ヴェイグは大剣の切っ先をサレへと突きつける。サレの端正な顔は顔中細かい傷だらけ、血管まで届いた傷からは血が流れていた。さらに右腕も肘から先が斬り飛ばされ、大ダメージで魔術を使う程の余裕すらない。もはや戦いにならないだろう。

「は、ははっ……ふざけてるのかい?……そうだね。確かに僕は君達に負けたんだろう……剣による勝負にはね」

サレはそう言い、クククツと気味悪く笑う。

「だけど、君達の心を踏みにじるといふ勝負には勝たせてもらうよ!! フォックス!!」

「!」

サレの叫びと同時に、ヴェイグがしまったとフォックスに目を向ける。

「クレアちゃんを殺せえ!!!」

その命令を受け、フォックスは「待つてました」と言わんばかりに獰猛な笑みを浮かべ、クレアを乱暴に突き飛ばすと剣を振り上げる。

「きやああああああああつ!!!」

「クレアアアアアアアアアッ!!!」

クレアの悲鳴とヴェイグの叫びが重なり合う。ヴェイグが重荷になる大剣を投げ捨てて走り、カノンノとスパーダが魔術を詠唱するがどう考えても間に合わない。

「ヒ、ヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ!!! 僕の勝ちだ!!!」

サレがその光景に高笑いをする。ヴェイグの一番大事なものの、クレアを目の前で殺して絶望させ、心を踏みにじる。その最大の目的だけは達成させられる確信による笑い声だった。

「ライトニングッ!!!」

「ぎやあつ!?!」

そこに男の声が響き、同時に落雷がフォックスの剣を撃つてフォックス自身も痺れさせる。

「おおおおおつ!!!」

「がふっ!？」

そこに突進の勢いを込めたヴェイグの拳が決まり、フォックスを殴り飛ばす。

「クレア、大丈夫か!？」

「え、ええ……ありがとう、ヴェイグ」

フォックスを殴り飛ばしたことを確認したヴェイグがクレアに駆け寄り、クレアもやっと安心したように微笑み、ヴェイグに心からのお礼の言葉を述べていた。

「え?……」

そんな中、カノンノは呆けた声を出していた。いや、カノンノだけではない。スパードも、我に返ったヴェイグもそういえば、という感じだが声を漏らす。

「へっへー。悪いなサレ、大逆転ってやつだ。俺様かっこいい♪」

そして先ほどライトニングを放った男——ゼロス・ワイルダーはにししつと笑ってサレに声をかけていた。

「ば、馬鹿な……ゼロス、お前はカイに殺されたはず!？」

「おー。ありやあギリギリだったぜえ……カイが気づいてくれてよかったよかった」

サレの怒号にゼロスはニヤニヤと笑う。その隣でカイもふつと笑った。

「ゼロスが裏切るには、何か理由があるはずだ。サレの事だから俺達がゼロスを殺すくらいは想定していただろうしな。だから——」

カイはそこまで言うのと左手の甲を見せる。その甲は何かを思いつき突き刺したように一本の線状の穴が開いていた。

「——俺がゼロスの腹にナイフを刺したと見せかけて、実際には俺の左手にナイフを刺したってわけだ」

「んで、その後俺は死んだふりしてチャンスを伺ってたのさ。あらかじめなるべく腹部を狙って傷つけさせといたから案外違和感なかっただろ？」

「な……」

カイとゼロスは相談も出来ない殺し合いの最中、カイはゼロスが裏切るはずがない。ゼロスはカイが自分を本気で殺すはずがない、殺した振りをしてくれると信じて一芝居打っていた。それにサレが信じられないものを見るような表情を見せる。が、その顔はすぐ憤怒に染まり上がった。

「くそ……ふざけるな、ゼロス!!! 今すぐに星晶の力を取り込んでこいつら全員始末しろお!!! 妹の命がどうなってもいいのかわつ!」

「妹?……」

サレの怒号にカノンノが呆けた声を出す。

「おう。俺は妹、セレスを人質に取られてサレの言いなりになってたわけだ……でもまあ、もう心配はないはずだぜ」

「黙れ、僕から定期報告が来なくなったらお前の妹はすぐにでも——」  
「ゼロスがどうかしたのかい？」

ゼロスのあつけらんかんとした説明口調に対し、サレがそう喚き散らす。しかしそれを遮るように新たな女性の声が響いたと思うとカイの横に煙が走る。そしてその煙の中から紫色の服を着た、黒髪の女性が姿を現す。

「しいな」

「待たせたね、ゼロス。お届けものだよ」

カイが咄くのを聞かずに、女性——しいなはそう言つて自分の隣に立つ、大きな帽子を被つた身なりの良い、ゼロスと同じ赤髪の少女をゼロスの前に出す。

「サンキューハニー」

その姿を見たゼロスは一安心したように微笑んだ後、しいなに向けてぱちりつとウィンをしてみせる。

「まあ、お兄様。こんな女にそのようなこととしてやる必要などありませんわ」

「ははは、相変わらずだね……」

すると赤髪の少女はゼロスを兄と呼びつつ、しいなをチラツと見てまるで牽制するように睨みながらそう言い、しいなも苦笑を漏らす。

「な、バ、バカな……ゼロスの動向はフォックスに監視させていたはず……」

「おう。男に見張られる趣味なんてないってのに、苦勞したぜー」

「まさかこいつ、セクハラと同時に文を仕込むふみなんてね……」

「セクハラ？」

サレの呆然とした声にゼロスが両手を肩の高さまで上げてやれやれと首を振ると、しなが呆れかえったように眩き、カノンノがぼかんとした顔になる。

「ああ。このアホゼロス、あたしの胸を揉む振りをしながらあたしの帯に小さな手紙を仕込んだのさ。〃セレスが捕まった。サレと内通しているフォックスにばれないよう助けてくれ〃 ってね……ゼロスはアホだけど、セレスの事について嘘はつかない。だからあたしは目立たないように単身で乗り込んだのさ……おかげで里を出る時に持ってきた式神の召喚符がなくなっちゃったよ」

しいなもにと笑いながら、カノンノの質問にそう答えてみせていた。

「そんな、クソ、馬鹿な……一体、どこで計画が狂ったんだ……」

人質を取り、味方を裏切らせ、スパイも送り込んでいた。サレは自らの計画が完膚なきまでに破綻し、今絶大なピンチに追い込まれている事にいつもの不気味な表情を消し、本気で焦った顔を見せていた。

「サレ」

そんな彼にヴェイグが声をかける。



「これがお前の否定した絆の……人の心の力だ。カイはゼロスを信じた。ゼロスもまたカイを、しいなを信じた……お前はその力に敗北したんだ」

ヴェイグの言葉に、サレはぐう、と唸る。すると話に参加していなかったスパードがヴェイグの方に歩き寄った。右足の怪我に関してはカノンノが応急処置に治療術を使ったため歩くぐらいなら問題は無い。

「ヴェイグ、ダメだ。コピーズ・ロッドを使ったんだがろくに反応しやがらねえ。オイルツリーは灰になったみてえだ。それとフォックスの野郎もいつの間にか逃げ出しやがってた」

「そうか……だが、まだ探せばあるはずだ。一度船に戻ろう。フォックスは……無理に探す必要もないだろう」

スパードの報告を聞いたヴェイグはそう判断を下し、サレの目の前に一個のピーチグミを落とすと彼らは踵を返して下山口へと歩き出す。

「待てよ……どこに行くんだ？……僕に、トドメを刺さないのか？……」

その言葉にヴェイグは足を止め、答える。

「俺は、お前を殺すためにここに来たんじゃない」

「なんだよそれ、情けをかけてるつもりかい……」

サレは不満そうに口元を歪め、よろよろと立ち上がる。そして先ほどヴェイグが落と

したピーチグミをぐしやりと踏みつぶした。

「こんな終わり方は認めない。認められるもんか……」

「戻るぞ……」

憎悪に燃える目でサレはヴェイグを睨むが、彼はもう話すことはないというように静かに言うとその場を去っていく。

「殺せ……殺せよっ!!」

それを後ろから刺すように、サレの声が響く。それはどこか物悲しさを持つてカイ達の鼓膜に響いてきた。

「はあ……はあ……」

ヴェイグ達が立ち去り、灰となったオイルツリーのみが残るこの場に、サレは一人体力の限界が来て倒れ込んでいた。

「クソオ、クソクソクソクソクソクソオツ!!」 殺せ、殺せよっ!!」

サレは怒りのままに吼え、その口から呪詛を奏でる。

「殺せって言ってるだろう!! こんちくしようがあああああああつ!!」

それはこんな目的もなければ来ないような雪山の奥では、誰の耳にも届かずに消えて

しまうはずだった。

「それが、君の願い？」

そう。 “はずだった”。しかし、その呪詛を聞く存在がいつの間にかサレの隣に立っていた。

「ルミナシアのデイセンドーが砂漠にいたって言うし、今度は雪山に行っただっていうから気になって見にきたんだけど……」

純白の肌に宝石のような服装、左目には赤い星のような飾りものをつけた少女はそう呟く。

「誰だよ、お前……」

サレがその存在に対し警戒の視線を向ける。

「ボクはラザリス……ねえ…… “殺せ”。それが君の願いなの？」

突然現れた少女——ラザリスは倒れているサレを覗き込むように見ながらそう問い返す。その問いの瞬間サレの顔は忌々しいものを見るような表情に変わり、瞳にこれ以上ない憎悪が宿る。

「ふぎけるな……僕の願いは、ヴェイグを、カイを、アドリビトムを……あいつらの心を踏みにしり、この手で殺す事だ!!!」

サレの「願い」。それを聞いたラザリスが口元を吊り上げた。

「それが君の願いか。なら……ボクがその願いを叶えてあげるよ」

「っ……何を……」

ラザリスがサレを覗き込むのをやめて立ち直し、両腕を大きく広げる。すると突然サレの周囲に赤い煙が出現し、それはまとわりつくようにサレの身体を包み込んだ。

「これは……」

「ボクの方だよ……君の身体は強くなる。君の願いを叶えるためにね……」

「へえ……何が目的だい？」

世界を騒がせている生物変化現象の原因である赤い煙。サレがそれを知らないはずもなく、しかしそんな不可思議な物質にまとわりつかれて包み込まれているというのに、むしろサレは余裕な態度を取り戻してラザリスに目的を尋ねていた。

「簡単さ。ボクもアドリビトム……ううん、ルミナシアのデイセンサー、カイを倒す目的があるんだ……君とは利害が一致した。それだけだよ」

「ヒ、ヒヒヒヒヒ」

ラザリスの言葉を受け、サレは不気味な笑い声を零す。

「ああ、いいよいいよいいよオ！ この力を貰えるんならその見返りにカイもヴェイグもアドリビトムもゼーンぶ破壊してやる！ あいつらの身も心も踏みじってやる

よオ!! ヒヤハハハハハ!!」

赤い煙に包まれ、サレは破顔させて笑い始める。その狂気を宿した笑いは霊峰アブソールに途切れることなく不穩に響き渡っていた。

「クレア様!! まさかクレア様が誘拐されるだなんて、何もされませんでした? ああ……もう……無事で本当に良かった……」

「大丈夫ですよ、ロックスさん。ご心配おかけしました」

報告を受けたのだろう。船に戻ってきてそうそう飛び出してきたロックスの心配そうな言葉にクレアはいつもの優しい微笑みを浮かべてぺこりと頭を下げる。

「サレの奴もいい具合にシメてやったから、さすがにもう手を出してこねーだろ」

「そう願いたいですね。さあ、中に入って下さい。みんなに元気な姿を見せないと!」

スパードの得意な笑みでの言葉にロックスも頷いた後、元気に微笑んでそう続けて彼らを船内へといざなった。

「今回は思わぬ事態になったね……でも、クレアもあなた達も無事で本当に良かった」

ホールで報告を受けた後、アンジユは神妙な表情でそう呟き、だがクレアやカイ達が無事でよかったと続ける。

「それで……」

「まさか、フォックスが裏切り者のサレの部下だったなんて……気づかなかったっ！」

「あのフォックスさんが、そんな……」

「あんにやろ。クソ真面目だが良い奴だと思ってたのに……」

「うん……」

アンジュの呟きに、一緒に報告を聞いたロツタ、ユン、ステイサム、マオのウリズン帝国派遣兵士組が信じられないばかりに呟く。

「こうなってしまうては仕方がないわ……」

アンジュは暗い表情で呟き、四人に向けて頭を下げる。

「申し訳ありません。こうなってしまった以上、ウリズン帝国からの兵士派遣の方はお断りさせていただきます。と、アガール陛下にお伝えせざるを得ません……あなた達が信じられない、というわけではありませんが……」

「うん……まあ、ね……」

「はい。そのご懸念はもつともです」

「あーまあ、しゃあねえわな。ま、するべきこた分かったんだ。国に帰ってツリガネトンボ草のドクメントを頑張ってかき集めるさ」

アンジュの言葉に、先ほどまで信頼していた仲間がスパイだったという事実からロツ

タ、ユン、ステイサムは派遣中止を余儀なくされる事も仕方なしと納得する。

「あ、じゃあアンジユさん。いい?」

「はい? 何かしら、マオ君?」

するとマオが右手を挙げた。意見を述べたいらしく、アンジユが首を傾げて問いかける。

「僕、ウリズン帝国軍辞めてアドリビトムに入りたいんだけど」

「……はい?」

その言葉にアンジユは目を点にして素っ頓狂な声を出した。

「ちよ、ちよつとマオ!? あんた状況分かってんの!? あんた含めてウリズン帝国軍兵士がスパイなんじゃないかって疑われてるって状況なのよ!? そこでアドリビトム入りたいとかあんたバカ!」

「だから、ウリズン帝国軍を辞めて、一少年のマオとしてアドリビトムに入るんだよ。そうすればユージーンとまた一緒だし♪」

ロツタの慌てた声にマオはにしし、と笑いながら返し、「ね、いいでしょユージーン?」と、一緒にいたユージーンに向けて甘えるような声を出す。それを聞き、ユージーンは呆れたようにため息をついた。

「アンジユ。マオがウリズン帝国、というよりもサレのようなアドリビトムにあだなす

者の息がかかっていない事は俺が保証しよう。俺がマオの保護者として全責任を取る」  
「ん〜……まあ、ユージーンさんがそういうなら。私は構わないわ。人手は多い方が助かるし」

ユージーンからも話を通されるとアンジュはあっさりマオの正式加入を承諾。マオは「やったー」と両手を挙げて万歳のポーズを見せた。

「ただしマオ。勝手にそんな事を決めるな」

「は〜い」

しかしユージーンは腕組みをしながらそう言い、マオはぶすくれた表情で頷くのであった。

「では、アガータ陛下宛てにその旨の書状を送ります」

「ええ。短い間だったけど世話になったわ」

アンジュの言葉にロツタはアドリビトムに残る事を諦めたのかお礼を返す。

「それで……」

「……」

だが話はまだ終わっていない。そういうようにアンジュが視線を向けるのはゼロスの方だ。彼は裏切り者の嫌疑をかけられているため今は両手を後ろ手に縄で縛られている。一応足の方は縛られていないため逃げる事は出来るだろうが、そうなれば隣に立



つカイがすぐ対処に向かうだけ。とはいえ特に本人も逃げる気はないため形式上のものである。

「ゼロス君、あなたが私達を裏切り、アドリビトムに損害を与えた件について……」

「ああ。俺は何も言わねえ……追放されたって文句はねえよ」

アンジュの言葉に対し、ゼロスも静かにそう沙汰を待つ。いつもの軽口はどこへやら、徹頭徹尾シリアスな様子を見せていた。

「お、お兄様は悪くありません！」

「セレス。何をどうしようとも、俺がこいつらを裏切った事実が変わらねえ」

セレスが慌てた様子で弁護に入ろうとするが、ゼロスはそれを首を横に振って制する。そしてゼロスは覚悟を決めた目でアンジュを見た。

「ええ。それでは、沙汰を伝えます」

アンジュもまた真剣な目でゼロスを見る。

「ゼロス・ワイルダー。あなたにはアドリビトムでの監視を受けると共に、ルミナシアを脅かすジルディアの事件の解決。それに取り組んでもらいます」

「……へ？」

「カイ、縄をほどいてあげて」

「はい」

アンジュの言葉にゼロスが目を点にするが、アンジュは構うことなくカイに指示。カイも了解と頷いてきつと縄をほどいてあげる。両手が自由になったがゼロスは動かない。それはそうだろう、ジルディアの事件の解決に尽力しろ、それは今までもこれからもアドリビトムのメンバーがやるべきこと。アドリビトムでの監視を受けるというのは逆に言えばアドリビトムにいてもいいという意味。事実上の無罪放免ということだ。

「ア、アンジュ………さん?」

「あら、何かご不満? 世界を脅かすジルディアの脅威への対処。これほどまでに危険な任務を強制される以上の厳罰を私は思いつかないんだけどなあ」

「ほかーんとしたゼロスが思わずアンジュに問いかけるが、アンジュもくすくすと笑いながらさらりとそう返す。

「ア……アンジュ様、なんて深いご慈悲、女神様のように深い懐に俺様大感激〜!」

ゼロスはその叫び、さりげなくアンジュに抱き付こうと飛びかかる。

「調子乗ってんじやないよこのアホゼロス!」

「げふっ!」

直後がつんつとしいな拳骨が入り、飛びかかる軌道を急に変えられたゼロスは自分とアンジュの間にあつたカウンターに顔を強かに打ち付ける羽目になった。それを見たゼロスが目を丸くしてゼロスを心配すると同時にしいに怒った様子で食って掛か

り始め、しいなも困ったように笑いながら「まあまあ」とセレスを落ち着かせようとした。

「ちよつとすいませ〜ん」

するとその時、突然そんな声が聞こえてきたかと思うとずかずかと遠慮なく一人の少女——ローブを深く被っているため顔は分からないが、小柄な体格と声から少女と判断した——がホールへと入ってくる。

「あ、えつと……ご依頼でしょうか？」

「あ、ううん。違うの。えーつと、ここにアルヴィンって男の人、いない？」

「アルヴィン君ですか？ ええ、ちよつと待つてください。カイ、医務室にいるはずだから呼んできて」

「はい」

この騒ぎに臆することなく来客はアルヴィンに用事があるとアンジュに告げ、アンジュがカイに呼んでくるよう伝えるとカイも領いて医務室へと向かう。それから少し置いて突然どたとと大きな足音が聞こえてきた。

「なっ!?! ロ、ロゼ!?!」

ホールに入って開口一番、アルヴィンはローブの少女を見て驚愕の声を上げた。

「やつほーアルヴィン。最近報告がないから、アタシ直々に来てやったわよ」

そう言い、ローブの少女は自らの顔を覆い隠していたローブを脱ぐ。

「さて、期待のスイーツについての最新情報、詳しく聞かせてもらおうかしら」

そして少女は濃いピンク色の髪を揺らして小首を傾げる仕草をしつつ、ニヤリと笑みを見せながらアルヴィンにそう問うのであった。

「ア、アルヴィン君……この方は？」

「あ、ごめんごめん。まだ名乗ってなかつたつけ。あたしはギルド“セキレイの羽”の頭領、ロゼ。アルヴィンとはまあ、商人仲間ってやつ？」

「俺みたいな個人商人にはロゼのどこのような大手の商人ギルドは助けになるんだよ。渡りをつけときや色んな町で商売がしやすいしな」

「で、その代わりにあたしらは新商品の情報を貰い、卸してもらおう。フットワークの軽さなら個人商人の方が上だからね。ま、持ちつ持たれつってやつよ」

少女——ロゼはアルヴィンとの関係をビジネスライクなものだと説明し、再びアルヴィンの方を向いた。

「で、アルヴィン。前々から聞いている、ギルド“アドリビトム”のピーチパイって何？

そろそろ納期近いんだけど」

『ピーチパイ？』

「……」

ロゼの言葉にアドリビトムメンバーが呆けた声を出し、アルヴィンが目を逸らす。「えーつと、まあ、その、だな……話せば長いことながら……」

そう前置きをしてアルヴィンは話し始める。それを要約すると、このギルドに入ってから食べたクレア作のピーチパイがとても美味く、金を取ってもやっていけるものだと直感。新商品として売り出すのはどうかと思つてクレアに商談を持ちかけようとしたものの、どういう風に商談に持つていきレシピを教えてもらおうかと考えていた事とクレアは一日中忙しく、とても長い話で声をかけられる雰囲気がなくずると先延ばしになっていたらしい。

「……で、今回のサレの事件の直前、ちよつと無理矢理にでも話を聞いてもらおうかと思つて……」

アルヴィンはそう言い、クレアに向けて深く頭を下げた。

「本当にすまなかつた！ クレアちゃん!! 俺のせいでサレに付け入るスキを与えちまつて!」

「い、いえ、そんな、お気になさらないください……」

深く頭を下げるアルヴィンにクレアは慌てたようにそう返す。

「で、最近全然話が進んでないから直接聞きに来たのよ。それで、あなたがその絶品ピーチパイを作る人?」

「あ、はあ……ピーチパイは得意ですけど……」

「なるほどね。でもアルヴィン、こんな中小ギルドで本当にそんなスイーツがあるものなの？　ここに、料理ギルドつてわけでもないし」

「お前、いっぺん食ってみろ！　二度とそんな事言えなくなるぞ！」

「へえ〜」

クレアを見てふんふんと頷いたロゼはしかし魔物の討伐や資源の採集を主な専門として行っている狩猟ギルドで美味しいお菓子が出来るとは信じられないのかアルヴィンに疑念の目を向ける。だがそれにアルヴィンが強く言い返すとロゼは楽しみそうにニヤニヤと笑みを向けた。

「あ、でしたらもうすぐおやつ時間ですし。よかったですらどうぞ」

「え、いいの!？」

「はい。どうぞご遠慮なく」

するとクレアは純粹な微笑みでロゼをおやつに誘い、ロゼもアルヴィンのイチオシスイーツを味わうチャンスと見たか目を輝かせ、一行は食堂へ移動。クレアはいつものようにピーチパイを作り、ロゼ達に振る舞う。

「ん……うんま〜い!!!」

するととろけるような歓喜の表情を浮かべ、ロゼが叫ぶ。

「な、なにこれ、あたし、こんな美味しいピーチパイっていうかお菓子食べた事ない！」  
「そら見ろ！」

がつつと食べ進めるロゼにアルヴィンは得意気な表情を向ける。が、ロゼはそれを無視して「クレアちゃん！」とクレアに声をかけた。

「お願いします！　どうかこの絶品ピーチパイのレシピを教えてください！　言い値でいいわ！　幾らでも出す！」

「つておい!?　勧めた俺が言うのもなんだけど、言い値つて……」

一瞬でクレア作ピーチパイの虜になったロゼは言い値でピーチパイのレシピを買うと宣言。太っ腹というかとんでもない提案に勧めたアルヴィンが引いていた。

「いえ、そんな……レシピでよろしければ……あ、そうだ。あの、では集めて欲しいものがあるんですが——」

クレアはいきなりの商談という初めての経験に苦笑し、しかしそこで思いついたようにぼんと手を叩き、提案する。

「……オイルツリー？　そんなもんが欲しいの？」

「えーと、正確にはそれ以外にツリガネトンボ草のドクメントが欲しくつて……」

「あー。まあ、詳しくはアンジュさんから聞きやいいからさ……」

「ええ、了解。ロゼさん、このアドリビトムでは今集めているものがあつて——」

クレアからの提案を聞いたロゼがきよんとした顔を見せるとクレアは困ったように説明を開始、しかしアルヴィンがアンジユから聞くようにと助け船を出し、アンジユも説明を開始した。

「ふんふん、なるほど……うん、分かった。任せといて！ セキレイの羽の総力を挙げてその14属2000種、集めてみせるわ！」

「あ、いえ、全部ではなくって……見つけるのが難しい珍しい種類を重点的に集めてもらえれば……」

「はいはい大丈夫だつて。じゃあ絶品ピーチパイのレシピのお代はアドリビトムへの協力及びツリガネトンボ草の進化種の採取と納品。確かに承りました」

ロゼはピーチパイのレシピという新たな商品に燃えており、その姿にアルヴィンとアンジユが苦笑する。

「では、ピーチパイのレシピをお教えしますね」

「うん、ありがとう！ また今度お礼も兼ねて立ち寄るから、その時また作ってね！」

そしてロゼはクレアからピーチパイのレシピを受け取り、ひやつほいと嬉しそうに飛び跳ねた。

ちなみにその後日。

「アルヴィン！ うちと協力してる料理ギルドにこのレシピ持ってってピーチパイ作



らせたんだけど、どうしてもあの時の味にならないのー!!」

「知るか!!」

「クレアちゃんーん！ もう一回あのピーチパイ作ってー！ っていうかもうセキレイの

羽に来てー!!」

「無茶苦茶言ってるじゃねー!!」

クレアのピーチパイの味が再現できず、満足できないロゼがたびたびアドリビトムと  
いうかアルヴィンに泣きつきアルヴィンが怒号を上げているのはまた別のお話。なお  
ロゼが納得いかないため新商品のピーチパイは発売延期になったそう。

## 第三十九話 VS勇者の影

バンエルティア号の甲板。そこには一つずつなら成年男性が二人くらいいれば持ち上げられそうな大きさのコンテナが数多く積み上げられており、アンジュの指示でそれに倉庫への運び込みを命じられた男性陣の一人——スパードがコンテナを見上げる。

「で、何か一杯荷物が来てるな。こりゃあ、何だ?」

「ツリガネトンボ草の進化種です。協力してくれた皆さんの手で集められたものなんですよ」

スパードの言葉にロックスがそう説明、「本来なら探すのに時間がかかりそうな希少種もセキレイの羽の方々が率先して探し出してくれます」と補足する。

「皆さんで、一つの目標に向かって。この世界を守る為に……」

「へえ、そりやすげーな」

感慨深そうに呟くロックスにスパードがにつと笑う。するとその横で聞いていたティトレイも快活に笑って右腕をぐるぐると回した。

「うっし! んじゃあとつとと運び込むとすつか!! ロイド、そっち持ってくれ!」

「おう!」

テイトレイは近くにいたロイドと一緒にコンテナの一つに近づき、互いに向かい合わせになるようにコンテナを持つと、「よいしょっと！」と合図も兼ねて声を出すと力を込めてコンテナを持ち上げ、軽々船の中に運んでいく。カイルやシングなどの若い青年メンバーが次々と後に続いた。

「カイ、この依頼書を討伐のファイルに入れといってくれる？」

「分かりました」

「えっと、カノンノ。この依頼なんだけど。たしか依頼人が欲しがってる物が倉庫に保管されてたと思うから、この整理が終わった後でロックスに確認してもらえる？」

「はい！」

ホールでアンジュはギルドに届けられた依頼の整理を行っており、カイとカノンノもその手伝いに勤しんでいた。

溜まっていた仕事をてきぱきとこなし、カノンノがロックスに確認して依頼人の欲しがっていた物を倉庫から取り出して郵送の準備を行ったのを最後に仕事は終了した。

「カイ、ちよつといいかしら？」

するとそこにジュデイスが声をかけてくる。と彼女はカイの隣に立つカノンノを見

て微笑を浮かべた。

「あら、カノンノも一緒だったの？ ごめんなさいね？ 二人の時間を邪魔しちゃって」「ふえ！？」べ、別にそういうのじゃ、それにアンジュさんだって一緒だし……」

「何か用か？」

ジュデイスのイタズラっぽい声での言葉にカノンノが慌て出すが、特に意識していない様子のカイの言葉にぶくうとほっぺを膨らませてジト目でカイを睨み、アンジュが苦笑する。が、ジュデイスは構わずに話し始めた。

「ヴェラトローパの壁画の事、覚えてる？」

「レディアントか？」

ジュデイスの確認にカイはすぐに頷く。ヴェラトローパでの調査の中、壁画に描かれたルミナシア創造の歴史、その中に刻まれていたディセクター専用の輝ける光器——レディアント。その事をカイはよく覚えている、と頷く。

「あれから、何度かヴェラトローパへ行つて、あの壁画の情報を読んで、レディアントがある場所がわかったの。どう？ そのレディアントを見に行きたくない？」

「面白そうだな」

ジュデイスの提案にカイがこくりと頷く。と、カノンノも目を輝かせた。

「はいはい！ 私も行きたい！」

右手を挙げ、ぴよんぴよんと飛び跳ねながら同行を希望するカノンノ。その無邪気な姿にジユデイスもふふつと微笑み、カイはアンジュを見る。

「アンジュさん、いいですか？」

「ん〜……ま、少しくらいなら大丈夫でしょ。じゃあ三人とも、行つてらっしゃい」

アンジュも快く外出を承諾、行つてらっしゃいと優しく手を振つて彼らを見送る姿勢を向ける。

カイトカノンノはジユデイスに念のためと言われて武器や防具、アイテムをしつかり準備してからバンエルティア号を出ていった。行先はそのレイアントの情報を手に入れたヒトの祖の遺構——ヴェラトローパだ。

「ヒトの祖が、ソウルアルケミーによって生み出した、光纏う者に送りし輝ける光器、レディアント……きつと、この奥で真の主を待ち続けているはず」

「行こう。レイアントに会いに」

ヴェラトローパに足を踏み入れ、ジユデイスがそう口にする。カノンノも気合充分に、希望に目を輝かせてジユデイスに続いた。

以前ヴェラトローパを調査していた時に入った地下道へと入り、カイ達はヴェラトローパの最奥へと歩む。と彼らの行く手を阻むように白い体毛に覆われた巨人のような獣——ジャバウオックが立ちはだかった。

「前哨戦にはちようどいいな」

ヴオオオオオオオ、と吼えるジャバウオックを見ながらカイは不敵な笑みを浮かべて刀を抜き、カノンノも大剣を構え、ジュデイスも槍を構えると宙を舞うように跳び上がる。

「せあつ!!」

人の数倍どころか数十倍はある巨体を誇るジャバウオックの顔面目掛けて跳び上がったジュデイスは、その顔面に目掛けて槍を大きく振り下ろし、先手を狙う。

ザン、と顔を斬られたジャバウオックも苦痛に喚いて右腕を振り上げ、ジュデイス目掛けて振り下ろそうとする。

「させないよ！ エアスラスト!!」

しかしそれを許すまじとカノンノが魔術で援護、ジャバウオックの右腕付近に突然出現した風の刃で相手を牽制し、その隙にジュデイスはジャバウオックの顔面を蹴ると華麗に宙を舞いジャバウオックから距離を取る。

「火車落とし!」

そこにカイが地面を蹴って跳び上がり、勢いに乗って回転。炎を纏った刀でジャバウオックの顔面を勢いよく斬りつけた。斬撃のみならず炎の熱が襲い、ジャバウオックが悲鳴を上げて倒れ込む。

「カノンノ!」

「任せて！ 氷結は終焉、せめて刹那にて碎けよ！！ インブレイスエンド!!!」

カイが指示を送り、カノンも頷くと詠唱。水のマナがカノンの周囲に集まり、それが急激に解放されるとジャバウォックの頭上に巨大な氷塊が出現。一気に相手を押し潰した。その氷が砕けた時、ジャバウォックは息絶えていた。

「……行くぞ」

死にゆくものへの黙祷を捧げ、カイ達は最奥へと歩みを進める。さらに軟体の身体に触手を持つ魔物——メデューサーパーや、長いくちばしを生やした二足歩行の魔物——ゲオプシテイスが襲い掛かってくるがその全てをなぎ倒しながらカイ達は進んでいく。

地下道から上がり、さらにその先へ。一時的に遺構から出る形になり、青空が広がる。そこはかつてニアタと再会した場所。ヴェラトローパの最奥と言っていいそこに黒い何かが、遠目からでも分かる程に凄まじい存在感を示す装備を身に纏って立っていた。

「いたね。あれがきつと輝ける光器、レディアント……でもあの黒いのは何？」

その姿を見たカノンが呟き、しかし装備を身に纏う黒い何かはなんだろうと不思議そうな顔を見せる。するとジユデイスがカイに「前にも言ったでしょう？」と話しかけた。

「レディアントは、デイセンサー以外の手に渡らないよう、ヒトの祖が作った人工精霊が

まどつている、つて」

彼女は「レディアントを手に入れる為には、その人工精霊と戦って、ディセクターとしての力を示さなければならぬでしょうね」と仮説を述べる。

「……どう？ もちろん挑むんでしよう？」

「聞かれるまでもない」

ジュデイスの一応念のため、という様子での質問にカイも即答。ジュデイスはふふ、と微笑んだ。

「それじゃ、行きましょう」

ジュデイスの言葉を合図に彼らは一斉にレディアントを纏う人工精霊へと近づく。すると人工精霊もカイに気づいたように彼を真つ直ぐに見た。カイもまた相手を真つ直ぐに見返す。

赤色を基調に黄色が縁取るような形になっている頭巾や東洋風の衣装、真つ直ぐに伸びた刀は標準的な刀のような長さだが根元からもう一本の刃が短く伸びているのが特徴的だろう。その姿は今のカイが職業としている忍者というイメージだ。

——光……光 マトイシ モノ……世界樹 ノ マナ ノ 輝キ……世界樹 ノ  
夢 タル ソノ御姿……

人工精霊——仮にレディアント忍者と呼称しよう——から聞こえてくるのは男性と



も女性とも、若いとも老いているとも分からない不思議な声。

——ワタシ ハ ソノ光 ヲ 待チイタリ……

すると、突然声の調子が変わる。いや、変わるといふよりも先ほど男性とも女性とも分らないと表現したその声が明確に男性と女性のものに変化、そしてそれが二重に聞こえてきたのだ。

「!!!」

カイ、カノンノ、ジュデイスが驚きに目を見開く。突如レディアント忍者の身体がぶれたかと思うと、その隣にもう一体全く同じレディアント忍者が出現したのだ。違う部分と言えば、先ほどまで見ていたレディアント忍者がどことなく男性的だとすれば突然現れた方はどこか女性的な雰囲気を感じるくらいである。

——アナタ ノ 影 ニ ナル為ニ……ツインソウル デ 顕現 シマス

「ツインソウル……」

レディアント忍者の言葉を受けたジュデイスがすぐにレディアント忍者から情報を読み、得心したように口を開く。

「レディアントは、男性的なソウル、女性的なソウルで構成された人工精霊のようよ……その為、男性、女性の二つの面を持っているの」

ジュデイスはそう前置きをし、「それら二つの面を分離して、二体になって現れる」と

続ける。

「と、いうことは……」

「そう、カイはその二体と戦う事になるわね……」

カノンノの言葉にジュデイスがそう答えると、カイは冷や汗を流しながら構えを取る。デイセンダー専用の武器を守る人工精霊、実力は未知数だが少なくとも一蹴出来るほど弱くなどないだろう。それが二体というのは相当の試練になる、と彼は直感した。

「……」

「カノンノ!」

しかしその隣にカノンノが立ち、大剣を構える。それにカイも驚いたように声を上げた。

「に、二対一なんてさせられないよ! 私も一緒に戦う!」

ふん、と気合を入れるカノンノ。男性型レディアントも女性型レディアントも気にしていない様子で、カイとカノンノ双方を敵と認識したように構えを取る。

ジュデイスは戦う気はないのか、もしもこの戦いに反応した魔物が来てこの試練の邪魔をしないようにこの間の入り口までひとつとびしてそっちの警戒に回っていた。

——苦無閃

「苦無閃!」

男性レディアントが苦無をどこからともなく取り出して投げつけると同時、カイも懐から苦無を取り出し出して投げつけ、空中で撃ち落とす。

——刹月華

「っ!？」

が、そこに女性レディアントが刀を手に距離を詰め、斬りかかる。男性レディアントの投げた苦無に気を取られていたカイはその速さに対応できなかった。

「させないよー!」

しかしカノンノがそこに割って入り、大剣で相手の刀を防ぐ。

「カイ、こっちは任せて!」

「任せた!」

そしてカイとカノンノはそれぞれ自分と同性のレディアントを相手する事に決め、各々の相手へとかかっていった。

「影走斬!」

地面を蹴って一気に加速、すれ違いざまに渾身の斬撃を叩き込む秘技——影走斬を男性レディアントは手に持っていた刀で防ぎ、そのまま受け流して無傷でやり過ぎす。しかしそのまま男性レディアントは振り向きながら左手を曲げる。その手にはいつの間にか苦無が握られていた。

——苦無閃

投げられた苦無が空気を裂いて一直線にカイ目掛けて突き進む。背中を向けていたカイは振り向いて苦無が向かってくるのを確認すると咄嗟に伏せて攻撃を回避。

——火車落とし

しかし伏せたカイの頭上に突如男性レイディアントが出現、炎を纏った刀を構えて高速で回転しながらカイ目掛けて空中から襲い掛かった。

「くっ！」

カイは前に飛んで空中からの強襲を回避、体勢を立て直しながら相手の方を向き刀を構え直す。しかし男性レイディアントも油断なく構えを取っており、やはり一筋縄ではないかないとカイは気を引き締め直した。

「やあああああつ!!」

一方カノンノは女性レイディアント目掛けて大剣オータムリイを振るい、振り下ろしたそれを女性レイディアントは身軽な動きで回避。外したオータムリイは床目掛けて振り下ろされ、岩片を辺りにまき散らした。大剣そのものによる攻撃以外にも爆砕斬による追撃を彼女はもくろんでいたのだ。

——土竜閃

しかし女性レディアントは身軽な動きでそれをかわしつつ、地面に刀を突きたてる。同時にカノンノ目掛けて数本の岩槍が突き出、彼女を串刺しにせんと迫ってきた。

「えいっ!」

咄嗟にオータムリリイを横に振り回し、迫ってくる岩槍を破壊する。

——影走斬

「わっ!」

しかしそこに間髪入れずに女性レディアントは突進、至近距離から渾身の一撃を叩き込む。咄嗟にオータムリリイを盾にする事が間に合ったが、少しでも遅れていたら直撃をくらっていたとカノンノは冷や汗を流す。

(——強い)

少なくとも一対一では勝ち目がない。それほどに強い敵だとカイとカノンノは同時に直感した。

——刹月華

——鬼炎斬

男性レディアントが刀の斬り払いと回し蹴りのコンビネーションを、女性レディアントが炎を纏った刀での十字斬りを繰り返して、カイとカノンノはその攻撃を防ぎつつ後ろ

に下がる。相手が防戦一方になったと判断したレディアント二体はさらに追撃を選択、二人はそれを刀と大剣で防ぎながら数歩ずつ後ろに下がる。

と、二人の背中に同時に何かがとんとと当たり、そこにレディアント二体が刀を左から右へと横薙ぎに斬りつけた。

「せえ——」

それをカイとカノンノは己の武器で相手の刀を防ぎながら、横薙ぎの勢いを利用して左へ、正確には円を描くように左後ろへと動きつつ反時計回りに回転。

「——のっ!!」

——!?

——!?

そして背中合わせになっていたカイとカノンノは回転して位置を入れ替えながら刀と大剣を振り下ろす。その斬撃がレディアント二体に直撃し、二体がたまらず後退するが二人は追撃を行わずに顔を見合わせた。

「カノンノ！ 五秒稼いでくれ！」

「了解！」

この一瞬の指示の間に二体は既に体勢を立て直し、かかってくる。

機動力を武器とする二体にどちらかといえばスピードよりもパワーを重視したカノ

ンノは相性が悪い。たった五秒でも、一体相手で分が悪い敵を二体も相手し、なおかつカイを守るのは至難の技である。

「やあっ!」

まず向かってくる、カイ目掛けて刀を振り下ろしてきた女性レディアントを、何かの術を使おうとしているのか印を組んでいるカイが少しでも姿勢を低くしたギリギリ上をカノンノがオータムリリイを横薙ぎに振るい牽制。その圧力で女性レディアントの動きを一瞬止める。

「てあっ!!」

続けて自分目掛けて突進してきた男性レディアントに片足を上げてカウンターキックを叩き込む。

——飯綱落とし

そこに真正面から無理ならと女性レディアントが上空から縦回転斬りで強襲を仕掛けてくるが、それをカノンノはジャンプしながら斬り上げ、続けて斬り下げでの追撃を決める特技——虎牙破斬の斬り上げで防ぐ。

「見よう見まね——」

カノンノの背後からカイ目掛けて斬りかかる男性レディアントをカノンノは見据えながら足を構える。

「崩襲脚！」

そして斬り下げの代わりというように捻りを加えた蹴り下ろしで男性レディアントを蹴り飛ばした。

「忍法——」

そこで五秒が経過。カイの印も組み終わる。

「——影分身！」

己の中のマナを具現し、三体の分身を作り出す。本体と合わせて合計四体となったカイは二体ずつに分散して二体のレディアントに相対した。

「カイ、お願いね！」

「任せろ！」

カノンノは大剣を自分の横に立てかけ、右手を挙げる。それと共に周囲のマナがカノンノの周りに集まっていき、彼女の口からは不可思議な呪文が紡がれ始める。前衛はカイとその分身が担う、となればカノンノは魔術での援護を行うのは当然のコンビネーションだ。

カイの本体と分身Aが男性レディアントに、残る分身Bと分身Cが女性レディアントに攻撃開始。その間にカノンノは詠唱を開始した。

——鬼炎連脚



女性レディアントの右足に炎が宿り、その足による回し蹴りから続けてこちらも炎を纏った左足による後ろ回し蹴りに繋げ、さらに宙を待つての右足跳び回し蹴りからの左足後ろ跳び回し蹴りへと繋げる。

それを分身Bは左腕一本で受けつつ右手に闇のマナを集中。最後の左足後ろ跳び回し蹴りまで左腕一本で耐えきった。レディアントの得意技は自分も得意とする技、ならばこの四連続蹴りが終わった瞬間隙を見せるといふ癖もまた同じはず。そう言わんばかりに彼は四連続の蹴りを耐えた瞬間右手を突き出した。

「滅掌破！」

放たれる掌底と同時に解放された闇のマナの爆発。その一撃を胸部にくらってしまった女性レディアントは僅かに怯みつつも刀を構え直し、逆に今度は爆発の反動で一瞬動きが止まった分身B目掛けて斬りつけようと刀を振り上げる。

「幻魔——」

しかし分身Bの背後から飛び出た分身Cが素早くかつ鋭い一閃を、すれ違いざまに女性レディアントへと見舞う。

「——烈残影!!!」

——!!

さらに背後からの闇の爆発、滅掌破と同等の一撃に今度こそ女性レディアントの動きが止まるのであった。

「土竜閃!」

分身Dが地面に刀を突き刺し、地のマナを注ぐ。それが岩の槍となり地面から突き出て男性レディアントを襲い、男性レディアントがジャンプで岩の槍を回避するが、それよりさらに頭上をカイが取っていた。

「飯綱落とし!」

——!!

空中で高速回転しそのまま勢いをつけて斬り下ろす飯綱落としが男性レディアントに直撃し、相手を怯ませる。さらに畳みかけるように、土竜閃で男性レディアントを空中へと誘い込んだ後の分身Dがその土竜閃で作った岩槍を利用して壁ジャンプし、勢いよく男性レディアントへの距離を詰めながら両手いっぱい苦無を指で挟むように持つ。その苦無には炎のマナが注がれていた。

「曼珠沙華!!」

—!!

投擲と同時に苦無を炎が包み込み、男性レディアントに苦無の刺突以外に熱による追加ダメージを与える。

—!?

しかし攻撃はまだ終わらない。曼珠沙華は苦無と炎に意識を持っていかせるための囷、さらなる本命は飯綱落としを決めた後先に着地していたカイが、落ちてきた男性レディアントの足を掴むこと。

「おらあつ!!!」

そしてそこから繋げるジャイアントスイングからのぶん投げだった。

—!?

—!?

闇の爆発と投げ技、過程は違えど空中に飛ばされた二体のレディアントが空中で激突。

「氷結は終焉、せめて刹那にて碎けよ!! インブレイスエンド!!!」

そこを見計らったようにカノンの詠唱が完了。巨大な氷塊が空中に現れて落下し、二体のレディアントを押し潰す。

「決める」

カイは呟き、同時に全ての影分身を消滅させてそのマナを己の中に取り込む形で取り戻す。そして彼の中に眠るマナの全てを解放、己の中のリミッターを外すオーバーリミッツ限界突破を行って二体のレディアントを睨みつけた。

「この印を用い、我が刃に言霊の呪を宿す」

片手で十字を切り、刀に指を触れさせると刀に不可思議な光が宿る。敵のドクメントを直接ダメージを刷り込む呪いが刀に宿り、同時にカイは地面を蹴って動けなくなっている二体のレディアントに斬りかかった。

「臨りん」

すれ違いざまの一閃と共に彼の口から言葉が紡がれ、斬撃と同時に二体のレディアントを捕らえるように不可思議な円陣が出現する。

「兵びょう」

一の太刀の直後、振り返りながら再び一閃。その斬撃が二体のレディアントの人工的な肉体だけでなくその本体といえる人工ドクメントをも斬ると共に円陣を増やして呪縛を強める。

「闘とう者しや」

その場で高く舞い上がり、重力に従って落下しながら三度の太刀を入れ、さらに踏み込みながらの斬撃を重ねる。高速の二太刀と共に呪縛の強度を上げ、二体のレディアン

トを束縛を強める。

さらに「皆」「陣」「列」「在」と四つの言霊が重なりと共に、一瞬たりとも同じ場に存在しないカイの呪いの斬撃が二体のレイディアントを斬り刻んだ。

「前」

言霊の呪刀の最後は真正面からの振り下ろし。しかし既に呪いの呪縛に囚われた二体のレイディアントにそれをかわす手立てではなく、斬撃が叩き込まれる。これにて九つの言霊から成る呪いが完成。その瞬間、カイの姿が消える。

「封魔——」

また次の瞬間、カイは二体のレイディアントの上空に現れていた。二体のレイディアントは九つの呪いの円により、その動きを封じられている。

「——九印剣!!」

そして回転しつつ力を込めた斬撃が呪いの円ごと二体のレイディアントを斬り裂いた。  
「や……やっただ？」

カノンノが剣を握りしめながらそう呟く。カイも刀を鞘に収めてしかし柄に手はやっただまま、倒れている力なく倒れている二体のレイディアントを眺める。見張りをしていたジュデイスも戦闘が終了したのを確認したのか歩き寄ったその時、二体のレイディアントは光の粒子となって消滅していった。

「レディアントが消えた……デイセクターとして認めてもらえなかったの？」

「そんな……ま、まさか私が一緒に戦ったせいだ……」

ジュデイスの呟きにカノンノが不安気に呟く。が、その時二体のレディアントがさっきまでいた場所に光が集まった。

「なんだ？」

「何か、感じるわ。これは……言葉？……」

カイとジュデイスの言葉が重なる。たしかに不思議な言葉、男性とも女性とも、若いとも老いているとも分からない不思議な声がまるで直接頭に響くかのように聞こえてきたのだ。

——光……光 マトイシ モノ……世界樹 ノ マナ ノ 輝キ……世界樹 ノ

夢 タル ソノ御姿……

「最初のレディアントの声に似ている……」

——我が主 デイセクター……コレヨリ アナタ ノ 影 ニ ナリマシヨウ……

その不思議な声が終わると同時に、彼らの目の前に集まっていた光がカイを包み込む。

そして光が消滅した時、彼の姿は赤色を基調に黄色が縁取るような形になっている。頭巾や東洋風の衣装を纏うものに変化していた。腰に挿していた刀も、根元から短い刃が

伸びた独特の形の真っ直ぐな刀に変化している。その姿は先程の男性レディアントの装備と全く同じだった。

「その姿……カイ、レディアントに認められたんだね！ おめでとう！」

「ありがとう」

カイの装備を見たカノンノが一番にお祝いし、嬉しさを表すためにぴよんぴよんと飛び跳ねる。カイもカノンノにお礼を返しながら彼女の頭にぽんと手を当てて頭を撫でていた。

「さて、それじゃあ帰りましょうか。皆に報告しないとね」

「はい」

その光景を見てふふつと穏やかに笑ったジュデイスが帰ろうと言い、カイとカノンノを連れてその場を後に行った。

「ご苦労様、そしておめでとう。レディアントを無事手に入れて良かったね」

バンエルティア号に戻り、ホールで報告を聞いたアンジュがまずは労いの言葉とカイに対する祝辞を述べる。

「でも、あなたもこれで満足せずに、レディアントにふさわしい主として精進していかな

くてはね」

「分かってます」

慢心しないよう釘は刺しており、しかしカイもそれは分かっているのかこくりと頷いて返す。

「ところでアンジュさん、次の採取はどうなってるんですか？」

「ああ、それについての資料はもうすぐ出来るそうよ。あとちよつと、待っててね」  
「次はどんなものを？」

カノンノの質問にアンジュがそう答え、カイが首を傾げてそう問いかける。

「たしか……水の上をスイスイすべる花だったかしら？」

「ええ。ウイルさんは何となくだけど予想がついてるみたい。とても珍しいんですって」

実際にその情報を読んだジュディスがその記憶を思い出しながら言う。アンジュが肯定、博物学者のウイルには心当たりがあるらしく、とても珍しいものだと話していたと言う。

「ふーん、想像もつかないね？」

しかしカノンノには野に咲く花が水の上をすべる姿は想像出来ないらしく、首を傾げていた。



「まあ、それは資料が完成してからね。あなた達は休んでその時に備えてちょうだい。それじゃ、今回もご苦労様」

アンジュは実際に採取に向かうだろうメンバーに今は休養して英気を養うよう指示にこつと微笑んで再び彼らの労をねぎらう言葉を投げかけてこの場を締めるのであった。

## 第四十話 輝ける光器と水の上をすべる花

バンエルティア号の甲板に赤色の風が吹く。縦横無尽に吹く風はやがて甲板の中央近くにて留まり、実体を持つように集まっていくな。

いや、これは風そのものではない。風のように素早く動いた結果、その者が纏っている赤い装束が風のように見えていただけだ。赤色を基調に黄色で縁取られた額当てに籠手と具足、同じデザインであることから一緒に着用することを前提として作られているように思えるそれは同じく赤と黄色が半々になるようにデザインされている衣とともに東洋風の雰囲気を見せていた。

首元にはマフラーのように白色の布が巻かれ、その布は首の後ろからだらんと垂れ下がっており彼が動くと共にまるで空気を弄ぶように優雅に宙を舞う。

その東洋風の衣装を纏う青年は腰に帯刀していた刀を抜き、標準的な片手剣と同じくらいの長さの刀はこれまた鮮やかな紅色を基調としており、それを青年が振るうだけでも相手を魅了するかのような不可思議な光を放っていた。

青年は刀を振るう。最初は一閃、なんの変哲もない振り下ろし。次に横薙ぎ、最後に斬り上げ。そう思いきや今度は回し蹴りや空いている左手での掌底などの体術を交え

ながら、今度は順手から逆手に持ち替えて刀を振るう。そう思いきや左手で腰の後ろに挿していた短剣を引き抜いて握り、二刀流にて刀を振るう。次々と型が変わっていき、予測不可能ながらまるで舞うような独特の剣術を見せる。

そして一通り満足したのか、青年は刀を腰の鞘へと納めた。するとパチパチパチ、と控えめな拍手が響く。

「凄いね、カイ。レディアントをもう使いこなしてる」

「ああ。しかし凄いな、この服なんて特殊な魔術がかかっているらしくって下手な鎧以上の強度があるらしいぞ。その上動きやすい」

「カイって軽装備な分防御力低かったもんね」

拍手をする少女——カノンノの言葉にカイは東洋風の衣装——レディアント装備を見ながらそう答える。

レディアント装備を入手後、封印次元を作るための星晶の代用品を探す間の息抜きと言おうか Harold 達がレディアント装備の分析を行った結果、レディアント装備には遙か昔に使われた特殊な魔術がかかっており、衣服の機動性と鎧のような堅甲さを併せ持つ事が判明したようだ。

カイは忍者として機動力のある装備を好んでいたが、そのような装備はえてして強度が低く防御力に問題が残っていた。しかしレディアント装備は機動力はそのままに防

御力も解決できているということだ。

「血桜も手に馴染んできたし……そろそろクエストを受けて実地訓練でも行ってみるか」

「私も手伝うよ」

「サンキュ」

先程鞘に収めた刀——忍刀血桜を手で撫でながらカイがそう言うとカノンノがそう返し、それにカイがお礼を返しながら二人は甲板から船内へと入っていった。

「カイ、カノンノ。二人にクエストをお願いしたいのだけど」

甲板からホールに戻って来たカイとカノンノにアンジュが声をかけ、二人もどうしたのかなと顔を見合わせると「はい」と返事をしてアンジュの待つカウンターへと歩き寄る。

カウンターの横にはアッシュとナタリア、そしてウィルが立っていた。

「次に採取する『水の上をスイスイ滑る花』の資料と生息地の断定が出来たからクエストを頼みたいんだ。既にアッシュとナタリアには了承を得ている、カイとカノンノには二人と共にシフノ涌泉洞へと行ってもらいたい」

ウィルが説明し、資料を手渡す。カノンノがそれをぺらぺらとめくって確認した。

「ユルングの樹？」

「そう。『水の上をスイスイ滑る花』とは恐らくその花を指すものだと考えられる。そこでユルングの樹が生息するシフノ湧水洞へ行き、コピーズ・ロッドでドクメントの採取をしてきてもらいたいんだ」

「コピーズ・ロッドは私が預かりましたわ。責任を持つて管理いたします」

カノンノが資料に書かれた植物の名を呟くと、ウィルがそう説明。ナタリアがコピーズ・ロッドを見せながらそう返した。

「了解しました」

「うん、任せといて！」

カイは資料をきつと眺めると内容を理解したのか頷き、カノンノもそれに続く。

「うん、じゃあ気を付けてね。行ってらっしゃい」

そしてアンジュの見送りの言葉を聞きながら、カイ達はバンエルティア号を後にしてシフノ湧水洞へと向かうのであった。

「そういえば、ライマ国って今はどうなってるの？」

「ライマ国の暴動も収まり、秩序も戻り始めていますね」

シフノ湧水洞についたところでカノンノが思い出したように尋ねる。ナタリア達がアドリビトムに来た理由は暁の従者の起こした暴動によって国が荒れたこと。しかしその暁の従者が世間から消えた事で暴動も収まった様だ。だがそう答えるナタリアの表情はどこか暗い。

「ですが、民の苦しみは続いている。どうして、もつと前から国民の苦しみに気づけなかったのでしょうか」

「しけたツラをするな！」

暗い表情でその後悔の言葉を吐くナタリアをアツシユが一喝した。

「お前は国のためにアドリビトムへ入ったのだらう。それに……お前がそんな様子では、一緒に国を変えられないだらうが」

「アツシユ……」

アツシユの言葉を受けたナタリアの顔が嬉しそうにほころぶ。

「約束を……子どもの頃に交わした約束を覚えていて下さったのですね。その……プロポーズの……言葉も……」

「所詮、俺はルークの影だ。王にはなれない。お前との未来も……」

ナタリアの言葉に対し、アツシユは突き放すような言葉で答えるが、続けて彼はナタ

リアの顔を真つ直ぐに見た。

「だが、お前と一緒に国を……世界を変えていくことはできる」

「アツシユ……世界を変えられるのなら、私は王族でなくても構いませんのよ」

「……ナタリア」

アツシユとナタリアはそう言つて、じつと見つめ合う。

「……アツシユとナタリアつて、そういう関係なの？」

「な!?……何を聞いているツ!! 死にたいのか、貴様……」

その光景を見たカノンノが疑問に思ったようにそう尋ねると、アツシユは驚いたように怯んだ後睨みを利かせて怒鳴る。

「……チツ」

そしてやがて舌打ちを叩くと「行くぞ、ナタリア」と彼女を呼んで歩き出す。

「……はいー」

ナタリアもこくりと頷いてアツシユの後を追う。カイとカノンノも彼らを追うように歩みを進めるのであつた。

パシヤリ、と湧水洞なだけあつて道に点在する浅い水たまりを踏む音が洞窟内に響く。随分と深いところまで歩みを進めたところでカイとアツシユが足を止め、そのやや後ろを歩いていたカノンノとナタリアも足を止めると共に、カイとアツシユが刀と剣を

抜くのを見て弓を構え大剣を抜く。

彼らの目の前に現れたのは通常のオタオタよりも青色が濃くなっている魔物——オダブルと、青色の体毛をした小鳥とでもいおう魔物——ザーザーだ。

「二気に行く」

そう呟いた瞬間、カイの姿が消える。そう思うとオダブルの一体が上下へと両断され、カイがさつきまで立っていた位置と両断されたオダブルの位置を重ねて一直線上へと至る場所にカイが出現する。

カイが高速で敵に接近、すれ違いざまに渾身の斬撃を入れる影走斬でオダブルを葬ったのだ。しかしそれを理解できなかったオダブルの残りやザーザーやキーキーと奇声を上げて外敵を威嚇することしか出来なかった。

「災いを灰塵と化せ……」

そしてそれはただ相手に時間を与えるだけの結果に終わる。

「エエクスプロード!!!」

炎のManaが空中に結集して火球となり、オダブルやザーザーのいる地点へと落下。地面に着弾すると同時に大爆発を起こす。その炎が消えた後、魔物たちは全て跡形もなく消え去っていた。

「ナイス、アツシユ」



「ふん……貴様も少しは出来るようになったな」

戻つて来たカイの言葉にアツシユは剣を腰の鞘に戻しながら悪態の様子で返答する。カイが高速で一撃入れて相手の気を引き、その隙をついてアツシユが上級魔術を放つて一掃する。という作戦を二人は言葉にしない以心伝心でやってのけていた。

自分達の出番がなかったカノンとナタリアはぼかんとした後二人に拍手を送り、それから一行は再び歩き出す。

「まあ、花が流れていきますわ」

シフノ湧水洞の地下水路を進んでいく途中、ナタリアが水面を流れる色とりどりの花に気づき、「なんて美しいのでしょうか」と感嘆の声を漏らす。

「ユルングの樹の花だ。この上流に、樹があるんだろう」

アツシユは前もって資料を確認していたのか迷いなく、流れている花はユルングの樹の花だと断定する。それから彼は洞窟の壁に目を向けた。

「土壁が濡れているな……水位が下がっているのか？」

「引き潮……かもしれませんわね。ここは海と繋がっていますもの」

アツシユの呟きを聞いたナタリアがそう分析、「潮の満ち引きで水位が変わるのだと

「思いますわ」と述べた。

「ところで、ユルングの樹ってどんなものなのかな？」

「ええ。資料には雄花は水上に、雌花は水中に咲くと書いてありましたけれど……受粉の効率が悪そうですわね」

カノンノの言葉にナタリアがそう答え、「なぜ、その様な進化を辿ったのか。不思議ですわ」と締める。

「それにしても、本当に綺麗だね」

歩きながらも水面を流れるユルングの樹の花を見ながらそう言葉を漏らすカノンノ。その言葉にナタリアも「ええ」と首肯をして頬を緩ませた。

「こうしていると、世界に迫る危機など何かの悪い冗談のように思えてきますわ」

「……」

「！ごめんなさい。私ったら……」

アツシユのしかめっ面を見て気づかぬうちに不謹慎な発言をしてしまった事に気づいたナタリアが謝罪の声を出す。

「……全てが終わったら、またここへ来ればいい」

しかしアツシユはナタリアを叱る様子もなくそう言った。

「そうすれば、何の気兼ねもなくお前も景色に見入っていられるだろう」

「アツシユ……」

「そのためにも、今すべきことに集中するぞ」

アツシユはナタリアを気遣う様子を見せながら、歩みを速める。「遅れるなよ、ナタリア」と彼女に言葉を投げかけ、ナタリアも嬉しそうに微笑んで「はい！」と返した。

「……っ!! なんですよ、この生物は!？」

洞窟の奥深くまで足を踏み入れた時、ナタリアが背負っている矢筒に右手をやり、同時に左手に握る弓を前に突き出して弓を撃つ構えを取る。彼女らの目の前に赤い体色をし、背や口元にヒレがついた巨大な水棲魔物——アンキュラプルプが存在していたからだ。

「依頼の品はあるようだが、簡単には持ち帰れないようだな」

見覚えのない魔物の姿にナタリアは思わず声を上げるナタリアの隣で、アツシユもアンキュラプルプの後ろにユルングの樹があるのを確認して眩き、剣を構える。カイも右手を左腰に挿している刀の柄へとやり、アンキュラプルプを睨みつけた。

「行くぞ!」

「キィー!!」

カイの叫びに対してアンキュラプルプが吼え、その呼び声に答えるようにクラゲのような魔物——プルプが周囲の池から出現する。

「ナタリア！ あのクラゲを撃ち落とせ！」

「お任せください！」

アツシュが素早く指示を出し、それにナタリアは了承の声を出して弓に矢を二、三本番えて一気に放つ。その矢が空中を浮遊していたプルプに突き刺さり、痛みに怯んだのだらう動きが止まった隙をついたアツシュが剣を振り下ろして一刀両断する。

「来たれ爆炎、焼き尽くせ！ バーンストライク!!」

『キュウウウウ!!』

「ギイイイッ!!」

そこにカノンノの詠唱が完了。炎のマナが巨大な火球となって具現して降り注ぎ、プルプを焼くのみでは飽き足らずアンキュラプルプまでその熱波が届く。

「はあああああっ!!」

そしてその熱波と爆炎をかいくぐり、カイがアンキュラプルプへと突撃。鞘に収めていた刀——忍刀血桜が引き抜かれると同時にその刀身を炎が覆う。

「鬼炎斬！」

抜刀と同時の横薙ぎ一閃に続き、素早く刀を振り上げて鋭く振り下ろす二閃、十字を

描く形の斬撃がアンキュラプルプの身体を焼き裂く。

それだけで終わらずカイはアンキュラプルプの巨体に乗リかかると相手の身体を蹴って跳躍、素早くアンキュラプルプの攻撃範囲から離脱した。

「ギイイイイイイッ!!」

アンキュラプルプが再び吼え、それと同時に新たなプルプが周囲の池から飛び出してカイ達を包囲。アツシユがチツと舌打ちを叩いて周囲を確認、後衛のナタリアを庇うように数歩後ろに下がる。

カノンノもそれを見て彼らの背後をカバーするように立ち位置を変えると共に、跳躍して離脱したカイもカノンノの近くに着地する。

「これじゃあキリがないよ……」

「ああ……アツシユ」

「なんだ？」

周囲のプルプを見て嫌そうな顔をして漏らすカノンノの言葉にカイも同意、僅かに考える様子を見せてからアツシユを呼び、アツシユも返事をしただけで目線で続きを促す。

「俺がクラゲをなんとかするから、アツシユは親玉を頼む。ナタリアはアツシユの援護、カノンノはナタリアについて護衛しながら隙を見て魔術で援護を頼む」

「……分かった」

カイの作戦を聞き、アツシユは首肯。アンキュラプルプを睨むといつでも走り出せるように構えた。

「ナタリア、背中には任せただぞ」

「……お任せください！」

ただ一言残して走り出したアツシユの背中にナタリアは呼び掛け、弓を構える。カイもアツシユと共に走り出し、カノンノはナタリアの脇に控えるように立って大剣を構えた。

『キイキイッ!!』

走り出したアツシユとカイの前に立ちふさがるプルプの群れ。それに対しカイは両手の指に挟むように苦無を持つ。

「行くぞ、アツシユ！」

「ああ」

カイが合図を出し、アツシユも了承を出す。それと同時にカイは両手の苦無をプルプの群れ、そのすぐ目の前の地面目掛けて投擲した。

「隴土乱！」

そう叫ぶと苦無に込められていた大地のマナが解放され、岩の壁が出現してプルプの

行く手を阻む。

「はあああああつ!!」

しかし岩の壁が地面から突き出る勢いを利用し、敢えてそこに立っていたアツシユは大ジャンプ。プルプの群れを飛び越えて一気にアンキュラプルプへと斬りかかった。

『ピイイツ!!』

「させません!　そこですわ!」

それに気づいたプルプが数匹、空中を跳ぶアツシユに襲い掛かる。だがそれにいち早く勘付いたナタリアが弓に数本の矢を番えて放つ特技——シユトルムエツジで襲い掛かるプルプを串刺しにする。

彼女を背後から狙うプルプはカノンが大剣を振り回して粉微塵に砕いていた。

「覚悟しろ!」

一方、アツシユはアンキュラプルプ目掛けて空中で剣を上段に構え、同時に雷のマンガ剣に収束する。

「轟雷喰らいやがれ!　襲爪雷斬!!」

「ギイイイツ!」

雷を纏った剣で振り下ろし、同時に落雷を発生させて追撃を行う剣技——襲爪雷斬。剣と電流と落雷の三連続攻撃にアンキュラプルプは怯み、両腕のような触手を振り回し

てアツシユを追い払おうとする。

しかしアツシユはその触手の攻撃を剣を振るって弾き、時には受け流して回避。アンキュラプルプから離れようとせずに攻撃のタイミングを計っていた。

「ギイイイイイイツ!!」

三度アンキュラプルプが咆哮。またプルプを呼ぶつもりかと周囲へ警戒を向けるアツシユだが、その瞬間アンキュラプルプは巨大な二本の触手を振り上げた。

「チツ」

まずいと判断し、素早く横に飛ぶ。その直後振り下ろされた触手がズガンと音を立てて床を砕くがそれだけではない。直撃を免れたが振り下ろした触手の衝撃で地面が揺れ、一瞬アツシユの動きが止まってしまう。

それだけではない。アツシユの動きが止まった瞬間、プルプの群れの一部がアツシユ目掛けて襲い掛かったのだ。アツシユは再び舌打ちを叩き、足元が安定しないながらも対応しようと剣を構えた。

「アツシユ、走れ!!」

「!」

その瞬間、アツシユは己の視界に赤い風が走るのを見る。それと同時に聞こえた言葉を聞いた彼はプルプの群れに背を向け、アンキュラプルプ目掛けて走り出す。



隙だらけの背中を狙おうとするプルプだったが、その身体は赤い風に吹かれた次の瞬間細切れへと変わっていく。その風が止んだ時、カイが忍刀血桜を鞘に収めるキンツという音が洞窟内に響いた。

「ギイイイイイイツ!!」

アンキュラプルプがまたも咆哮し、触手を振り回してアツシユに突進。それに対してアツシユも己の中のマナを解放、限界突破オーバーリミッツを行って足を止め、剣を掲げた。

彼の解放したマナが周囲のマナと共鳴し、守護の結界を作り出してアンキュラプルプの突進を受け止める。

「雑魚が近寄るんじゃねえ!!」

守護の結界からマナの波動が溢れ、アンキュラプルプを攻撃。アツシユはさらに地面に剣を突き刺して結界に直接己のマナを送り込む。

「絞牙鳴衝斬!!」

「ギイイイイイツ??!!」

マナの波動がまるで獲物を砕く牙の如き衝撃波と化してアンキュラプルプを襲う。アンキュラプルプはその衝撃波から生ずる痛みに呻き、衝撃波が消えた瞬間逃げようとするのを離れ、手近な池に飛び込もうとする。

「私から逃れられると思って?」

しかし、それを許さぬ狩人がこの場にいた。

「降り注げ、星光！」

掲げた弓から光の矢が放たれ、それがアンキュラプルプの足元へと着弾。同時にそれを中心として魔法陣が展開し、アンキュラプルプの動きを封じ込めた。

「アストラル・レイン!!!」

そして動きを封じられたアンキュラプルプ目掛けて無数の光の矢がまるで雨のように降り注ぐ。その光の雨が止んだ時アンキュラプルプはもはや動くことさえ出来ずにぐらりとその巨体を揺らがせて池の中に倒れ込む。

そしてアンキュラプルプが再び浮かび上がることはなかったのであった。

「これで邪魔はなくなったな…用事を済ませるぞ、ナタリア」

「はい」

アンキュラプルプが池の中へと沈み、自分達のボスであるアンキュラプルプが倒れた事でプルプの群れも逃げ出した。アツシユが周囲の安全を確認してナタリアに呼び掛け、ナタリアがコピーズ・ロッドを手に領いて返事をする。

アツシユを先頭に洞窟の奥、先ほどアンキュラプルプがまるで守っているように立ちふさがった場所へと向かう。その先にある樹——ユルングの樹の根元は水に沈んでおり、しかしその根から無数の花が蕾を開かせていた。

「この時間だけ、雌花が水中から顔を出すのか……」

「では、この落ちてくる雄花とは、この引き潮の時間だけしか出会えない、という事ですのね……」

アツシユの言葉を聞いたナタリアは、ユルングの樹にコピーズ・ロッドをかざしてそのドクメントをコピーしながら、雄花と雌花がいつも出会えないという事にどこか寂しそうな気持ちを隠したような声で呟く。

その呟きに対してアツシユはそのようだと肯定を行った後、潮が満ちていく時は樹の上に咲く雄花が落下しないように進化したのだろうと推測を口にする。

「この資料によると、ユルングの樹は陸から水中に根を下ろすように進化したんだって」  
「植物も生き残るために、必死に知恵を絞ったのでしよう……栄養が豊富で、他の植物には遮られる事がない場所を目指したようですわ」

カノンノがあらかじめウィルに渡された資料を読みながら言うと、ナタリアが生き残るために知恵を絞り進化をした結果なのだろうと言った。ユルングの樹は呼吸を水上では通常通り葉にある気孔を使い、水中では根から直接、水に溶けた二酸化炭素を取り込んでいる。水や養分も、根の表面の細胞から塩分だけを除いて吸収しているのだと、資料に書かれていたことを説明した。

「生きていくために、特殊な進化を遂げた植物……ということか」

通常植物は地下に張った根から栄養を吸収する。しかしユルングの樹は水から栄養を取るように進化をしている。特殊な進化と言ってもおかしくはないだろう。

「生きるために、次の世代を残していくために変わる……か。他の種の生息域を奪わず、新天地に適應する為に自らの変化を選んだんだな」

「奪わず……自ら変わる……」

アツシユの言葉を聞いたナタリアは、その内容をどこか興味深いものを聞いたような、大事な事を思う雰囲気です。反芻する。

「私達ヒト、そして国や世界も変化していく事が出来ますわよね……」

「……ナタリア。カイを見ろ」

ナタリアの眩きに対してアツシユはユルングの樹を見つめているカイを指す。

「あいつは、故郷も無ければ 血の繋がった親や兄弟もない。だがな、こいつは行動する事で世界を変えていつている……俺達にも、出来ない事はない」

「アツシユ……そうですわね……」

どこか決意に満ちたアツシユの言葉。それを聞いたナタリアも頬をほころばせ、自らの行動で世界を変えていこうという決意を新たにす。

そしてここで行うべき用事も終わったため、彼らはシフノ湧水洞を後にしてバンエルティア号へと戻っていくのであった。

「ユルングの樹のドクメント採取、お疲れ様」

出迎えてきたアンジユがまずは今回のクエスト終了の労をねぎらう。

既にバンエルティア号にも各地から、どんどん進化種が集まってきており、今は船の皆でドクメントの抽出作業をやっているそうだ。

シングもリタにドクメントの抽出方法を教わったらしく、出来ないと言いつつ諦める前にまずは教えてもらってやってみる。リタやハロルドのような頭脳派にはなれないけれどちよつと手伝うくらいなら出来ると気合充分に言うシングに、コハクも大きく頷いて同意を示していた。

「さあさ、また新しい植物が届いたから、ガンガン手伝ってもらおうよ」

「よし、頑張ろうね、コハク！」

「うん！ 頑張ろう！」

そこにハロルドがドクメント抽出対象なのだろう植物の入った荷物を持ちながら手伝いを呼び、シングとコハクは頑張ろうと言いつつ荷物をハロルドから受け取り作業部屋へと向かっていく。

その後ろ姿を見ながらアンジユはふつと笑い、「みんな頼もしいな」と言葉を残す。「このギルドを立ち上げて、本当に良かった。さてと、次に採取する植物の資料はまだかな？」

「ウイルスが作成中よ。あと、ちょっとね」

「オツケーよ。それじゃカイ、皆。今回もご苦労様でした」

次に採取する植物の資料が完成するまでは間があるらしく、その時まで休んで英気を養ってもらおう。アンジユはそう思い、今回のクエストを行った四人に労をねぎらう言葉を送るのであった。

カイ達がそんなクエストを行っているのと同時時間帯。ルバーブ連山の山頂で剣と剣がぶつかり合う金属音が響き渡っていた。

「剛・魔神剣!!」

一方の剣士が剣を地面に叩きつけ、前方に衝撃波を発生させて相手の剣士——青色の鎧を纏った黒い何かを牽制し距離を取らさせる。

しかしそれで体勢を立て直すわけではなく剛・魔神剣を放った剣士は左手に握っていた銃をその剣士へと向けて引き金を引いた。

——!

相手が回避できないタイミングでの発砲を、こちらも同じく青が基調だがどこかメイド服に似たような服を纏った黒い何か鎧剣士の前に躍り出て左手に構えた盾で防ぐ。

一対二という構図に銃剣士——レイは口元に好戦的な笑みをたたえていた。

—  
鎧剣士——男性レディアントがメイド剣士——女性レディアントの後ろから飛び出てレイに斬りかかり、レイはそれを右手に握る剣——エクスカリバーで受け止める。

「はあっ!!」

そしてエクスカリバーを力任せに振るって相手の剣を押し返したところで相手の腹へと蹴りを入れて蹴り飛ばす。レディアントを纏うための人工精霊を相手に腹への蹴撃が効くかは疑問だが、とりあえず動きを封じる事だけは出来た事を素早く確認したレイは盾を構えたまま突っ込んでくる女性レディアントを睨みつけた。

——瞬迅剣

盾を目隠しに突きの出所を見せなくしていたがレイはそれをエクスカリバーで受け流して突きを逸らす。突進の勢いを殺せずにたたらを踏む女性レディアントの側頭部目掛けて銃を乱射しながら回転。

「くらえ!!」

!?

至近距離からの銃乱射に加えての回転斬り。背後を狙われた女性レディアントにそれを防ぐ手段はなく、背中から深く斬られた女性レディアントはそのまま地面に倒れ伏

した。

!!!

そこに蹴り攻撃による一瞬の行動不能から復活した男性レイアントが、レイの背後から斬りかかる。それに対しレイはちらりと男性レイアントを見据えてニヤリと笑う。

!?

同時に男性レイアントは何かの力に吹っ飛ばされ、そこで彼——人工精霊に性別や意識があるのかは不明だが——は気づく。レイから圧倒的なオーラが立ち上っていること、すなわち彼女が限界突破オーバーリミッツを行ったことに。

「これで終わりだ」

そう言つて男性レイアントに向けられる銃には魔法陣が展開している。

「Xバスター!!!」  
クロス

!!??

魔法陣が敷かれた銃口から光の波動が放たれ、まるで光の波のような力に男性レイアントは飲み込まれるしか出来なかつた。

「私の勝ちだな」

——光……光 マトイシ モノ……世界樹 ノ マナ ノ 輝キ……



レイの言葉に答えるようにそんな、男とも女とも老いているとも若くあるともとれる不思議な声が聞こえてくる。

——否……ソナタ ハ 我ラガ世界樹 デハ ナイ……

「その通りだ……だが、我の勝ちには変わるまい……貴様らの力、奪わせてもらおう」  
犬歯を牙のように覗かせ、眼帯で隠していない右目を怪しく輝かせるレイ。

レイディアントとそれを纏う人工精霊は光の粒子となって消滅していく。しかしレイが剣と銃を置いてフリーにした両手をその光の粒子に向けて掲げると両手が光を放ち始めた。すると光の粒子はまるで導かれるようにレイの両手の光へと吸い込まれていく。

「フ、クククク……ルミナシアのデイセンサー……今度だ、今度こそ……貴様を殺してやる」

光の粒子を吸い込むと共に力が沸き上がるのを感じ、レイはただ一人ルバーブ連山の山頂でそう眩きの漏らすのであった。

## 第四十一話 砂漠に潜む命（前編）

砂風の吹き荒れる不毛な砂の地——カダイフ砂漠。

そこを歩く数人の男女の顔を茶色い草が風にあおられてふわふわと転がり、それを見た金髪の青年が「あつ！」と声を出した。

「あの転がっているのが風来草じゃないか？　こんな所で見つけられるなんて、意外と楽な仕事だったな」

「スタンさん、必ず地面から生えている状態のやつしかダメって資料に書いてありますよ」

金髪の青年——スタンの言葉にその隣を歩く色黒金髪の青年——ロニが、バンエルティア号を出る時にアンジュから渡された資料を読みながら、地面から生えているものじゃないとダメだと注意。それを聞いたスタンが残念そうにため息を漏らした。

「何だ……結局、奥まで行かなきゃなんないのか。転がっていたのは、枯れたやつなのか」

「成長したらあんな風に茎から切り離して、転がりながら種を撒くって書いてるよ」

スタンの疑問に答えるのは同じく資料を読んでいるピンク髪の紅一点——カノンノ

だ。

「あれもツリガネトンボ草の進化種なのか……不思議だな」

「そうだな……俺もカイル達と一緒にドクメントの抽出作業ちよつと手伝つてたけど、植物つてみんな同じだと思つてたのに全然違うもんな」

最後の一人——カイルはアブソール霊峰で見たオイルツリーとは全く違う姿かたちの風来草を見て、ツリガネトンボ草から進化したのは同じはずなのに全く違う姿になつてゐる事から生物の進化というのは不思議だと想いを馳せる。

スタンもその言葉にバンエルティア号に送られてきたツリガネトンボ草の進化種のドクメント抽出作業の経験から得た感想を呟く。そんな彼をジツと見ながら、ロニが何かを考えるように顎に手を当てた。

(この世界のスタンさんは、まだ英雄になつていない……少なくとも、そうは呼ばれていない)

異世界からやってきた——というかハロルドの実験の影響でルミナシアに引きずり込まれたという方が正しいだろう——ロニ達の元の世界ではスタンは英雄と呼ばれてゐる。

しかしそれが原因でバルバトスに狙われ、しかもそのバルバトスも今はロニ達と同じくルミナシアに飛ばされてきている。もしもスタンが英雄と呼ばれるようになれば元

の世界と同じようにバルバトスに狙われる可能性があるのかもしれない。

そして元の世界ではともかくルミナシアにはまだカイルは生まれていない。もしもカイルが生まれる前にスタンやルーティがバルバトスに襲われるなどもしものことがあればカイルは生まれてこない可能性がある。ロニはそんな事を考えていた。

「どうしたんだ、ロニ。腹でも痛いのか？」

「えっ……」

しかし急に黙り込んだのが不自然だったか、スタンが首を傾げながらロニに問いかけ、ロニも声をかけられてしかも不審がられたのに気づいたのか、取り繕うような笑顔を彼に向ける。

「ええええええ、いやいやいやいやいや。何にも、どこもございませんっ！ さーあ、風来草を探しに行きましよう」

そして慌ててそう言つてスタンの後ろに回り込み、彼の背中を押して仕事に戻ろうと誤魔化す。

「スタンさん、ここは俺が守りますから長生きして下さいよ！」

「ええっ？ 俺、ロニより年下なのに何でそんな心配されなきゃなんないんだよ！」

しかしそんな言葉が出てしまい、逆にスタンに不思議がられる羽目になってしまった。

「……ロニさんってなんか不思議だよね？」

「まあ、ロニにも色々あるんだ」

カノンノがきよとんと首を傾げてロニを不思議だと評し、彼らの事情を知るカイが微笑を浮かべてそう返すと、二人も先に進んだロニとスタンを追いかけて歩き出した。

「ヒトの争いの火が消えた……」

一方その頃、緑に囲まれたオアシスのような場所で、左目に星のような飾りをつけ、綺麗な鉱石の装飾を身につけた不思議な雰囲気を漂わせる少女——ラザリスがそう呟き、続けて得心がいったように頷く。すなわち、この世界のヒトにとつての敵が自分に変わった。だからヒト同士で争う場合ではなくなったのだ、と。

そんな事を考えた時、彼女の傍らにいる、狼の身体が鉱石化したような姿をした生物がバタリと倒れ、青い鉱石を身体にしたような巨人がぐくりと膝をつく。双方とても苦しそうな雰囲気を見せているのが分かり、ラザリスはそれらを憐れむような目で一瞥した。

「苦しいかい……僕の世界とルミナシアは、土壌も大気も理が違うんだ。早く、君達が生きていける様に、この世界の理を塗り替えてあげる」

苦しそうな雰囲気の原因を知るラザリスが鉱石狼と鉱石巨人を撫でながら呟く。

「生きたいよね……」

一方その頃、カイ達は風来草は植物なのだからオアシスに群生してないだろうかという考えのもと、砂漠の奥地にあるオアシスに行つてみたのだが空振りに終わり、辺りを調べながら入り口周辺へと戻つてきていた。

「こつちの道つて行けねえのかな？ なーんか、この先が気になるんだよな」

「無理だよ。こんな大きな岩、そう簡単に動かせるわけが……」

ロニがぼやく。彼の見る先にも確かに道はあるようのだが大岩が道を塞いでおり、先に進めないようになっていいる。彼の言葉にスタンも動かすどころか破壊するにも難儀しそうな大岩を見上げながらそれに手を当てる。

「うわっ!？」

同時にスタンの悲鳴が響く。スタンが手を当てて軽く体重をかけた途端、大岩が転がっていったからだ。体重をかけようとした場所がいきなり無くなった事でスタンがつんのめり、後ろのロニ、カイ、カノンノがぼかんとする。

「スタンさんが押した途端、動いた……」

「(もしや英雄の力か?……ま、まさか、な…)…スタンさんっ、すげえ! すげえよ!!」  
「え、あ?」

カノンノが眩き、ロニは自分達の知るスタンが英雄だからこそ、その力なのかと考えた後、まさかと置いておいた上でスタンを賞賛。つんのめっていたスタンはぽかんと口ニを見た後困ったような笑みを見せる。

「いや、今のはたまたまだよ。たまたま」

「よし、道も開けたんだ。ロニの勘を信じてこっちに行つてみよう」

今のはたまたま、褒められるような事じゃないとスタンが言い、カイがこの先に進もうと助け舟を出す。そして彼らは大岩が塞いでいた道の先に進んでいった。

「シヤアアアアアアッ!」

「ブオオオオオオオッ!」

カイ達が歩みを進めた先に生息している魔物。赤い甲殻を持つように進化したボアのアマードボアと、黒光りする鱗で全身を固めたバジリスクのデスシーカーが威嚇の声を上げ、スタンとロニも剣や斧を構えて突進、カイは苦無を投げつけて牽制しつつ走り出す。カノンノは残る三人が前衛に走ったため後衛役を行うために魔術の詠唱を開始した。

「爆炎剣!」

「双打鐘！」

スタンがアマードボアの身体を炎を宿した剣で斬り、ロニがデスシーカーに拳を叩き込んだ後斧の斬撃で追撃。

「忍法・雷電！」

『プギイイイツ!?!』

そこにカイが投げて地面に刺さった苦無から電撃が解放。周囲に立っていたアマードボアを麻痺させる。

「仇なす者に、聖なる刻印を刻め！ フラッシュユティア!!」

さらにカノンノの魔術が発動。聖なる十字架が地面へと描かれ、放出される光の魔力が追い打ちをかけた。

「魔神剣・翔牙！」

ジャンプ状態から魔神剣を放ち、地上の敵を狙い撃つ秘技がデスシーカーに刺さり、動きを止める。

「今だ、ロニ！」

「はい、スタンさん！ 戦吼爆ツ破!!」

スタンからの合図を聞いてロニが突っ込み、気合を込めた掌底でデスシーカーを吹き飛ばしその先にいたアマードボアやデスシーカーにぶつけて諸共動きを止める。



まだ斧のリーチ内、と読んだロニはニヤリと笑い、さらなる追撃を狙う。行うは相手を完膚なきまでに叩きのめし、上空からあふれる気合を放射してぶつける秘奥義——  
ファイナルプレイヤー。

「叩きのめ——」

ぶうんつと気合を入れて斧を振り上げる。しかしその時、気合が空回ったのか振り上げた斧が彼の手からすっぽ抜けて上空へと飛んで行く。思わずカイ、カノンノ、スタンが斧を目で追って空を見上げた。

「——さねえっ!!」

ロニが声を張り上げる。

「それが真の!」

「あつ」

ロニの口上の途中、ガンツと何かがぶつかったような音が上空から聞こえ、カノンノの声が重なり、思わずロニも空中を見上げる。するとすっぽ抜けた斧がぶつかったらしいホークが落っこちてくる光景が彼の目に映った。

「大丈夫かあつ!?!」

思わずホークに駆け寄って声をかけてしまうロニ。完全に隙だらけの姿に体勢を立

て直したデスシーカーやアマードボアが狙いを定めるが、その時ホークにぶつかって落下位置が変わった斧が空高くから勢いよく落下。地面を割るかの勢いでそれらの群れへと直撃するのであった。

「……………」

ホークに治癒術をかけていたロニがそれに気づき、落下した斧の衝撃で魔物の群れを倒したことに気づくと慌てて斧を拾いに走り、斧を拾うと僅かな困惑の後、ポーズを決めた。

「お、俺の進化は止まらんぜ!!」

「ださー」

どうにか取り繕おうとするロニだが、斧がすっぽ抜けた事からの偶然の産物であることは明らか。カイとカノンノの呆れきった目での冷たい視線と言葉が彼に突き刺さるのであった。

なおホークは治癒されたからか勝手に飛んで去って行った。

それから一行は魔物を倒しながら風来草を探して砂漠の奥へと進んでいく。しかし砂地を随分長く歩き、疲れが溜まってきていた彼らは岩地に出来た影に入って一時休

憩、カイとカノンノが水筒の水を飲んだり軽食を食べたりしている中、同じように水分補給をしていたロニはふと気になったかのようにスタンを見た。

「スタンさん……とルーティさんは、なぜアドリビトムへ入ったんですか？」

「フィリアが世界中の人を手助けする仕事があるって教えてくれてさ」

単なる世間話のつもりなのだろう、とスタンはアドリビトムに入った理由を古い仲間  
の一人であるフィリアに誘われたのだと説明。

戦争で親を失った子ども達の為に自分がしてあげられることをしたいからその手伝いとして、それにその為の資金も稼がなきゃとルーティが言った事も理由としてあげていた。

「英雄の一人である、フィリアさんからか……けどフィリアさんもまだ、この世界では英雄になってないな……」ええと、孤児院とかですよね……その、孤児院の……名前は？」

「はは、そこまではまだ決めてないよ。ただ俺は、困ってる人を助けて、子ども達が明るく元気に育っていつてくれたらなって思うんだ」

ロニは世間話の振りをしながら情報収集、自分達の世界とルミナシアのスタン達の差異を探っていく。

その企みの元、次に切り出した孤児院の名前。それもまた自分達の世界と同じデユナ

ミス孤児院なのかと探ろうとするが、スタンは気が早いというように笑ってまだ決まっていなと答えた。

「……カイルのヤツも、困ってる人を放っておけない性分なんだよな」

彼の言葉にロニは実際は逆なんだろうがカイルの面影を感じ、思わずという様子で呟く。

「うん、カイルは優しい子だよ。あんな風に、子供が真つ直ぐ育つ場所にしたいよな」

「はい！ スタンさんならきつと出来ます！」

ロニの言葉にスタンが同意、自分が目指す孤児院もそういう場所になりたいと話す彼に、ロニは断言するように頷いて答えた後、どこか照れたような笑みを見せる。

「というか、スタンさんもルーティさんもその歳できちんとした夢があつて、すごいというか……立派ですよな」

「立派？」

唐突な言葉にスタンはきよとんとした顔を見せ、その後合点がいったように一つこくと頷いて笑みを浮かべる。

「ああ、ルーティはそうだよな。孤児院を建てるのはずつと昔からの夢というか、目標だったみたいなんだ。俺はその手伝いをしてるけど……自分の夢とか、将来とか、そういうのはまだよくわかんないよ」

「またまたそんな、ご謙遜を。スタンさんはルーティさんと一緒にその孤児院を建てるつもりなんでしょう？　なら、スタンさんも十分立派ですよ」

「いやいや、そんな事ないって」

スタンの言葉を謙遜と受け取る口ニだが、スタンはそんな事ないと言って笑う。

「ほんとに、家で昼寝してる暇があるなら　ちよつと手伝いなさいよ！」　って、ルーティに駆りだされただけで、リリス……妹にも、寝てばかりいるより他人様の役に立つ事をした方がずつといいとか言われたからさ」

笑いながらそう答えるスタンに口ニは絶句、あさつての方を向いて何かを考えるように「えーと」と声を漏らした後、恐る恐るという様子でスタンの方を向き直した。

「念の為に伺いますが……本当にそれだけ……なんですか？　その……スタンさんがルーティさんと一緒にいる理由、っていうのは……」

「ああ、そうだよ」

口ニの問いかけに即答するスタン。その瞬間口ニは再びあさつての方を向いて歯を噛みしめた。今にも頭を抱えそうな彼の様子にスタンが不思議そうな顔を向けた。

「口ニ？　大丈夫か？　おーい」

「えっ!?　あ、ああ、いえいえ、なんでもございませんですよ?」

スタンの呼びかけに口ニは気づくと、取り繕うように笑ってガバツと立ち上がり、岩

陰から外を確認する。

「お、おお！ いい具合に太陽が雲に隠れてる。そろそろ出発しましょうか！ おーいカイ、カノンノ。そろそろ行こうぜー！」

太陽が雲に隠れていれば日差しも弱まる。しかしそんなのただ話を切り上げる理由にしたいような様子のロニは、水筒の蓋を締めると残る二人に呼び掛ける。スタンは突然ロニの様子が変わったことに不思議そうな顔を見せながら、自分も出発の準備を始めるのであった。

## 第四十二話 砂漠に潜む命（後編）

「はあゝあ……」

「どうしたんだ、ロニ？ お前が出発しようって言い出したんだろ？」

風来草を探してカダイフ砂漠を歩く中、ロニが唐突にため息をつき、その様子に気づいたカイが辺りの警戒をスタンとカノンノに任せてロニに話しかける。

「あゝいや、なんでも……ああ、まあお前ならいいか」

ロニはなんでもないと誤魔化そうとするが、直後自分達が異世界の人間だと知っているカイなら構わないかと頭をかく。

「さつき休憩中にちよつとスタンさんと話したんだけどな……スタンさんとルーティさん、本気で全つ然何にも進展してないみたいだな。カイルはちゃんと生まれてくるんだろうな〜とか、俺達の未来は大丈夫なのか〜とか、ちよつと不安になっちゃって……」

「この世界の未来のカイルやロニの心配までするなんて、お人好しだよな」

「おめえに言われたかねえつつの」

本来カイルとロニ、リアラとジューダス、そしてバルバトスはルミナシアの住人ではない異邦人。そんな彼がルミナシアにこれから生まれ落ちるだろうカイルや、もしかし

たらこの世界のどこかにいるのかもしれないロニが自分達と同じような未来へと進めるのかと不安がる様子にカイが苦笑する。

しかしロニはこの世界を滅びから守ろうとするある意味究極のお人好し、デイセンダーであるカイに言われたくはないと彼を肘で小突いた。

「カイ！ ロニさん！ ちょっと来て!!」

すると先の方の警戒をしていたカノンノが声をかけ、手を振って合図。二人も顔を見合わせて頷き合うと彼女に駆け寄った。

「どうした、カノンノ？」

「あれ見て、あれ！」

「あれ?……つて!!」

カイが問いかけ、カノンノが先を指差す。ロニが目を凝らしてカノンノの指差す先を見ると絶句。彼女の指差す先には砂漠には似つかわしくない緑あふれる光景があったのだ。

「なんだありや? あの辺に水場でもあるのか? それとも地下水でもあるとかか？」

「分かんない……けど、スタンさんがちよつと見てくるつて——」

「なにいー!!?」

「——ひゃあつ!!」



砂漠という乾燥地帯に緑があるのは珍しい。それはつまりこの近くに植物が育つだけの水場があるか、あるいは地下水があるという証拠である。カノンノもその辺は分からないそうだが、スタンが一人で調べに行ったと報告。するとロニが悲鳴のような叫び声をあげた。

「ス、スタンさん！ 一人は危険です!! 今行きますから待つててくださいー!!」

そして猛ダツシユで緑地へと向かい、置いてけぼりになったカノンノはきよとんとしたままカイを見る。

「ロニさんって……ホントに変わってるね？」

「まあ、色々あるんだ」

カノンノの言葉にカイはそう答え、二人もそこで立ち尽くしているわけにもいかない。のでスタンを追うロニを追って緑地に向けて走り出した。

「ぜえ、はあ……ス、スタンさん……」無事でよかった……」

緑地に辿り着いたロニは汗だくで荒い息をしながら、結局魔物もいないため傷一つないスタンを見て一安心、そんな彼の姿にスタンは「大袈裟だなあロニは」と笑い、緑地を見回す。

「この辺りをさーつと探してみたけど、風来草はないみたいだ。もしかしたらこの奥にあるかもしれないけどさ……」

スタンはそのままで言うと、鼻をヒクヒクと鳴らす。

「この先に何かあるのかな？ ニオイ、じゃないな……妙な空気を感じないか？」

「この先、ヤバイのでも待ち構えていそうですね……」

その言葉通り、妙な空気が緑地の先から感じ、ロニも真剣な顔でそれに賛同。うんと一つ頷いた。

「じゃあ、スタンさん。あとは俺とカイで行くので、待つてて下さい」

「えっ！ な、なんでだよ!？」

「な、なんでつてその……そう、スタンさんとカノンノはこの辺で風来草を探してもらつてですね、手分けした方が……」

「いや、この辺はもう探したつてば。手分けするより一緒に行つた方がいいつて」

「危ない目に遭つてもらつては困るんです。頼みます!!」

「それは、みんな同じだろ？ 仕事を無事に終わらせる為に、この四人で行けつて言われてるんじゃないか」

スタンに安全が確認できた緑地で待つてもらおうとするロニと、彼の意見に反対して、奥から危険な雰囲気があるなら仕事を無事に終わらせるためにも一緒に行くべきだと主張するスタンで意見が平行線になる。カノンノが話の横で困惑し、カイは目を逸らしてふうと息を吐いていた。

「あなたには……スタンさんには。英雄になってももらいたいからです」  
「え、英雄？……俺が？」

「と、とにかく長生きして、結婚して、子どもも欲しいでしょうし……」

「そ、そんな先の事は考えてないよ」

「いやっ!! そこはもう考えていただかないと! とにかく、ここで待つてて下さい!」

「ロニが何を心配してくれてるのか、分からないけどさ……」

英雄という単語や年上のはずのロニが年下の自分に将来の事を言い出した事にスタンが困惑、ロニがその隙に押し切ろうとするが、スタンは頭をバリバリとかいて難しい事を考えているように困った表情を見せながらロニを見る。

「英雄にならなきゃいけないのなら、危機に立ち向かっていく力が必要だろ?」

「う……そ……そうですね……」

その一言でロニは論破され、結局スタンとカノンも一緒に行く事に決定。ロニが「徹底的にお助けします!」とスタンに詰め寄り、スタンが困惑の笑みを浮かべて「よく分かんないけどよろしく頼むよ」と握手することで場が治まった。

「カイ、ロニさんって……」

「まあ、言つてやるな」

不思議そうにこてんと首を傾げるカノンノに、カイはロニのフォローのつもりか苦笑

いしながらそう返した。

それから四人揃って先に進むが、そこでロニが「なんだありや!？」と悲鳴を上げる。彼らの前にいるのはサボテンに手足がついたような姿をした魔物——カクトウスや、先ほどこから何度か戦ったバジリスク種の魔物の一体サンドファンング。しかしその身体はまるで鉱石に覆われたかのような異様な姿になっていた。

「カイ! あれ、ミラを助けに行つた時に見たオタオタ達と同じ……」

「まさか……皆、魔物は出来る限り無視か、戦わざるを得なかつたら瞬殺だ! 先を急ぐぞ!」

以前、レイアから依頼を受けて精霊マクスウエルであるミラを助けに行つた時、ジルディアの牙に汚染された洞窟で見た変異種オタオタと似たような特徴にカノンノが声を震わせ、カイもその異変の正体に勘付いたか先を急ごうと指示を出す。

「うおおおおおおつ!! 魔王炎撃破!!!」

「くらえ、空破特攻弾!!!」

「焼き斬れ、斬魔龍炎剣!!!」

「やあつ! 空蓮双旋華!!!」

それから先を進む一行は変異種のカクトウスやサンドファンングを斬り倒しながら先を急ぐ。しかしその道中で先頭を走るスタンが「ぐあつ!」と悲鳴を上げた。

「何だ、ここ……は、目が痛む……」

「喉にも刺激が……」

「く……ん？ 向こうに何かいるぞ!？」

痛む目をこするスタンの横で彼を守ろうと息巻いていたロニも喉を押さえてげほげほと咳を漏らす。カイも喉を守ろうとマスクで口を覆い、目も辺りを確認できるギリギリまで細めながら前を視認、その視界に誰かいる事に気づくと一行は刺激を気合で押さえながら先へと進む。

「これは……ジルディアの……」

その先は地面までもが硬質化、以前ミラを助けに行つた時にも見たジルディアの領域だ。

「ディセクター……招かざる客が来てくれたね」

「ラザリス！」

そこに立っていた少女——ラザリスを見たカイが声を荒げる。その横でロニがげほと我慢できずに咳き込んだ。

「この空気は、どうしちまってんだ？ さつきより、ひでえ」

「この空気はボクの世界のもの。君達ルミナシアの民が居る場所じゃない……あまりここに居ると、命に関わるよ」

「ラザリス……ここはお前が侵食したのか？」

ロニのぼやきにラザリスが答え、スタンが目を開けるのもやつとだろうに睨むようにラザリスを見て問う。その言葉にラザリスは「そうだよ」と肯定してみせた。

「ボクの世界の住人に、快適な環境が必要なんだ」

「まさか、そこにいる生物って……」

苦しうに表情を歪めているカノンノが、ラザリスの手前に立つ青色のゴーレムと、その後ろに立つ紫色の硬質ウルフを見る。それにもラザリスは肯定の意を示すように頷いた。

「ボクが生み出した。君達の世界にとって変わる新しい世界、ジルディアの民だ」

まるで友人を紹介するかのよう優雅に手を振ってウルフを指すラザリス。続けて彼女はゴーレムを示した。

「手前の彼は、元は君達の世界のヒトだった。でも、今はボクの世界の住人さ」

「何……だと!？」

それを聞いたロニが絶句、喉の痛みも離れたかのようにラザリスを睨みつけ、声を張り上げる。

「元に戻しやがれ!! この世界をお前なんかに渡してたまるか! おい、カイ! お前の力で戻せるんだろう? ヒトの姿に戻してやってくれ!!」

「ああ……」

ロニが絶叫し、カイに懇願。カイも頷くとジルディアへと変質したものを元に戻す光を両手から放ちながらゴーレムの元に歩き、両手をかざす。

「っ!？」

しかしその次の瞬間、ゴーレムが腕を振りかぶってカイに殴りかかり、直前で気づいたカイが咄嗟に飛びのいてその拳をかわすが、ゴーレムの振り下ろすような攻撃は地面にヒビを入れており、もしもかわしていなければ大ダメージは免れない。

それはつまり、相手をそうしてでも先ほどの光を浴びたくない、ジルディアから離れたくないというルミナシアへの拒絶を意味していた。

「拒んでるのか？ どうしてだよ……」

「何も知らないくせに、とんでもないエゴを吐くんだね……彼が、僕と共に生きたいと願ったんだ」

「何だと……」

その光景を見たスタンが呟き、ラザリスが苛立ったように眉間に皺を寄せてそう伝えるとロニが絶句する。

「君達の世界では、ヒトがヒトを見捨てている。国が民衆を、親が子を、友が友を、隣人が隣人を……ここに居るヒトだった者は、君達ルミナシアの民が見捨てたんだ!!」

ラザリスの言葉に、ゴーレムが静かに頷くような動作を見せ、続けてラザリスはカイをギロリと睨みつけた。

「こんな大地が疲弊するまで、自らのエゴの為に戦い、生き物を殺し、奪い、捨てて！ そんな世界に、ボクの民を返して、どうするのさ……彼らに豊かさ、恐れのない未来を約束出来るのか!! そんな事するくらいなら、この世界はボクが貫う!!」

「待て、ラザリス！ 生命の場はお前が手にしたところで、扱えるものじゃない！ むしろそのせいでこの世界もお前の世界も滅びるかもしれないんだ！」

「じゃあ、諦めろって言うのか！ ボクに、このまま死ぬと!! 生まれてしまったボクには、死ぬ運命しか残っていないと。そう言いたいんだね？」

ラザリスとカイの言い合いが始まろうとするが、ラザリスはそう自己完結するとギリと歯を噛みしめる。

「じゃあ、こつちも死ぬ気で奪うよ。生命の場を……死ぬかどうかなんて、ボク達にはどうでもいい。ボク達はやり尽くす事を選ぶ！」

「カイ！ 避けて！」

ラザリスの叫びと同時にカノンノの悲鳴が響く。それで背後から迫る殺気に気づいたカイが振り返りながら腰の鞘に納めていた忍刀血桜を引き抜くのと、その殺気の主が



彼目掛けて剣を叩きつけるように振り下ろすのはほぼ同時だった。

ガギンと甲高い金属音が響き、殺気の主は舌打ちを叩くともう片方の手で銃を握り、カイに向けると引き金を引く。それによって放たれた銃弾をカイは身体を逸らすこととでかわしつつ相手の剣を受け流した。

しかし相手もさるもの、己の剣の威力を受け流されつつも体勢を崩すことなくカイ達に剣を向けながらラザリス達を守るように彼女らの前に立ち、眼帯で隠していない左目で彼らを睨みつけた。

「レイ……」

「久しいな、ルミナシアの「デイセクター」。そしてアドリビトム」

カノンノの寂しそうな声に対し、レイは感情の籠っていない声を返す。

「レイ……お前、その装備は……」

カイが信じられないものを見るような目でレイを、正確には彼女の纏う、まるでどこかのメイドに申し訳程度の鎧をつけさせたような装飾の装備を見る。

気づいたか、と言いたげにレイはニヤリと笑い、スカート部分を銃をしまつて空けた左手でつまみ、軽く持ち上げる。

「デイセクターに伝わる装備、レディアントだ」

「何故お前がそれを纏っている!？」

「我也デイセンサーだからな。奪い取らせてもらった……ルミナシアのデイセンサーの装備に身を包むなど屈辱だが、あと我はこのデザインはどうかと思うのだが、ラザリス様のために使えるものは使つてやらなくもない」

「くそ、ヤベエ……俺達はまともに戦えないつてのに、ここでラザリスだけじゃなくレイまでいるなんて……せめてスタンさんだけでも……」

「何言つてるんだロニ！ お前達を置いて逃げられるわけないだろ！」

ただでさえアドリビトム内でも屈指の実力者だったレイがレディアント装備を纏っている事、そしてジルデイアの環境に適応できていない自分達はただで目や喉に痛みが走つてまともに戦えないという絶体絶命の状況にロニが悪態をつき、せめてスタンだけでも逃がそうと試みるがそのスタンは皆を置いて逃げるわけにはいかないと拒否する。するとそこにカイが声をかけてきた。

「……スタン、今魔術は使えるか？」

「え？ あ、いや……悪いけど喉がおかしくつて、あまり長い詠唱は……」

「じゃあ、炎のmanaをこの周辺にかき集めることつて出来るか？」

「ああ、それぐらいなら……」

「じゃあ頼む。炎のmanaさえ何とか出来れば、あとは俺が隙を作る」

カイに何か考えがあるらしく、それを詳しく聞いている余裕はなさそうだと判断した

スタンはいを信じる事に決めて己の剣——ディムロス握りしめる。その時ディムロスの鏢にくつついている青い宝玉が光を放ち、それに気づいたレイがスタンに銃を向ける。

「何をやる気だ!?!」

「おっと! スタンさんはやらせねえ!!」

「頼んだぞ——」

引き金を引き、放たれた銃弾をロニが斧を使ってガード。その隙にスタンは仁王立ちになってディムロスを天高く掲げた。

「——ディムロス!!!」

「っ、なんだ!?!」

スタンの叫びと共に、ディムロスの刀身から赤い光がほとぼしり、辺りに炎のManaが奔流。思わずレイが怯み、その隙にカイが印を結んだ。

「影分身の術! 変異!」

行方は己のManaを放出、組み直すことで物質化。自分そっくりな分身を作り出す忍術——影分身の術。

しかしカイはその際にスタンに周囲にかき集めてもらった炎のManaを分身へと練り

込んでレイ達向けて突進させる。

「皆、伏せろ!!」

「っ、まさか! 全員、ラザリス様を守れ!!」

今の状況、そしてカイの指示から相手が何をしようとしているのかを察したレイの叫び声が響き、そこに彼女の懐へと入ったカイの分身が赤く輝く。それをレイが左手に握った盾で殴り飛ばすのと、カイが印を新たに組み、叫ぶのは同時だった。

「影分身・爆!!!」

赤く輝いたカイの分身が次々と自爆。ジルディア陣営が爆発とそれによって生じた煙に包まれ、辛うじて至近距離の爆発を盾で防いだレイは、しかし爆発の衝撃に煽られて僅かに後退しつつ表情を歪める。だが彼女は己を包む煙の先で、光を見た。

「戻れえええええっ!!!」

それは彼女らの世界を書き換える光、彼らの世界へと浄化する光。

「これが目的か!!」

爆発は目くらまし、狙いはこの場をルミナシアに侵食し返すこと。それに勘付いたレイが剣を抜き、その光——カイ目掛けて斬りかかる。

「貴様を屠る、この俺の一撃!!」

「!」

しかしその煙の先から殺気を感じ、レイは足を止めると左手の盾を突き出す。

「クリティカルブレード!!!」

「ぐうっ!」

そこにロニの気合を込めた斧の一撃が突き刺さり、甲高い金属音を響かせると共に生じた衝撃波が辺りの煙を吹き飛ばす。

「楽になったぜ……悪いが、ここから先は通さねえ!」

「貴様あ……」

ジルディアの領域が浄化された事で動けるようになったロニははあくどと気持ちよさそうに息を吐き、ふんと気合を入れ直してレイを睨みつける。レイが睨み返し、右手の剣を握りなおしたその時だった。

「ロニ! 準備出来た、逃げるぞ!!」

「はい! うおりやあつ!」

「ぐっ!?!」

スタンの声が聞こえ、それを聞いたロニも力づくでレイを押しつけて離れると踵を返して逃げ出した。

「なんてな! 俺達の目的はお前らと戦う事じゃねえんだ! あばよーっ!!」

「えいっ!」



「う……」

うめき声がかから漏れ、それを合図にしたかのようにカイは目を開け、起き上がる。

いつの間にかベッドに寝かされていた彼は辺りを見回し、ここがバンエルティア号の医務室だと確認。

「俺は、たしか……」

「あ、カイさん！ 目を覚ましたんですね！」

何があったか进行い出そうとするが、そこに医務室のドアが開いたと思ったら一人の少女が彼に声をかけ、カイも「アニー」とその相手の名前を呼ぶ。

「何があったんだ？」

「スタンさん達から、カイさんがラザリス達の足止めをしながらジルディアの領域を浄化。その負担で倒れた、と聞いています……」

「そうか……皆は無事なのか？ 風来草のドクメントはどうなったんだ？」

「大丈夫です。一番重症だったのは気絶していたカイさんですし、風来草のドクメントはカノンノさんが採取してくれました」

「分かった。ありがとう」

アニーから説明を受けたカイはお礼を言つてベッドから降り、身体をほぐすように軽く柔軟運動を行う。

「カイさん!? 目覚めたばかりなんだからまだ安静に……」

「充分充分。アンジュさん達に目が覚めたつて報告した方がいいだろ?」

「もう……」

心配そうな目を向けるアニーだが、当のカイがけられけらと笑いながら返すと呆れたようにため息をつく。

それから結局もし倒れた時にすぐ処置が出来るようにアニーがついていく事を妥協案として、カイはホールへとやってきていた。

「——というわけで、スタンさん、ロニさん、カノンさんの証言を元にカダイフ砂漠を調査しましたが、ラザリス達の姿は見当たりませんでした」

「あと、ジルディアの領域みたいな変な感じのする土地もなくなつてたよ」

「そう……ありがとう」

「流石に相手も、所在の割れた拠点に留まる程酔狂ではありませんでしたか……」

ホールではさすがとしいなが、アンジュとジェイドに何かの報告をしている様子で、アンジュは難しそうな顔を見せながら、二人に調査のお礼を言い、ジェイドが顎に指を当てながら呟いた後、カイの方を見て「おや」と声を漏らす。



「カイ、もう目が覚めたんですか?」

「あら、カイ。身体は大丈夫?」

「はい。ところで何の話してたんですか?」

ジェイドの言葉で気づいたアンジュが微笑みかけ、カイも微笑みを返しながらさつきの話が何なのか尋ねる。それに返すのは腕組みをしたしいなだ。

「ああ。あんたがラザリス達と一戦交えたつていう、ジルディアの領域があつたオアシス周辺の調査さ……とは言つても、あいつらの影も形もなかつたけどね」

「はい。それに悪い知らせはまだあります……」

しいなに続くすずの表情も暗く、それを察したのかアンジュが代わりにというようにカイに話す。

「ジルディアのキバが、また増えたの……」

「あなた達が戻つてきて、とにもかくにもカイを寝かせようと決まつて、運んでいたスタンプが医務室へと行つた辺りですかね。突然地震が起きたと思つたら、あのキバが二本、現れたんです」

「急がないと、侵食のスピードも上がつていくだろうね。どうにか出来ないのかねえ……」

アンジュの言葉に続いてジェイドが説明、しいなが大きいため息をつく。ジェイドも

ふむ、と声を漏らした後カイをちらりと見た。

「カイの力でも、あのキバを消す事は出来ない……ならばもう、ラザリスを封印する事だけに集中していた方が、時間の無駄にはならないでしょう」

「そうですね……」

ジェイドが、現状ジルディアの牙をどうにか出来ないのなら、少しでも希望のある、そして今回の騒動の解決にも繋がるラザリスの封印に集中しようと提案。アンジユもこくと頷いた後、明るく笑ってぽんと手を打った。

「でもね、今回の風来草でやっと、ツリガネトンボ草のドクメントを構築出来るのよ。他は全て手に入ったから……協力してくれた皆様や、珍しい植物を集めてくれたセキレイの羽に感謝しないとね」

「残りはウズマキフスベだけですが、そろそろ採取シーズンですね……運よく絶滅を免れた個体がいいのですが……」

「ま、そこは今更考えてもどうしようもないだろ」

ジェイドが封印次元を作る最後の材料を頭の中で思い描きながら呟き、カイが頭をかいてそう答える。

「そうね。カイ、改めて今回もご苦労様。ゆっくり身体を休めてね」

「はい」

そしてアンジュは改めてカイに今回の仕事の苦勞を勞う言葉を投げかけるのであった。